

宮ノ本遺跡Ⅱ

— 桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

第一分冊

二〇〇九

徳島県教育委員会
財団法人 徳島埋蔵文化財センター
国土交通省 四国地方整備局

宮ノ本遺跡Ⅱ

— 桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

第1分冊

2009

徳島県教育委員会
財団法人 徳島埋蔵文化財センター
国土交通省 四国地方整備局

宮ノ本遺跡Ⅱ

— 桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

第1分冊

2009

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
国土交通省 四国地方整備局



宮ノ本遺跡遠景（北西の西方城跡より）



宮ノ本遺跡周辺（北西から）

巻頭図版 2



Ⅱ-12区 全景 (西から)



Ⅱ-13区 全景 (西から)



I-12区 全景 (西から)



I-13区 全景 (西から)

序 文

本書は桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴い、平成20・21年度の2カ年にわたって調査を実施した阿南市長生町に所在する宮ノ本遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡は那賀川平野の南端、桑野川のほとりに営まれた縄文時代晩期から近世にかけての集落遺跡です。平成18年度までの発掘調査で、縄文時代晩期および弥生時代前期の集落が確認され、微高地に営まれた集落の様相を知ることができました。鎌倉時代には6区画の屋敷地が集合して営まれていたことが確認されました。屋敷地が集合する事例は県下で最古となります。また12～13世紀代を中心に約200棟もの掘立柱建物群を検出したことで、きわめて大規模な集落であることがわかりました。本遺跡一帯は、古代末期から中世にかけて藤原家領のち皇室領の荘園である竹原荘となっており、古文書に残された荘園の記録と発掘調査によって確認された遺跡の年代が重なることは、大きな成果であるといえます。また本遺跡は中世後半期から近世にかけて継続しており、集落の変遷を追うことができる貴重な調査事例となりました。

これまで本県においては、開発が進む吉野川流域と比較して県南域の資料が少ないことが歴史解明の障壁になっていました。多くの方々によって本書が活用され、学術研究および埋蔵文化財に対する意識の向上と文化財保護の一助となり、あわせて地元の方々が郷土の歴史と文化に誇りをもっていただく契機になれば幸いです。

なお発掘調査および本報告書の作成にあたり、国土交通省及び関係機関並びに地元の皆様にはご理解をいただき、あわせてご援助、ご協力を賜りました。また多くの方々や研究機関からご指導ならびにご教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成22年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 福家清司

例 言

1. 本書は桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴い、平成 20（2008）年度から平成 21（2009）年度にかけて調査を実施した阿南市に所在する宮ノ本遺跡の調査成果報告書である。
2. 発掘調査及び整理業務は、徳島県から委託を受けた財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
 - ・発掘調査期間 平成 20 年 11 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 31 日
平成 21 年 4 月 1 日 ～ 平成 21 年 10 月 31 日
 - ・報告書作成期間 平成 21 年 4 月 1 日 ～ 平成 22 年 3 月 31 日
4. 遺構の表示は財団法人徳島県埋蔵文化財センターが定める標準記号を用いた。
SB 竪穴住居 SA 掘立柱建物 SG 柵列 SK 土坑 SD 溝 SX 不明遺構
SP 柱穴・小穴 SR 自然流路
遺構内遺構は SD・SP の S に替えて E を付けて ED・EP と表記する。EH は遺構内の炉跡・竈である。
アルファベットに続く 4～5 桁の数字は頭の数字が遺構面を、以下が遺構の番号を示す。
5. 方位は世界測地系座標の第Ⅳ座標系を用いた。標高は東京湾標準潮位（T.P）を基準とした。
6. 本書で用いた土壌及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1997 年度版 日本色研事業株式会社発行 に拠った。釉の色調は細野尚志編『標準色彩図表 A』日本色研事業株式会社発行に拠った。色調は、日中の十分な照度もしくは昼白色ライトの下で目視による観察によって決定した。ただし色調の決定には個人差があることをご了承いただきたい。
7. 本遺跡は、平成 15～18 年度に調査を行った調査地北半部について、調査報告書を『宮ノ本遺跡Ⅰ 大原遺跡 庄境遺跡』（徳島県埋蔵文化財センター報告書第 76 集）として平成 20 年度に刊行した。この調査成果および報告書について本書で触れる場合、「宮ノ本遺跡Ⅰ」と表記をする。
8. 「宮ノ本遺跡Ⅰ」の報告では、記述は時代順に行い、第 1 遺構面（古墳時代～中世）に関してはⅠ地区から順に行った。本書では、現場での調査順に整理作業を行う必要があったことから、記述についてもⅡ-12 区（平成 20 年度 5 区）、Ⅱ-13 区（平成 21 年度 6 区）、Ⅰ-12 区（平成 21 年度 7 区）、Ⅰ-13 区（平成 21 年度 8 区）の順で行う。
9. 地区・調査区名、遺構番号はすべて新番号に振り替えた。したがって調査時における仮調査区名や仮遺構番号とは一致しない。遺構番号は地区毎に 1 から開始する。竪穴住居(SB)・掘立柱建物(SA)・

柵列 (SG)・溝 (SD) は、宮ノ本遺跡 I の各地区での遺構番号を引き継ぐ続き番号を付与した。土坑 (SK) と不明遺構 (SX) は 11001 番から、小穴 (SP) は 14001 番から番号を付与した。

10. 挿図・図版番号は通し番号とした。遺物番号は 1 から通し番号で付記する。鉄滓・スラグおよび未実測の羽口片に関しては一覧表にのみ掲載し、実測図を掲載した遺物番号の続きを付与した。
11. 土器実測図の断面について、白抜きは縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器・土師質土器、網掛けは瓦器・瓦質土器、黒塗りは須恵器・須恵質土器・陶磁器を示す。
12. 遺物番号を○で囲んだものは遺物写真図版に掲載したものである。
13. 遺物実測図の掲載サイズは、大型品（直径または展開時に 45cm を超えるもの）は 1/4、土器・土製品・瓦・金属製品（銭貨除く）・石器石製品（全長 5cm 以上）は 1/3、基石・小型鉄製品（全長 12cm 未満）1/2、石器（全長 5cm 未満）2/3、銭貨 1/1 を原則とした。遺構実測図は、遺構平・断面図 1/40、遺物出土状況図は 1/20、掘立柱建物は 1/80 を原則として掲載した。遺物図・遺構図とも若干の例外がある。すべての実測図にスケールを添付した。
14. 断面図における遺物のドットは、●は土器を、▲は石を、■はその他（銭貨・鉄製品等）を表す。
15. 掘立柱建物の計測に関しては、次のように行った。
 - ①建物規模は東西の間数・長さ、南北の間数・長さ、面積、主軸方向の順で記載する。
 - ②東西・南北それぞれで間数が異なる場合、数が多い方を記す。
 - ③四隅のいずれかの柱穴を欠く場合でも、想定線を延ばして建物の復元を行った。ただし、想定線のみによって復元した隅部は柱穴数に加えない。よって間数は現存部を記載する。
 - ④東西・南北それぞれの長さは、両端に位置する柱穴の中心間の平均値を記す。
 - ⑤面積は東西・南北の長さを乗じて算出した。
 - ⑥庇付き建物は底部分を除いた計測値を記し、次いで庇を含めた計測値を〈 〉内に記入する。
 - ⑦主軸方向は長軸方向を主軸とする。短軸両辺をそれぞれ二等分した点を結んで中心線とし、真北からの角度を計測した。
16. 出土遺物に関して、12 世紀を境にそれ以前のを土師器・須恵器、以降のを土師質土器・須恵質土器とし、可能な限り分類を行った。不明なものに関しては土師質土器・須恵質土器と表記した。
17. 今回の整理作業時に、「宮ノ本遺跡 I」で示した瓦器の年代観について相違点があることが判明したことから、第 3 分冊に修正表を掲載した。
18. 出土遺物の自然科学分析は次の方々にお願ひし、報告をいただいた。

土器胎土分析：岡山理科大学 白石純氏

溶解炉壁分析：(財)徳島県埋蔵文化財センター 植地岳彦

19. 本書の執筆は、第Ⅱ章1を木村哲也、古墳時代の住居および弥生時代～古代の遺物を藤川智之、自然科学分析結果をそれぞれの分析担当者、その他を島田豊彰が執筆し、全体の編集は島田が行った。ただし、第Ⅰ章は久保脇美朗「宮ノ本遺跡Ⅰ」での「第Ⅰ章 遺跡の立地と環境」をベースにした。遺物写真は植地岳彦が、遺構写真はそれぞれの調査担当者が撮影した。

20. 本書における遺物の分類や編年および年代の決定は基本的に下記の文献に拠った。

弥生土器：菅原康夫・瀧山雄一 2000「阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社

土師器：田川憲 2004「大柿遺跡出土の土師器の編年について」『大柿遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

須恵器：田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

緑釉陶器〈高橋編年〉：高橋照彦 2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム資料

和泉型瓦器椀：森島康雄 1995「6. 瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

西村系須恵器椀〈佐藤編年〉：佐藤竜馬 2000「西村系土器椀の系譜」『研究紀要Ⅷ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

吉備系土師質土器：山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

中世煮炊具：吉成承三 2007「四国の土製甕・羽釜・鍋—古代末から中世の土製煮炊具の様相—」『中近世土器の基礎研究 21 土製煮炊具の様相』日本中世土器研究会

島田豊彰 2008「徳島県における中世羽釜の様相」『青藍』第5号 考古フォーラム蔵本
畿内産瓦質煮炊具〈奥井分類〉：奥井智子 2007「畿内における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究 21 土製煮炊具の諸様相』日本中世土器研究会

紀伊型鍔付鍋：渋谷高秀 1984「Ⅱ 野田地区遺跡」『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会

十瓶山産須恵質土器〈佐藤編年〉：佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』

東播系須恵質土器椀・捏鉢〈森田編年〉：森田稔 1995「8. 中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 ※甕については荻野繁春氏の研究発表資料を参照

備前焼〈重根編年〉：重根弘和 2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』

常滑焼〈中野編年〉：中野晴久 1995「9. 中世陶器（常滑・渥美）」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

瀬戸美濃系陶器：財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編 1997『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯

愛知県教育委員会編 1985『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅳ）瀬戸・藤岡（瀬戸古窯跡群）』

肥前系陶磁器：九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念—』

青磁・白磁〈大宰府分類〉：森田勉・横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4

青磁〈上田分類〉：上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』

白磁〈森田分類〉：森田勉 1982「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』

染付〈小野分類〉：小野正敏 1982「14～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』

※上記以外の参考・引用文献は各文末に記載する。

21. 調査にあたっては下記の機関の指導・援助を得た。

国土交通省四国地方整備局 徳島県教育委員会

22. 発掘調査・整理期間を通して次の方々からご協力・ご教示を得た。記して感謝いたします。

（五十音順・敬称略）

池澤 俊幸	石岡ひとみ	市村 高男	大川 沙織	岡本 和彦	片桐 孝浩
北野 隆亮	橘田 正徳	佐藤 亜聖	重見 高博	柴田 圭子	清水 篤
鈴木 康之	須藤 茂樹	首藤 久士	高島 芳弘	中井 淳史	中島 和彦
中野 良一	橋本 久和	長谷川賢二	原田 昌則	福田 正継	藤本 史子
藤本 清志	松本 彩	向井 公紀	百瀬 正恒	森下 恵介	森島 康雄
吉成 承三					

本文目次

第1分冊

第I章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1

第II章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯	5
2. 発掘調査および整理業務態勢	6
3. 調査の経過	6

第III章 調査成果

1. 基本層序	11
2. 遺構と遺物	11

【II地区の遺構・遺物】

〈II-12区 第1遺構面〉	11
掘立柱建物 (SA)	14
土坑 (SK)	30
土壙墓 (SK)	53
不明遺構 (SX)	64
溝 (SD)	64
小穴 (SP)	91
自然流路1号	105
〈II-12区 第1包含層出土遺物〉	107
〈II-13区 第1遺構面〉	113
竪穴住居 (SB)	113
掘立柱建物 (SA)	135
土坑 (SK)	163
土壙墓 (SK)	181
溝 (SD)	198
小穴 (SP)	224
〈II-13区 第1包含層出土遺物〉	244
【I地区の遺構・遺物】	
〈I-12区 第1遺構面〉	256
掘立柱建物 (SA)	256

柵列 (SG)	274
土坑 (SK)	276
土壙墓 (SK)	293
溝 (SD)	295
小穴 (SP)	329
〈 I - 12 区 第 1 包含層出土遺物〉	335
〈 I - 13 区 第 1 遺構面〉	337
掘立柱建物 (SA)	337
土坑 (SK)	353
土壙墓 (SK)	360
溝 (SD)	366
小穴 (SP)	382
〈 I - 13 区 第 1 包含層出土遺物〉	387
3. まとめ	388
第IV章 自然科学分析	
1. 宮ノ本遺跡 I・II 出土土器の胎土分析	402
2. 宮ノ本遺跡 II 出土溶解炉壁の成分分析	411
報告書抄録	414

挿 図 目 次

【第1分冊】			
第1図	宮ノ本遺跡の位置と周辺の遺跡……………	2	
第2図	宮ノ本遺跡調査区・グリッド配置図……………	8	
第3図	調査区土層堆積状況図……………	12	
第4図	Ⅱ-12区第1遺構面遺構配置図……………	13	
第5図	Ⅱ-12区SA1037遺構・遺物実測図……………	15	
第6図	Ⅱ-12区SA1061遺構・遺物実測図……………	16	
第7図	Ⅱ-12区SA1062遺構実測図……………	16	
第8図	Ⅱ-12区SA1062遺構・遺物実測図……………	18	
第9図	Ⅱ-12区SA1063遺構・遺物実測図……………	18	
第10図	Ⅱ-12区SA1064遺構・遺物実測図……………	20	
第11図	Ⅱ-12区SA1065遺構・遺物実測図……………	20	
第12図	Ⅱ-12区SA1066遺構・遺物実測図……………	21	
第13図	Ⅱ-12区SA1067遺構・遺物実測図……………	23	
第14図	Ⅱ-12区SA1068遺構・遺物実測図……………	23	
第15図	Ⅱ-12区SA1069遺構・遺物実測図……………	25	
第16図	Ⅱ-12区SA1070遺構・遺物実測図……………	25	
第17図	Ⅱ-12区SA1071遺構・遺物実測図……………	27	
第18図	Ⅱ-12区SA1072遺構・遺物実測図……………	27	
第19図	Ⅱ-12区SA1073遺構・遺物実測図……………	28	
第20図	Ⅱ-12区SA1074遺構実測図……………	28	
第21図	Ⅱ-12区SA1075遺構実測図……………	29	
第22図	Ⅱ-12区SA1076遺構実測図……………	29	
第23図	Ⅱ-12区SK11002遺構・遺物実測図……………	31	
第24図	Ⅱ-12区SK11004遺構・遺物実測図……………	31	
第25図	Ⅱ-12区SK11005遺構・遺物実測図……………	31	
第26図	Ⅱ-12区SK11007遺構・遺物実測図……………	31	
第27図	Ⅱ-12区SK11008遺構・遺物実測図……………	31	
第28図	Ⅱ-12区SK11009遺構・遺物実測図……………	34	
第29図	Ⅱ-12区SK11012遺構・遺物実測図……………	34	
第30図	Ⅱ-12区SK11013遺構・遺物実測図……………	34	
第31図	Ⅱ-12区SK11019遺構・遺物実測図……………	34	
第32図	Ⅱ-12区SK11020遺構・遺物実測図……………	36	
第33図	Ⅱ-12区SK11022遺構・遺物実測図……………	36	
第34図	Ⅱ-12区SK11024遺構・遺物実測図……………	38	
第35図	Ⅱ-12区SK11026遺構・遺物実測図……………	38	
第36図	Ⅱ-12区SK11028遺構・遺物実測図……………	38	
第37図	Ⅱ-12区SK11029遺構・遺物実測図……………	40	
第38図	Ⅱ-12区SK11030遺構・遺物実測図……………	40	
第39図	Ⅱ-12区SK11031遺構・遺物実測図……………	40	
第40図	Ⅱ-12区SK11034遺構・遺物実測図……………	40	
第41図	Ⅱ-12区SK11035遺構・遺物実測図……………	42	
第42図	Ⅱ-12区SK11037遺構・遺物実測図……………	42	
第43図	Ⅱ-12区SK11038遺構・遺物実測図……………	44	
第44図	Ⅱ-12区SK11043遺構・遺物実測図……………	44	
第45図	Ⅱ-12区SK11044遺構・遺物実測図……………	44	
第46図	Ⅱ-12区SK11061遺構・遺物実測図……………	44	
第47図	Ⅱ-12区SK11063遺構・遺物実測図……………	46	
第48図	Ⅱ-12区SK11069遺構・遺物実測図……………	46	
第49図	Ⅱ-12区SK11076遺構・遺物実測図……………	46	
第50図	Ⅱ-12区SK11078遺構・遺物実測図……………	46	
第51図	Ⅱ-12区SK11082遺構・遺物実測図(1) ……………	48	
第52図	Ⅱ-12区SK11082遺物実測図(2)……………	51	
第53図	Ⅱ-12区SK11092遺構・遺物実測図……………	51	
第54図	Ⅱ-12区SK11093遺構・遺物実測図……………	51	
第55図	Ⅱ-12区SK11094遺構・遺物実測図……………	51	
第56図	Ⅱ-12区SK11117遺構・遺物実測図……………	51	
第57図	Ⅱ-12区SK11118遺構・遺物実測図……………	51	
第58図	Ⅱ-12区SK11123遺構・遺物実測図……………	53	
第59図	Ⅱ-12区SK11125遺構・遺物実測図……………	53	
第60図	Ⅱ-12区SK11060遺構・遺物実測図……………	55	
第61図	Ⅱ-12区SK11070遺構・遺物実測図……………	55	
第62図	Ⅱ-12区SK11071遺構・遺物実測図……………	56	
第63図	Ⅱ-12区SK11074遺構・遺物実測図……………	59	
第64図	Ⅱ-12区SK11084遺構・遺物実測図……………	59	
第65図	Ⅱ-12区SK11085遺構・遺物実測図……………	59	
第66図	Ⅱ-12区SK11086遺構・遺物実測図……………	61	
第67図	Ⅱ-12区SK11087遺構・遺物実測図……………	61	
第68図	Ⅱ-12区SK11088遺構・遺物実測図……………	61	
第69図	Ⅱ-12区SK11090遺構・遺物実測図……………	61	
第70図	Ⅱ-12区SK11091遺構・遺物実測図……………	63	
第71図	Ⅱ-12区SK11097遺構・遺物実測図……………	63	
第72図	Ⅱ-12区SK11098遺構実測図……………	63	
第73図	Ⅱ-12区SK11099遺構・遺物実測図……………	63	
第74図	Ⅱ-12区SK11100遺構・遺物実測図……………	65	
第75図	Ⅱ-12区SK11102遺構・遺物実測図……………	65	
第76図	Ⅱ-12区SK11113遺構・遺物実測図……………	65	
第77図	Ⅱ-12区SX11001遺構・遺物実測図……………	65	
第78図	Ⅱ-12区SD1002遺構・遺物実測図……………	67	

第 79 图	II - 12 区 SD1017 遺構・遺物実測図	69	第 119 图	II - 12 区 SP14050 遺物実測図	98
第 80 图	II - 12 区 SD1060 遺構断面図	69	第 120 图	II - 12 区 SP14051 遺物実測図	98
第 81 图	II - 12 区 SD1062・1068 遺構・遺物実測図	69	第 121 图	II - 12 区 SP14052 遺物実測図	98
第 82 图	II - 12 区 SD1068 出土平面図	70	第 122 图	II - 12 区 SP14057 遺物実測図	98
第 83 图	II - 12 区 SD1068 遺物実測図 (1)	73	第 123 图	II - 12 区 SP14060 遺物実測図	98
第 84 图	II - 12 区 SD1068 遺物実測図 (2)	74	第 124 图	II - 12 区 SP14100 遺構・遺物実測図	98
第 85 图	II - 12 区 SD1069 遺構・遺物実測図	74	第 125 图	II - 12 区 SP14103 遺物実測図	98
第 86 图	II - 12 区 SD1079 遺構・遺物実測図	77	第 126 图	II - 12 区 SP14107 遺物実測図	98
第 87 图	II - 12 区 SD1080 遺構・遺物実測図	77	第 127 图	II - 12 区 SP14108 遺物実測図	98
第 88 图	II - 12 区 SD1081 遺構・遺物実測図	77	第 128 图	II - 12 区 SP14109 遺物実測図	98
第 89 图	II - 12 区 SD1082 出土平面図	80	第 129 图	II - 12 区 SP14110 遺物実測図	98
第 90 图	II - 12 区 SD1082 遺構・遺物実測図	80	第 130 图	II - 12 区 SP14111 遺物実測図	100
第 91 图	II - 12 区 SD1083 遺構断面図	80	第 131 图	II - 12 区 SP14121 遺物実測図	100
第 92 图	II - 12 区 SD1084 遺構断面図	80	第 132 图	II - 12 区 SP14125 遺物実測図	100
第 93 图	II - 12 区 SD1086 遺構・遺物実測図	80	第 133 图	II - 12 区 SP14129 遺物実測図	100
第 94 图	II - 12 区 SD1087 遺構・遺物実測図	80	第 134 图	II - 12 区 SP14131 遺物実測図	100
第 95 图	II - 12 区 SD1089 遺構・遺物実測図	82	第 135 图	II - 12 区 SP14147 遺物実測図	100
第 96 图	II - 12 区 SD1090 遺構・遺物実測図	82	第 136 图	II - 12 区 SP14153 遺物実測図	100
第 97 图	II - 12 区 SD1091 遺構・遺物実測図	82	第 137 图	II - 12 区 SP14154 遺物実測図	100
第 98 图	II - 12 区 SD1092 遺構・遺物実測図	82	第 138 图	II - 12 区 SP14160 遺物実測図	103
第 99 图	II - 12 区 SD1093 遺構断面図	84	第 139 图	II - 12 区 SP14165 遺物実測図	103
第 100 图	II - 12 区 SD1094 遺構・遺物実測図	84	第 140 图	II - 12 区 SP14166 遺物実測図	103
第 101 图	II - 12 区 SD1096 遺構断面図	84	第 141 图	II - 12 区 SP14175 遺物実測図	103
第 102 图	II - 12 区 SD1096 出土平面図	87	第 142 图	II - 12 区 SP14184 遺物実測図	103
第 103 图	II - 12 区 SD1096 遺物実測図	87	第 143 图	II - 12 区 SP14186 遺構・遺物実測図	103
第 104 图	II - 12 区 SD1098 遺構断面図	87	第 144 图	II - 12 区 SP14197 遺構・遺物実測図	103
第 105 图	II - 12 区 SD1100 遺構断面図	87	第 145 图	II - 12 区 SP14199 遺物実測図	104
第 106 图	II - 12 区 SD1101 遺構断面図	87	第 146 图	II - 12 区 SP14234 遺物実測図	104
第 107 图	II - 12 区 SD1102 遺構断面図	87	第 147 图	II - 12 区 SP14343 遺物実測図	104
第 108 图	II - 12 区 SD1104 遺構・遺物実測図 (1)	89	第 148 图	II - 12 区 SR1001 遺構・遺物実測図	106
第 109 图	II - 12 区 SD1104 出土平面・遺物実測図 (2)	90	第 149 图	II - 12 区第 1 包含層遺物実測図 (1)	109
第 110 图	II - 12 区 SD1104 遺物実測図 (3)	92	第 150 图	II - 12 区第 1 包含層遺物実測図 (2)	110
第 111 图	II - 12 区 SD1105 遺構断面図	92	第 151 图	II - 12 区第 1 包含層遺物実測図 (3)	111
第 112 图	II - 12 区 SP14007 遺物実測図	94	第 152 图	II - 13 区第 1 遺構面遺構配置図	112
第 113 图	II - 12 区 SP14015 遺物実測図	94	第 153 图	II - 13 区 SB1002 遺構実測図	114
第 114 图	II - 12 区 SP14017 遺物実測図	94	第 154 图	II - 13 区 SB1003 遺構実測図 (1)	116
第 115 图	II - 12 区 SP14019 遺物実測図	94	第 155 图	II - 13 区 SB1003 遺構実測図 (2)	117
第 116 图	II - 12 区 SP14043 遺物実測図	94	第 156 图	II - 13 区 SB1003 遺構実測図 (3)	118
第 117 图	II - 12 区 SP14045 遺物実測図	94	第 157 图	II - 13 区 SB1002 遺物実測図	119
第 118 图	II - 12 区 SP14048 遺物実測図	94	第 158 图	II - 13 区 SB1003 遺物実測図	119
			第 159 图	II - 13 区 SB1004 遺構実測図 (1)	120
			第 160 图	II - 13 区 SB1004 遺構実測図 (2)	121
			第 161 图	II - 13 区 SB1005 遺構実測図 (1)	123

第 162 図	Ⅱ - 13 区 SB1005 遺構実測図 (2)	124	第 205 図	Ⅱ - 13 区 SA1100 遺構実測図	158
第 163 図	Ⅱ - 13 区 SB1004 遺物実測図	125	第 206 図	Ⅱ - 13 区 SA1101 遺構実測図	158
第 164 図	Ⅱ - 13 区 SB1005 遺物実測図	125	第 207 図	Ⅱ - 13 区 SA1102 遺構実測図	160
第 165 図	Ⅱ - 13 区 SB1006 遺構実測図 (1)	128	第 208 図	Ⅱ - 13 区 SA1103 遺構実測図	160
第 166 図	Ⅱ - 13 区 SB1006 遺構実測図 (2)	129	第 209 図	Ⅱ - 13 区 SA1104 遺構実測図	161
第 167 図	Ⅱ - 13 区 SB1006 遺物実測図 (1)	130	第 210 図	Ⅱ - 13 区 SA1105 遺構実測図	162
第 168 図	Ⅱ - 13 区 SB1006 遺物実測図 (2)	131	第 211 図	Ⅱ - 13 区 SA1106 遺構実測図	164
第 169 図	Ⅱ - 13 区 SB1007 遺物実測図	131	第 212 図	Ⅱ - 13 区 SA1107 遺構実測図	164
第 170 図	Ⅱ - 13 区 SB1007 遺構実測図 (1)	132	第 213 図	Ⅱ - 13 区 SA1096 遺物実測図	165
第 171 図	Ⅱ - 13 区 SB1007 遺構実測図 (2)	133	第 214 図	Ⅱ - 13 区 SA1100 遺物実測図	165
第 172 図	Ⅱ - 13 区第 1 遺構面 SA・SD 配置図	134	第 215 図	Ⅱ - 13 区 SA1104EP11 遺物実測図	165
第 173 図	Ⅱ - 13 区 SA1077 遺構実測図	135	第 216 図	Ⅱ - 13 区 SA1105 遺物実測図	165
第 174 図	Ⅱ - 13 区 SA1078 遺構実測図	136	第 217 図	Ⅱ - 13 区 SA1106 遺物実測図	165
第 175 図	Ⅱ - 13 区 SA1079 遺構実測図	138	第 218 図	Ⅱ - 13 区 SK11130 遺構実測図	168
第 176 図	Ⅱ - 13 区 SA1080 遺構実測図	138	第 219 図	Ⅱ - 13 区 SK11132 遺構実測図	168
第 177 図	Ⅱ - 13 区 SA1081 遺構実測図	138	第 220 図	Ⅱ - 13 区 SK11139 遺構実測図	168
第 178 図	Ⅱ - 13 区 SA1082 遺構実測図	139	第 221 図	Ⅱ - 13 区 SK11140 遺構実測図	168
第 179 図	Ⅱ - 13 区 SA1083 遺構実測図	141	第 222 図	Ⅱ - 13 区 SK11141 遺構実測図	168
第 180 図	Ⅱ - 13 区 SA1084 遺構実測図	141	第 223 図	Ⅱ - 13 区 SK11146 遺構実測図	168
第 181 図	Ⅱ - 13 区 SA1085 遺構実測図	143	第 224 図	Ⅱ - 13 区 SK11147 遺構実測図	168
第 182 図	Ⅱ - 13 区 SA1086 遺構実測図	146	第 225 図	Ⅱ - 13 区 SK11162 遺構実測図	168
第 183 図	Ⅱ - 13 区 SA1087 遺構実測図	146	第 226 図	Ⅱ - 13 区 SK11189 遺構実測図	171
第 184 図	Ⅱ - 13 区 SA1088 遺構実測図	147	第 227 図	Ⅱ - 13 区 SK11215 遺構実測図	171
第 185 図	Ⅱ - 13 区 SA1089 遺構実測図	147	第 228 図	Ⅱ - 13 区 SK11219 遺構実測図	171
第 186 図	Ⅱ - 13 区 SA1090 遺構実測図	148	第 229 図	Ⅱ - 13 区 SK11225 遺構実測図	171
第 187 図	Ⅱ - 13 区 SA1091 遺構実測図	148	第 230 図	Ⅱ - 13 区 SK11231 遺構実測図	171
第 188 図	Ⅱ - 13 区 SA1092 遺構実測図	150	第 231 図	Ⅱ - 13 区 SK11237 遺構実測図	171
第 189 図	Ⅱ - 13 区 SA1093 遺構実測図	150	第 232 図	Ⅱ - 13 区 SK11246 遺構実測図	171
第 190 図	Ⅱ - 13 区 SA1094 遺構実測図	151	第 233 図	Ⅱ - 13 区 SK11251 遺構実測図	171
第 191 図	Ⅱ - 13 区 SA1095 遺構実測図	151	第 234 図	Ⅱ - 13 区 SK11255 遺構実測図	174
第 192 図	Ⅱ - 13 区 SA1077EP2 遺物実測図	152	第 235 図	Ⅱ - 13 区 SK11258 遺構実測図	174
第 193 図	Ⅱ - 13 区 SA1080EP4 遺物実測図	152	第 236 図	Ⅱ - 13 区 SK11261 遺構実測図	174
第 194 図	Ⅱ - 13 区 SA1081 遺物実測図	152	第 237 図	Ⅱ - 13 区 SK11262 遺構実測図	174
第 195 図	Ⅱ - 13 区 SA1082 遺物実測図	152	第 238 図	Ⅱ - 13 区 SK11263 遺構実測図	174
第 196 図	Ⅱ - 13 区 SA1083 遺物実測図	152	第 239 図	Ⅱ - 13 区 SK11267 遺構実測図	174
第 197 図	Ⅱ - 13 区 SA1084EP2 遺物実測図	153	第 240 図	Ⅱ - 13 区 SK11280 遺構実測図	174
第 198 図	Ⅱ - 13 区 SA1085 遺物実測図	153	第 241 図	Ⅱ - 13 区 SK11285 遺構実測図	174
第 199 図	Ⅱ - 13 区 SA1086EP5 遺物実測図	153	第 242 図	Ⅱ - 13 区 SK11290 遺構実測図	177
第 200 図	Ⅱ - 13 区 SA1095 遺物実測図	153	第 243 図	Ⅱ - 13 区 SK11292 遺構実測図	177
第 201 図	Ⅱ - 13 区 SA1096 遺構実測図	155	第 244 図	Ⅱ - 13 区 SK11293 遺構実測図	177
第 202 図	Ⅱ - 13 区 SA1097 遺構実測図	155	第 245 図	Ⅱ - 13 区 SK11294 遺構実測図	177
第 203 図	Ⅱ - 13 区 SA1098 遺構実測図	156	第 246 図	Ⅱ - 13 区 SK11297 遺構実測図	177
第 204 図	Ⅱ - 13 区 SA1099 遺構実測図	156	第 247 図	Ⅱ - 13 区 SK11300 遺構実測図	177

第 334 图	II - 13 区 SK11325 遗物实测图	197	第 376 图	II - 13 区 SD1117 遗物实测图	220
第 335 图	II - 13 区 SK11404 遗物实测图	197	第 377 图	II - 13 区 SD1119 遗物实测图	222
第 336 图	II - 13 区 SK11405 遗物实测图	197	第 378 图	II - 13 区 SD1120 遗物实测图	222
第 337 图	II - 13 区 SK11427 遗物实测图	197	第 379 图	II - 13 区 SD1121 遗物实测图	224
第 338 图	II - 13 区 SK11434 遗物实测图	197	第 380 图	II - 13 区 SD1123 遗物实测图	224
第 339 图	II - 13 区 SK11440 遗物实测图	197	第 381 图	II - 13 区 SP14375 遺構实测图	237
第 340 图	II - 13 区 SK11442 遗物实测图	197	第 382 图	II - 13 区 SP14377 遺構实测图	237
第 341 图	II - 13 区 SD1005 遺構断面图	203	第 383 图	II - 13 区 SP14402 遺構实测图	237
第 342 图	II - 13 区 SD1006·1007·1121 遺構断面图	203	第 384 图	II - 13 区 SP14407 遺構实测图	237
第 343 图	II - 13 区 SD1034 遺構断面图	203	第 385 图	II - 13 区 SP14440 遺構实测图	237
第 344 图	II - 13 区 SD1035 遺構断面图	203	第 386 图	II - 13 区 SP14509 遺構实测图	237
第 345 图	II - 13 区 SD1038 遺構断面图	203	第 387 图	II - 13 区 SP14515 遺構实测图	237
第 346 图	II - 13 区 SD1108 遺構断面图	203	第 388 图	II - 13 区 SP15063 遺構实测图	237
第 347 图	II - 13 区 SD1109 遺構断面图	203	第 389 图	II - 13 区 SP15105 遺構实测图	237
第 348 图	II - 13 区 SD1110 遺構断面图	203	第 390 图	II - 13 区 SP14374 遺物实测图	238
第 349 图	II - 13 区 SD1113·1114 遺構断面图	203	第 391 图	II - 13 区 SP14375 遺物实测图	238
第 350 图	II - 13 区 SD1005 出土平面图	204	第 392 图	II - 13 区 SP14376 遺物实测图	238
第 351 图	II - 13 区 SD1006·1121 出土平面图	205	第 393 图	II - 13 区 SP14377 遺物实测图	238
第 352 图	II - 13 区 SD1034 出土平面图	205	第 394 图	II - 13 区 SP14381 遺物实测图	238
第 353 图	II - 13 区 SD1115 遺構断面图	205	第 395 图	II - 13 区 SP14397 遺物实测图	238
第 354 图	II - 13 区 SD1116 遺構断面图	205	第 396 图	II - 13 区 SP14402 遺物实测图	239
第 355 图	II - 13 区 SD1115 出土平面图	206	第 397 图	II - 13 区 SP14407 遺物实测图	239
第 356 图	II - 13 区 SD1005 遺物实测图 (1)	207	第 398 图	II - 13 区 SP14412 遺物实测图	239
第 357 图	II - 13 区 SD1005 遺物实测图 (2)	208	第 399 图	II - 13 区 SP14419 遺物实测图	239
第 358 图	II - 13 区 SD1006 遺物实测图	208	第 400 图	II - 13 区 SP14422 遺物实测图	239
第 359 图	II - 13 区 SD1007 遺物实测图	209	第 401 图	II - 13 区 SP14430 遺物实测图	239
第 360 图	II - 13 区 SD1034 遺物实测图	209	第 402 图	II - 13 区 SP14432 遺物实测图	239
第 361 图	II - 13 区 SD1038 遺物实测图	209	第 403 图	II - 13 区 SP14434 遺物实测图	239
第 362 图	II - 13 区 SD1108 遺物实测图	209	第 404 图	II - 13 区 SP14440 遺物实测图	239
第 363 图	II - 13 区 SD1110 遺物实测图	209	第 405 图	II - 13 区 SP14452 遺物实测图	239
第 364 图	II - 13 区 SD1113 遺物实测图	209	第 406 图	II - 13 区 SP14478 遺物实测图	240
第 365 图	II - 13 区 SD1114 遺物实测图	209	第 407 图	II - 13 区 SP14507 遺物实测图	240
第 366 图	II - 13 区 SD1115 遺物实测图 (1)	214	第 408 图	II - 13 区 SP14509 遺物实测图	240
第 367 图	II - 13 区 SD1115 遺物实测图 (2)	215	第 409 图	II - 13 区 SP14512 遺物实测图	240
第 368 图	II - 13 区 SD1115 遺物实测图 (3)	216	第 410 图	II - 13 区 SP14515 遺物实测图	240
第 369 图	II - 13 区 SD1116 遺物实测图	217	第 411 图	II - 13 区 SP14521 遺物实测图	240
第 370 图	II - 13 区 SD1117 遺構断面图	219	第 412 图	II - 13 区 SP14553 遺物实测图	240
第 371 图	II - 13 区 SD1118 遺構断面图	219	第 413 图	II - 13 区 SP14648 遺物实测图	240
第 372 图	II - 13 区 SD1119 遺構断面图	219	第 414 图	II - 13 区 SP14655 遺物实测图	240
第 373 图	II - 13 区 SD1120·1122 遺構断面图	219	第 415 图	II - 13 区 SP14665 遺物实测图	240
第 374 图	II - 13 区 SD1120 出土平面图	219	第 416 图	II - 13 区 SP14691 遺物实测图	240
第 375 图	II - 13 区 SD1123 遺構断面图	219	第 417 图	II - 13 区 SP14697 遺物实测图	240
			第 418 图	II - 13 区 SP14708 遺物实测图	240

第 419 図	II - 13 区 SP14720 遺物実測図	241	第 462 図	I - 12 区第 1 遺構面 SA・SD・SG 配置図	255
第 420 図	II - 13 区 SP14721 遺物実測図	241	第 463 図	I - 12 区 SA1074 遺構実測図	257
第 421 図	II - 13 区 SP14728 遺物実測図	241	第 464 図	I - 12 区 SA1075 遺構実測図	258
第 422 図	II - 13 区 SP14834 遺物実測図	241	第 465 図	I - 12 区 SA1076 遺構実測図	260
第 423 図	II - 13 区 SP14849 遺物実測図	241	第 466 図	I - 12 区 SA1077 遺構実測図	261
第 424 図	II - 13 区 SP14855 遺物実測図	241	第 467 図	I - 12 区 SA1078 遺構実測図	261
第 425 図	II - 13 区 SP14873 遺物実測図	241	第 468 図	I - 12 区 SA1079 遺構実測図	263
第 426 図	II - 13 区 SP14888 遺物実測図	241	第 469 図	I - 12 区 SA1080 遺構実測図	263
第 427 図	II - 13 区 SP14898 遺物実測図	241	第 470 図	I - 12 区 SA1081 遺構実測図	264
第 428 図	II - 13 区 SP14903 遺物実測図	242	第 471 図	I - 12 区 SA1082 遺構実測図	264
第 429 図	II - 13 区 SP14911 遺物実測図	242	第 472 図	I - 12 区 SA1083 遺構実測図	266
第 430 図	II - 13 区 SP14925 遺物実測図	242	第 473 図	I - 12 区 SA1084 遺構実測図	266
第 431 図	II - 13 区 SP14946 遺物実測図	242	第 474 図	I - 12 区 SA1074 遺物実測図	267
第 432 図	II - 13 区 SP14952 遺物実測図	242	第 475 図	I - 12 区 SA1075 遺物実測図	267
第 433 図	II - 13 区 SP14965 遺物実測図	242	第 476 図	I - 12 区 SA1076 遺物実測図	267
第 434 図	II - 13 区 SP15048 遺物実測図	242	第 477 図	I - 12 区 SA1077EP9 遺物実測図	267
第 435 図	II - 13 区 SP15058 遺物実測図	242	第 478 図	I - 12 区 SA1079 遺物実測図	267
第 436 図	II - 13 区 SP15063 遺物実測図	242	第 479 図	I - 12 区 SA1083 遺物実測図	267
第 437 図	II - 13 区 SP15073 遺物実測図	242	第 480 図	I - 12 区 SA1085 遺構実測図	268
第 438 図	II - 13 区 SP15084 遺物実測図	242	第 481 図	I - 12 区 SA1086 遺構実測図	268
第 439 図	II - 13 区 SP15087 遺物実測図	242	第 482 図	I - 12 区 SA1087 遺構実測図	270
第 440 図	II - 13 区 SP15105 遺物実測図	245	第 483 図	I - 12 区 SA1088 遺構実測図	272
第 441 図	II - 13 区 SP15112 遺物実測図	245	第 484 図	I - 12 区 SA1089 遺構実測図	272
第 442 図	II - 13 区 SP15190 遺物実測図	245	第 485 図	I - 12 区 SA1090 遺構実測図	273
第 443 図	II - 13 区 SP15228 遺物実測図	245	第 486 図	I - 12 区 SA1091 遺構実測図	273
第 444 図	II - 13 区 SP15282 遺物実測図	245	第 487 図	I - 12 区 SA1092 遺構実測図	274
第 445 図	II - 13 区 SP15289 遺物実測図	245	第 488 図	I - 12 区 SA1084EP5 遺物実測図	275
第 446 図	II - 13 区 SP15325 遺物実測図	245	第 489 図	I - 12 区 SA1085EP8 遺物実測図	275
第 447 図	II - 13 区 SP15328 遺物実測図	245	第 490 図	I - 12 区 SA1086EP2 遺物実測図	275
第 448 図	II - 13 区 SP15338 遺物実測図	245	第 491 図	I - 12 区 SA1088EP6 遺物実測図	275
第 449 図	II - 13 区 SP15342 遺物実測図	245	第 492 図	I - 12 区 SA1087 遺物実測図	275
第 450 図	II - 13 区 SP15347 遺物実測図	245	第 493 図	I - 12 区 SA1089EP1 遺物実測図	275
第 451 図	II - 13 区 SP15376 遺物実測図	245	第 494 図	I - 12 区 SA1090EP1 遺物実測図	275
第 452 図	II - 13 区 SP15381 遺物実測図	245	第 495 図	I - 12 区 SA1091 遺物実測図	275
第 453 図	II - 13 区 SP15403 遺物実測図	245	第 496 図	I - 12 区 SA1092EP4 遺物実測図	275
第 454 図	II - 13 区 SP15425 遺物実測図	245	第 497 図	I - 12 区 SG1021 遺構実測図	277
第 455 図	II - 13 区 SP15439 遺物実測図	245	第 498 図	I - 12 区 SG1022 遺構実測図	277
第 456 図	II - 13 区第 1 包含層遺物実測図 (1)	247	第 499 図	I - 12 区 SG1023 遺構実測図	277
第 457 図	II - 13 区第 1 包含層遺物実測図 (2)	250	第 500 図	I - 12 区 SG1024 遺構実測図	277
第 458 図	II - 13 区第 1 包含層遺物実測図 (3)	252	第 501 図	I - 12 区 SG1022 遺物実測図	278
第 459 図	II - 13 区第 1 包含層遺物実測図 (4)	253	第 502 図	I - 12 区 SK11002 遺構実測図	280
第 460 図	II - 5 区 SD1036 遺物実測図	253	第 503 図	I - 12 区 SK11004 遺構実測図	280
第 461 図	I - 12 区第 1 遺構面遺構配置図	254	第 504 図	I - 12 区 SK11006 遺構実測図	280

第 505 図	I - 12 区 SK11011 遺構実測図	280	第 548 図	I - 12 区 SK11039 遺物実測図	291
第 506 図	I - 12 区 SK11020 遺構実測図	280	第 549 図	I - 12 区 SK11040 遺物実測図	292
第 507 図	I - 12 区 SK11021 遺構実測図	280	第 550 図	I - 12 区 SK11041 遺物実測図	292
第 508 図	I - 12 区 SK11024 遺構実測図	280	第 551 図	I - 12 区 SK11043 遺物実測図	292
第 509 図	I - 12 区 SK11025 遺構実測図	283	第 552 図	I - 12 区 SK11046 遺物実測図	292
第 510 図	I - 12 区 SK11026 遺構実測図	283	第 553 図	I - 12 区 SK11048 遺物実測図	292
第 511 図	I - 12 区 SK11027 遺構実測図	283	第 554 図	I - 12 区 SK11049 遺物実測図	292
第 512 図	I - 12 区 SK11035 遺構実測図	283	第 555 図	I - 12 区 SK11050 遺物実測図	292
第 513 図	I - 12 区 SK11038 遺構実測図	283	第 556 図	I - 12 区 SK11052 遺物実測図	292
第 514 図	I - 12 区 SK11039 遺構実測図	283	第 557 図	I - 12 区 SK11062 遺物実測図	292
第 515 図	I - 12 区 SK11040 遺構実測図	285	第 558 図	I - 12 区 SK11063 遺物実測図	292
第 516 図	I - 12 区 SK11041 遺構実測図	285	第 559 図	I - 12 区 SK11070 遺物実測図	292
第 517 図	I - 12 区 SK11043 遺構実測図	285	第 560 図	I - 12 区 SK11071 遺物実測図	292
第 518 図	I - 12 区 SK11046 遺構実測図	285	第 561 図	I - 12 区 SK11079 遺物実測図	292
第 519 図	I - 12 区 SK11048 遺構実測図	285	第 562 図	I - 12 区 SK11096 遺物実測図	292
第 520 図	I - 12 区 SK11049 遺構実測図	285	第 563 図	I - 12 区 SK11099 遺物実測図	292
第 521 図	I - 12 区 SK11050 遺構実測図	285	第 564 図	I - 12 区 SK11100 遺物実測図	293
第 522 図	I - 12 区 SK11052 遺構実測図	288	第 565 図	I - 12 区 SK11105 遺物実測図	293
第 523 図	I - 12 区 SK11062 遺構実測図	288	第 566 図	I - 12 区 SK11115 遺物実測図	293
第 524 図	I - 12 区 SK11063 遺構実測図	288	第 567 図	I - 12 区 SK11124 遺物実測図	293
第 525 図	I - 12 区 SK11070 遺構実測図	288	第 568 図	I - 12 区 SK11137 遺物実測図	293
第 526 図	I - 12 区 SK11071 遺構実測図	288	第 569 図	I - 12 区 SK11144 遺物実測図	293
第 527 図	I - 12 区 SK11079 遺構実測図	288	第 570 図	I - 12 区 SK11014 遺構実測図	296
第 528 図	I - 12 区 SK11096 遺構実測図	288	第 571 図	I - 12 区 SK11015 遺構実測図	296
第 529 図	I - 12 区 SK11099 遺構実測図	290	第 572 図	I - 12 区 SK11018 遺構実測図	296
第 530 図	I - 12 区 SK11100 遺構実測図	290	第 573 図	I - 12 区 SK11034 遺構実測図	296
第 531 図	I - 12 区 SK11105 遺構実測図	290	第 574 図	I - 12 区 SK11045 遺構実測図	296
第 532 図	I - 12 区 SK11115 遺構実測図	290	第 575 図	I - 12 区 SK11077 遺構実測図	296
第 533 図	I - 12 区 SK11124 遺構実測図	290	第 576 図	I - 12 区 SK11108 遺構実測図	296
第 534 図	I - 12 区 SK11137 遺構実測図	290	第 577 図	I - 12 区 SK11123 遺構実測図	297
第 535 図	I - 12 区 SK11144 遺構実測図	290	第 578 図	I - 12 区 SK11151 遺構実測図	297
第 536 図	I - 12 区 SK11002 遺物実測図	291	第 579 図	I - 12 区 SK11014 遺物実測図	297
第 537 図	I - 12 区 SK11004 遺物実測図	291	第 580 図	I - 12 区 SK11015 遺物実測図	297
第 538 図	I - 12 区 SK11106 遺物実測図	291	第 581 図	I - 12 区 SK11018 遺物実測図	297
第 539 図	I - 12 区 SK11011 遺物実測図	291	第 582 図	I - 12 区 SK11077 遺物実測図	297
第 540 図	I - 12 区 SK11020 遺物実測図	291	第 583 図	I - 12 区 SK11123 遺物実測図	297
第 541 図	I - 12 区 SK11021 遺物実測図	291	第 584 図	I - 12 区 SD1002 遺構実測図	299
第 542 図	I - 12 区 SK11024 遺物実測図	291	第 585 図	I - 12 区 SD1025 遺構断面図	299
第 543 図	I - 12 区 SK11025 遺物実測図	291	第 586 図	I - 12 区 SD1028 遺構断面図	299
第 544 図	I - 12 区 SK11026 遺物実測図	291	第 587 図	I - 12 区 SD1002 遺物実測図	300
第 545 図	I - 12 区 SK11027 遺物実測図	291	第 588 図	I - 12 区 SD1025 遺物実測図	300
第 546 図	I - 12 区 SK11035 遺物実測図	291	第 589 図	I - 12 区 SD1048 遺構断面図	308
第 547 図	I - 12 区 SK11038 遺物実測図	291	第 590 図	I - 12 区 SD1057・1063 遺構断面図	308

第 591 図	I - 12 区 SD1059 遺構断面図	308	第 632 図	I - 12 区 SP14081 遺物実測図	334
第 592 図	I - 12 区 SD1062 遺構断面図	308	第 633 図	I - 12 区 SP14159 遺物実測図	334
第 593 図	I - 12 区 SD1064 遺構断面図	308	第 634 図	I - 12 区 SP14183 遺物実測図	334
第 594 図	I - 12 区 SD1065・1066 遺構断面図	308	第 635 図	I - 12 区 SP14213 遺物実測図	334
第 595 図	I - 12 区 SD1025・1048・1067・1068 遺物 出土平面図 (1)	309	第 636 図	I - 12 区 SP14225 遺物実測図	334
第 596 図	I - 12 区 SD1025・1048・1067・1068 遺物 出土平面図 (2)	310	第 637 図	I - 12 区 SP14261 遺物実測図	334
第 597 図	I - 12 区 SD1027 遺物実測図	311	第 638 図	I - 12 区 SP14283 遺物実測図	334
第 598 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (1)	311	第 639 図	I - 12 区 SP14284 遺物実測図	334
第 599 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (2)	312	第 640 図	I - 12 区 SP14347 遺物実測図	334
第 600 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (3)	313	第 641 図	I - 12 区 SP14348 遺物実測図	334
第 601 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (4)	314	第 642 図	I - 12 区 SP14374 遺物実測図	334
第 602 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (5)	315	第 643 図	I - 12 区 SP14388 遺物実測図	335
第 603 図	I - 12 区 SD1048 遺物実測図 (6)	316	第 644 図	I - 12 区 SP14523 遺物実測図	335
第 604 図	I - 12 区 SD1057 遺物出土平面図	317	第 645 図	I - 12 区 SP14525 遺物実測図	335
第 605 図	I - 12 区 SD1059 遺物出土平面図	317	第 646 図	I - 12 区 SP14526 遺物実測図	335
第 606 図	I - 12 区 SD1057 遺物実測図	318	第 647 図	I - 12 区 SP14610 遺物実測図	335
第 607 図	I - 12 区 SD1059 遺物実測図	318	第 648 図	I - 12 区 SP14653 遺物実測図	335
第 608 図	I - 12 区 SD1062 遺物実測図	318	第 649 図	I - 12 区 SP14697 遺物実測図	335
第 609 図	I - 12 区 SD1063 遺物実測図	318	第 650 図	I - 12 区 SP14703 遺物実測図	335
第 610 図	I - 12 区 SD1067 遺構実測図	322	第 651 図	I - 12 区 SP14705 遺物実測図	335
第 611 図	I - 12 区 SD1068 遺構断面図	322	第 652 図	I - 12 区 SP14714 遺物実測図	335
第 612 図	I - 12 区 SD1068 遺物出土平面図	323	第 653 図	I - 12 区 第 1 包含層遺物実測図	336
第 613 図	I - 12 区 SD1070 遺構実測図	323	第 654 図	I - 13 区 第 1 遺構面遺構配置図	338
第 614 図	I - 12 区 SD1065 遺物実測図	325	第 655 図	I - 13 区 SA1093 遺構実測図	340
第 615 図	I - 12 区 SD1066 遺物実測図	325	第 656 図	I - 13 区 SA1094 遺構実測図	340
第 616 図	I - 12 区 SD1067 遺物実測図 (1)	325	第 657 図	I - 13 区 SA1095 遺構実測図	340
第 617 図	I - 12 区 SD1067 遺物実測図 (2)	326	第 658 図	I - 13 区 SA1096 遺構実測図	342
第 618 図	I - 12 区 SD1067 遺物実測図 (3)	327	第 659 図	I - 13 区 SA1097 遺構実測図	342
第 619 図	I - 12 区 SD1068 遺物実測図	328	第 660 図	I - 13 区 SA1098 遺構実測図	343
第 620 図	I - 12 区 SD1070 遺物実測図	329	第 661 図	I - 13 区 SA1099 遺構実測図	343
第 621 図	I - 12 区 SP14053 遺構実測図	333	第 662 図	I - 13 区 SA1100 遺構遺測図	345
第 622 図	I - 12 区 SP14077 遺構実測図	333	第 663 図	I - 13 区 SA1101 遺構実測図	345
第 623 図	I - 12 区 SP14081 遺構実測図	333	第 664 図	I - 13 区 SA1102 遺構実測図	345
第 624 図	I - 12 区 SP14261 遺構実測図	333	第 665 図	I - 13 区 SA1103 遺構実測図	346
第 625 図	I - 12 区 SP14374 遺構実測図	333	第 666 図	I - 13 区 SA1104 遺構実測図	346
第 626 図	I - 12 区 SP14697 遺構実測図	333	第 667 図	I - 13 区 SA1105 遺構実測図	346
第 627 図	I - 12 区 SP14703 遺構実測図	333	第 668 図	I - 13 区 SA1095EP2 遺物実測図	347
第 628 図	I - 12 区 SP14705 遺構実測図	333	第 669 図	I - 13 区 SA1096 遺物実測図	347
第 629 図	I - 12 区 SP14017 遺物実測図	334	第 670 図	I - 13 区 SA1097 遺物実測図	347
第 630 図	I - 12 区 SP14053 遺物実測図	334	第 671 図	I - 13 区 SA1098 遺物実測図	347
第 631 図	I - 12 区 SP14077 遺物実測図	334	第 672 図	I - 13 区 SA1100 遺物実測図	347
			第 673 図	I - 13 区 SA1102 遺物実測図	347
			第 674 図	I - 13 区 SA1103EP4 遺物実測図	347

第 675 図	I - 13 区 SA1104 遺物実測図	347	第 718 図	I - 13 区 SK11259 遺物実測図	365
第 676 図	I - 13 区 SA1106 遺構実測図	349	第 719 図	I - 13 区 SK11268 遺物実測図	365
第 677 図	I - 13 区 SA1107 遺構実測図	351	第 720 図	I - 13 区 SK11282 遺物実測図	365
第 678 図	I - 13 区 SA1108 遺構実測図	351	第 721 図	I - 13 区 SK11290 遺物実測図	365
第 679 図	I - 13 区 SA1106 遺物実測図	352	第 722 図	I - 13 区 SK11157 遺物実測図	365
第 680 図	I - 13 区 SA1107 遺物実測図	352	第 723 図	I - 13 区 SK11201 遺物実測図	365
第 681 図	I - 13 区 SA1108EP2 遺物実測図	352	第 724 図	I - 13 区 SK11269 遺物実測図	365
第 682 図	I - 13 区 SA1109 遺構実測図	353	第 725 図	I - 13 区 SK11275 遺物実測図	365
第 683 図	I - 13 区 SK11153 遺構実測図	356	第 726 図	I - 13 区 SK11276 遺物実測図	365
第 684 図	I - 13 区 SK11155 遺構実測図	356	第 727 図	I - 13 区 SD1002 遺構断面図	370
第 685 図	I - 13 区 SK11162 遺構実測図	356	第 728 図	I - 13 区 SD1004 遺構断面図	370
第 686 図	I - 13 区 SK11204 遺構実測図	356	第 729 図	I - 13 区 SD1002・1004 出土平面図	370
第 687 図	I - 13 区 SK11207 遺構実測図	356	第 730 図	I - 13 区 SD1038 遺構断面図	370
第 688 図	I - 13 区 SK11210 遺構実測図	356	第 731 図	I - 13 区 SD1071 遺構断面図	370
第 689 図	I - 13 区 SK11217 遺構実測図	358	第 732 図	I - 13 区 SD1072 遺構断面図	370
第 690 図	I - 13 区 SK11225 遺構実測図	358	第 733 図	I - 13 区 SD1078 遺構実測図	372
第 691 図	I - 13 区 SK11239 遺構実測図	358	第 734 図	I - 13 区 SD1079 遺構断面図	375
第 692 図	I - 13 区 SK11250 遺構実測図	358	第 735 図	I - 13 区 SD1080 遺構断面図	375
第 693 図	I - 13 区 SK11259 遺構実測図	358	第 736 図	I - 13 区 SD1080 出土平面図	375
第 694 図	I - 13 区 SK11268 遺構実測図	358	第 737 図	I - 13 区 SD1081 遺構断面図	375
第 695 図	I - 13 区 SK11271 遺構実測図	358	第 738 図	I - 13 区 SD1083 遺構断面図	375
第 696 図	I - 13 区 SK11282 遺構実測図	359	第 739 図	I - 13 区 SD1002 遺物実測図	376
第 697 図	I - 13 区 SK11290 遺構実測図	359	第 740 図	I - 13 区 SD1004 遺物実測図	377
第 698 図	I - 13 区 SK11157 遺構実測図	362	第 741 図	I - 13 区 SD1038 遺物実測図	377
第 699 図	I - 13 区 SK11188 遺構実測図	362	第 742 図	I - 13 区 SD1071 遺物実測図	378
第 700 図	I - 13 区 SK11190 遺構実測図	362	第 743 図	I - 13 区 SD1078 遺物実測図 (1)	378
第 701 図	I - 13 区 SK11201 遺構実測図	362	第 744 図	I - 13 区 SD1078 遺物実測図 (2)	379
第 702 図	I - 13 区 SK11202 遺構実測図	362	第 745 図	I - 13 区 SD1078 遺物実測図 (3)	380
第 703 図	I - 13 区 SK11249 遺構実測図	362	第 746 図	I - 13 区 SD1078 遺物実測図 (4)	381
第 704 図	I - 13 区 SK11269 遺構実測図	363	第 747 図	I - 13 区 SD1079 遺物実測図	381
第 705 図	I - 13 区 SK11272 遺構実測図	363	第 748 図	I - 13 区 SD1080 遺物実測図	381
第 706 図	I - 13 区 SK11275 遺構実測図	363	第 749 図	I - 13 区 SD1081 遺物実測図	381
第 707 図	I - 13 区 SK11276 遺構実測図	363	第 750 図	I - 13 区 SD1083 遺物実測図	381
第 708 図	I - 13 区 SK11278 遺構実測図	363	第 751 図	I - 13 区 SP14743 遺構実測図	384
第 709 図	I - 13 区 SK11153 遺物実測図	364	第 752 図	I - 13 区 SP14751 遺構実測図	384
第 710 図	I - 13 区 SK11155 遺物実測図	364	第 753 図	I - 13 区 SP14866 遺構実測図	384
第 711 図	I - 13 区 SK11162 遺物実測図	364	第 754 図	I - 13 区 SP14997 遺構実測図	384
第 712 図	I - 13 区 SK11204 遺物実測図	364	第 755 図	I - 13 区 SP14743 遺物実測図	385
第 713 図	I - 13 区 SK11207 遺物実測図	364	第 756 図	I - 13 区 SP14751 遺物実測図	385
第 714 図	I - 13 区 SK11210 遺物実測図	364	第 757 図	I - 13 区 SP14770 遺物実測図	385
第 715 図	I - 13 区 SK11225 遺物実測図	365	第 758 図	I - 13 区 SP14814 遺物実測図	385
第 716 図	I - 13 区 SK11239 遺物実測図	365	第 759 図	I - 13 区 SP14846 遺物実測図	385
第 717 図	I - 13 区 SK11250 遺物実測図	365	第 760 図	I - 13 区 SP14866 遺物実測図	385

写真目次

【第1分冊】		写真7	21年度現地説明会	10	
写真1	遺構掘削作業	5	写真8	21年台風18号による被害	10
写真2	遺跡体験見学会	6	写真9	実体顕微鏡写真（試料番号1～10）	408
写真3	実測作業風景	7	写真10	実体顕微鏡写真（試料番号13～24）	409
写真4	21年7月豪雨の被害	7	写真11	実体顕微鏡写真（試料番号29～37）	410
写真5	20年度現地説明会	9	写真12	調査資料（左：付着物のある内面 右：付着物のない外面）	412
写真6	21年台風9号による被害	9			

図版目次

【第1分冊】		4	II-12区	SD1068	遺物出土（南から）	
巻頭図版1	宮ノ本遺跡遠景（北西の西方城跡より） 宮ノ本遺跡周辺（北西から）	5	II-12区	SD1096	北側 遺物出土（南から）	
巻頭図版2	II-12区 全景（西から） II-13区 全景（西から）	6	II-12区	SD1104	（南から）	
巻頭図版3	I-12区 全景（西から） I-13区 全景（西から）	図版6	1	II-12区	SD1104	南側 遺物出土（西から）
			2	II-12区	SP14007	遺物出土（西から）
			3	II-12区	SP14100	遺物出土（南から）
			4	II-12区	SP14343	遺物出土（東から）
			5	II-12区	南壁土層	
【第2分冊】		図版7	1	II-13区	西側完掘状況（西から）	
図版1	1 調査前風景（東から） 2 II-12区 完掘状況全景（東から）		2	II-13区	東側完掘状況（北西から）	
図版2	1 II-12区 東半部完掘状況（西から） 2 II-12区 西半部完掘状況（東から）		3	II-13区	中央部完掘状況（北から）	
図版3	1 II-12区 SA1037EP9 遺物出土（東から） 2 II-12区 SA1062EP1 遺物出土（南から） 3 II-12区 SA1071EP4 遺物出土（北から） 4 II-12区 SK11022 遺物出土（南から） 5 II-12区 SK11035 遺物出土（東から）	図版8	1	II-13区	SB1002	完掘状況（南から）
図版4	1 II-12区 SK11061 遺物出土（東から） 2 II-12区 SK11082 中央 遺物出土（北から） 3 II-12区 SK11082 北側 遺物出土（北から） 4 II-12区 SK11071 遺物出土（南から） 5 II-12区 SK11060 遺物出土（南から）		2	II-13区	SB1003	完掘状況（南から）
図版5	1 II-12区 西半部 SK 群（北から） 2 II-12区 SD1002 遺物出土（西から） 3 II-12区 SD1062・1068・1096（北から）	図版9	1	II-13区	SB1003	竈付近（南西から）
			2	II-13区	SB1003	竈内 遺物出土（東から）
			3	II-13区	SB1004	完掘状況（南から）
			4	II-13区	SB1004	竈全景（南から）
		図版10	1	II-13区	SB1005	完掘状況（南から）
			2	II-13区	SB1005	竈付近遺物出土（南から）
			3	II-13区	SB1005	竈完掘状況（南から）
			4	II-13区	SB1005	竈掘り形土層（南から）
		図版11	1	II-13区	SB1006	完掘状況（南から）
			2	II-13区	SB1006	竈付近遺物出土（南から）
			3	II-13区	SB1006	竈土層（南から）
		図版12	1	II-13区	SA1085EP1	遺物出土（西から）
			2	II-13区	西側 SK 群	（南から）

	3	II - 13 区	SK11140 遺物出土 (南から)		6	I - 12 区	SD1067 東側 遺物出土 (東から)
	4	II - 13 区	SK11418 鉄刀子出土		7	I - 12 区	SD1067 西側 遺物出土 (東から)
	5	II - 13 区	SK11419 遺物出土 (上:西から 下:南から)	図版 19	1	I - 12 区	SP14077 遺物出土 (北から)
	6	II - 13 区	中央部 SK 群 (南から)		2	I - 12 区	SP14703 遺物出土 (南から)
図版 13	1	II - 13 区	SD1005 ~ 1007 · 1020 ~ 1022 完掘状況 (北から)		3	I - 12 区	南側拡張部遺構検出 (西から)
	2	II - 13 区	SD1005 ~ 1007 · 1020 ~ 1022 完掘状況 (南から)		4	I - 12 区	南側拡張部完掘状況 (西から)
	3	II - 13 区	SD1034 完掘状況 (北から)		5	I - 12 区	南壁土層
	4	II - 13 区	SD1115 南側 遺物出土 (南から)	図版 20	1	I - 13 区	西側完掘状況 (西から)
	5	II - 13 区	SD1115 南側 遺物出土 (南から)		2	I - 13 区	東側完掘状況 (北から)
	6	II - 13 区	SD1115 遺物出土 (東から)	図版 21	1	I - 13 区	中央部完掘状況 (北から)
図版 14	1	II - 13 区	SP14375 遺物出土 (北から)		2	I - 13 区	SA1095 付近 (北西から)
	2	II - 13 区	SP14430 遺物出土 (西から)		3	I - 13 区	西部 SK 群検出状況 (南から)
	3	II - 13 区	SP14434 遺物出土 (北から)	図版 22	1	I - 13 区	SA1106EP1 遺物出土 (南から)
	4	II - 13 区	SP14509 遺物出土 (西から)		2	I - 13 区	SA1106EP10 遺物出土 (南から)
	5	II - 13 区	SP14708 遺物出土 (北から)		3	I - 13 区	SK11204 遺物出土 (東から)
	6	II - 13 区	SP14849 遺物出土 (東から)		4	I - 13 区	SK11204 遺物出土 (東から)
	7	II - 13 区	SP15105 遺物出土 (南から)		5	I - 13 区	中央部南側 SK 群 (南から)
	8	II - 13 区	西壁土層		6	I - 13 区	SD1004 遺物出土 (東から)
図版 15	1	I - 12 区	完掘状況全景 (西から)		7	I - 13 区	SD1078 南側 遺物出土 (南から)
	2	I - 12 区	東側完掘状況 (北から)	図版 23	1	I - 13 区	SD1078 中央 遺物出土 (南から)
図版 16	1	I - 12 区	SA1087 完掘状況 (北から)		2	I - 13 区	SD1078 中央 遺物出土 (東から)
	2	I - 12 区	SA1074EP4 遺物出土 (東から)		3	I - 13 区	SD1080 遺物出土 (南から)
	3	I - 12 区	SA1075EP4 遺物出土 (北から)		4	I - 13 区	SD1080 遺物出土 (南から)
	4	I - 12 区	SA1076EP1 遺物出土 (南から)		5	I - 13 区	SP14751 遺物出土 (東から)
	5	I - 12 区	SA1076EP9 遺物出土 (南から)		6	I - 13 区	SP14866 遺物出土 (南から)
	6	I - 12 区	SK11039 遺物出土 (南から)		7	I - 13 区	西壁土層
	7	I - 12 区	SD1048 南側 遺物出土 (東から)	図版 24	1	調査区より西方向を望む	
図版 17	1	I - 12 区	SD1048 南側 遺物出土 (北東から)		2	調査区より北西方向を望む (手前側山塊の右端ピークに西方城跡)	
	2	I - 12 区	SD1048 南西隅 遺物検出状況 (南から)		3	調査区より北東方向を望む	
	3	I - 12 区	SD1048 南西隅 遺物出土 (南から)	図版 25	1	II - 12 区	SA1037EP9
	4	I - 12 区	SD1048 南西隅 遺物出土 (東から)		2	II - 12 区	SA1062EP1
	5	I - 12 区	SD1048 南西隅 遺物出土 (東から)		3	II - 12 区	SK11022
図版 18	1	I - 12 区	SD1059 中央部 遺物出土 (東から)		4	II - 12 区	SK11035
	2	I - 12 区	SD1059 南側 遺物出土 (西から)		5	II - 12 区	SK11061
	3	I - 12 区	SD1067 中央部 遺物出土 (東から)		6	II - 12 区	SK11082 瓦器皿
	4	I - 12 区	SD1067 中央部 遺物出土 (南から)		7	II - 12 区	SK11082 瓦器椀
	5	I - 12 区	SD1067 東側 遺物出土 (南から)	図版 26	1	II - 12 区	SK11082
					2	II - 12 区	SK11117
					3	II - 12 区	SK11060

	4	Ⅱ - 12 区	SK11071		2	Ⅱ - 13 区	SD1117
	5	Ⅱ - 12 区	SD1002		3	Ⅱ - 13 区	SP14376
図版 27	1	Ⅱ - 12 区	SD1062・1068		4	Ⅱ - 13 区	SP14509
	2	Ⅱ - 12 区	SD1068	図版 34	1	Ⅱ - 13 区	SP14553
	3	Ⅱ - 12 区	SD1068		2	Ⅱ - 13 区	SP14697
	4	Ⅱ - 12 区	SD1079		3	Ⅱ - 13 区	SP14849
	5	Ⅱ - 12 区	SD1082		4	Ⅱ - 13 区	SP14898
	6	Ⅱ - 12 区	SD1094		5	Ⅱ - 13 区	包含層
	7	Ⅱ - 12 区	SD1096		6	I - 12 区	SA1076EP1
図版 28	1	Ⅱ - 12 区	SD1104		7	I - 12 区	SA1085EP8
	2	Ⅱ - 12 区	SP14100	図版 35	1	I - 12 区	SD1048 供膳具
	3	Ⅱ - 12 区	SP14045		2	I - 12 区	SD1048 瓦質火鉢
	4	Ⅱ - 12 区	SP14111		3	I - 12 区	SD1059
	5	Ⅱ - 12 区	SP14154	図版 36	1	I - 12 区	SD1067
図版 29	1	Ⅱ - 12 区	SP14343		2	I - 12 区	SD1068
	2	Ⅱ - 12 区	包含層		3	I - 12 区	SD1070
	3	Ⅱ - 13 区	SB1002	図版 37	1	I - 13 区	SA1106EP1
	4	Ⅱ - 13 区	SB1003		2	I - 13 区	SK11204
図版 30	1	Ⅱ - 13 区	SB1004		3	I - 13 区	SD1004
	2	Ⅱ - 13 区	SB1006		4	I - 13 区	SD1071
	3	Ⅱ - 13 区	SB1007		5	I - 13 区	SD1078 (1)
図版 31	1	Ⅱ - 13 区	SA1105EP8	図版 38	1	I - 13 区	SD1078 (2)
	2	Ⅱ - 13 区	SK11140		2	I - 13 区	SD1079
	3	Ⅱ - 13 区	SK11406		3	I - 13 区	SD1080
	4	Ⅱ - 13 区	SK11419		4	I - 13 区	SP15052
	5	Ⅱ - 13 区	SD1005		5	常滑焼 甕	
図版 32	1	Ⅱ - 13 区	SD1006		6	管状土錘	
	2	Ⅱ - 13 区	SD1034		7	加工円盤	
	3	Ⅱ - 13 区	SD1113		8	基石	
	4	Ⅱ - 13 区	SD1115 (1)		9	I - 12 区	SD1068・1070 椀形滓
図版 33	1	Ⅱ - 13 区	SD1115 (2)				

付 図 目 次

付図 1	宮ノ本遺跡 I・II 地区	第 1 遺構面	全体図	付図 6	宮ノ本遺跡 II - 12 区	第 1 遺構面	遺構配置図
付図 2	宮ノ本遺跡 I 地区	第 1 遺構面	遺構配置図	付図 7	宮ノ本遺跡 II - 13 区	第 1 遺構面	遺構配置図
付図 3	宮ノ本遺跡 II 地区	第 1 遺構面	遺構配置図	付図 8	宮ノ本遺跡 I・II 地区	第 1 遺構面	SA・SG・SD 配置図
付図 4	宮ノ本遺跡 I - 12 区	第 1 遺構面	遺構配置図				
付図 5	宮ノ本遺跡 I - 13 区	第 1 遺構面	遺構配置図				

第 I 章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

四国東部に位置する徳島県は東西約 100km、南北約 75km、総面積約 4,100km²で、四国の約 22% を占める。県土の 8 割以上が山地であるため、平野は吉野川流域や勝浦川・那賀川下流域など 2 割弱に過ぎない。

県北部には中央構造線が走り、その北側は西南日本内帯に属し、領家帯と呼ばれる岩石帯が分布する。県下では阿讃山脈の南半が、中生代白亜紀後期に形成された砂岩系の和泉層群によって構成される。中央構造線南側を西南日本外帯といい、北から順に三波川変成帯（結晶片岩類）・御荷鉾帯（緑色岩類）・秩父累帯（砂岩・泥岩・石灰岩・チャート・塩基性凝灰岩など）により構成される岩石帯が分布し、四国山地北部を形成する。調査地付近では砂岩・泥岩やチャートが目立つ。橋湾付近では石灰岩層が露出する。上大野の城山は県下では希少な花崗岩の分布域として知られるが、これは造岩年代が約 4 億年前に遡り、我が国でもっとも古い岩石の一つである。等粒状完晶質で優白色を呈する一般的な花崗岩とは異なり、花崗閃緑岩に属し、圧碎のため雲母や長石は緑泥石に変質する。本遺跡出土土器にこの花崗岩とみられる粒子が含まれることから、本書では「在地花崗岩」と表記している。

那賀川は四国山地に源を発し、東流して紀伊水道に注ぐ全長約 125km、流域面積 781km²の一級河川で、県下では吉野川に次ぐ規模を誇る。流域の 9 割は急峻な山地であるが、下流部では様相を一変させ、河口から 11.5km 遡った阿南市上大野町付近からは三角州性扇状地が両岸に発達し、その先端部は円弧状の海岸線を作る。これによって形成された約 10km 四方の沖積平野を通称那賀川平野という。阿南市中央部を南西から北東に向かって貫流する全長約 25.4km の桑野川は、海部山地の東に位置する矢筈山を水源とする那賀川水系の一つである。下流では津乃峰山塊の北麓に沿って那賀川の沖積平野を約 5km 東流し、海岸線近くで那賀川と合流する。遺跡付近の川幅は 50 m 前後である。

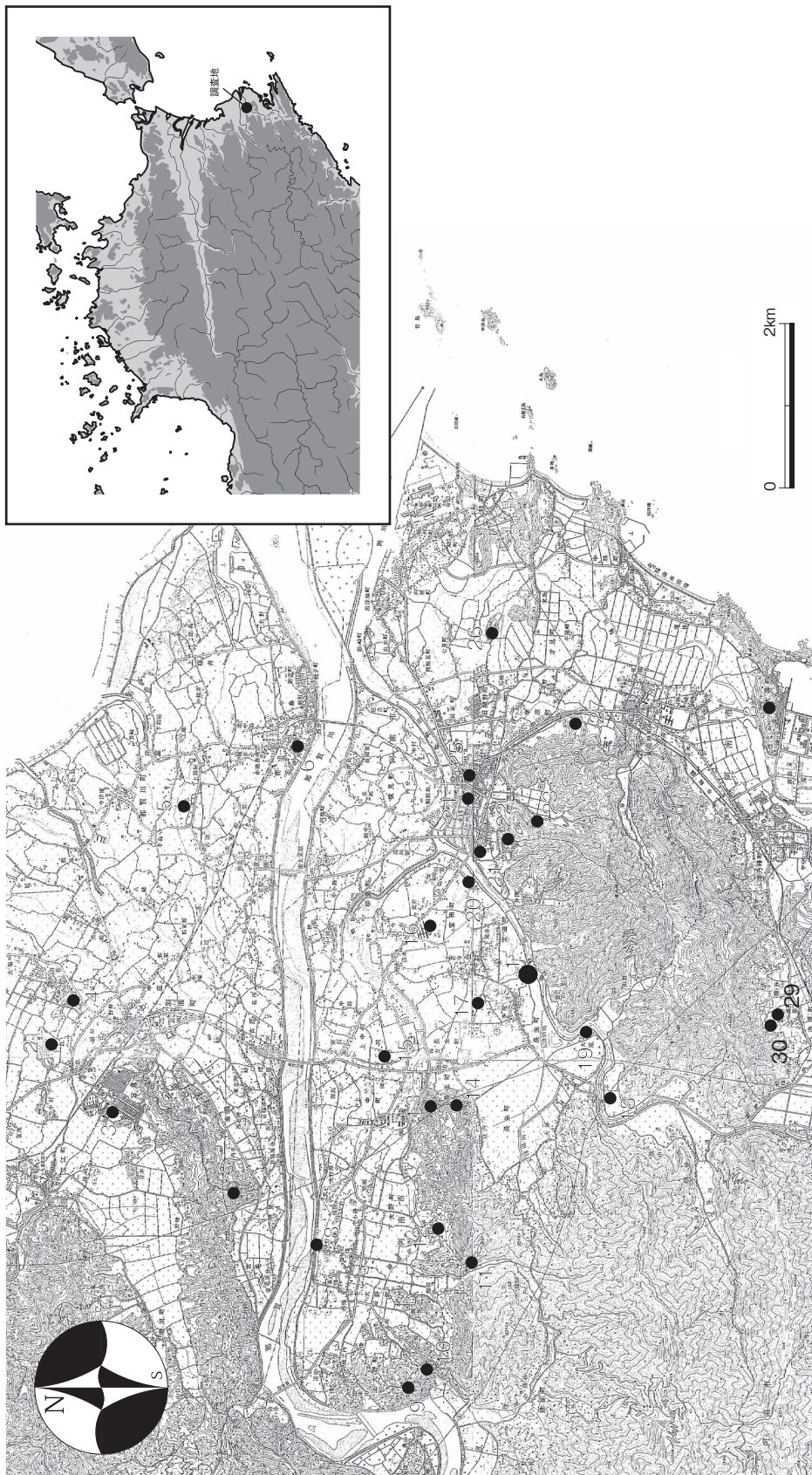
宮ノ本遺跡は河口から約 7km 遡った桑野川左岸に広がる標高 3.5 ～ 4 m の沖積平野上（地形分類上は谷底平野・大矢他 1997）に立地し、肌理の細かいシルト質土壌をベースとする。

2. 歴史的環境（第 1 図）

那賀川は県下第二の大河であるにもかかわらず、吉野川流域と比較して流域の考古学的調査に恵まれることが少なかった地域である。

本地域最古の遺跡は旧石器時代まで遡る。桑野町廿枝遺跡はチャートを素材としたナイフ形石器などの旧石器が出土している。縄文時代の遺跡は、那賀川中流域の古屋岩陰遺跡（早期）、新野町葉池谷遺跡（前期末）のほか、四国最東端の蒲生田岬先端部に位置する蒲生田遺跡（中・後期）や、美波町田井ノ浜で田井遺跡（前期～中期）が発見され、近年沿岸部にも縄文遺跡が分布することが明らかとなった。

弥生時代になると遺跡数は増加する。水井町若杉山遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭の水銀朱生産遺跡である。津乃峰山塊北端部の標高 20 ～ 30 m 地点に位置する富岡町石塚の正福寺山遺跡は、弥生時代中期末の遺物とともに竪穴住居状遺構が検出され、その立地から高地性集落とする見方もある。阿南市内では 5 遺跡 7 口の銅鐸が出土しているが、そのうち山口町伝長者ヶ原銅鐸・同町田村谷銅鐸・中



- 1 宮ノ本遺跡
- 2 能路寺山古墳群
- 3 寺田山古墳群
- 4 観音山古墳
- 5 平島公方役所
- 6 平島公方墓所
- 7 岩脇城跡
- 8 八貫渡銅鐸出土地
- 9 上大野城跡
- 10 上大野遺跡
- 11 畑田銅鐸出土地
- 12 畑田出土土銭
- 13 西方城跡
- 14 八柙山古墳群
- 15 岡墨跡
- 16 立善寺跡
- 17 本庄城推定地
- 18 長生出土銭
- 19 大原遺跡
- 20 川原遺跡
- 21 庄境遺跡
- 22 正福寺山遺跡
- 23 西池田窯跡
- 24 牛岐城(富岡城)跡
- 25 トノ町遺跡
- 26 皇子山古墳群
- 27 学原剣塚古墳
- 28 矢剣塚古墳
- 29 国高山古墳
- 30 内原成松窯跡群

第1図 宮ノ本遺跡の位置と周辺の遺跡

大野町八貫渡銅鐸・下大野町畑田銅鐸の5口が、那賀川下流右岸から桑野川流域の地域で出土している。

古墳時代では、津乃峰山塊の南西尾根上に県南唯一の前方後円墳である国高山古墳が築かれる。全長55mの中期古墳で、竪穴式石室からは内行花文鏡や鉄製品・石製刀子・土製勾玉などの豊富な副葬品が出土している。徳島県における前方後円墳の分布は吉野川流域に集中しているが、本地域に大規模な墳丘と豊富な遺物を伴う前方後円墳が単独で存在していることは、当該期に至って県南部に大きな勢力が伸張したことを示唆する。古墳時代後期には、那賀川平野に面した丘陵部や沖積地の独立丘陵上に観音山古墳（羽ノ浦町中庄）・能路寺山古墳（羽ノ浦町宮倉）・皇子山古墳群（日開野町王子山）・八杵山古墳群（長生町西方）・学原剣塚古墳（学原町）などが営まれる。

古代の遺跡として、宝田町には白鳳期～平安時代後期の瓦が出土した立善寺跡があり、方一町の寺域をもつと考えられている。津乃峰山塊南麓の内原町に所在する内原成松窯跡群は、8世紀代の須恵器とともに瓦を焼成しており、立善寺の瓦生産地と考えられる。2009年度、阿南市文化振興課が本遺跡の東1.3kmに位置する川原遺跡（宝田町）の発掘調査を行った結果、9～10世紀の掘立柱建物群が検出され、丸軋や緑釉陶器が出土した。付近には「郡」という地名が遺ることから、那賀郡衙の可能性が高いものとして注目される。また、桑野川を6km遡った桑野谷遺跡（桑野町）では、灰釉陶器・緑釉陶器・円面硯などが出土しており、寺院もしくは公的施設の存在が窺われる。

平安時代末期以降、荘園制の発達とともに県下でも70を超える荘園が記録に残る。那賀川下流域は荘園の密集地帯で、宮ノ本遺跡が所在する竹原荘は宝田・長生両町域に位置する荘園である。1157（保元二）年左大臣藤原頼長領のち後白河院領となり、その後皇室領として伝領する。1163（長寛元）年の「二品家政所下文」では、二品家が当荘鎮守の八杵神社に金泥法華経などの經典のほか荘内の水田五段を寄進し、貢納船安全などを祈願している。那賀川流域の荘園は、仁和寺領牛牧領（1203（建仁三）年初見）、宝荘巖院領大野荘（1159（平治元）年初見）、長講堂領那賀山荘（1191（建久二）年初見）が、桑野川流域では伊勢神宮領桑野御厨を前身とする桑野保（1336（建武三）年初見）、阿良多野荘がみえる。

1351（観応二）年には細川頼春が紀伊の周参見氏に竹原荘本郷地頭職を安堵し、1354（文和三）年には橘・清原の両氏が周参見氏闕所に入部、1506（永正三）年には清原安藝守高国が地頭職に補任される。清原氏は、宮ノ本遺跡の北西約600mに位置する長生町清屋敷の本庄城を拠点として那東郡に勢力を広げた。本庄城比定地付近には北門・清屋敷・海部屋敷・出屋敷・船付・本庄市などの地名が残り、地籍図・地形図とあわせて範囲および平面プランの復元が可能である。那賀川下流域の戦国期中世城館は、牛岐城（新開氏）・西方城（東条氏）・上大野城（仁木氏）・岡壘・桑野城（桑野氏）・福井城（武田氏）などが知られる。清原氏は配下に竹原・宇奈瀬・岩脇・山木・桑野・板西・福井・井川らの在地領主を従え、那賀川下流域では牛岐城主新開道善と勢力を二分する存在となるが、天正年間、阿波南方に侵攻してきた土佐の長宗我部元親軍に敗れる。

その他の中世遺跡としては、宮ノ本遺跡から南西約1.7kmの長生町上荒井で出土した長生埋納銭（26,338枚、最新銭は琉球の世高通寶、1461年初鑄）が知られる。県下では海部郡海陽町大里・徳島市一宮・同市寺山遺跡で埋納銭が発見され、いずれも鎌倉時代末期から南北朝期頃の埋納と考えられる。

近世になると牛岐城は阿波九城の一つとして、家老である賀島氏が城代となり、富岡城と改称される。1638（寛永十五）年一国一城令により廃城となったものの、城の西側に営まれた郷町富岡は県南部における政経の中心地として発展を続けた。牛岐城の東300mに位置するトノ町遺跡では17世紀代の集落が確認された。従来、郷町は城の西側とされ、東側は幕末の絵図によれば水田化しているが、近世初頭

の段階では東側にも町が広がっていたことがわかった。一方、旧竹原荘域は竹原十八箇村として農村化し、近代以降は度重なる町村合併によりその多くが字名としてその名を残すだけとなっている。

参考文献

- 阿南市史編纂委員会 1987『阿南市史 第一巻 原始 古代 中世』阿南市教育委員会事務局
- 天羽利夫他 1969「徳島県廿枝遺跡採集の石器：徳島県出土のナイフ形石器」『古代学 16 (1)』古代学協会
- 大矢雅彦他 1997『那賀川流域水害地形分類図』建設省四国地方建設局徳島工事事務所
- 片山純州他 2008『トノ町遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集 (財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 島田豊彰他 2009『宮ノ本遺跡 I 大原遺跡 庄境遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第 76 集 (財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 島田麻寿吉 1916『八銚神社と長国造』泉山会
- 須鎗和巳他 1991『日本の地質 四国地方』共立出版株式会社
- 高島芳弘 1995「徳島県那賀川流域における縄文遺跡の分布とその遺物」『徳島県立博物館研究報告第 5 号』徳島県立博物館
- 高島芳弘 2002「那賀川における縄文時代の石器石材について」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 立花 博 1970「徳島県那賀郡古屋岩陰遺跡調査概報」『徳島市内ノ御田瓦窯跡調査概報・徳島県那賀郡古屋岩陰遺跡調査概報』徳島県博物館建設記念学術奨励金運用委員会
- 斎 浩市 2000「蒲生田遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.12』(財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 徳島県埋蔵文化財センター編 2007『徳島県遺跡地図』徳島県教育委員会 徳島県埋蔵文化財センター
- 林 賢彦 2003「葉池谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.15』(財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 三好昭一郎編 1986『角川日本地名大辞典 36 徳島県』角川書店
- 三好昭一郎他 2000『日本歴史地名大系 37 徳島県の地名』平凡社

第Ⅱ章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

一級河川那賀川水系桑野川は、その源を阿南市新野町喜来地内の、標高 565.8 m の矢筈山に発し、ほぼ東に流下する。途中、南川・北谷川・大津田川・岡川などの支流を合流し、延長 27km、流域面積 92.7km² の治水上重要な河川である。流域概要としては約 80% が崩壊性に富んだ急峻な山地で、残り約 20% の平地の多くは水稻を主とする農地であり、流域は年間降水量が 2,000mm～3,000mm にも及ぶ多雨地域である。また河道は全体的に狭く、河道法線は不規則に蛇行を繰り返すため、古来より洪水時には各所で氾濫し、住居の浸水や道路・田畑の冠水による被害が発生した。このような状況から河道の拡幅を行い洪水被害を未然に防止するため、建設省（現国土交通省）が昭和 43 年に策定された基本計画に基づき改修工事を施工した。

その後、昭和 63 年の計画高流量の改訂に伴い桑野川河川整備計画の必要性が示唆されてきたが、流域では平成 9 年から平成 11 年にかけて集中豪雨による浸水被害が相次いで発生し、記録的高水位を記録した。こうした事態を解消するため、国土交通省四国地方整備局那賀川河川事務所（以下、那賀川事務所とする）では、河道の流量を安全に流下させるための対策として河川堤防の改修を実施してきた。

これまでの桑野川堤防の事業に伴う発掘調査は、国土交通省の委託を受けた徳島県が、（財）徳島県埋蔵文化財センターに委託し、宮ノ本遺跡・大原遺跡・庄境遺跡の総面積 18,389m²（延べ 27,172m²）の発掘調査が平成 17 年度～平成 19 年度までの 3 カ年にわたり実施されている。

その結果、宮ノ本遺跡では縄文時代晩期と弥生時代前期で竪穴住居跡群、中世では区画溝や数多くの掘立柱建物を伴う大規模な集落遺跡であることが判明し、その成果は徳島県埋蔵文化財センター報告書第 76 集『宮ノ本遺跡Ⅰ・大原遺跡・庄境遺跡』（平成 20 年度刊行）にまとめられている。

今回の発掘調査は、桑野川床上浸水対策特別緊急事業の工法変更による追加調査であり、泉八幡神社南側、旧堤防撤去後の周辺高水敷部分の一部を掘削し、河道拡幅に対応するものである。

平成 21 年 4 月、徳島県教育委員会文化財課（以下、文化財課とする）では那賀川河川事務所からの工法変更に伴う試掘の依頼を受け、平成 21 年 4 月 30 日に文化財課が当該箇所の試掘調査を行った結果、高水敷施工部分においても弥生時代～中世にかけての遺物・遺構を検出し、施工箇所において当時の集落跡が存在することが確認した。文化財課と那賀川事務所は協議をし、早急に工事着手前の発掘調査を実施することに合意した。

発掘調査はこれまでと同様に、国土交通省の委託を受けた徳島県が（財）徳島県埋蔵文化財センターに委託し、総面積 10,150m² の発掘調査が平成 20 年度～平成 21 年度までの 2 カ年にわたり実施されることとなった。なお遺跡名については、泉八幡神社南を中心とした箇所は、これまで発掘調査された「宮ノ本遺跡」と一連の遺跡であることから、これを遺跡名とした。



写真 1 遺構掘削作業

2. 発掘調査および整理業務態勢

専務理事兼所長	阿部 修三（平成 20・21 年度）	
常務理事兼局長	多田 升二（平成 20 年度）	近松 克二（平成 21 年度）
次長兼総務課長	新居 謙輔（平成 20 年度）	三好 修基（平成 21 年度）
主査兼庶務係長	氏家 敏之（平成 21 年度）	
事業第一課長	湯浅 利彦（平成 20 年度）	
事業課長	石井 伸夫（平成 21 年度）	
事業第一課調査係長	藤川 智之（平成 20 年度）	
事業課調査第一係長	藤川 智之（平成 21 年度）	
事業課調査第二係長	原 芳伸（平成 21 年度）	
事業課整理係長	栗林 誠治（平成 21 年度）	
発掘調査担当 主任研究員	原 芳伸（平成 20 年度）	
研究員	入江 正幸（平成 20 年度）	
研究主査	久保脇美朗（平成 21 年度）	
係長	原 芳伸（平成 21 年度）	
主任研究員	田川 憲（平成 21 年度）	
研究補助員	美鳥 裕太（平成 21 年度）	佐藤 俊祐（平成 21 年度）
整理作業担当 係長	藤川 智之（平成 21 年度）	
主任研究員	島田 豊彰（平成 21 年度）	

3. 調査の経過

1. 調査の経過

調査は調査対象地内において掘削可能な部分について行った。桑野川本流と近接する調査区南側は、河道からの漏水・湧水の影響を考慮してやや控えて掘削を行った。にもかかわらず粘性薄弱な土質のため部分的な崩落はみられたが、迅速な対処により被害は最小限に食い止めることができた。

工程の迅速化を図るため、表土や近代以降の耕作土壌や盛土層の掘削は重機を用いた。遺物包含層は人力による掘り下げを行った。遺構面は基本的に 1 面のみ確認され、各調査区とも以下の土層確認のためトレンチ調査を行い、その後旧状に復して調査を終えた。

平成 20・21 年度に現地説明会を開催して調査成果の公表を行い、それぞれ 100 人の参加があった。また 20 年度には長生小学校の 4 年生 27 名が見学を訪れ、21 年度には速報展「発掘とくしま」の関連行事として遺跡体験見学会が行われ、16 名が参加した。



写真 2 遺跡体験見学会

2. 調査区割 (第2図・第1表)

宮ノ本遺跡は、泉八幡神社前の参道を境に西側がⅠ地区、東側がⅡ地区で、東に約300m離れてⅢ地区が位置する。平成20年度までに整理完了し報告書刊行したⅠ-1～11区・Ⅱ-1～11区・Ⅲ地区を「宮ノ本遺跡Ⅰ」とし、今回はその南側に隣接する調査区を「宮ノ本遺跡Ⅱ」として整理する。

発掘調査時に用いられた調査区名について、整理作業時に振り替えを行った。宮ノ本遺跡は西から順にⅠ～Ⅲ地区に大別し、それぞれの地区を構成する調査区をアラビア数字の枝番として付記(例：Ⅱ-4区)した。今回の調査区はⅠ・Ⅱ地区の南側に隣接することから、各地区における枝番の続き番号を付与することとし、調査の着手順により東からⅡ-12区・Ⅱ-13区・Ⅰ-12区・Ⅰ-13区とした。

遺構番号は、調査時には調査区毎に振っていたため振り直しを行った。宮ノ本遺跡Ⅰでは地区毎に1から振っており、本書でもその番号を継承した。(例言8を参照)

また遺構記号についても本来ならば遺構の規模や形状等を考慮の上で変更を行うべきであるが、時間的制約から部分的な見直しにとどまった。

平面ポイントを示す座標は、これまでの整理作業で、世界測地系第Ⅳ系座標を基準として5m四方を単位とするグリッド網を設定した。まず世界測地系第Ⅳ系座標の $X = 101,000$ m、 $Y = 103,500$ mを基点として一辺500mの大グリッドを設定し、大グリッドは基点から北にLoc. A・Loc. B、東にLoc.1、Loc.2・と設定する。大グリッド内を100m四方単位に区画したものを中グリッドとし、大グリッドの南西隅から北に $a \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta \cdot \varepsilon$ 、東にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの順で設定する。中グリッド内部は5m四方単位で区画した小グリッドと呼び、中グリッド南西隅を基点として北に $a \sim t$ 、東に1～20の順で設定した。よって一例としてLoc. B 3、 γ Ⅳ、j 17グリッドと表記するが、本文中では煩雑になることから小グリッドのみ記載することとし、遺構一覧表には中グリッド以下を記載している。

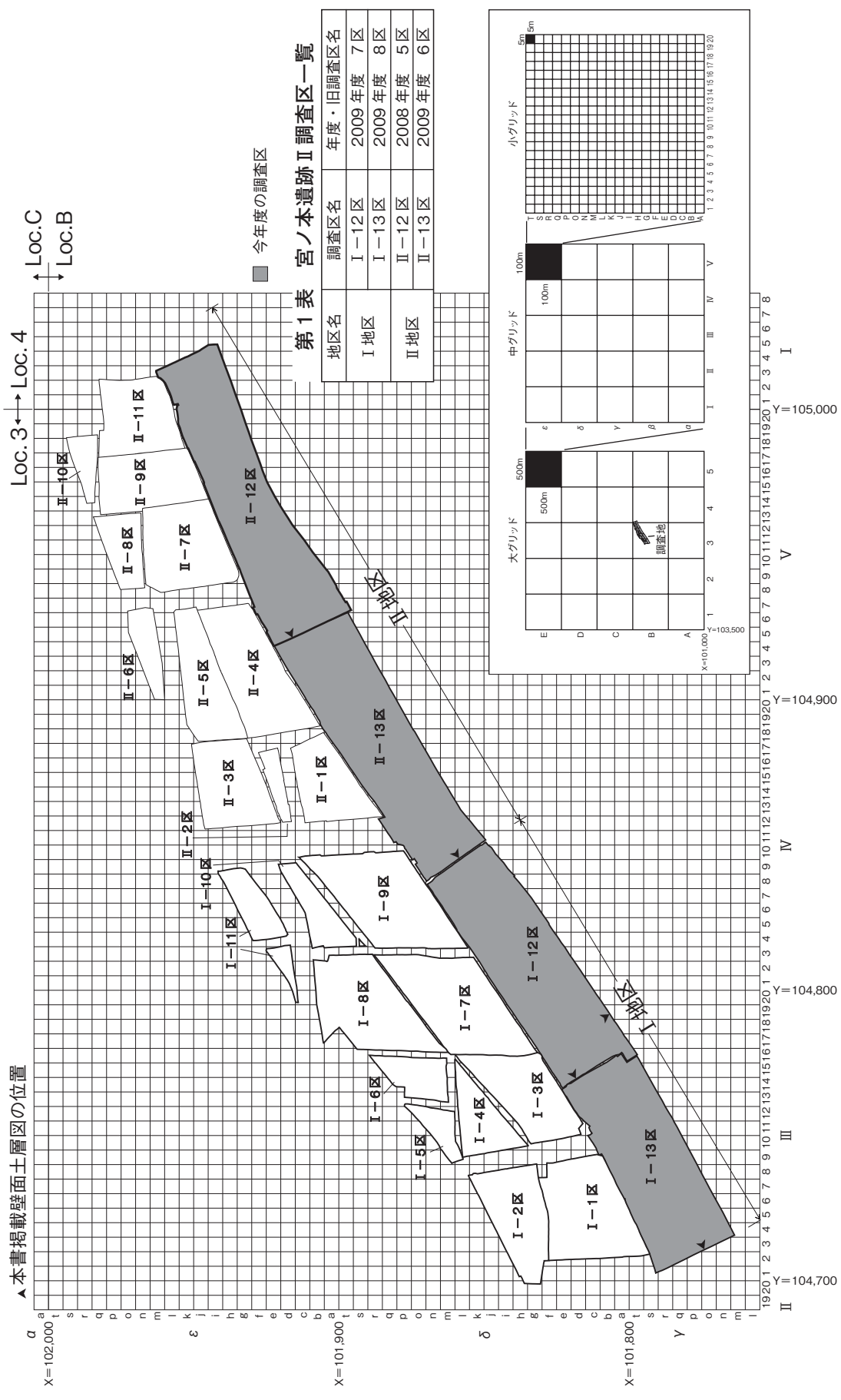
以上のことから調査時における調査区名・遺構番号・グリッド設定のいずれも本書においては変更されていることを明記する。また本書掲載遺物は遺物ラベルに変更を記載した上で収納しているが、不掲載遺物に関してはラベルの書き換えを行っていない。また調査時に作成した原図や写真資料等も調査区や遺構番号の訂正を行っていないことに注意されたい。



写真3 実測作業風景



写真4 21年7月豪雨の被害



第2図 宮ノ本遺跡調査区・グリッド配置図

3. 調査日誌抄

平成 20 (2008) 年度調査

平成 20 (2008) 年

- 11月4日 調査区確定、地元挨拶、作業員面接。
- 11月5日 駐車場整地、学校関係挨拶。
- 11月6日 物品搬入準備。
- 11月10日 測量。
- 11月12日 作業員安全教育、物品搬入、安全柵設置。
- 11月13日 II - 12区調査開始。機械掘削・側溝掘削開始。
- 11月14日 第1包含層人力掘削開始、第1面遺構検出開始、グリッド杭打設。
- 11月18日 東側1/3第1面遺構検出状況撮影。
- 11月20日 南端の落ち込み・攪乱部機械掘削。
- 11月28日 降雨により調査区冠水。
- 12月1日 壁面土留め養生。
- 12月3日 東側2/3第1面遺構検出。
- 12月4日 東側2/3第1面遺構検出状況撮影。
- 12月8日 第1面遺構掘削開始。
- 12月25日 東側1/3第1面完掘状況撮影、調査区周囲清掃。
- 12月26日 仕事納め。

平成 (2009) 年

- 1月5日 仕事始め。
- 1月6日 第1包含層人力掘削、第1面遺構掘削継続。

- 1月20日 長生小学校4年生27名現場見学。
- 1月26日 西側1/3機械掘削開始。
- 1月27日 西側1/3第1包含層掘削開始、第1面遺構検出開始。
- 1月29日 西側1/3第1面遺構検出状況撮影。
- 2月2日 西側1/3遺構掘削開始。
- 2月8日 現地説明会、110名参加。
- 2月17日 安全パトロール。
- 2月18日 第1面遺構完掘状況撮影(IV - 1区全面)。
- 2月23日 確認トレンチ掘削。
- 3月2日 埋戻し開始。
- 3月13日 実績報告書作成作業。
- 3月16日 撤収準備開始。
- 3月19日 埋戻し完了、現場作業完了。
- 3月24日 遺物搬出、現場撤収。
- 3月27日 地元挨拶。

平成 21 (2009) 年度調査

平成 21 (2009) 年

- 4月1日 辞令交付・調査準備。
- 4月10日 II - 13区機械掘削。
- 4月16日 II - 13区側溝掘削。
- 4月17日 II - 13区第1面遺構検出。
- 4月27日 II - 13区第1面遺構掘削。
- 5月8日 II - 13区東半部第1面検出状況撮影。
- 6月17日 I - 12区機械掘削。(～8月4日)



写真5 20年度現地説明会



写真6 21年台風9号による被害

6月24日 II-13区第1面完掘撮影準備。
6月26日 II-13区第1面完掘状況撮影。
6月29日 I-12区グリッド杭打設。
7月1日 I-12区第1面遺構検出、西側検出
状況撮影
7月3日 I-12区第1面遺構掘削。(～8月
28日)
7月9日 II-13区埋戻し開始。
7月13日 I-12区東側第1面遺構検出。
7月18日 現地説明会。
7月21～24日 遺跡体験見学会。
7月22日 現場安全衛生パトロール。
8月11日 盆期間外業停止の準備。
8月12日 盆期間外業停止。(～14日)
8月17日 I-13区機械掘削開始。
8月20日 I-13区第1面遺構検出。
8月25日 I-12区第1面完掘撮影準備。

8月26日 I-12区第1面完掘撮影。
I-13区第1面検出状況撮影。遺構
掘削。
グリッド杭打設。
9月8日 I-12区埋戻し。
9月14日 I-12区南端部機械掘削。第1面検
出、遺構掘削。(～10月5日)
9月25日 II-13区確認トレンチ掘削。
10月4日 I-13区第1面完掘撮影準備。
10月5日 I-13区第1面完掘撮影。
10月6日 台風18号対策。機材撤去。(～7日)
10月9日 撤収開始。
10月14日 I-12・13区確認トレンチ掘削。
10月21日 調査完了。
10月22日 地元挨拶。
10月27日 現場撤収完了。
10月28日 現場事務所撤去。(～30日)



写真7 21年度現地説明会



写真8 21年台風18号による被害

第Ⅲ章 調査成果

1. 基本層序 (第3図)

宮ノ本遺跡は、泉八幡神社前の参道を境に西側がⅠ地区、東側がⅡ地区で、東に約300m離れてⅢ地区が位置する。

今回の調査区は桑野川旧堤防および河川敷部分で、調査前の地盤高は3.8～3.9mを測る。遺構面はⅠ面のみで標高3.0m前後を測り、古墳時代～近世の遺構を検出した。Ⅰ地区はⅡ地区に比べて若干低い。Ⅱ地区は南に向けて下がる。第1遺構面のベース土は黒褐色～暗褐色粘質土で、上下の層と比較して際立って黒い(以下、黒色土と表記)。やや不安定な堆積で部分的に高低差があり、平面精査では島状に検出され、当初遺構埋土と誤認した。黒色土が沈み込む部分ではオリーブ褐色または暗灰黄色の砂質土・粘質土がベース土となる。今回、現河道に接して調査していることから、下層確認のトレンチを深く掘り下げることができなかった。前回の調査成果によると、標高2.0m付近で暗灰黄色～暗褐色のしまりが弱い細砂層となる。

「宮ノ本遺跡Ⅰ」では縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構面を確認したが、今回は第1面ベース土に若干の弥生土器を含むものの、トレンチ調査では本層直下で遺構は確認できなかった。遺構埋土は暗灰黄色・オリーブ褐色・にぶい黄褐色の砂質土・粘質土が主体である。

「宮ノ本遺跡Ⅰ」では、Ⅱ-3区で北西—南東方向に延びる幅30m超の流路を検出した。前回の報告では縄文時代晩期後葉～弥生時代中期初頭まで流路として存続し、中世には完全に埋没したものと考えた。本流路は桑野川または那賀川の支流が泉八幡神社の山塊に当たって南に方向を変え、流路より東側で微高地を形成し、4期に及ぶ生活面が営まれたものと考えられる。

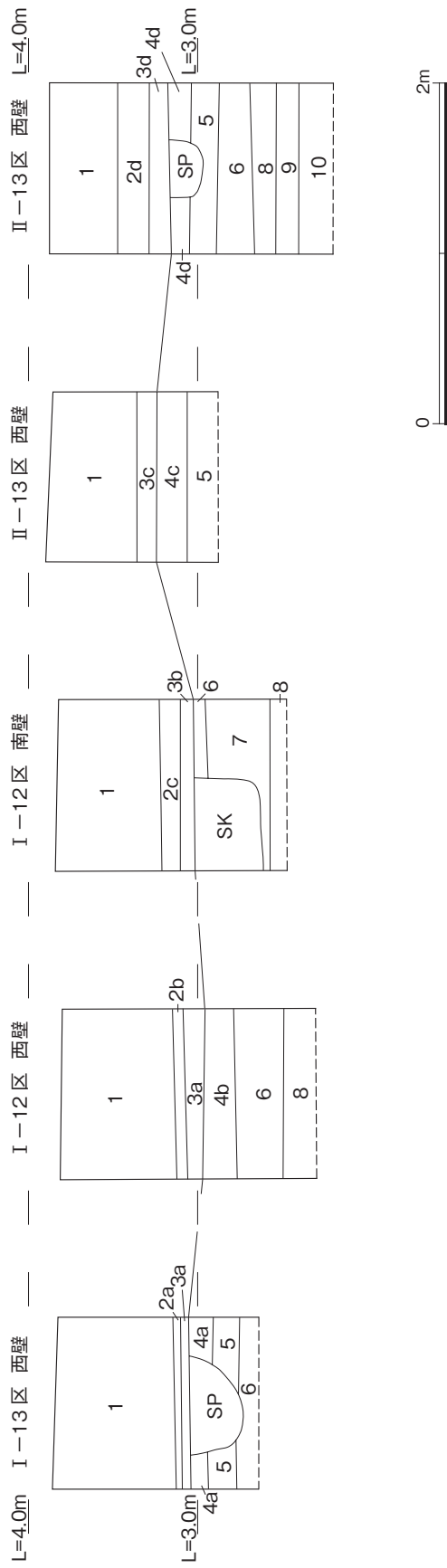
なお今回の調査によって、遺構面が南に拡大する様相を見せたことから、中世における桑野川の流れは現在と比較してきわめて小さいものであったか、もしくは泉八幡神社の北側を迂回していた可能性も考えられる。

2. 遺構と遺物

〈Ⅱ-12区 第1遺構面〉(第4図)

Ⅱ-12区(2008年度調査5区)は調査地東端に位置する、東西長約103m、南北幅約29mの調査区である。遺構面はⅠ面のみ検出。標高は2.2～3.3mで、北から南に傾斜し、南辺は近世以降の自然流路SR1001となって急激に落ち込む。

遺構数は、掘立柱建物(SA)17棟、土坑(SK)128基(うち土壙墓の可能性あるもの19基)、不明遺構(SX)2基、溝(SD)35条、小穴(SP)358基、流路(SR)1条で、中世が主体である。本調査区では南に行くほど地盤が低下し、遺構数が減る傾向にある。南北方向に走る溝は南端部で途切れているものがあることから、河川の氾濫などによる自然的要因あるいは人為的な要因によって削平を受けた可能性が考えられる。



- 1.【攪乱・盛土層】
オリープ黒色5Y3/2～にぶい黄色2.5Y6/4砂質土(しまり強)
- 2.【旧耕作土・床土層】
2a: 暗灰黄色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
2b: 灰黄色5Y5/1砂質土(しまり強)
炭化物片わずかに含む
2c: 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり強)
2d: 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性)
炭化物片わずかに含む
- 3.【第1包含層】
3a: 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり強・粘性弱)
炭化物片わずかに含む
3b: 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり強・粘性弱)
3c: 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
3d: 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり強・粘性弱)
- 4.【第1遺構面ベース土】
4a: オリープ褐色2.5Y4/4粘質土(しまり強・粘性弱)
4b: 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
4c: オリープ褐色2.5Y4/4粘質土(しまり強・粘性弱)
4d: オリープ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり強・粘性弱)
5. オリープ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)～粘質土(しまり強・粘性弱)
- 6.【第1遺構面ベース土】
黒褐色2.5Y3/2～オリープ黒色5Y3/2粘質土(しまり・粘性強)
※アップダウンが激しく不安定な土層のため遺構面ベース土は部分的
7. 灰オリープ色7.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)
※グライ化する
8. オリープ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)～粘質土(しまり強・粘性弱)
9. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
10. オリープ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)

第3図 調査区土層堆積状況図



第4图 II-12区 第1遺構面 遺構配置図

掘立柱建物 37 号 (Ⅱ地区 SA1037) (第5図)

Ⅱ-11・12区東部北端、1・m1・2グリッドに位置する。東西3間(5.5m)南北2間(3.6m)床面積19.8㎡、9基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN90°WEを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径34～61cm、深度10～50cmを測る。EP1で柱痕を確認。

遺物はEP1～6・8・9でみられ、黒色土器B類椀、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・捏鉢・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器甕、瓦器片・椀・皿、青磁鉢か、壁土、砂岩製砥石か・被熱砂岩礫、が出土している。

1はEP9の埋土第1層で出土した遺物で、東播系須恵質土器甕の上部である。口縁は大きく外反し、端部と口縁内側を強いヨコナデにより凹線状に作る。外面は平行タタキを施し、のち頸部にヨコナデを施す。体部内面は無文の当て具痕を残す。頸部内面は横位の板ナデを施すが、細かなハケ状を呈する。焼成不良により瓦質焼成気味で、内外面に炭素が付着する。12世紀代であろうか。

2はEP8の出土遺物で、砂岩製の砥石か。一部に弱い磨耗がみられるため砥石としたが、明瞭な擦痕や敲打痕は確認できない。図の上半部にわずかに炭素が付着しており、被熱の可能性はある。

前回整理時の出土遺物および主軸が正方位を向くことから中世末～近世初頭に下るものと考えたが、今回出土の遺物から12世紀代に遡り得ることも考えられる。

掘立柱建物 61 号 (Ⅱ地区 SA1061) (第6図)

Ⅱ-11・12区東部北端、k・119・20グリッドに位置する。東西2間(4.0m)南北2間(4.5m)床面積18.0㎡、8基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN12°Wを向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径28～50cm、深度6～47cmを測る。EP1で柱痕を確認。

遺物はEP1～8でみられ、土師器椀、黒色土器椀(A・B類)、須恵器片・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯(回転ヘラ切り)煮炊具・鍋、瓦器片・椀、鉄釘、が出土している。

3・4はEP7の出土遺物である。3は回転台成形の土師質土器杯上半部である。外面に煤付着。4は土師器椀である。非回転台成形としたが磨耗により不明瞭。ハ字状に開くしっかりとした高台をもつ。本体の高台貼り付け位置に沈線を施す。胎土は精良であるが、焼成不良のため軟質。

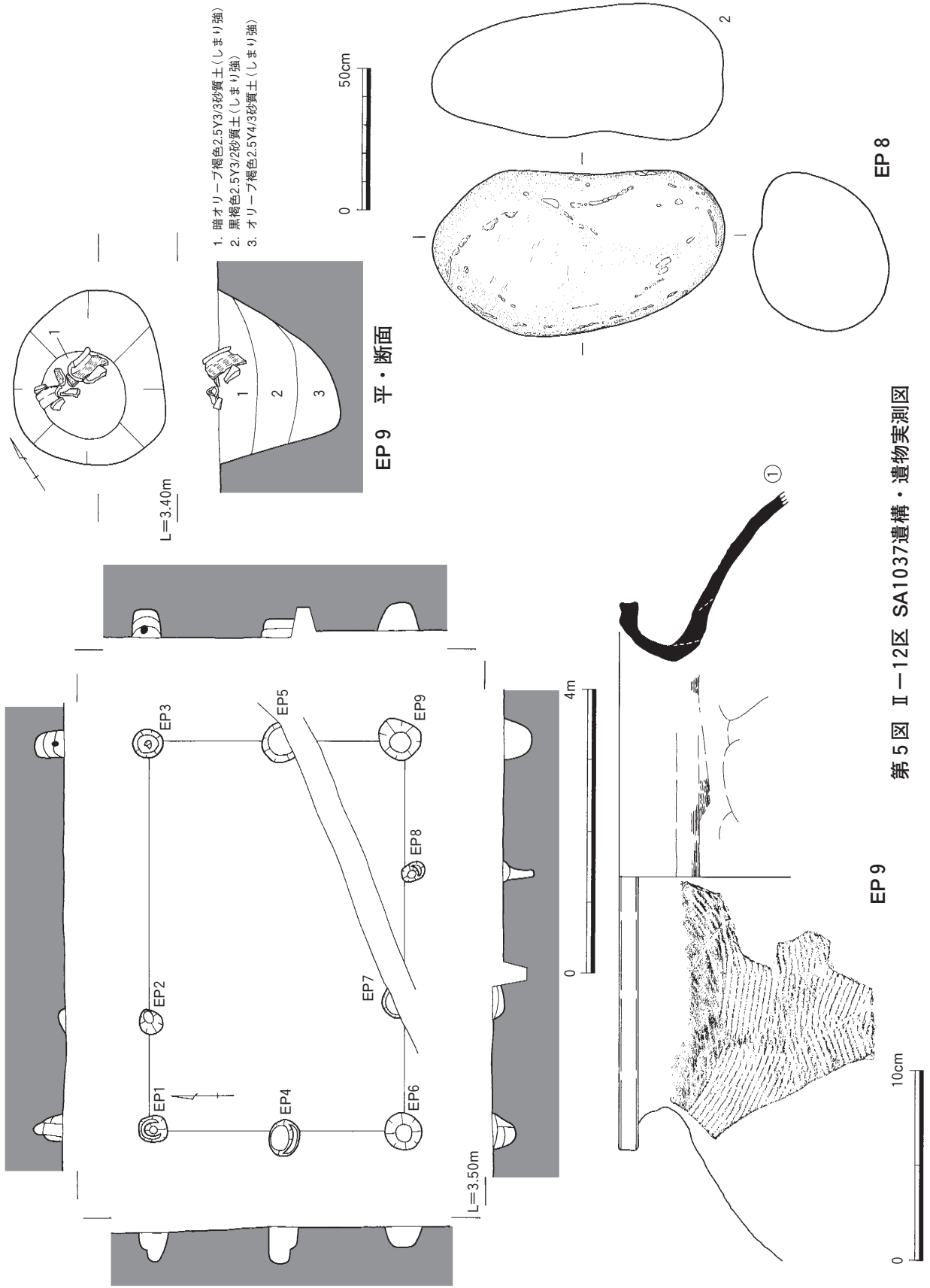
遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀代と考えられる。

掘立柱建物 62 号 (Ⅱ地区 SA1062) (第7・8図)

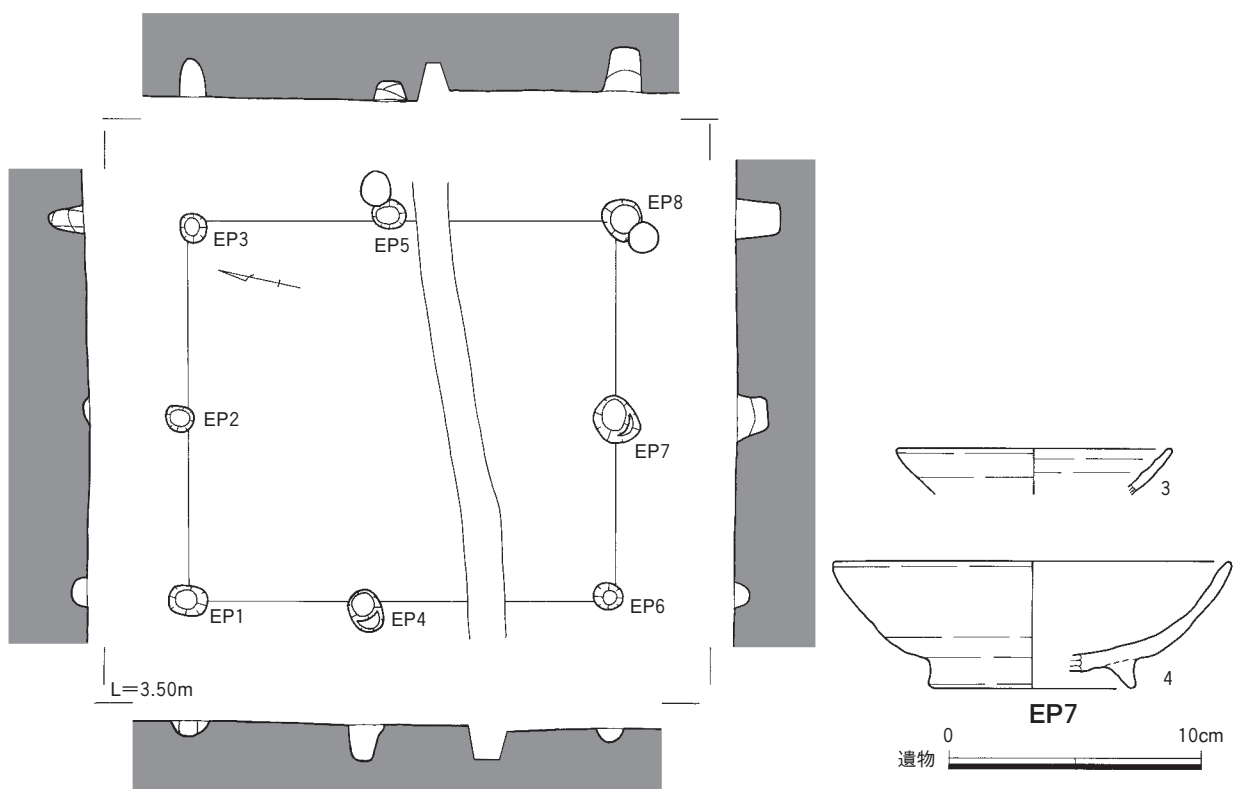
Ⅱ-12区東部北端、k・11・2グリッドに位置する。東西4間(6.8m)南北2間(2.9m)床面積19.7㎡(底部含めて南北3間(3.8m)25.8㎡)、15基の柱穴をもつ北庇付きの掘立柱建物で、建物主軸はN81°Eを向く。北東隅の柱穴を欠く。柱穴は概ね円形を呈し、径19～57cm、深度6～43cmを測る。

遺物はEP1～3・6・8～15でみられ、弥生土器片か・甕、土師器皿、黒色土器椀(A・B類)、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯・煮炊具・椀、瓦器片・椀・皿、須恵質土器捏鉢、中世陶器片、白磁碗、泥岩円礫(泥岩製基石か)・砂岩礫、が出土している。

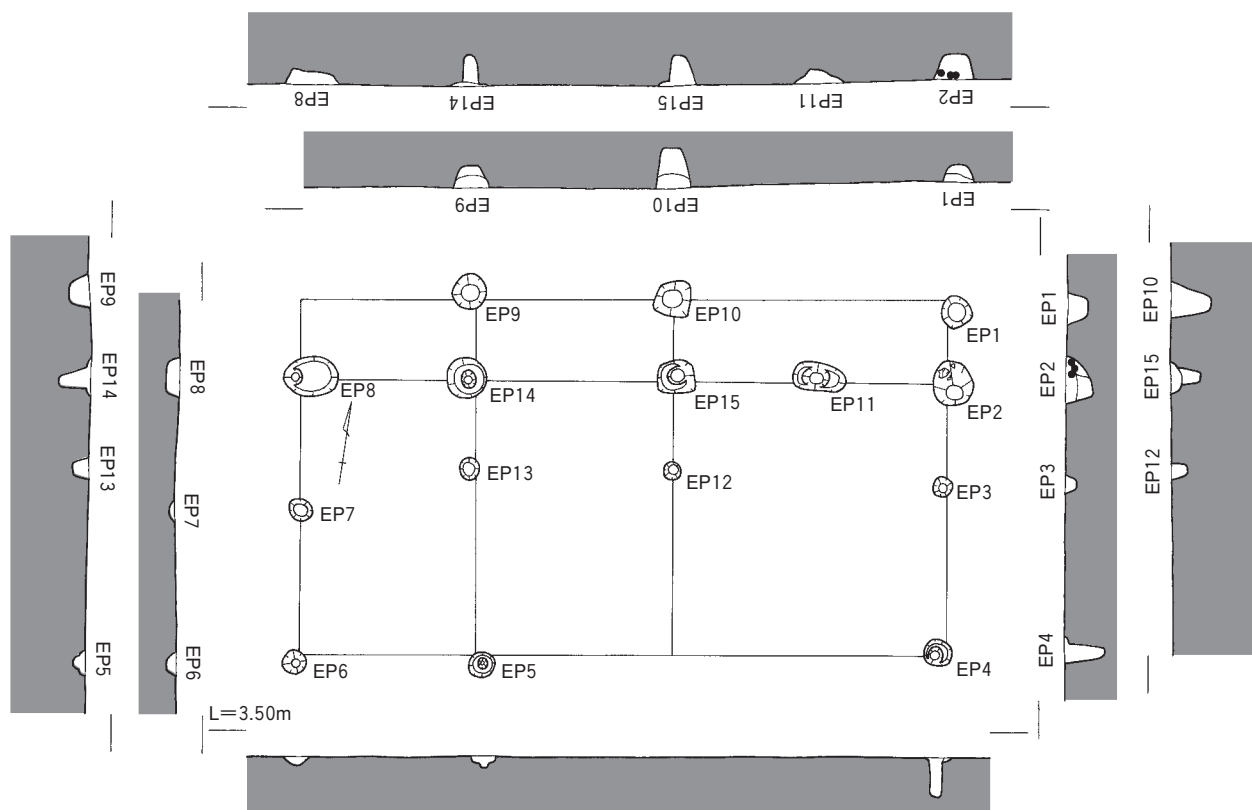
5～7はEP1の出土遺物で、すべて瓦器椀である。5は完形で、遺構底部中央で正位に埋置することから、柱抜き取り後の祭祀に伴って埋納されたものと考えられる。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、見込みには平行ヘラミガキ暗文とみられるが、全体的に磨耗しており調整不明瞭。底部外面に断面逆台形状の低い高台を貼り付ける。炭素吸着はやや不良で、軟質焼成である。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期



第5図 II-12区 SA1037遺構・遺物実測図



第6図 II-12区 SA1061遺構・遺物実測図



第7図 II-12区 SA1062遺構実測図

(12世紀末～13世紀初頭)とみられる。

6・7は上半部が残存。6は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。内外面とも炭素吸着は不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)に相当。7は口縁外面のヨコナデ幅が狭い。体部外面と破面で接合痕が確認でき、外面には顕著な亀裂となって現れる。内面のヘラミガキは粗いものの、口縁端部までヘラミガキを施している。胎土はやや粗い。外面にヘラミガキを施さないものの、法量が大きいため、和泉型瓦器碗Ⅱ-3期(12世紀後葉)頃とみられる。

8～14はEP2の出土遺物である。8は灰黒色の泥岩自然礫で、黒碁石の可能性はある。長径1.3cm厚さ0.5cmの扁平な楕円形を呈する。同様の円礫は四万十帯に由来する泥岩または粘板岩礫が流水や波浪によって風化・磨耗したもので、橘湾以南の河川河口や海岸で採取できることから人為的にもたらされたものと考えている。

9は瓦器皿である。磨耗気味のためヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好だが、やや軟質焼成。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。

10～14は瓦器碗。10・11は和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)に相当。10は小片のため復元径と傾きは不正確。内外面ともに横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。11は内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面やや不良、外面不良。

12～14は和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当する。12は内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。重焼により内面～体部外面上位は炭素吸着良好。13は内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良で軟質焼成。14は完形品。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。高台はやや幅広で、復元底径はやや過大であろう。炭素吸着はやや不良で軟質焼成。

15～17はEP9の出土遺物。15は土師質土器の皿で底部を欠く。口縁を強く外反させ、外面は強いヨコナデによって凹線状に作る。回転台成形としたが、非回転台成形の可能性も否定できない。「ての字状口縁」をもつ京都系土師皿Bタイプと近似した形状をもつが、口縁端部はつまみ上げない。16は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

17は土師質土器碗の下半部である。体部外面と内面に指頭圧痕を残し、底部外面に断面逆三角形の高台を貼り付ける。黄味を帯びた灰白色の色調を呈し、胎土に花崗岩を含む。吉備系土師質土器碗の山本編年Ⅲ-2期(13世紀前半)とみられる。

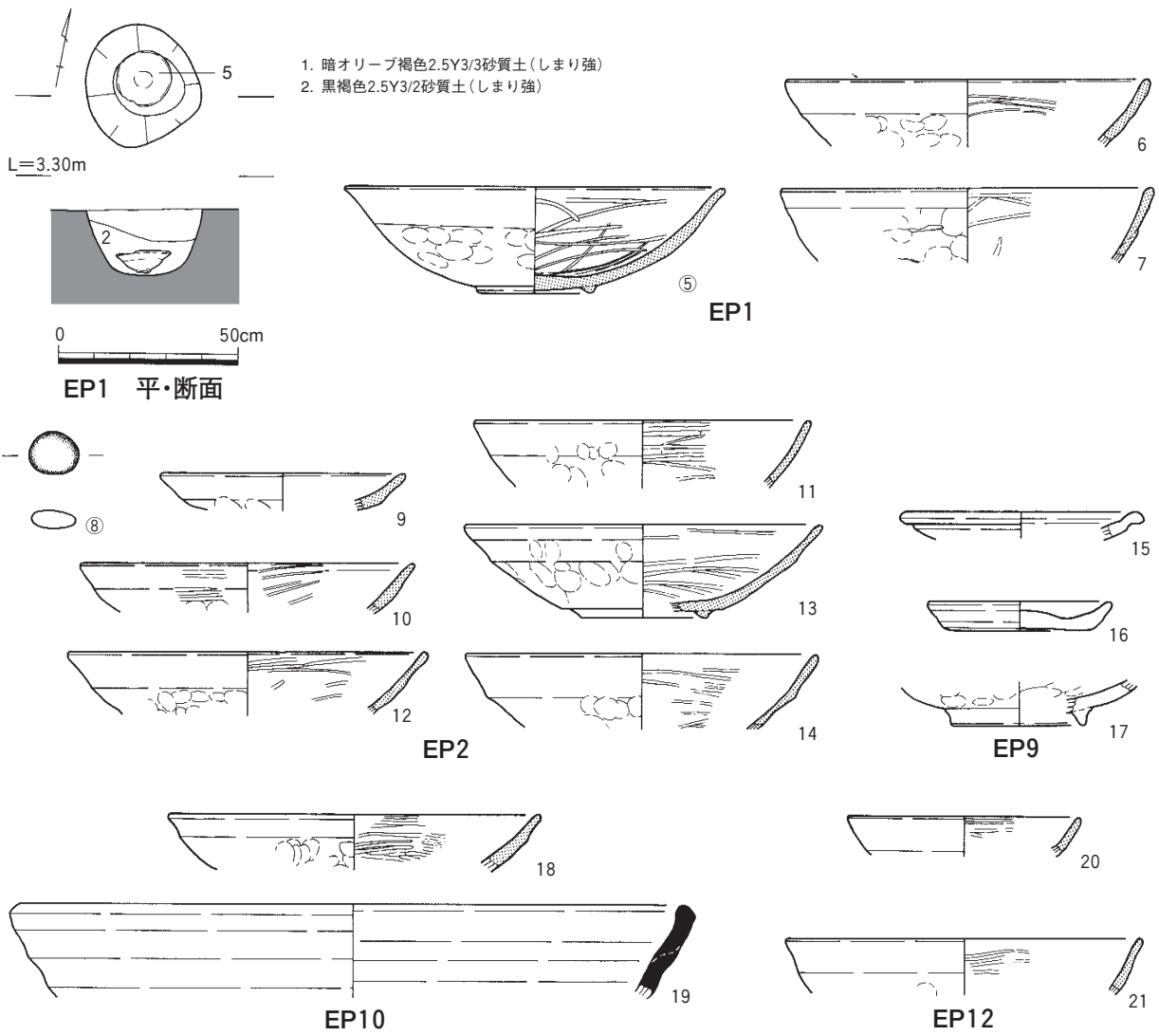
18～21はEP10の出土遺物。18は瓦器碗の上半部で、口縁は外面の強いヨコナデによって薄く作る。内面はやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-1期(12世紀後葉)前後とみられる。19は東播系の須恵質土器捏鉢である。口縁端部はわずかに内上方に肥厚する。口縁内外面に自然釉わずかに付着。森田編年第Ⅰ期第2段階(11世紀末～12世紀前半)に相当。

20・21はEP12の出土遺物。20は瓦器皿で、小片のため復元径は不正確。内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃とみられる。21は瓦器碗の上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、軟質焼成でやや磨耗気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-1期(12世紀後葉)とみられる。

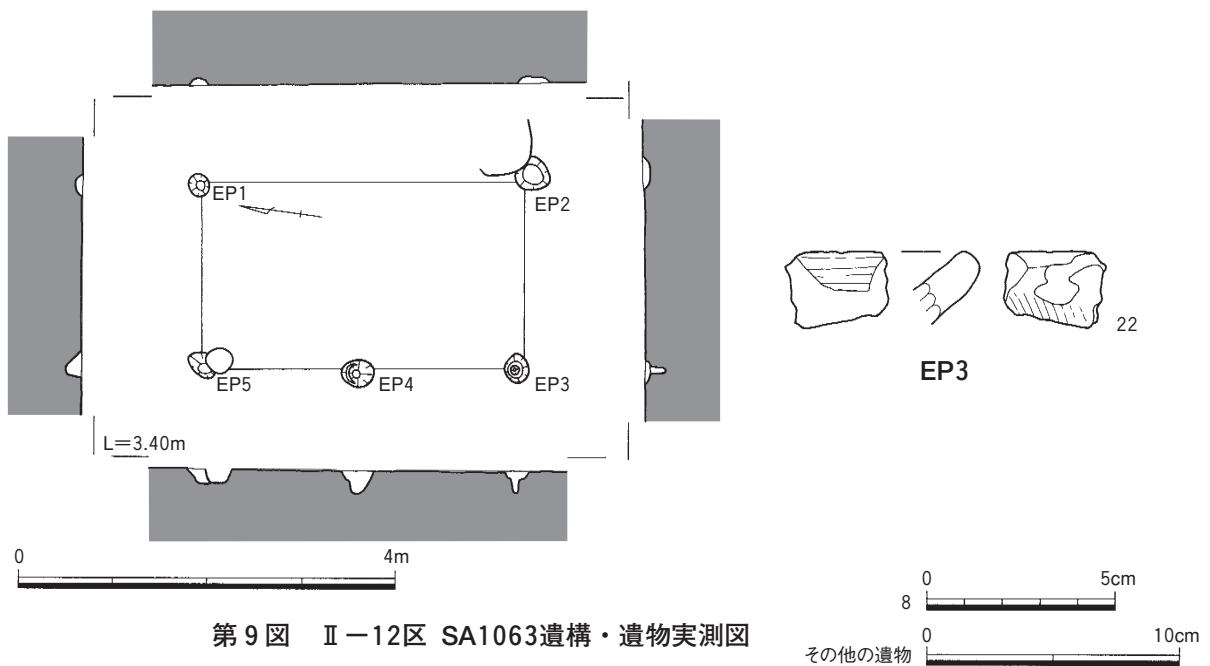
遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物63号(Ⅱ地区 SA1063)(第9図)

Ⅱ-12区東部北端、k・11・2グリッドに位置する。東西1間(20m)南北2間(34m)床面積



第8図 II-12区 SA1062遺構・遺物実測図



第9図 II-12区 SA1063遺構・遺物実測図

6.8㎡、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN8°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径24～36cm、深度7～24cmを測る。

遺物はEP3～5でみられ、黒色土器碗（A類）、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・鍋、砂岩製叩石、が出土している。22はEP3の出土遺物で、土師質土器鍋の口縁部である。1.4cmを測る厚い器壁をもち、端部は方形を意識して作る。内外面は粗いハケによって調整する。胎土は粗く花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸の産と考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀代と考えられる。

掘立柱建物 64号（Ⅱ地区 SA1064）（第10図）

Ⅱ-12区東部北側、k・12・3グリッドに位置する。東西2間（4.4m）南北1間（3.1m）床面積13.6㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN78°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径22～42cm、深度12～17cmを測る。

遺物はEP1・3・4でみられ、黒色土器碗（B類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器碗、が出土している。23はEP3の出土遺物で、瓦器碗の上半部である。口縁外面～内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成する。胎土は粗い。和泉型瓦器碗Ⅲ-1期（12世紀後葉）に相当する。

遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半頃と考えられる。

掘立柱建物 65号（Ⅱ地区 SA1065）（第11図）

Ⅱ-12区東部北側、j～18～20グリッドに位置する。東西4間（6.4m）南北2間（4.3m）床面積27.5㎡、11基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN66°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径26～56cm、深度9～41cmを測る。

遺物はEP1～11でみられ、土師器供膳具・鍋・碗、黒色土器片（A・B類）・碗（A類）、土師質土器片・供膳具（回転糸切りほか）・皿・杯・煮炊具・土錘、須恵質土器片、瓦器片・碗・皿、青磁碗、白磁碗、が出土している。

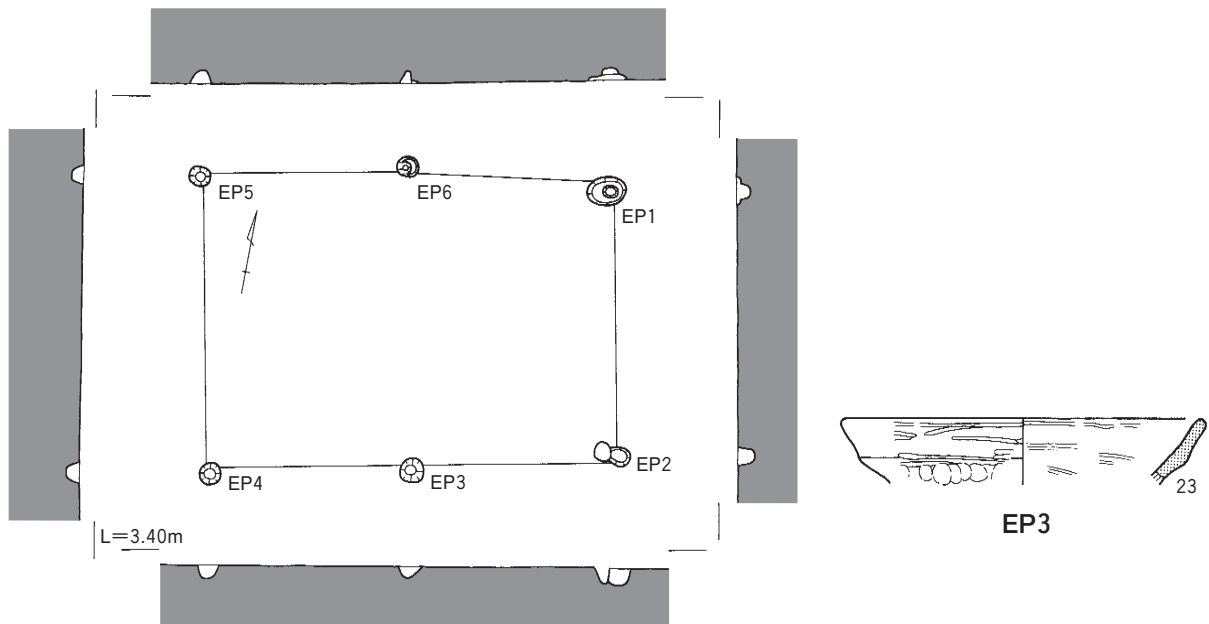
24～26はEP9の出土遺物である。24は土師質土器杯の底部。回転台成形で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが不明瞭。胎土に赤色斑粒が目立つ。25は瓦器碗の底部。断面逆台形状のしっかりとした高台をもつ。底部内面に幅広のヘラミガキを密に施す。炭素吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅱ-1～2期（12世紀前葉～中葉）とみられる。26は土師質管状土錘で、軟質焼成。

遺構の年代は、出土遺物から12世紀前半頃と考えられる。

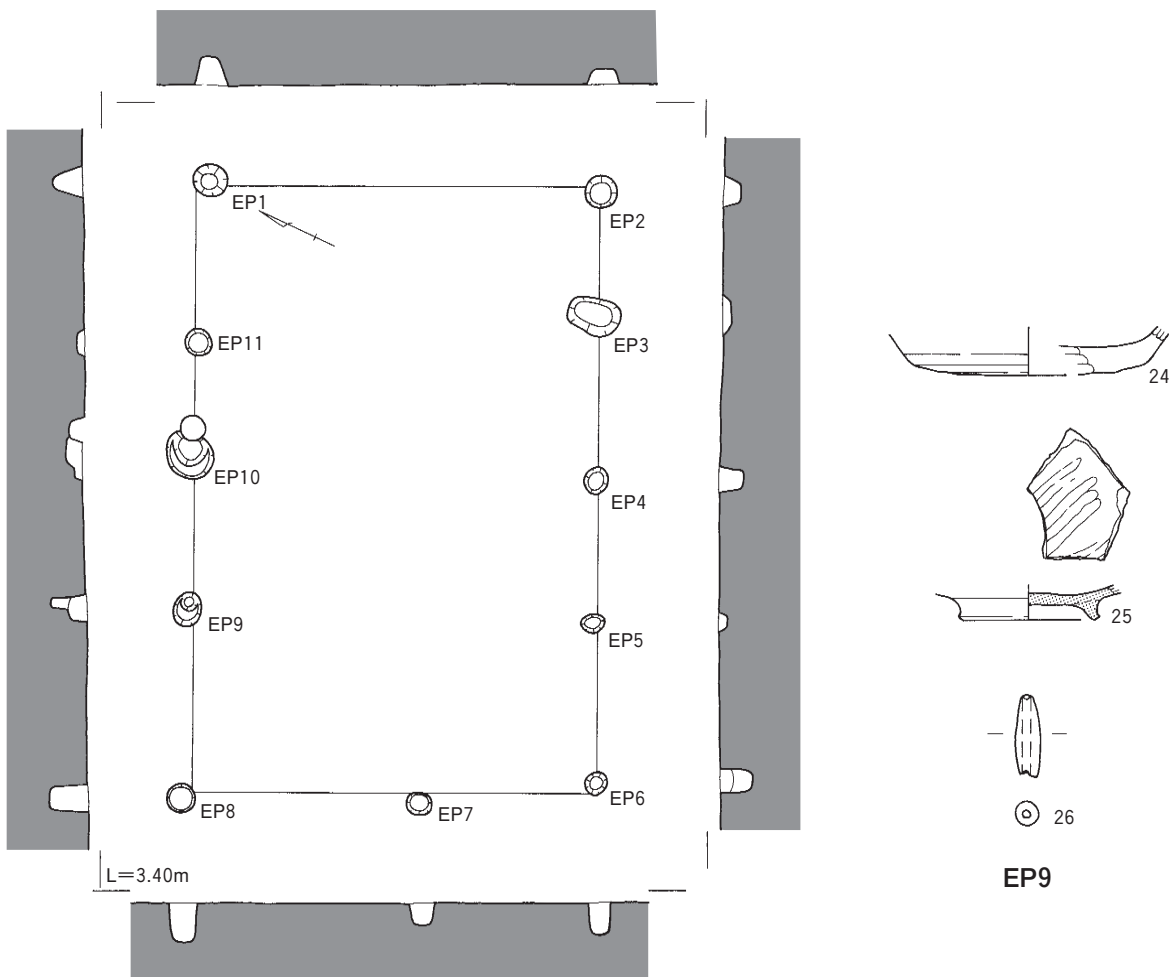
掘立柱建物 66号（Ⅱ地区 SA1066）（第12図）

Ⅱ-12区東部北側、j・k19・20グリッドに位置する。東西3間（4.7m）南北3間（4.5m）床面積21.1㎡、11基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN75°Eを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径26～69cm、深度8～40cmを測る。

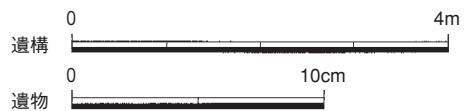
遺物はEP1～3・5～9・11でみられ、土師器供膳具、黒色土器片（B類）・碗（A・B類）、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切りほか）・杯（回転ヘラ切りほか）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器甕・碗、瓦器片・碗・皿、砂岩製砥石・片岩礫・チャート礫、が出土している。

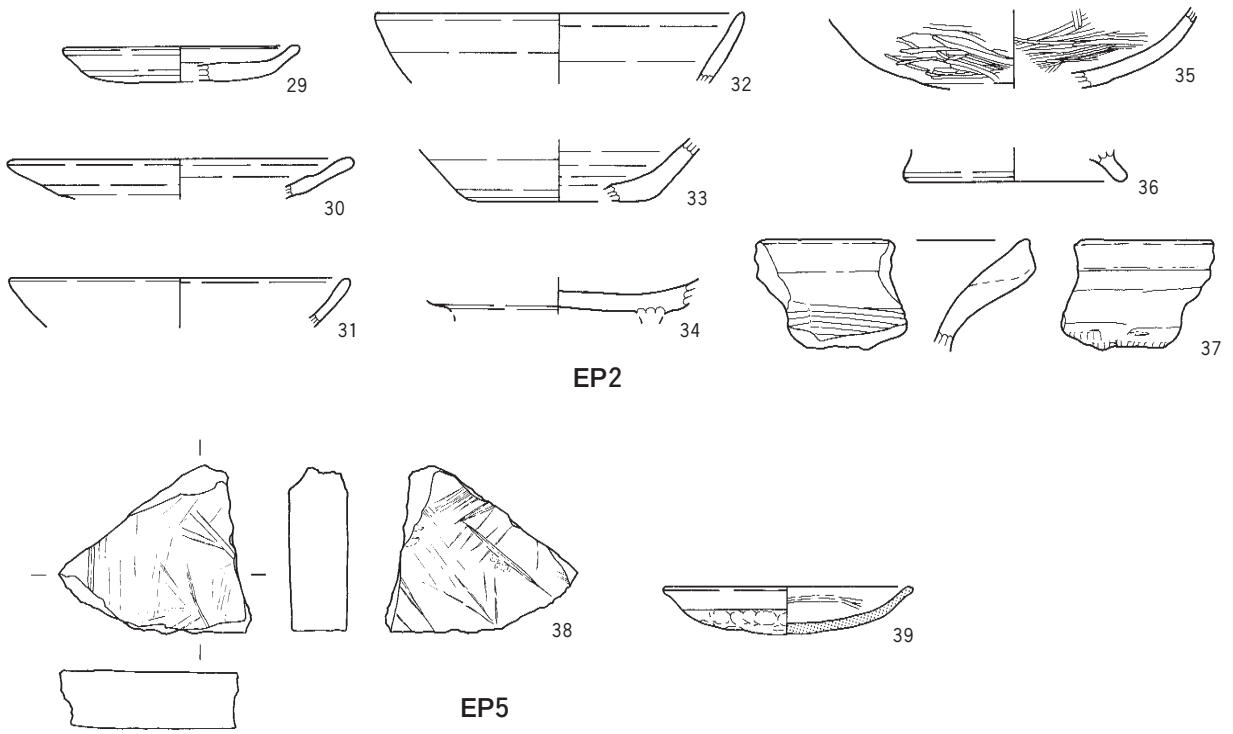
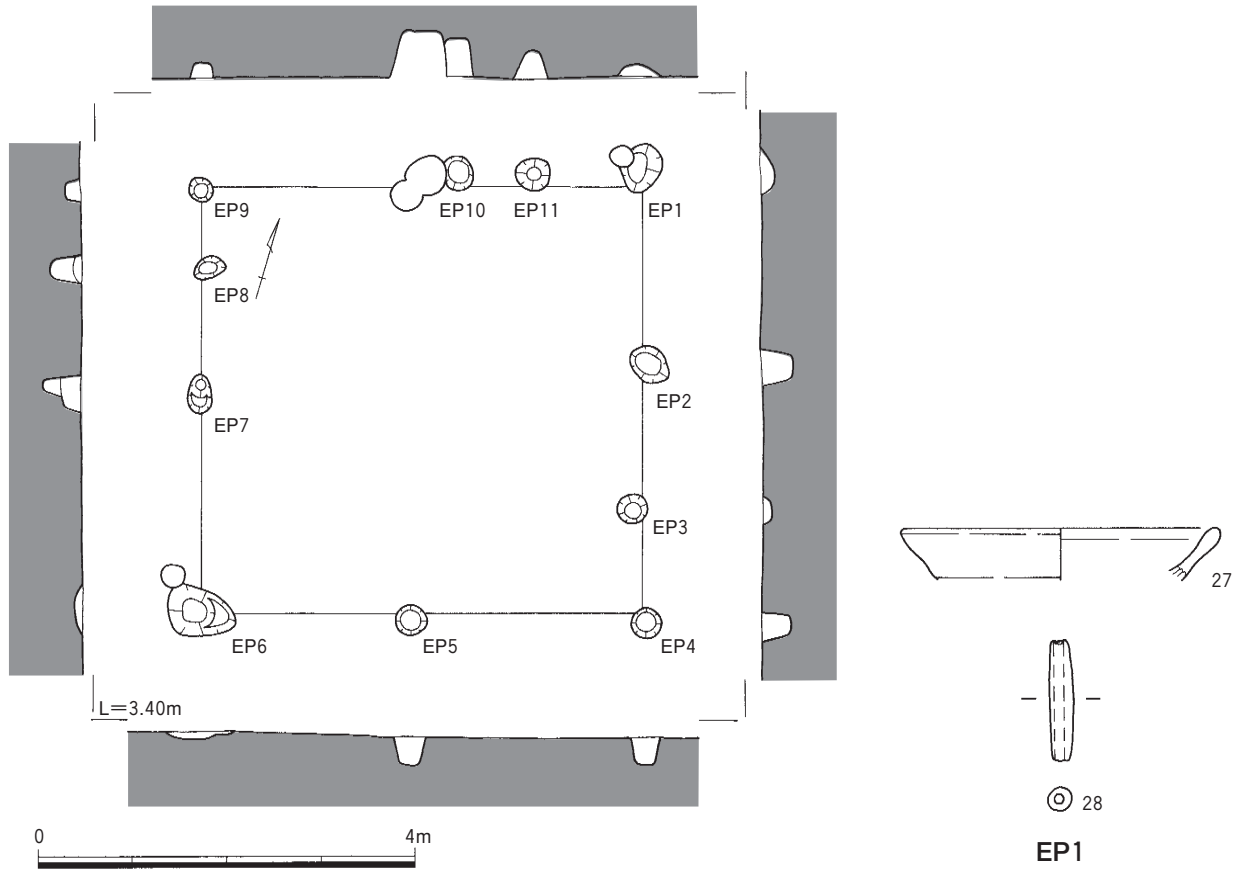


第10図 II-12区 SA1064遺構・遺物実測図



第11図 II-12区 SA1065遺構・遺物実測図





第12図 II-12区 SA1066遺構・遺物実測図



27・28はEP1の出土遺物である。27は回転台成形の土師質土器杯上半部。口縁をやや肥厚させる。28は土師質管状土錘。細身で、胎土にチャートを含む。

29～37はEP2の出土遺物である。29は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土にチャートと在地花崗岩を含む。30は回転台成形の土師質土器皿で底部を欠く。胎土に結晶片岩とチャートを含む。

31は土師質土器杯の上半部で、非回転台成形の可能性あり。32は回転台成形の土師質土器杯上半部。細粒を多く含み、器面がざらつく。33は土師質土器杯の下半部である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。34は土師質土器の高台付杯か皿の底部で、高台を欠く。回転台成形で、回転ヘラ切りのち高台を貼り付ける。胎土にチャートを含むほか、微細な石英粒が目立つ。焼成不良により磨耗著しい。

35は黒色土器B類碗の体部下半である。内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。36は黒色土器B類碗で、高台のみ本体から剥離したものである。剥離面には本体側に施した沈線が陽刻される。畳付に板目痕を残す。炭素吸着良好。

37は土師質土器鍋の口縁部。口縁は肥厚し、端部をわずかに外上方につまみ上げる。頸部内面ヨコハケ、外面はタテハケを施す。胎土に砂岩・泥岩・チャートのほか在地花崗岩とみられる粒子を含む。

38・39はEP5の出土遺物。38は板状の砂岩を用いた砥石で、表裏2面を砥面として使用。側面は欠損。39は瓦器皿で、比較的大きな口径と深みのある器形をもつ。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好。胎土はやや粗め。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃であろう。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀代とみられる。

掘立柱建物 67号 (Ⅱ地区 SA1067) (第13図)

Ⅱ-12区東部中央北寄り、j・k 20グリッドに位置する。東西1間(3.0m)南北2間(2.5m)床面積7.5㎡(底部含めて南北3間(3.1m)9.3㎡)、8基の柱穴をもつ北庇付きの側柱建物で、建物主軸はN85°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径20～36cm、深度5～38cmを測る。

遺物はEP1～3・5～8でみられ、土師器碗、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、瓦器片・碗、鉄釘、砂岩礫・チャート礫、が出土している。

40はEP1の出土遺物で、土師器碗の底部である。ハの字状に開く高台をもつ。器表面にわずかに炭素の付着がみられることから、黒色土器B類碗の可能性ある。

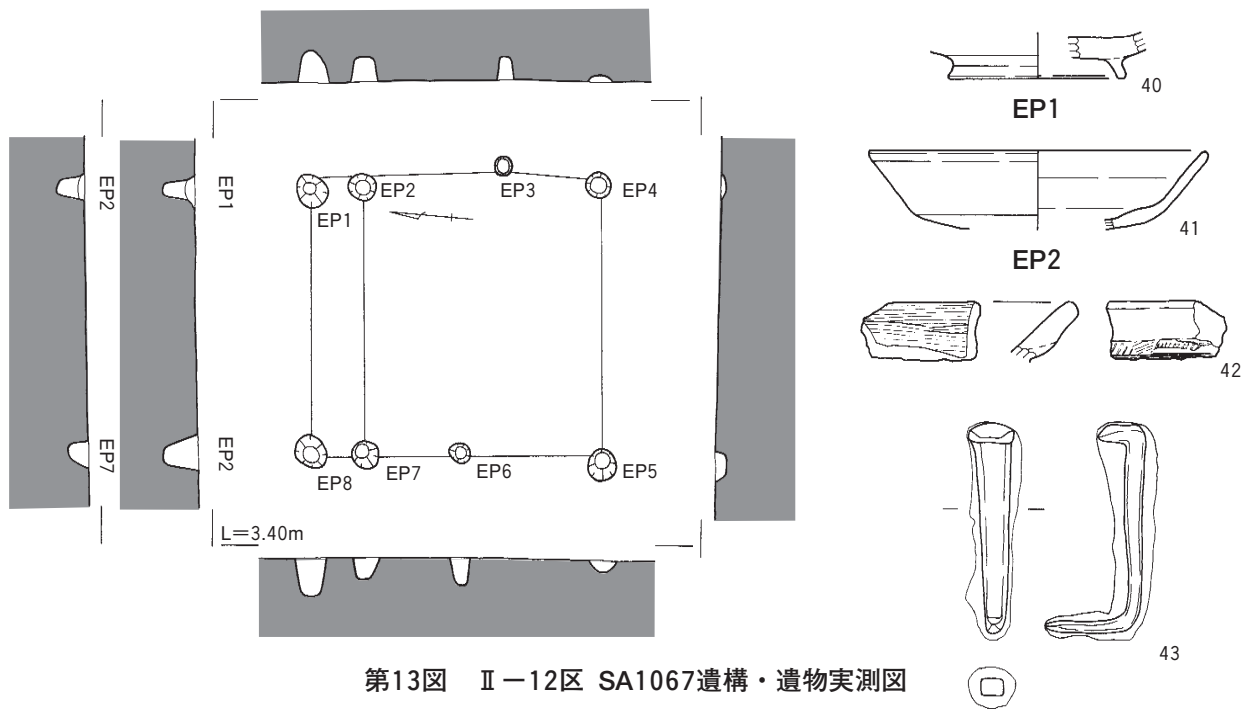
41はEP2の出土遺物で、土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土に0.5～2mm程度の結晶片岩を多く含むほか、絹雲母もみられる。

42・43はEP3の出土遺物である。42は土師質土器鍋の口縁部。内面ヨコハケ、頸部外面はタテハケのち横位の沈線2条を施す。胎土に砂岩・泥岩・チャートを含み、1～2mmの粒子を多く含む。43は完形の鉄釘。頭部をL字に屈曲させ平頭に作る。断面は長方形を呈する。下半部で直角に屈曲変形する。

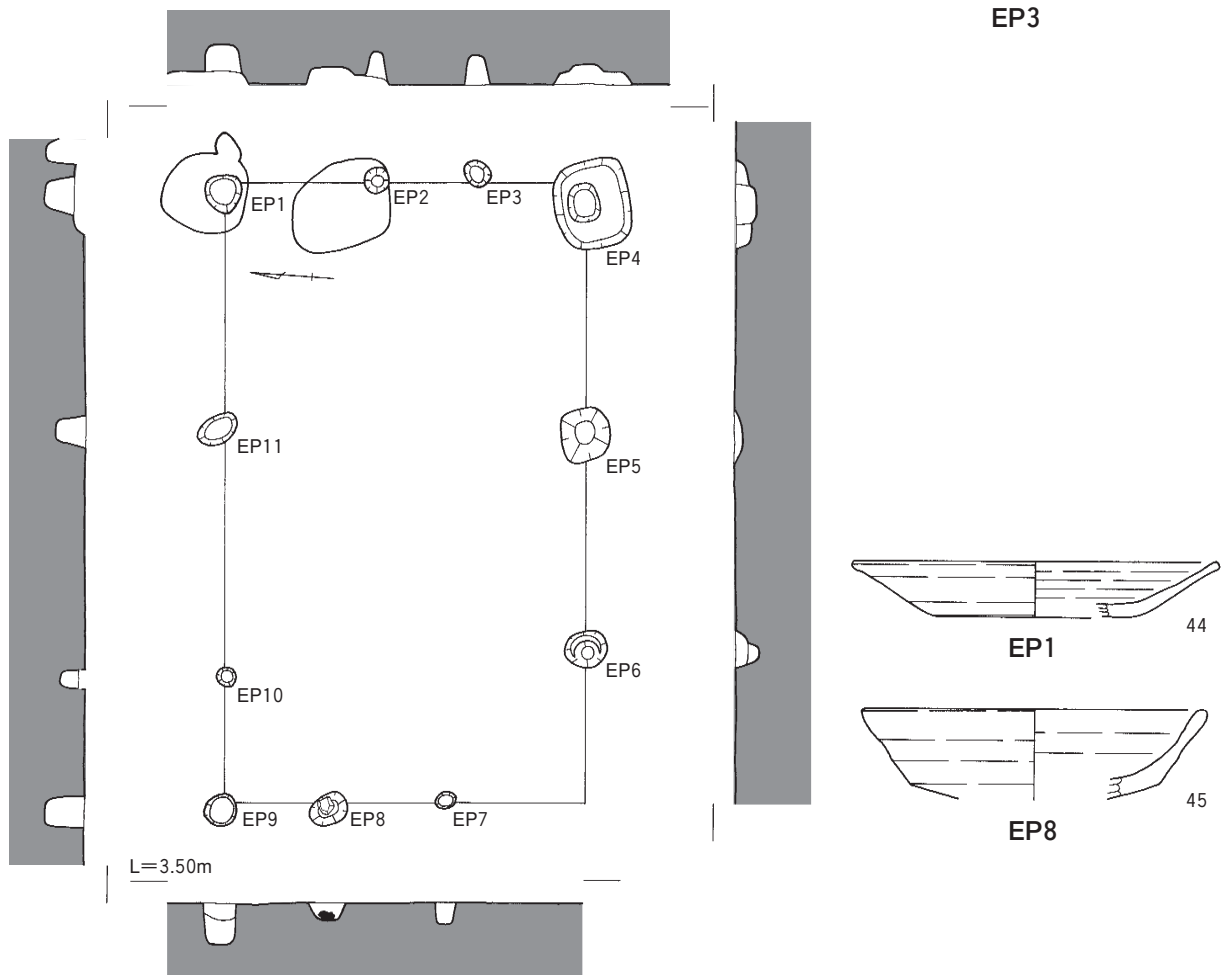
遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀代と考えられる。

掘立柱建物 68号 (Ⅱ地区 SA1068) (第14図)

Ⅱ-12区東部北側、j・k 18・19グリッドに位置する。東西3間(6.6m)南北3間(3.8m)床面積25.1㎡、11基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN86°Eを向く。南西隅の柱穴を欠く。柱穴は円



第13図 II-12区 SA1067遺構・遺物実測図



第14図 II-12区 SA1068遺構・遺物実測図

遺構 0 4m

0 5cm
43
0 10cm
その他の遺物

形または不整な隅丸方形を呈し、径 18～93cm、深度 9～43cmを測る。EP8 で根石を確認。

遺物は EP1～11 でみられ、土師器供膳具・椀、黒色土器片（A類）、須恵器壺か、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切り）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片、瓦器片・椀、被熱砂岩礫・砂岩礫、が出土している。

44 は EP1 の出土遺物で、土師質土器皿である。体部は外方に直線的に開き、低平な器形をもつ。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。

45 は EP8 の出土遺物で、回転台成形の土師質土器杯である。底部は平らでなくやや突出する。切り離し技法は不明。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀代とみられる。

掘立柱建物 69 号（Ⅱ地区 SA1069）（第 15 図）

Ⅱ-12 区東部中央、i・j 19 グリッドに位置する。東西 1 間（2.5 m）南北 2 間（4.4 m）床面積 11.0㎡、5 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N1° E を向く。柱穴は円形を呈し、径 21～35cm、深度 13～35cmを測る。

遺物は EP1～5 でみられ、弥生土器片、土師器高台付皿、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切りか、ほか）・杯・煮炊具・鍋、瓦器片、鉄製品片・鋤先、が出土している。

46・47 は EP2 の出土遺物である。46 は土師質土器皿である。回転台成形で、体部外面に回転ナデによる沈線状の擦痕を伴う。切り離し技法は不明。胎土にチャートを含む。47 は板状の鉄製品片。鋤先の端部であろうか。

遺構の年代は、出土遺物から 12 世紀代と考えられる。

掘立柱建物 70 号（Ⅱ地区 SA1070）（第 16 図）

Ⅱ-12 区中央部北側、i・j 16～18 グリッドに位置する。東西 3 間（8.7 m）南北 2 間（4.5 m）床面積 39.2㎡、8 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N84° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 19～45cm、深度 5～36cmを測る。EP1 で根石を確認。

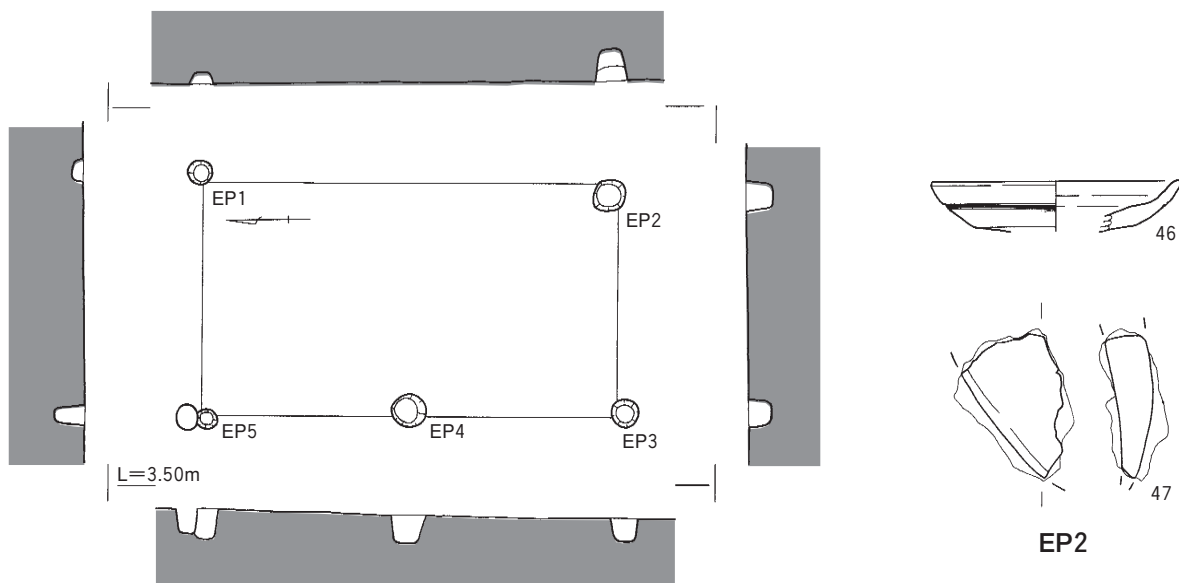
遺物は EP1～7 から、黒色土器片（B類）・椀（A類）、須恵器片、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器片・甕、瓦器片・椀、鑿、被熱砂岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。

48・49 は EP7 の出土遺物。48 は土師質土器鍋の上部。歪みにより傾きは不正確で、本来は体部が直立する可能性がある。全体的に粗雑な作りで、受け口状口縁をもつ山城型瓦質土器鍋の模倣品とみられるが、胎土や技法からみて在地産とはいえない。13 世紀代か。外面煤付着。49 は棒状の鉄製品で、鑿とみられる。断面方形で、先端部を尖らせる。

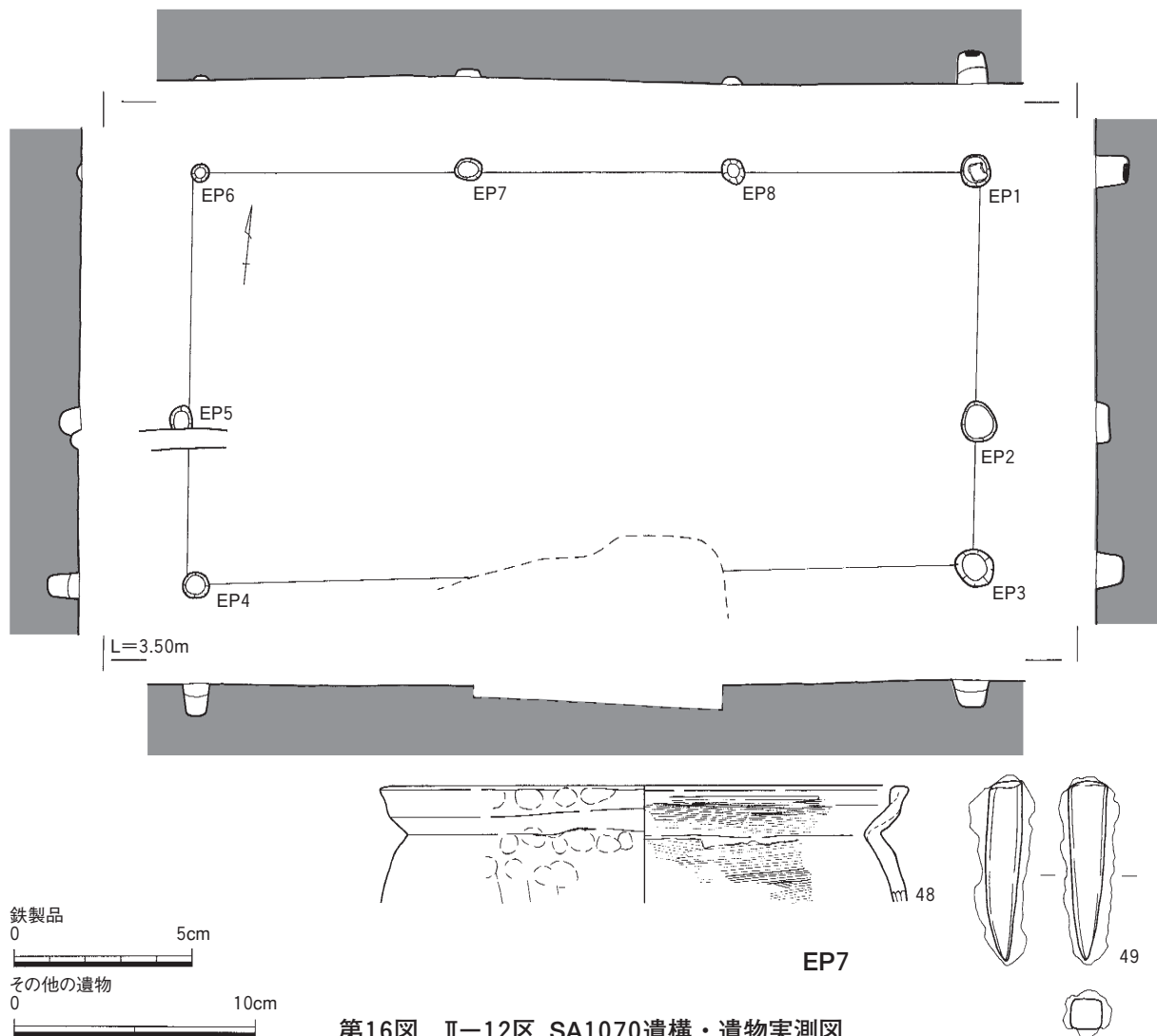
遺構の年代は、48 の時期から概ね 13 世紀代と考えられる。

掘立柱建物 71 号（Ⅱ地区 SA1071）（第 17 図）

Ⅱ-12 区中央部北側、i j 16・17 グリッドに位置する。東西 2 間（3.4 m）南北 2 間（2.8 m）床面積 9.5㎡、6 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N90° WE を向く。柱穴は円形を呈し、径 21～30cm、深度 14～36cmを測る。遺物は EP1～6 から、黒色土器片（A類）・椀（A類）、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切りほか）・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、が出土。



第15図 II-12区 SA1069遺構・遺物実測図



第16図 II-12区 SA1070遺構・遺物実測図

50はEP4第1層の出土遺物で、完形の土師質土器皿。埋土上位からほぼ正位で出土しており、柱抜き取り後の埋納とみられる。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成により調整不明瞭。図示していないが器形に歪みあり。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

掘立柱建物72号（Ⅱ地区 SA1072）（第18図）

Ⅱ-12区中央部、g・h 16・17グリッドに位置する。東西2間（4.6m）南北1間（3.9m）床面積17.9㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径23～33cm、深度18～49cmを測る。

遺物はEP1～6でみられ、黒色土器片（A類）、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切りほか）・杯・煮炊具・土錘、瓦器片・椀・皿、が出土。

51・52はEP3の出土遺物である。51は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。52は瓦器椀の上半部。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期（12世紀後葉）に相当。

掘立柱建物73号（Ⅱ地区 SA1073）（第19図）

Ⅱ-7・12区中央部北端、g・h 10・11グリッドに位置する。東西2間（4.9m）南北1間（3.5m）床面積17.2㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN85°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径22～44cm、深度11～45cmを測る。EP5・6で柱痕を確認。

遺物はEP2～6でみられ、弥生土器片、黒色土器椀（B類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具（格子タタキ）、瓦器片・椀、が出土している。

53・54はEP3の出土遺物とともに瓦器椀である。53は上半部である。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。54は底部を欠く。口縁端部を含め内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で、外面に重焼痕が確認できる。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられる。

遺構の年代は、出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

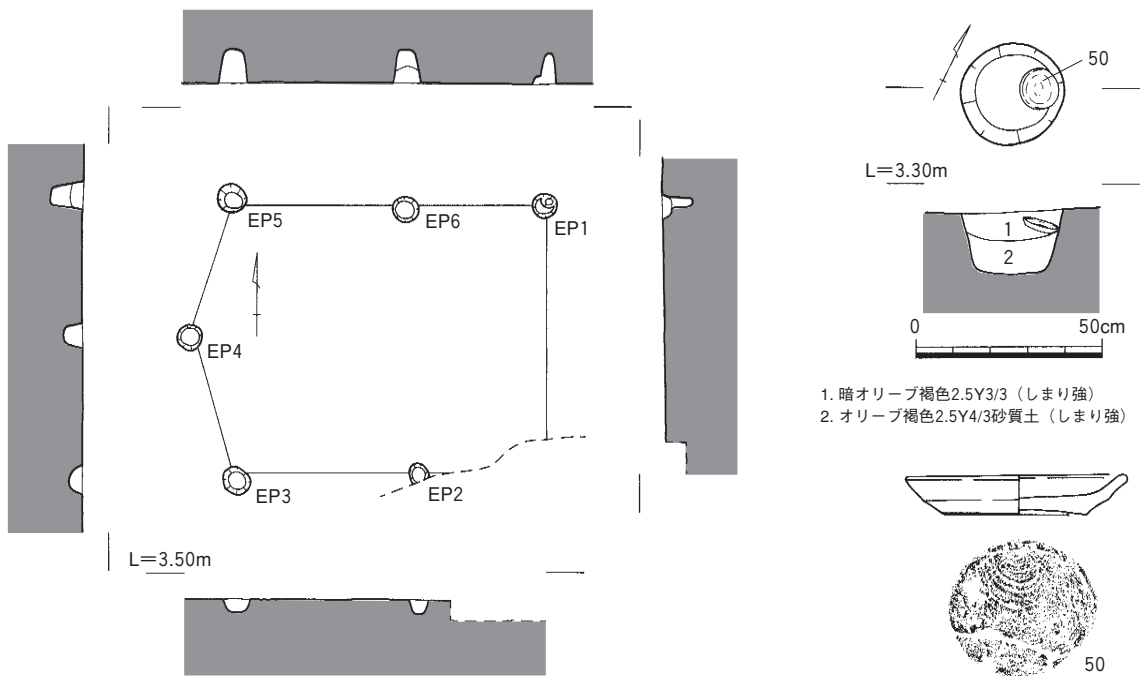
掘立柱建物74号（Ⅱ地区 SA1074）（第20図）

Ⅱ-12区西端部北側、d 5・6グリッドに位置する。東西1間（2.5m）南北2間（3.3m）床面積8.3㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN7°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径23～44cm、深度10～33cmを測る。

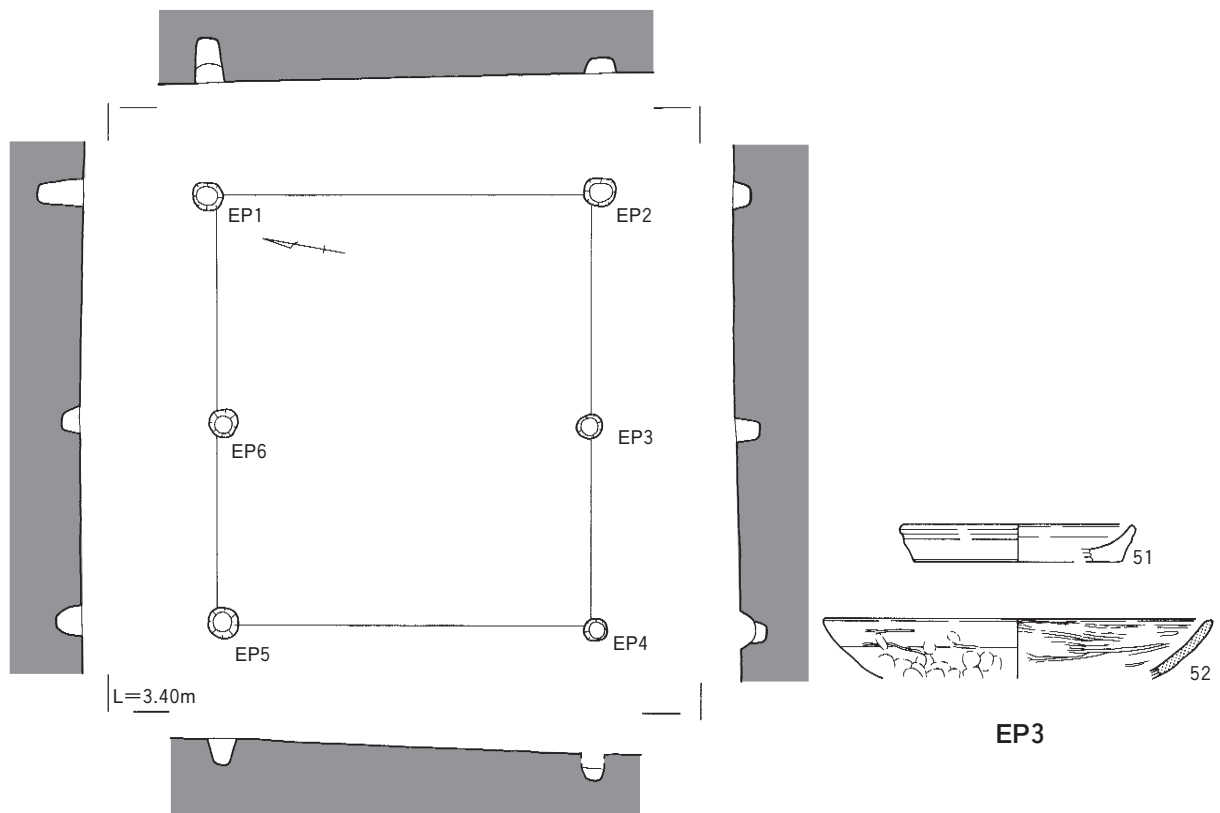
遺物はEP1・5でみられ、土師質土器片・供膳具、が出土しているが実測可能な遺物はない。遺構の年代について根拠となる遺物の出土に乏しいが、主軸方位が土壙墓SK1097などと近似することから、概ね13世紀代頃とみられる。

掘立柱建物75号（Ⅱ地区 SA1075）（第21図）

Ⅱ-12区西端部北側、d 5・6グリッドに位置する。東西2間（4.2m）南北2間（3.3m）床面積13.9㎡、7基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN88°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径29～45cm、深

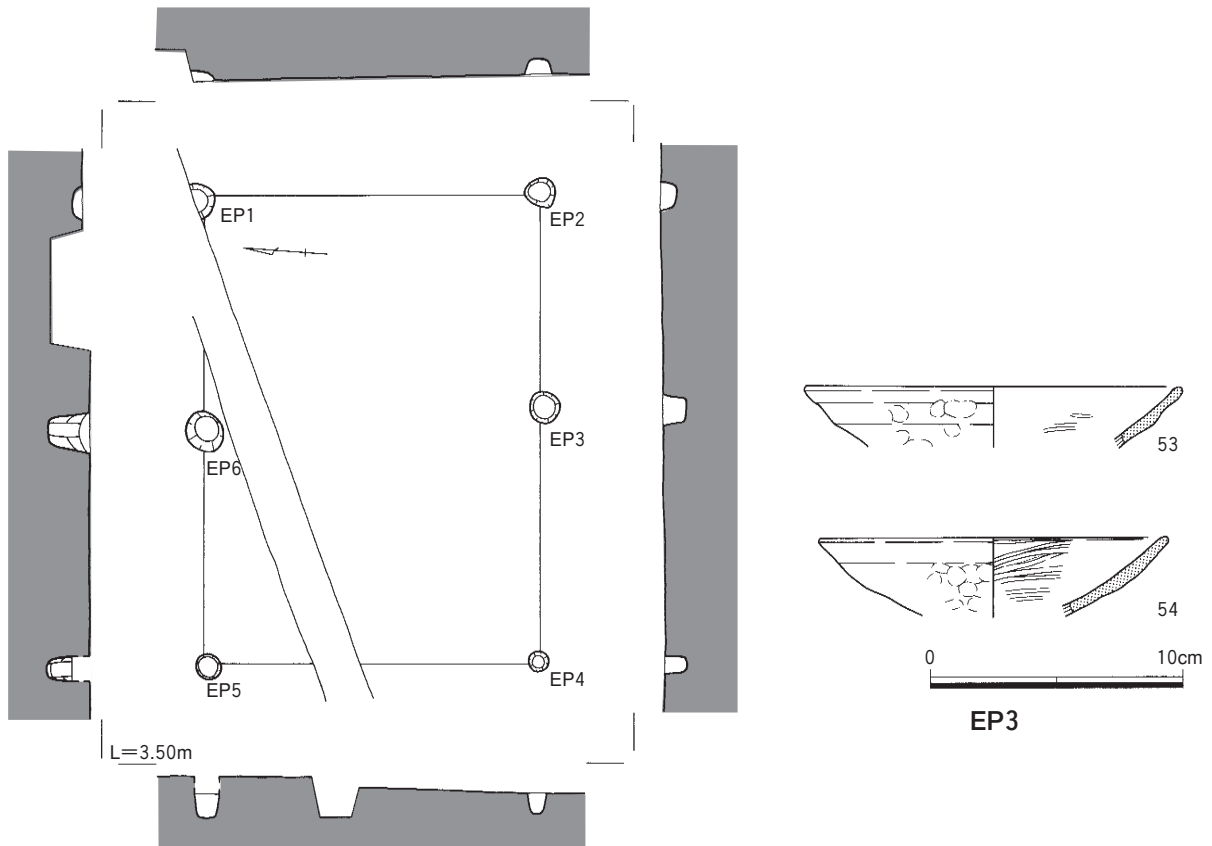


第17図 II-12区 SA1071遺構・遺物実測図

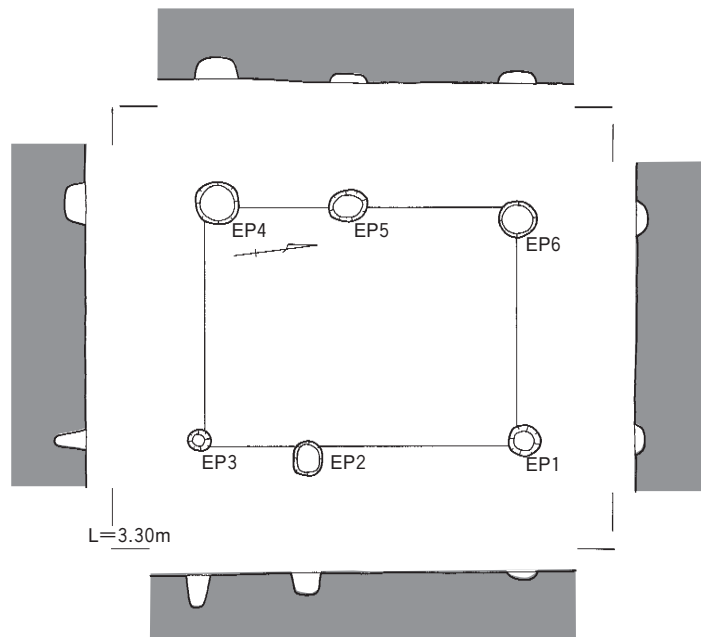


第18図 II-12区 SA1072遺構・遺物実測図



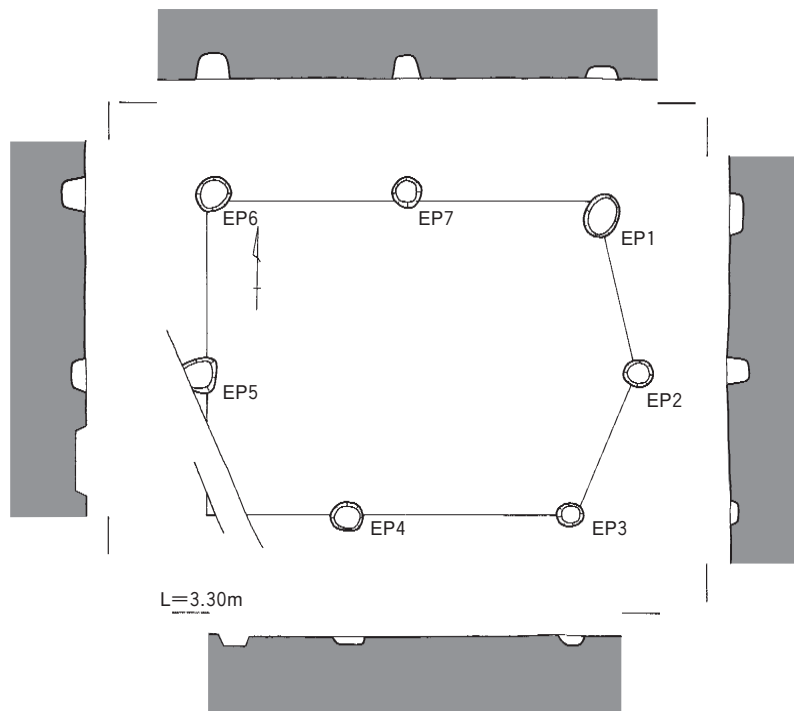


第19図 II-12区 SA1073遺構・遺物実測図

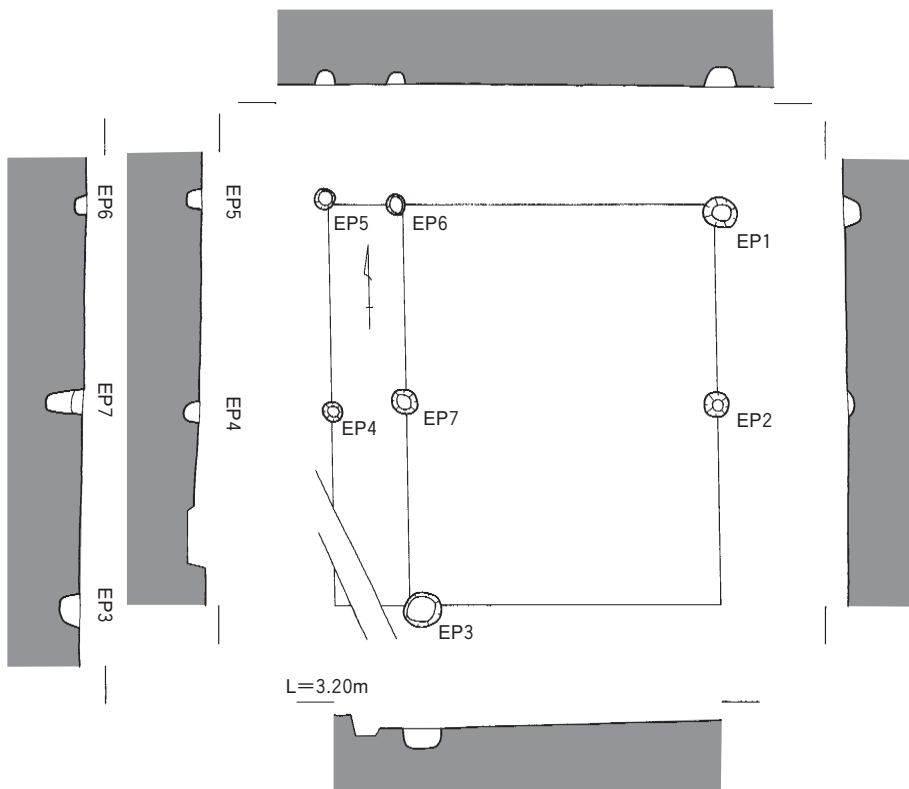


第20図 II-12区 SA1074遺構実測図





第21図 II-12区 SA1075遺構実測図



第22図 II-12区 SA1076遺構実測図



度8～25cmを測る。遺物はEP1・2・4・5でみられ、黒色土器片（A類か・B類）、土師質土器片・供膳具、瓦器片、が出土しているが実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀代とみられる。

掘立柱建物76号（Ⅱ地区 SA1076）（第22図）

Ⅱ-12区西端部中央北寄り、c5・6グリッドに位置する。東西1間（3.3m）南北2間（4.2m）床面積13.9㎡〈庇部含めて東西2間（4.1m）17.2㎡〉、7基の柱穴をもつ西庇付きの側柱建物で、建物主軸はN0°WEを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径19～47cm、深度7～40cmを測る。遺物はEP2～6でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、が出土しているが実測可能な遺物はない。遺構の年代について根拠となる遺物の出土に乏しいが、主軸方位から中世末～近世初頭の可能性がある。

土坑1002号（Ⅱ地区 SK11002）（第23図）

Ⅱ-12区東端部北側、13グリッドに位置する。長軸82cm短軸78cm深度32cmを測る円形の土坑である。断面は不整な椀形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、弥生土器片か、土師器椀、土師質土器供膳具・杯・煮炊具、瓦器片・椀、椀形滓・鉄製品片、砂岩製叩石・チャート礫、が出土。

55は瓦器椀の上部片である。内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面～口縁内面が良好、体部内面は不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

土坑1004号（Ⅱ地区 SK11004）（第24図）

Ⅱ-12区東端部中央、k4グリッドに位置する。長軸93cm短軸89cm深度6cmを測る円形の土坑である。断面は浅い皿形で、埋土は1層である。遺物は、土師器甕、黒色土器片（B類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・皿、チャート片、が出土している。

56は瓦器皿である。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。軟質焼成気味。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。

土坑1005号（Ⅱ地区 SK11005）（第25図）

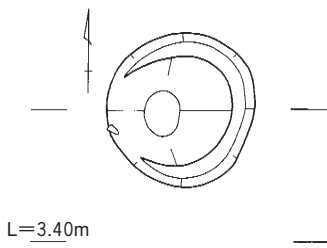
Ⅱ-12区東端部中央南寄り、k4グリッドに位置する。長軸94cm短軸93cm深度5cmを測る不整形の土坑である。断面は浅い皿状で、埋土は1層。遺物は、弥生土器片、土師質土器皿、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片、砂岩礫、が出土している。

57は土師質土器皿である。体部の立ち上がりはほとんどなく、平らなコースター形を呈する。回転台成形としたが、非回転台成形かもしれない。口縁端部を上方につまみ上げる「ての字状口縁」ではないが、京都系土師皿Bタイプの模倣品の可能性がある。12世紀代か。

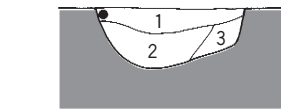
土坑1007号（Ⅱ地区 SK11007）（第26図）

Ⅱ-12区東部北側、13グリッドに位置する。東側をSD1079に切られる。長軸69cm短軸残存長36cm深度38cmを測る不整円形の土坑である。断面はU字状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、弥生土器片か、土師器椀・竈、土師質土器供膳具・皿・杯・煮炊具、瓦器片・椀、鉄製品片、桃種子、が出土。

58は土師器竈の裾部とみられる。外面にタテハケを施す。胎土は粗く、花崗岩を含む。



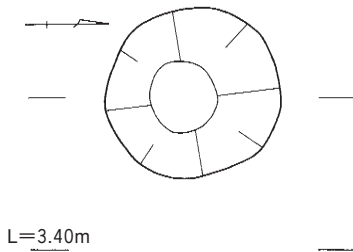
L=3.40m



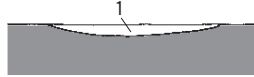
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
2. 黒褐色2.5Y3/2砂質土(しまり強)
3. 黒褐色2.5Y3/1砂質土(しまり強)



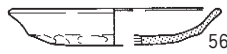
第23図 II-12区 SK11002
遺構・遺物実測図



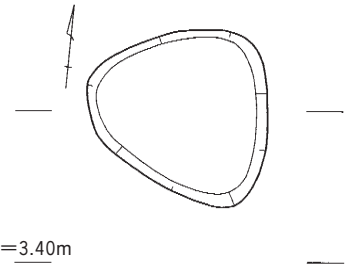
L=3.40m



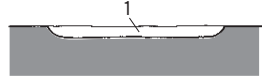
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



第24図 II-12区 SK11004
遺構・遺物実測図



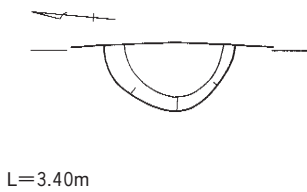
L=3.40m



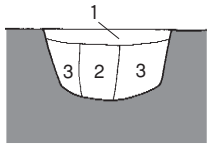
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



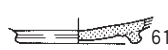
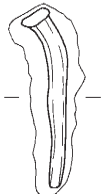
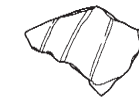
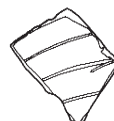
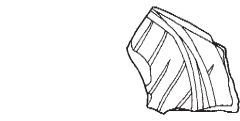
第25図 II-12区 SK11005
遺構・遺物実測図



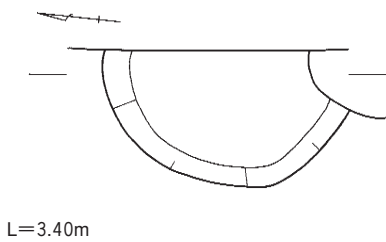
L=3.40m



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
2. 黒褐色2.5Y3/2砂質土(しまり強)
3. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



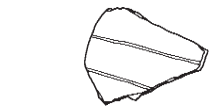
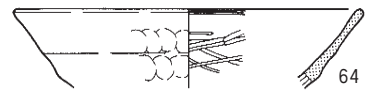
第26図 II-12区 SK11007遺構・遺物実測図



L=3.40m



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



第27図 II-12区 SK11008遺構・遺物実測図

59～62は瓦器椀。59は上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で、軟質焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）と考えられる。60は下半部。高台断面は逆台形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキ、底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－1期（12世紀後葉）前後とみられる。

61・62は底部。61は外方に開く断面逆台形状の高台をもつ。内面に平行ヘラミガキ暗文。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）前後と考えられる。62は幅広の低い高台をもつ。底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はみられず酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）頃とみられる。

63は鉄釘で、頂部を叩いて平頭に作る。上部でくの字に屈曲する。

土坑 1008号（Ⅱ地区 SK11008）（第27図）

Ⅱ－12区東部北側、m・13グリッドに位置する。東側をSD1079に切られ、南側はSK11007に切られる。長軸残存長101cm短軸残存長72cm深度13cmを測る不整円形の土坑。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。遺物は、黒色土器椀（B類）、須恵器貯蔵具・壺、土師質土器供膳具・杯・鍋・煮炊具・土錘、瓦器椀・皿、白磁碗、銭貨・鉄滓・鉄製品片、が出土している。

64は瓦器椀の上半部。口縁～体部内面に横位のヘラミガキを施し、体部は粗い。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。65は瓦器椀の底部。高台は細い粘土紐を貼り付けきわめて低平に作る。粘土紐の余り部分を外方に向けて引きちぎったのち不整形。内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着やや不良で軟質焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）頃とみられる。

66は土師質土器鍋の口縁部。小片のため復元径は不正確。端部を方形に作る。外面に煤付着。胎土は粗く、金雲母と花崗岩粒を含むことから、瀬戸内沿岸産と考えられる。

67は銅銭で、面左下部のみ残存。銭文は篆書体で「元寶」と読めることから、北宋銭であろう。

土坑 1009号（Ⅱ地区 SK11009）（第28図）

Ⅱ－12区東部北側、m3グリッドに位置する。南東をSK11008に切られる。長軸61cm短軸56cm深度13cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器椀、が出土。

68・69は瓦器椀で同一個体の可能性あり。68は底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着なく酸化炎焼成する。69は底部である。高台断面は低い逆台形状を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着なく酸化炎焼成気味。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

土坑 1012号（Ⅱ地区 SK11012）（第29図）

Ⅱ－12区東部北側、13グリッドに位置する。長軸134cm短軸89cm深度14cmを測る不整な楕円形の土坑である。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。遺物は、土師器煮炊具・椀、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具、瓦器片・椀・皿、が出土している。

70は瓦器皿。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良で、軟質焼成気味。和泉型瓦器Ⅲ期頃に位置付けられる。

71・72は瓦器椀の上半部。71は小片のため復元径やや過小か。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面

に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）頃に相当。72は歪みのため復元径は過大とみられる。口縁は強いヨコナデによりやや端反る。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で、軟質焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

土坑 1013号（Ⅱ地区 SK11013）（第30図）

Ⅱ－12区東部中央北寄り、k 3グリッドに位置する。長軸81cm短軸78cm深度10cmを測る不整円形の土坑である。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯（回転ヘラ切りほか）・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗、被熱砂岩礫、が出土している。

73は土師質土器杯の下半部。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、体部外面に回転ナデによる稜が顕著。胎土に石灰岩とみられる軟質の白色粒を含む。

74は瓦器碗の上部。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。75は瓦器碗の上半部である。小片のため傾きと復元径は不正確。外面にやや粗い横位のヘラミガキ、内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好、外面不良で、軟質焼成気味。いずれも和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）とみられる。

土坑 1019号（Ⅱ地区 SK11019）（第31図）

Ⅱ－12区東部中央南寄り、j 2グリッドに位置する。長軸86cm短軸80cm深度21cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、弥生土器片か、土師器供膳具・甕か、黒色土器片（B類）、須恵器貯蔵具・甕、土師質土器供膳具・皿・杯・煮炊具、瓦器片・碗、鉄製鑿、が出土している。

76は棒状の鉄製品で、鑿とみられる。断面は長方形で、下方は尖らせる。

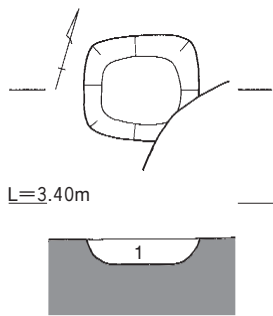
土坑 1020号（Ⅱ地区 SK11020）（第32図）

Ⅱ－12区東部南側、i・j 2グリッドに位置する。長軸206cm短軸195cm深度70cmを測る不整円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は8層に分層できる。遺物は、土師器羽釜、須恵器片・貯蔵具・甕、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・羽釜・土錘、須恵質土器片・捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、備前陶器片、白磁皿・碗、近世陶器片・壺（備前か）、が出土している。

77は白磁皿の底部である。釉はやや青みを帯び、微細な貫入を伴う。内面と体部外面下位まで薄く施釉する。露胎部との境で赤く発色する。素地は灰味がかり、微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁皿V類（11世紀後半～12世紀前半）に相当する。

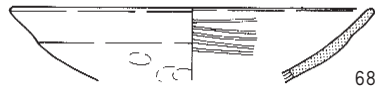
78は東播系須恵質土器碗の下半部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。見込みの段が弱いことなどから、森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）頃に属するとみられる。79は無釉の焼締め陶器壺の下部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。備前焼か。80は完形の土師質管状土錘。棒状で、体部中央に膨らみをもたない。

出土遺物の時期は幅広いが、出土遺物から近世に下る可能性がある。

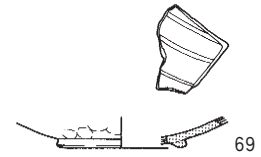


L=3.40m

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)

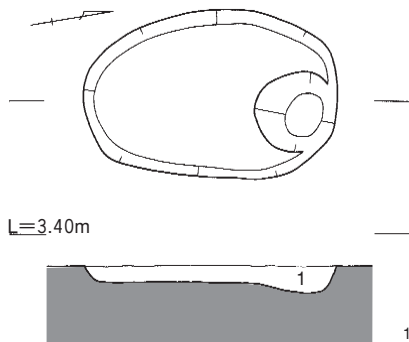


68



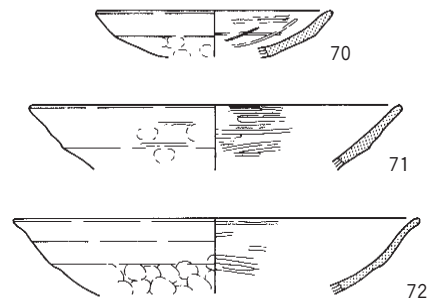
69

第28図 II-12区 SK11009遺構・遺物実測図



L=3.40m

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)

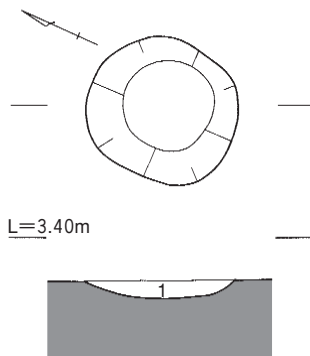


70

71

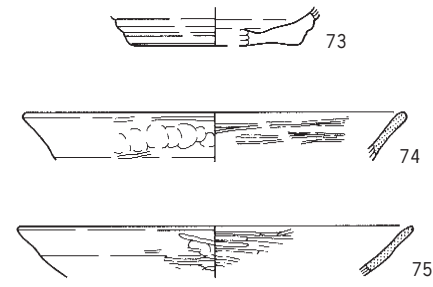
72

第29図 II-12区 SK11012遺構・遺物実測図



L=3.40m

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)

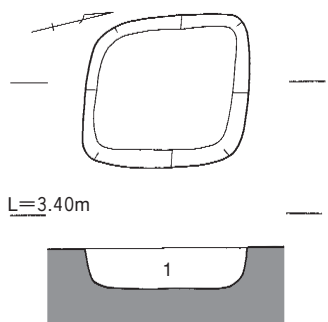


73

74

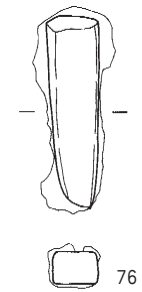
75

第30図 II-12区 SK11013遺構・遺物実測図



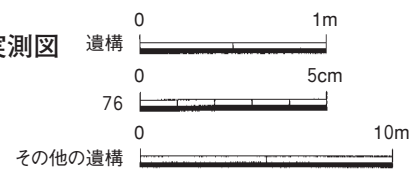
L=3.40m

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む



76

第31図 II-12区 SK11019遺構・遺物実測図



土坑 1022 号 (Ⅱ地区 SK11022) (第 33 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 1 グリッドに位置する。長軸 79cm 短軸 66cm 深度 13cm を測る不整円形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、土師器甕か、黒色土器碗 (A・B 類)、土師質土器片・供膳具・皿 (回転ヘラ切り)・杯 (回転ヘラ切り)・煮炊具、が出土している。遺物は遺構中央部北寄りの第 2 層に集中し、掲載遺物はすべてこの部分から出土する。

81～89 は回転台成形の土師質土器皿である。81・82 は低平な器形で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りと考えられるが、ナデ消しによるものか不明瞭。83～86 は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。83 は比較的 low 平な器形で、胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。84・85 は胎土にチャートとみられる粒子を含む。88 は回転ヘラ切りとみられるが磨耗とナデにより不明瞭。ナデ消しによるものか。89 は底部の大部分を欠く。切り離し技法不明。胎土に結晶片岩を含み、絹雲母を含むとみられる。

90～94 は回転台成形の土師質土器杯である。90 は底部を欠く。91 は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。底部は不安定な凸面状に復元される。胎土にチャートを含む。92 は底部の大部分を欠く。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが、ナデ消しによるものか不明瞭である。胎土にチャートを含むとみられる。93 は比較的大型で、復元口径 15.4cm を測る。体部は外上方に直線的に開く。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。焼成不良によりやや軟質。94 は底部を欠く。胎土にチャートとみられる粒子を含む。

95～99 は黒色土器 A 類碗である。95・96 は上半部。95 は口縁外面に横位のヘラミガキ、体部内外面に縦位のち横位の密なヘラミガキを施す。内面～口縁外面にかけて炭素吸着良好。96 は内外面に縦位・横位の密なヘラミガキを施す。口縁外面～内面に炭素吸着良好で、体部外面下位に炭素付着。

97・98 は底部を欠く。97 は外面にやや粗い横位のヘラミガキ、内面の上半に密な横位のヘラミガキ、下半に密な斜位のヘラミガキを施す。内面～口縁外面に炭素吸着良好。98 は磨耗により調整不明瞭だが、内外面に横位のヘラミガキが看取できる。口縁～体部内面上位にのみ炭素吸着良好。焼成不良により軟質。

99 はしっかりとしたハの字状の高台をもつ。口縁～体部内外面に密な横位のヘラミガキを施すが、磨耗およびハゼ痕により不明瞭。炭素は内面～口縁外面に部分的に吸着するのみ。焼成不良である。

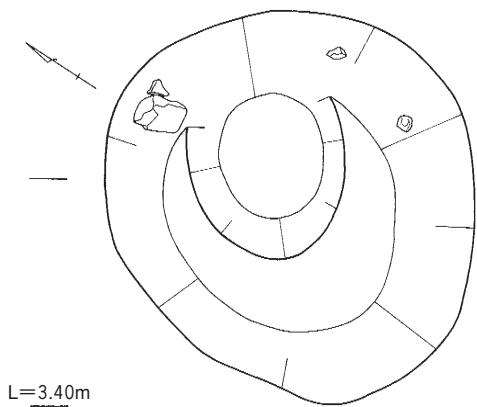
100 は黒色土器 B 類碗で、底部を欠く。内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。

底部ヘラ切りの土師質供膳具や黒色土器碗の出土から、遺構の年代は概ね 11～12 世紀前半頃とみられる。

土坑 1024 号 (Ⅱ地区 SK11024) (第 34 図)

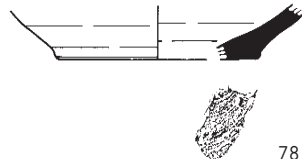
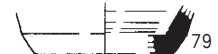
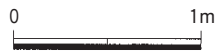
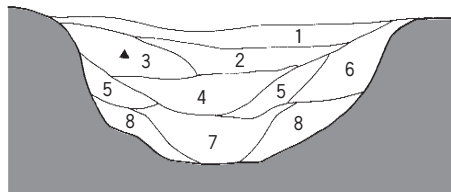
Ⅱ - 12 区東部中央南寄り、j 1 グリッドに位置する。長軸 117cm 短軸 106cm 深度 23cm を測る円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・碗・皿、が出土している。

101 は瓦器皿で、底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で、軟質焼成気味。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。102 は瓦器碗の上半部。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、体部外面下半は重焼により炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) に相当。103 はほぼ完形の土師質管状土錘。胎土にチャートを含むこと

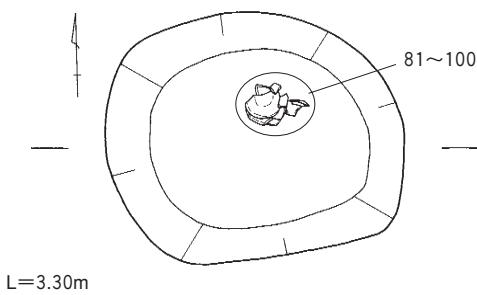


1. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり・粘性弱)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)
3. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり・粘性強)
4. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)
5. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土(しまり強)
6. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり強)
7. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
8. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)

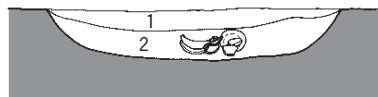
L=3.40m



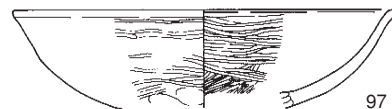
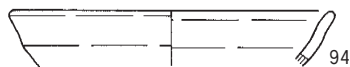
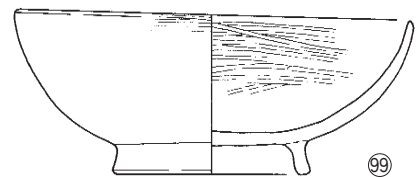
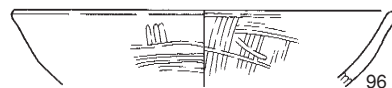
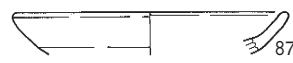
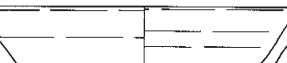
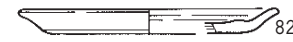
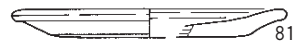
第32図 II-12区 SK11020遺構・遺物実測図



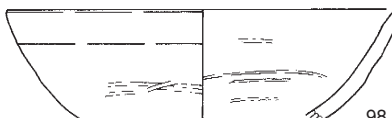
L=3.30m



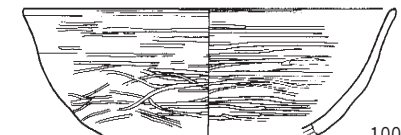
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



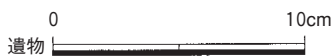
97



98



100



第33図 II-12区 SK11022遺構・遺物実測図

から在地産と考えられる。

土坑 1026 号 (Ⅱ地区 SK11026) (第 35 図)

Ⅱ - 12 区東部中央南寄り、i・j 1 グリッドに位置する。長軸 114cm 短軸 112cm 深度 21cm を測る隅丸方形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器椀・皿、椀形滓、が出土している。

104 は瓦器皿である。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施し、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すとみられる。炭素吸着は良好だが、酸化炎焼成する。和泉型瓦器Ⅲ期頃であろう。105 は瓦器椀の下半部。高台断面は外方に張り出す逆台形状を呈する。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面不良で、外面は吸着なし。高台やヘラミガキの形状から和泉型瓦器椀Ⅱ - 1 ~ 2 期 (12 世紀前葉 ~ 中葉) に相当。

106 は東播系須恵質土器捏鉢の口縁部である。端部を内上方にわずかに拡張。外面にわずかに自然釉と炭素が付着する。森田編年第Ⅰ期第 2 段階 ~ 第Ⅱ期第 1 段階 (11 世紀末 ~ 12 世紀後半) とみられる。

土坑 1028 号 (Ⅱ地区 SK11028) (第 36 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する。南東を SP14062 に切られる。長軸 117cm 短軸 97cm 深度 15cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層。遺物は、弥生土器片か、黒色土器椀 (B 類)、土師質土器片・供膳具・皿・杯 (回転ヘラ切り)・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、砂岩製叩石、結晶片岩礫、が出土。

107 は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。108 は瓦器椀で、遺構北西寄りの埋土上位 (検出面付近) から出土。底部外面に断面逆三角形の低い高台を貼り付ける。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は外面良好、内面はやや不良。焼成不良により軟質。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 ~ 3 期 (12 世紀末 ~ 13 世紀前葉) に相当。

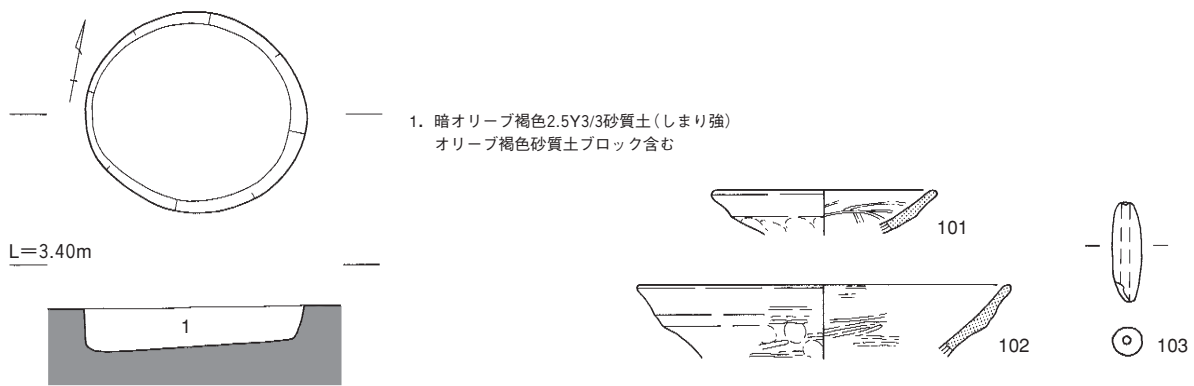
土坑 1029 号 (Ⅱ地区 SK11029) (第 37 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k20 グリッドに位置する。長軸 92cm 短軸 85cm 深度 18cm を測る不整円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層。遺物は、弥生土器片か、黒色土器椀 (B 類)、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、緑釉皿、瓦器片・椀、青白磁壺か瓶、灰釉陶器皿か、が出土している。

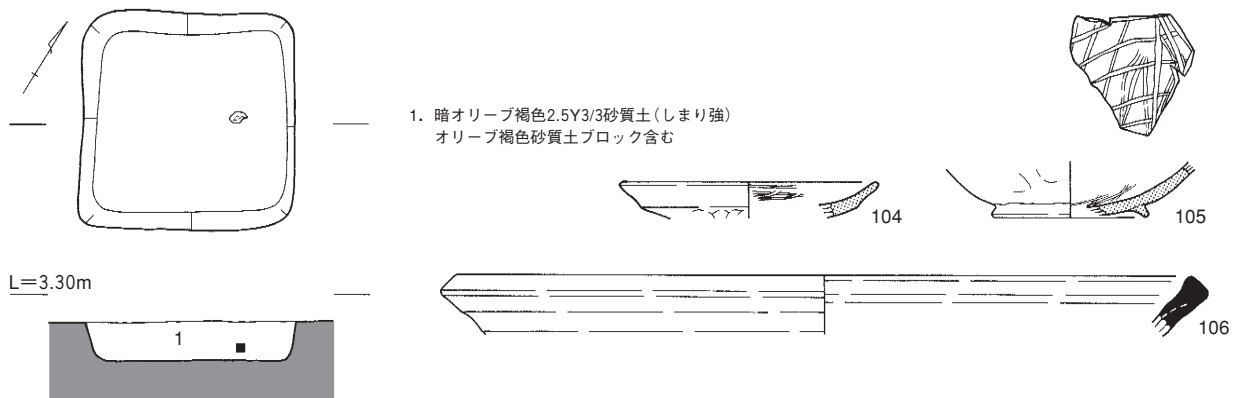
109 は灰釉陶器とみられる供膳具の上部片で、皿としたが椀かもしれない。口縁はわずかに端反る。内面のみ薄い灰釉を施すが、斑状のため自然釉の可能性も考えられる。時期不詳。110 は土師質土器皿である。回転台成形で、底部切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、ナデにより不明瞭であり、ナデ消しの可能性もある。胎土にチャートを含む。

111 は黒色土器 B 類椀の底部。ハの字に開くしっかりとした高い高台をもつ。見込みには密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。112 は瓦器椀の上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面 ~ 口縁外面はやや不良で、体部外面は重焼により不良。焼成不良により軟質。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) とみられる。

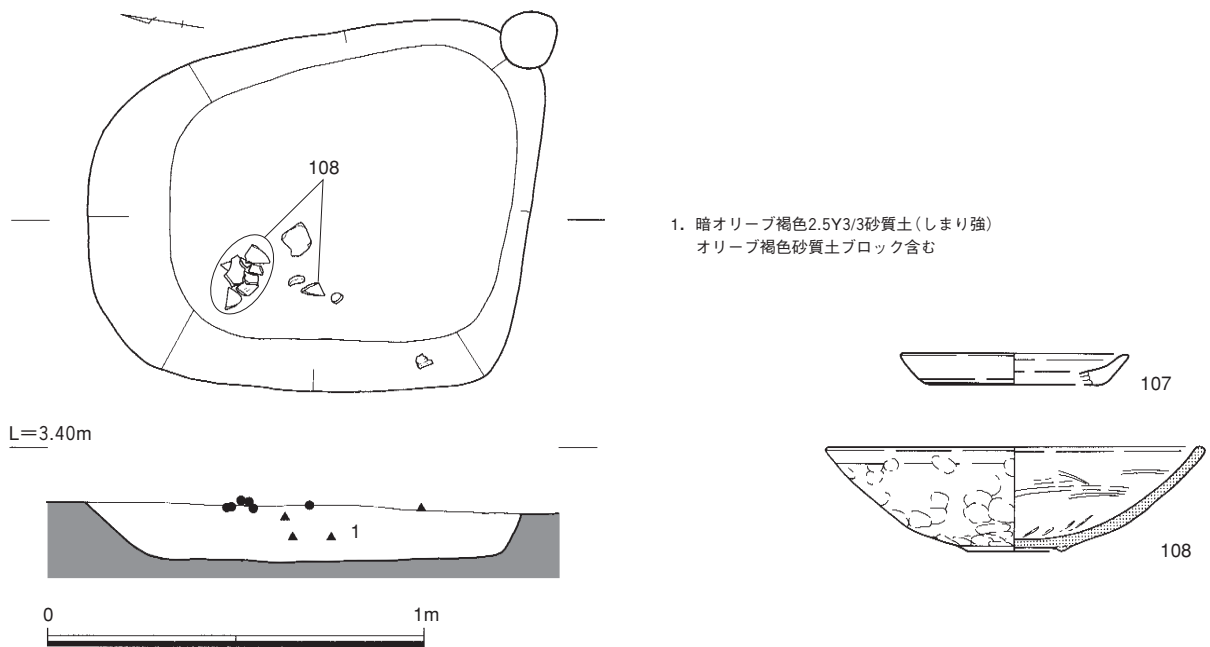
113 は青白磁の壺か瓶の体部である。やや下ぶくれで、上部に横位の沈線、体部に縦位の沈線を施し、



第34図 II-12区 SK11024遺構・遺物実測図



第35図 II-12区 SK11026遺構・遺物実測図



第36図 II-12区 SK11028遺構・遺物実測図



瓜形に作るとみられる。外面のみ施釉し、内面は露胎でロクロナデによる稜が看取できる。時期不詳。

土坑 1030 号 (Ⅱ地区 SK11030) (第 38 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k20 グリッドに位置する。西側を SK11029 に切られる。長軸 93cm 短軸残存長 71cm 深度 24cm を測る円形の土坑である。断面は不整な逆台形状で、埋土は 1 層。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器椀、が出土している。

114 は低平な器形をもつ土師質土器皿である。口縁を強く外反させ、外面は強いヨコナデによって凹線状に作る。回転台成形としたが、非回転台成形の可能性も否定できない。「ての字状口縁」をもつ京都系土師皿 B タイプと近似した形状をもつが、口縁端部はつまみ上げない。胎土にチャートを含むため、在地産の可能性はある。

115 は瓦器椀の底部。断面三角形の高台をもつ。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。高台の形状から和泉型瓦器椀Ⅱ期 (12 世紀前葉～後葉) とみられる。

土坑 1031 号 (Ⅱ地区 SK11031) (第 39 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k19・20 グリッドに位置する。西側を SA1066EP08 に切られる。長軸残存長 99cm 短軸 86cm 深度 22cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層。遺物は、黒色土器椀 (B 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・皿・鍋・煮炊具・椀・土錘、瓦器片・椀・皿、スラグ、が出土している。

116 は土師質土器皿で、底部中央を欠く。回転台成形で、底部切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、磨耗およびナデにより不明瞭。意識的なナデ消しか。胎土に在地花崗岩を含むとみられる。117 は黒色土器 B 類椀の底部。断面逆台形状の高台をもつ。内面に密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。

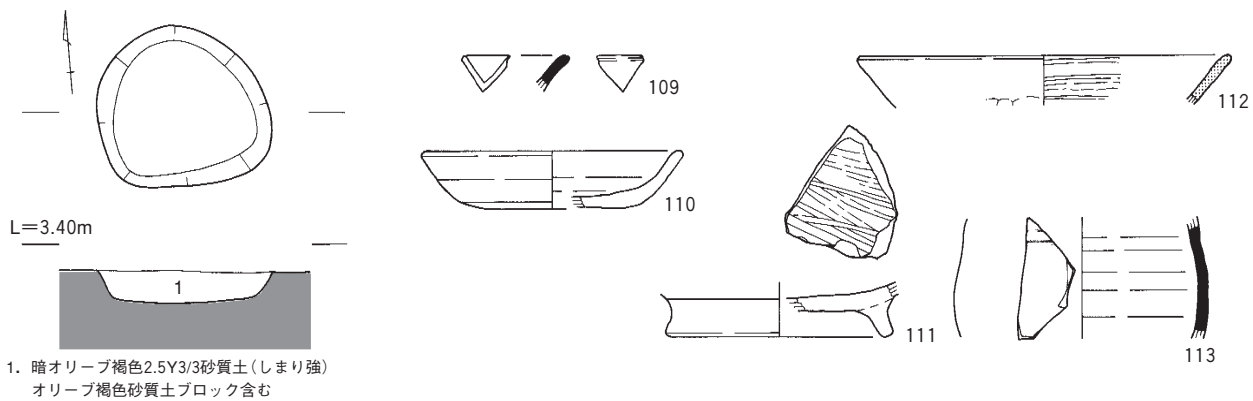
118・119 は瓦器椀の上半部。118 は小片のため復元径やや過小か。内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面～口縁内面まで良好で、体部内面は重焼により炭素吸着なし。酸化炎焼成気味。119 は外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面～口縁内面にかけて良好で、体部内面は重焼により炭素吸着しない。ともに和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) に相当。

120 は瓦器椀の底部。高台断面は高い逆台形状。見込みのヘラミガキ暗文は斜格子状か。炭素吸着良好。高台の形状から和泉型瓦器椀Ⅱ - 1～2 期 (12 世紀前葉～中葉) 前後とみられる。

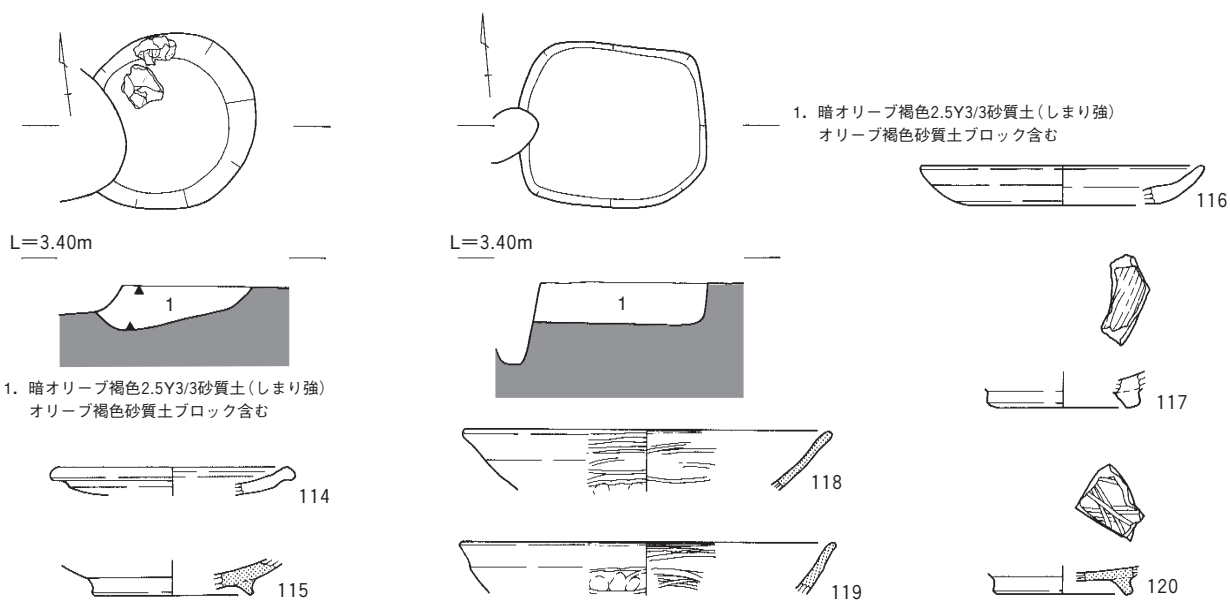
土坑 1034 号 (Ⅱ地区 SK11034) (第 40 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k19 グリッドに位置する。長軸 105cm 短軸 90cm 深度 19cm を測る不整形の土坑である。断面は浅い皿状で南に段をもつ。埋土は 1 層である。遺物は、土師器杯、黒色土器片・椀 (A・B 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、白磁碗、が出土。

121 は土師質土器皿で、低平な器形。回転台成形で、底部外面に不明瞭ながら回転ヘラ切り痕を残す。胎土に在地花崗岩を含むとみられる。122 は土師質焼成の椀上半部。体部内面に粗いヘラミガキを施す。外面はヘラミガキが確認できない。器形や調整技法からカーボンを消失した黒色土器椀の可能性あり。二次被熱によるものかは不明。123 は土師質土錘。胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。

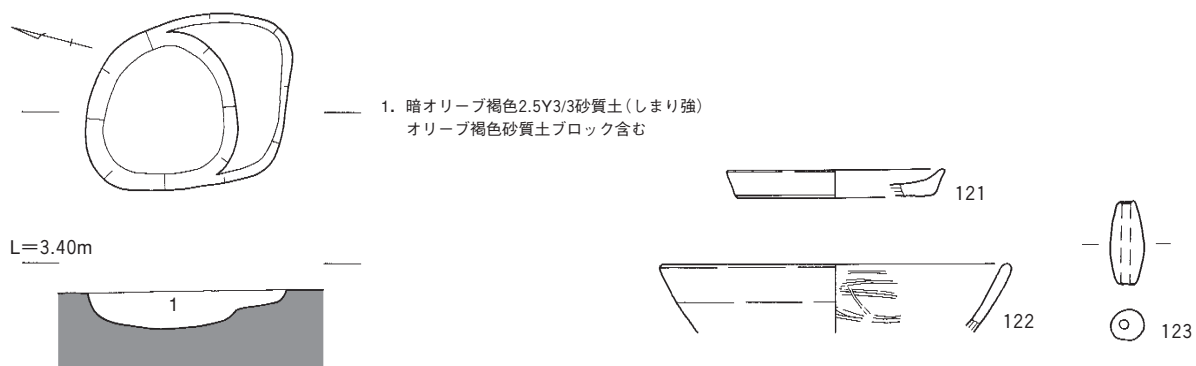


第37図 II-12区 SK11029遺構・遺物実測図



第38図 II-12区 SK11030
遺構・遺物実測図

第39図 II-12区 SK11031遺構・遺物実測図



第40図 II-12区 SK11034遺構・遺物実測図



土坑 1035 号 (Ⅱ地区 SK11035) (第 41 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 19 グリッドに位置する。長軸 76cm 短軸 64cm 深度 16cm を測る不整な楕円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、土師器碗、黒色土器片・碗 (A・B 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿 (回転ヘラ切り)・杯 (回転糸切り・回転ヘラ切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器碗、チャート・泥岩・砂岩礫、被熱チャート礫、壁土か、が出土している。ほぼ第 1 層に集中し、125・129 を除く全ての掲載遺物が本層からの出土である。

124 ~ 126 は土師質土器皿である。いずれも回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、124 は板目痕、126 は板目痕または擦過痕を残す。127・128 は回転台成形の土師質土器杯である。127 は下半部が残存し、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土に在地花崗岩を含むとみられる。128 は底部外面に回転糸切り痕を残す。やや内彎気味に大きく開く体部をもつ。胎土にチャートを含む。

129 は黒色土器 B 類碗としたが瓦器碗の可能性もあり。断面逆台形状の高台をもち、内面に密なヘラミガキを施す。炭素吸着不良で酸化炎焼成する。

130 ~ 134 は瓦器碗である。130 の高台断面は逆台形状で幅広い。接合部外面は焼き歪みにより亀裂が生じている。内面の口・体部境に浅い窪みが巡る。外面に横位の粗いヘラミガキ、内面にランダムで部分的にジグザグ状のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で、外面に重焼痕を伴う。和泉型瓦器碗Ⅱ - 2 期 (12 世紀中葉) とみられる。

131 は口縁端部を欠く。体部外面に横位のヘラミガキ、体部内面は密な横位のヘラミガキ、見込みは不規則なヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅱ - 1 期 (12 世紀前葉) 頃とみられる。

132 はほぼ完形。外面に粗い横位のヘラミガキ、口縁～体部内面に密な横位のヘラミガキ、見込みは密な平行状ヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅱ - 2 期 (12 世紀中葉) に相当する。

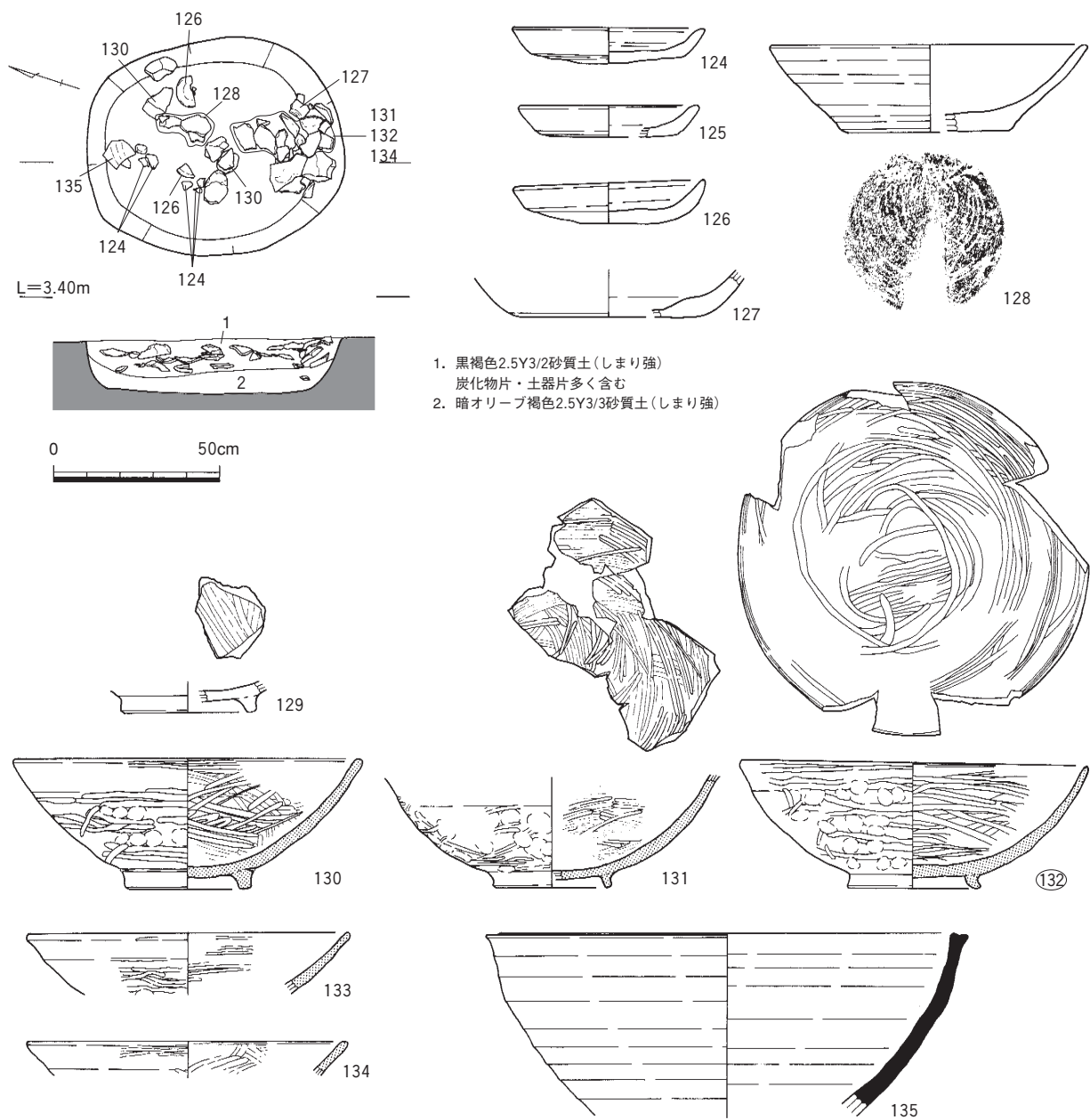
133 は上半部で、小片のため復元径過小か。内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着なく酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅱ ~ Ⅲ - 1 期 (12 世紀前葉～後葉) とみられる。134 は上部で、小片のため復元径過小。体部外面と口縁内面に横位のヘラミガキ、体部内面に斜位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、酸化炎焼成する。黒色土器 B 類碗の可能性もあったが、ヘラミガキがやや疎らであること、口縁が外方に開く器形をもつことなどから、和泉型瓦器碗Ⅱ ~ Ⅲ - 1 期と考える。

135 は東播系須恵質土器捏鉢で、底部を欠く。体部が内彎する碗形の器形をもち、口縁端部はわずかに外方に拡張する。体部内面下位は使用によりわずかに磨耗。焼成やや不良で、胎土は粗い。森田編年第 1 期第 2 段階に相当し、11 世紀末～12 世紀前半の年代が与えられる。

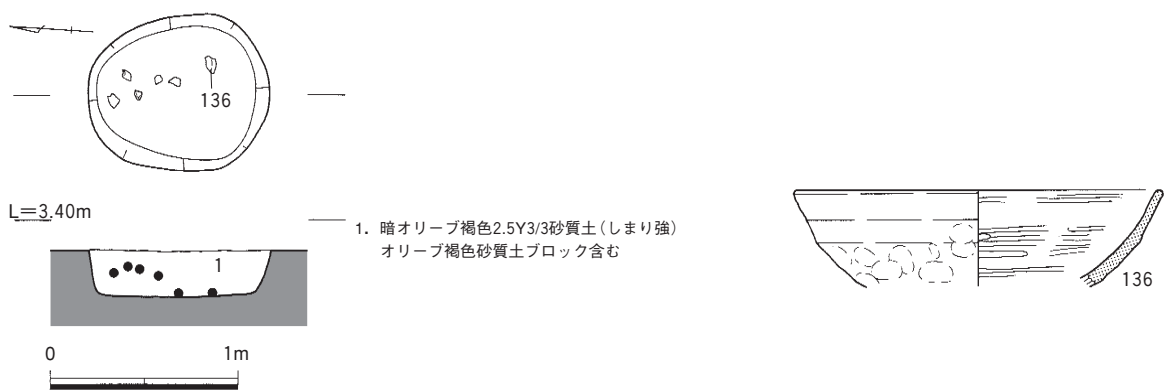
遺構の年代は、出土遺物から 12 世紀中葉前後とみられる。

土坑 1037 号 (Ⅱ地区 SK11037) (第 42 図)

Ⅱ - 12 区東部中央北寄り、i 19 グリッドに位置する。長軸 96cm 短軸 82cm 深度 24cm を測る不整な楕円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、黒色土器碗 (A 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、瓦器碗、白磁片 (中世後半)、鉄滓、片岩礫、壁土か、が出土している。



第41図 II-12区 SK11035遺構・遺物実測図



第42図 II-12区 SK11037遺構・遺物実測図



136 は埋土下位出土の瓦器碗で、底部を欠く。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面良好、内面不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－1期（12世紀後葉）に相当。

土坑 1038 号（Ⅱ地区 SK11038）（第 43 図）

Ⅱ－12 区東部中央、j 19 グリッドに位置する。長軸 88cm 短軸 82cm 深度 7cm を測る不整円形の土坑である。断面は浅い皿状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯（回転ヘラ切りほか）・煮炊具・土錘、瓦器片、が出土している。

137・138 は回転台成形の土師質土器皿である。137 は底部中央を欠く。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、ナデにより不明瞭。138 は底部を欠く。胎土にチャートを含む。軟質焼成。139 は土師質管状土錘で、軟質焼成。

土坑 1043 号（Ⅱ地区 SK11043）（第 44 図）

Ⅱ－12 区東部北側、i 18 グリッドに位置する。長軸 68cm 短軸 54cm 深度 44cm を測る不整円形の土坑である。断面は U 字状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（B 類）、土師質土器片・供膳具・皿（ユビオサエ）・煮炊具・土錘、瓦器片・碗、が出土している。掲載遺物はすべて第 1 層上位からの出土である。

140・141 は回転台成形の土師質土器皿。140 は低平な器形。切り離し技法は不明。141 は底部を欠く。口縁端部を外反させる。非回転台成形の可能性もある。

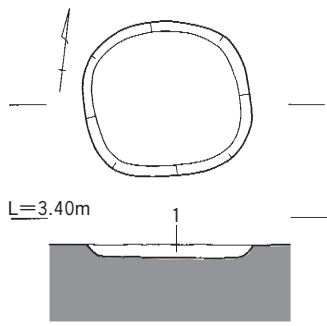
142 は瓦器皿である。低平な器形で、内面はジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着なく酸化炎焼成する。胎土に細粒多く表面がざらつく。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。143 は瓦器碗の底部。断面逆台形状の高台をもつ。内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－1～3期（12世紀後葉～13世紀前葉）頃とみられる。

土坑 1044 号（Ⅱ地区 SK11044）（第 45 図）

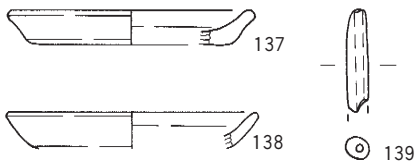
Ⅱ－12 区東部中央北寄り、i18 グリッドに位置する。長軸 72cm 短軸 60cm 深度 16cm を測る不整円形の土坑。断面は皿状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師器高台付皿、黒色土器碗（A・B 類）、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・皿（回転ヘラ切り）・煮炊具・土錘、鉄釘か、チャート礫、が出土している。

144 は土師器高台付皿である。回転台成形で、皿部は低平なコースター状を呈し、底部の外寄りに断面が細い逆三角形のやや高い高台を貼り付ける。胎土に金雲母を含む。145 は回転台成形の土師質土器皿である。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、磨耗により不明瞭。胎土に在地花崗岩とみられる粒子を含む。

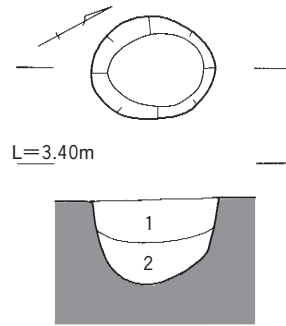
146・147 は黒色土器 B 類碗である。146 は上半部で小片のため復元径・傾きともに不正確。口縁端部内側にヨコナデによって浅い沈線を引く。体部内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。147 は体部下半で、外面は剥離・磨耗が著しく調整不明。高台の剥離痕を残す。内面は密な縦位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、軟質焼成。



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



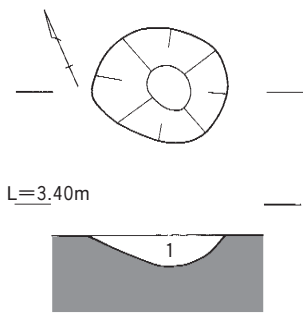
第43図 II-12区 SK11038
遺構・遺物実測図



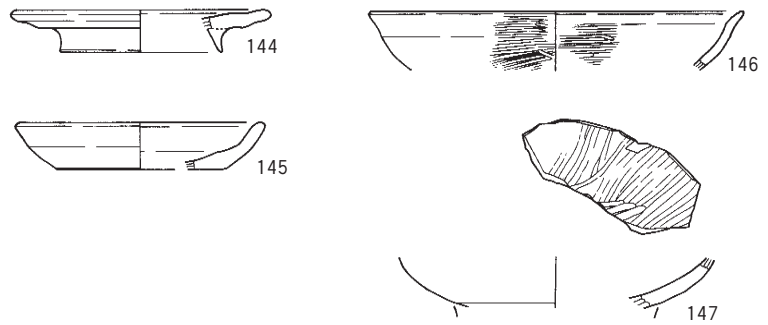
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



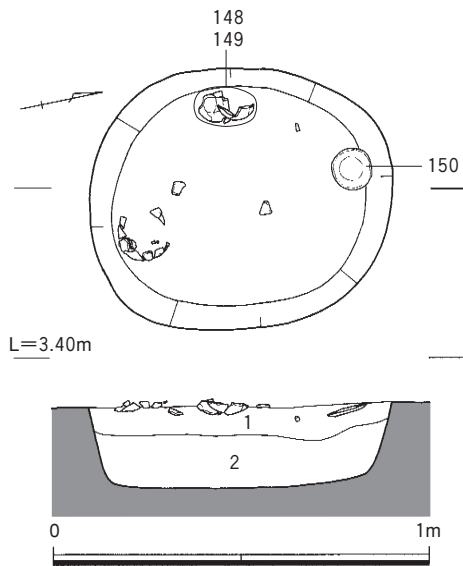
第44図 II-12区 SK11043遺構・遺物実測図



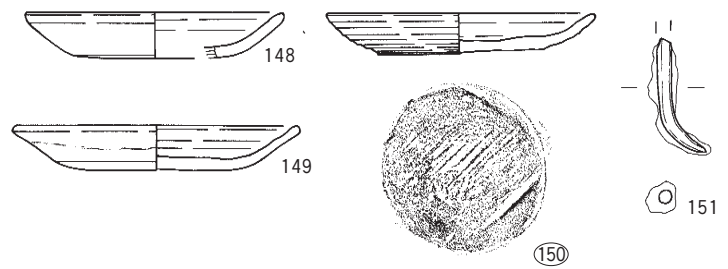
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



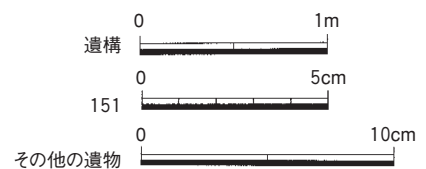
第45図 II-12区 SK11044遺構・遺物実測図



1. 黒灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
土器片多く含む
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)



第46図 II-12区 SK11061遺構・遺物実測図



土坑 1061号 (Ⅱ地区 SK11061) (第46図)

Ⅱ-12区中央部北端、i 13グリッドに位置する。長軸80cm短軸69cm深度21cmを測る楕円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器片・供膳具、土師質土器片・供膳具・皿(回転ヘラ切り)・煮炊具、瓦器片、鉄釘、砂岩礫、が出土している。検出面付近に集中し、148・149は遺構西端で、完形品の150は遺構北端部でほぼ正位で出土。

148～150は回転台成形の土師質土器皿である。148はナデ消しによるものか切り離し技法不明。胎土は粗い。149は底部外面の回転ヘラ切り痕をナデ消す。体部外面に接合痕とみられる痕跡がある。150は完形で、外面に多段状の稜線が明瞭である。底部は強い板目の圧痕によって切り離し技法を消すとともに、板目痕の内外で2mmの段差を作る。内面は磨耗する。151は鉄釘である。頭部を欠損し、下部でくの字に屈曲変形する。

土坑 1063号 (Ⅱ地区 SK11063) (第47図)

Ⅱ-12区中央部北寄り、f 12グリッドに位置する。長軸85cm短軸83cm深度50cmを測る円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、黒色土器片(B類)、土師器土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・皿、が出土している。

152は瓦器皿で、底部中央を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器皿期後半頃か。153は完形の土師質管状土錘。胎土は粗く含有物は1mm大が主体で、チャートを含む。軟質焼成により磨耗や剥離が著しい。

土坑 1069号 (Ⅱ地区 SK11069) (第48図)

Ⅱ-12区西部北端、g 10グリッドに位置する。長軸78cm短軸61cm深度23cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、土師器鍋、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、鉄製品片、が出土。

154は瓦器椀の上半部。口縁外面と体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。内面は磨耗により調整不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期(12世紀後葉)頃に相当する。155は瓦器椀の上部。内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)に相当。

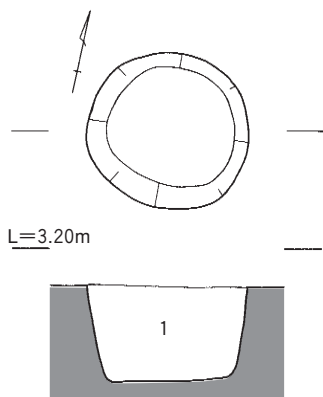
156は土師器羽釜の上部。口縁と鋳部が近接する形状から摂津C型羽釜とみられる。鋳部以下煤付着。胎土に花崗岩粒を含む。

土坑 1076号 (Ⅱ地区 SK11076) (第49図)

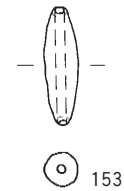
Ⅱ-12区西部北側、e・f 10グリッドに位置する。長軸87cm短軸78cm深度33cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器蓋か、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片、が出土している。

157は土師質土器皿で、底部を欠く。体部外面に指頭圧痕を残す。京都系土師皿Eタイプの模倣品か。13世紀前半頃とみられる。

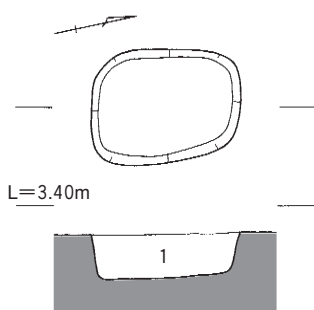
158・159は瓦器椀である。158は上半部で、体部内面に粗い横位・縦位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面良好、外面不良。酸化炎焼成気味。159は体部の開きが大きく、器高が



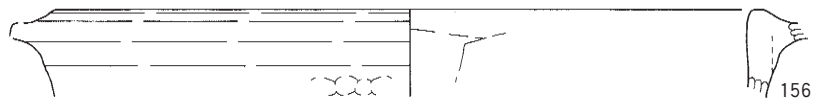
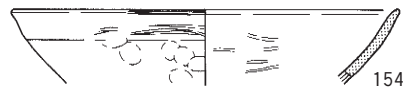
1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
 オリーブ褐色・暗オリーブ色砂質土ブロック含む



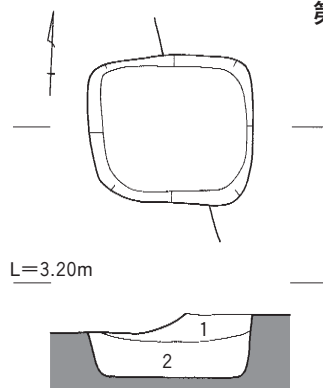
第47図 II-12区 SK11063遺構・遺物実測図



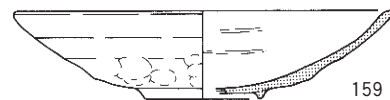
1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
 暗オリーブ色砂質土ブロック含む



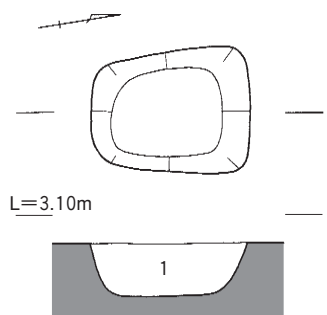
第48図 II-12区 SK11069遺構・遺物実測図



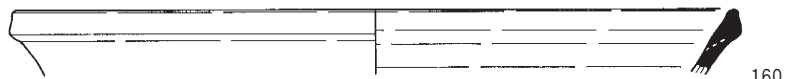
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
 2. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)



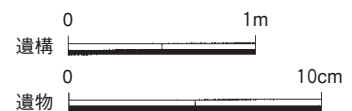
第49図 II-12区 SK11076遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



第50図 II-12区 SK11078遺構・遺物実測図



低い。断面逆三角形の低い高台をもつ。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により調整不明瞭で、見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着なく酸化炎焼成する。いずれも和泉型瓦器Ⅲ-3期（13世紀前葉）に相当。

土坑 1078 号（Ⅱ地区 SK11078）（第 50 図）

Ⅱ-12区西部南側、d 10 グリッドに位置する。長軸 84cm 短軸 67cm 深度 28cm を測る隅丸方形土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗、中世陶器片、が出土。

160 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。口縁端部を上下に拡張し、口縁外面にわずかに炭素付着。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。

土坑 1082 号（Ⅱ地区 SK11082）（第 51・52 図）

Ⅱ-12区西部北側、f 9 グリッドに位置する。長軸 263cm 短軸 76cm 深度 21cm を測る長楕円形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。当初、複数の遺構として検出したが、遺物の出土状況から単一の遺構であろうと考えた。

遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿（ユビオサエカ）・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗・皿、白磁皿、チャート製叩石・被熱砂岩礫・砂岩礫、が出土。遺物は検出面～埋土上位の比較的浅い位置から出土。163・170・176・181・182・184・185 は出土層位の特定ができないが、その他の掲載遺物は全て埋土上位からの出土である。3ヶ所の集中部があり、遺構北端に 162・164・183・187・188、中央部に 172・179・180、南寄りに 168・169・171・173・174・177・178・186 がそれぞれまとまって出土している。

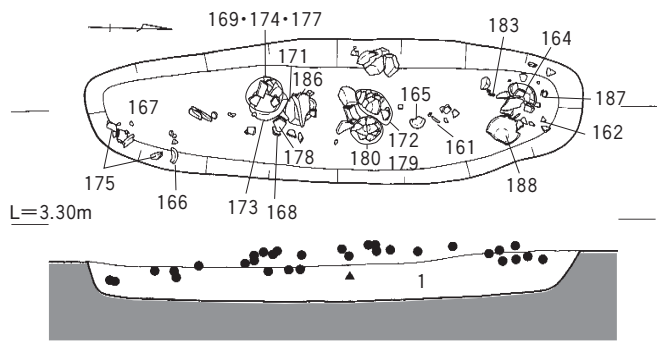
161 は非回転台成形とみられる土師質土器皿である。底部外面はナデを施し指頭圧痕は確認できない。胎土に在地花崗岩を含む。京都系土師皿の在地模倣品であろう。13 世紀代とみられる。

162～164 は回転台成形の土師質土器供膳具である。162 は皿で、磨耗により底部の切り離し技法は不明。163 は皿とみられ、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。164 は杯で、体底部の境に明瞭な稜をつくらず、底径は小さい。底部外面に回転糸切り痕を残す。断面で粘土紐を内側に継いだ接合痕が確認できる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料 No. 35）、少量の金雲母を含むことから搬入品の可能性をもつ。

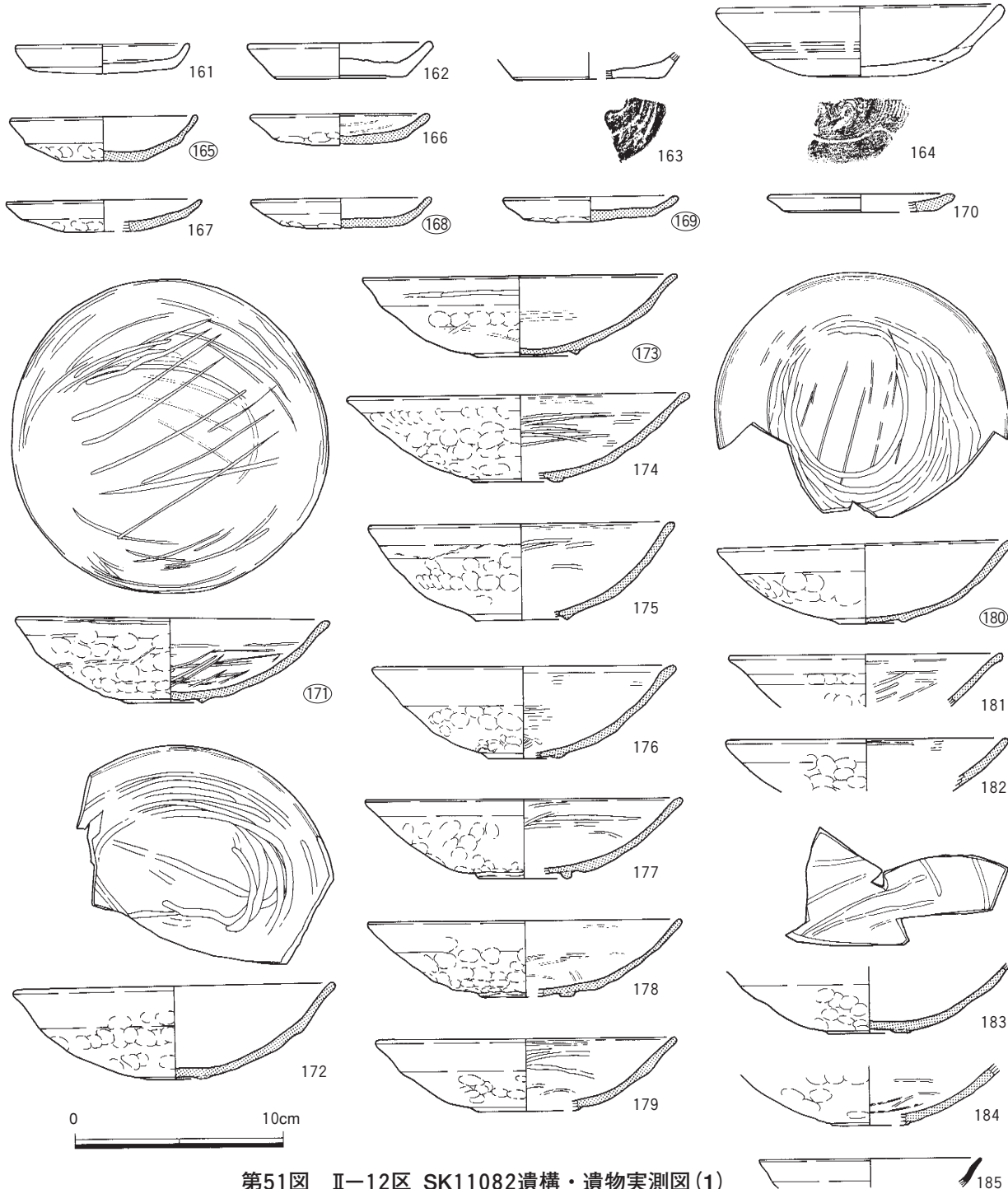
165～170 は瓦器皿。165 はやや深みがある器形。磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。166 は内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。167 は器形が歪み、全体的に粗雑な作り。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。

168～170 は和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。168・169 は完形品。168 は磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。169 は器形に歪みがあり、平面形はやや楕円状を呈する。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。170 は体部の立ち上がりが弱く、きわめて低平な器形。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。

171～184 は瓦器碗である。171～175 は和泉型瓦器Ⅲ-1～2期（12 世紀後葉～13 世紀初頭）に位置付けられる。171 は完形品である。外面と体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に方向や長さが不揃いな平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は口縁内面～外面が良好、体部内面以下は重焼に



1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)



第51図 II-12区 SK11082遺構・遺物実測図(1)

よりやや不良で、部分的に吸着なし。

172の高台断面はきわめて低平な蒲鉾形で、途中で途切れて全周しない。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、見込みは螺旋状の崩れたものか。体底部のヘラミガキは全般的に太い。炭素吸着は口縁内面～外面にかけてやや不良であるが、部分的に吸着しない。体部内面以下は吸着せず。胎土はわずかに酸化炎焼成する。

173はほぼ完形。高台断面は低い三角形状を呈する。外面に粗い横位のヘラミガキを施し、内面は横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。

174は歪みにより復元径過大。高台断面は低平な逆台形状を呈する。内面の口縁以下にやや粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みは平行ヘラミガキ暗文か。炭素吸着は内面～体部外面が良好で、底部外面は重焼により吸着不良。

175の高台断面は低く退化した逆三角形状を呈する。内面の口縁～体部に横位のヘラミガキを施すが磨耗により不明瞭で、見込みのヘラミガキは確認できない。口縁外面に接合痕を伴う。炭素吸着良好。

176は和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)、177～181・183・184はⅢ-3期(13世紀前葉)、182はⅣ-1期(13世紀中葉)に相当する。176は口縁が肥厚し、内面に稜を作る。高台断面は幅広の低い蒲鉾形。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味。本品は器形や焼成などの点から模倣品(在地産)の疑いがあったため胎土分析を行った(胎土分析試料No.4)。その結果、蛍光X線分析では和泉型の範疇からやや外れるものの、黒雲母(金雲母)を含むことから在地産ではないと考えられる。

177の高台断面は低い逆台形状を呈する。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭で見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着は外面良好、内面不良。体部外面中位に径約3cmのハゼ痕がみられ、中心に稲糊の圧痕が確認できる。胎土中の稲糊が焼成により破裂したものであろう。

178の高台断面は低平な逆台形状。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着やや不良。179は器形に歪みがあり、底径は過大と考えられる。高台断面は低平な逆台形状。内面は口縁～体部まで粗い横位のヘラミガキを施し、見込みのヘラミガキ暗文は螺旋状か。炭素吸着良好。Ⅲ-3期でもやや古相か。180の高台断面は低平な逆三角形状。内面の口縁～体部にやや粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。外面～口縁内面に炭素吸着良好で、体部内面以下は吸着なし。やや古相か。

181は上半部。内面の上半に横位、下半に斜位の粗いヘラミガキを施す。炭素吸着は口縁内面～体部外面中位まで良好で、他は重焼により吸着なし。182は上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。183は口縁を欠く。高台断面は幅広い逆台形状できわめて低い。体部内面にごく粗い横位のヘラミガキ、底部内面に粗雑な平行ヘラミガキ暗文を施す。184は瓦器碗の下半部で、底部中央を欠く。高台は退化し、きわめて低平。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。181～184は炭素吸着良好。

185は白磁皿で底部を欠く。器壁は薄い。口縁端部は露胎でいわゆる口禿である。釉は薄く細かな貫入を伴う。大宰府分類白磁皿Ⅸ類(13世紀中頃～14世紀初頭)に相当。

186は紀伊型土師質土器鏝付鍋の上半部。口縁端部は内上方に折り返し、内側に凹線をつくる。頸部外面は横位に連続したユビオサエのちヨコナデ。体部外面上位に断面三角形の鏝を貼り付け。体部内面はユビオサエのち横位の板ナデを施す。外面煤付着。胎土は粗く1mm大の粒子を多量に含み、結晶片岩

を含有。紀伊からの搬入品で、概ね13世紀中頃と考えられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.24）、黒雲母のほかチャートと砂岩を含むという結果を得ている。

187は土師質土器鍋の上部。口縁端部はヨコナデによりわずかに拡張し、内外面とも粗いハケを施す。胎土に角閃石が目立ち、あわせて金雲母を含むことから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

188は東播系須恵質土器捏鉢である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。口縁は丸みを帯び、片口を設ける。重焼により口縁端部に自然釉、底部内外面を除き炭素が付着する。体部中位以下、使用によりわずかな磨耗がみられるが、使用感に乏しい。底部内面に接合痕が確認できる。体部内外面にわずかにハゼ痕がみられる。焼成はやや軟質の感がある。東播系捏鉢は通常口縁端部を方形に作り、時代が下るとともに上下に拡張していくが、本品は口縁端部が拡張せず丸く収めることから森田編年第Ⅰ期に位置付けることも考えた。しかし口径18.9cmの小型品であり、小型の東播系捏鉢は碗を大型化した形状を呈するものがあること（森田1986）から、森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）まで下る可能性がある。Ⅲ-3期の和泉型瓦器碗や、回転糸切りの土師質土器杯などの共伴遺物から考えると、後者の年代がより合理的であろう。

【参考文献】

森田 稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」『神戸市立博物館 研究紀要』第3号 神戸市立博物館

土坑 1092号（Ⅱ地区 SK11092）（第53図）

Ⅱ-12区西部中央南寄り、d9グリッドに位置する。長軸79cm短軸62cm深度16cmを測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、須恵器甕、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器片・甕、瓦器片・碗・皿、壁土、鉄製品片・鉄釘、が出土。

189は棒状の鉄製品で、鉄釘とみられる。両端部を欠く。

土坑 1093号（Ⅱ地区 SK11093）（第54図）

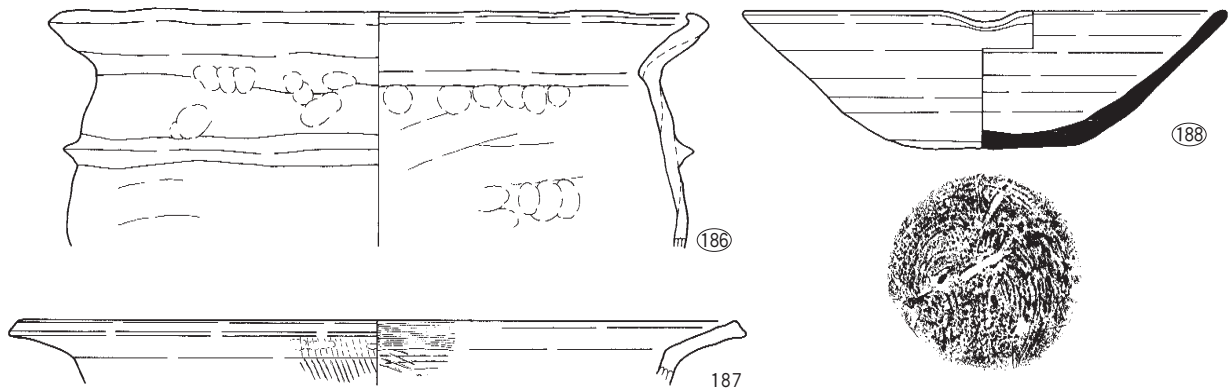
Ⅱ-12区西部南側、d9・10グリッドに位置する。長軸105cm短軸103cm深度11cmを測る不整方形の土坑。断面は浅い逆台形状で、埋土は1層。遺物は、黒色土器片（A類）、須恵器供膳具・貯蔵具・甕、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・碗・皿、鉄釘・鉄滓、片岩礫・チャート礫、が出土。

190は鉄釘で、両端を欠く。残存部上端は屈曲しており、折損とみられる。

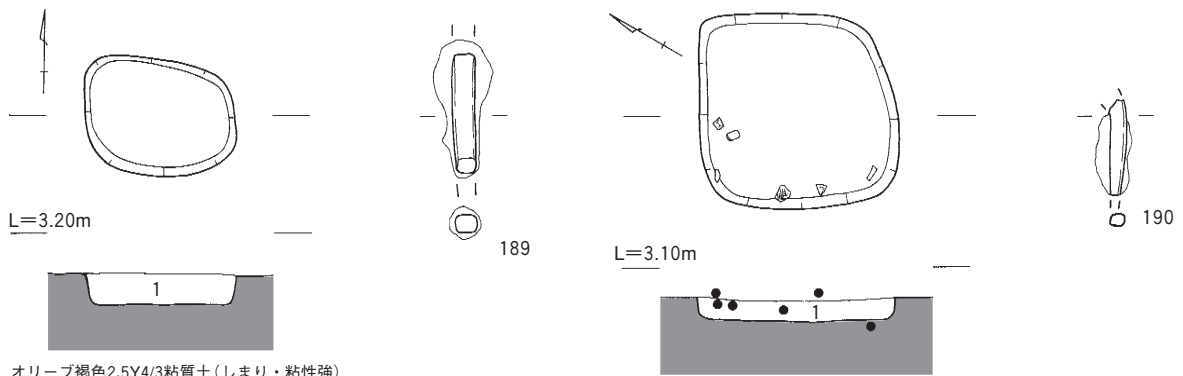
土坑 1094号（Ⅱ地区 SK11094）（第55図）

Ⅱ-12区西部南側、c・d9グリッドに位置する。東側をSD1104に切られる。長軸残存長71cm短軸61cm深度28cmを測る隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器碗か、瓦器片・碗、鉄釘、が出土。

191は須恵質土器碗の下半部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。東播系とみられ、見込みの段が弱く外面の底体部境に明瞭な稜を伴うことから、森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）と考えられる。



第52図 II-12区 SK11082遺物実測図 (2)

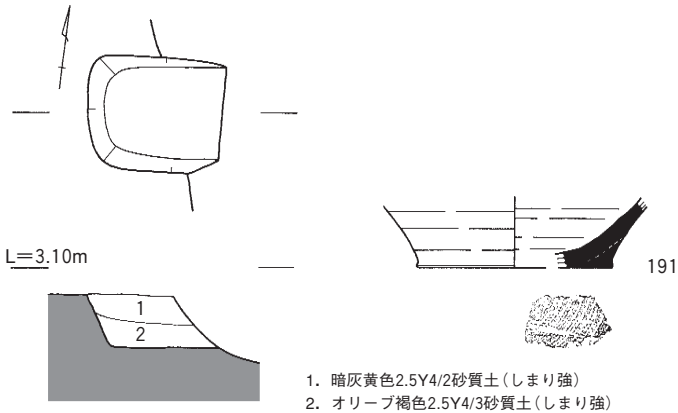


1. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)

第53図 II-12区 SK11092遺構・遺物実測図

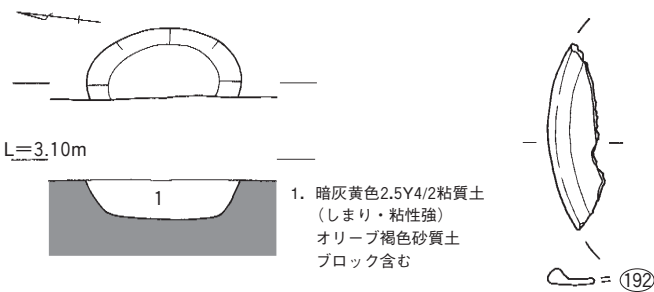
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)

第54図 II-12区 SK11093遺構・遺物実測図



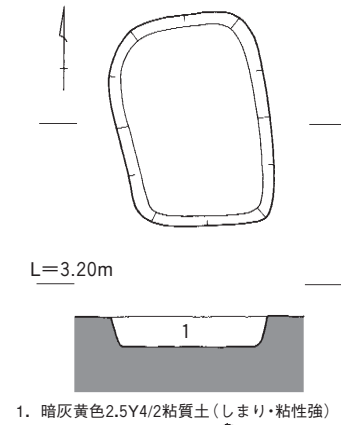
1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)

第55図 II-12区 SK11094遺構・遺物実測図



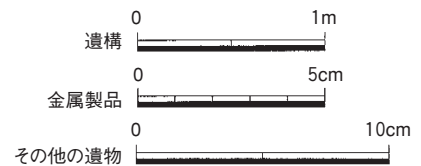
1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
(しまり・粘性強)
オリーブ褐色砂質土
ブロック含む

第56図 II-12区 SK11117遺構・遺物実測図



1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)

第57図 II-12区 SK11118
遺構・遺物実測図



土坑 1117 号 (Ⅱ地区 SK11117) (第 56 図)

Ⅱ - 12 区西部南側、b 7 グリッドに位置する。西側を SK11102 に切られる。長軸 82cm 短軸残存長 37cm 深度 21cm を測る楕円形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具、瓦器碗・皿、青銅製和鏡、が出土している。

192 は和鏡片である。出土位置や出土状況は不明。復元径 9.8cm 鏡胎厚 0.1cm、縁は蒲鉾式中縁で高さ 4.5mm を測る。本品は縁周の 3 割程度である長さ 4.9cm 幅 1.5cm 重量 4.8 g が残存し、中央部を欠くため鈕は残存しない。鏡背・鏡面とも文様や圏線は確認できない。平安時代末の宋鏡式和鏡としたが、宋鏡の可能性も考えられる。欠損部は割れではなく、人為的な折損とみられる。破面の観察から軟質で伸展性をもった材質とみられ、部分的に粉吹き状の白色錆を生じることから、素材は亜鉛や鉛の含有率が高い青銅と推測される。鏡面・鏡背ともに表面は平滑でなくざらつくが、材質に起因する経年劣化または粗雑な仕上げに拠るものかは不明。

土坑 1118 号 (Ⅱ地区 SK11118) (第 57 図)

Ⅱ - 12 区西部北側、d・e 6・7 グリッドに位置する。長軸 112cm 短軸 82cm 深度 16cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師器羽釜、須恵器片、土師質土器供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・碗、白磁碗、砂岩礫・チャート礫、が出土。

193 は瓦器碗の底部。断面逆台形状で低い高台をもつ。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

土坑 1123 号 (Ⅱ地区 SK11123) (第 58 図)

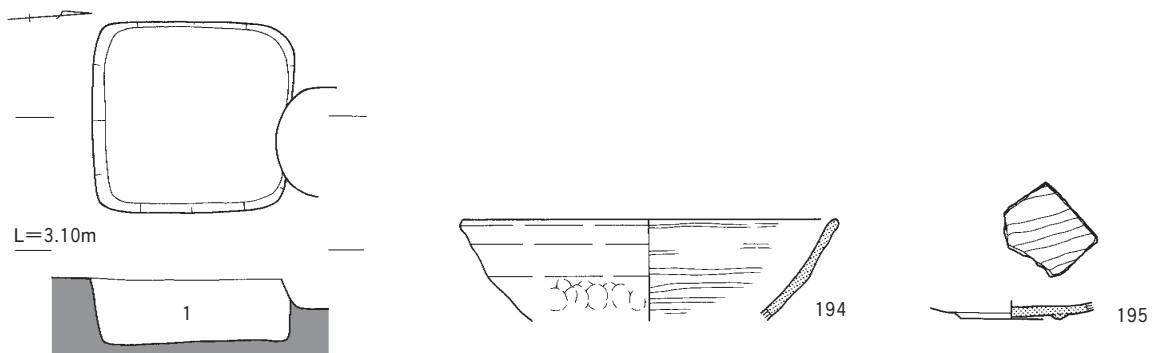
Ⅱ - 12 区西部南側、b 6 グリッドに位置する。北側を SK11122 に切られる。長軸残存長 99cm 短軸 101cm 深度 24cm を測る隅丸長方形土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り・回転ヘラ切り)・煮炊具・碗・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗・皿、が出土している。

194・195 は瓦器碗。194 は底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面～体部外面中位まで良好で、体部外面下位は重焼により吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。195 は底部。底部外面は板目痕または擦痕を残し、のち断面逆台形状で低く退化した高台を貼り付ける。底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ - 2～3 期 (12 世紀末～13 世紀前葉) とみられる。

土坑 1125 号 (Ⅱ地区 SK11125) (第 59 図)

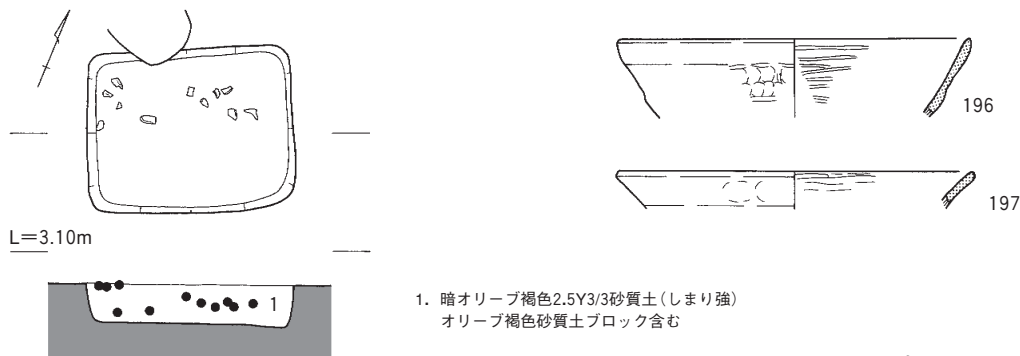
Ⅱ - 12 区西端部南側、a・b 6 グリッドに位置する。北側を SP14341 に切られる。長軸 110cm 短軸 87cm 深度 21cm を測る隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器供膳具・甕、土師質土器片・供膳具 (回転糸切りほか)・皿・煮炊具・土錘、須恵質土器甕・捏鉢、瓦器片・碗・皿、瓦質土器甕、鉄滓、が出土している。

196 は瓦器碗の上半部で、小片のため復元径は過小。内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) 前後に相当。197 は瓦器碗の上部。内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は口縁内面～外面が良好、体部内面不良。重焼または伏せ焼によるものか。和泉



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む

第58図 II-12区 SK11123遺構・遺物実測図



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む

第59図 II-12区 SK11125遺構・遺物実測図



型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。

土坑(土壙墓)

本書では、土坑のうち主軸方位が東西か南北を指向し、平面形が長方形を呈し長軸が1mを超えるもの、壁面が垂直に近く底面が水平、ある程度の深度をもつ、といった条件を満たすものについて土壙墓の可能性がきわめて高いものとして抽出した。

本調査区では土坑128基のうち土壙墓として19基を抽出し、17基について掲載した。本調査区の土壙墓と長方形土坑は、調査区西半部に偏って配置している。小グループで集合する配置パターンが目立ち列状配置はみられない。またSK1060のように単独で存在するものもある。溝との重複が少なく、とくにSD1002とは切り合い関係が皆無であるため、本溝による区画に規制された配置と見ることができると。

土坑(土壙墓)1060号(Ⅱ地区 SK11060)(第60図)

Ⅱ-12区中央部南側、f15グリッドに位置する。長軸139cm短軸100cm深度44cmを測る隅丸長方形土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・羽釜・鍋・碗・土錘、灰釉陶器皿、瓦器片・碗・皿、青磁碗、鉄釘、

が出土している。完形品は第1層の下端から出土しているが、土坑上に置かれた遺物が遺体の腐朽とともに土壌内に落ち込んだ可能性も考えられる。第1層下位から200～204が出土。

198は低平な器形をもつ回転台成形の土師質土器皿で、底部中央を欠く。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが、磨耗により不明瞭。199は灰釉陶器皿とみられる上半部である。釉はきわめて薄い。概ね10～11世紀頃か。

200～203は瓦器皿である。200はほぼ完形。軟質焼成により磨耗著しくヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。胎土に石英またはチャートとみられる7mm大の粒子を含む。201は完形品である。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。202はほぼ完形。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。203は完形品で、器形の歪み大きい。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。時期は200が和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられるが、他の個体はⅣ期頃であろう。

204～206は瓦器碗である。204は完形品。高台断面は低い逆三角形状を呈する。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着やや不良で、軟質焼成により全体的に磨耗。205は上半部で、口縁端部から内面にかけて横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。206は上半部で、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。口縁内面～外面にかけて炭素吸着良好だが、体部内面は重焼により炭素吸着なし。いずれも和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当する。

207は青磁碗の上半部。内面にヘラ片彫による分割文を施す。釉は透明度高く、細かな気泡を含む。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類(12世紀中頃～後半)に相当。

208・209は土師質土器鍋の口縁部。いずれも胎土は粗く、花崗岩と多量の金雲母を含むことから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。208は端部を方形に作り、外面を肥厚させる。209は端部を丸く収め、内面ヨコナデ、外面はユビオサエによって調整する。外面煤付着。

210は棒状の鉄製品で鉄釘か。断面は不整形でやや捻る。両端部を欠く。

土坑(土壌墓) 1070号(Ⅱ地区 SK11070)(第61図)

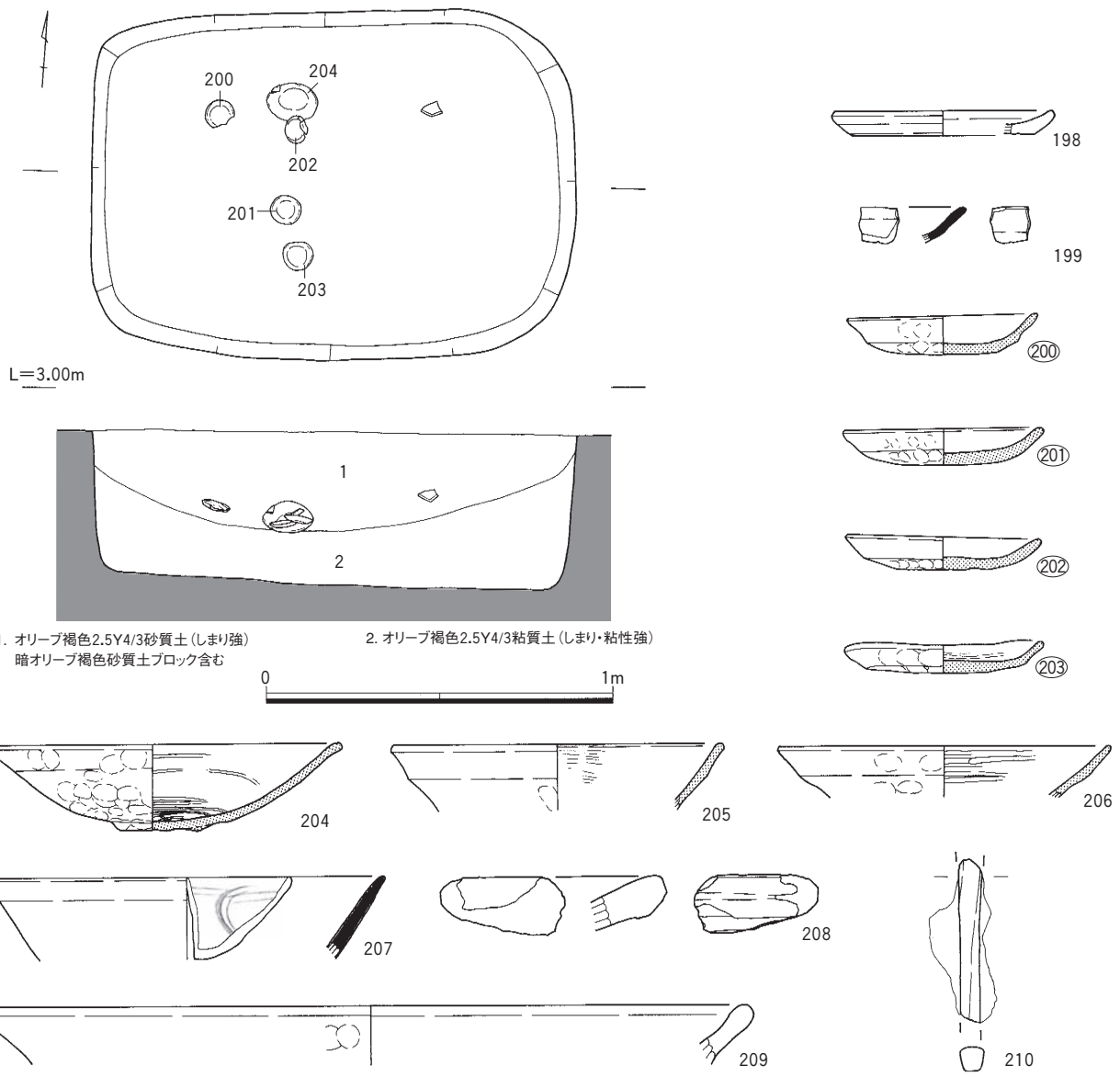
Ⅱ-12区西部北端、g10グリッドに位置する。東側をSK11069に切られる。長軸131cm短軸89cm深度36cmを測る隅丸長方形土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器碗(A類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・碗、鉄滓、が出土。

211は瓦器碗の底部片。高台断面は低い逆台形状で、畳付は強いヨコナデにより凹線状に作る。磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期頃(13世紀前葉～中葉)とみられる。

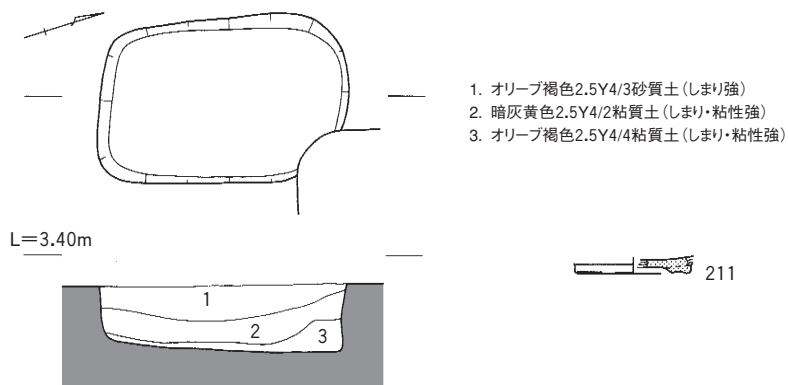
土坑(土壌墓) 1071号(Ⅱ地区 SK11071)(第62図)

Ⅱ-12区西部北側、g10グリッドに位置する。長軸138cm短軸101cm深度43cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器碗か(B類)、須恵器供膳具(ヘラ記号)・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・土錘、須恵質土器片・捏鉢、灰釉陶器碗、瓦器片・碗・皿、瓦質土器羽釜、中世陶器片・貯蔵具、青磁碗、白磁片、鉄製品片・スラグ、壁土・チャート・砂岩礫、が出土している。

遺物に完形品はみられず、ほぼ小片である。分布は北西側に偏り、層位は1・2層に集中する。掲載遺物のうち埋土上位の出土遺物は212～214・217～221・223・224・230である。

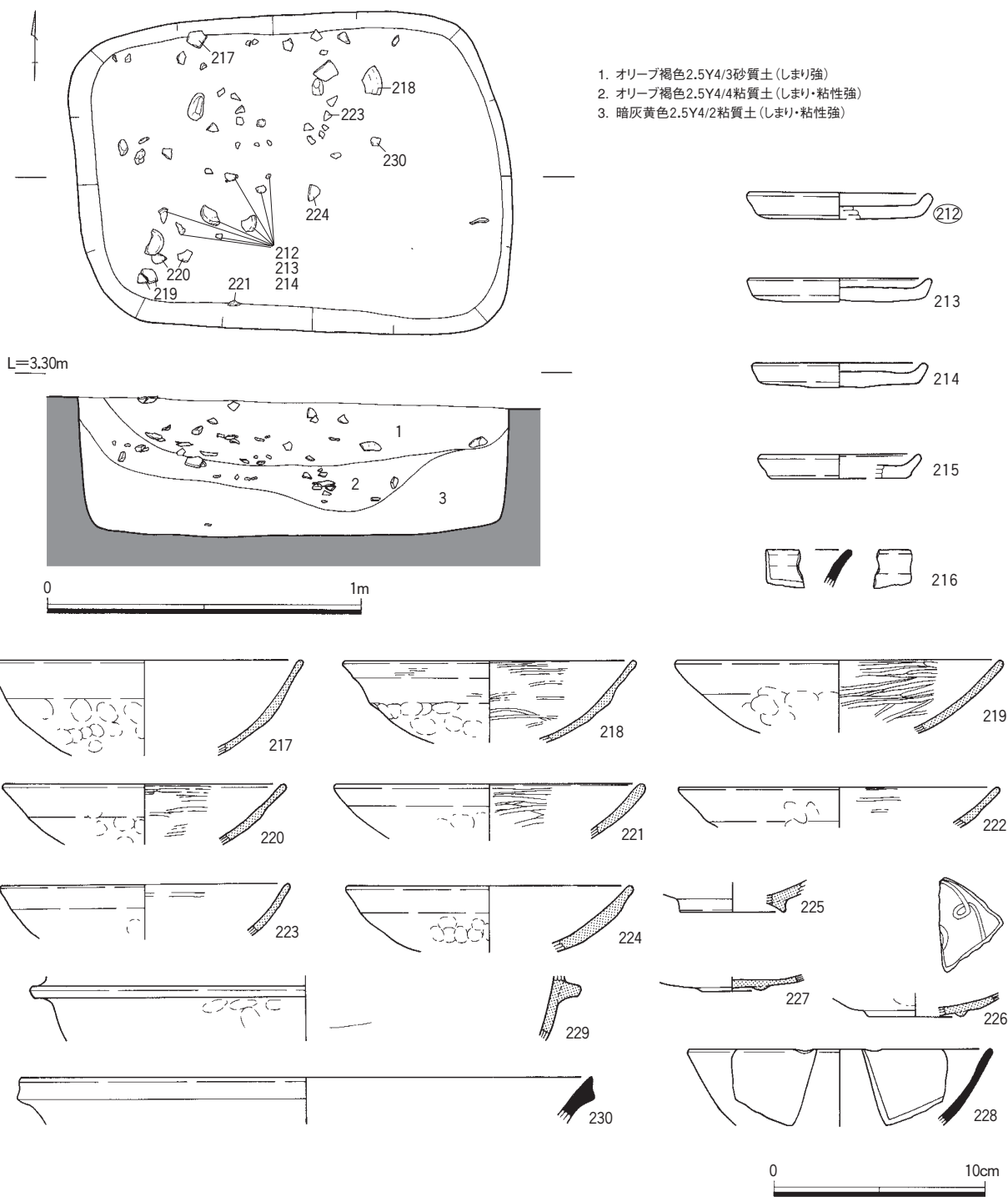


第60図 II-12区 SK11060遺構・遺物実測図



第61図 II-12区 SK11070遺構・遺物実測図





第62図 II-12区 SK11071遺構・遺物実測図

212～215は土師質土器皿である。非回転台成形とみられ、底部外面はナデ、またはユビオサエのちナデを施す。214は底部外面に粘土接合痕を残す。212・214・215は胎土にチャートを含む。京都系土師皿の在地模倣品で、概ね13世紀代に位置付けられる。213は胎土分析を行い(胎土分析試料No.34)、金雲母と火山ガラスを含むという結果を得たことから、在地産でない可能性をもつ。

216は灰釉陶器とみられる碗の口縁部片である。内面に施釉するが、自然釉の可能性もある。灰釉陶器なら、口縁の形状からH72窯式期以降とみられ、10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる。無

釉の山茶碗なら 11 世紀後半～ 12 世紀代か。

217～227 は瓦器碗である。217 は底部を欠く。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できず内面は調整不明。炭素吸着なく酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ－1 期（12 世紀後葉）に相当。218 は底部を欠き、歪みのため復元径過小。内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成。軟質焼成で磨耗により調整不明瞭。和泉型瓦器碗Ⅲ－2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。219 は底部を欠き、歪みのため復元径は過大。内面に密な横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器碗Ⅲ－2 期に相当する。

220～222 は和泉型瓦器碗Ⅲ－3 期（13 世紀前葉）に相当する。220 は上半部で内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。221 は上半部で、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。口縁が肥厚し外面のヨコナデは弱いことからスタンダードな和泉型ではない。222 は上部である。歪みのため復元径過大・傾き不正確。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良、胎土は酸化炎焼成気味。

223 は上半部で、内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、全体的に磨耗気味。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅳ－1 期（13 世紀中葉）に相当。224 は底部を欠く。器壁はやや厚め。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できず内面の調整不明。胎土に 3mm 大の赤色粒が目立つ。和泉型瓦器碗Ⅳ－1 期とみられるが、非和泉型の可能性もあり。

225～227 はいずれも底部である。225 は高台断面が逆三角形。炭素吸着は内面不良、外面は吸着なし。酸化炎焼成し、焼成不良により磨耗著しい。胎土にチャートみられる粒子を含む。Ⅱ－1～3 期（12 世紀前葉～後葉）とみられる。226 は断面逆台形状の低い高台をもつ。見込みに連結輪状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－3 期か。227 は断面蒲鋒形の低い高台をもつ。見込みは磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着良好。Ⅳ－1 期（13 世紀中葉）頃とみられる。

228 は青磁碗の上半部。口縁を輪花型に作るが、無施文である。釉は薄く、口縁は素地が露わになるほどだが、人為的な釉剥ぎによる口禿ではない。内面の釉厚は均一でなくムラがある。全体的に貫入を伴い、釉の表面は荒れ気味であるが、二次的な被熱によるものかは不明。型式・時期は不明。

229 は瓦質土器羽釜で、鏝部付近のみ残存。小片のため復元径や傾きは不正確。鏝部は貼り付けで、端部を方形に作る。内面は横位の板ナデか。炭素吸着良好。胎土は粗く花崗岩を含む。山城型瓦質羽釜の搬入品であろう。直線的な体部をもつ無脚のものと考えたが、天地逆の可能性も残る。その場合は内彎する体部をもつ脚付羽釜となる。13 世紀代と考えられる。230 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。小片のため復元径は不正確。口縁端部をわずかに拡張し、炭素付着。胎土に黒色粒を含む。森田編年第Ⅱ期（12 世紀中葉～13 世紀初頭）に相当。

土坑（土墳墓）1074 号（Ⅱ地区 SK11074）（第 63 図）

Ⅱ－12 区西部北側、f・g 10 グリッドに位置する。長軸 130cm 短軸 97cm 深度 35cm を測る隅丸長方形の土坑で、土墳墓とみられる。断面は方形で、埋土は 4 層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切り）・煮炊具・羽釜、瓦器片・碗・皿、が出土している。

231 は瓦器皿である。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。底体部境の断面で接合痕が確認できる。炭素吸着なし。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。

232～234 は瓦器碗の上半部。232 は内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面やや不良、

外面良好。焼成不良で磨耗・剥離が著しい。和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）に相当。233は復元径・傾き不正確。体部内面はやや粗い横位のヘラミガキ、見込みは平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着やや不良。胎土に花崗岩を含むとみられる。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。234は小片のため復元径不正確。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。内面～口縁外面に炭素吸着やや不良、体部外面に重焼痕を残す。強いヨコナデにより口縁端部内側をわずかに凹線状に作る。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期とみられるが、口縁外面のヨコナデ幅が狭いことなどから非和泉型の可能性あり。

土坑（土壌墓）1084号（Ⅱ地区 SK11084）（第64図）

Ⅱ－12区西部北側、e・f 8・9グリッドに位置する。長軸146cm短軸110cm深度24cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・土錘、須恵質土器甕、瓦器片・碗・皿、鉄滓、砂岩礫、が出土している。

235は低平な器形をもつ土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。236は回転台成形の土師質土器皿で、底部を欠く。胎土にチャートを含むことから在地産であろう。237は瓦器碗の下半部。断面が低い三角形の退化した高台をもつ。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により調整不明瞭。炭素吸着は良好だが胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

土坑（土壌墓）1085号（Ⅱ地区 SK11085）（第65図）

Ⅱ－12区西部北側、e・f 9グリッドに位置する。長軸135cm短軸93cm深度28cmを測る隅丸長方形土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層。遺物は、土師器羽釜、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・碗・皿、瓦質土器甕・貯蔵具、片岩礫、が出土。

238・239は瓦器皿。238は磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。239は底部を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。

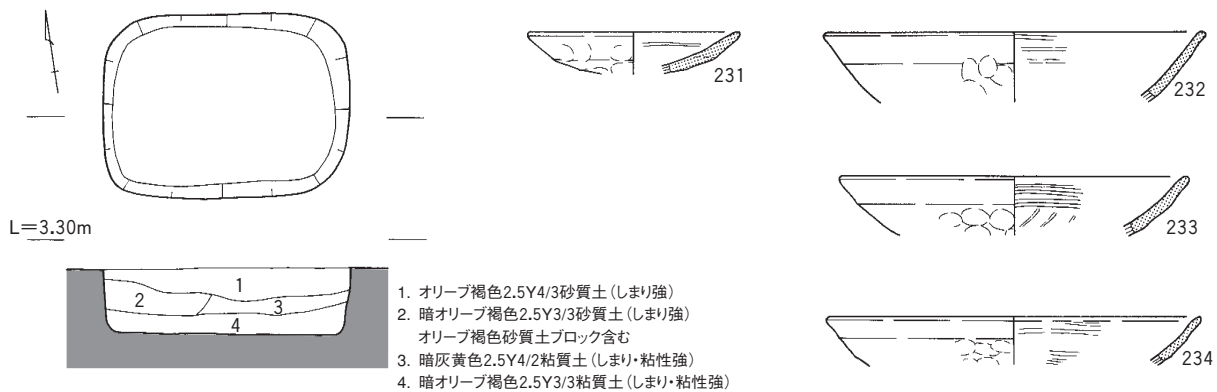
土坑（土壌墓）1086号（Ⅱ地区 SK11086）（第66図）

Ⅱ－12区西部北側、e 9グリッドに位置する。長軸160cm短軸90cm深度28cmを測る隅丸長方形土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層。遺物は、弥生土器片か、須恵器甕、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、須恵質土器捏鉢・甕・碗、瓦器片・碗・皿・加工円盤、鉄製品片・鉄釘か、が出土。

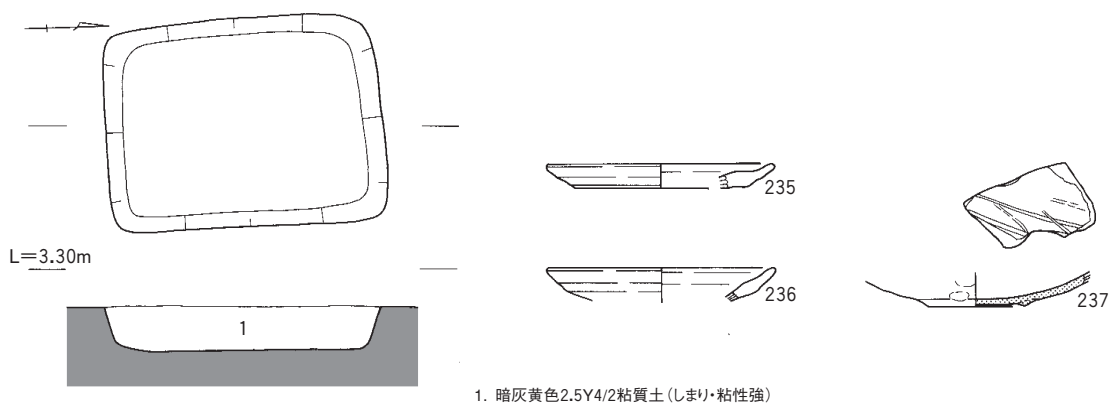
240は土師質土器杯で、底部を欠く。回転台成形による稜が明瞭。胎土に細粒が多く、器面がざらつく。チャートや在地花崗岩を含む。241は瓦器皿。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好で胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃とみられる。242は瓦器碗の上半部で、内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

243は須恵質土器碗の上部で、小片のため復元径は不正確。須恵器杯の可能性もあり。ヘラミガキは確認できない。やや軟質焼成。

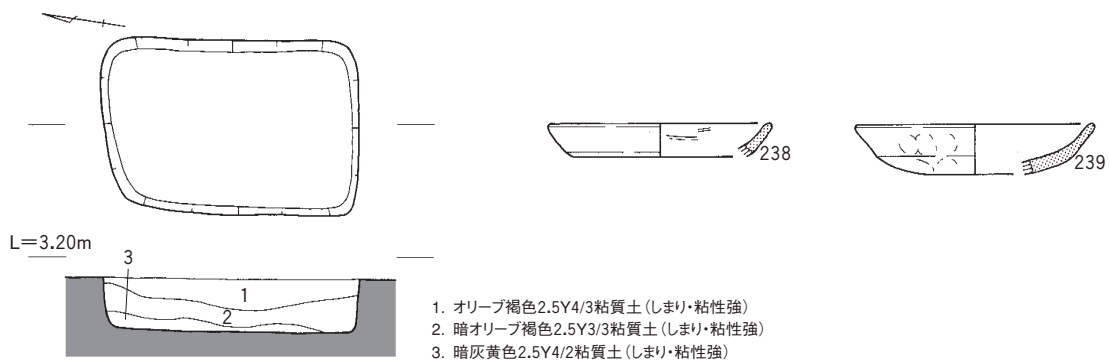
244は加工円盤である。瓦器碗の体部片を円形に打ち欠き、側面を部分的に研削する。炭素吸着やヘラミガキの痕跡は確認できない。245は鉄釘である。頭部を欠損し、下部でくの字に屈曲する。



第63図 II-12区 SK11074遺構・遺物実測図



第64図 II-12区 SK11084遺構・遺物実測図



第65図 II-12区 SK11085遺構・遺物実測図



土坑(土壌墓) 1087号(II地区 SK11087)(第67図)

II-12区西部北側、e9グリッドに位置する。北側をSD1104に切られる。長軸156cm短軸98cm深度40cmを測る隅丸長方形土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は埋土上位に多く、須恵器片・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯(回転糸切り)・煮炊具・羽釜・土錘、須恵質土器甕、瓦器片・椀・皿、被熱砂岩礫、砂岩礫、が出土。

246は細身の土師質土錘で一部欠損。胎土きわめて精良。

247～249は瓦器椀の上半部。247は内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面良好、内面は不良。和泉型瓦器椀Ⅱ－3期（12世紀後葉）に相当。248は内面に粗い横位のヘラミガキを施し、一部は強いミガキによって沈線状を呈する。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。249は内面に横位のヘラミガキを施す。口縁内面～外面にかけて炭素吸着良好で、体部内面は重焼により炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）頃か。

土坑（土壙墓）1088号（Ⅱ地区 SK11088）（第68図）

Ⅱ－12区西部北側、e 8・9グリッドに位置する。北側をSP14240に切られる。長軸残存長122cm短軸97cm深度27cmを測る隅丸方形土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、山茶碗か、壁土、が出土。

250は無釉陶器の山茶碗とみられる底部である。回転台成形で、回転ヘラ切りのち底体部の境に高台を貼り付け。内面の底体部境に、重焼による別個体の高台剥離痕が残る。体部内面と高台外面に自然釉が斑状に付着。産地は特定できないが、尾張型の型式で考えると高台の形状から4期（12世紀前葉～中葉頃）に相当するとみられる。

251は土師質土器鍋の口縁部。内面に粗いヨコハケを施す。胎土に角閃石が目立つほか、金雲母を含むことから瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。外面煤付着。

土坑（土壙墓）1090号（Ⅱ地区 SK11090）（第69図）

Ⅱ－12区西部中央、d・e 9グリッドに位置する。長軸155cm短軸78cm深度32cmを測る隅丸方形土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は1層である。遺物は、弥生土器片か、土師器羽釜、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、結晶片岩製砥石、砂岩製砥石か、被熱砂岩礫、チャート・片岩礫、が出土。

252は摂津C型の土師器羽釜上部片。1cmを超える厚い器壁をもつ。口縁と鏝部が近接し、鏝部は貼り付け、鏝端部は方形に作る。鏝部下面以下に煤付着。胎土は粗く、花崗岩とみられる粒子を含む。

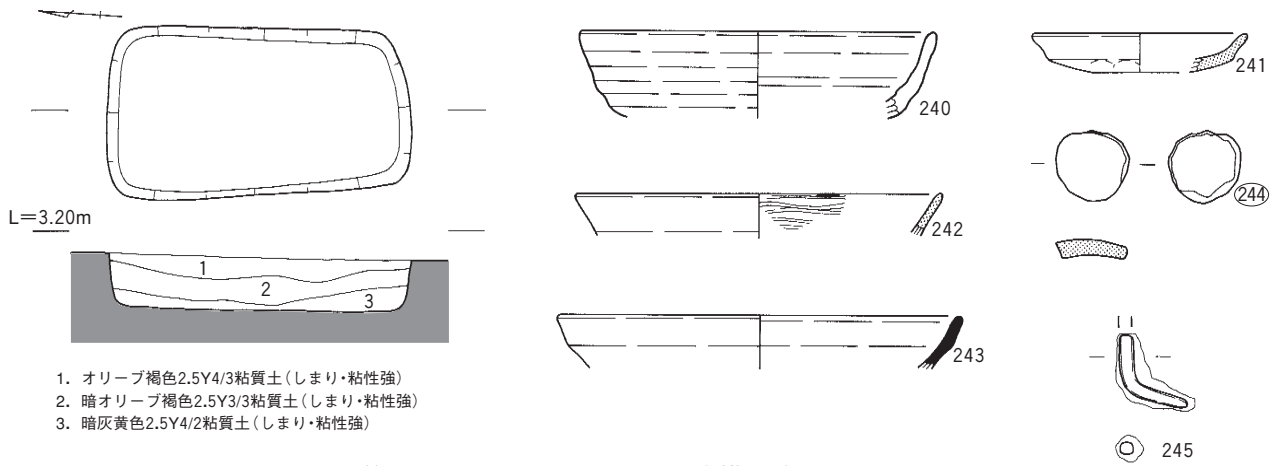
土坑（土壙墓）1091号（Ⅱ地区 SK11091）（第70図）

Ⅱ－12区西部中央、d・e 9グリッドに位置する。長軸146cm短軸78cm深度34cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・椀、が出土している。

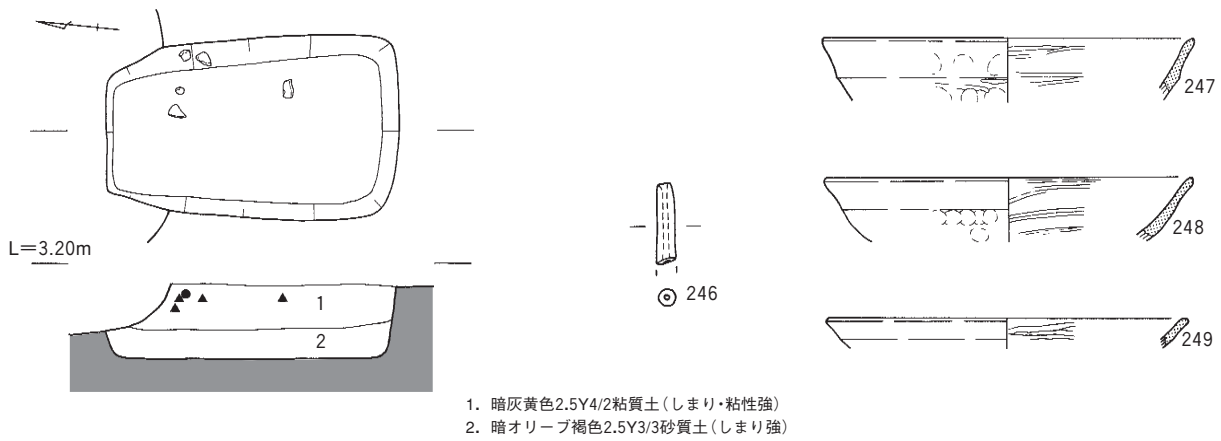
253は瓦器椀の上半部。外面の口縁・体部境に横位のヘラミガキ、内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はきわめて良好で、金属光沢を伴う。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。254は瓦器椀の底部で、断面三角形の低い高台をもつ。見込みに直線のヘラミガキがみえることから、平行ヘラミガキ暗文を施すと考えられる。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

土坑（土壙墓）1097号（Ⅱ地区 SK11097）（第71図）

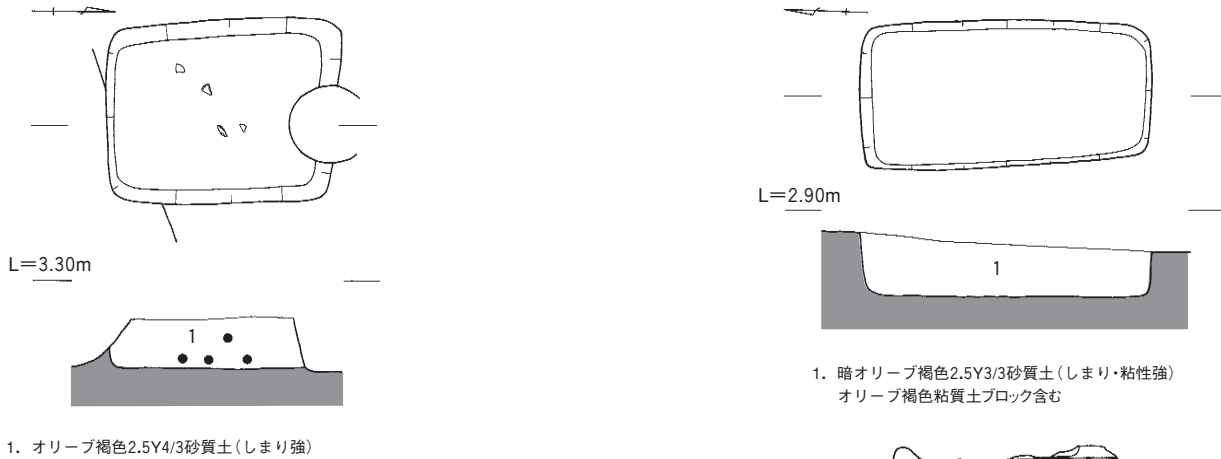
Ⅱ－12区西部北側、e 8グリッドに位置する。長軸166cm短軸108cm深度24cmを測る隅丸方形の土坑で、



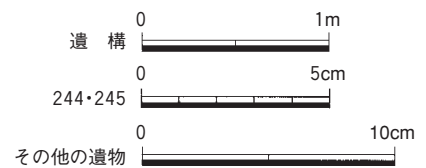
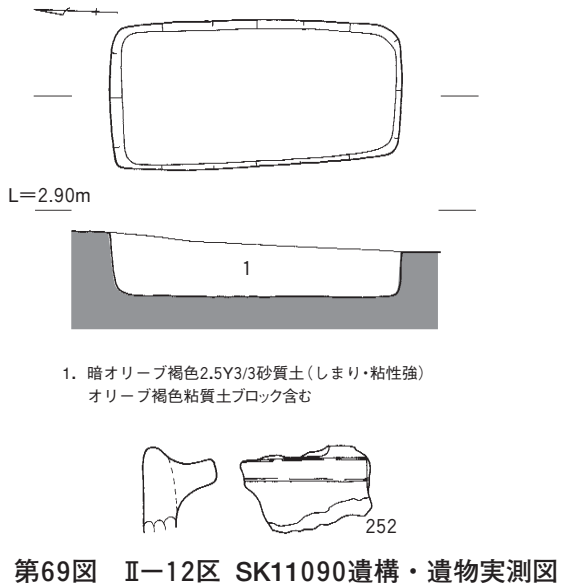
第66図 II-12区 SK11086遺構・遺物実測図



第67図 II-12区 SK11087遺構・遺物実測図



第68図 II-12区 SK11088遺構・遺物実測図



土墳墓とみられる。断面は方形で、埋土は4層に分層できる。遺物は、黒色土器碗(B類)、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯・煮炊具、瓦器片・碗・皿、鉄釘、が出土している。

255は瓦器皿である。軟質焼成で、摩耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着不良。和泉型瓦器Ⅳ期頃か。

256～259は瓦器碗。256は上半部で、小片のため復元径・傾き不正確。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に相当。

257は底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、螺旋状か。炭素吸着は内面が非常に良好で金属光沢をもち、外面は良好であるが重焼により部分的に吸着不良。体部外面に接合痕が確認できる。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。

258・259は底部。258は見込みに密なヘラミガキを施す。炭素吸着は外面良好、内面は吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅱ-1期(12世紀前葉)とみられる。259は断面逆台形状の低い高台をもつ。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。胎土に花崗岩を含む。中央寄りに径2mmの穿孔を施す。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)頃か。

260は鉄釘で、両端部を欠く。

土坑(土墳墓) 1098号(Ⅱ地区 SK11098)(第72図)

Ⅱ-12区西部北側、e8グリッドに位置する。長軸178cm短軸104cm深度20cmを測る隅丸長方形土坑で、土墳墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片、鉄製品片、が出土している。実測可能な遺物は皆無。

土坑(土墳墓) 1099号(Ⅱ地区 SK11099)(第73図)

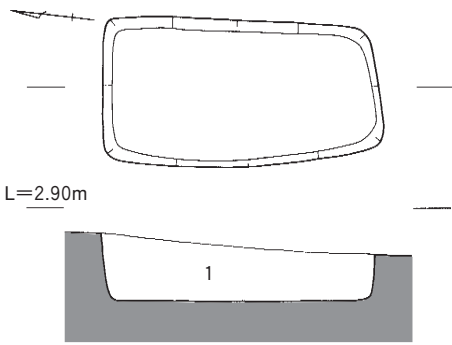
Ⅱ-12区西部北側、e8グリッドに位置する。長軸160cm短軸120cm深度22cmを測る隅丸長方形土坑で、土墳墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯・煮炊具、瓦器片・碗、白磁皿、が出土。

261は瓦器碗の上半部。口縁外面にヨコナデによって浅い2条の沈線を引く。内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。軟質焼成で、摩耗により調整不明瞭。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当する。

土坑(土墳墓) 1100号(Ⅱ地区 SK11100)(第74図)

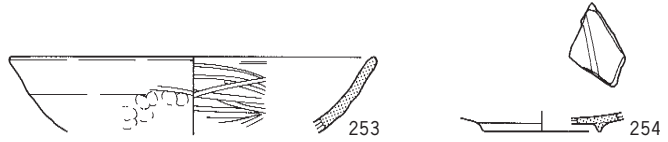
Ⅱ-12区西部北側、d・e8グリッドに位置する。長軸154cm短軸92cm深度31cmを測る隅丸長方形土坑で、土墳墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、須恵器片、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗・皿、鉄製品片・鉄滓、が出土。

262は瓦器皿で、底部中央を欠く。小型品で、器壁も薄い。炭素吸着不良で酸化炎焼成する。軟質で摩耗によりヘラミガキが確認できない。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。263は東播系須恵質土器捏鉢の口縁部片で、片口付近とみられる。端部は内上方にわずかに拡張し炭素が付着。胎土に黒色粒目立つ。森田編年第Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀初頭)に相当。

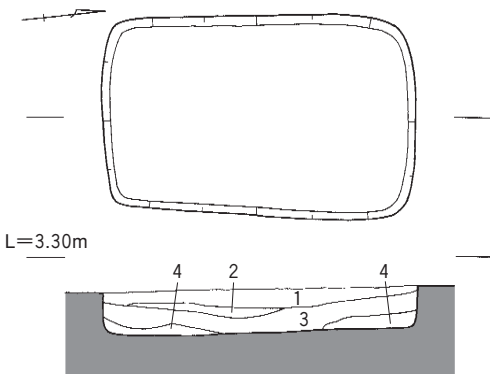


L=2.90m

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む

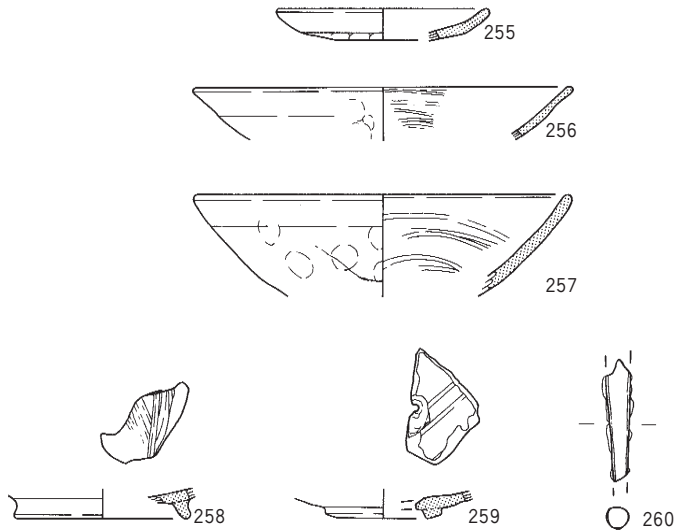


第70図 II-12区 SK11091遺構・遺物実測図

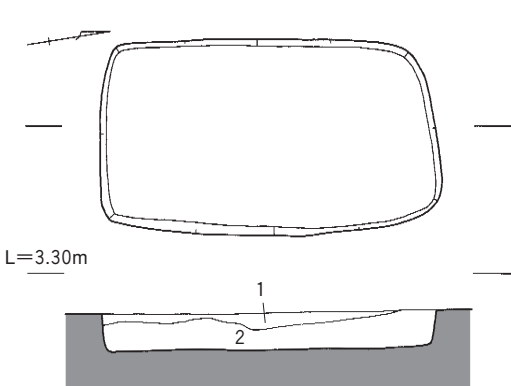


L=3.30m

1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む
4. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)

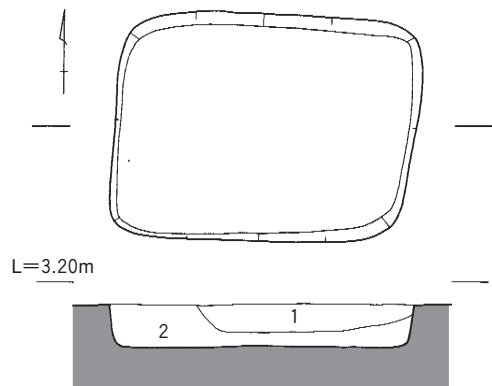


第71図 II-12区 SK11097遺構・遺物実測図



L=3.30m

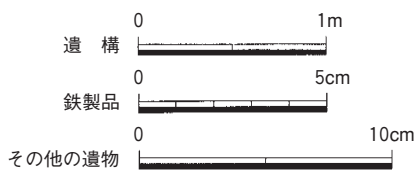
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土(しまり・粘性強)



L=3.20m

1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)

第72図 II-12区 SK11098遺構実測図



第73図 II-12区 SK11099遺構・遺物実測図

土坑（土壌墓）1102号（Ⅱ地区 SK11102）（第75図）

Ⅱ-12区西部北側、d 8グリッドに位置する。長軸107cm短軸82cm深度20cmを測る隅丸長方形土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀・加工円盤、サヌカイト片、が出土している。264は加工円盤である。瓦器片を研削加工し、径1.8cmの円形に作る。炭素吸着不良で、片面にユビオサエの痕跡が残る。

土坑（土壌墓）1113号（Ⅱ地区 SK11113）（第76図）

Ⅱ-12区西部北側、e 7グリッドに位置する。長軸127cm短軸124cm深度24cmを測る隅丸方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は1層である。遺物は、黒色土器椀（A類）、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切り）・煮炊具、瓦器片・椀・皿、青白磁輪花皿、鉄釘、が出土している。

265は青白磁の輪花皿で、底部を欠く。復元口径8.1cmの小型品で、口縁は外反し端部を尖らせる。釉の表面にごく細かな荒れがみられる。時期不詳。

不明遺構1001号（Ⅱ地区 SX11001）（第77図）

Ⅱ-12区北東隅、l・m 3・4グリッドに位置する。西側をSD1082・SK11001・SP14013が切り、東側は調査区外に延びる。長軸残存長404cm短軸残存長149cm深度10cmを測る円形の落ち込みである。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。

遺物は、土師器甕、黒色土器椀（A類）、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋・椀・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀・皿、スラグ、泥岩礫（黒基石か）、が出土している。

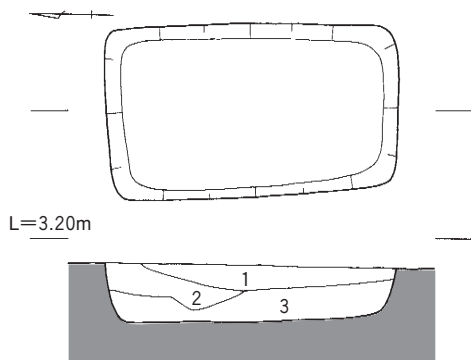
266は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面は回転ヘラ切りとみられるがナデ消しによって不明瞭。267は瓦器皿である。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。口縁内面～外面に炭素吸着良好で、体部内面以下は吸着なし。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。

溝2号（Ⅱ地区 SD1002）（第4・78図）

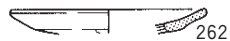
Ⅱ-1・4・12区、ε-Ⅳ・V c～f 12～10グリッドに位置し、西の延長上に位置するⅠ地区SD1056に繋がると考えられる。Ⅱ地区での検出長101.1m幅290cm深度72cmを測り、主軸はN83°Eを向く東西方向に走る溝である。断面は逆台形状で、部分的に段をもつ。埋土は7層に分層できる。

今回Ⅱ-12区では西部北側、e・f 4～10グリッドに位置し、南側はSR1001に切られる。検出長37.1m幅290cm深度30cmを測る。東西方向に走る溝であるが、東端部で南にほぼ直角に屈曲しN20°Wを向く。断面は緩い逆台形状で、部分的に段をもつ。埋土は2層に分層でき、底面は東に向けて下がる。

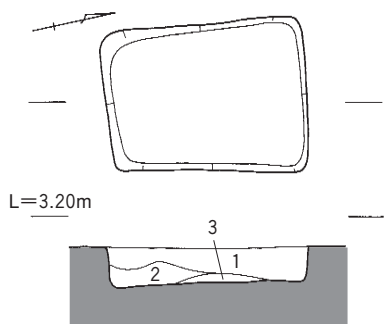
Ⅱ-12区での出土遺物は、縄文土器片、土師器羽釜・甕、黒色土器片（A類）・椀（A・B類）か、須恵器片・供膳具・杯・貯蔵具・甕、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り・ユビオサエほか）・杯（回転糸切り・ユビオサエほか）・羽釜・煮炊具・椀・鍋・貯蔵具・土錘、須恵質土器片・捏鉢か・甕・椀・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、平瓦、瓦質土器片・播鉢、常滑甕、中世陶器片（鉄釉か）・皿（瀬戸焼）・甕・貯蔵具、褐釉陶器壺か・灰釉陶器折縁皿、青磁碗（蓮弁ほか）、白磁碗・皿、青白磁碗・合子、鉄製品片・鉄釘、スラグ、鞆羽口・鉄滓、壁土、サヌカイト製石鏃、砂岩製叩石、石英円礫（白基石）、被熱砂岩礫・片岩礫・チャート剥片・礫、がある。ただし本遺構はSD1017と同一遺構として掘削したため、一部の



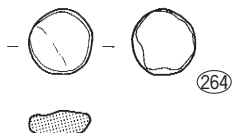
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)



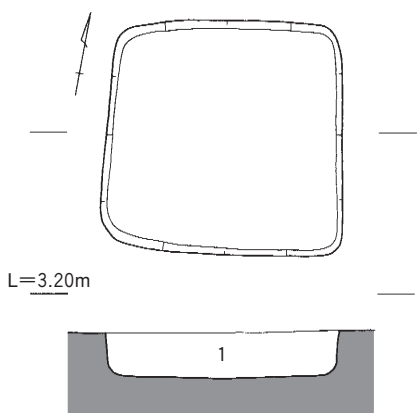
第74図 II-12区 SK11100遺構・遺物実測図



1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)
3. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)



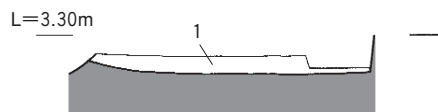
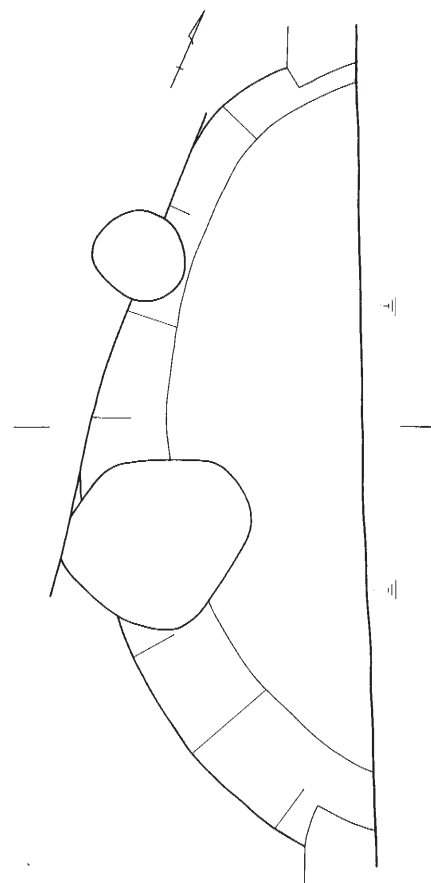
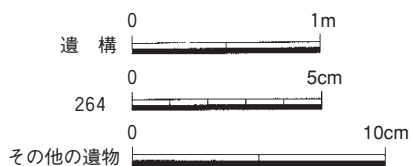
第75図 II-12区 SK11102遺構・遺物実測図



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む



第76図 II-12区 SK11113遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



第77図 II-12区 SX11001遺構・遺物実測図

遺物は混在する。

268 は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。軟質焼成。269～272 は非回転台成形の土師質土器皿で、底部外面にユビオサエのちナデを施し、269 は指頭圧痕をナデ消す。いずれも京都系土師皿の在地模倣品。概ね 13 世紀代。273 は完形の土師質土器杯。非回転台成形で、体底部外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。京都系土師皿 D または E タイプの模倣品か。概ね 13 世紀代。

274 は瓦器皿。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好だが胎土は酸化炎焼成する。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃とみられる。

275～277 は瓦器碗。275 は内面に粗い横位のヘラミガキを施し、見込みの平行ヘラミガキ暗文は不揃い。炭素吸着やや不良で、体部外面は重焼により部分的に吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅲ－2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。276 は歪みのため復元底径過小。高台断面はきわめて低平な逆三角形状を呈する。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着やや不良で、軟質焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ－3 期（13 世紀前葉）に相当。

277 は下半部。高台は径が大きく断面はしっかりとした逆台形状。外面にやや崩れた分割ヘラミガキ、見込みに密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅰ－3 期（11 世紀末～12 世紀初頭）頃であろう。

278 は白磁皿の底部である。底部外面も含め、残存部は全て施釉する。釉は厚めに掛かる。口縁部を伴わないが口禿の大宰府分類白磁皿Ⅸ－1 類（13 世紀中頃～14 世紀初頭）とみられる。279 は青磁碗の下半部である。外面にヘラ先による細蓮弁文を施文し、見込みに草花文をスタンプする。全面に施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。露胎部は赤色化。上田分類 B－Ⅳ－b 類（15 世紀末～16 世紀初頭）に相当。

280 は摂津 C 型の土師器羽釜上部。口縁に近接して鏝部を貼り付ける。口縁・鏝の両端部とも方形につくる。胎土は粗く、角閃石とみられる黒色鉱物が確認できる。11 世紀代前後に位置付けられる。

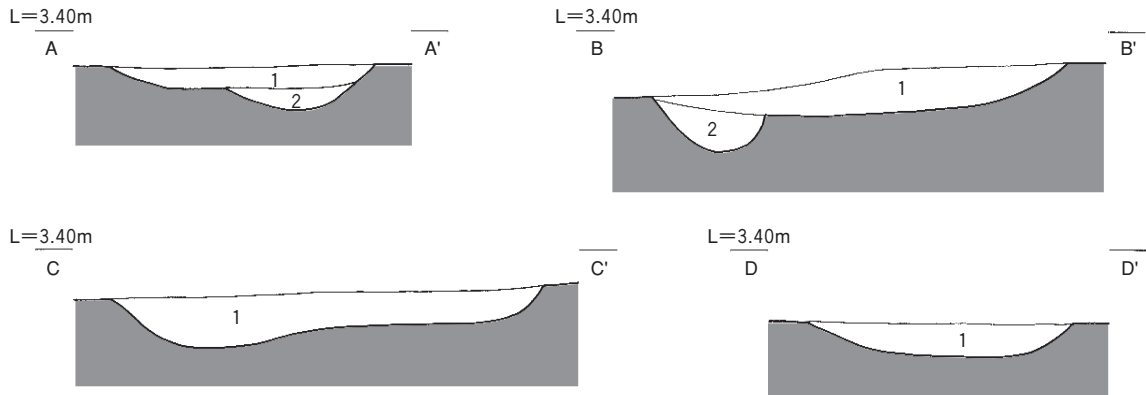
281・282 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。281 は口縁端部を上方に拡張し、重焼により口縁外面に炭素付着。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。282 は口縁端部を上方に大きく拡張し、重焼により口縁外面に炭素および自然釉が付着。森田編年第Ⅲ期第 1 段階（13 世紀前半～後半）に相当。

283 は褐釉陶器の口縁部で、壺か水注であろうか。釉は薄く、部分的に細かな貫入を伴う。輸入陶器であるが、産地・時期ともに不明。284・285 は土師質管状土錘。284 は完形でやや細身。胎土は精良で、在地花崗岩を含むとみられる。285 は細身である。胎土は精良。いずれも軟質焼成。

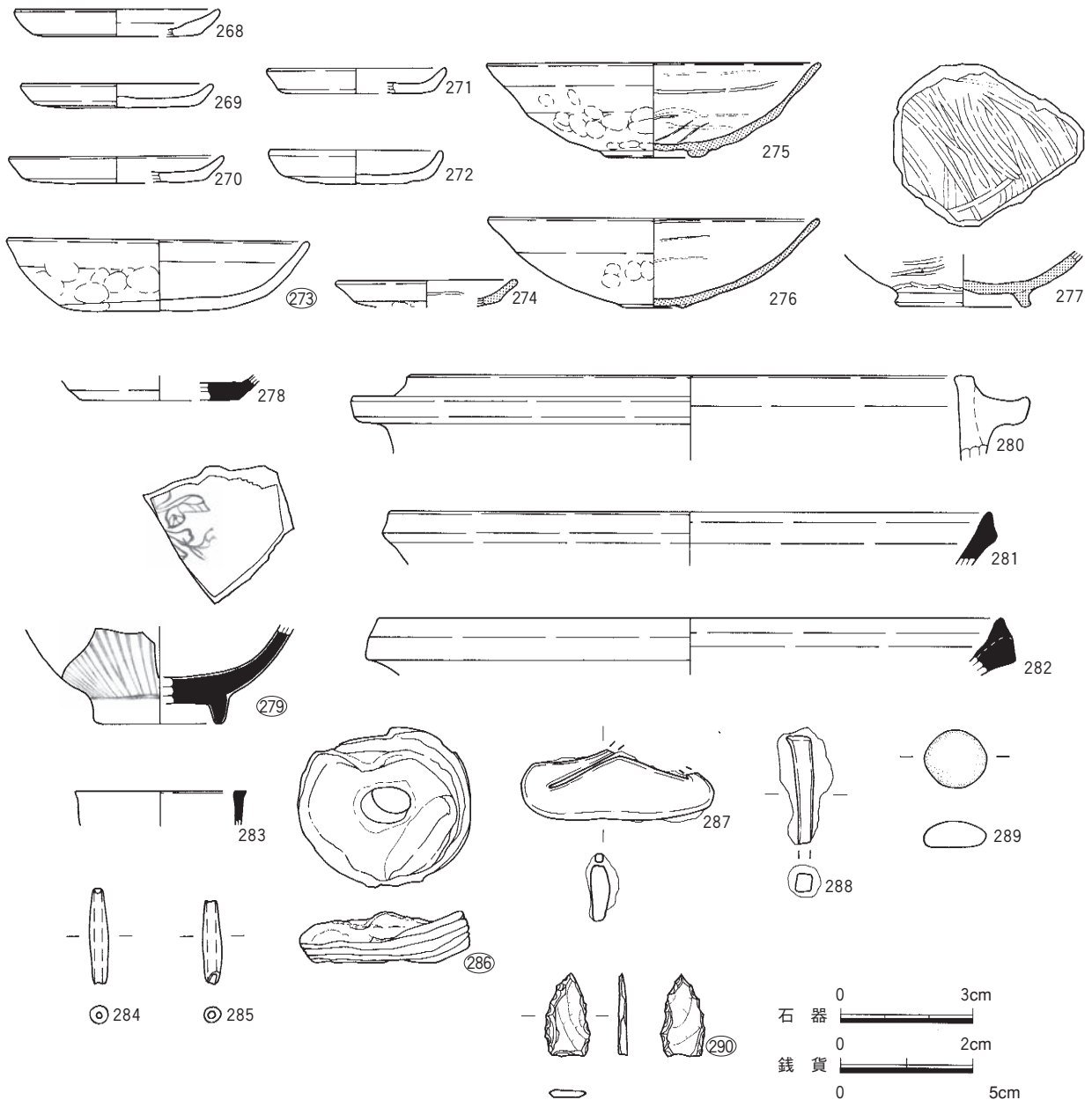
286 は癒着した銭貨である。緑青を生じていることから青銅製とみられる。5 点がほぼ重なった状態で溶着・変形しており、被熱によるものと判断される。最上部の 1 点は 7 割程度を失う。いずれも銭文は判読できない。287 は山形の火打金で両端部を上方に折り返す。下辺部は使用により磨耗。288 は鉄釘で、先端部を欠く。

289 はやや扁平な石英の白色自然円礫で、表面は滑らか。長径 1.9cm を測る。白基石の可能性もある。290 はサヌカイト製の平基式石鏃で、全長 1.9cm の小型品。側縁部のみ細かく加工し、表裏とも剥離面を大きく残す。混入品である。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀前後～13 世紀後半に位置付けられる。



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)
 2. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)



第78図 II-12区 SD1002遺構・遺物実測図

溝 17 号 (Ⅱ地区 SD1017) (第 4・79 図)

Ⅱ - 4・12 区、ε - Ⅳ・Ⅴ、e・f 20 ~ 7 グリッドに位置する。全長 33.0 m 幅 89cm 深度 71cm を測り、主軸は N83° E を向く東西方向の溝である。今回 Ⅱ - 12 区では西部北端、e・f 5 ~ 7 グリッドに位置し、検出長 9.3 m 幅 93cm 深度 20 ~ 71cm を測り、主軸は N77° E を向く。埋土は 1 層である。

遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具、須恵質土器甕、中世陶器貯蔵具、白磁碗、近世陶器皿 (肥前系)、鉄製品片・鉄釘、片岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。本遺構は調査時に SD1002 と同一遺構として掘削したため一部の遺物は混在する。

291 は白磁碗の上半部で、口縁を玉縁につくる。わずかに釉とびを伴う。胎土には微細な黒色粒を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類 (11 世紀後半 ~ 12 世紀前半) に相当。

溝 60 号 (Ⅱ地区 SD1060) (第 4・80 図)

Ⅱ - 7・12 区、f ~ 1 13・14 グリッドに位置する。南側は SR1001・攪乱に切られる。検出長 33.4 m 幅 92cm 深度 16cm を測り、主軸は N8° W を向く南北方向の溝である。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。

遺物は、弥生土器片か、黒色土器片 (B 類) か、須恵器片・供膳具・杯・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器捏鉢・甕か・貯蔵具か、瓦器片・椀、常滑甕、鉄製品片・鉄滓、片岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。遺構の年代は、出土遺物および SD1059 との関係から、概ね 12 世紀後半 ~ 13 世紀前半の年代が与えられる。

溝 62・68 号 (Ⅱ地区 SD1062・SD1068) (第 4・81 ~ 84 図)

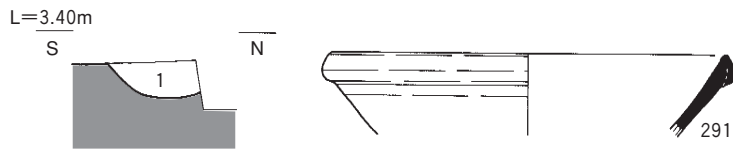
SD1062 は Ⅱ - 7・9・12 区、g ~ n 13 ~ 15 グリッドに位置する。検出長 35.3 m 幅 140cm 深度 19cm を測り、主軸は N15° W を向く南北方向の溝。断面は浅い U 字状で、埋土は 1 層である。底面は南に向けてわずかに下がる。南端部で東に屈曲し、SD1094 に繋がる可能性がある。

遺物は、土師器羽釜、黒色土器椀 (A・B 類)、須恵器片・供膳具・杯・皿・貯蔵具・壺・甕、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り・ユビオサエほか)・杯 (回転糸切り・ユビオサエほか)・播鉢か・煮炊具・羽釜・鍋・椀か・土錘・不明土製品、須恵質土器片・捏鉢・甕・貯蔵具 (砥石転用か)・壺、瓦器片・椀・皿、瓦質土器甕、常滑甕、中世陶器貯蔵具、青磁皿・碗、白磁碗、鉄製品片・鉄釘・スラグ・鉄滓か、凝灰岩製砥石・砂岩製叩石・被熱砂岩礫 (台石片ほか)・花崗岩礫・片岩礫・砂岩礫チャート礫、が出土。

SD1068 は Ⅱ - 9・12 区、f ~ n 14 ~ 16 グリッドに位置する。検出長 42.1 m 幅 188cm 深度 69cm を測り、主軸は N15° W を向く南北方向の溝。断面は U 字状で埋土は 5 層に分層。底面は南に向けて下がる。

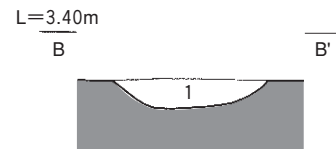
遺物は、土師器羽釜、黒色土器片 (A・B 類)、須恵器片・供膳具・杯・皿・貯蔵具・壺・甕、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り・ユビオサエ)・杯 (回転糸切り・ユビオサエ)・播鉢か・煮炊具・羽釜・鍋・椀か・土錘・不明土製品、須恵質土器片・捏鉢・甕・貯蔵具 (砥石転用か)・壺、瓦器片・椀・皿、瓦質羽釜・甕・煮炊具 (脚部)、土師質瓦、常滑甕、中世陶器貯蔵具・陶器転用硯、青磁皿・碗、白磁碗、鉄製品片・鉄釘・スラグ・鉄滓か、凝灰岩製砥石・結晶片岩製砥石・砂岩製砥石・被熱砂岩礫 (台石片ほか)・花崗岩礫・片岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。

遺物は握拳大 ~ 人頭大の礫が平均的に多く検出されたが、掲載遺物は北半部に集中している。出土層



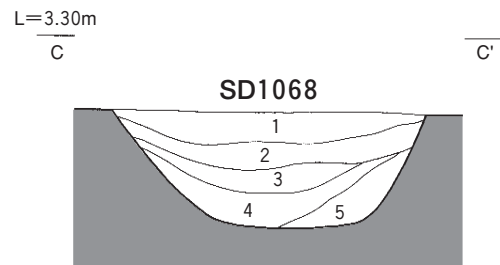
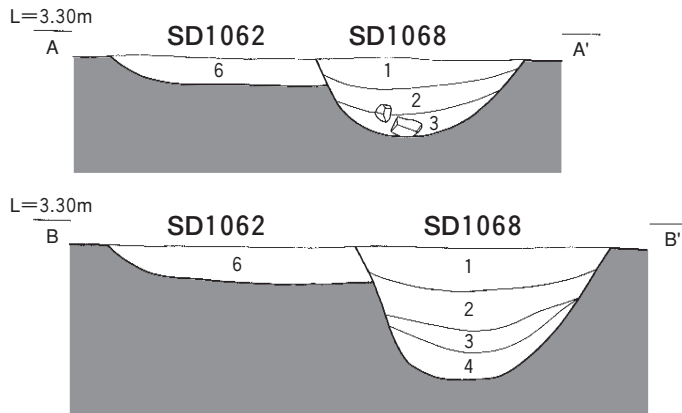
1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性弱)

第79図 II-12区 SD1017
遺構・遺物実測図

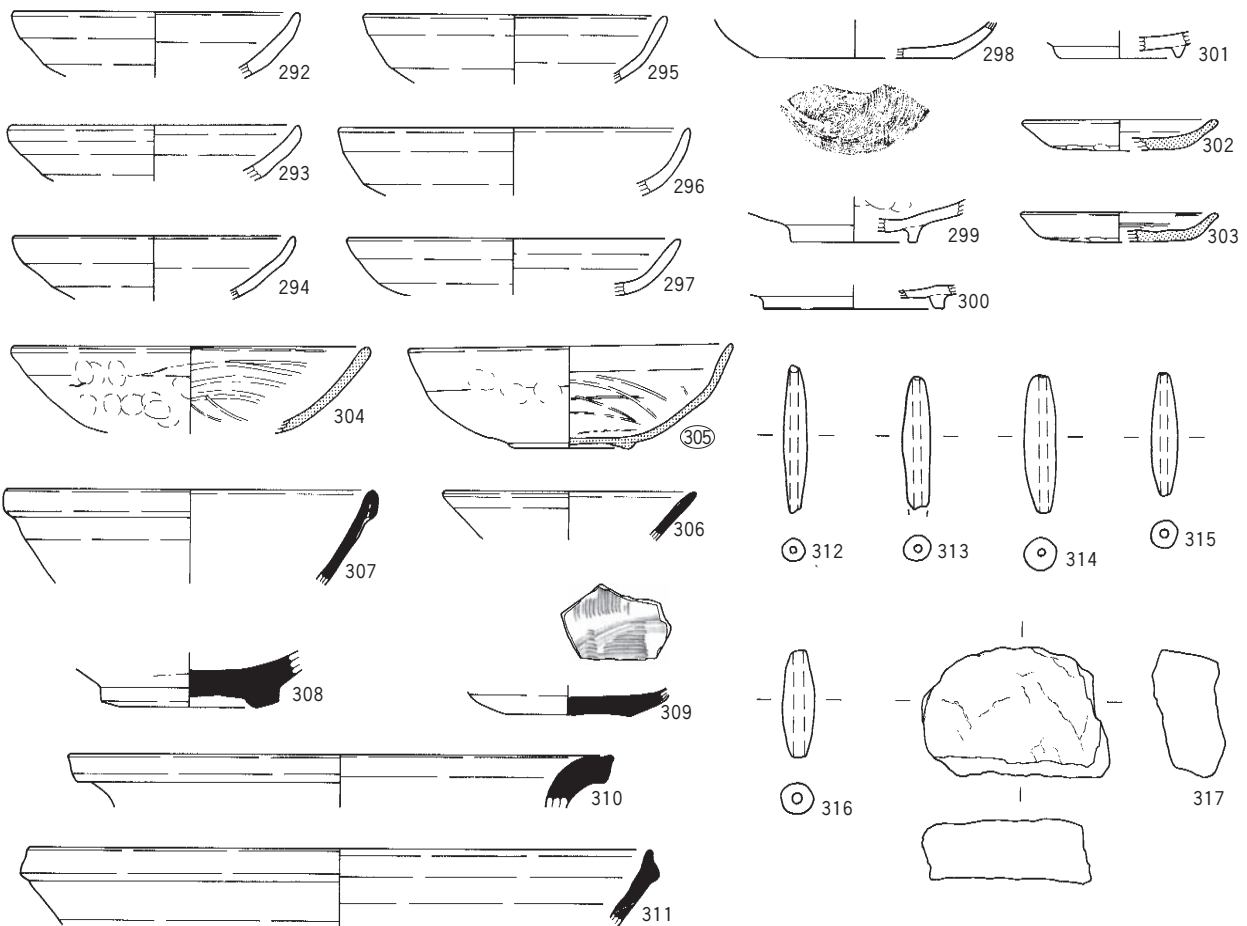


1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)

第80図 II-12区 SD1060
遺構断面図

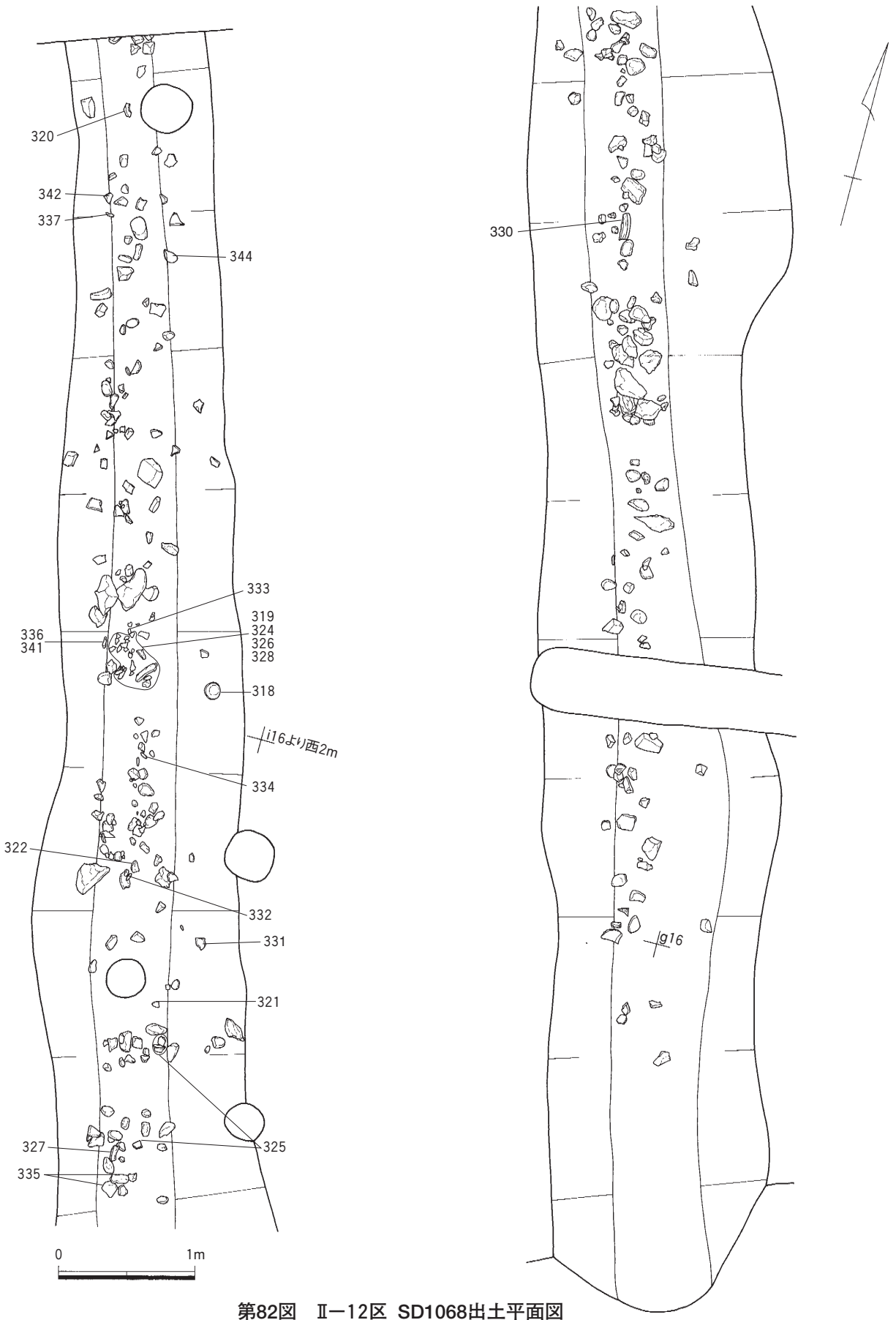


1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり弱)
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
3. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)
4. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
焼土多く含む
5. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
6. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)



第81図 II-12区 SD1062・1068遺構・遺物実測図





第82図 II-12区 SD1068出土平面図

位は、埋土上位から 318・320・336・341、中位から 321・322・325・327・331・332・334・337・342、下位および底部から 319・324・326・328・330・333・335・344 が出土している。

292～317 は SD1062・1068 の出土遺物で、出土遺構の特定が不可能なものである。

292～297 は回転台成形の土師質土器杯で、いずれも底部を欠く。体部は内彎気味に仕上げる。296 は外面に煤が付着。298 は土師質土器杯で、口縁を欠く。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は磨耗により調整不明瞭。

299～301 は土師質土器碗の底部である。高台の断面形状は、299・300 は逆台形状、301 が逆三角形状を呈する。色調は淡黄色を呈し、胎土はやや粗く花崗岩粒を含む。吉備系の土師質土器碗で山本編年に照らすと、299 がⅢ-1～2 期（13 世紀代）、300 がⅡ～Ⅲ-2 期（12 世紀後半～13 世紀後半）、301 がⅢ-2～3 期（13 世紀後半～14 世紀初頭）に位置付けられる。

302・303 は瓦器皿である。302 は磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。303 は内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃とみられる。

304・305 は瓦器碗である。304 は底部を欠く。口縁から体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。体部外面に接合痕が確認できる。炭素吸着は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3 期（13 世紀前葉）に相当。305 は完形品である。口径は 12.7cm とやや小振りであるが、腰が張った深みのある器形を呈する。高台断面は低平な逆台形状で貼り付けは粗雑。体部内面に横位・斜位の粗いヘラミガキを施す。内面の口縁・体部境にヨコナデによる稜をもつ。炭素吸着不良で軟質焼成。磨耗著しく、見込みのミガキは確認できない。和泉型を模倣した在地産瓦器碗と考えられる。

306 は白磁皿で底部を欠く。釉はやや厚めに掛かり外面に釉とびを伴う。大宰府分類の白磁皿Ⅷ類（12 世紀中頃～13 世紀前半）とみられる。

307・308 は白磁碗。307 は上半部。口縁を玉縁につくる。外面にわずかな釉とびを伴う。胎土に微細な黒色粒を含む。308 は白磁碗の底部。削り出し高台で内側は浅い。内面および体部外面下位まで施釉し以下露胎。胎土に微細な黒色粒を含む。ともに大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11 世紀後半～12 世紀前半）に位置付けられる。

309 は青磁皿の底部である。見込みにヘラ片彫文のち櫛描文を施文する。全面施釉ののち底部外面の釉を掻き取る。釉は透明度高く、貫入を伴う。釉の色調に違和感があるが、大宰府分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2 類（12 世紀中頃～後半）に相当。

310 は東播系須恵質土器甕の上部。口縁は大きく外反し、口縁内面は強いヨコナデにより浅く凹む。端部は方形に仕上げ、わずかに上下に拡張する。概ね 12 世紀代とみられる。311 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。口縁端部を上方に拡張する。森田編年第Ⅱ期第 1 段階（12 世紀中葉～後半）に相当。

312～316 は土師質管状土錘で、313 を除く 4 点は完形。いずれも紡錘形を呈するが、316 はやや太身で、312 は細身。軟質焼成のものが目立つ。いずれも胎土にチャートを含む。313 は器表面・胎土ともに黒化する。317 は花崗岩の礫である。3 面は自然面、残る 3 面は欠損。在地産ではなく大阪湾岸～瀬戸内沿岸の産であろう。加工や使用の痕跡は確認できず用途不明。

318～344 は SD1068 の出土遺物として特定できたものである。埋土上位から 318・320、中位から 321・322・325・327・331・332・334、下位から 319・324・326・328・330・335、遺構底部から 333 が出土。

318 は完形の土師質土器杯である。口縁など器形に歪みあり。非回転台成形で、体底部内外面に指頭

圧痕を残す。磨耗により調整不明瞭。底部外面に粘土接合痕を確認。胎土に金雲母および花崗岩とみられる粒子を含むことから、瀬戸内沿岸または畿内方面からの搬入品と考えられる。京都系土師皿Dタイプか、その模倣品であろう。概ね13世紀代。

319は瓦器碗の上半部。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅳ-1期とみられ、13世紀中葉の年代が与えられる。320は瓦器碗の底部。高台は断面逆台形状を呈し、幅と高さを保つ。見込みに密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅱ-1期（12世紀前葉）前後とみられる。

321は青磁碗の上半部。口縁は小さく外反する。体部外面はヘラ片彫蓮弁文のち縦位の櫛描文を施文、内面はヘラ片彫によって蕉葉文を施文する。釉にごく粗い貫入を伴う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。322は青磁碗の体部。内面に櫛描文とヘラ先・ヘラ片彫による花文を施文。体部外面下位は回転ヘラケズリを施す。釉の透明度高い。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3類（12世紀中頃～後半）に相当。

323は瓦質土器煮炊具の脚部で、上部3割程度が残存。明瞭な屈曲をもたず外下方に直線的に伸びる。本体との接合部は、上端をユビナデによって貼り付けたのち、側面から下辺側にかけて粘土紐を巻き付けて接合。炭素吸着やや不良で、内側は被熱によりカーボンを消失。胎土は酸化炎焼成し、砂岩や泥岩を含有する。形状は山城型瓦質三足羽釜に近似するが、胎土などからその模倣品ではないかと考える。概ね13世紀代か。

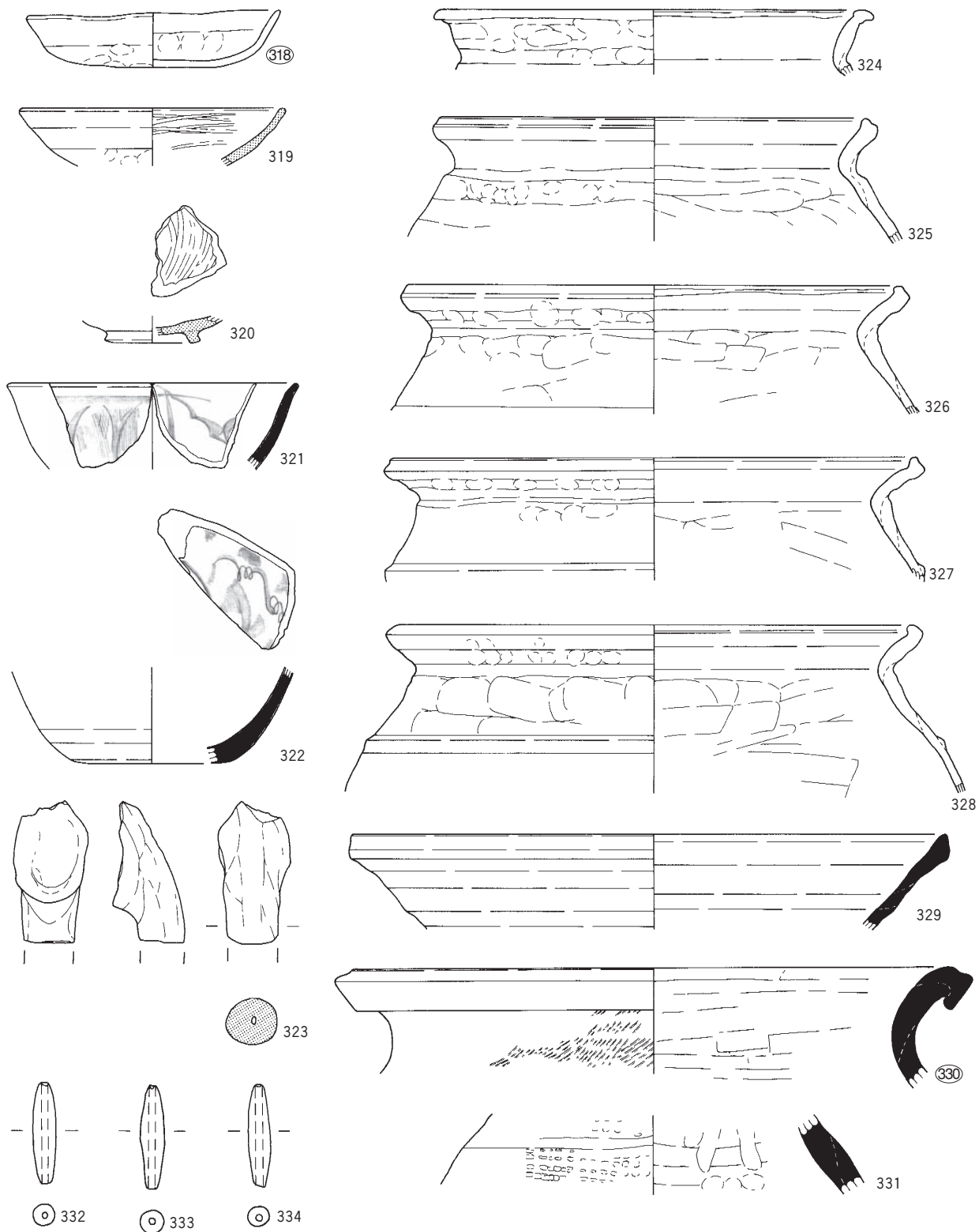
324～328は土師質土器の紀伊型鍔付鍋で、いずれも体部上位まで残存する。紀伊型鍋は体部中位以下は器厚を減じるために細片となり、復元困難な個体がほとんどを占める。鍔が残存する327・328は鍔部断面が小さな三角形状を呈し、退化が進行していることを示す。鍔部は外面をナデによって平滑に仕上げ、ある程度乾燥したのちに貼り付けるため、接着不良による鍔の剥落が目立つ。口縁～体部外面は指頭圧痕やユビナデ痕を明瞭に残し、頸部外面は強いヨコナデによって凹線状につくる。稜線は直線的でなく、調整は粗い。口縁は内側に折り返すものが多いが、324は内外に拡張する。体部内面はユビナデと横位の板ナデによって仕上げる。胎土は粗く、324を除いて結晶片岩を含み、325は泥岩とチャート、324は泥岩を含む。328はチャートとみられる粒子を含む。325・326・327が13世紀代、328が13世紀後半とみられ、324が口縁の形状からやや下る可能性をもつ。

324は胎土分析を行った（胎土分析試料No.25）。蛍光X線分析では、同種の紀伊型鍋の試料であるNo.24・25がまとまるのに対し、本品は単独で位置する。実体顕微鏡による観察では、3点とも黒雲母のほかチャートと砂岩を含むという結果を得ている。

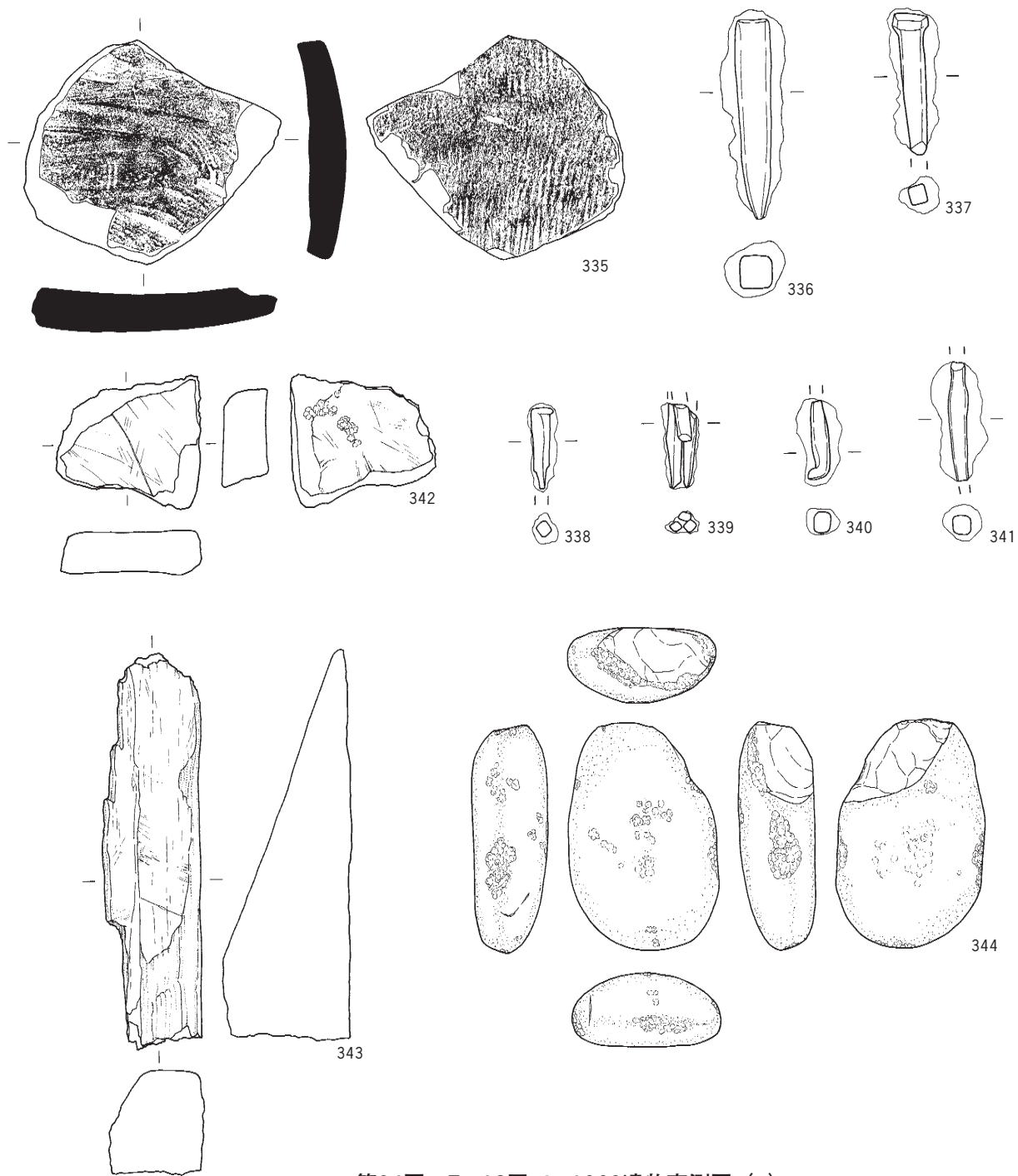
329は東播系須恵質土器捏鉢の上半部である。口縁端部を上方に拡張し、重焼により端部外面にわずかに炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当する。

330は東播系須恵質土器甕の上部である。口縁は大きく外反し、口縁内面は強いヨコナデによって凹みを作る。端部は平坦で幅広く、垂下する。口縁にかけて器壁の厚みを増す。頸部外面は平行タタキのちヨコナデを施し、タタキは不明瞭。内面は横位の板ナデを施す。軟質焼成気味で、内外面わずかに炭素付着。プロポーシオンから概ね13世紀代とみられる。

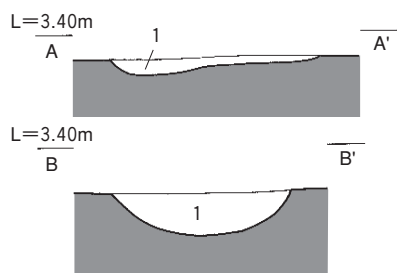
331は須恵質土器壺の肩部。外面に格子タタキのちヨコナデもしくは回転ナデを施し、タタキの痕跡は不明瞭。内面はヨコナデのち縦位のユビナデを施す。器形や調整から十瓶山系とみられるが十瓶山産であるかは不明。佐藤編年Ⅳ-4期（13世紀中葉～後半）とみられる。



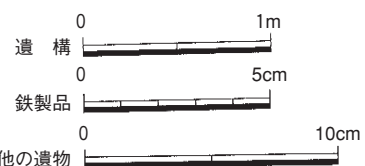
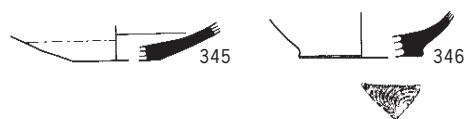
第83图 II-12区 SD1068遺物実測図 (1)



第84図 II-12区 SD1068遺物実測図 (2)



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



第85図 II-12区 SD1069遺構・遺物実測図 その他の遺物

332～334は完形の土師質管状土錘で、いずれも紡錘形を呈する。軟質焼成のものが目立つ。333・334は胎土にチャートを含み、333には石灰岩とみられる軟質の白色粒子を含むことから在地産といえる。335は陶器甕体部片で、残存部内面はほぼ全体が磨耗することから硯への転用が考えられる。破面とのエッジ部分は顕著な磨耗がみられないことから、硯としての使用時にはさらに大きなものであったとみられる。素材としての甕は外面に平行タタキ、内面に同心円状当具痕と板ナデの痕跡を残す。

336は棒状の鉄製品で、鑿であろう。頂部を叩いて平頭に作り、先端部を尖らせる。ほぼ完存。337～341は鉄釘である。337は頂部を叩いて折り曲げ、平頭に作る。先端部を欠く。338は先端部を欠く。頂部を叩いて折り曲げ、平頭に作る。339は3点が上下を揃えた状態で溶着する。いずれも頭部を欠き、うち1点は先端部も欠損する。340は両端部を欠く。先端に近い位置でほぼ直角に屈曲する。341は両端部を欠く。

342は凝灰岩製の砥石。表裏2面を使用し、片面に敲打痕を伴う。343は結晶片岩製の砥石である。先の尖った角柱状で、2面を使用するが図の左側砥面は使用感に乏しい。石材に斑晶が目立つ。344は砂岩製の叩石。長径10.8cmを測る扁平な楕円礫で、両端および側縁部に顕著な敲打痕を残す。一端は欠損するが、エッジ部分が敲打によって潰れる。表裏両面の中央部も弱い敲打痕が確認できる。

SD1062・1068ともに遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代に位置付けられる。

溝69号（Ⅱ地区 SD1069）（第4・85図）

Ⅱ-9・11・12区、h～p17・18グリッドに位置する。全長38.6m幅130cm深度22cmを測り、主軸はN4°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状または不整な逆台形状で、埋土は4層で今回Ⅱ-12区では1層のみ確認。底面は南に向けて下がる。

遺物は、土師器碗、黒色土器片（B類）・碗（A・B類）、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り・回転ヘラ切り）・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器壺、瓦器片・碗・皿、備前播鉢、中世陶器甕（常滑か）、白磁碗・皿、緑釉陶器供膳具、鉄滓、砂岩製叩石、が出土。

345は白磁皿の下半部。化粧土塗布ののち体部外面中位まで施釉し、以下露胎。釉に微細な貫入を伴う。内面の段が弱いことから大宰府分類白磁皿VI-1a類（11世紀後半～12世紀前半）とみられる。

346は緑釉陶器供膳具の底部である。底径4.8cmの小型品で皿または小碗とみられる。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面と体部外面に施釉し、底部外面は露胎。釉は淡緑色で、きわめて薄い。胎土はきわめて精良。やや軟質で露胎部が酸化炎焼成するが、硬陶に属すると考えられる。平安京近郊産と考えられ、高橋編年Ⅰ～Ⅱ期（9世紀前葉～中葉頃）とみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀前半頃に位置付けられる。

溝79号（Ⅱ地区 SD1079）（第4・86図）

Ⅱ-12区東部、h～m1～3グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。検出長28.9m幅82cm深度15cmを測る。主軸はN2°E～N44°Eで、南北方向から西に向けて緩やかなカーブを描く。断面は船底状または逆台形状で、埋土は1層である。底面は南に向けてわずかに下る。

遺物は、弥生土器片か・甕か、土師器供膳具・碗・羽釜、黒色土器碗（A類）、須恵器片・供膳具・貯蔵具・甕、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切りほか）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・羽釜・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、瓦質平瓦、備前陶器片・播鉢、常滑甕か、青磁碗、白磁片・碗・

皿、中世陶器鉢、近世陶器片・碗、鉄製品片・鉄刀・鉄滓、砂岩製石錘・石灰岩・チャート礫、が出土。

347・348 は回転台成形の土師質土器皿である。347 は完形品。底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。体部外面下位の多条沈線は、切り離し時に糸が触れた擦痕と考えられる。348 は底部中央を欠く。底部外面に回転糸切り痕を残す。349 は土師質土器杯の下半部。回転台成形で、底部は回転ヘラ切りとみられるが、磨耗著しく不明瞭。

350 は黒色土器A類碗の下半部。高台断面は逆三角形で幅と高さを保つ。内面の炭素吸着不良。体部外面に指頭圧痕を残し、見込みに密なヘラミガキを施すが、外面はヘラミガキが確認できないことから瓦器の可能性も残る。351 は瓦器碗の上半部。小片のため復元径過小か。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅳ-1期(13世紀中葉)に相当。

352 は土師質土器羽釜の上半部。小片のため復元径は不正確。鏝部は折り曲げで作り、短く退化し口縁と近接。体部外面はユビオサエのちナデ、内面は横位の板ナデを施す。胎土は粗く、花崗岩と金雲母を含む。瀬戸内沿岸地域からの搬入品と考えられる。口縁と鏝部の形状から概ね15世紀代であろう。

353 は石錘。小判形の扁平な砂岩礫を用い、両側縁を打ち欠いて抉り部を作る。部分的に擦痕を伴うが、使用によるものかは不明。354 は鉄刀の鋒付近で、先端部を欠く。幅3.5cm厚み0.7cm残存長4.2cmを測る。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるが、概ね中世末～近世と考えられる。

溝80号(Ⅱ地区 SD1080)(第4・87図)

Ⅱ-12区東端部中央、i～14グリッドに位置する。北は調査区外に延び、南はSR1001に切られる。検出長7.8m幅80cm深度22cmを測り、主軸はN7°Wを向く南北方向の溝である。断面は船底状で埋土は1層、底面は南に下がる。遺物は、須恵器片・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・杯(ユビオサエか)・煮炊具・羽釜・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗・皿、青磁片・碗、近世陶器皿(備前)、が出土。

355 は青磁碗の上半部。内面にヘラ片彫による区画文とヘラ先による飛雲文を施し、のち全面施釉。外面の口体部境に稜線があり、以下の最終調整はケズリの可能性がある。釉の透明度高くごく粗い貫入を伴う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類(12世紀中頃～後半)に相当。

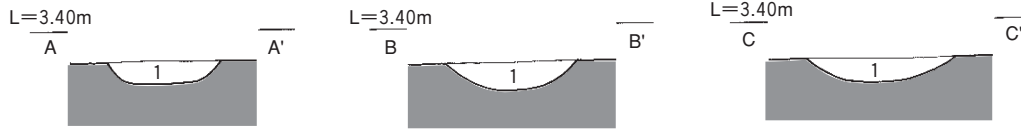
356 は東播系須恵質土器捏鉢の口縁部片。端部を下方に拡張。森田編年第Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀初頭)に相当。357 は土師質土器羽釜の鏝部。鏝は貼り付けで水平に延び、端部を方形に作る。胎土に金雲母を含むことから、搬入品と考えられる。奥井分類の河内Ⅳ型式か。13世紀代か。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるが概ね12世紀後半～13世紀代とみられる。

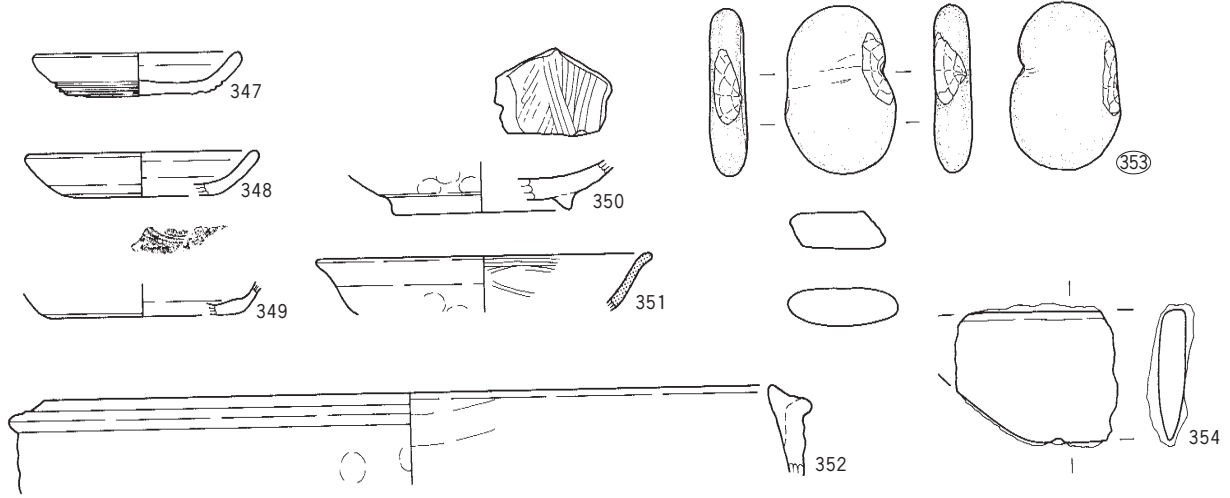
溝81号(Ⅱ地区 SD1081)(第4・88図)

Ⅱ-12区東部、j～13グリッドに位置する。南側は攪乱に切られる。検出長13.1m幅50cm深度6cmを測り、主軸はN3°Wを向く。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。遺物は、土師器甕か・碗、黒色土器碗(A・B類)、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器甕・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、白磁碗、鉄製品片、碗形滓、被熱砂岩礫、が出土。

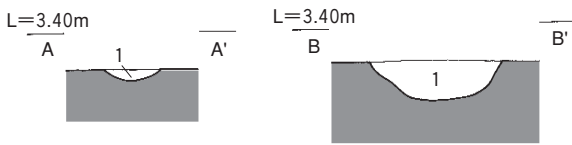
358 は瓦器碗の上半部。口縁は強いヨコナデにより外反する。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。359 は瓦器碗の底部。高台断面は逆三角形を呈し高さを保つ。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。胎土はきわめて精良。和泉型瓦器碗Ⅱ-2～3期(12世紀中葉～後葉)とみられる。



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)



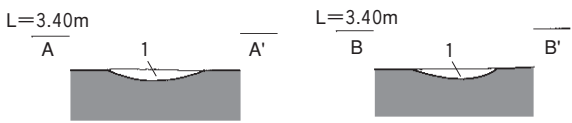
第86図 II-12区 SD1079遺構・遺物実測図



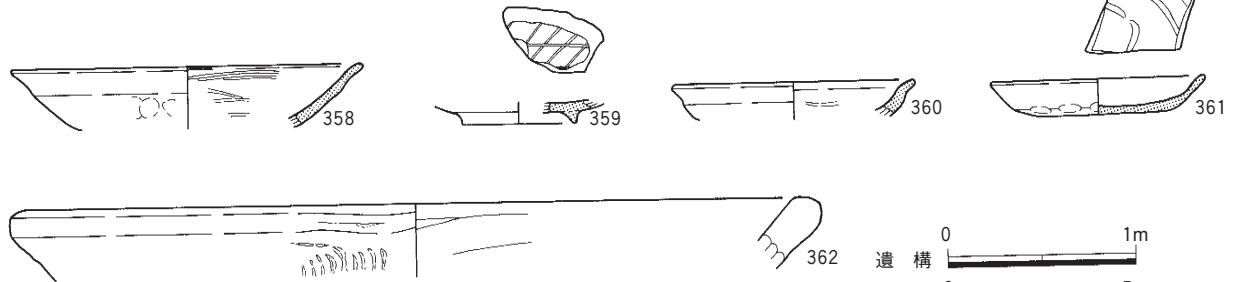
1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)



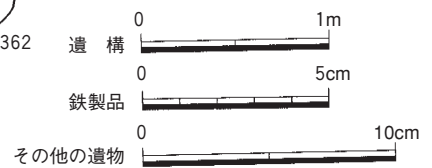
第87図 II-12区 SD1080遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



第88図 II-12区 SD1081遺構・遺物実測図



360・361は瓦器皿である。360は底部を欠く。口縁は強いヨコナデにより外反し、内面に稜をつくる。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。外面はナデ調整し、指頭圧痕は確認できない。炭素吸着は不良。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。361は体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みは螺旋状ヘラミガキ暗文か。炭素吸着は外面良好、内面やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。

362は土師質土器鍋の口縁部。1.2cm超の厚い器壁をもつ。外面はごく粗いたテハケのちヨコナデを施し、煤が付着。端部に接合痕がみられるが、断面では確認できない。胎土は粗く、金雲母・花崗岩・角閃石を含むことから、瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀代とみられる。

溝 82 号（Ⅱ地区 SD1082）（第4・89・90図）

Ⅱ-12区東部、j～m3グリッドに位置する。北側は調査区外に延び、南側は攪乱に切られる。検出長16.1m幅123cm深度10cmを測り、主軸はN2°Eを向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。底面は南に向けて若干下がる。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、瓦質土器片、が出土。遺構中央部では握拳大～人頭大の礫が多数出土し、遺構東側では20～30cm間隔で打設された木杭を検出した。

363・364は土師質土器羽釜で、底部を欠く。ともに鏝部は口縁をめぐる低い段状あるいは浅い凹線状に退化するが、鏝部折り曲げ技法は維持する。体部外面はユビオサエのち横位の板ナデ、内面は横位の板ナデを施す。364は底部外面に格子タタキ施す。胎土は粗く金雲母・角閃石・花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸からの搬入品であろう。鏝部の形状から概ね16世紀代とみられる。

遺構の年代は、出土遺物に中世前半期に遡るものもあるが、羽釜の時期から16世紀代の遺構と考えておく。

溝 83 号（Ⅱ地区 SD1083）（第4・91図）

Ⅱ-12区東部北側、k・13グリッドに位置する。北側はSX1001に切られ、南側はSD1082に切られる。検出長8.2m幅58cm深度8cmを測り、主軸はN6°Eを向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土するが実測可能な遺物はない。

溝 84 号（Ⅱ地区 SD1084）（第4・92図）

Ⅱ-12区東部中央南寄り、k3・4グリッドに位置する。東側はSD1080に、西側はSD1082に切られる。検出長3.0m幅33cm深度8cmを測り、主軸はN85°Eを向く東西方向の溝。断面は浅い船底状で埋土は1層。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、瓦質土器片、が出土するが実測可能な遺物はない。

溝 86 号（Ⅱ地区 SD1086）（第4・93図）

Ⅱ-12区東部中央南寄り、j・k3グリッドに位置する。南側はSD1079に切られる。検出長3.2m幅79cm深度8cmを測り、主軸はN0～5°Eを向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片、白磁皿か碗、が出土。

365は白磁の供膳具片。皿の体部か底部とみられるが小片のため部位は特定できない。内面にヘラ先による花文を線刻し、のち内外面に施釉。文様構成などから大宰府分類白磁皿Ⅷ-1類（12世紀中頃

～13世紀前半)である可能性が考えられる。遺構の年代は概ね13世紀代か。

溝 87 号 (Ⅱ地区 SD1087) (第4・94 図)

Ⅱ-12区東部南側、h 19・20・1グリッドに位置する。全長5.6m幅92cm深度17cmを測り、主軸はN85°Eを向く東西方向の溝。断面は船底状で、埋土は1層である。遺物は、土師器碗、黒色土器片(A・B類)・碗か(A類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・羽釜・鍋・土錘、瓦器片・碗、鉄製品片・鏝か、被熱砂岩礫・砂岩礫、が出土。

366は瓦器碗で底部を欠く。復元口径16.6cm残存高5.5cmを測る大型品。内外面に密な横位のヘラミガキを施し、体部外面は分割ヘラミガキを意識しているが省略化が著しい。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅱ-1期(12世紀前葉)とみられる。367は瓦器碗の上半部。小片のため復元径過大。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)に位置付けられる。

368は土師質管状土錘。一端を欠き、軟質焼成。369は長方形断面をもつ棒状の鉄製品である。先端部を欠き、頭部を欠損するかは不明。鏝とみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀～13世紀前半に位置付けられる。

溝 89 号 (Ⅱ地区 SD1089) (第4・95 図)

Ⅱ-12区東部北側、i・j 15～20グリッドに位置する。全長23.8m幅30cm深度11cmを測り、主軸はN80°Eを向く東西方向に走る細い溝。SD1088・1091に切られ、SD1090を切る。断面は浅いU字状で埋土は1層、底面はほぼ水平である。

遺物は、弥生土器片・甕、土師器供膳具・碗、黒色土器片(A類)・碗(A・B類)、須恵器杯・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿(ユビオサエか)・杯(回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器片・捏鉢、瓦器片・碗・皿、瓦質土器片・羽釜、スラグ、砂岩礫・チャート礫、が出土。

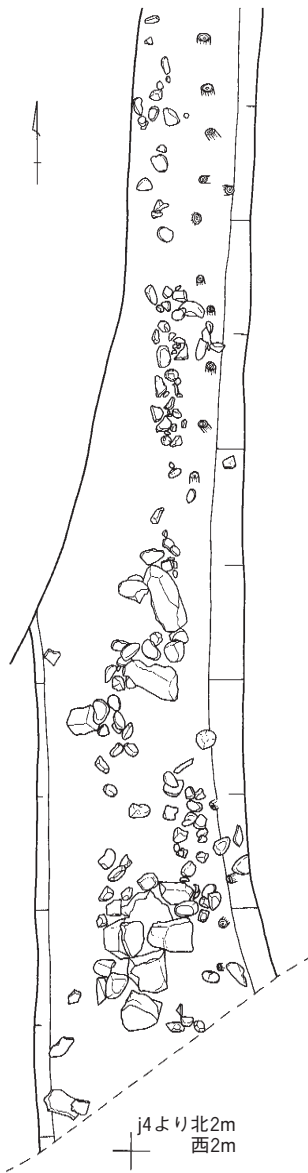
370は黒色土器A類碗の底部。見込みに密なヘラミガキを施す。内面の炭素吸着良好。胎土に微細な石英粒が目立つ。371は東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁端部をわずかに上方に拡張し、重焼により口縁端部に自然釉付着。森田編年第Ⅰ期第2段階(11世紀末～12世紀前半)に相当する。

遺構の年代は、出土遺物がやや古い様相を呈するものの、切り合い関係から13世紀前半頃と考える。

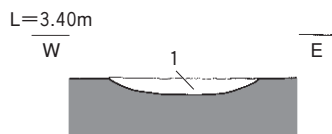
溝 90 号 (Ⅱ地区 SD1090) (第4・96 図)

Ⅱ-12区東部北側、h～k 18・19グリッドに位置する。全長14.8m幅138cm深度14cmを測り、主軸はN8°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は1層である。SD1089に切られ、SD1094を切る。底面は南に向けて下がる。遺物は、土師器甕、須恵器片・供膳具、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・羽釜・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢か・甕・貯蔵具、瓦器片・碗、白磁碗、安山岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。

372は瓦器碗の上半部。歪みにより傾き不正確。内面の口縁端部以下にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に相当。373は白磁碗の上部片。端反りの口縁をもつ。釉は灰味が強く、胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類Ⅶ類(12世



第89図 II-12区
SD1082出土平面図



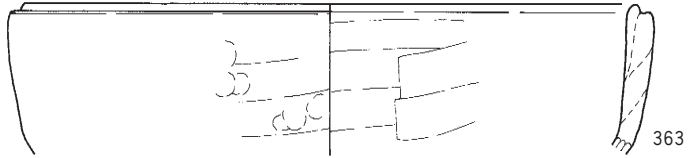
1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)



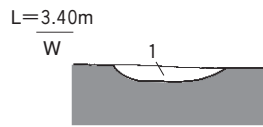
第93図 II-12区 SD1086
遺構・遺物実測図



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)

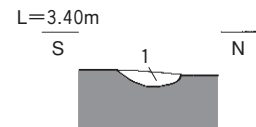


第90図 II-12区 SD1082遺構・遺物実測図



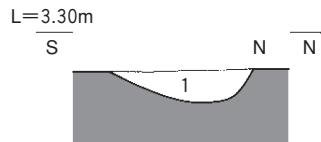
1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
(しまり・粘性強)

第91図 II-12区
SD1083遺構断面図

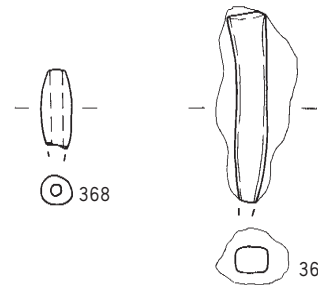
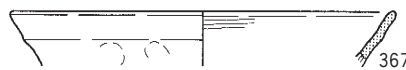
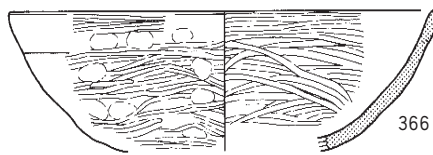


1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)

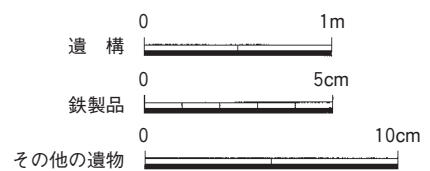
第92図 II-12区
SD1084遺構断面図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)



第94図 II-12区 SD1087遺構・遺物実測図



紀中頃～13世紀前半)とみられる。

374は土師質土器羽釜の上部。鏝部は短く退化して口縁と近接するが、折り曲げ技法を保つ。体部内外面は横位の板ナデによって最終調整する。胎土は粗く花崗岩を含むほか金雲母らしき粒子を含む。15世紀後半前後とみられる。

遺構の年代は、新しい時期の羽釜が出土しているが、切り合い関係から13世紀前半頃であろうか。

溝91号(Ⅱ地区 SD1091)(第4・97図)

Ⅱ-12区東部北側、i～k 17グリッドに位置する。北は北側溝に切られる。検出長6.8m幅69cm深度9cmを測り、主軸はN8°Wを向く南北方向の溝。SD1069と並行し、SD1089を切る。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。底面は南に向けてわずかに下がる。遺物は、土師器椀、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、瓦器片・椀、が出土。

375は瓦器椀で、底部および口縁端部を欠く。内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。部分的に強いヘラミガキにより沈線状を呈する。炭素吸着は外面良好で、内面吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅲ-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)とみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃と考えられる。

溝92号(Ⅱ地区 SD1092)(第4・98図)

Ⅱ-12区中央部北寄り、h・i 16～18グリッドに位置する。東側はSD1069に切られる。検出長7.2m幅40cm深度5cmを測り、主軸はN82°Eを向く東西方向の溝。SD1069に切られる。断面は浅い船底状で、埋土は2層に分層できる。遺構の規模が小さい割に遺物は多く、土師器供膳具、黒色土器椀(A・B類)、土師質土器供膳具・皿・杯・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、灰釉陶器碗、片岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。

遺物は埋土上位から376・381・382、下位から377が出土。

376～380は瓦器椀である。376は底部を欠く。外面に粗い横位のヘラミガキを施すが、内面は磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着は外面不良、内面吸着なし。胎土はわずかに酸化炎焼成。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期(12世紀後葉)に相当。377は底部を欠く。口縁～体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面やや不良、内面吸着なし。胎土はやや粗い。和泉型瓦器椀Ⅲ-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)に相当。

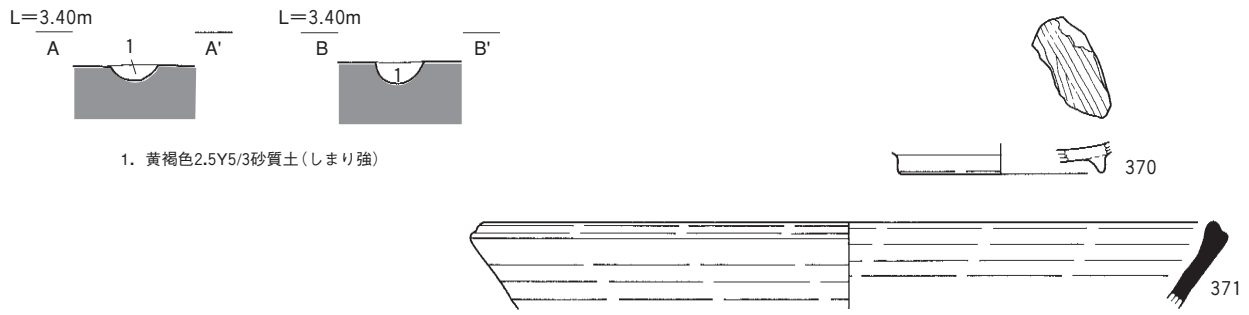
378は底部を欠く。口縁～体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。重焼により口縁内外面のみ炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)とみられる。

379・380は和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。379は底部を欠く。強いヨコナデにより口縁が端反り気味で、内面に稜をつくる。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。380は体部～底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。

381は瓦器皿。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。

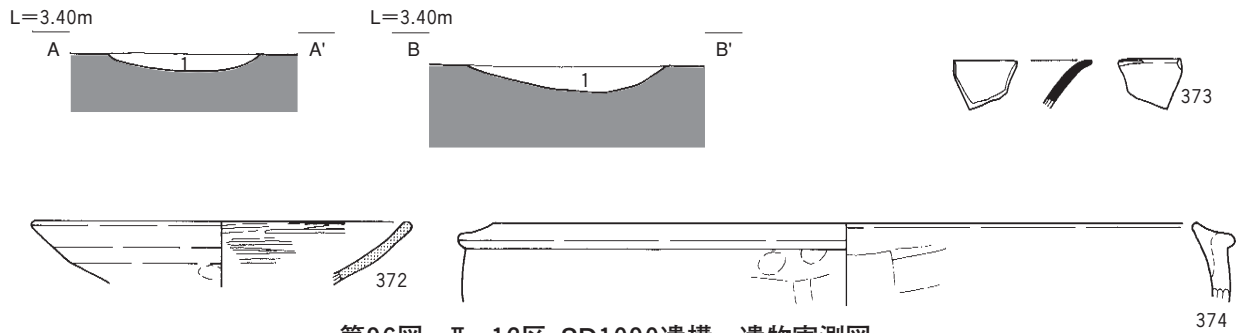
382は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。口縁は肥厚し、端部は粘土を継ぎ足して上方に拡張。重焼により口縁外面に炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)に相当する。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

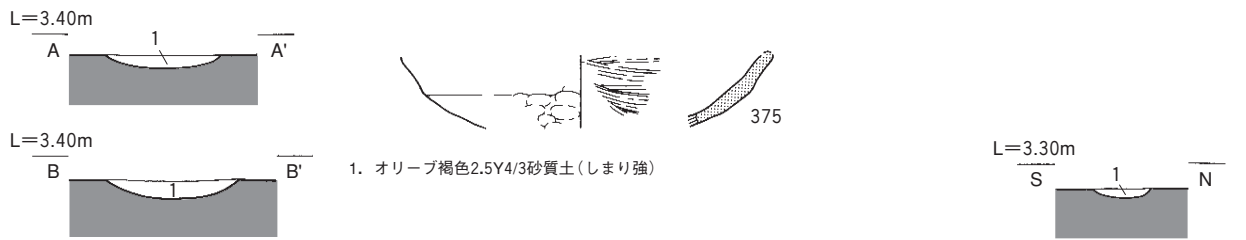


1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)

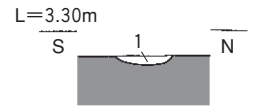
第95図 II-12区 SD1089遺構・遺物実測図



第96図 II-12区 SD1090遺構・遺物実測図

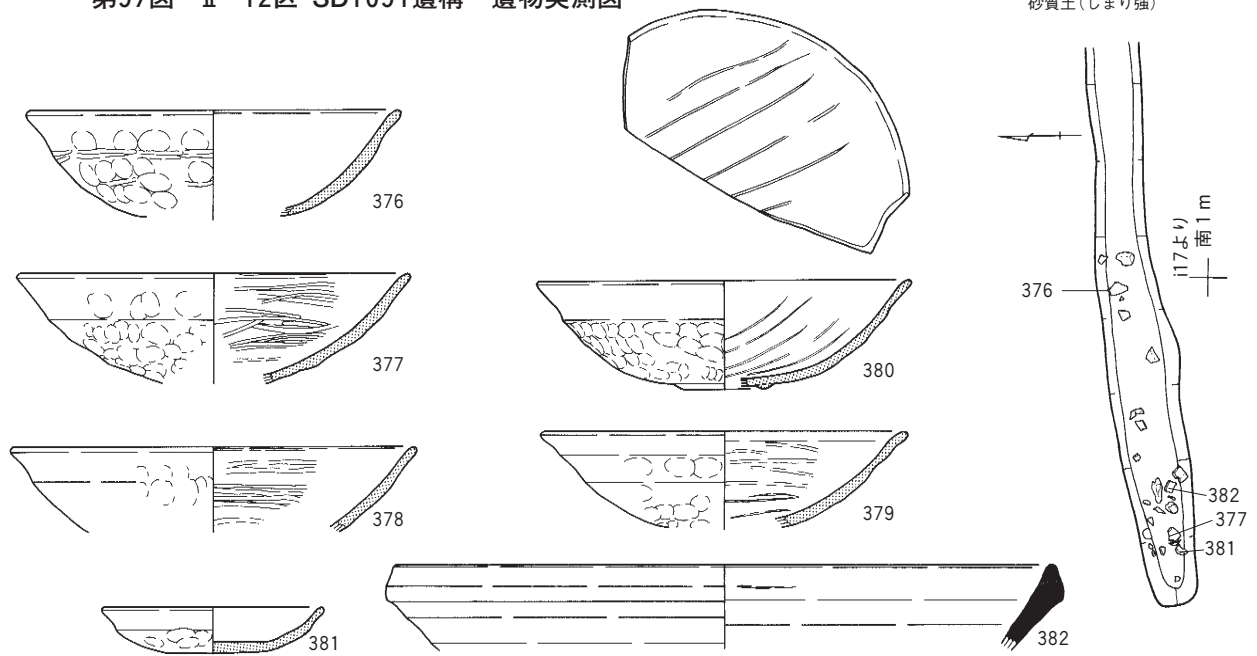


1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)

第97図 II-12区 SD1091遺構・遺物実測図



第98図 II-12区 SD1092遺構・遺物実測図



溝 93 号 (Ⅱ地区 SD1093) (第 4・99 図)

Ⅱ - 12 区中央部南側、g 15 ~ 17 グリッドに位置する。東側は攪乱に切られる。検出長 10.7 m 幅 53cm 深度 6cm を測り、主軸は N83° E を向く東西方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は 1 層である。SD1068・1095 を切る。遺物は、土師器碗、須恵器杯、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・杯 (回転糸切り)・煮炊具、須恵質捏鉢、瓦器片・碗・皿、が出土するが、実測可能な遺物は皆無である。

溝 94 号 (Ⅱ地区 SD1094) (第 4・100 図)

Ⅱ - 12 区中央部南寄り、g・h 15 ~ 18 グリッドに位置する。東側は SD1090 に、西側は SD1068 に切られる。検出長 15.8 m 幅 72cm 深度 27cm を測り、主軸は N74° E を向く東西方向の溝。断面は船底状または U 字状で、埋土は 2 層に分層できる。底面は西に向けて下がる。西は SD1062 に繋がる可能性がある。

遺物は、縄文土器片か、土師器甕・碗・羽釜、黒色土器片 (A 類)・碗 (A・B 類)、須恵器供膳具・杯・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切りほか)・杯 (回転糸切り・回転ヘラ切りほか)・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・碗、瓦質平瓦、砂岩製砥石・片岩礫・被熱砂岩礫・砂岩礫・チャート礫、が出土。東端部で礫が集中する。

383 は土師質土器皿。回転台成形で、体部外面に多段状の稜が明瞭。底部の切り離し技法は磨耗により不明。384・385 は黒色土器 B 類碗である。384 は底部。高台はやや小さめで、本体との境は棒状工具を使用したヨコナデにより凹線状を呈する。体部外面に横位のヘラミガキ、内面に細いヘラミガキを密に施す。炭素吸着良好で胎土も黒化する。385 は口縁を欠く。内外面に横位の分割ヘラミガキを丁寧に施す。本体底部の高台貼り付け位置に数条の沈線を円形に廻らせる。高台貼り付けのち、外底に輪状のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好で、胎土も黒化する。胎土に結晶片岩と絹雲母を含むことから、吉野川南岸～勝浦川流域の産とみられる。

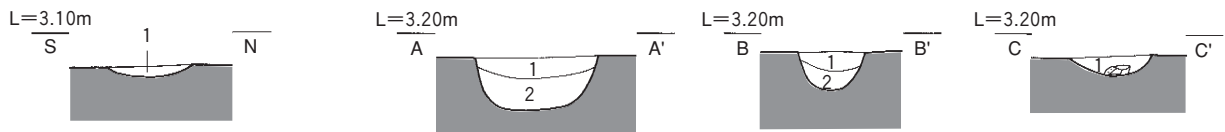
386 は瓦質平瓦である。上面は布目圧痕を残し、下面は粗い目の格子タタキを施す。タタキは強い力で同一箇所を複数回行っている。側縁部は板ナデで仕上げる。炭素吸着なく軟質焼成気味。387 は砂岩製の砥石。1 面のみ使用。肌理は細かく擦痕は細く浅いものが多い。側面は破面であるが、凸部がわずかに磨耗していることから若干研磨した可能性がある。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀前後に位置付けられる。

溝 96 号 (Ⅱ地区 SD1096) (第 4・101 ~ 103 図)

Ⅱ - 12 区中央部北側、f ~ i 11 ~ 15 グリッドに位置する。北側は調査区外に延び、北側延長上にあるⅡ - 7 区では検出していない。南北方向の溝から西向きに東西方向の溝が分岐する。東西長 17.8 m 南北検出長 16.2 m 総延長 34.7 m 幅 40 ~ 360cm 深度 36cm を測る。主軸は東西 N82° E、南北 N10° W を向く。断面は船底状または U 字状で、埋土は 4 層に分層できる。

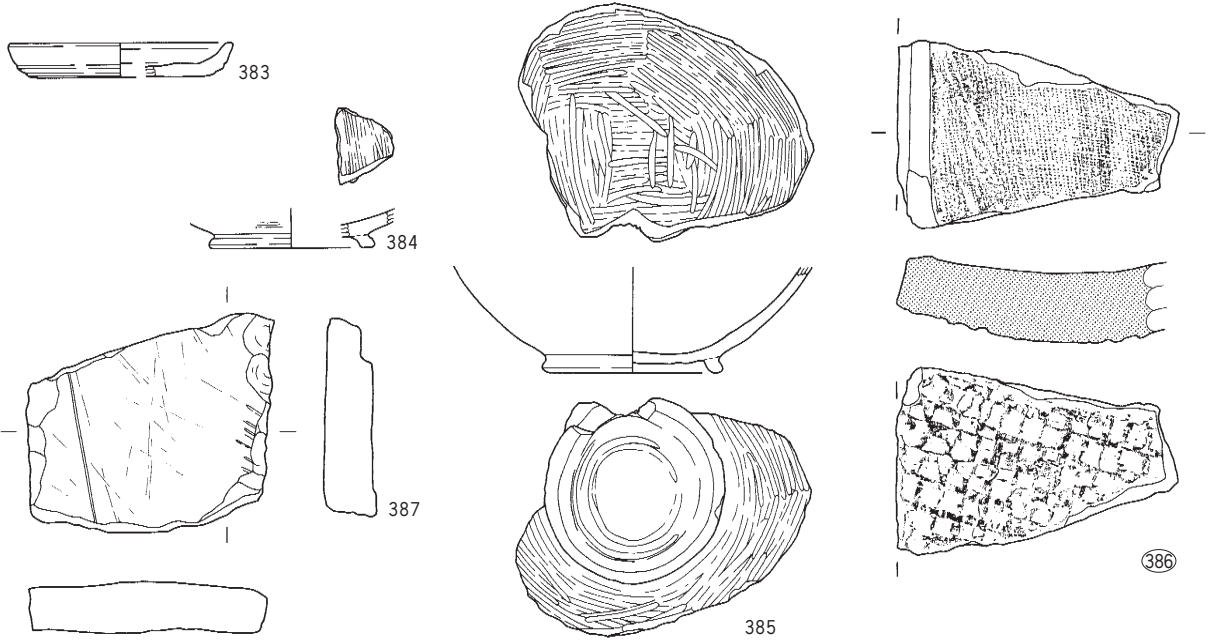
遺物は、須恵器片・供膳具・杯・蓋・貯蔵具・甕・高杯脚部・鉢か、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切りほか)・杯・煮炊具・羽釜 (格子タタキほか)・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢・甕・貯蔵具・碗・壺か、瓦器片・碗・皿、瓦質土器片、常滑甕、備前甕か・播鉢、中世陶器甕 (備前か)、青磁碗・皿、白磁片・皿・碗、青白磁合子、鉄製品片・釘か、被熱砂岩礫・粘板岩製砥石 (または硯か)・砂岩礫、が出土。



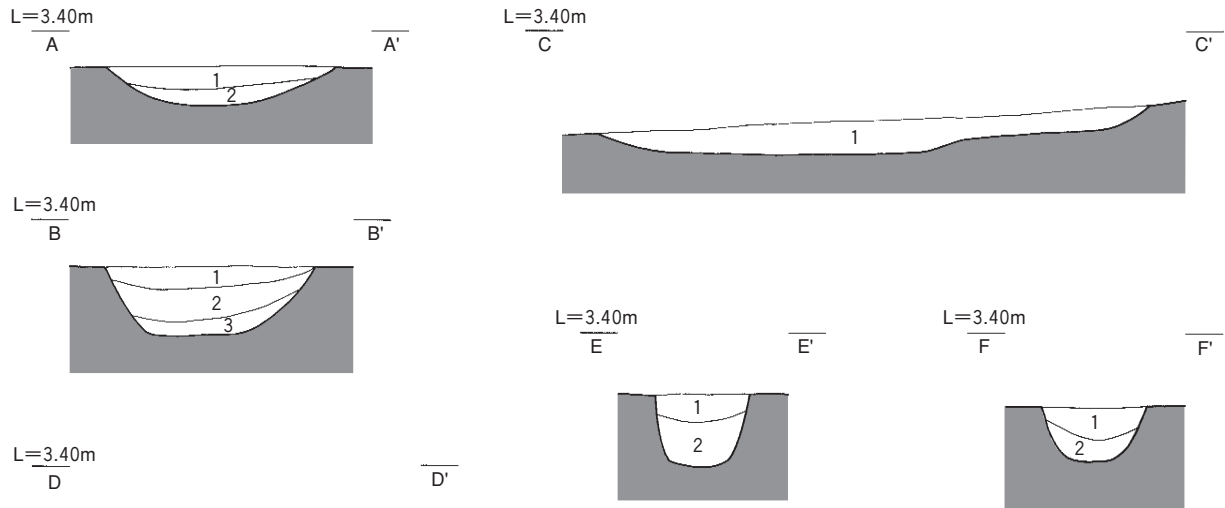
1. オリーブ褐色2.5Y4/3
砂質土(しまり強)

1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)

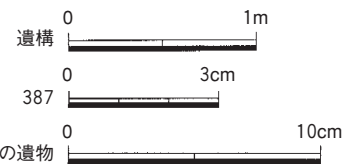
第99図 II-12区
SD1093遺構断面図



第100図 II-12区 SD1094遺構・遺物実測図



1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
4. 灰オリーブ色5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)



第101図 II-12区 SD1096遺構断面図

遺物のうち 388～391・398・400 が比較的まとまって出土し、出土層位は上位が 389・391・398・400、中位が 388・390 である。握拳大の礫が散在する。

388～391 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。388 は焼成不良により磨耗気味。389 はほぼ完形。390 は完形品で、底部外面に板目痕を伴う。内面の体底部境に接合痕がみえる。胎土は粗く、泥岩を含むほか石灰岩とみられる白色軟質の粒子を含む。391 は完形品。やや軟質で、磨耗・剥離により調整が不明瞭。

392 は瓦器皿で、復元器形は低平。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素は吸着しない。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。

393 は青白磁合子身の上半部。口縁内外面はヘラケズリのち露胎。体部外面はロクロナデのち丸彫りによる施文、体部内面はロクロナデのち施釉。かえり部が付く傘形の蓋を伴うものであろうか。

394 は白磁皿の底部。見込みはヘラ先によって施文。草花文か。外面は高台削り出し。内面のみ薄く施釉し、微細な貫入を伴う。高台の形状から大宰府分類白磁皿Ⅵ類（11 世紀後半～12 世紀前半）と考えたが、内面に施文していることから別型式であろうか。395 は白磁碗の上部で口縁を玉縁につくる。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（11 世紀後半～12 世紀前半）に相当。

396 は青磁碗の口縁部で、端部がやや肥厚。釉は透明度に乏しいやや暗い緑色で、ごく粗い貫入を伴う。小片であり残存部内外面は無文のため型式の特定は困難だが、中世後半期に属するものであろう。

397・398 は土師質土器羽釜である。鋳部は短く退化し、口縁に近接する。鋳部折り曲げ技法を保つ。397 は内面に横位の板ナデを施すが、外面は剥離が著しく調整不明瞭。398 は体部外面にユビオサエのちタテハケを施す。底部外面はヨコハケを施し、格子タタキは確認できない。体部内面は横位の板ナデ、底部内面はヨコハケを施す。外面鋳部以下に炭化物が厚く固着。胎土に金雲母を含むため瀬戸内沿岸からの搬入品と考えられる。ともに鋳と口縁の形状から概ね 15 世紀代に位置付けられる。

399 は鉄製雁又鎌で先端部と茎端部を欠く。頸部下端は大きく膨らみ、茎との間に段を作って矢柄上端部のストッパーとする。茎は途中で緩い段が付く、以下はやや細る。400 は鉄刀で、鋒から 16.6cm が残存。幅 2.3cm 厚み 0.5cm を測る。鋒付近に幅 1.3cm 残存長 3.1cm の骨片が付着する（図の裏側）が、人骨・獣骨の別は不明。本品は溝の出土であるが、人骨ならば土壙墓の副葬品が混入したものと考えられる。401 は鉄釘である。頂部を叩いて平頭に作り、先端部を欠く。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 14～15 世紀代に位置付けられる。

溝 98 号（Ⅱ地区 SD1098）（第 4・104 図）

Ⅱ-12 区西部北側、e～g 11 グリッドに位置する。南側は SR1001 に切られる。検出長 8.0 m 幅 150cm 深度 15cm を測り、主軸は N17° W を向く南北方向の溝である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器杯・貯蔵具、土師質土器・供膳具・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋、須恵質土器片、瓦器片・椀、常滑甕、白磁片、砂岩製砥石か、が出土するが、実測可能な遺物は皆無である。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられる。

溝 100 号（Ⅱ地区 SD1100）（第 4・105 図）

Ⅱ-12 区西部、b～e 6・7 グリッドに位置する。全長 17.0 m 幅 40cm 深度 8cm を測り、主軸は N17° W を向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・

鍋・土錘、瓦器片・椀、が出土するが、実測可能な遺物は皆無である。

溝 101 号 (Ⅱ地区 SD1101) (第 4・106 図)

Ⅱ - 12 区西部、b ~ e 6・7 グリッドに位置する。北側は SD1002 に切られる。検出長 16.1 m 幅 35 cm 深度 7cm を測り、主軸は N13° W を向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・土錘、瓦器片・椀、が出土するが実測可能な遺物は皆無である。

溝 102 号 (Ⅱ地区 SD1102) (第 4・107 図)

Ⅱ - 12 区西部、b ~ e 6・7 グリッドに位置する。南側は SD1100 に切られる。検出長 16.0 m 幅 25 cm 深度 10cm を測り、主軸は N5° W を向く南北方向の溝。断面は浅い U 字状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・土錘、瓦器片・椀・皿、チャート剥片、が出土するが実測可能な遺物は皆無である。

溝 104 号 (Ⅱ地区 SD1104) (第 4・108 ~ 110 図)

Ⅱ - 12 区西部南側、a ~ e 8・9 グリッドに位置する。南は調査区外に延びる。検出長 19.6 m 幅 420 cm 深度 60cm を測り、主軸は N5° W を向く南北方向の溝。途中でクランク状に屈曲する。断面は逆台形状で、部分的に梯形となる。埋土は 3 層に分層。

遺物は、土師器杯・煮炊具・鍋・貯蔵具・羽釜、黒色土器片・椀か (A・B 類)、須恵器片・供膳具・杯・皿 (回転糸切りほか)・貯蔵具・壺・甕、土師質土器片・供膳具 (回転糸切り・回転ヘラ切り・ユビオサエほか)・杯 (回転糸切りほか)・煮炊具・羽釜 (脚ほか)・鍋・椀・土錘、須恵質土器片・捏鉢か・甕・椀か・貯蔵具・壺か・平瓦、瓦器片・椀・皿・加工円盤、瓦質土器羽釜 (山城)、瓦質平瓦・土師質瓦、緑釉陶器碗、無釉陶器山茶碗、常滑甕、中世陶器山茶碗か、青磁皿・碗、白磁片・皿・碗、鉄釘・楔か、スラグ・鉄滓、ガラス玉、サヌカイト製石鏃・剥片、花崗岩か安山岩礫、凝灰岩製砥石、砂岩製叩石・砥石か、被熱砂岩礫 (台石か)、壁土、片岩・砂岩・チャート礫、が出土。

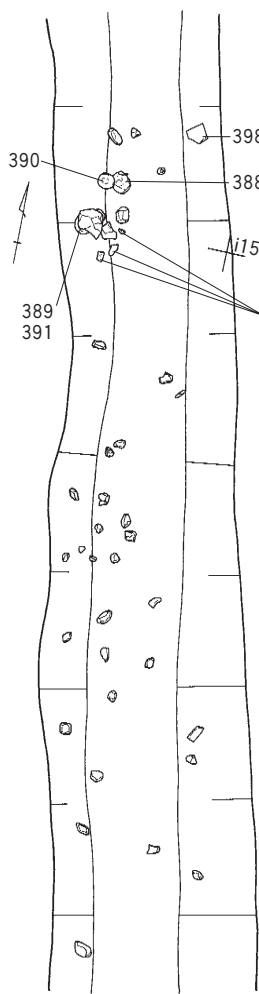
掲載遺物は遺構の屈曲部に多く出土している傾向があるが、全体的に散漫な様相を示す。埋土上位から 408・415・416・424・435、中位から 418・422・428、下位と底面から 420・421・427・432 が出土。

402 は非回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に指頭圧痕を残す。復元口径 6.6cm のごく小型品。京都系土師皿の模倣品であろう。概ね 13 世紀代とみられる。403 は回転台成形の土師質土器皿である。底部外面に細かい回転糸切り痕を残す。焼成はきわめて良好。

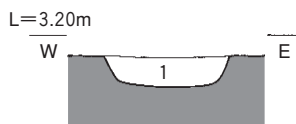
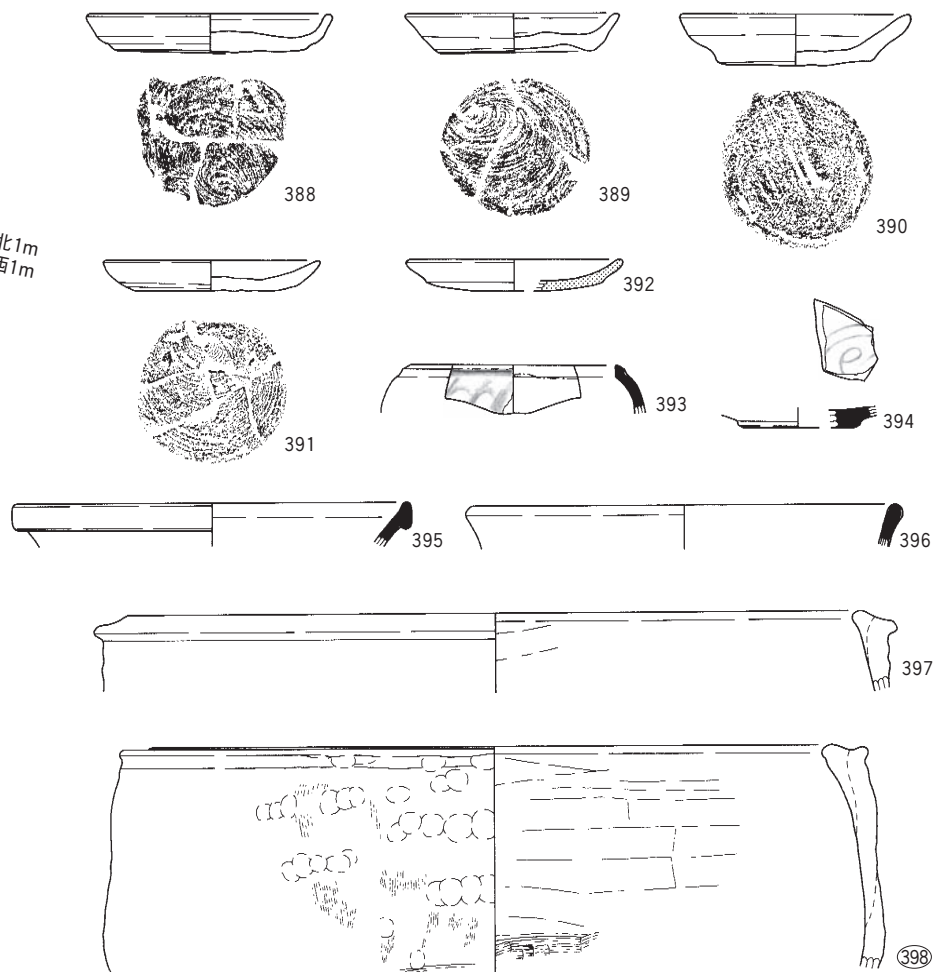
404 は黒色土器 B 類椀の底部である。軟質焼成で、磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキが確認できない。炭素吸着不良。胎土に絹雲母を含むことから在地産の可能性が考えられる。

405 ~ 413 は瓦器皿で、406・409・410・412 は完形品またはほぼ完形である。程度に差があるが、いずれも器形に歪みが生じる。405 ~ 410 は内面に粗いヘラミガキを施す。413 はヘラミガキが確認できない。内面体底部境に幅 3mm の圏線状の隆線が確認できる。調整時の粘土のはみ出しか。いずれも和泉型瓦器とみられ、Ⅲ ~ Ⅳ期前半頃に位置付けられる。

414 ~ 422 は瓦器椀である。414・415 は和泉型瓦器椀Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。414 は高台断面が低い逆三角形または逆台形状を呈する。内面の口縁 ~ 体部にやや密な横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みの平行ヘラミガキ暗文は、暗文の始点にヘラ先の接触痕が残る。炭素吸着お

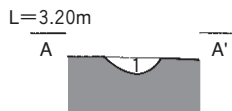


第102図 II-12区
SD1096出土平面図



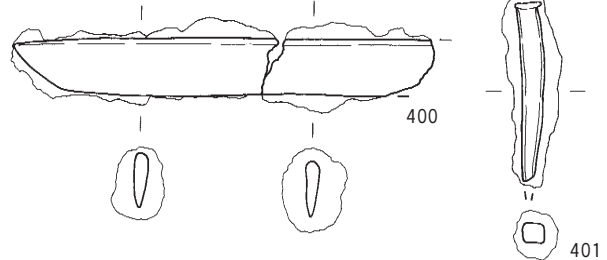
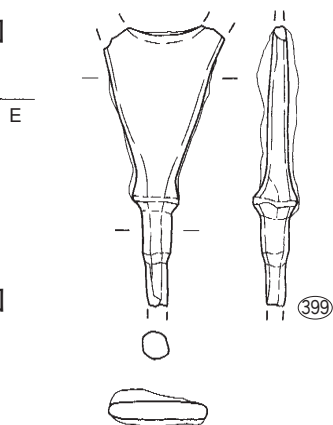
1. オリーブ褐色2.5Y4/3
砂質土(しまり強)

第104図 II-12区
SD1098遺構断面図

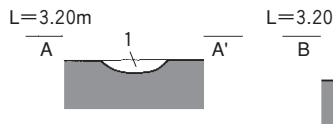


1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
(しまり・粘性強)

第105図 II-12区
SD1100遺構断面図

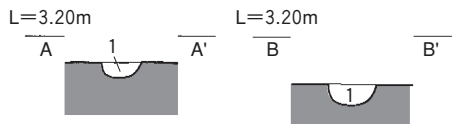


第103図 II-12区 SD1096遺物実測図



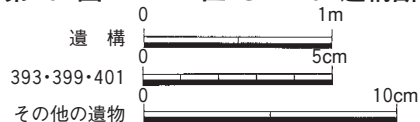
1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)

第106図 II-12区 SD1101遺構断面図



1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)

第107図 II-12区 SD1102遺構断面図



よび焼成は不良。415 はほぼ完形品で、高台断面はやや低平な逆台形状を呈する。外面にヘラミガキは確認できない。内面は口縁端部～体部に密な横位のヘラミガキを施し、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面～体部外面中位まで良好で、以下は重焼により吸着不良。

416 は和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）に相当する。完形品で、器形に歪みあり。高台断面は逆三角形形状または逆台形状を呈し、粗雑に貼り付ける。底部は高台よりも下方に突出する。内外面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は不良。

417 は和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当する。高台断面は逆台形状を呈する。口縁は強いヨコナデによって端反りに仕上げる。口縁外面に粗い横位のヘラミガキ、内面の口縁端部～体部にかけてやや密な横位のヘラミガキ、見込みは平行ヘラミガキ暗文を施す。外面上位に接合痕が確認できる。炭素吸着は外面が良好で、内面は伏せ焼によるものか吸着不良。

418 は和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に位置付けられるが、口縁の形状から非和泉型の可能性もある。底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着はやや不良で胎土はわずかに酸化炎焼成する。

419～422 は下半部・底部である。419 の高台断面は逆三角形形状で、幅と高さを保つ。内面にヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面良好、外面不良で、胎土は酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅱ－2期前後（12世紀中葉頃）とみられる。420 の高台断面は三角形で、幅と高さを保つ。磨耗によってヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－1～2期（12世紀後葉～13世紀初頭）とみられる。421 の高台は小さく断面逆三角形形状を呈する。見込みは不明瞭であるが螺旋状のヘラミガキ暗文を施すとみられる。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期頃とみられる。422 の高台断面は逆三角形形状で幅と高さを保つ。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－1～2期とみられる。

423 は無釉陶器碗の下半部で、山茶碗か。断面逆台形状のしっかりとした高台を貼り付け、接合部は部分的に亀裂を生じる。内面に自然釉が付着するが、見込み部分は重焼により円形の無釉部分がみられる。焼成はきわめて良好で堅緻。詳細な産地や年代は特定できないが、概ね12世紀代であろう。

424 は青磁碗の上半部で内外面とも無文。釉は細かい貫入を伴い、内面にごく小さな釉とびがみられる。大宰府分類青磁碗Ⅰ－1類（12世紀中頃～後半）に相当する。

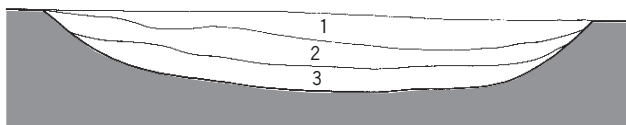
425 は東播系須恵質土器甕の上部片である。口縁は大きく外反し、端面はヨコナデによって平坦に作り、上下に拡張する。頸部外面は平行タタキのちヨコナデを施し、タタキの痕跡は不明瞭。器表面のみ還元炎焼成し、内部は酸化炎焼成する。概ね12世紀代か。426 は須恵質土器甕の上部で、口縁を欠く。外面に格子タタキを施し、のち頸部はヨコナデ。体部内面は同心円状の当具痕を残すが、同心円は当具に人為的に施した陰刻ではなく、木目であろうと考えられる。

427 は瓦質土器煮炊具脚部の上部片。明瞭な屈曲部をもたずに外下方へ直線的に伸びる。炭素吸着は良好だが脚内側は被熱によりカーボンを消失。胎土は粗い。山城型瓦質羽釜の脚部とみられ、概ね13世紀代に位置付けられる。

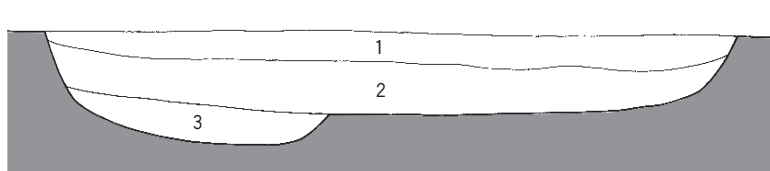
428 は土師質土器鍋の体部。1cm前後の厚い器壁をもつ。外面中位以下ユビオサエのち粗いヨコハケ、内面上位は横位の板ナデ、下位がユビオサエのちヨコハケを施す。胎土は粗く花崗岩・金雲母・角閃石を含むことから瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。

429 は紀伊型鍔付鍋の上部。口縁端部は内上方にわずかに拡張し、口縁内面に浅い沈線をつくる。頸

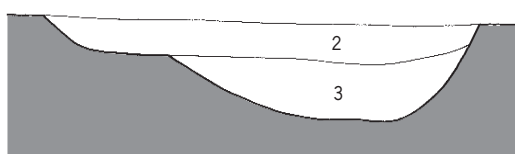
L=3.20m
A



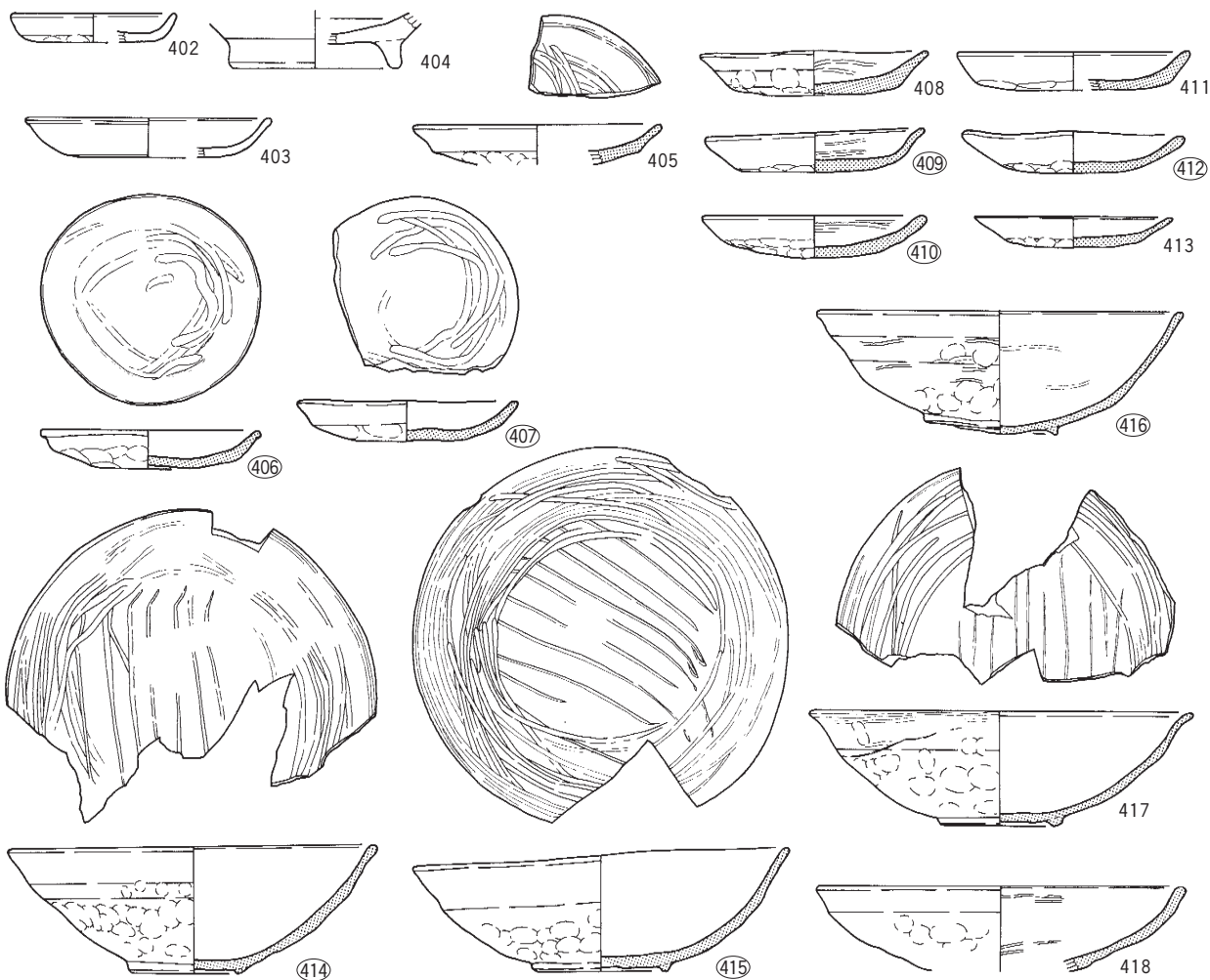
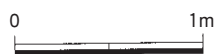
L=3.20m
B



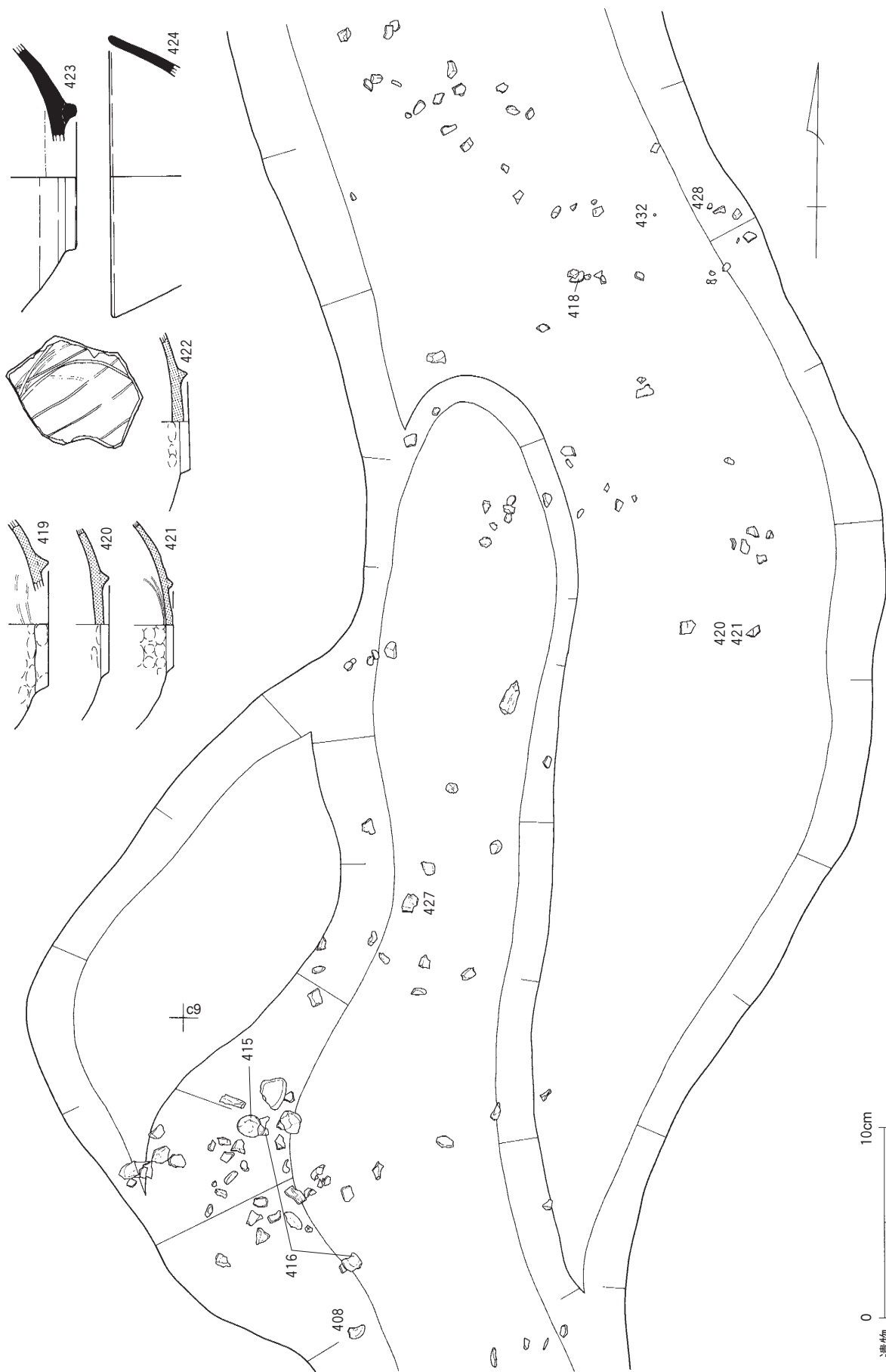
L=2.40m
C



- 1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
- 2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
- 3. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



第108図 II-12区 SD1104遺構・遺物実測図(1)



第109图 II-12区 SD1104出土平面·遺物実測図 (2)

部外面はユビオサエのち強いヨコナデを施す。体部外面に断面三角形の鐳部を貼り付ける。鐳部が幅と高さを保つことから、概ね 13 世紀代前半頃と考えられる。

430 は東播系須恵質土器捏鉢の上部で片口をもつ。片口部分にあたるため復元径は不正確。体部内面の最終調整は板ナデと考えたが、工具を用いないナデかもしれない。口縁外面にわずかに炭素付着。やや軟質焼成。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。

431 はほぼ完形の土師質管状土錘。器表面・胎土ともに黒化する。胎土にチャートを含むほか、微細な石英粒が目立つ。432 はガラス玉である。形状はやや不整な紡錘形で棗玉状を呈しており、約半分の残存率とみられる。芯棒に巻き付けて成形したものか、外面に横位の条線が確認できる。色調は淡緑色を帯びた透明である。433 は須恵質の平瓦である。凹面に布目圧痕、凸面は縄蓆文を残し離れ砂が付着する。側面と端面は板ナデによって平滑に仕上げる。離れ砂に砂岩を含む。

434 は鉄釘で、ほぼ完存。頂部を叩いて折り曲げ、平頭に仕上げる。435 は棒状の鉄製品で楔とみられる。大きな頭部をもち、下方は徐々に細る。先端部は欠損。436 は鉄釘で、先端部を欠く。頂部を屈曲させて頭部を作るが、打撃により変形か。437 は鉄製の楔である。頂部を叩いて平頭に仕上げる。先端部を欠く。

438 は赤みを帯びた凝灰岩製の砥石。撥形を呈するが側面や端部は不使用または欠損で 1 面のみ使用。439 は砂岩製の砥石。表裏 2 面を使用するが、一方は使用感に乏しく自然面を残す。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀後半～13 世紀前半に位置付けられる。

溝 105 号（Ⅱ地区 SD1105）（第 4・111 図）

Ⅱ - 12 区西部南側、b・c 7・8 グリッドに位置する。全長 10.8 m 幅 100cm 深度 7cm を測り、主軸は南北が N12° W から東西 N76° E に L 字に屈曲する。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀、白磁片、チャート剥片、が出土するが実測可能な遺物はない。

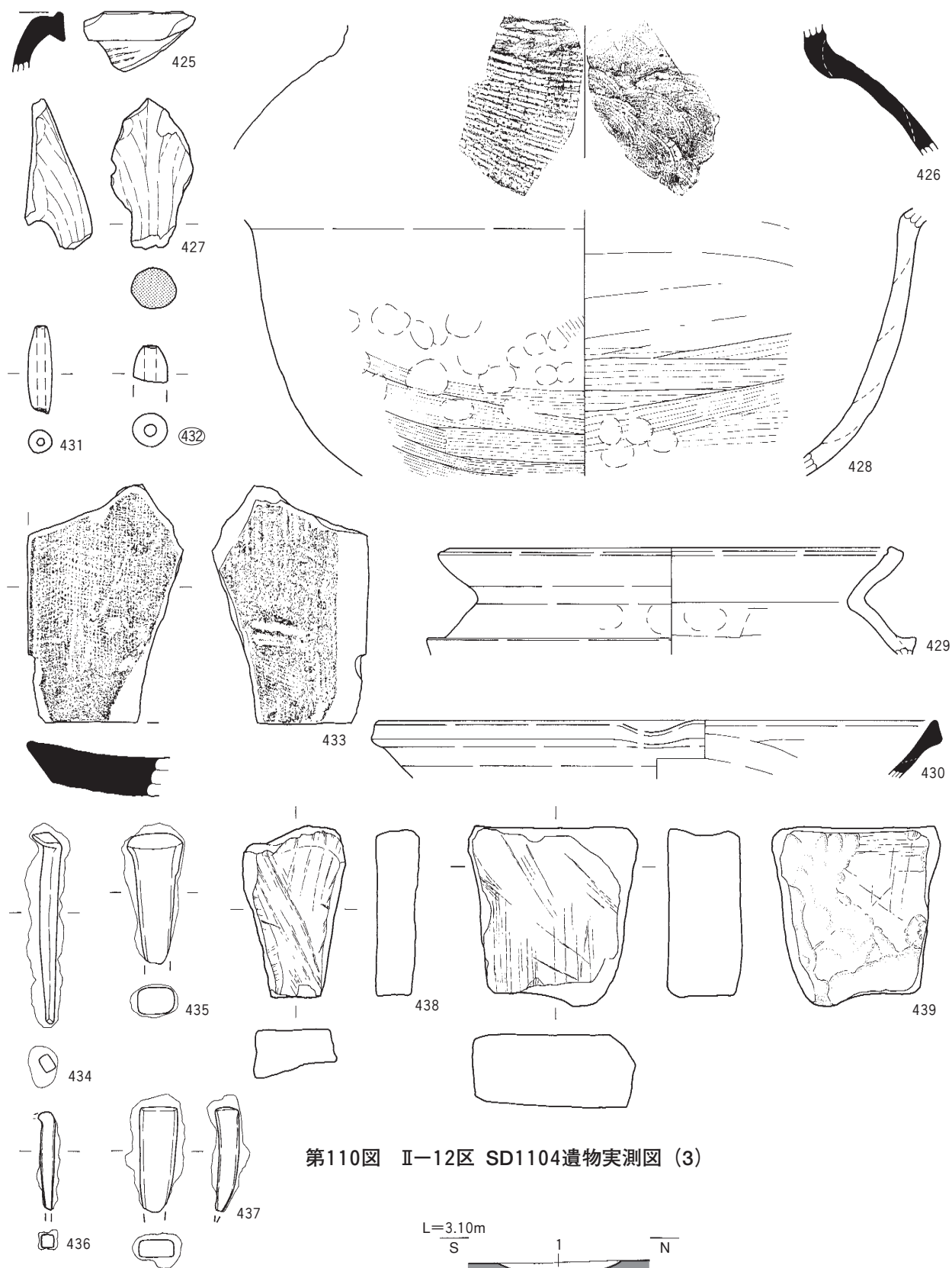
小穴 4007 号（Ⅱ地区 SP14007）（第 112 図）

Ⅱ - 12 区東端部中央北寄り、k 4 グリッドに位置する、径 54cm 深度 29cm を測る不整円形の小穴である。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、白磁碗、鉄製品片・羽口か、砂岩・チャート礫、粘板岩製砥石、が出土。

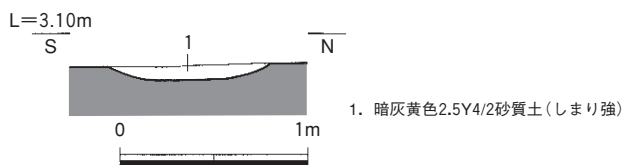
440 は低平な器形をもつ回転台成形の土師質土器皿である。底部の切り離し技法は不明瞭ながら回転ヘラ切りとみられる。441 は土師質土器皿で底部を欠く。非回転台成形の可能性あり。

442・443 は瓦器皿である。442 は比較的深みのある器形で、体部内面に粗い横位のヘラミガキが確認できる。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃の時期と考えられる。443 は内面に横位のヘラミガキが確認できる。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。

444～448 は瓦器椀である。444 は上半部で、外面にやや粗い横位のヘラミガキ、内面に緻密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 1 期（12 世紀前葉）に相当。445 は上半部で、体部は外方に大きく開く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。重焼により口縁内面～体部外面上位にのみ炭素吸着。446 は上半部。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。445・446 とともに和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）とみられる。



第110図 II-12区 SD1104遺物実測図 (3)



第111図 II-12区 SD1105遺構断面図

447・448は底部である。447は断面逆台形状の高台をもち、内面に斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。和泉型瓦器碗Ⅱ-3～Ⅲ-1期（12世紀後葉）に相当。448は低平な蒲鋒状断面の高台をもち、内面には螺旋状のヘラミガキを施す。和泉型瓦器Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当。

449は玉縁をもつ白磁碗の上半部である。釉は荒れ気味で、口縁外面に厚く掛けられていることにより釉垂れを伴う。胎土はやや陶器質。焼成不良によるものか二次被熱によるものかは不明。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

450は粘板岩製の砥石で表裏2面を使用。石材は非常に肌理細かく黄褐色を呈する。側面に鋸引きによる切断痕を残す。451は方形断面をもつ棒状の鉄製品である。上端はわずかに屈曲するとみられる。両端部を欠く。鉄釘または鑿であろうか。

小穴 4015号（Ⅱ地区 SP14015）（第113図）

Ⅱ-12区東部北側、13グリッドに位置する、径31cm深度10cmを測る不整な不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯（回転ヘラ切りか）・羽釜、瓦器碗、が出土。

452は土師器羽釜の上端部。口縁部直下に鏝部を貼り付け。器壁厚い。内面は粗いヨコハケを施す。摂津C型羽釜で11世紀前後に位置付けられる。453は瓦器碗の上半部。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着なく酸化炎焼成される。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～2期（12世紀後葉～13世紀初頭）に位置付けられる。

小穴 4017号（Ⅱ地区 SP14017）（第114図）

Ⅱ-12区東部北側、13グリッドに位置する、径26cm深度19cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器碗・皿、鉄製鑿か、が出土。

454は瓦器皿で、底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。455は瓦器碗の上半部。内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。口縁内面～体部外面のみ炭素吸着やや不良で、他は重焼により炭素の吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅱ-2～Ⅲ-1期（12世紀中葉～後葉）に相当。

小穴 4019号（Ⅱ地区 SP14019）（第115図）

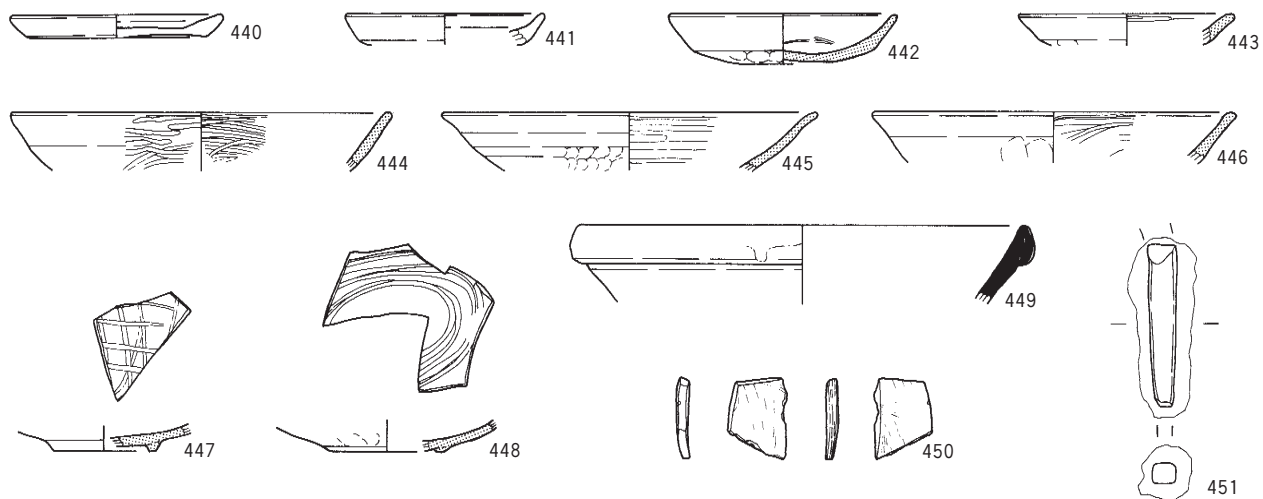
Ⅱ-12区東部北側、13グリッドに位置する、径36cm深度28cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗、が出土。

456は瓦器碗の下半部。高台断面は逆三角形。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で軟質焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）頃とみられる。457は東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁端部は上方にわずかに肥厚。重焼により口縁外面にわずかに炭素付着。森田編年第Ⅱ期第1～2段階（12世紀中葉～13世紀初頭）に相当。

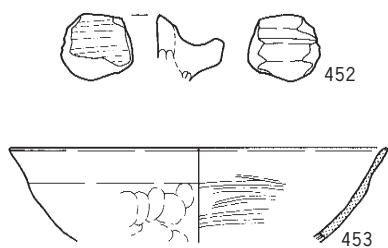
小穴 4043号（Ⅱ地区 SP14043）（第116図）

Ⅱ-12区東部北側、k1グリッドに位置する、径36cm深度35cmを測る楕円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯（回転ヘラ切りほか）・煮炊具・土錘、被熱砂岩礫・チャート礫、が出土。

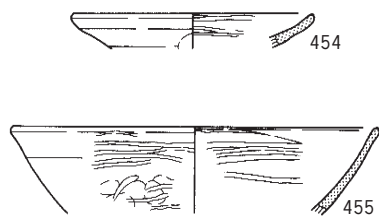
458は土師質土器杯の底部である。回転台成形で、回転糸切り痕を残す。胎土は精良。



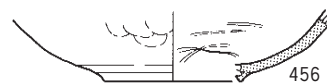
第112図 II-12区 SP14007遺物実測図



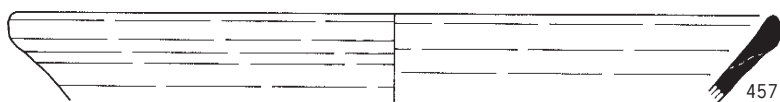
第113図 II-12区
SP14015遺物実測図



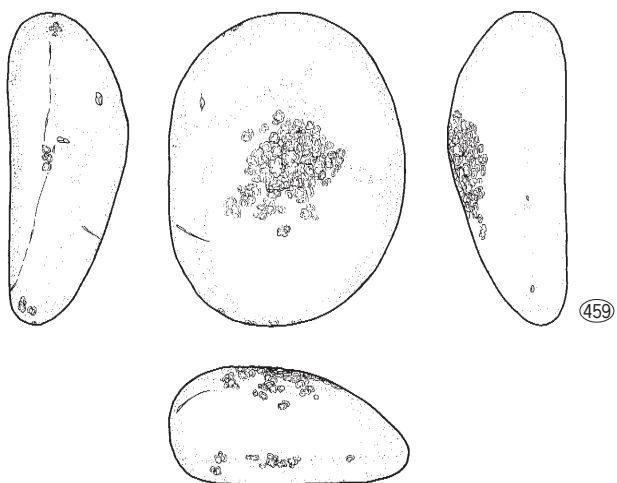
第114図 II-12区
SP14017遺物実測図



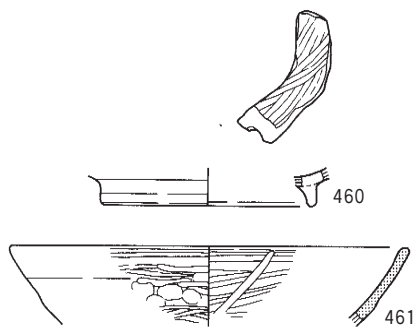
第116図 II-12区
SP14043遺物実測図



第115図 II-12区 SP14019遺物実測図



第117図 II-12区 SP14045遺物実測図



第118図 II-12区
SP14048遺物実測図



小穴 4045 号 (Ⅱ地区 SP14045) (第 117 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する、径 26cm 深度 12cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・砂岩製叩石、が出土。

459 は砂岩の自然円礫を用いた叩石である。片面の中央部に敲打痕が集中し、側面にもわずかな敲打痕を残す。

小穴 4048 号 (Ⅱ地区 SP14048) (第 118 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する、径 15cm 深度 24cm を測る円形の小穴。遺物は、黒色土器碗 (B 類)、土師質土器供膳具・鍋、瓦器碗、が出土。460 は黒色土器 B 類碗の底部。内面に密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。

461 は瓦器碗の上半部。内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅱ - 1 ~ 2 期 (12 世紀前葉 ~ 中葉) 頃とみられる。

小穴 4050 号 (Ⅱ地区 SP14050) (第 119 図)

Ⅱ - 12 区東部北端、l 20 グリッドに位置する、径 30cm 深度 39cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯 (回転ヘラ切り)、白磁碗、が出土。

462 は白磁碗の底部。外面残存部は露胎で部分的に煤付着。高台内側の削り出しは浅い。大宰府分類白磁碗Ⅳ類 (11 世紀後半 ~ 12 世紀前半) に相当。

小穴 4051 号 (Ⅱ地区 SP14051) (第 120 図)

Ⅱ - 12 区東部北端、k 20 グリッドに位置する、径 30cm 深度 39cm を測る円形の小穴。遺物は、黒色土器碗 (A 類)、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、瓦器片、が出土。

463・464 は回転台成形の土師質土器皿である。463 は体部の立ち上がりがわずかで低平な器形。底部外面に回転ヘラ切り痕のち擦痕を残す。464 は底部を欠く。細粒多く器面がざらつく。

小穴 4052 号 (Ⅱ地区 SP14052) (第 121 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する、径 33cm 深度 55cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、鉄釘、が出土。

465 は回転台成形の土師質土器皿で、底部を欠く。466 は土師質土器皿である。非回転台成形で、体部外面下半以下に指頭圧痕を残す。京都系土師皿 D タイプの模倣品か。467 は下部を欠損した鉄釘とみられる。頂部を叩いて平頭に作る。

小穴 4057 号 (Ⅱ地区 SP14057) (第 122 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する、径 46cm 深度 7cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・鍋、瓦器片、瓦質土器羽釜、が出土。

468 は瓦質羽釜の上部である。口縁は内彎し、外面に強いヨコナデによる多段状の稜を作る。鏝部はやや下がり気味に延び、端部を方形に作る。胎土は精良、炭素吸着良好。奥井分類の河内Ⅳに相当し、15 世紀前半頃に位置付けられる。

小穴 4060 号 (Ⅱ地区 SP14060) (第 123 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、k 20 グリッドに位置する、径 32cm 深度 36cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器碗、白磁碗、鉄滓、が出土。

469 は玉縁状口縁をもつ白磁碗の上半部である。内外面ともに細かな釉とびがみられる。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類 (11 世紀後半～12 世紀前半) に相当。

小穴 4100 号 (Ⅱ地区 SP14100) (第 124 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、j 19 グリッドに位置する、径 53cm 深度 13cm を測る不整な楕円形の小穴。遺物は、弥生土器片、土師器高台付皿・煮炊具・鍋・碗、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片、被熱片岩礫、が出土。中央部に土師鍋を正位で据え置き、南東側に土師器高台付皿を集中配置する。皿の向きは一定しない。出土状況から祭祀ピットと考えられるが、柱痕等は確認できないことから建物祭祀に伴うものとはいえない。

470～474 は回転台成形の土師器高台付皿である。いずれもハの字状に開く高脚の高台をもち、皿部は体底部の境が不明瞭な低い円盤状を呈する。472～474 は焼成やや不良。470・471 は焼成良好。いずれも胎土は概して精良で、チャートは 471～474、泥岩は 473・474、在地花崗岩は 473、石灰岩とみられる軟質の白色粒は 470・473 に含まれる。胎土からみてこの 5 点は在地産と考えて良い。

475 は土師器鍋とみられる土器の下半部である。丸底で器壁は 0.9～1.4cm と厚い。内外面に横位のハケを施す。底部は胎土に多量の砂粒を含み、器表面に現れる。体部にも砂粒は含むものの比較的少量で、器面に現れるほどではない。故意か否かは不明であるが、これは底部と体部を成形する際に、それぞれ粘土に混入させた砂の量が異なるためと推測される。胎土に砂岩やチャートを含む。煮炊の痕跡は確認できない。遺構の年代は 11 世紀前後であろうか。

小穴 4103 号 (Ⅱ地区 SP14103) (第 125 図)

Ⅱ - 12 区東部北側、j 19 グリッドに位置する、径 30cm 深度 18cm を測る円形の小穴。遺物は、黒色土器片 (B 類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器碗、が出土。

476・477 は瓦器碗の上半部。476 は歪みのため復元径・傾きとも不正確。体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。477 は小片のため復元径は不正確。体部内面に横位のヘラミガキを施す。内面に接合痕を確認。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

小穴 4107 号 (Ⅱ地区 SP14107) (第 126 図)

Ⅱ - 12 区東部中央北寄り、i 18・19 グリッドに位置する、径 25cm 深度 30cm を測る円形の小穴。遺物は、黒色土器碗 (A 類)、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具、が出土。

478 は黒色土器 A 類碗の体部片である。外面にヨコナデによる沈線が 6 条確認できる。内外面ともに横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面～体部外面上位が良好。

小穴 4108 号 (Ⅱ地区 SP14108) (第 127 図)

Ⅱ - 12 区東部中央、i 19 グリッドに位置する、径 26cm 深度 40cm を測る形の小穴。遺物は、土師器羽釜、

黒色土器碗（A類）、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・羽釜・土錘、が出土。

479 は黒色土器A類碗の底部である。内面にヘラミガキを施す。内面のみ炭素吸着良好。胎土に結晶片岩を含む。

小穴 4109 号（Ⅱ地区 SP14109）（第 128 図）

Ⅱ - 12 区東部中央、i19 グリッドに位置する、径 30cm 深度 30cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯・播鉢、須恵質土器貯蔵具、瓦器碗、白磁皿、が出土。

480 は白磁皿で、底部を欠く。端反り気味の口縁をもつ。内面～体部外面下位まで施釉し、釉にごく粗い貫入を伴う。森田分類白磁皿 E - 2 類（16 世紀代）に相当する。

小穴 4110 号（Ⅱ地区 SP14110）（第 129 図）

Ⅱ - 12 区東部中央、i 19 グリッドに位置する、径 44cm 深度 16cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、瓦器皿、が出土。

481 は土師質土器皿で、口縁を欠く。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成やや不良で、内面に炭素付着。胎土にチャートを含む。482 は瓦器皿である。内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。深みがある器形をもち密なヘラミガキを施すことから、和泉型瓦器Ⅱ～Ⅲ期前半頃と考えられる。

小穴 4111 号（Ⅱ地区 SP14111）（第 130 図）

Ⅱ - 12 区東部中央、i 19 グリッドに位置する、径 36cm 深度 15cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯・壺、須恵質土器壺、瓦器片・碗、砂岩製砥石、被熱砂岩礫、が出土。

483 は人頭大の砂岩製砥石。積極的な使用痕がみられるのは角部の 2 ヶ所で、ごく限定された範囲を砥面として使用。平滑な面はみられるが使用痕に乏しく、わずかな敲打痕と擦痕を残すのみである。器表面は被熱によるハゼで部分的に剥離。

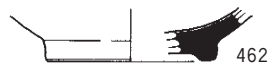
484 は須恵質土器壺で、頸部下位～肩部のみ残存。肩部外面に格子タタキを施し、のち外面は回転ナデによって整形する。頸部内面は粘土紐の継目が残り、ユビオサエやヨコナデによって粗雑に仕上げる。体部内面は無文の当て具痕が残る。焼成はやや軟質である。破面などに煤が付着することから二次被熱の可能性はある。十瓶山系だが十瓶山産であるかは不明。佐藤編年に照らすとⅣ - 2～3 期頃、概ね 12 世紀代に位置付けられる。

小穴 4121 号（Ⅱ地区 SP14121）（第 131 図）

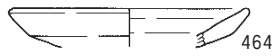
Ⅱ - 12 区東部北端、k 18 グリッドに位置する、径 34cm 深度 33cm を測る隅丸方形の小穴。遺物は、黒色土器片・碗（A・B類）、土師質土器供膳具・皿・煮炊具、瓦器碗・皿、灰釉陶器片、が出土。

485 は黒色土器B類碗か。上半部のみ残存。歪みのため復元径過大か。体部外面に不明瞭な指頭圧痕を残すが、磨耗によりヘラミガキは確認できない。内面は不明瞭ながら密なヘラミガキを施すとみられる。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。胎土は細粒多く器面はざらつく。微細な石英粒を多く含む。瓦器の可能性もある。

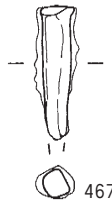
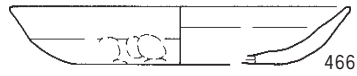
486 は瓦器碗の底部。高台断面は逆三角形状を呈する。内面に粗いヘラミガキを施す。炭素吸着は内



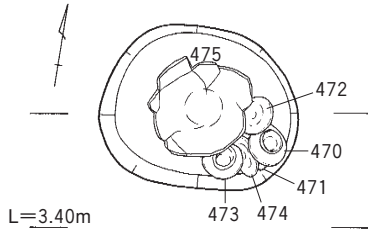
第119図 II-12区
SP14050遺物実測図



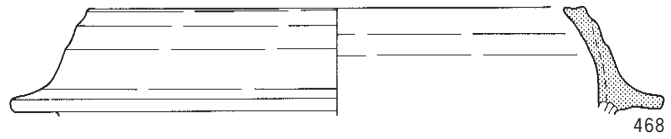
第120図 II-12区
SP14051遺物実測図



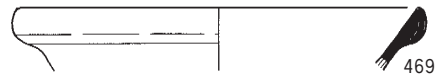
第121図 II-12区 SP14052遺物実測図



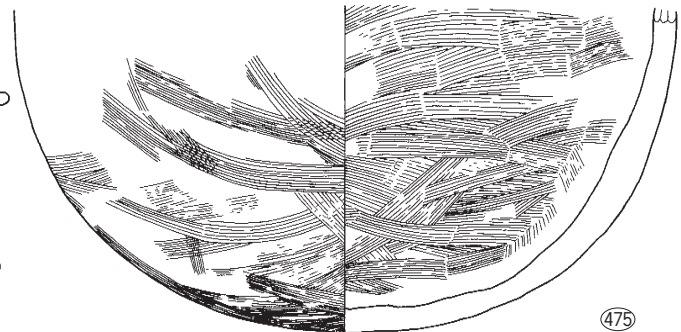
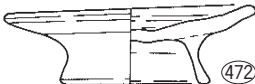
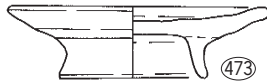
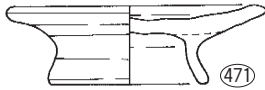
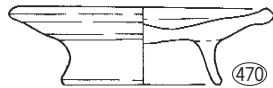
1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
※土器(475)内土:
暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



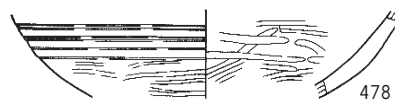
第122図 II-12区 SP14057遺物実測図



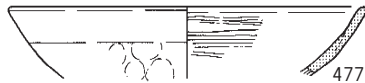
第123図 II-12区
SP14060遺物実測図



第124図 II-12区 SP14100遺構・遺物実測図

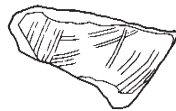


第128図 II-12区
SP14109遺物実測図



第126図 II-12区
SP14107遺物実測図

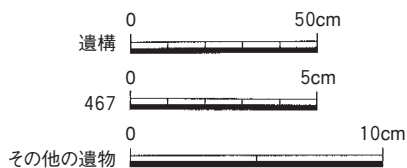
第125図 II-12区
SP14103遺物実測図



第127図 II-12区
SP14108遺物実測図



第129図 II-12区
SP14110遺物実測図



面やや不良、外面なし。酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ－１期（12世紀後葉）前後に相当する。

小穴 4125 号（Ⅱ地区 SP14125）（第 132 図）

Ⅱ－12区東部中央北寄り、i18グリッドに位置する、径24cm深度14cmを測る円形の小穴。遺物は、弥生土器片か甕、土師質土器供膳具・皿・杯、が出土。

487は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土は粗く、最大7mmの結晶片岩を含む。488は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。胎土にチャートを含む。

小穴 4129 号（Ⅱ地区 SP14129）（第 133 図）

Ⅱ－12区中央部南側、h18グリッドに位置する、径43cm深度42cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師器碗、黒色土器碗（A類）、須恵器土器片、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器片、瓦器片・碗、緑釉陶器皿、が出土。

489は緑釉陶器皿の口縁部である。きわめて低平な器形で、口縁端部はわずかに外反。釉は薄く微細な貫入を伴い、部分的にわずかに剥離。焼成良好。高橋編年Ⅱ期（9世紀中葉～後葉）頃とみられる。490は土師器碗の下半部である。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。491は瓦器碗の底部である。内面に密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）頃とみられる。

小穴 4131 号（Ⅱ地区 SP14131）（第 134 図）

Ⅱ－12区中央部南側、g・h18グリッドに位置する、径25cm深度28cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、瓦器碗、白磁碗、が出土。

492は白磁碗の上半部である。口縁の玉縁はやや小さく不明瞭だが、大宰府分類Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）としておく。

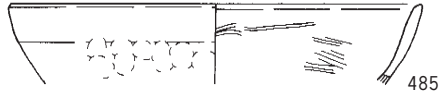
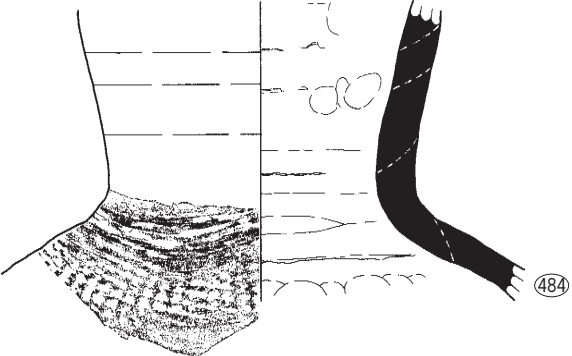
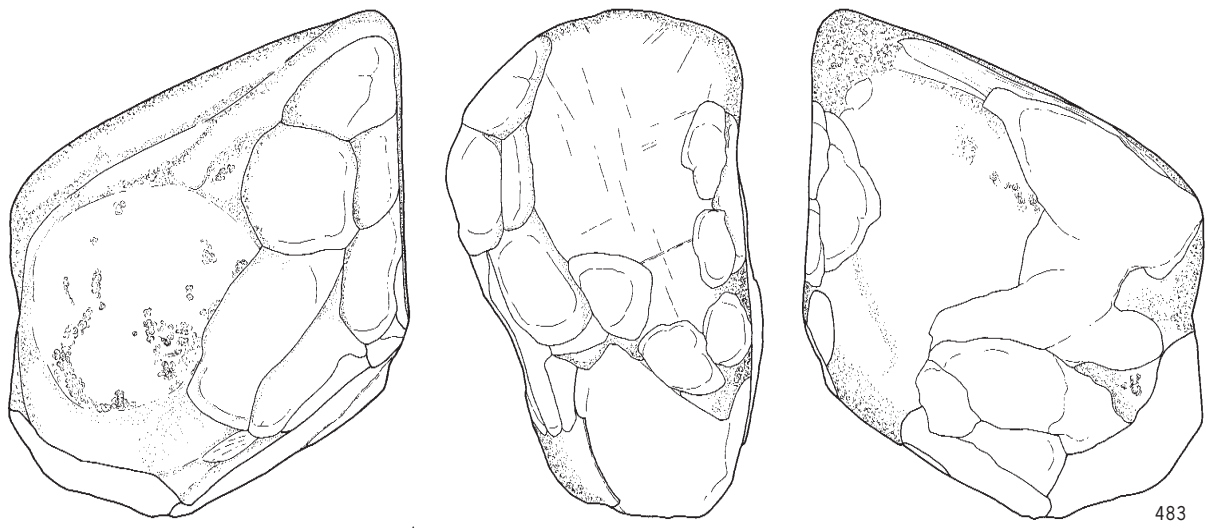
小穴 4147 号（Ⅱ地区 SP14147）（第 135 図）

Ⅱ－12区中央部北寄り、i17グリッドに位置する、径28cm深度40cmを測る円形の小穴。遺物は、土師器供膳具・高台付皿か杯、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片、砂岩礫、が出土。493は土師器高台付皿か杯である。回転台成形で、底部外面は不明瞭ながら回転ヘラ切りを施すとみられる。胎土に結晶片岩と絹雲母を多く含む。

小穴 4153 号（Ⅱ地区 SP14153）（第 136 図）

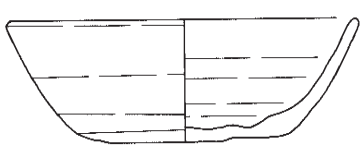
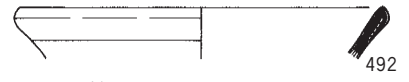
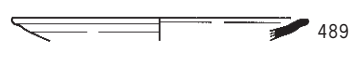
Ⅱ－12区中央部、h17グリッドに位置する、径36cm深度35cmを測る円形の小穴。遺物は、土師器煮炊具・碗か、土師質土器供膳具・皿・杯・土錘、瓦器片・碗、瓦質土器鉢か、が出土。

494は瓦器碗である。内面に粗い横位のヘラミガキを残すが、磨耗により不明瞭。内面上部に横位に走る浅い凹線があり、接合痕または工具痕とみられる。炭素は体部外面中位以下にみられるが、意識的に吸着させたものでなく、焼成失敗による炭素付着の可能性がある。全体的に酸化炎焼成する。胎土は粗い。和泉型瓦器碗Ⅲ－1期（12世紀後葉）に相当するとみられるが、胎土や焼成から非和泉型の可能性も考えられる。

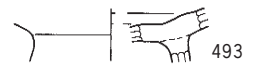


第130図 II-12区
SP14111遺物実測図

第131図 II-12区
SP14121遺物実測図



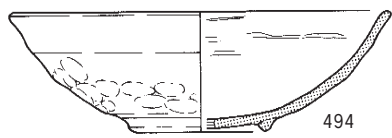
第134図 II-12区
SP14131遺物実測図



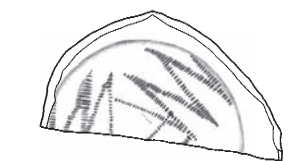
第133図 II-12区
SP14129遺物実測図

第135図 II-12区
SP14147遺物実測図

第132図 II-12区
SP14125遺物実測図



第136図 II-12区
SP14153遺物実測図



第137図 II-12区
SP14154遺物実測図

その他の遺物
0 10cm

483
0 10cm

小穴 4154 号 (Ⅱ地区 SP14154) (第 137 図)

Ⅱ - 12 区、i 17 グリッドに位置する、径 37cm 深度 16cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、青磁皿、が出土。

495 は青磁皿。見込みに櫛描によるジグザグ文を施すが、ヘラ片彫による施文はない。全面施釉後に底部外面の釉を掻き取る。釉にごく粗い貫入を伴う。釉の発色に違和感があるが、露胎部の胎土は酸化炎焼成気味であることから、釉も酸化炎焼成したものと理解できる。文様構成や器形から大宰府分類同安窯系青磁皿Ⅰ - 2 類 (12 世紀中頃～後半) に相当。

小穴 4160 号 (Ⅱ地区 SP14160) (第 138 図)

Ⅱ - 12 区中央部北寄り、h 17 グリッドに位置する、径 35cm 深度 46cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・椀、が出土。

496・497 は瓦器椀の上半部。496 は外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 ～Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。497 は口縁外面に横位に連続する指頭圧痕が明瞭である。内面は粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

小穴 4165 号 (Ⅱ地区 SP14165) (第 139 図)

Ⅱ - 12 区中央部、h 17 グリッドに位置する、径 30cm 深度 27cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯・煮炊具・土錘、が出土。

498 は土師質土器皿で、厚い底部と短い体部をもつ。回転台成形で底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土精良で結晶片岩と絹雲母を含む。焼成不良により軟質。

小穴 4166 号 (Ⅱ地区 SP14166) (第 140 図)

Ⅱ - 12 区中央部南側、h 17・18 グリッドに位置する、径 43cm 深度 34cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師器供膳具、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器捏鉢・壺、瓦器片・椀・皿、が出土。

499 は瓦器皿である。小片で歪みのため復元径不正確。内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。

500 は須恵質土器壺の体部上位とみられる。外面に断面台形状の突帯を貼り付ける。体部外面は格子タタキによって成形したのち、回転ナデを施す。内面は回転ナデの痕跡が明瞭である。外面に突帯を有する須恵質の貯蔵具は、中国地方の美作を産地とする勝間田焼に突帯壺と呼ばれるものや、東播系の神出古窯址群に類例があるが、産地の特定は難しい。本県ではきわめて希なものである。

501 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。口縁を上方に拡張する。内面～口縁外面に自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第 1 段階 (12 世紀中葉～後葉) に相当。

小穴 4175 号 (Ⅱ地区 SP14175) (第 141 図)

Ⅱ - 12 区中央部北側、i 6 グリッドに位置する、径 25cm 深度 29cm を測る円形の小穴。遺物は、土師器碗、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具、瓦器片・碗、被熱砂岩礫、が出土。

502 は回転台成形の土師質土器皿である。切り離し技法はナデおよび磨耗により不明瞭であるが、回転ヘラ切りとみられる。

小穴 4184 号 (Ⅱ地区 SP14184) (第 142 図)

Ⅱ - 12 区中央部北側、h・i 16 グリッドに位置する、径 28cm 深度 11cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・羽釜、瓦器片・碗、が出土。

503 は瓦器碗の上半部である。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) とみられる。504 は土師質土器羽釜の鏝部である。ほぼ水平に直線的に延び、下面に煤付着。胎土に金雲母を含む。河内型の羽釜か。

小穴 4186 号 (Ⅱ地区 SP14186) (第 143 図)

Ⅱ - 12 区中央部北寄り、h 16 グリッドに位置する、径 31cm 深度 35cm を測る不整形の円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具 (回転糸切りほか)・杯か皿・煮炊具、瓦器碗・皿がみられ、主に第 1 層上位から出土している。

505 ~ 507 は瓦器皿である。505 は底部を欠く。体部内面上部に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。506 は第 1 層の出土遺物である。低平な器形をもつ。図示していないが全体的に歪む。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。507 は口径 7.8cm の小型品。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良、和泉型瓦器Ⅳ期頃に位置付けられる。

508・509 は瓦器碗で、底部を欠く。508 は内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。509 は第 1 層の出土遺物で、内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着はやや不良で、軟質焼成である。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 ~ Ⅳ - 1 期 (13 世紀前葉 ~ 中葉) 頃とみられる。

小穴 4197 号 (Ⅱ地区 SP14197) (第 144 図)

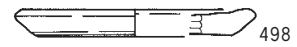
Ⅱ - 12 区中央部北側、i 15 グリッドに位置する、径 36cm 深度 23cm を測る円形の小穴。埋土下位に根石とみられる犬頭大の角礫を埋置し、その直上に遺物が集中する。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・皿、瓦器片・碗、が出土。511・512 は根石の直上から出土。

510 ~ 512 は瓦器碗で、いずれも底部を欠く。510 は内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好であるが、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。

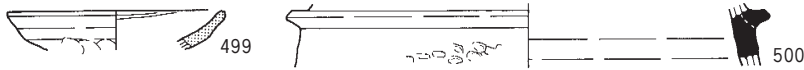
511・512 は和泉型瓦器碗Ⅲ - 2 期 (12 世紀末 ~ 13 世紀初頭) に相当。511 は磨耗により不明瞭ながら内面に粗い横位のヘラミガキを施す。上位にナデ以前に施された沈線がある。工具痕か。炭素吸着は良好であるが、胎土は酸化炎焼成する。512 は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、底部内面は螺旋状ヘラミガキ暗文か。体部内面上位にナデ・ミガキ以前に施した横位の沈線が確認できる。工具痕または接合痕か。炭素吸着は良好だが、胎土は酸化炎焼成する。



第138図 II-12区 SP14160遺物実測図



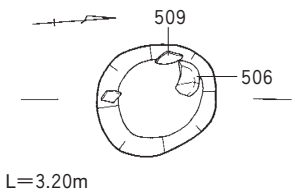
第139図 II-12区 SP14165遺物実測図



第141図 II-12区 SP14175遺物実測図

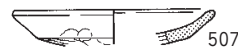
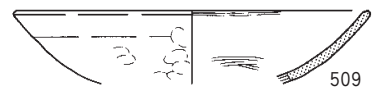
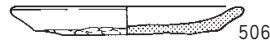
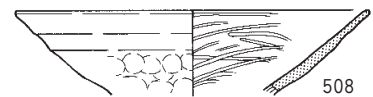
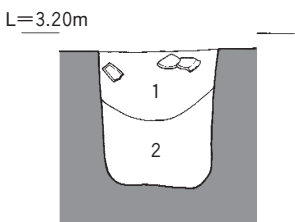


第140図 II-12区 SP14166遺物実測図

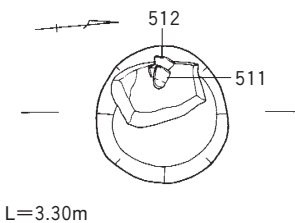


第142図 II-12区 SP14184遺物実測図

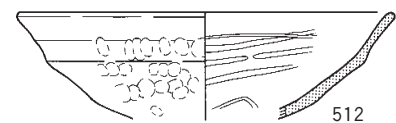
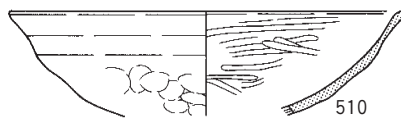
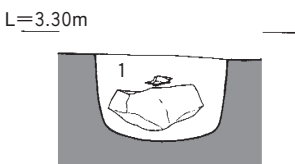
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)



第143図 II-12区 SP14186遺構・遺物実測図



1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土(しまり強)



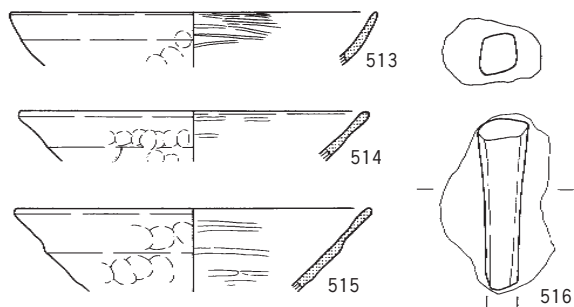
第144図 II-12区 SP14197遺構・遺物実測図



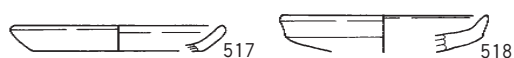
小穴 4199号 (II地区 SP14199) (第145図)

II-12区中央部北側、h 15グリッドに位置する、径48cm深度30cmを測る楕円形の小穴。遺物は、弥生土器甕、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器碗、鉄製品片・鏝か、が出土。

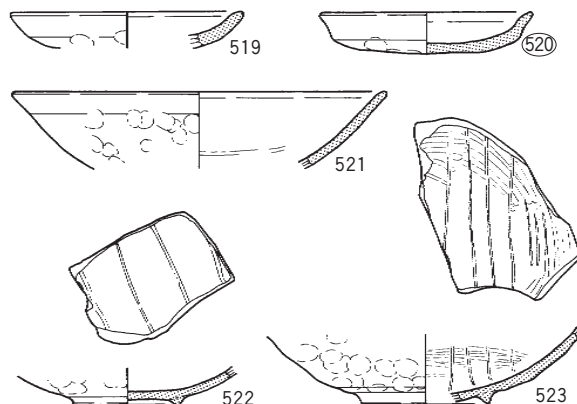
513～514は瓦器碗の上半部。513は小片のため復元径は不正確。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施すが、口縁端部までヘラミガキが確認できる。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)



第145図 II-12区 SP14199遺物実測図



第146図 II-12区 SP14234遺物実測図



第147図 II-12区 SP14343遺物実測図



に相当するがやや古相か。

514・515 は和泉型瓦器碗Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当。514は小片のため復元径は不正確。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。胎土に花崗岩とみられる粒子を含む。515は上半部。体部外面に接合痕が残り、内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。

516は棒状の鉄製品で、鑿であろう。断面は不整な方形を呈する。先端部を欠く。頭部を欠損するかは不明。

小穴 4234号（Ⅱ地区 SP14234）（第146図）

Ⅱ-12区西部北端、g 9グリッドに位置する、径34cm深度24cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯、瓦器片、が出土。

517・518は土師質土器皿である。517は回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。518は底部が丸みを帯び、安定性を欠く。非回転台成形とみられるが、底部などに指頭圧痕は確認できない。胎土にチャートらしき粒子を含む。

小穴 4343号（Ⅱ地区 SP14343）（第147図）

Ⅱ-12区西端部南側、a・b 6グリッドに位置する、径38cm深度32cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器片・碗・皿、鉄滓、が出土。鉄滓は4点（No.1934～1937）が出土している。

519は瓦器皿で、底部を欠く。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃か。520はほぼ完形の瓦器皿で、図示していないが器形に歪みあり。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良で酸化炎焼成する。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃とみられる。

521～523は瓦器碗で、521・522は和泉型瓦器碗Ⅲ-3期（13世紀前葉）に相当する。521は上半部で、内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成気味。体部内面に鉄分が

固着。522 は下半部で高台断面は逆三角形で低く退化する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面良好、外面不良で、酸化炎焼成気味。軟質焼成のため磨耗し、調整不明瞭。

523 は下半部で、和泉型瓦器碗Ⅲ－1期（12世紀後葉）に相当する。高台断面は逆三角形でやや高さがある。体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施したのち見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面良好、外面不良で、外面側が酸化炎焼成気味。

自然流路1号（Ⅱ地区 SR1001）（第148図）

Ⅱ－12区南端、a～f 8～17、i・j 2～5グリッドに位置する。南と東は調査区外に延びる。検出長95.1m検出幅120cm深度75cmを測り、主軸はN70°Wを向く。断面は緩い船底状で、埋土は9層に分層できる。底面は南に向けて緩やかに下がる。

遺物は、弥生土器甕、土師器供膳具・甕・碗・把手・羽釜・杯、黒色土器片・碗（A類）、須恵器片・供膳具・杯・皿・貯蔵具・壺・甕、土師質土器片・供膳具・杯（回転ヘラ切りほか）・煮炊具（脚ほか）・羽釜・鍋・貯蔵具・土錘、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、瓦質土器片・甕、瓦片・瓦転用砥石、備前土器片・播鉢、常滑甕、中世陶器貯蔵具、青磁皿・碗、白磁片・皿・碗、近世陶器片・碗・貯蔵具・磁器片・碗、備前陶器片・碗・皿・鉢・甕・磁器片・碗・皿（蛇ノ目釉剥ぎほか）、瀬戸美濃皿（鉄釉）、京焼碗、鉄製品片・釘・鉄滓、粘板岩製硯か・碁石か・砂岩製砥石、が出土。

中世以前に遡る遺物もみられるが、近世以降の遺物が主体を占める。土層の堆積状況からみても、近代まで耕作地として利用されていたと考えられる。

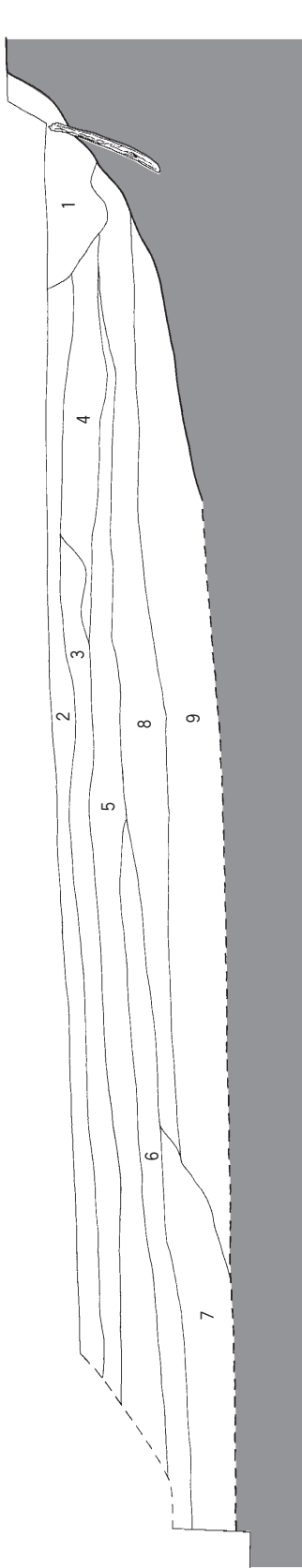
524 は磁器皿である。高台は削り出しで作り、内面～高台外面途中まで施釉する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、釉剥ぎ部分に0.3mm以下の微細な離れ砂が付着。内外面に釉とびがみられ、内面には自然釉の一種とみられる茶褐色の小斑が付着する。17世紀後半頃か。525 は近世陶器碗の下半部である。高台は細く、直立する。釉は青味がかかるもののほぼ透明で、薄く施釉される。微細な貫入を伴う。胎土は白色で、肌理細かい。京焼系か。526 は染付の猪口とみられ、底部を欠く。口縁外面に雨降文を呉須で描く。肥前系磁器で、18世紀代か。

527 は青磁碗の底部である。釉はやや不透明で、一部は畳付を越えて高台内側まで達する。露胎部は弱く赤色化する。型式は特定できないが、概ね中世後半期とみられる。528 は土師質土器煮炊具の脚部である。傾きは不正確。断面は方形を意識している。胎土は粗い。

529 は棒状の鉄製品で、鑿とみられる。断面長方形で、頂部は平頭に作り、下部は細る。先端部を欠く。530 も棒状の鉄製品で、頭部を折り曲げて平頭に作り、下端を尖らせる。ほぼ完存するとみられる。楔または鑿であろうか。531 はやや扁平な棒状鉄製品である。先端部を尖らせ、下部を屈曲する。上部を欠く。鉄釘か鑿または楔であろうか。

532 は須恵器片を転用したとみられる砥石であるが、須恵器本来の調整痕は確認できない。角錐状を呈し、全面を使用する。533 は粘板岩製の砥石である。使用面は2面で、上面を主に使用し、左側面は切断痕または整形痕を残すとみられる。形状から硯の転用と考えられる。534 は長径2.1cmを測る扁平な円礫で、表面は滑らか。泥岩または赤色チャートの自然礫とみられ、暗赤褐色の色調を呈する。形状から碁石の可能性もある。

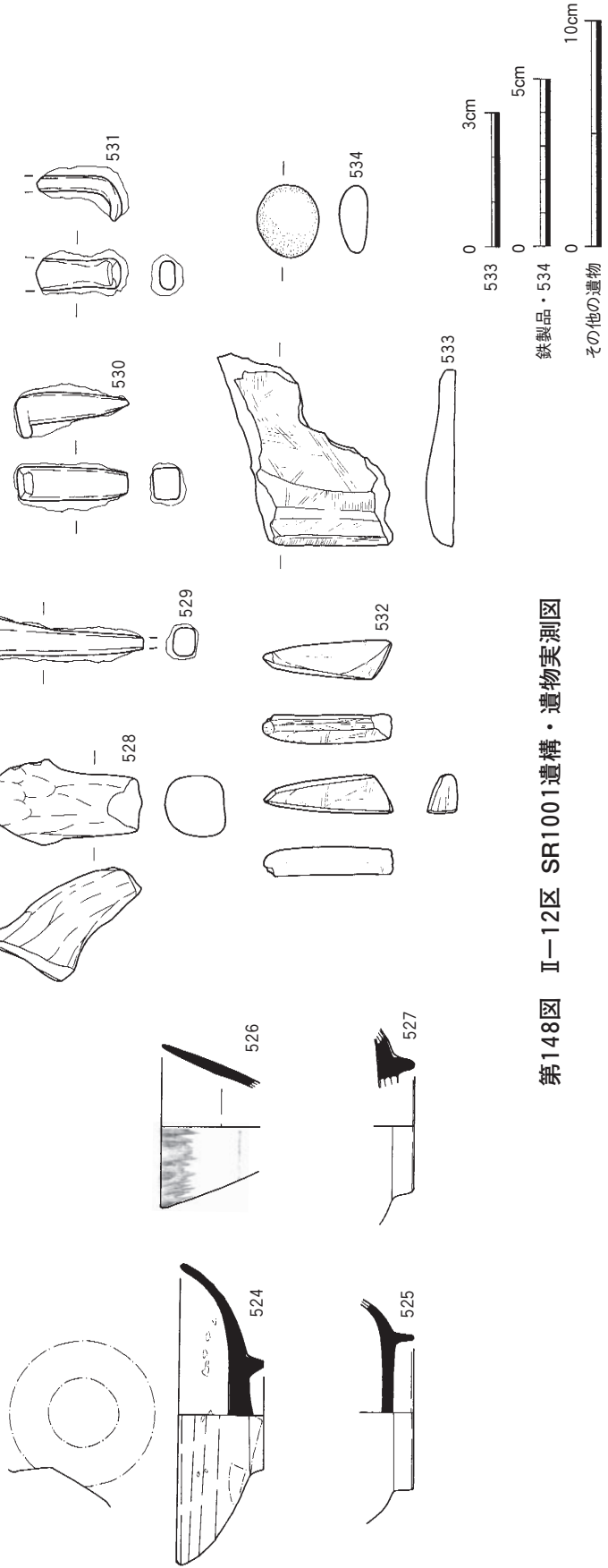
L=3.20m



1. 灰色5Y4/1粘質土(しまり弱・粘性強)
2. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性)
3. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
4. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土(しまり強)
5. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
6. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)

7. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
 8. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)
 9. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
- シルト多く含む
※1: 近世水路堆積土層、2~9: 近世耕作土層

0 1m



第148図 II-12区 SR1001遺構・遺物実測図

〈Ⅱ－12区 第1包含層出土遺物〉（第149～151図）

535 は非回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に指頭圧痕を残す。胎土に泥岩を含む。やや小ぶりであるが、京都系土師皿Dタイプの在地模倣品か。概ね13世紀代とみられる。536・537は回転台成形の土師質土器皿である。536は低平な器形で、器壁は底部は厚く、口縁・体部は薄い。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが、磨耗や剥離により不明瞭。537は土師質土器皿で、底部を欠く。低平な器形で、器壁は薄く、回転ナデによる稜が明瞭。口縁に煤が厚く付着していることから、灯明皿としての使用が考えられる。

538は土師質土器杯である。回転台成形であるが、磨耗により切り離し技法不明。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。

539は土師質土器碗の下半部である。高台は断面逆三角形で、高さを保つ。調整は磨耗により不明瞭。胎土は粗く、花崗岩と角閃石を含む。540は土師質土器碗の底部である。高台は断面逆三角形を呈し、幅と高さを保つ。浅黄色の色調で、やや粗い胎土をもつ。いずれも吉備系土師質土器碗とみられ、山本編年Ⅲ－1～2期（13世紀代）に相当する。

541～543は瓦器皿である。543は口縁内面に横位のヘラミガキを施すが、他の2点はヘラミガキは確認できない。炭素吸着は541が良好、542・543がやや不良。ともに和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。

544は瓦器碗で、底部を欠く。強いヨコナデにより、端反りの口縁をもつ。体部内面に粗いヨコハケ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

545は緑釉陶器皿か碗の底部である。断面逆三角形の低平な高台をもつ。底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが不明瞭。釉は薄く、微細な貫入を伴う。剥離が著しい。軟陶で、酸化炎焼成気味。京都近郊の産とみられ、概ね9世紀代か。

546は須恵質土器碗の底部である。高台は断面方形で太い。見込みに粗いヘラミガキを施す。西村系須恵質土器碗の可能性があり、佐藤編年Ⅳ期新相（12世紀末～13世紀前葉頃）に相当。

547は須恵器の把手部である。提瓶の肩部に取り付くものか。ユビオサエ・ユビナデでつくり、断面は不整な楕円形を呈する。上面にわずかに自然釉が付着。

548は陶器卸皿で、底部を欠く。口縁内側に受け口状の段をつくる。体部の器壁は厚い。体部内面にヘラ先によって粗い卸目を施条する。口縁内外面に透明度の高い灰釉を厚く掛け、粗い貫入を伴う。胎土の色調は黄味を帯びた灰白色を呈する。瀬戸焼で、後Ⅳ期新相（15世紀後葉）に相当するとみられる。

549～551は白磁皿の底部である。549は削り出しにより低平な高台をつくる。見込みに放射状に櫛描を施し、花文を描く。内面と体部外面下端まで施釉し、底部外面は露胎。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁皿Ⅶ－1・b類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。550は見込みにヘラ先によって花文を描く。全面施釉後に外底の釉を掻き取る。釉に粗い貫入を伴う。大宰府分類白磁皿Ⅷ－2・a類（12世紀中頃～13世紀前半）に相当。551は高台を削り出しにより割高台につくる。全面施釉し、釉に貫入を伴う。見込みに重焼による目跡1カ所あり。森田分類D群で、15世紀代に位置付けられる。

552は白磁碗の上部である。口縁を小さな玉縁につくる。内面にわずかな釉とびを伴う。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅲ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。553は白磁碗の下半部である。高台内側の削り出しは浅い。内面と体部外面下端まで施釉し底部外面は露胎。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

554 は青磁皿の底部である。見込みにヘラ片彫文と櫛描文を施す。全面施釉のち底部外面の釉を掻き取る。釉は透明度高く、貫入を伴う。釉の色調に違和感があるが、大宰府分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2類(12世紀中頃～後半)に相当。555 は青磁鉢の上部片である。内外面にヘラ片彫により牡丹とみられる花文を陰刻するが、釉を厚く掛けることから文様は不明瞭。概ね15世紀代か。「宮ノ本遺跡Ⅰ」の1434が同種とみられる。

556 は白磁碗の上半部である。端反りの口縁をもつ。胎土・釉ともに灰色味を帯びる。森田分類C群に相当し、15世紀代に位置付けられる。

557 は須恵質土器壺の頸部である。歪みのため復元径は不正確。外面上端に平行タタキを施し、のち回転ナデによって不明瞭。内面は粘土紐の接合痕が顕著で、回転ナデのち部分的に縦位のユビナデを施す。上端には工具の接触痕とみられる横位の沈線がみられる。焼成はやや不良で、部分的に酸化炎焼成する。十瓶山系であるが十瓶山産とはいえない。胎土に砂岩・泥岩を含むことから吉野川北岸または県南部を産地とする可能性がある。十瓶山の佐藤編年ではⅣ期に相当し、概ね11世紀後半～13世紀後半に位置付けられる。

558 は東播系須恵質土器捏鉢の上半部である。口縁に片口を伴う。口縁端部を上方に拡張し、重焼により炭素付着。森田編年第Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀初頭)に相当。

559・560 は備前焼播鉢の上部である。口縁外面を上下に拡張させる。559 は内面に縦位の播目を施す。胎土は粗く、花崗岩を顕著に含む。重根編年ⅣA-2期(14世紀末～15世紀初頭)に相当。560 は斜位の播目を施す。外面に重焼痕を伴う。胎土に花崗岩を含む。559と比較して口縁が発達することから、重根編年ⅣB-1～2期(15世紀前葉～中葉)に相当。

561 は土師質土器鍋の上部である。小片のため復元径は不正確。厚い器壁をもち、口縁端部を方形につくる。頸部外面に細かいヨコハケ、体部内面は横位の板ナデを施す。胎土は粗く、金雲母や角閃石を含むことから、瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。

562 は瓦質焙烙の上部である。口縁は肥厚し、大きく外反する。炭素吸着は認められないが、灰白色の色調や精良な胎土から瓦質土器としておく。外面煤付着。近世の御厩系の焙烙である。

563 は撰津C型土師器羽釜の上部である。口縁の直下に断面台形状の太い罌部を貼り付ける。体部外面は細かなタテハケ、内面は横位の板ナデを施す。胎土は粗い。概ね11世紀前後とみられる。

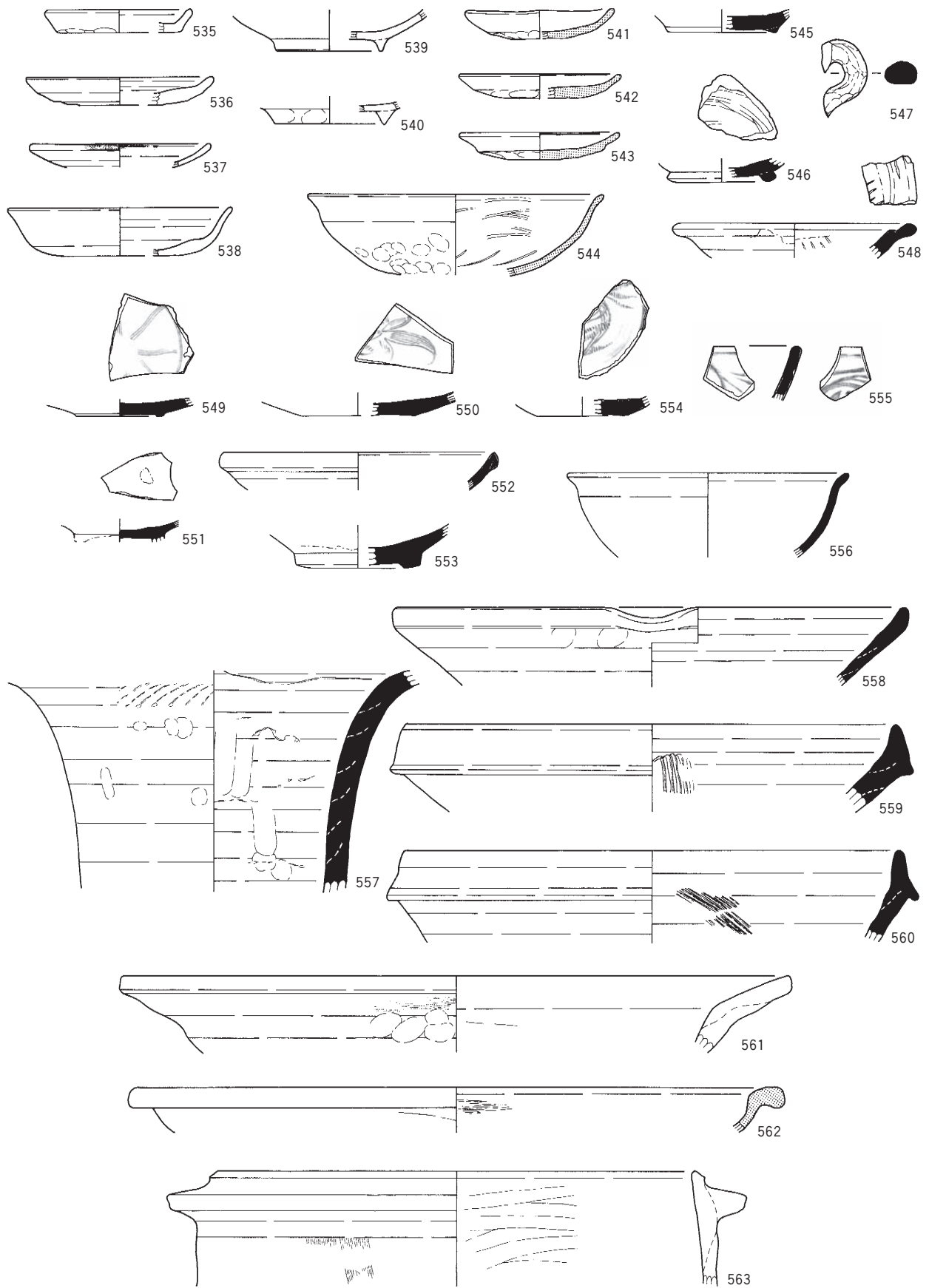
564～567 は土師質土器羽釜の上部。いずれも罌部は退化して口縁とほぼ一体化し、罌・口縁間に浅い凹線を廻らせることによって辛うじて区別される。罌部折り曲げ技法を踏襲しており、罌部成形のち口縁を内側に付け足す。体部外面は指頭圧痕を残し、板ナデやタタキは確認できない。体部内面は横位の板ナデを施す。外面に煤の付着がみられる。胎土に花崗岩を含み、564・565・567 は金雲母を含むことから、これらは瀬戸内沿岸からの搬入品と考えられる。罌部の形状から概ね16世紀代とみられる。

568 は瓦質丸瓦である。凸面は板ナデ・ナデを施し、凹面は布圧痕・布目圧痕のち工具または指頭による縦位のナデを施す。凹面にコビキ痕や吊り紐痕は確認できない。炭素吸着は良好。569 は土師質の平瓦である。凹面・凸面とも板ナデの痕跡が明瞭で、布目圧痕は確認できない。凸面に離れ砂付着。

570・571 は土師質管状土錘で、ともに一端を欠く。軟質焼成。

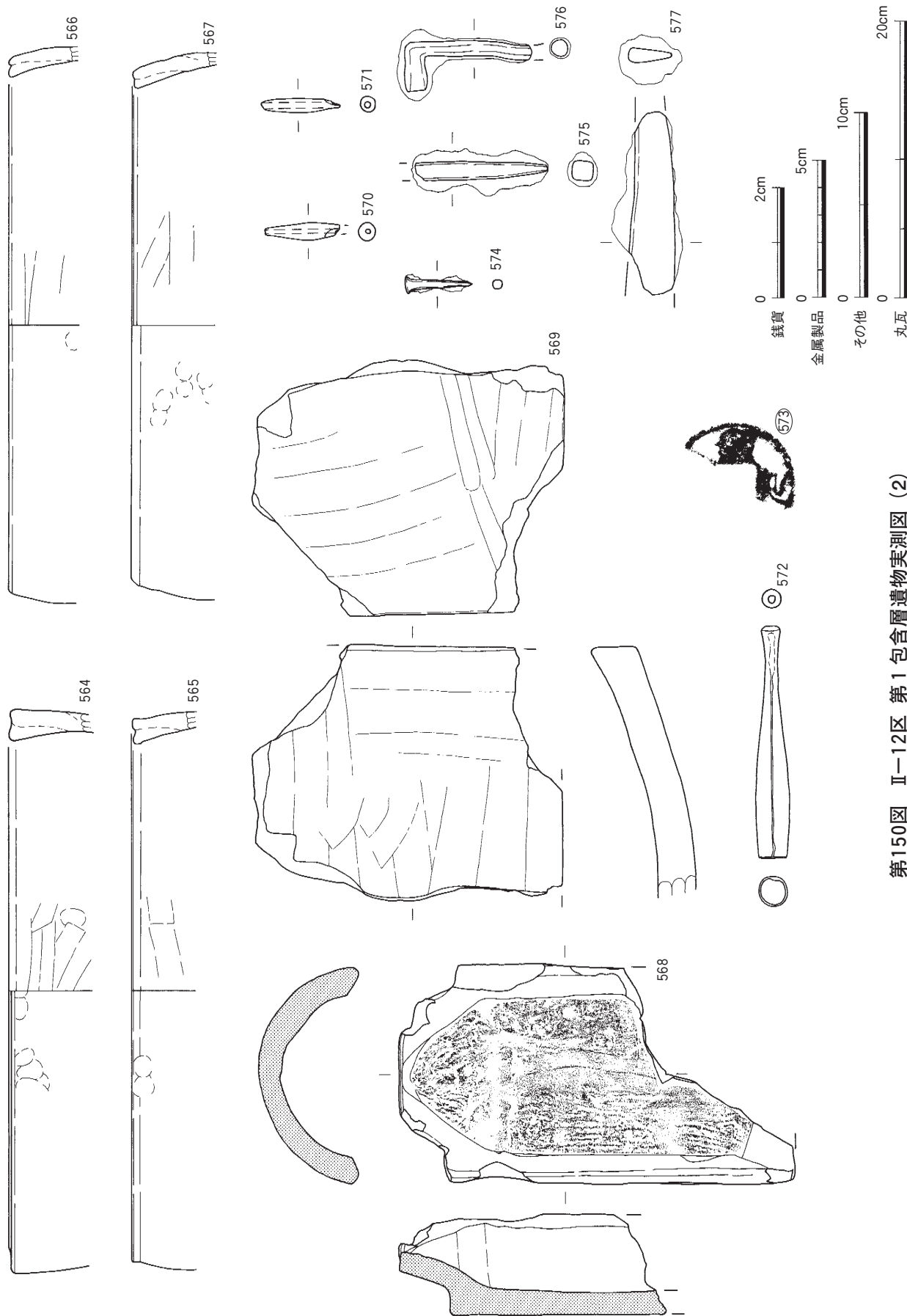
572 は青銅製の煙管吸口で、完形品である。長軸方向に直線的に溶接痕がみえる。文様等は確認できない。573 は銅銭で50%が残存。北宋銭の熙寧元寶(篆書体)で、1068年初鑄。劣化により部分的に剥離。

574 は完形の鉄釘で、全長2.4cmの小型品である。頂部を叩いて平頭に作る。575 は鉄釘で、頭部を欠



第149图 II-12区 第1包含層遺物実測图 (1)

0 10cm



第150図 II-12区 第1包含層遺物実測図(2)



第151図 II-12区 第1包含層遺物実測図 (3)

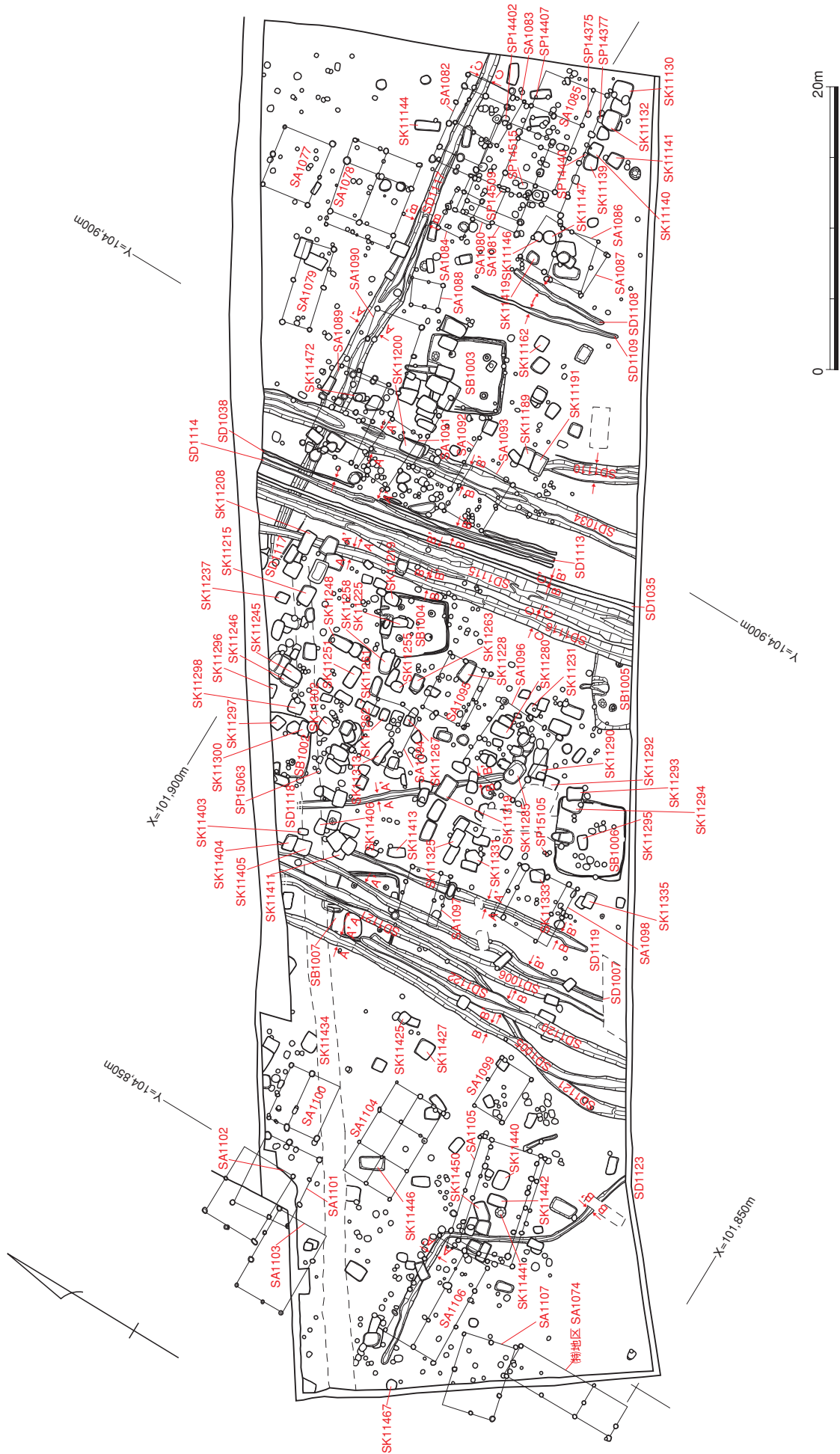
く。576は棒状の鉄製品で、上部で直角に屈曲する。先端部を欠く。鉄釘としたが、鏝の可能性も考えられる。577は鉄製の刀子である。両端部を欠く。基部に向かうにつれて幅を減じる。

578・579はサヌカイト製石鏃である。578は残存長5.7cm重量6.8gを測る大型品で、茎をもつ凸基式である。弥生時代中期以降とみられる。579は下端部が欠損でなければ平基式である。これはSD1104の出土遺物であるが、混入と考えられるため包含層遺物として掲載した。

580は砂岩製の砥石である。方形の板状を呈し、表裏2面と側面2面を使用し、2側面は欠損である。

581は石製の丸軋である。素材となる石材は黒色で硬質・緻密で、安山岩に類するものとみられる。表面および側面はよく研磨され、平滑に仕上げる。表裏とも角部は丁寧に面取りされている。裏面は研磨がごく粗い。3対の潜り孔を設ける。剥離状の欠損部も目立つが、欠損部の端部も部分的に面取りされていることから、整形時に破損していた可能性が高い。

582は泥岩の黒色円礫である。長径2.1cm厚み0.8cmの自然礫で、加工痕はみられない。黒碁石の可能性をもつ。



第152图 II-13区 第1遺構面 遺構配置図

〈Ⅱ－13区 第1遺構面〉（第152図）

Ⅱ－13区（2009年度調査6区）は調査地東端に位置する、東西長約97m、南北幅約28mの調査区である。遺構面は1面のみ検出。標高は2.9～3.3mで、南西側がやや低いほかは概ねフラットである。

遺構数は、竪穴住居（SB）6棟、掘立柱建物（SA）30棟、土坑（SK）284基（うち土壙墓の可能性あるもの66基）、溝（SD）23条、小穴（SP）836基で、古墳時代後期の竪穴住居と中世遺構が検出された。

本調査区では、現桑野川河道が南に接しているにもかかわらず、時代の別なく遺構がさらに南に向けて拡大する傾向を見せていることから、古墳時代から中世にかけての河道は現在よりも小さな流れであったか、調査区の北側を流れていたと考えられる。

竪穴住居2号（Ⅱ地区 SB1002）（第153・157図）

Ⅱ－13区中央部北端、s・t 15・16グリッドに位置する、平面プランが方形になるとみられる竪穴住居で、北半が調査区外に伸びるもの。東西463cm、南北293cm（残存値）の規模を持つ。主軸方位はN27°W、検出面からの深度は約20cmである。他の同様の遺構が正方形を指向していることからみて、450cm四方程度のものになるとみられる。埋土は6層に分層される。明瞭な埋め戻し単位ではないが、若干内側に向かって傾斜する傾向が見られ、外周から徐々に埋まったものとみられる。

住居内の施設としては、竈は遺跡内の状況から見て北側壁面沿いに設けられているものとみられる。支柱穴は南西の1基（EP1）が検出されたのみである。周壁溝は確認されなかった。

支柱穴は直径44cmで、検出面からの深度は33cmである。埋土の観察から柱材は径18cm程度であったと想定される。

遺物は、弥生土器甕、土師器甕、須恵器杯身、土師質土器供膳具、東播系須恵器甕、瓦器椀、砂岩製叩石・チャート礫、が出土している。図化した2点（須恵器583、叩石584）を含めて本来の住居中央付近に集中している。いずれも小片の状態であり、全形をとどめない。出土レベルはいずれも床面から浮いた状態であるため、埋没過程に祭祀その他の目的で持ち込まれたものと考えられる。

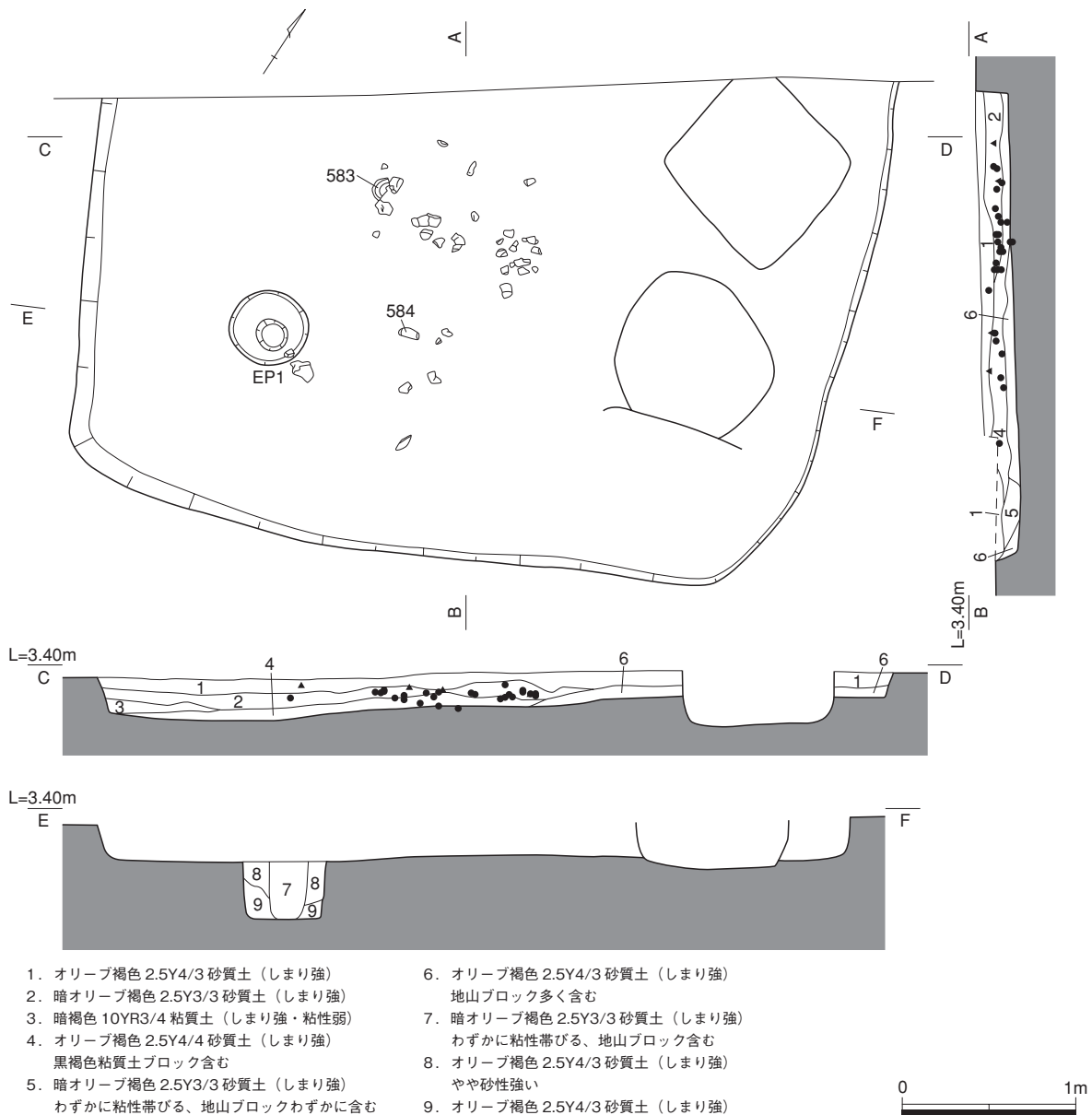
上記の遺物のうち図化可能なものは2点である。須恵器583は蓋杯の杯身で、蓋受けのかえりが短く内傾するのが特徴。底部外面には回転ヘラケズリが施される。田辺編年のTK209型式。584は砂岩製の叩石で自然礫を素材としている。やや長細い石材の側縁部分に敲打痕跡が集中的にみられる。このほか個体認識のできた遺物として長胴タイプの土師器の甕1個体、薄くて硬質な焼成の甑1個体（田川分類甑A類）がある。

遺構の年代は、須恵器の1点をもとにすると6世紀末～7世紀初頭と考えられる。床面レベルとは異なるものの、同種の遺構の状況や図化されなかった土師器の甕を含めても、上記の年代とはさほど違いはないものとみておきたい。

竪穴住居3号（Ⅱ地区 SB1003）（第154～156・158図）

Ⅱ－13区東部中央、s～a 1・2グリッドに位置する、平面プランが正方形に近い竪穴住居。部分的に後世の遺構により攪乱を受けているものの、ほぼ全形が分かる。東西543cm（最大幅）、南北555cmの規模をもつ。主軸方位はN25°W、検出面からの深度は15～18cmである。埋土は3層からなり、竈や柱穴などをのぞきほぼ水平な堆積状況を示す。緩やかな埋没過程が想定される。

住居内の施設として、北壁沿い中央に付属土坑（EK1）を伴う作り付け竈が設けられ、支柱穴4基と



第153図 II-13区 SB1002 遺構実測図

周壁溝を有する。また、竈の両側に小規模な土坑2基 (EK2・EK3) がある。

竈 (EH1) は、燃烧部の両側の袖部 (長さは、東側で 105cm、西側で 93cm) は直線的な形態を呈し、屋外に伸びる煙道部分も掘り方の肩から 155cm と比較的長い。住居内全体に焼土や炭化物が局所的に集中する範囲がみられるが、竈の袖の先端に近い燃烧部に濃密な焼土の分布があり、使用時の様子が判明する。袖部に挟まれた位置で土師器の甕が2点 (590・592) 出土している。いずれも体部の多くを失っており、燃烧箇所より若干奥側となっていることから埋没時にずれ落ちながら転落したのであろう。ただし、支脚を伴っておらず他所に持ち出されているものとすれば、竈の使用を取りやめたのは偶然の事情ではないといえる。煙道部の先端においても焼土が集中しており、煙出しの壁面が崩落した事によるものと考えられる。竈の下部にある土坑 (EK1) があり、その形状は小振りな方形で燃烧部の直下にあたる。底面に明瞭な焼き込み面は伴わないものの、埋土上面に焼土が集中的に分布していることから、竈を構

築前の防湿対策などを目的とした掘り込みだと考えられる。支柱穴は床面上から4基掘り込まれているが、位置関係はややアンバランスで、心々間の距離は228～270cmである。柱穴はいずれも円形ないし不整形で、規模は50cm前後である。土層観察から判明する柱の径は10～20cmと一定ではない。また深さにもばらつきがあり、柱の底面の高さで50cm程度の違いがあるが、東側の2基が深く掘り込まれる傾向がある。竈の脇にある小土坑(EK1・EK2)については、焼土・炭化物が多く含まれ、竈から掻き出した灰などの一時的な廃棄目的かと推測される。周壁溝は北側などごく一部を除いて壁面沿いにはほぼ全周する。幅20cm余りであるが、深さは3～5cmと浅い。

遺物は、土師器甕、須恵器杯・杯身・杯蓋・高杯・土錘、土師質土器供膳具・杯、瓦器椀、白磁碗、鉄滓、砂岩製台石か砥石・砂岩製叩石か砥石、が出土している。

遺物の出土状況は、竈およびその周辺部にもっとも集中しており、ほかに東側・南側の壁沿いにもわずかながらの集中がみられた。竈内については先に触れたとおりであるが、竈下部の土坑EK1上面および竈の袖下部から出土した須恵器高杯は周壁溝内のものと同一個体(588)である。この高杯が破片化された経緯は不明ながら、分割状態となった以後も保有を続けていたことが判明しており、土器の保有形態として興味深い。東壁沿いに関すると、床面より浮いた状態の須恵器高杯を含む数個体の土器・石から構成されている。うち高杯(587)は脚部が半ばで折損しており、さらに杯のかえり部分や脚の折損部に連続する波形の打ち欠きがみられることから、埋没過程での祭祀行為が行われた可能性を示す。須恵器打ち欠き行為による祭祀については栗林誠治の指摘がある。

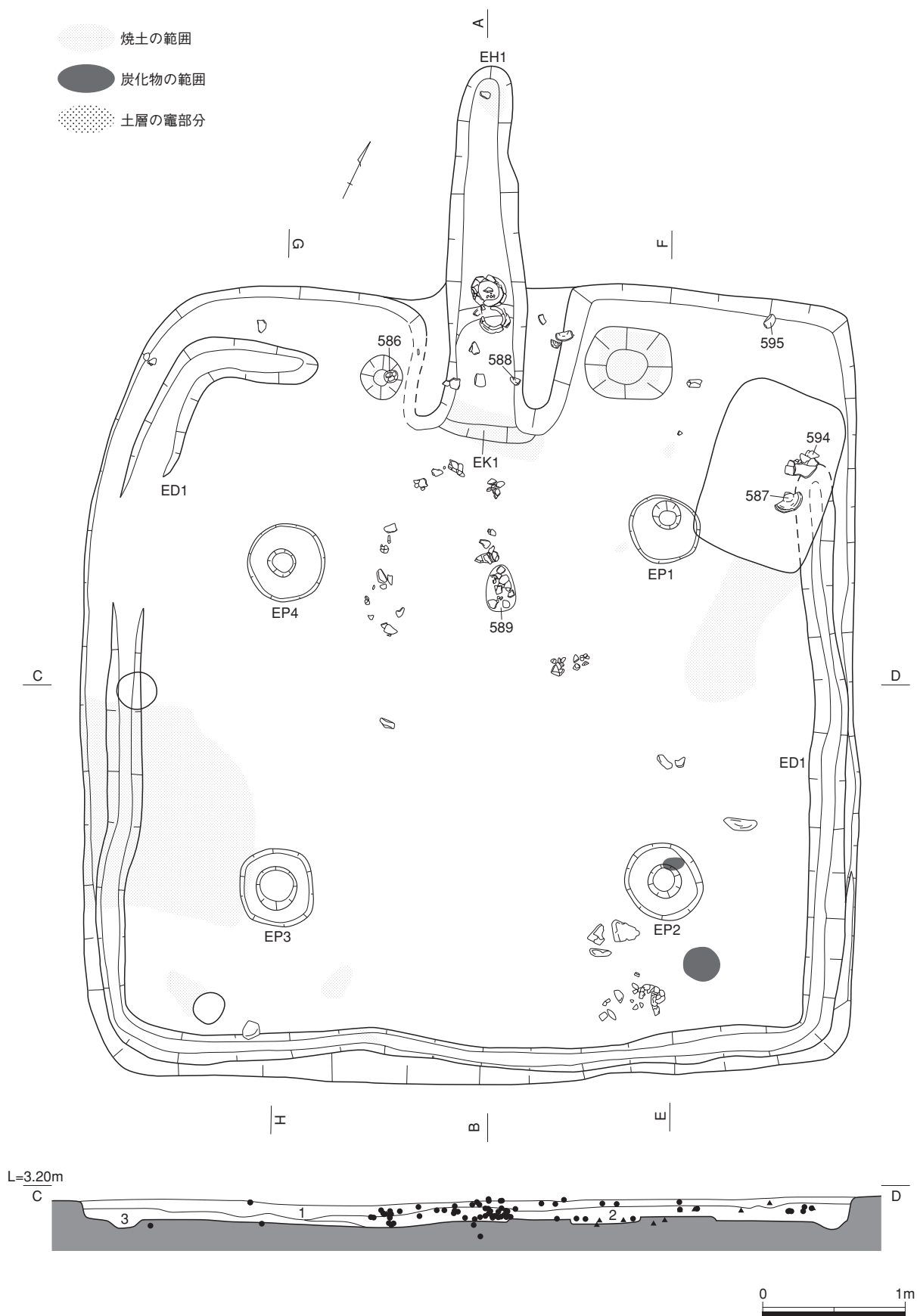
出土遺物として、須恵器4点、土師器5点、石器2点を図示した。須恵器は供膳具の杯身・高杯である。杯蓋(585・586)はいずれも天井部が丸みをもち、肩部の稜が退化したもの。口縁端部は丸く、外面天井部に数回転分の回転ヘラケズリにより整形される。高杯は有蓋(587)と無蓋(588)のものがあり、いずれも短脚で端部に向けて大きく開くもの。有蓋高杯のかえりは短く内傾するもの。田辺編年のTK43～TK209型式にあたる。土師器は図化されたものすべてが煮炊具で、全形の判明するものは1点のみ(589)である。形態上は、小形で球形の体部を持ち頸部のくびれの弱いもの(589、田川分類甕D類に類似)、長胴の体部に短く外反する厚手の口縁部をもつもの(590・591、同C甕-4類)、長胴の体部に鋭角に外反する口縁部をもつもの(592・593、同甕C-2類に類似)とがある。竈の燃焼部より出土した甕590～592の体部は、いずれも熱を受けたことによる色調が赤っぽくなり、器表面の剥落が著しい。そのほか図化されなかったものとしてさらに大形の甕も含む。

須恵器のうち588の出土状態を重視すると、6世紀末～7世紀初頭の年代を与えうる。

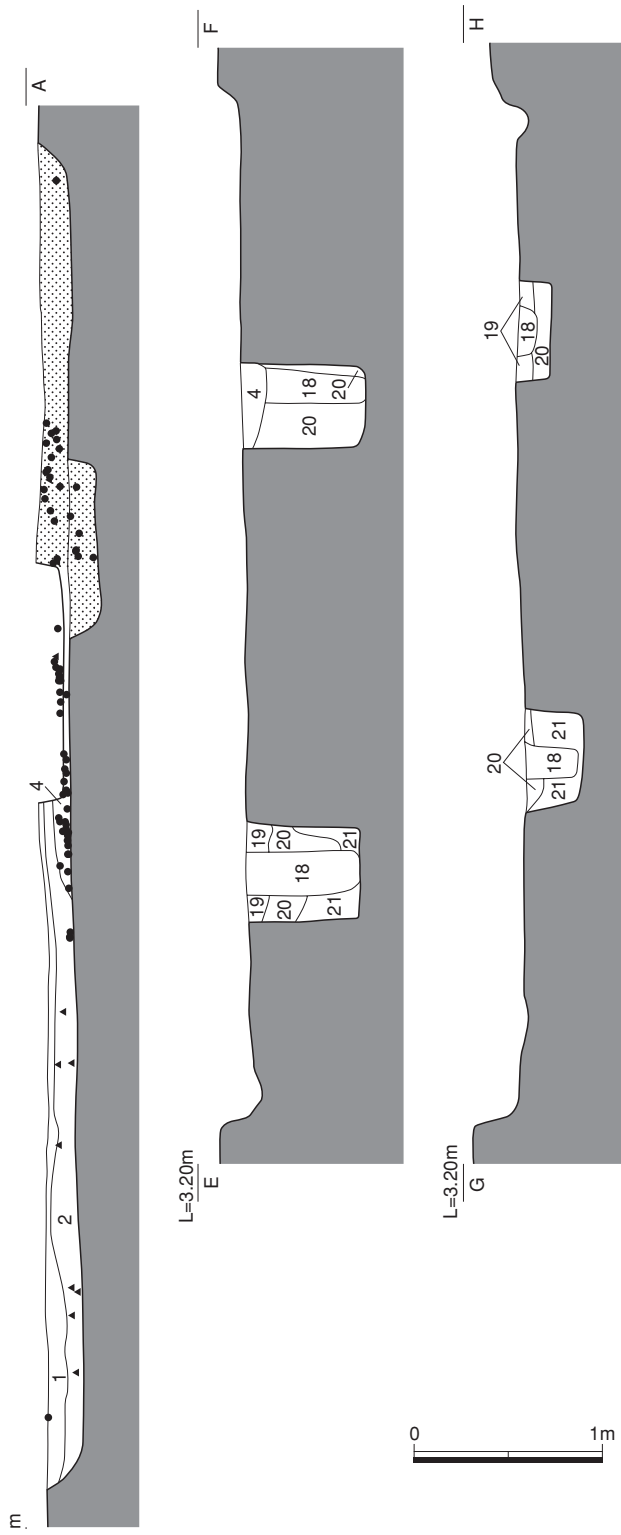
竪穴住居4号(Ⅱ地区 SB1004)(第159・160・163図)

Ⅱ-13区中央部北寄り、r・s 18・19グリッドに位置する、南北484cm、東西430～456cmを測る平面プランが方形の竪穴住居である。平面形状は北半が幅広く、南半がやや狭まるいびつな形状をもつ。平面的にふくらみをもつ部分は後述する支柱穴の北側の延長上に位置しており、東西梁の長さが原因と考えられる。主軸はN29°Wである。埋没後の後世の遺構による攪乱を受けているが、これらの深度が床面に達するものもなく、おおよその部分は残存している。検出面から床面までは35～40cmの深さである。住居内の埋土は、竈や柱穴などをのぞきほぼ水平な2層からなる。

住居内の施設として、北辺の東寄りに内側に竈(EH1)を設け、掘り方外に煙道を伴う。支柱穴は4基(EP1～4)確認されており、周壁溝(ED1)がめぐる。

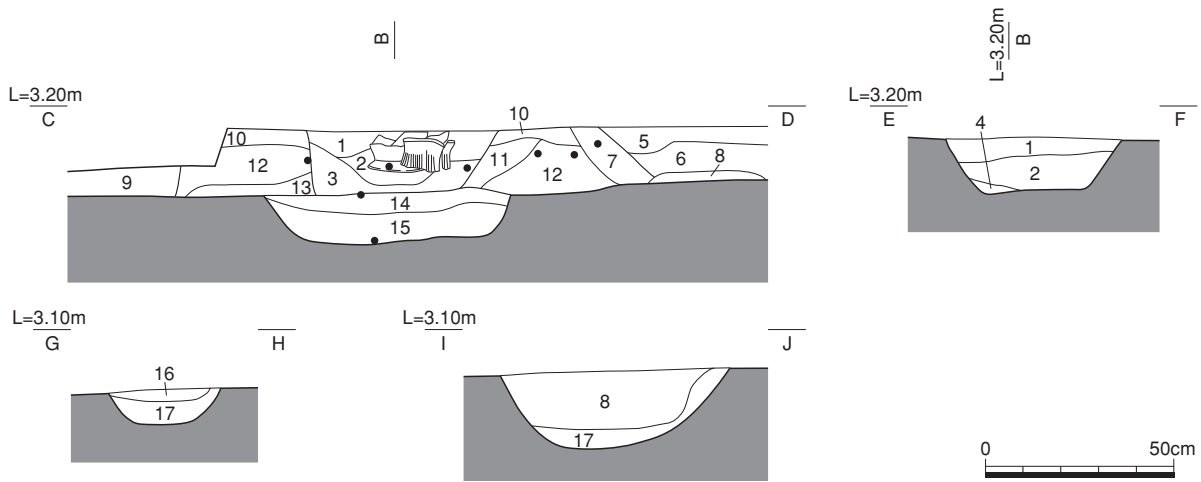
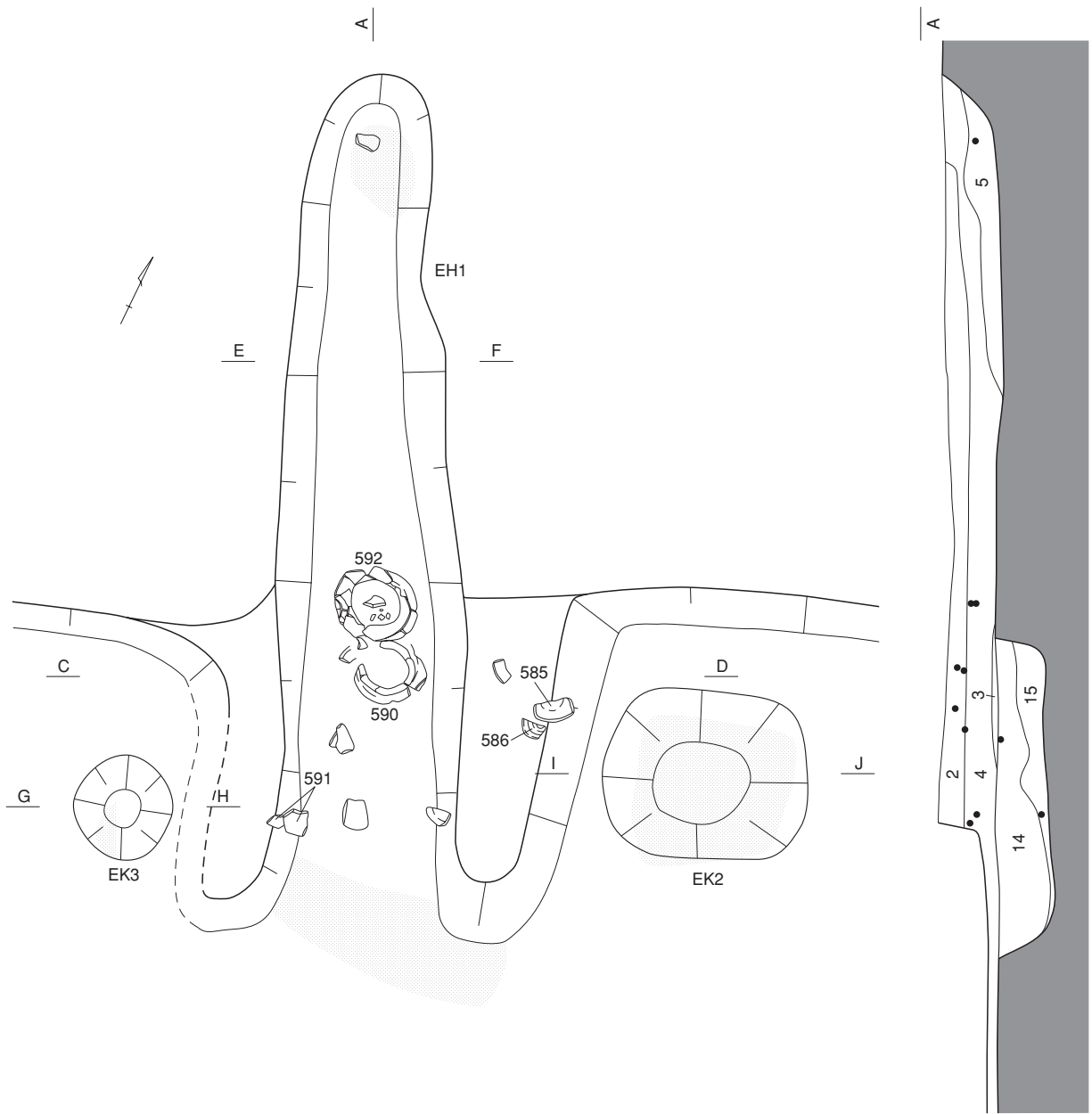


第154図 II-13区 SB1003 遺構実測図(1)

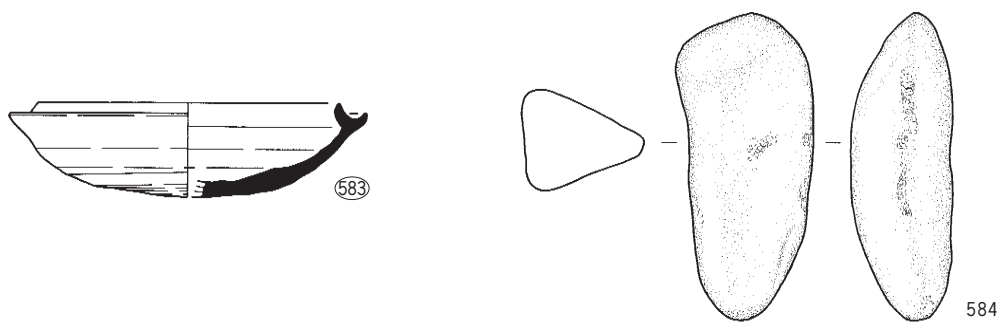


1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
燃焼部付近では焼土粒わずかに含む
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
燃焼部・焚口付近では焼土ブロック含む
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒やや多く含む
4. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
煙道部北端に焼土ブロック含む
5. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
6. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒ごくわずかに含む
7. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
電壁体の崩落土か、焼土粒わずかに含む
8. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる、炭化物片わずかに含む
焼土ブロック非常に多く含む
9. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり強・粘性弱)
黒褐色地山ブロック主体
電掻き出しによる焼土粒多く含む
10. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
11. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
やや砂性強い、焼土粒含む
12. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり・粘性強)
焼土粒含む
13. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる
14. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる
焚口付近に焼土ブロック集中
15. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
16. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる
焼土ブロック・炭化物片含む
17. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒わずかに含む
18. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・地山ブロック少量含む
19. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
20. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロック含む
21. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黄色地山ブロック含む

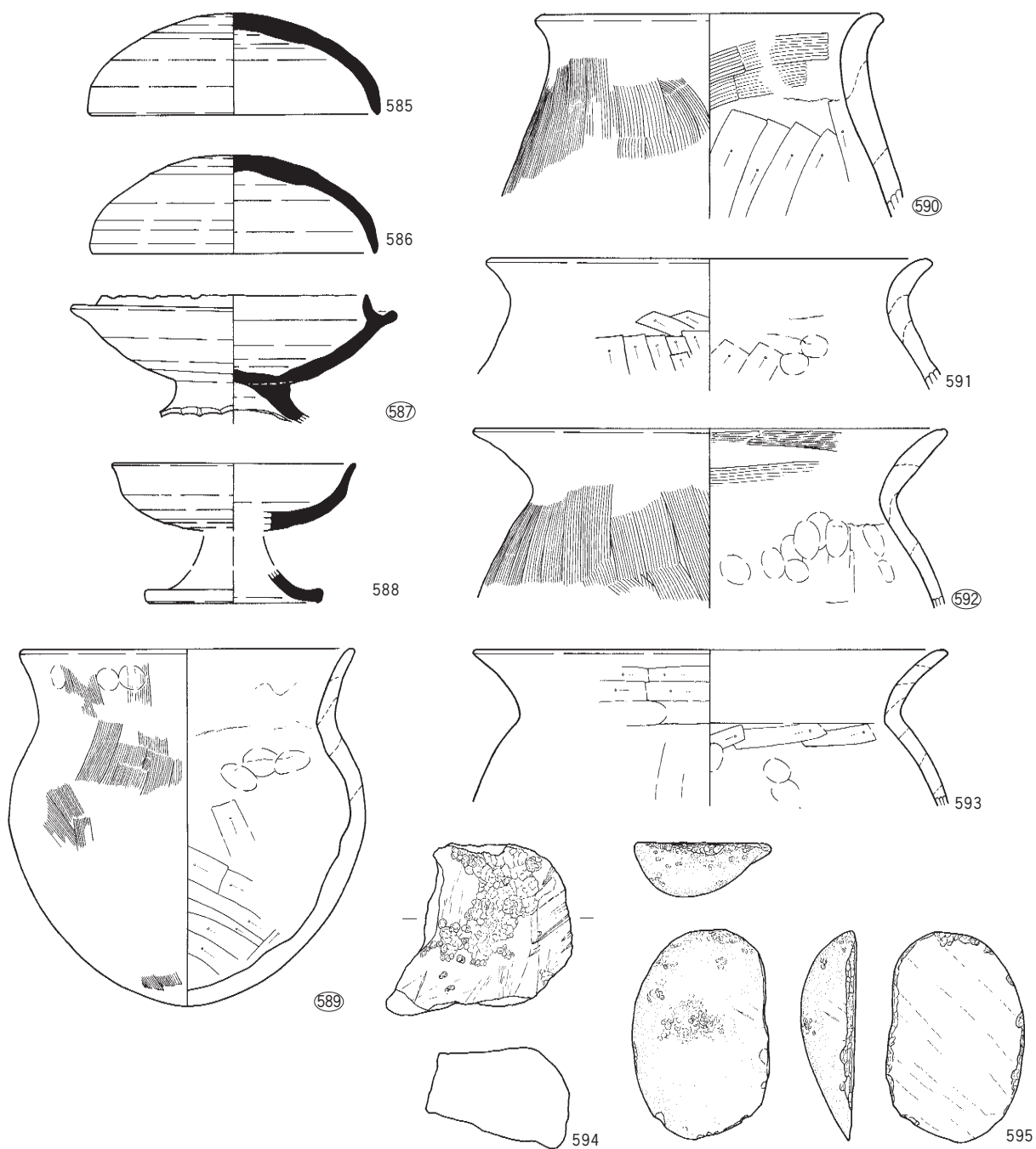
第 155 図 II - 13 区 SB1003 遺構実測図 (2)



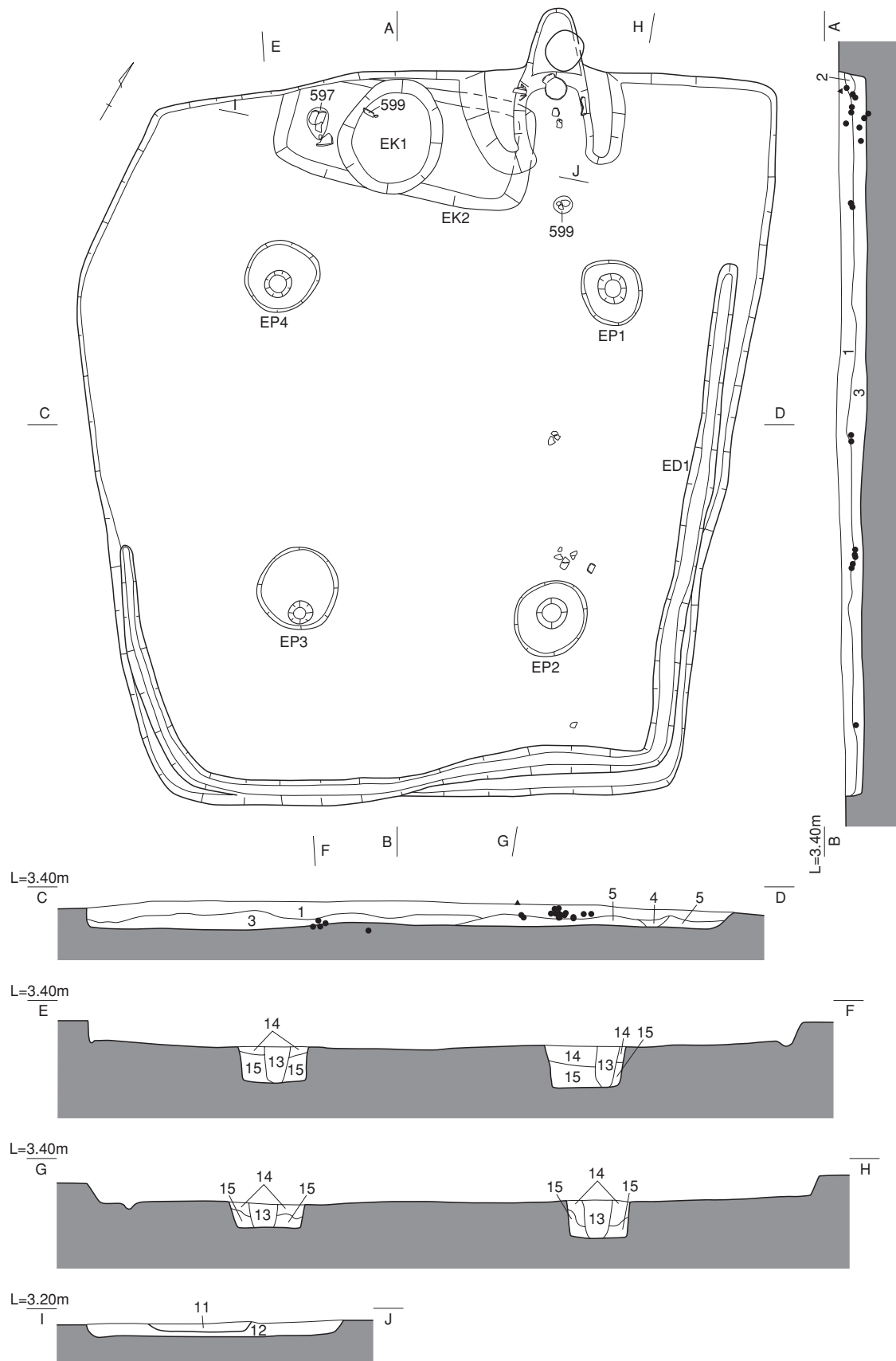
第 156 图 II - 13 区 SB1003 遺構実測图 (3)



第157图 II-13区 SB1002遺物実測図

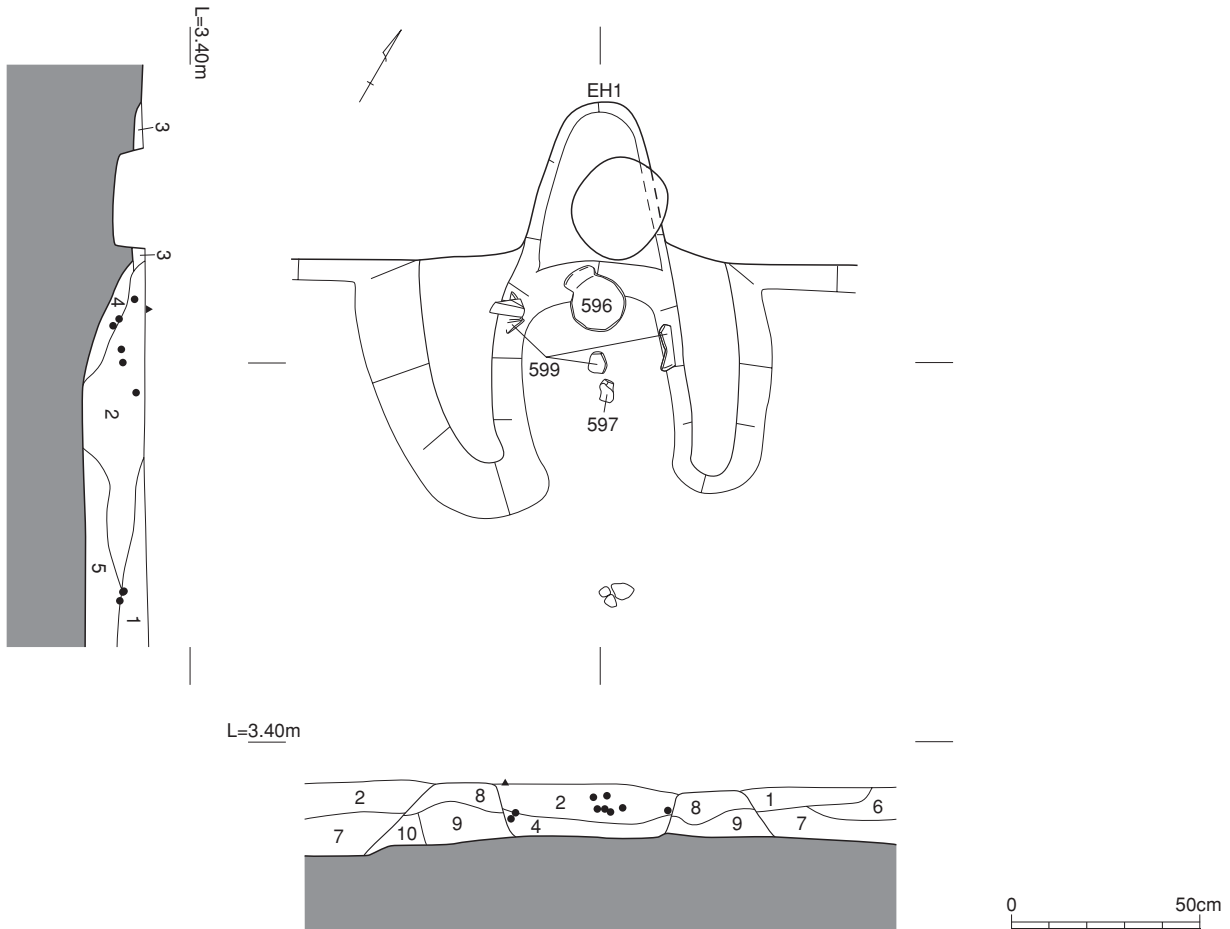


第158图 II-13区 SB1003遺物実測図



第 159 图 II - 13 区 SB1004 遺構実測図 (1)

- | | | |
|--|--|--|
| 1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる、炭化物片少量含む | 5. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる、地山ブロック多く含む | 10. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強) |
| 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
わずかに粘性帯びる、焼土粒含む | 6. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) | 11. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
層上位に焼土粒多く含む |
| 3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
地山ブロック含む | 7. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)
地山ブロックわずかに含む | 12. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) |
| 4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
地山ブロックわずかに含む | 8. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒含む | 13. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロック含む |
| | 9. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) | 14. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) |
| | | 15. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) |



第 160 図 II - 13 区 SB1004 遺構実測図 (2)

竈 EH1 は掘り方内側に袖部が伸び、掘り方外側に伸びる煙道はトンネル構造が削平で失われている。袖部の長さ約 70cm、煙道部の長さ 42cm のいずれもやや短い。燃烧部は袖部に保護された長さ 60cm・幅 50cm の空間で、その中央に土師器の甕 (596) がある程度の形状をとどめ、あと 2 个体分 (597・599) の破片が隣接する位置で出土している、この竈の使用時の状況を示すもの可能性があるが。ただし、甕の下部において支脚を伴っていない。また燃烧部全体に焼土や炭化物の埋土中の分布をみると、竈周辺や床面よりも浮いたレベルに集中している一方で、住居内の埋土は砂質土による水平堆積であり、住居廃絶後の埋没は一定の時間を経て進行したものを考えられる。竈 EH1 の西側には西側の袖部と一部重複して下部に土坑が 2 基築かれている (EK1・EK2)。竈下部の土を入れ替えることを本来の目的とする土坑とみられ、竈を通例の北辺中央に築くことを前提に掘削・埋め戻しを行ったものの、何らかの事情で竈を東寄りに設けたためだと考えられる。

主柱穴は径 45～55cm の円形で、深さは 20～25cm。埋土の観察から柱抜き取り穴の規模が 15～18cm であることが分かる。柱間距離は、南側の 2 基 (EP2 - EP3) 間が狭く (心々で 168cm)、他の間隔

は220cm前後である。周壁溝 ED1 は掘り方の内壁に接するように住居床面に南壁沿いを中心にコの字形にめぐらされる。幅は10cm前後、深さは3～12cmである。南壁側が低くなるようわずかな傾斜をつけている。

遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕、土師質土器供膳具・杯、瓦器椀、砂岩製砥石、が出土している。遺物は先述した竈 EH1 内の土師器の甕（596・597・599）をのぞくと、EK2 埋め戻し後の床面直上に数点みられたほか、床面よりも高いレベルの数点が点在している。中には形状を全くとどめない須恵器甕の体部が含まれるなど、埋没時の過程での混入が想定される。

遺物は4点の土師器煮炊具（596～599）が図化された。土師器の甕は体部が球形に近いもの（田川分類甕 D 類に類似）と長胴を呈するもの（同甕 C 類）とがある。前者には596・599があり、後者として体部の残存度は低いものの597・598とがある。以上の違いは体部器壁厚や口縁部形態にもみられる。ともに竈の燃焼部で出土しており、形態は異なるものの煮炊用途に使用されるものであろう。

年代の決め手に乏しいが、類似する遺構の状況や須恵器甕の出土から古墳時代後期に属するものとみられる。

竪穴住居 5 号（Ⅱ地区 SB1005）（第161・162・164図）

Ⅱ-13区中央部南端、o・p 18・19グリッドに位置する、平面プランが方形となるとみられる竪穴住居。北西角のみが残存し、東側は後世の溝 SD1012 に切られ、南半は調査区外に伸びることにより、全体の1/3程度の遺存状況。規模は南北279cm（残存値）、東西537cm（現存値）となり、支柱穴や竈の位置から見ると、本来は一辺620～630cm四方の規模のやや大形の住居であったとみられる。主軸の方位はN32°Wである。住居内の埋土は竈や柱穴をのぞいて3層からなり、その水平な堆積状況からは緩やかな埋没であったと推定される。

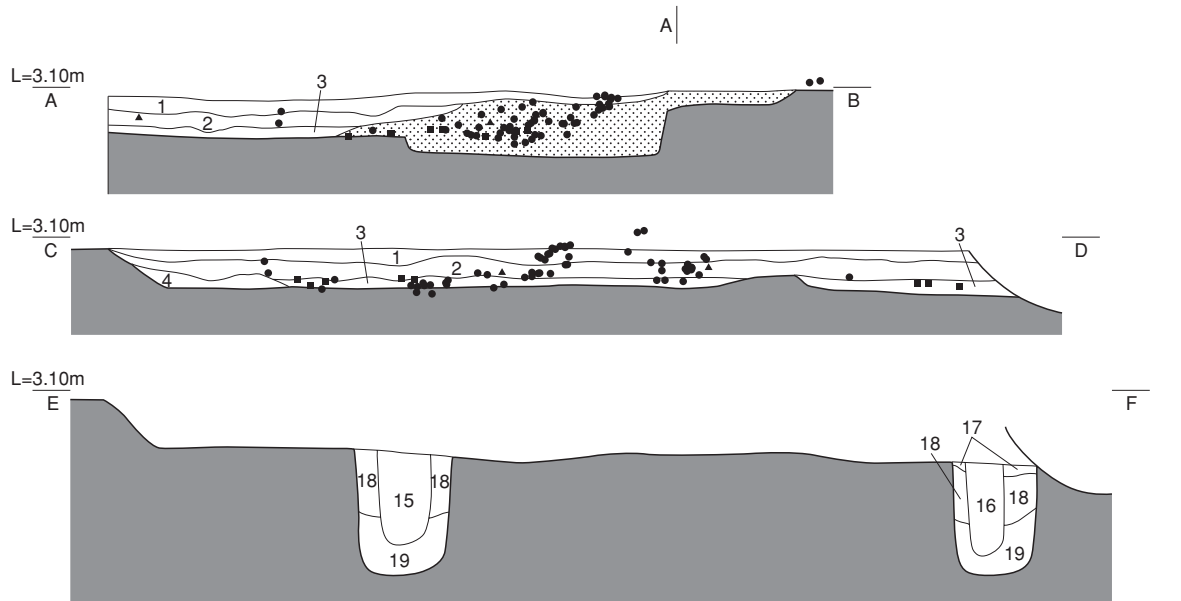
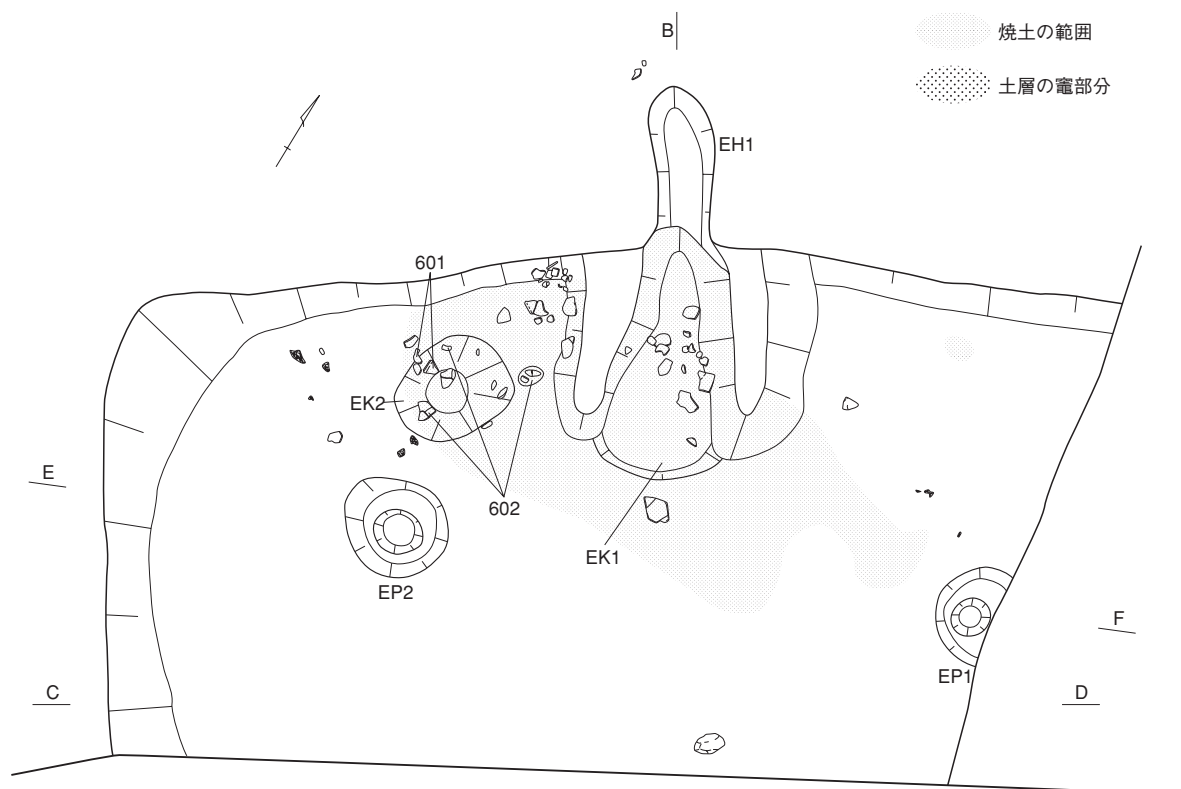
住居内の施設として、北側の壁面沿い中央に竈（EH1）が設けられており、支柱穴2基（EP1・EP2）が残存する。周壁溝は残存範囲内にはみられない。

竈（EH1）は燃焼部の両側に直線的な袖を伴う。それぞれの長さは西側の袖100cm、東側の袖117cmである。煙道は掘り方外に直線的に伸びており、掘り方肩からの長さは85cmである。竈の下部には燃焼部を含む土坑（EK1）がある。燃焼部の下部の土を入れ替えることを目的としたものである。竈の袖に用いた土の一部（第11層・第13層）は、このEK1の堆積土と共通しており、一連の過程で構築されたものと見なされる。竈内の堆積土のうち、燃焼部付近には非常に多くの焼土を含み（特に第8層）、また竈に近い北側の壁沿いに炭化材の小片が認められる。支脚の有無などの状況を含めて使用されていたときの状況はあまりとどめていない。竈の燃焼部から前面及びその両脇にかけて焼土が分布するほか、その縁辺には炭化物の小片が点在する。

支柱穴の2基（EP1・EP2）は、心々での距離は314cmを測る。ともに径50cmを越え、検出面からの深度も70cmを上回る。埋土の観察からみると柱材は径が約10cmと細い。住居の規模に比して柱材が細身である。

遺物は、土師器甕・甗・高杯・竈、黒色土器椀（A類）、須恵器杯・甕・土師質土器供膳具・皿（回転ヘラ切り他）・杯、瓦器椀、中世陶器、白磁碗、不明鉄製品・鉄滓、チャート礫、が出土している。竈の燃焼部及び西側袖の外側にまとまって出土しているが、いずれも小片が中心で個体ごとにまとまりがあまりみられない。竈内のものも含めて住居廃絶時および埋没の過程にもたらされたものが多い。

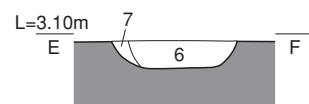
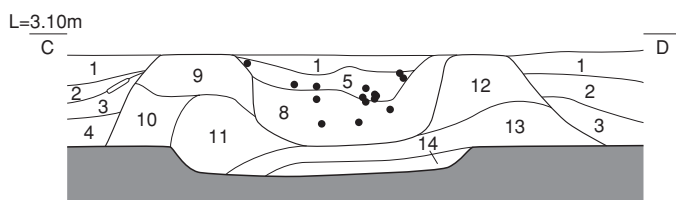
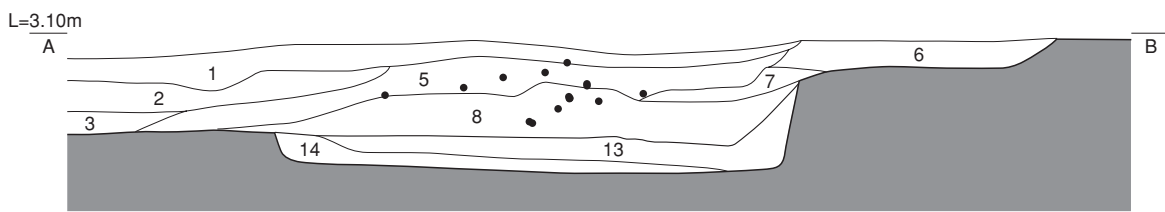
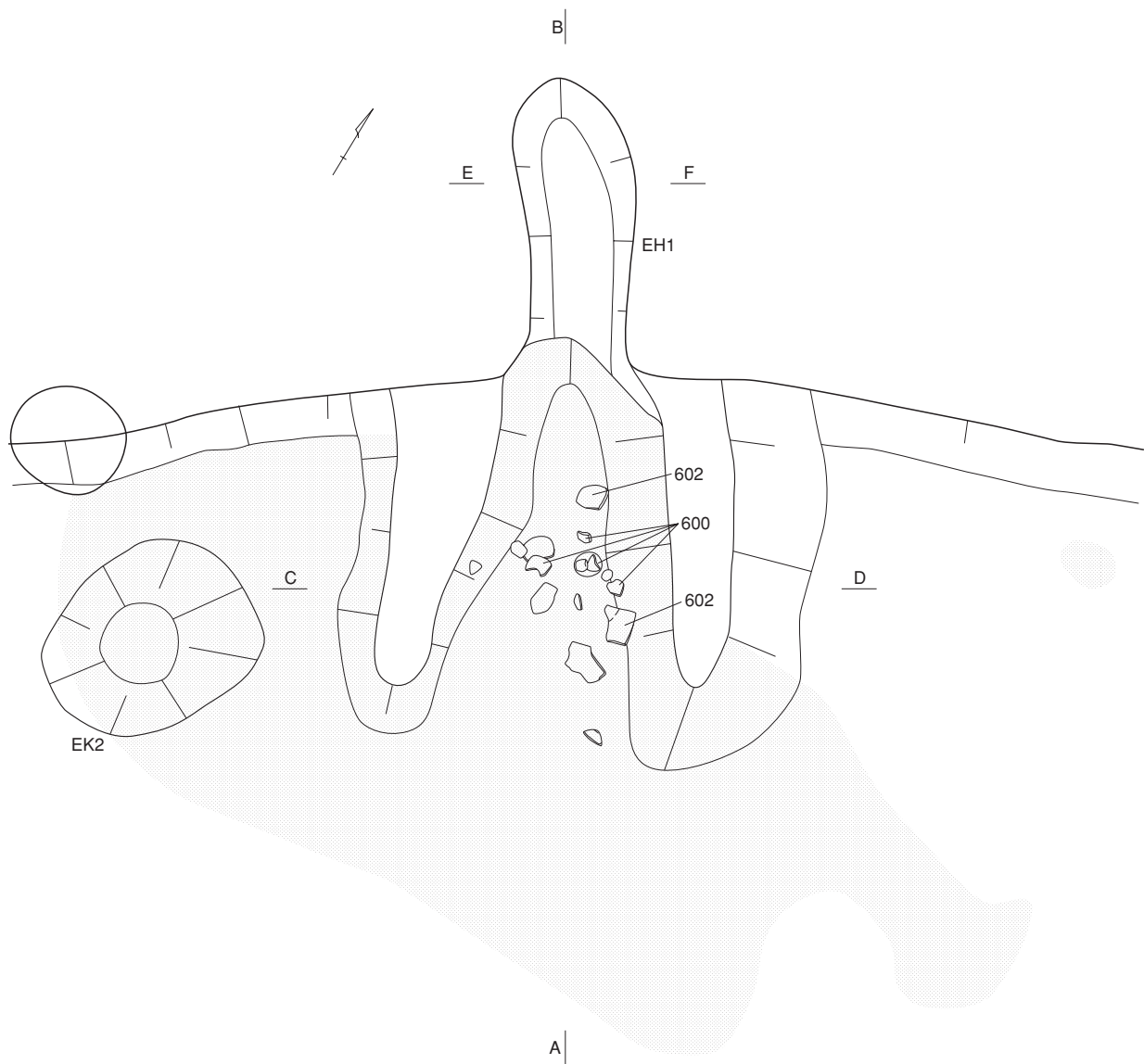
出土遺物は土師器3点が図化可能であった（600～602）。高杯（600、田川分類高杯 D 類に類似）は、



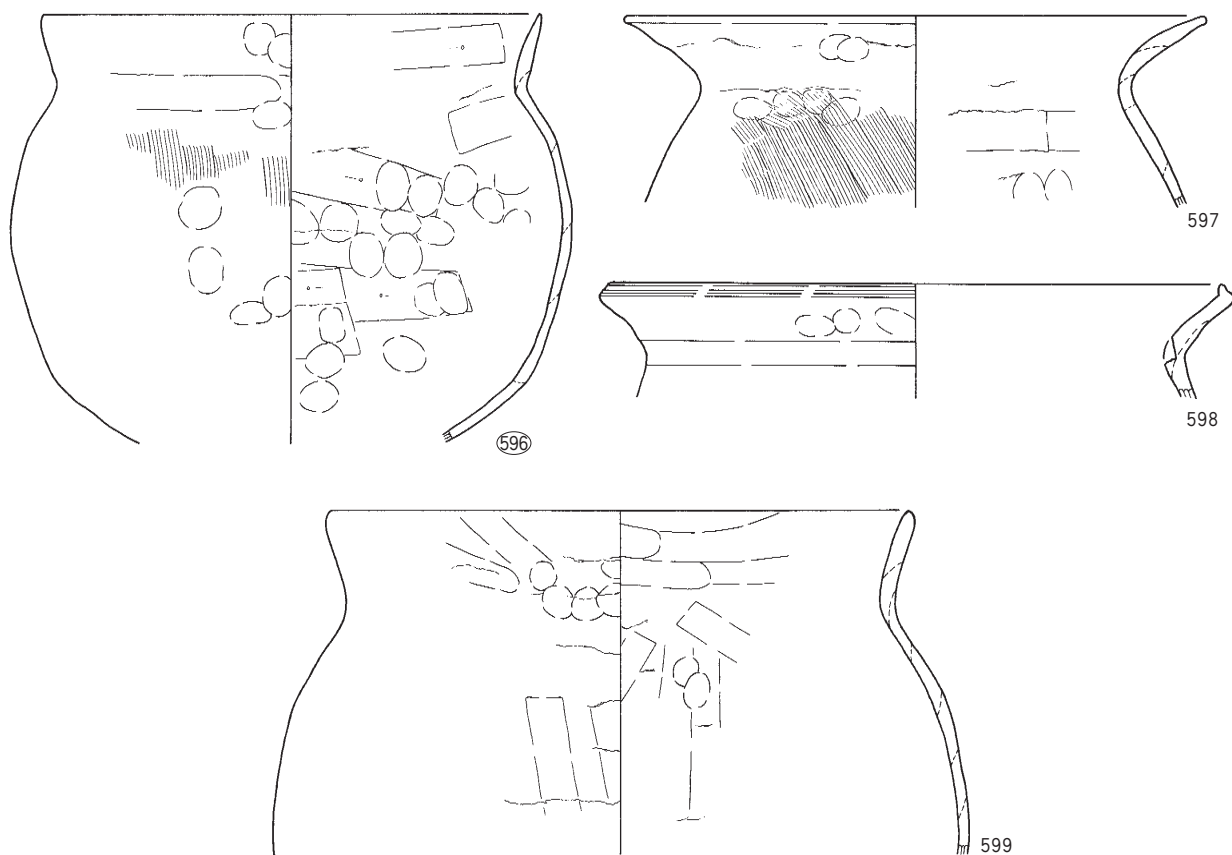
- | | | |
|--|---|---|
| 1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) 砂性強い | 7. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強) 焼土粒少量含む | 14. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) やや砂性強い |
| 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) 地山ブロック含む、炭化物片わずかに含む | 8. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (しまり強) 焼土ブロック非常に多く含む | 15. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) 炭化物細片含む |
| 3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) 電付近では掻き出しによる焼土・炭化物片含む | 9. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強) 焼土粒少量含む | 16. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強) 地山ブロックわずかに含む |
| 4. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) 黒褐色粘質土ブロック含む | 10. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強) 黒褐色地山ブロック含む | 17. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) |
| 5. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強) 電付近では掻き出しによる焼土粒含む 焚口付近では電材の粘土ブロック含む | 11. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強) 焼土ブロック多く含む、黒褐色地山ブロック含む | 18. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり強・粘性弱) 地山ブロック含む |
| 6. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強) 炭化物片含む | 12. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) | 19. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強) 地山ブロックわずかに含む |
| | 13. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり・粘性強) 黒褐色地山ブロックが主体 | |



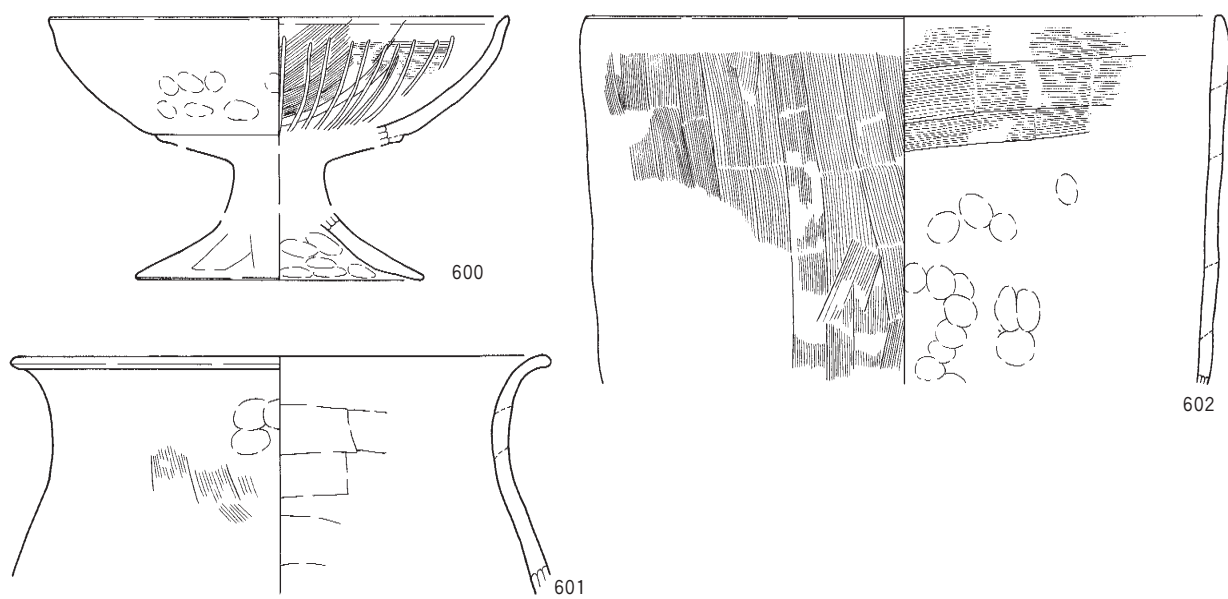
第161図 II-13区 SB1005 遺構実測図 (1)



第 162 図 II - 13 区 SB1005 遺構実測図 (2)



第163图 II-13区 SB1004遺物実測図



第164图 II-13区 SB1005遺物実測図



杯部はやや深い目の皿形の器形で、内面には放射状のヘラミガキを施すことにより光沢感を出している。脚部は端部が大きく末広がりになるもので、ユビオサエなどによる粗い整形。甕（601）は長胴の体部を持ち、頸部での屈曲の弱い器形。口縁端部は外側に大きく開く。田川分類の大分類甕C類にあたるが、細分類には相当するものがない。甌（602、田川分類甌A類）は、体部から口縁部にかけて直立する筒状の器形、体部の把手・底部は失われている。体部および口縁部内面を丁寧なハケにより整形しており、内面ではハケより下位ではナデにより非常に丁寧に仕上げられている。

遺構の年代は、出土遺物のいずれもが埋没時に竈のある北側からもたらされたものが多く、明確な年代を決める材料に乏しい。類似する遺構の年代から6世紀末～7世紀初頭の年代を与えておきたい。

竪穴住居 6号（Ⅱ地区 SB1006）（第165～168図）

Ⅱ-13区中央部南側、n～p 16・17グリッドに位置する、平面プランが方形を呈する竪穴住居。一部が後世の遺構により攪乱を受けているがほぼ全形が判明する。東西535～547cm（中央付近）、南北498cm（最大値）を測り、主軸の方位はN28°Wである。南北方向より東西方向に広く、南半よりも北半が広い平面形状である。遺構内の埋土は竈や柱穴などをのぞくと3層からなり、おおよそ水平な堆積状況であり、緩やかな埋没過程を経たものと考えられる。

住居内の施設として、下部に土坑（EK1）を伴う竈（EH1）が北側の壁面沿い中央に設けられており、主柱穴は4基（EP1～EP4）で構成され、周壁溝（ED1）を伴う。

竈（EH1）は燃烧部の幅が60cmと広く、両側の袖は100cm弱である（西袖98cm、東袖97cm）。煙道部の掘り方肩からの長さが35cmと短い。燃烧部の中央部奥寄りには土師器の甌（612）の破片が焚き口側に土師器の甕（610）の破片集中し、支脚となる細長い石材も隣接位置にほぼ立った状態で出土していることから、竈の使用状況をよくとどめている。燃烧面に近いレベルよりも土器に直下の層（第6層）には非常に密集した状態で焼土ブロックがみられるのは、剥落した竈構築材などであろう。竈の燃烧部の下部には、土坑EK1がある。竈構築の前処理として掘削・埋め戻しをしたものであろう。EK1の埋土上層には若干の焼土を伴う。主柱穴は北西の1基（EP4）がかなり内側にあるアンバランスな位置関係。柱穴間の心々による距離も207～300cmとばらつきがある。

遺物は、弥生土器高杯・甕・壺、土師器皿・甕、須恵器杯身・杯蓋・壺・甕・把手付甕、土師質土器供膳具・皿・杯・土錘、瓦器椀、中世陶器甕、鉄滓、砂岩製叩石・砂岩製磨石か叩石・砂岩製砥石・砂岩礫、が出土している。遺物の出土状況は、竈の燃烧部・竈の袖の両側・その他に分けられる。竈の燃烧部には甕（610）・甌（612）・石製支脚が本来の使用状態に近い位置で出土している。竈の袖の両側では、土師器・須恵器・拳大またはそれ以下の石材が出土しているが、いずれも小片であって全形の判明するものがない事に加え、床面より浮いた状態のものが多い。須恵器の蓋杯（蓋603・604、身605・606）は竈を取り巻く位置で出土している。その他の出土傾向として、床面中央から南寄りにかけて叩き石・砥石などが点在している。竈から遠い南側が道具加工の作業スペースであったと推定される。弥生土器（609）は埋没最終段階での混入。

出土遺物のうち図化可能なものは、弥生土器2点、須恵器4点、土師器4点、石器4点である。弥生土器608は、八の字形に開く器形の高杯脚部で、外面は丁寧なヘラミガキ・内面は主に横方向のヘラケズリにより整形される。609は筒形の頸部をもつ壺形土器の一部で、口縁部が大きく水平に開くもので、608・609ともに菅原・瀧山編年Ⅵ-1様式にあたり、弥生時代後期に属する。須恵器は蓋杯の杯身（605・

606)と蓋(603・604)とが2点ずつ。杯身では底部が、蓋では天井部が回転ヘラケズリにより整形されるが、若干丸みを失い、器形全体が扁平化しつつある(蓋604をのぞく)。杯身のかえりも短く、内傾する傾向が進む。田辺編年のTK209型式に相当する。

土師器は甕2点、把手付のもの1点(612)が出土した。甕には2個体があり、610はやや長胴傾向のある体部をもつとみられるもの(田川分類甕C-3類に類似)とやや長胴気味の球形の体部をもつもの(同甕C-6類に類似)とがある。612は底部を失っているが球形の体部の底面に大きな穿孔がある甕とみられるもので、体部中位に1対の把手をもつ。いずれも焼成が軟質なうえ、熱により器壁の剥落が著しく器表面の観察は十分行えなかった。

砂岩製砥石(616)は角柱状をなす。表裏面および側面の平坦な部分を利用して砥面として使用されていたほか、表裏面・小口部分上面には溝状の擦痕が並行している部分は、金属器の刃部の研磨に用いられていたことが分かる。これらのほかに、筒形の器形をもつ甕の破片がまとまって出土している。

遺構の年代は、床面出土のものがなかったが、埋没時の遺物が多く出土しており、それらのTK209形式の須恵器がまとまっている点を重視し、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられる。

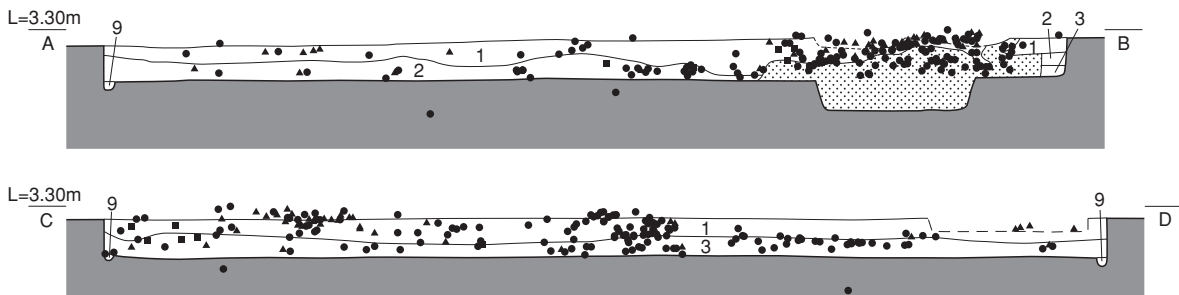
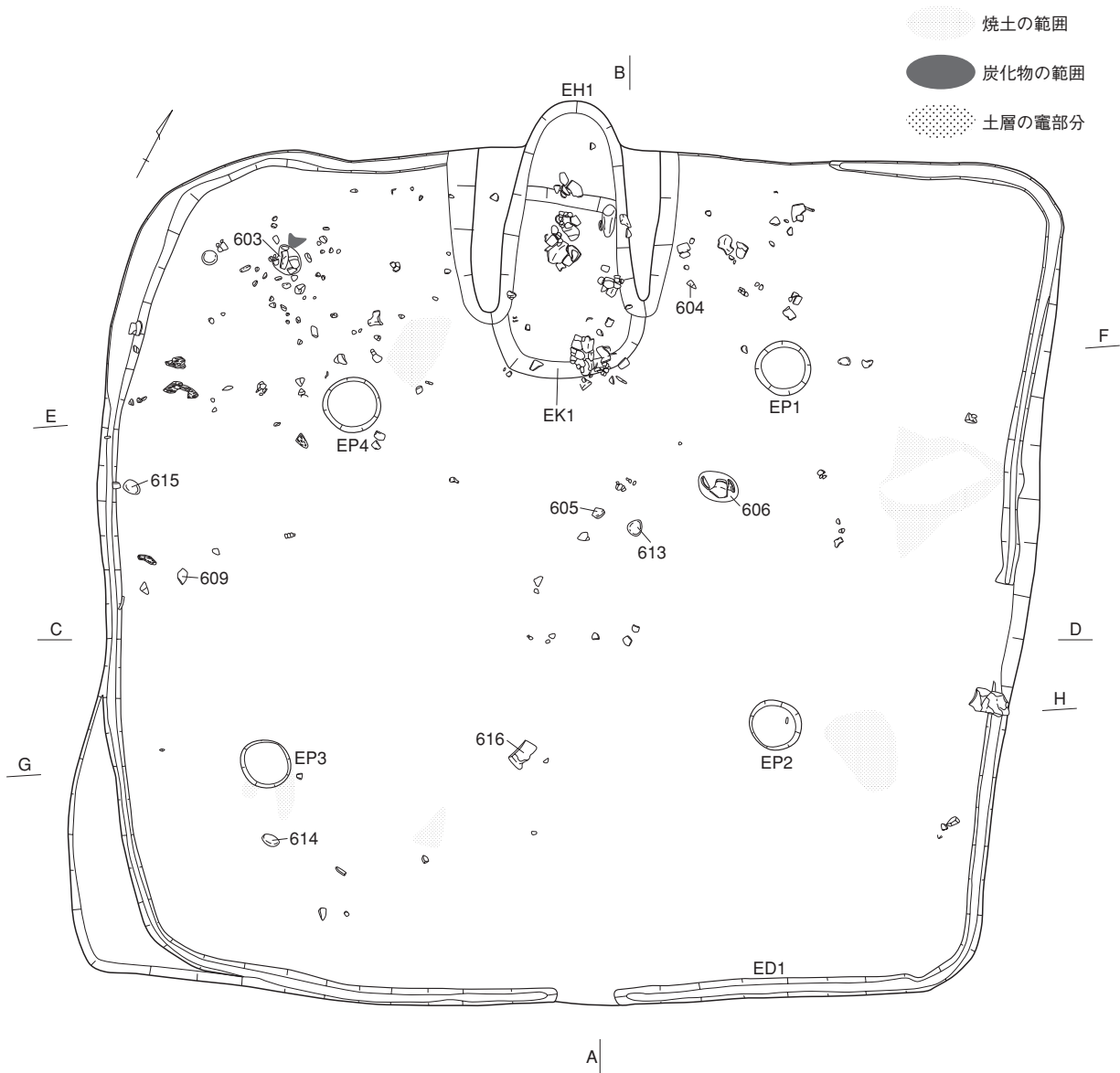
竪穴住居7号(Ⅱ地区 SB1007)(第169～171図)

Ⅱ-13区中央部北側、q・r14・15グリッドに位置する、平面プランが方形となる竪穴住居。後世の遺構により攪乱を受けており埋土の多くが失われているが、住居のおおよその状況は判明する。東西449cm(北半)～511cm(南半)、南北454cmを測り、住居の南半がやや広い形状。検出面からの深度は10～12cmである。主軸の方位はN24°Wである。遺構内の埋土は南東部分のみで観察可能で、砂質土2層からなっている。ほぼ水平な堆積状況から、埋没が緩やかに進行したことを示している。

住居内の施設として下部に土坑(EK1)を伴う竈(EH1)が北側の壁面沿いに設けられており、支柱穴は4基(EP1～EP4)で構成される。周壁溝(ED1)がめぐり、南壁沿いに土坑(EK2)を伴う。竈(EH1)は北側の壁面中央やや西寄りに設けられており、東側の袖と煙道部先端が失われている。煙道部は掘り方から直線的に外に伸びるもので46cm残存している。西側の袖は45cmと短い。燃烧部は明瞭な焼き込みや焼土の分布もあまり明瞭ではないが、支脚となる石材(618)が煙道側に倒れていることにより使用時の状況が想定可能である。支柱穴は、円形ないし不整形円で、直径が40cm前後である(37～41cm)南北の間隔よりも東西の間隔よりも広く配置され、さらに北西の1基(EP4)が内側にずれている。柱穴の間隔は心々で最短部分(EP3-EP4)195cm、最長部分(EP2-EP3)306cmを測る。柱穴の埋土から、柱材は径10～13cmで、東側の2穴が柱を掘り方底面よりやや浅い目に据える傾向が観察される。周壁溝(ED1)は北辺をのぞく三辺に一部でとぎれながらコ字状にめぐり、幅20cm前後、深さは3～5cmである。土坑(EK2)は南壁面沿いに位置するもので、長さ150cm(東西)・最大幅50cm(南北)の長楕円形の平面プランをもち、検出面から底面までの深さは12cmである。出土遺物・埋土の観察からは用途不明。

遺物は、土師器甕、黒色土器椀、須恵器杯・甕、土師質土器杯、瓦器椀、青磁碗、鉄滓、砂岩製支柱石か砥石、が出土している。遺構内からの出土遺物は全体に少なく、竈の支脚が残されていた以外に、須恵器蓋杯(617)が埋没の最終段階に持ち込まれた程度である。住居の廃絶時にほとんどが持ち出されている。出土遺物のうち、図化可能なものは2点(617・618)である。

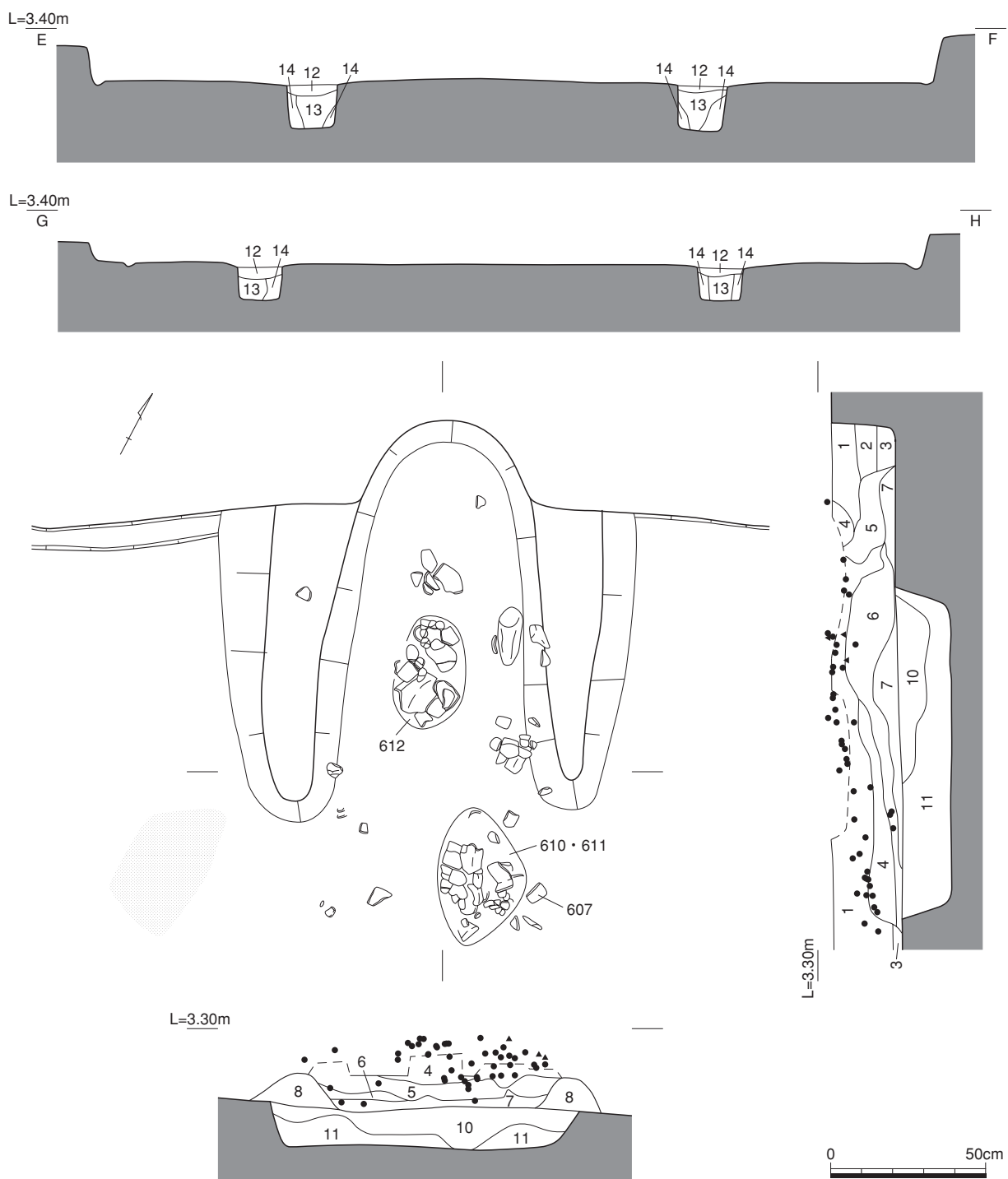
須恵器蓋杯の身(617)はほぼ完形に復元される。かえりの部分が短く内傾するもので、この器形と



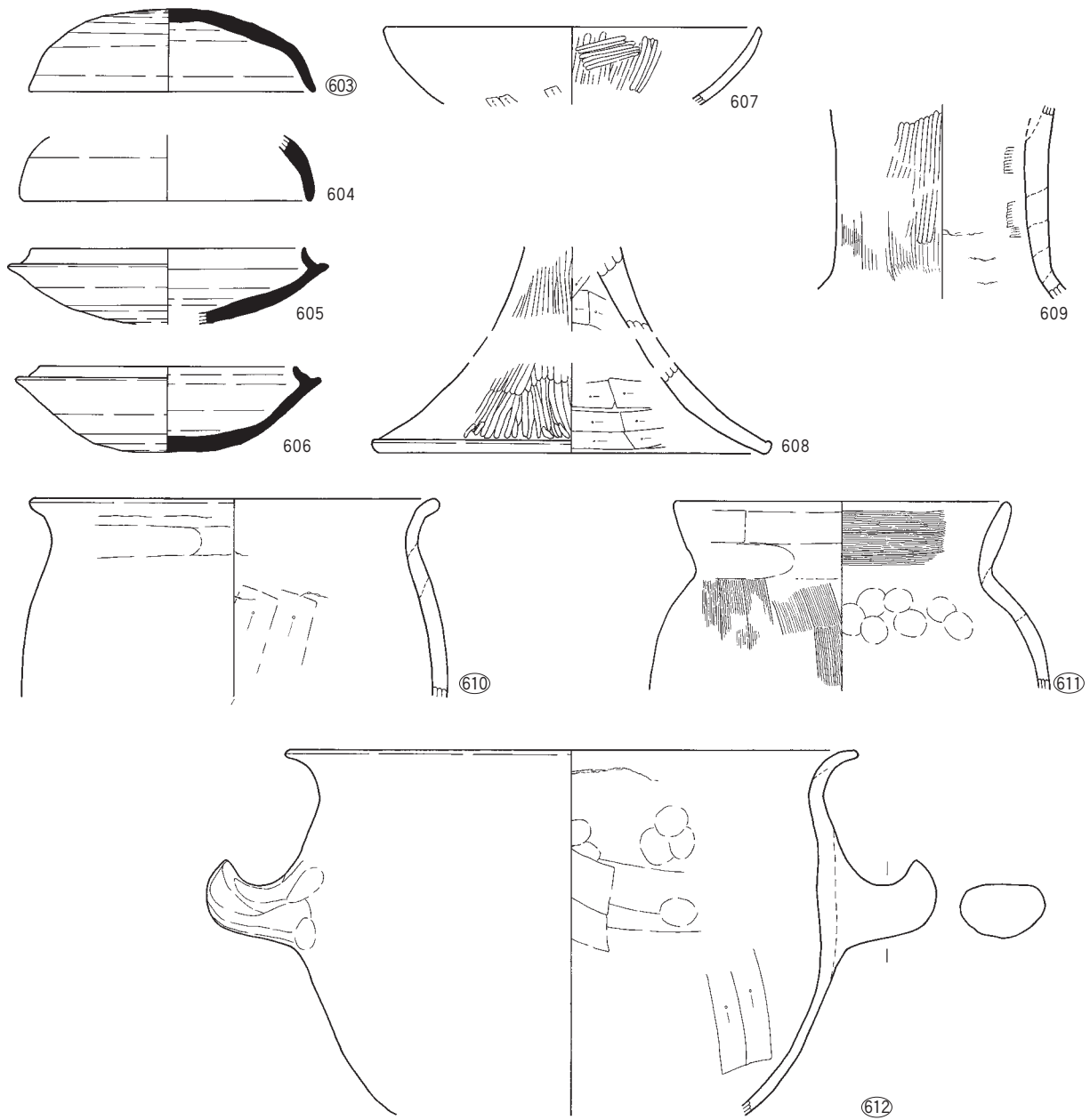
- | | | |
|--|--|--|
| 1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり強・粘性弱)
炭化物片含む | 6. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物片・焼土ブロック非常に多く含む | 11. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
やや砂性強い |
| 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり強・粘性弱) | 7. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物片含む | 12. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物小片わずかに含む |
| 3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・焼土粒・黄褐色砂質土ブロック含む | 8. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり強・粘性弱)
炭化物片・焼土粒わずかに含む | 13. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物小片わずかに含む |
| 4. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物片・焼土粒含む | 9. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり強・粘性弱) | 14. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) |
| 5. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物片・焼土ブロック非常に多く含む | 10. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・焼土粒わずかに含む | |



第 165 図 II - 13 区 SB1006 遺構実測図 (1)



第 166 图 II - 13 区 SB1006 遺構実測図 (2)

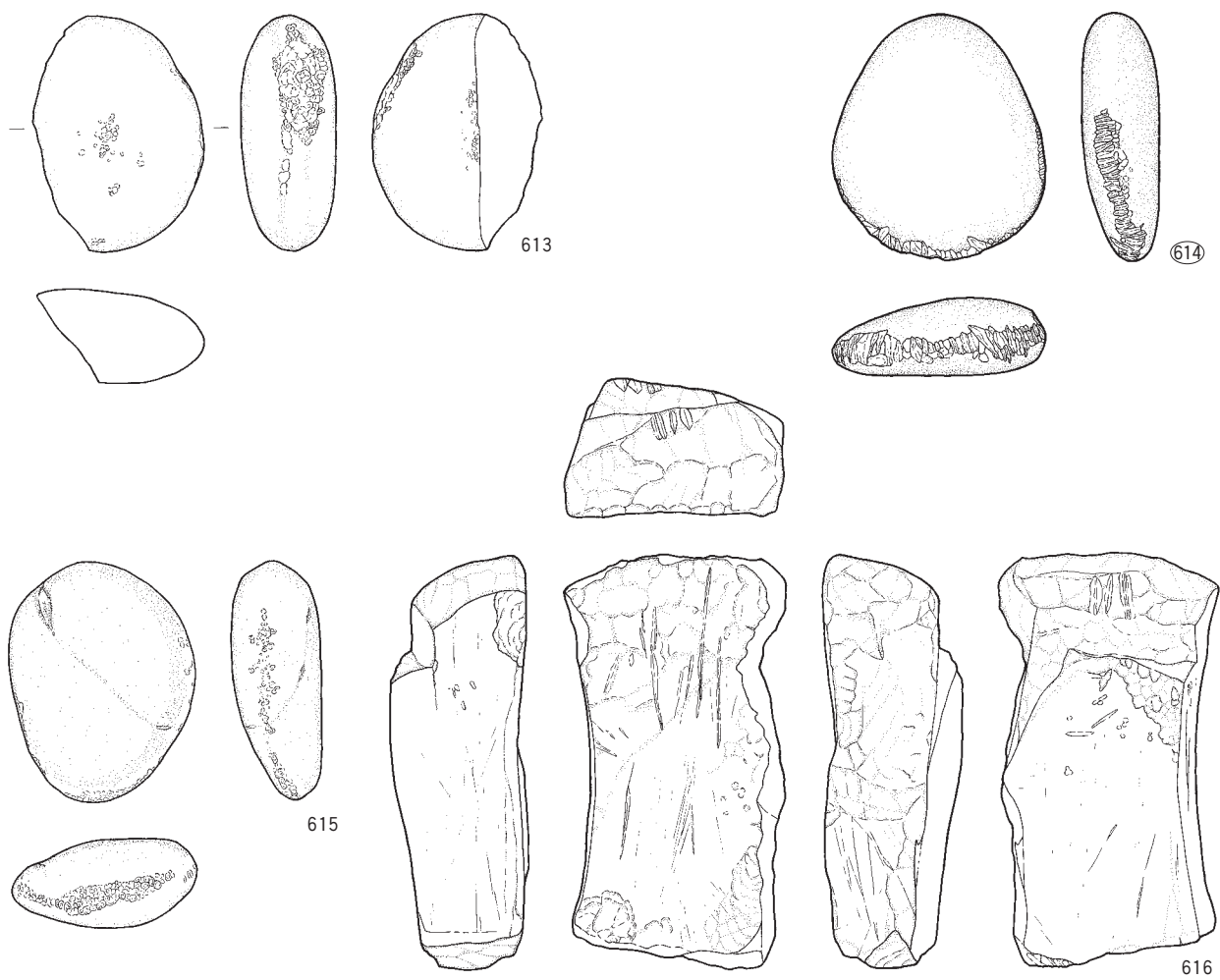


第167図 II-13区 SB1006遺物実測図 (1)



してはもっとも扁平な段階のもの。底部外面は回転台からの切り離し後のケズリなどの整形が省略され、その分厚手となる。田辺編年の TK217 型式にあたる。砂岩製砥石 (618) は竈の支脚として転用されていたもので、角柱状の自然石を用いている。表裏面および両側面を砥面とし、さらに同じ位置に重複して敲打痕が多数みられることから台石に転用されたもの。小口部分には細い溝状の擦痕があることから、金属器の刃部の研磨にも用いられたことが分かる。

住居内に年代の根拠となる土器等が残されておらず、須恵器 (617) も詳細な年代を決めることはむずかしい。遺跡内の類似する遺構からみて、7世紀前半のものと考えておきたい。



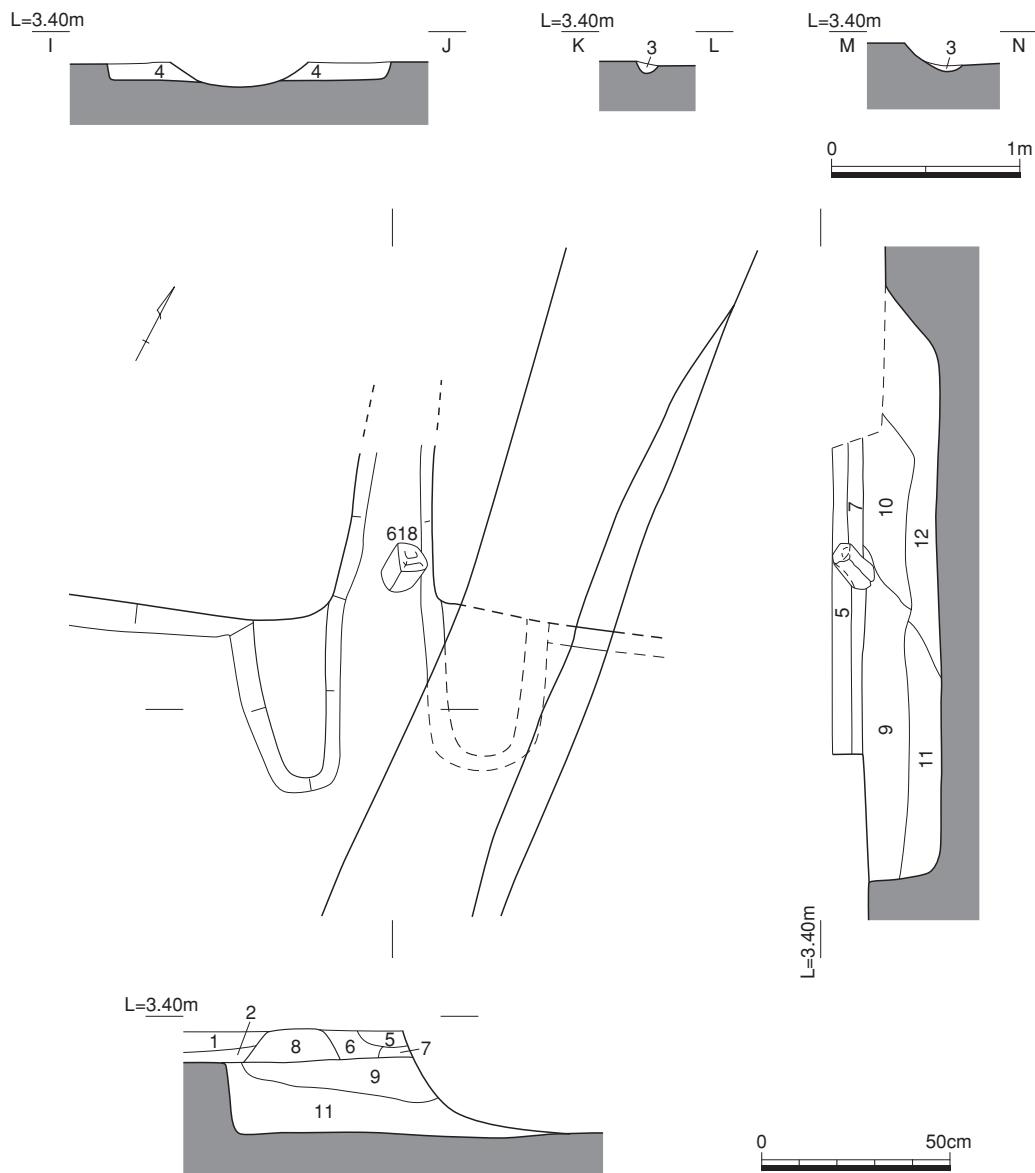
第168图 II-13区 SB1006遺物実測図 (2)



第169图 II-13区 SB1007遺物実測図



- | | | |
|--|--|--|
| 1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
焼土ブロック 30%含む | 7. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒わずかに含む | 12. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
砂性強い |
| 2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強) | 8. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
灰白色粘質土ブロック含む | 13. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロック含む |
| 3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) | 9. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
支柱石南側に焼土粒点在 | 14. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロック含む |
| 4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロック含む | 10. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒わずかに含む | 15. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色地山ブロックわずかに含む |
| 5. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強) | 11. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
燃焼部付近に焼土粒含む、炭化物片わずかに含む | 16. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強) |
| 6. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
焼土ブロック含む | | |



第 171 図 II - 13 区 SB1007 遺構実測図 (2)

【参考文献】

栗林誠治 2004 「打ち欠きを施す須恵器について (予察)」『大柿遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集

藤川智之 2002 「古代」『論集徳島の考古学』論集徳島の考古学刊行委員会

山中敏史 1983 「陶硯の分類」『埋蔵文化財ニュース』41 奈良文化財研究所



第172图 II-13区 第1遺構面 SA・SD配置图

掘立柱建物 77 号 (Ⅱ地区 SA1077) (第 173・192 図)

Ⅱ - 13 区東部北端、c・d 2・3 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.5 m) 南北 1 間 (3.6 m) 床面積 16.2㎡、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N81° E を向く。柱穴は円形・不整円形を呈し、径 29 ~ 42cm、深度 28 ~ 48cm を測る。EP2・4・5 で柱痕を確認。遺物は EP1 ~ 3・5・6 でみられ、土師質土器供膳具・皿・煮炊具、瓦器椀、白磁碗、サヌカイト片、が出土している。

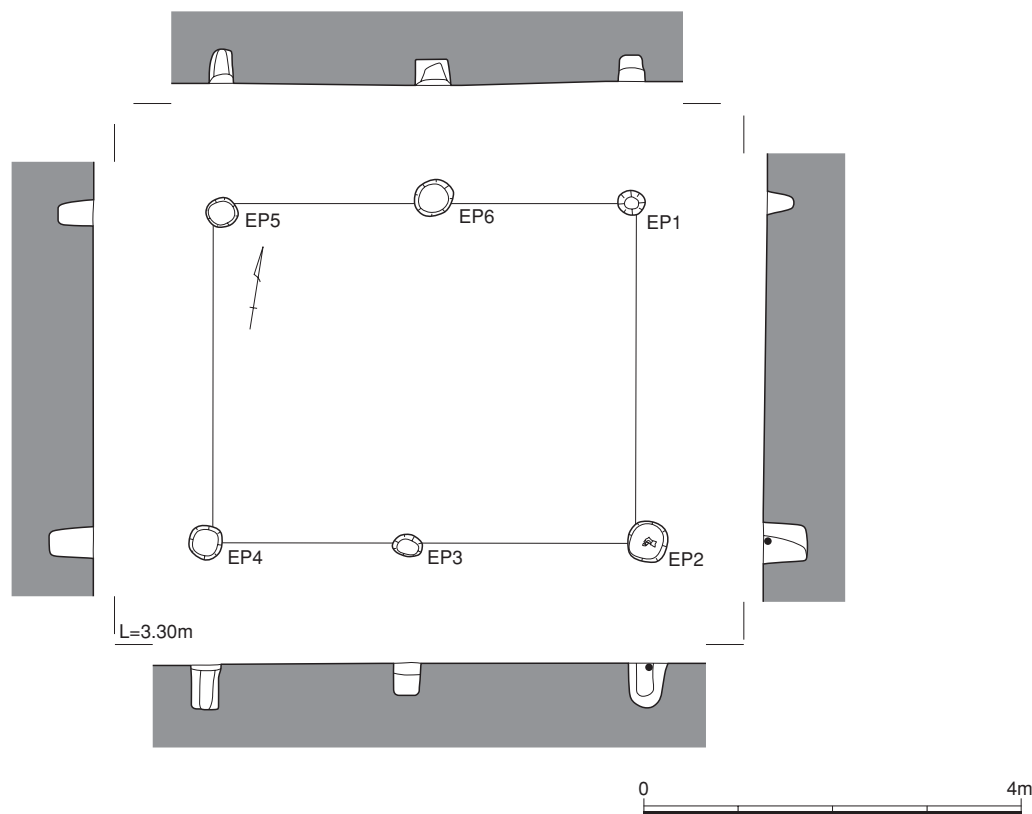
619 は EP2 の出土遺物で、瓦器椀の下半部である。高台断面は逆台形状を呈し、幅と高さを保つ。外面は不明瞭ながら粗い横位のヘラミガキを施す。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良で、磨耗により調整はやや不明瞭。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 ~ Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) とみられる。

掘立柱建物 78 号 (Ⅱ地区 SA1078) (第 174 図)

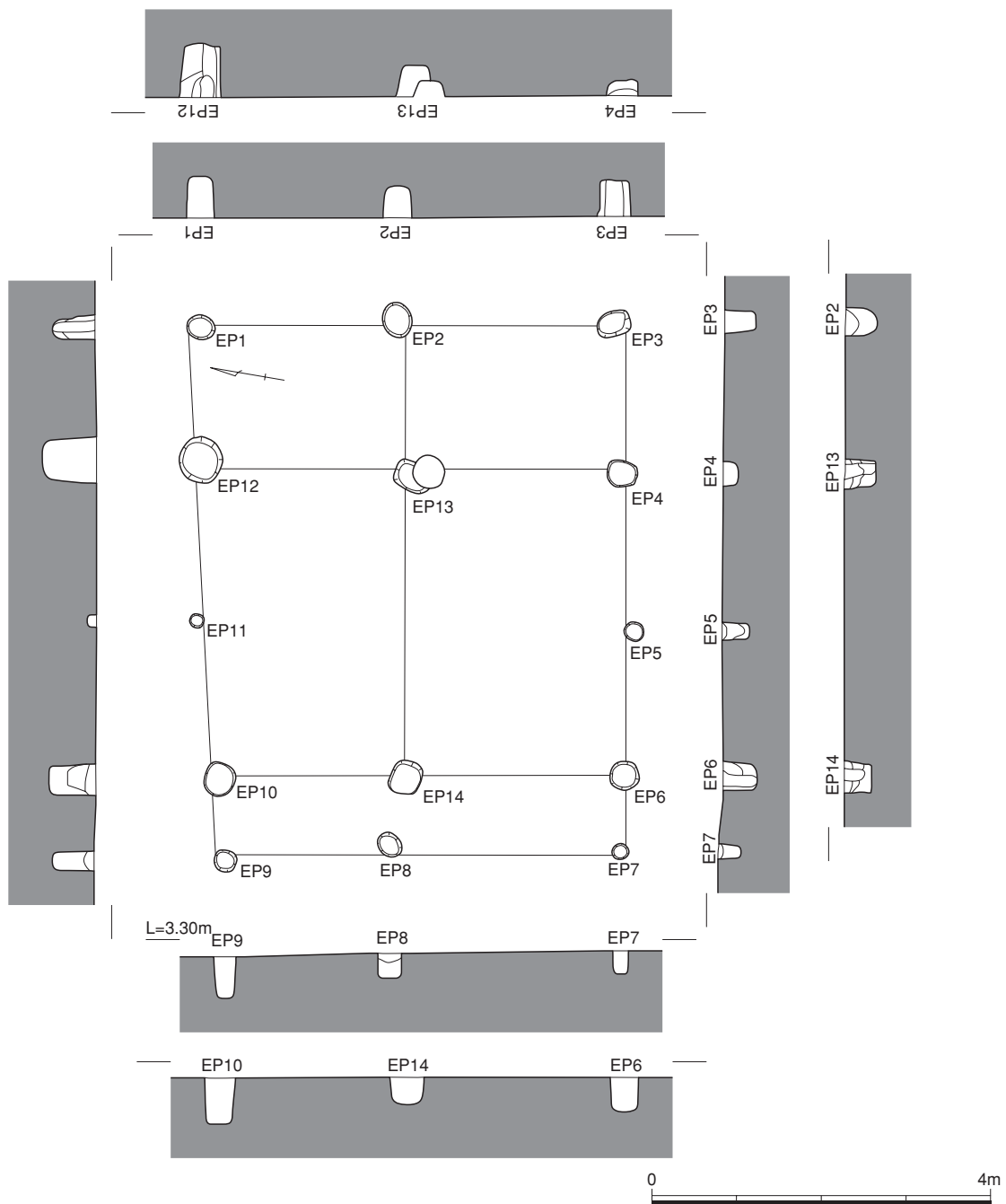
Ⅱ - 13 区東部北側、b・c 2 ~ 4 グリッドに位置する。東西 3 間 (5.3 m) 南北 2 間 (5.0 m) 床面積 26.5㎡ (底部含めて東西 4 間 (6.3 m) 31.5㎡)、14 基の柱穴をもつ西庇付きの掘立柱建物である。東西主軸で N79° E を向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径 15 ~ 55cm、深度 11 ~ 64cm を測る。柱痕は EP1・3・6・12 ~ 14 で確認。

遺物は EP2・3・9・10・12 ~ 14 でみられ、須恵器壺、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、チャート礫、が出土している。実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、SD1117・1034 と主軸方位が近似することから、概ね 12 世紀代とみられる。



第 173 図 Ⅱ - 13 区 SA1077 遺構実測図



第 174 図 II - 13 区 SA1078 遺構実測図

掘立柱建物 79 号 (II 地区 SA1079) (第 175 図)

II - 13 区東部北側、b・c 1・2 グリッドに位置する。東西 2 間 (5.9 m) 南北 1 間 (2.0 m) 床面積 11.8㎡、5 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N76° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 31 ~ 40cm、深度 22 ~ 35cm を測る。柱痕は EP3・4 で確認。遺物は EP1 ~ 4 でみられ、土師質土器片・供膳具・杯・鍋、瓦器片・椀・皿、鉄滓、が出土している。実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代と考えられる。

掘立柱建物 80 号 (Ⅱ地区 SA1080) (第 176・193 図)

Ⅱ - 13 区東部中央南寄り、a 3・4 グリッドに位置する。東西 2 間 (2.8 m) 南北 1 間 (2.7 m) 床面積 7.6㎡、5 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N83° E を向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径 31 ~ 38cm、深度 20 ~ 47cm を測る。遺物は EP1・4・5 でみられ、土師質土器片・供膳具、瓦器碗・皿、が出土している。柱痕は EP5 で確認。

620 は EP4 の出土遺物で瓦器碗の上半部。内外面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は口縁外面～内面にかけて良好で、体部外面不良。和泉型瓦器碗Ⅱ - 3 ~ Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当する。

掘立柱建物 81 号 (Ⅱ地区 SA1081) (第 177・194 図)

Ⅱ - 13 区東部中央南寄り、t・a・b 3 ~ 5 グリッドに位置する。東西 3 間 (6.2 m) 南北 2 間 (4.2 m) 床面積 26.0㎡ (庇部含めて東西 4 間 (7.1 m) 29.8㎡)、12 基の柱穴をもつ西庇付きの側柱建物である。東西主軸で N80° E を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 28 ~ 60cm、深度 22 ~ 49cm を測る。柱痕は EP5 を除く全ての柱穴で確認し、根石は EP2 で確認。

遺物は EP1 ~ 7・9 ~ 11 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿 (ともに回転糸切り)・杯・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器供膳具・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、鉄釘・鉄滓、赤色チャート礫、が出土。

621 は EP5 の出土遺物で、土師質土器皿の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切りのち板目痕を残す。軟質焼成により磨耗気味。

622 は EP6 の出土遺物で瓦器碗の上半部。小片のため復元径不正確。体部内面に横位のヘラミガキを施す。口縁部のみ炭素吸着し、他は重焼により吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

623・624 は EP11 の出土遺物である。623 は土師質土器杯で、底部を欠く。回転台成形で、内外面に稜が明瞭。624 は瓦器碗で、底部を欠く。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭で、本来は口縁以下に密に施すものとみられる。炭素吸着は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期でもやや古相か。

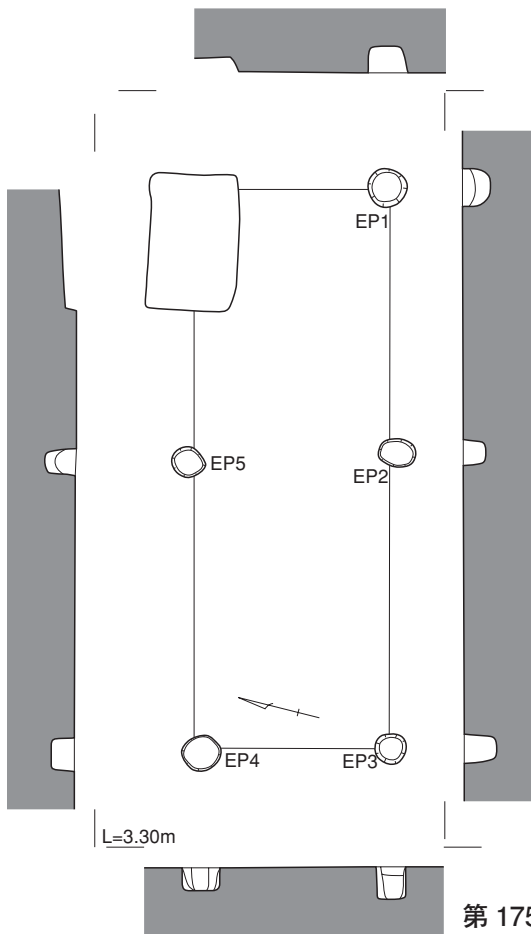
遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 82 号 (Ⅱ地区 SA1082) (第 178・195 図)

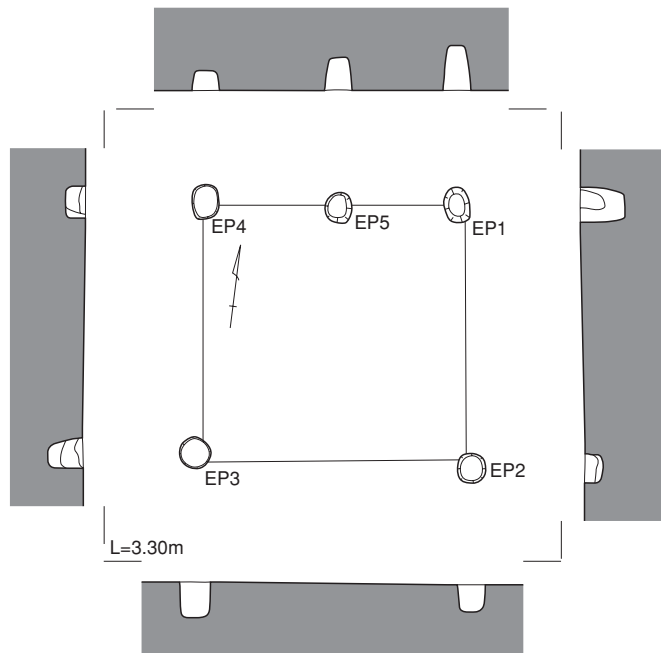
Ⅱ - 13 区東部中央、a・b 4・5 グリッドに位置する。東西 3 間 (4.6 m) 南北 2 間 (3.3 m) 床面積 15.2㎡ (庇部含めて東西 5 間 (6.6 m) 21.8㎡)、15 基の柱穴をもつ東西庇付きの側柱建物である。東西主軸で N82° E を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 22 ~ 60cm、深度 15 ~ 60cm を測る。柱痕は EP2・6・9・11 で確認し、根石は EP11・14 で確認。

遺物は EP2・3・5 ~ 9・11・13・15 でみられ、黒色土器片 (A・B 類)・碗 (A・B 類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗・皿、鉄滓、壁土、が出土している。

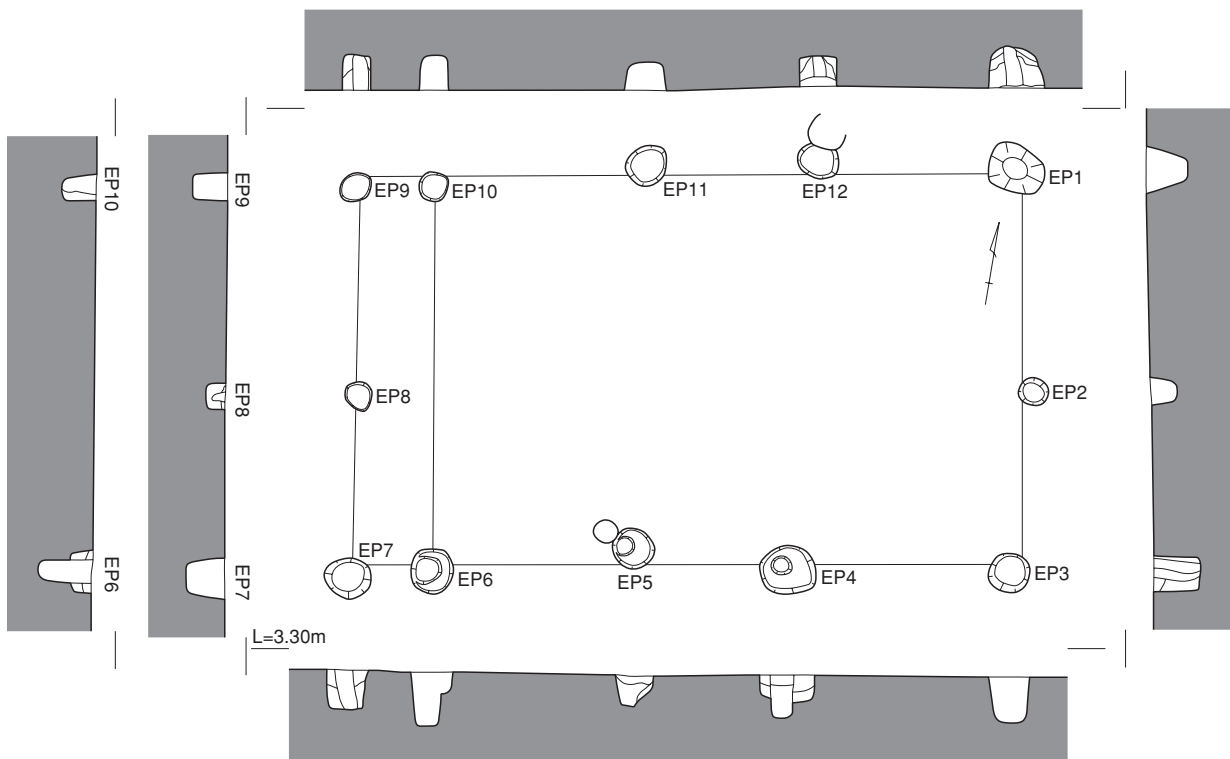
625・626 は EP2 の出土遺物で瓦器皿である。625 は底部中央を欠く。口径 10cm 超で、瓦器皿では比較的大型である。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。底部内外面のみ炭素吸着がみられ、他の部位は吸着なし。酸化炎焼成気味。和泉型瓦器Ⅱ ~ Ⅲ 期前半期頃とみられる。626 は磨耗によりヘラミガキは確認できない。底部外面のみわずかに炭素吸着し、他の部位は吸着なし。全体的に酸化炎焼成。和泉型瓦器Ⅲ 期頃とみられる。



第 175 图 II - 13 区 SA1079 遺構実測図

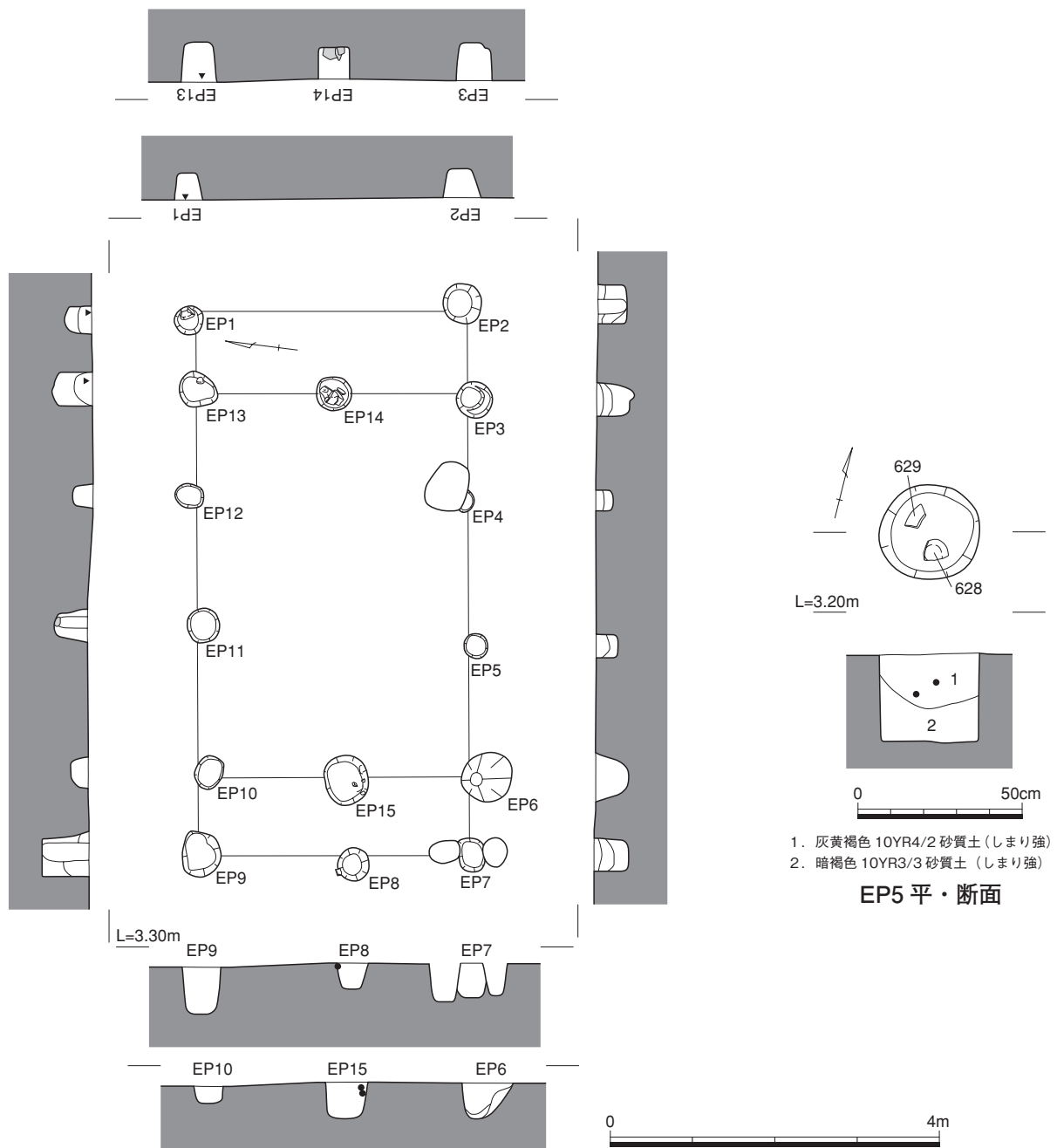


第 176 图 II - 13 区 SA1080 遺構実測図



第 177 图 II - 13 区 SA1081 遺構実測図





627 は EP3 の出土遺物で、瓦器碗の底部。高台断面は小さな逆台形状。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面良好、外面不良。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）とみられる。

628・629 は EP5 の出土遺物で、第 1 層から出土。628 は瓦器皿で、口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。焼成不良により軟質。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。629 は瓦器碗の上半部。焼成不良により磨耗し調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 ～Ⅳ - 1 期（13 世紀前葉～中葉）に相当。

630 は EP6 の出土遺物で、瓦器碗の底部。高台断面は幅広で低平な逆台形状。焼成不良により磨耗著しく、見込みの調整不明。炭素吸着は内面のみ良好で、外面は酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）か。

631・632 は EP8 の出土遺物で、ともに和泉型瓦器碗でⅢ - 3 期（13 世紀前葉）に相当。631 は上半部で、小片のため復元径過大。焼成不良によりきわめて軟質で、ヘラミガキは体部内面にわずかに残るのみ。炭素吸着は内面やや不良、外面不良で、胎土は酸化炎焼成気味。632 は高台断面が低い逆三角形形状。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により調整不明瞭。焼成不良品。炭素吸着は内面良好、外面不良。

633～635 は EP15 の出土遺物で、いずれも瓦器碗。633 は底部を欠く。歪みにより復元径やや過大か。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で酸化炎焼成するが焼成良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）とみられるが、胎土にチャートを含むことから模倣品の疑いあり。

634・635 は上半部で、和泉型瓦器碗Ⅲ - 3（13 世紀前葉）に相当。634 は内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味。とみられる。635 は高台断面がやや低い逆台形状を呈する。体部外面に横位に連続した指頭圧痕を残す。口縁～体部内面にやや密な横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。焼成やや不良。

遺構の年代は、出土遺物から和泉型瓦器Ⅲ - 3 期を中心とした 13 世紀前半に位置付けられる。

掘立柱建物 83 号（Ⅱ地区 SA1083）（第 179・196 図）

Ⅱ - 13 区東部中央南寄り、a・b 4・5 グリッドに位置する。東西 2 間（3.6 m）南北 2 間（3.4 m）床面積 12.2㎡、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N90° WE を向く。柱穴は円形を呈し、径 22～39cm、深度 18～43cm を測る。柱痕は EP2・6 で確認。遺物は EP1～3・5 でみられ、土師質土器煮炊具・土錘、瓦器片・碗・皿、常滑甕、が出土している。

636～639 は EP2 の出土遺物で、全て柱痕から出土。639 を除く 3 点が瓦器碗である。636 は底部を欠く。体部外面にヘラ状工具の擦痕あり。内面に横位のヘラミガキを施すが不明瞭。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は内面良好、外面やや不良で、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）に相当。

637 は下半部で、高台断面はやや低い逆台形状を呈する。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好、焼成堅緻で、部分的に金属光沢をもつ。和泉型瓦器碗Ⅲ - 1～2 期（12 世紀後葉～13 世紀初頭）に相当。

638 は底部。高台はやや大きめの径で断面は逆三角形形状を呈する。見込みに細線で平行ヘラミガキ暗文を施し、重焼による高台の剥離痕を残す。炭素吸着良好であるが、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ - 2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）前後とみられる。

639 は土師質管状土錘で、復元径 4.8cm を測る大型品。外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗する。胎土にチャートを含む。

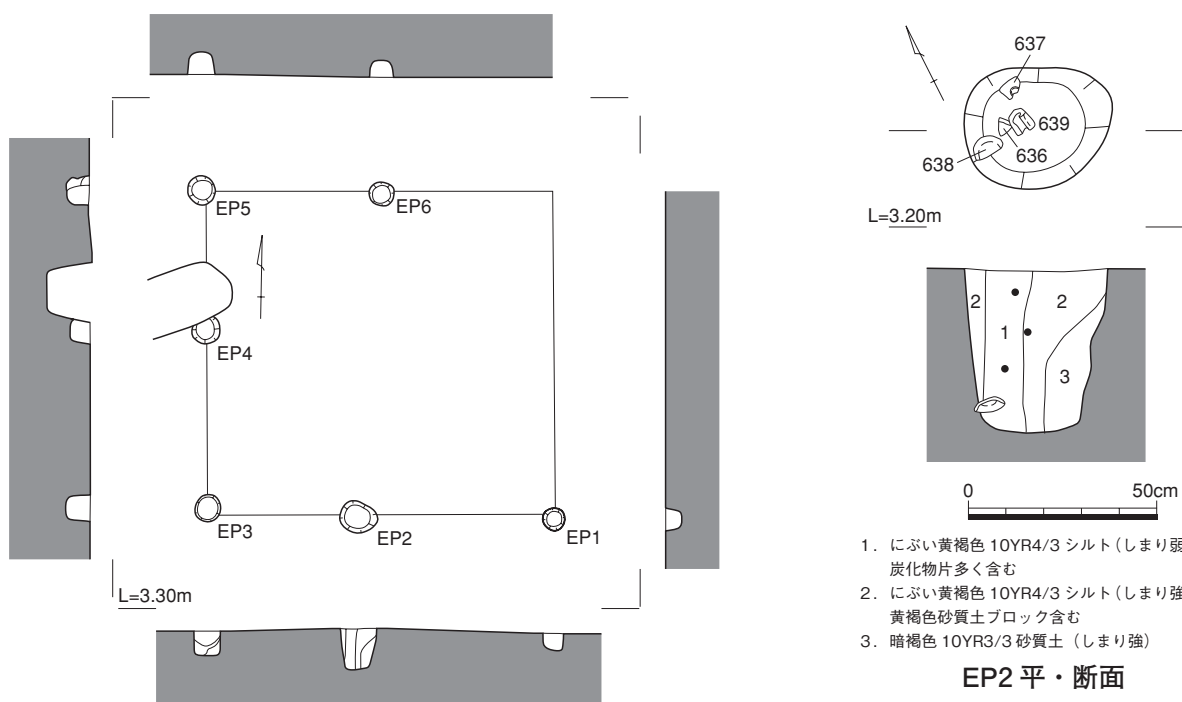
640 は EP5 出土遺物の瓦器皿。体部内面にやや密な横位のヘラミガキ、見込みに連結輪状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面不良、外面やや不良。和泉型瓦器Ⅲ 期頃であろう。

遺構の年代は、出土遺物から 12 世紀末～13 世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 84 号 (II 地区 SA1084) (第 180・197 図)

II - 13 区東部中央、a 3・4 グリッドに位置する。東西 2 間 (3.1 m) 南北 1 間 (1.9 m) 床面積 5.9m²、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N85° E を向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径 26 ~ 46cm、深度 17 ~ 47cm を測る。柱痕は EP3・5・6 で確認。遺物は EP1 ~ 3・5・6 でみられ、土師質土器片・供膳具・杯か皿・煮炊具、瓦器片・椀、が出土している。

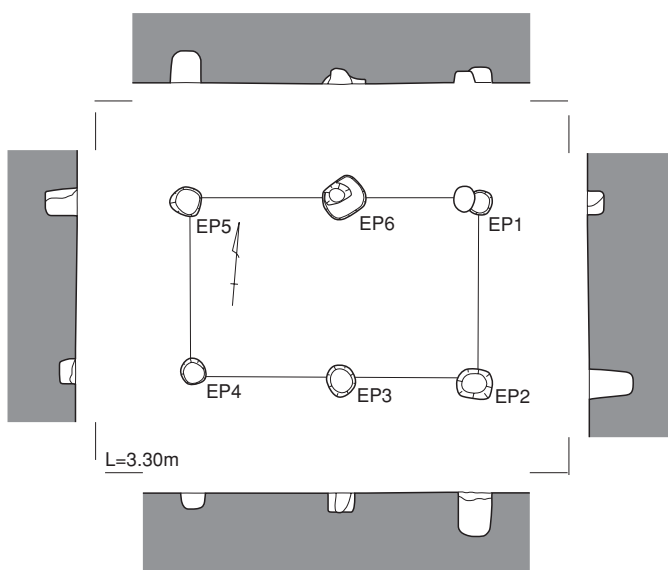
掲載遺物はすべて EP2 からの出土。641 は土師質土器杯または皿の下半部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成により磨耗気味。



1. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり弱) 炭化物片多く含む
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり強) 黄褐色砂質土ブロック含む
3. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)

EP2 平・断面

第 179 図 II - 13 区 SA1083 遺構実測図



第 180 図 II - 13 区 SA1084 遺構実測図



642～644は瓦器碗の下半部である。642は高台断面が幅広で低く潰れた逆台形状を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）とみられる。

643・644は和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。643は高台断面が低い逆三角形形状を呈する。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにユビオサエのち平行ヘラミガキ暗文を施す。軟質焼成により磨耗気味。炭素吸着は内面やや不良で外面吸着なし。胎土は酸化炎焼成気味。技法や形状から非和泉型の可能性もあり。644は断面逆三角形形状の低い高台をもつ。磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着は外面不良で、内面は良好だがタール状を呈する。

遺構の時期は、瓦器碗の年代から概ね13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物85号（Ⅱ地区 SA1085）（第181・198図）

Ⅱ－13区東部南側、t・a4～6グリッドに位置する。東西3間（7.8m）南北2間（3.8m）床面積29.6㎡〈底部含めて東西4間（8.9m）、南北3間（4.7m）41.8㎡〉、19基の柱穴をもつ南・西庇付きの掘立柱建物である。東西主軸でN81°Eを向く。柱穴は円形または不整形を呈し、径26～55cm、深度12～52cmを測る。柱痕はEP3・5～7・9・10・14～16・18で確認。

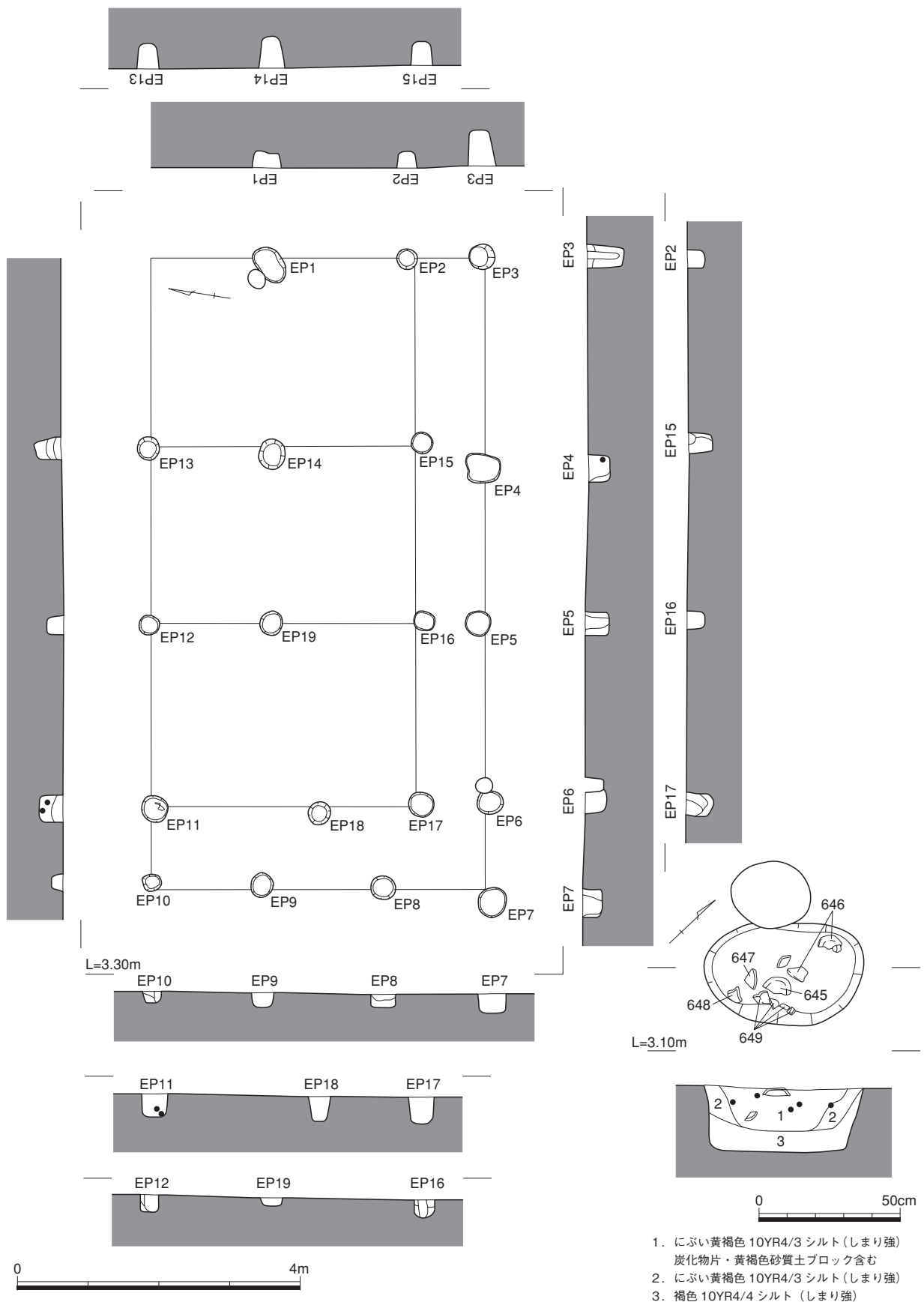
遺物はEP1～9・11～18でみられ、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具・羽釜・鍋・土錘、瓦器片・碗か・皿、須恵質土器片・捏鉢、碗形滓、チャート礫、が出土。

645～649はEP1の出土遺物で、すべて埋土上位から出土。645・646は瓦器皿である。645は底部外面はユビオサエのち強いユビナデを施すことによって、凹面状に作る。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状ヘラミガキ暗文を施すとみられる。焼成不良で、磨耗により調整不明瞭。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃とみられるが非和泉型の可能性あり。646は体部内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良で磨耗により不明瞭。見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面やや不良、外面吸着なし。酸化炎焼成気味。内面にハゼ痕あり。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

647～649は瓦器碗である。647・648は和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）とみられる。647は底部を欠く。外面は横位に連続した細かい指頭圧痕を残す。体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施し、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すとみられるが不明瞭。内面は磨耗気味。炭素吸着良好。648は体部で、内面にやや密な横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面なし、外面やや不良。649は高台断面が逆三角形形状で幅と高さを保つ。内面の口縁～体部に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好だが、焼成不良で磨耗により調整不明瞭。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当する。

650～653はEP3の出土遺物ですべて瓦器碗である。650・651は和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられる。650は口縁～体部内面にやや粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗し、外面のヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味。651は小片のため復元径過大。高台断面は低い逆三角形形状を呈する。外面には横位に連続する小さな指頭圧痕を残す。焼成不良により軟質のため調整不明瞭で、外面と体部内面のヘラミガキは確認できない。見込みの平行ヘラミガキ暗文は辛うじて確認でき、重焼時の剥離痕を伴う。炭素吸着やや不良。

652は上半部で、和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当する。内面に横位のヘラミガキを施す



第 181 図 II - 13 区 SA1085 遺構実測図

EP1 平・断面

が不明瞭。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。

653は上部で、和泉型瓦器Ⅳ－1期（13世紀中葉）とみられる。小片のため復元径は不正確。口縁外面にヨコナデによる浅い沈線を引く。焼成不良品できわめて軟質なために調整不明瞭で、とくに内面の調整不明。炭素吸着は外面のみわずかにみられ、内面は吸着なし。胎土は粗くチャートを含む。

654・655はEP4の出土遺物である。654は土師質土器皿である。比較的厚い器壁をもつ。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成で磨耗気味。655は瓦器椀の底部。高台断面は低い逆台形状を呈し、底部中央が高台畳付よりも下方に突出する。見込みに連結輪状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期（13世紀前葉～中葉）に相当する。

656はEP6の出土遺物で、瓦器椀の上半部である。口縁外面のヨコナデ幅は狭い。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗するが、炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

657はEP7の出土遺物で、瓦器椀の上半部である。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好。炭素吸着は口縁端部～口縁外面のみにみられ、他の部位は重焼により吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

658はEP11の出土遺物で、瓦器椀である。高台は径が大きく、断面は逆三角形形状を呈する。体部外面にヘラミガキ、口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ－3～Ⅲ－1期（12世紀後葉）に相当する。

659はEP13の出土遺物で、瓦器椀の下半部。高台断面は高さがある逆三角形形状を呈する。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成気味。高台の形状から和泉型瓦器椀Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）頃とみられる。

660～662はEP14の出土遺物で、全て瓦器椀の上半部である。660は外面に粗い横位のヘラミガキ、内面は密な横位のヘラミガキを施す。やや磨耗気味。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅱ－3～Ⅲ－1期（12世紀後葉）頃とみられる。

661・662は和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。661は小片のため復元径不正確。軟質焼成で磨耗のため、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は体部内面の一部のみで他の部位は吸着なく、酸化炎焼成する。胎土は粗い。胎土や焼成から非和泉型の可能性も考えられる。662は軟質焼成で磨耗のため、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があることから、12世紀後半～13世紀前半と考えておく。

掘立柱建物 86号（Ⅱ地区 SA1086）（第182・199図）

Ⅱ－13区東部南側、s・t 3・4グリッドに位置する。東西2間（3.8m）南北1間（2.7m）床面積10.3㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN78°Eを向く。柱穴は円形を呈し、径20～40cm、深度19～35cmを測る。柱痕はEP1・5・6で確認。遺物はEP1～5でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具・羽釜・鍋、瓦器片・椀、が出土している。

663はEP5の出土遺物で、土師質土器羽釜の鏝部である。鏝部は貼り付けで作り、水平に長く伸びる。鏝下面は横位に連続した指頭圧痕を残し、体部との境は強いユビナデを施す。体部は内傾するとみられる。胎土に金雲母や花崗岩を含むため搬入品と考えられる。河内型であろうか。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀頃と考えられる。

掘立柱建物 87 号 (Ⅱ地区 SA1087) (第 183 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、s・t 3・4 グリッドに位置する。東西 2 間 (3.4 m) 南北 2 間 (5.1 m) 床面積 17.3㎡、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。南北主軸で N2° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 23 ~ 36cm、深度 29 ~ 41cm を測る。柱痕は EP1・2・5 で確認。

遺物は EP1 ~ 6 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具・甕、瓦器片・椀、が出土している。実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、出土遺物および SD1108 と同じ主軸方位であることから、13 世紀代とみられる。

掘立柱建物 88 号 (Ⅱ地区 SA1088) (第 184 図)

Ⅱ - 13 区東部中央北寄り、a 2 グリッドに位置する。東西 1 間 (1.8 m) 南北 2 間 (2.1 m) 床面積 3.8 ㎡、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。南北主軸で N17° W を向く。柱穴は円形を呈し、径 16 ~ 36cm、深度 13 ~ 30cm を測る。遺物は EP5・6 でみられ、土師質土器片・供膳具、が出土している。実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀代とみられる。

掘立柱建物 89 号 (Ⅱ地区 SA1089) (第 185 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、a・b 19 ~ 1 グリッドに位置する。東西 2 間 (6.1 m) 南北 3 間 (3.7 m) 床面積 22.6㎡、12 基の柱穴をもつ掘立柱建物である。東西主軸で、N84° E を向く。柱穴は円形あるいは隅丸方形を呈し、径 26 ~ 58cm、深度 9 ~ 41cm を測る。柱痕は EP3 ~ 5 で確認し、根石は EP3・12 で確認。

遺物は EP1 ~ 5・7 ~ 12 でみられ、黒色土器片 (A・B 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具・甕、瓦器片・椀、が出土している。実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられる。

掘立柱建物 90 号 (Ⅱ地区 SA1090) (第 186 図)

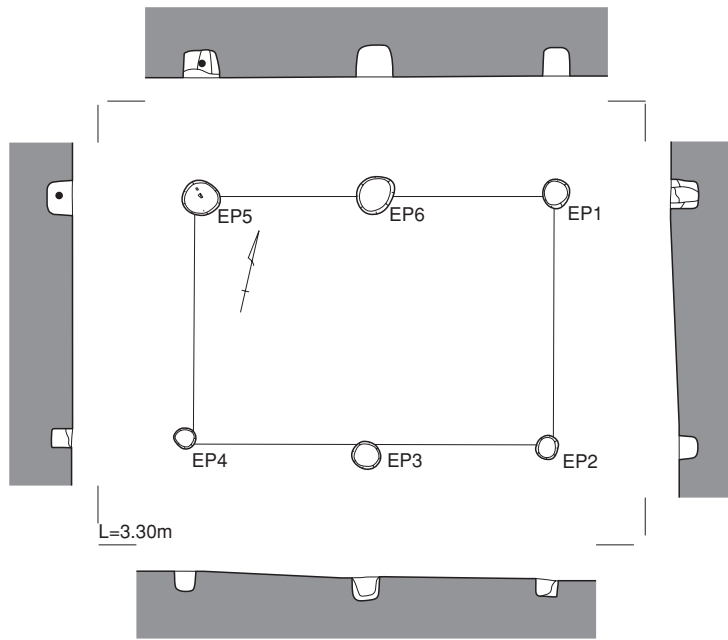
Ⅱ - 13 区東部中央北寄り、a・b 20 ~ 2 グリッドに位置する。東西 3 間 (6.6 m) 南北 2 間 (3.5 m) 床面積 23.1㎡、9 基の柱穴をもつ掘立柱建物である。東西主軸で N79° E を向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径 34 ~ 45cm、深度 13 ~ 46cm を測る。柱痕は EP2 ~ 5・8・9 で確認。

遺物は EP1 ~ 9 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器片・捏鉢か、瓦器片・椀、白磁碗、鉄滓、砂岩製叩石、が出土している。実測可能な遺物はない。

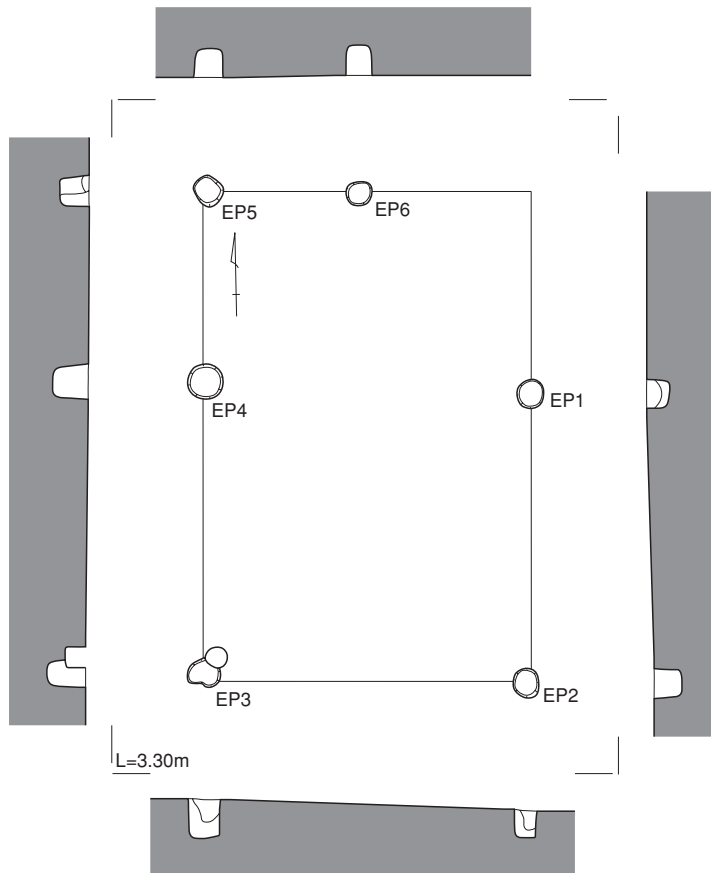
遺構の年代は、SA1089 に切られ、SD1034 と近似した方位をもつこと、および出土遺物から 12 世紀代とみられる。

掘立柱建物 91 号 (Ⅱ地区 SA1091) (第 187 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、t・a 20 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.3 m) 南北 2 間 (2.5 m) 床面積 10.8㎡、7 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N87° W を向く。柱穴は円形を呈し、径 24 ~ 35cm、深度 11 ~ 41cm を測る。柱痕は EP1・2・7 で確認。遺物は EP1・4・5・7 でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀頃とみられる。

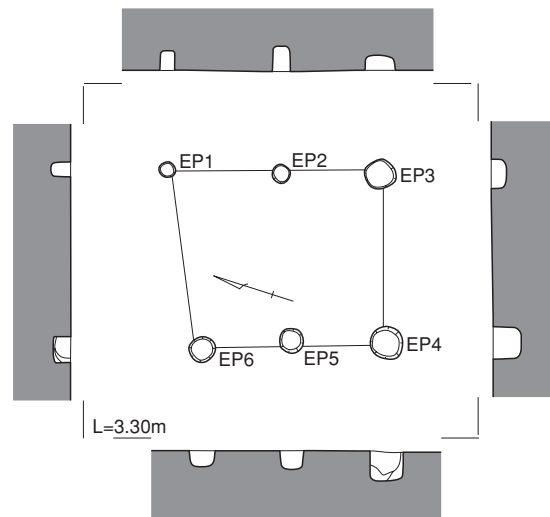


第 182 图 II - 13 区 SA1086 遺構実測図

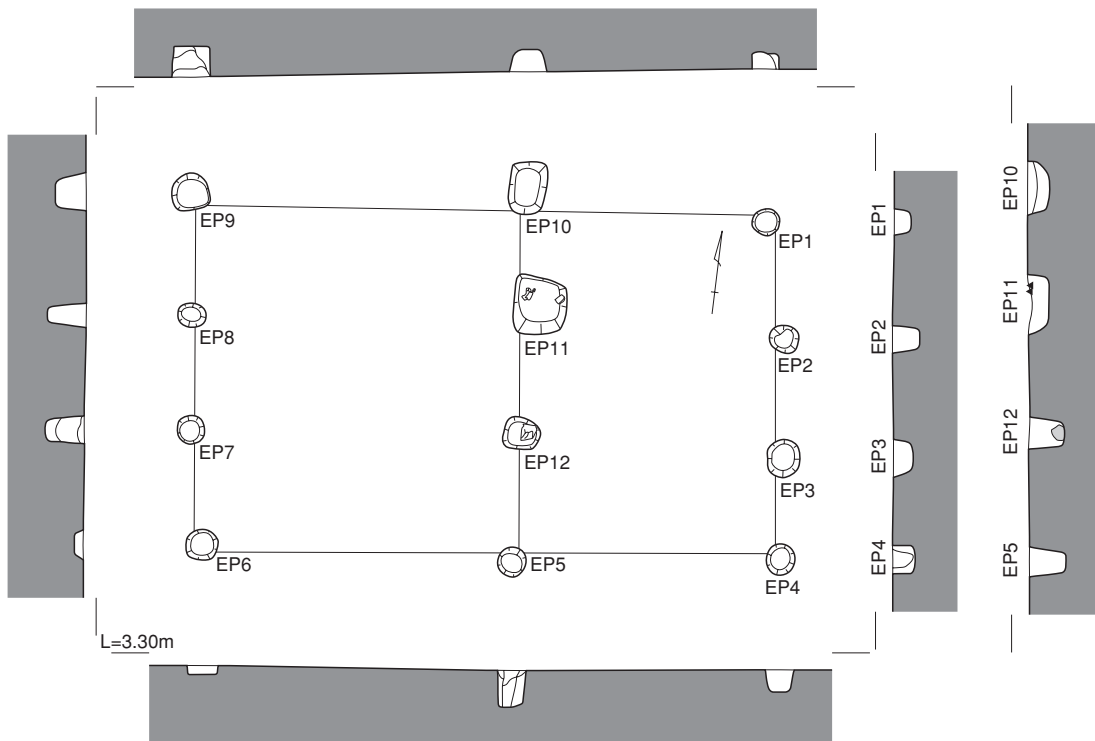


第 183 图 II - 13 区 SA1087 遺構実測図





第184図 II-13区 SA1088 遺構実測図



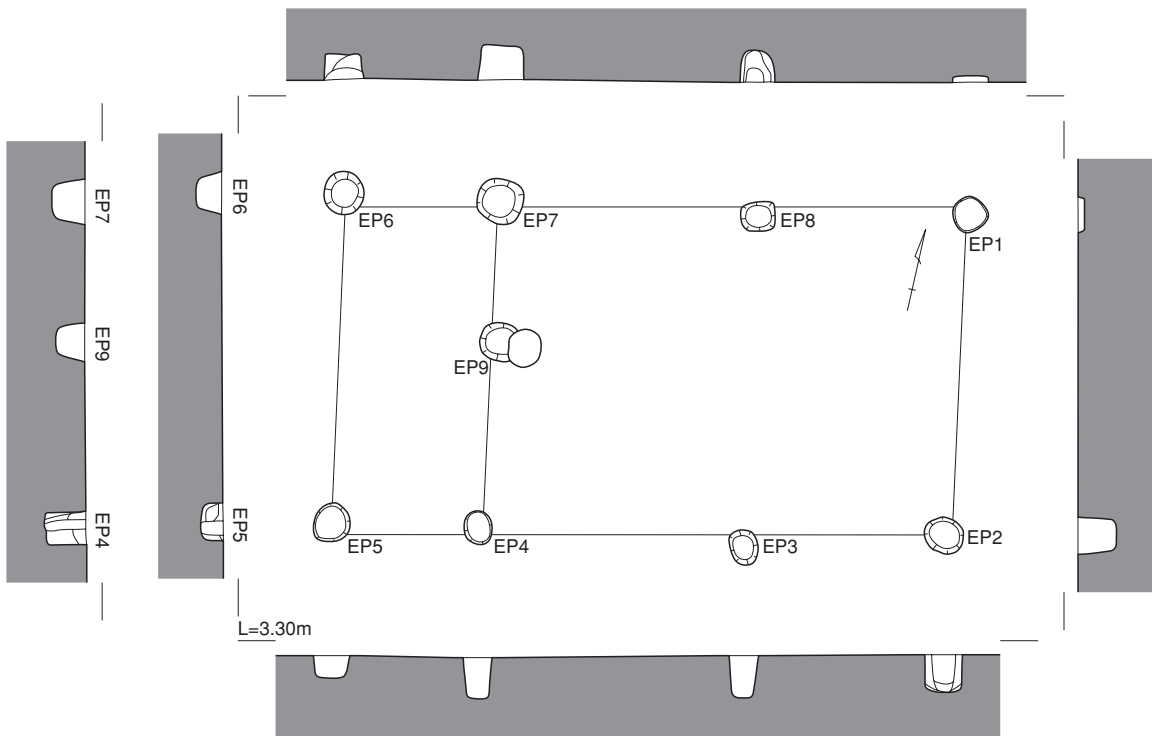
第185図 II-13区 SA1089 遺構実測図



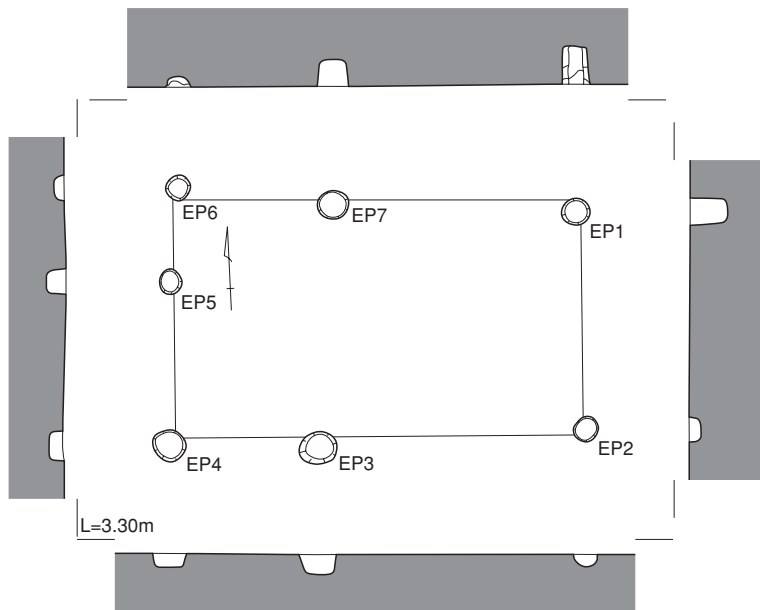
掘立柱建物 92号 (II地区 SA1092) (第188図)

II-13区東部中央、s・t 20・1グリッドに位置する。東西3間(5.7m)南北2間(3.1m)床面積17.7㎡、9基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN87°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径25~38cm、深度10~46cmを測る。柱痕はEP2~5・8・9で確認。

遺物はEP1~5・7~9で見られ、黒色土器碗(A・B類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・碗、チャート礫、が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね



第 186 図 II - 13 区 SA1090 遺構実測図



第 187 図 II - 13 区 SA1091 遺構実測図



12世紀代とみられる。

掘立柱建物 93号 (Ⅱ地区 SA1093) (第189図)

Ⅱ-13区東部中央、s 20・1グリッドに位置する。東西2間(4.0m)南北2間(3.1m)床面積12.4㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN90°WEを向く。柱穴は円形を呈し、径21～32cm、深度12～38cmを測る。

遺物はEP1～3・5・6でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器片が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年代については特定が難しいが、建物主軸が正方位を指向するので中世末～近世初頭の可能性も考えられる。

掘立柱建物 94号 (Ⅱ地区 SA1094) (第190図)

Ⅱ-13区中央部北側、r・s 16・17グリッドに位置する。東西2間(4.2m)南北2間(3.2m)床面積13.4㎡、6基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN85°Eを向く。柱穴は円形あるいは隅丸方形を呈し、径25～45cm、深度10～29cmを測る。柱痕はEP3で確認。

遺物はEP1・3～6でみられ、須恵器壺、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀・皿、チャート礫、が出土している。実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物およびSA1095と近似した主軸方位をとることから、12世紀末～13世紀前半頃とみられる。

掘立柱建物 95号 (Ⅱ地区 SA1095) (第191・200図)

Ⅱ-13区中央部、q・r 17・18グリッドに位置する。東西2間(4.3m)南北2間(2.8m)床面積12.0㎡(底部含めて南北3間(3.2m)13.8㎡)、11基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物である。東西主軸でN86°Eを向く。柱穴は形を呈し、径20～40cm、深度12～48cmを測る。柱痕はEP2～4で確認。

遺物はEP2～8・10・11でみられ、黒色土器椀(A類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、白磁碗、鉄製品片、砂岩礫・泥岩礫、が出土している。

664はEP2の出土遺物で、白磁碗の底部である。胎土に微細な黒色粒を含む。内面に施釉し、残存部外面は露胎。釉にごく粗い貫入を伴う。底径4.4cmと小さいことから、小型品とみられる。

665はEP6の出土遺物で瓦器椀である。底部を欠く。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は不良だが、焼成は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に相当する。

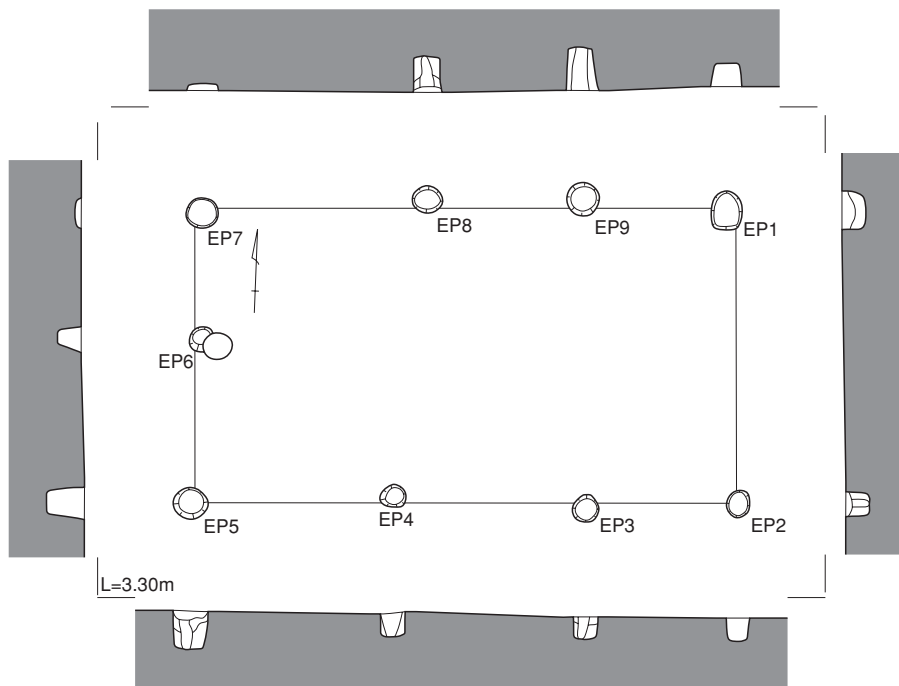
遺構の年代は、出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 96号 (Ⅱ地区 SA1096) (第201・213図)

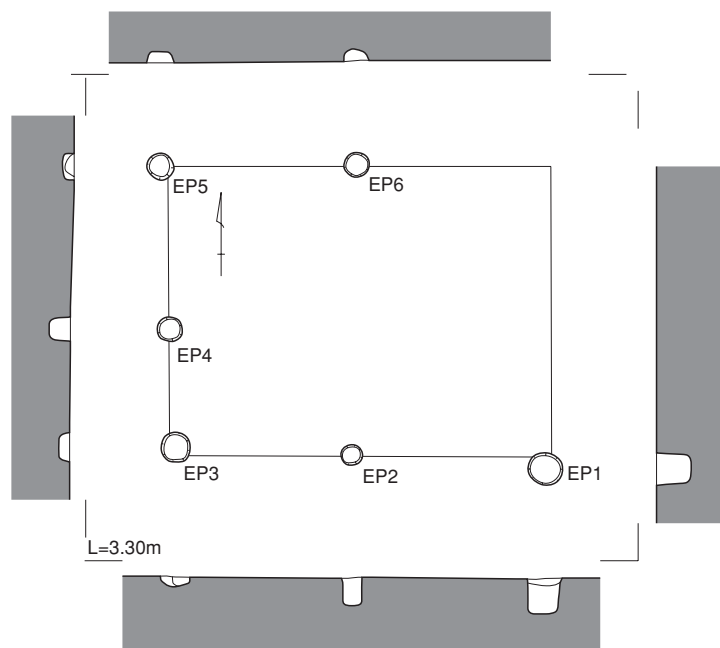
Ⅱ-13区中央部南寄り、p・q 17・18グリッドに位置する。東西3間(5.3m)南北3間(4.5m)床面積23.9㎡、10基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN88°Wを向く。柱穴は円形または不整な隅丸方形を呈し、径33～60cm、深度12～54cmを測る。柱痕はEP1、根石はEP9で確認。

遺物はEP1～7・9・10でみられ、土師器椀か、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯(ともに回転糸切りほか)・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、瓦質土器煮炊具か、が出土。

666～670はEP1の出土遺物である。666・667は回転台成形の土師質土器杯下半部。666は底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが不明瞭。焼成不良により磨耗。内外面わずかに炭素付着。胎土に

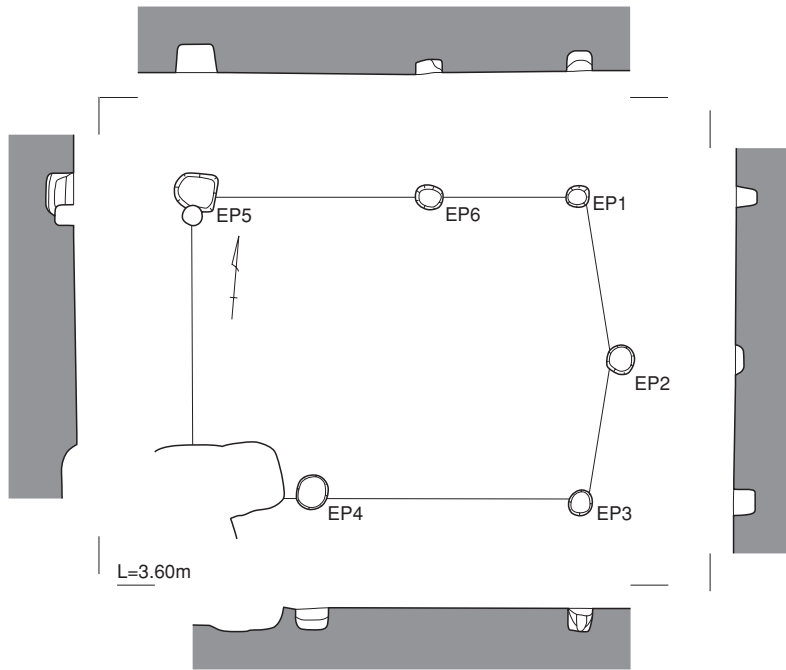


第 188 图 II - 13 区 SA1092 遺構実測図

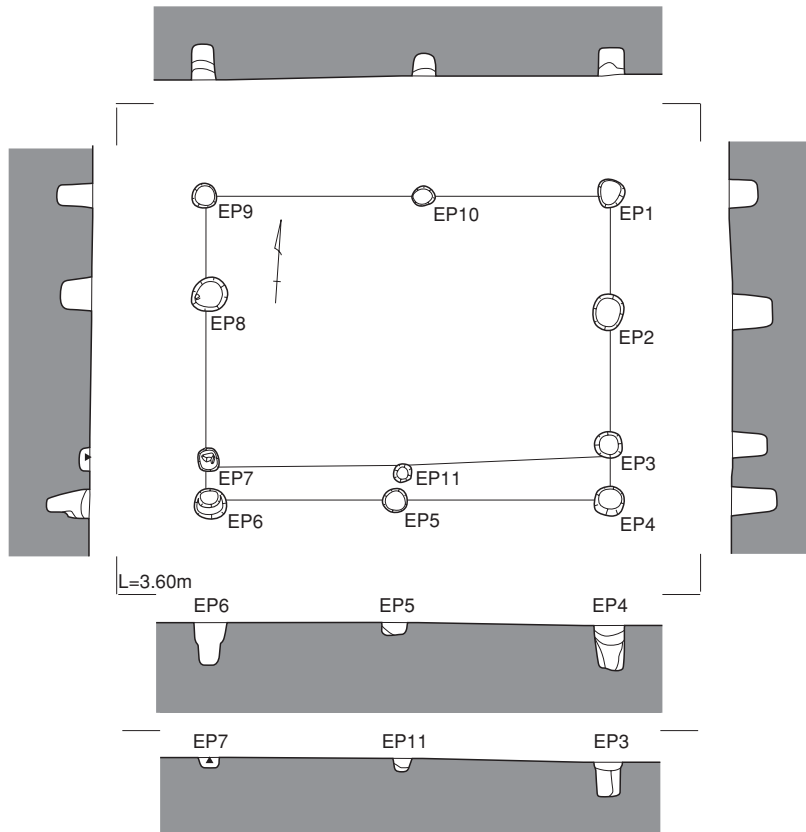


第 189 图 II - 13 区 SA1093 遺構実測図

0 4m

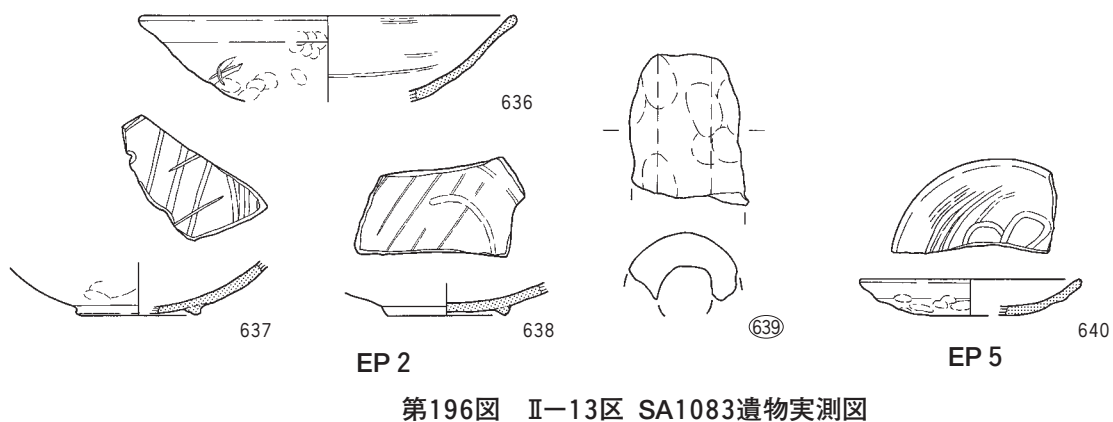
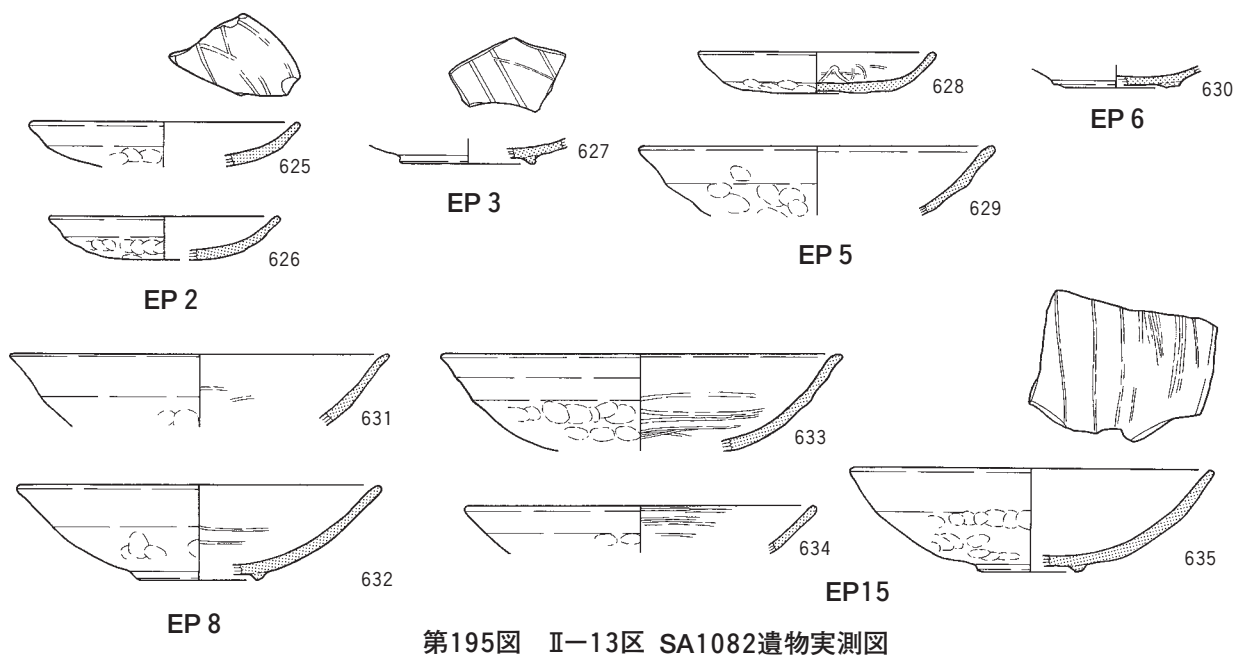
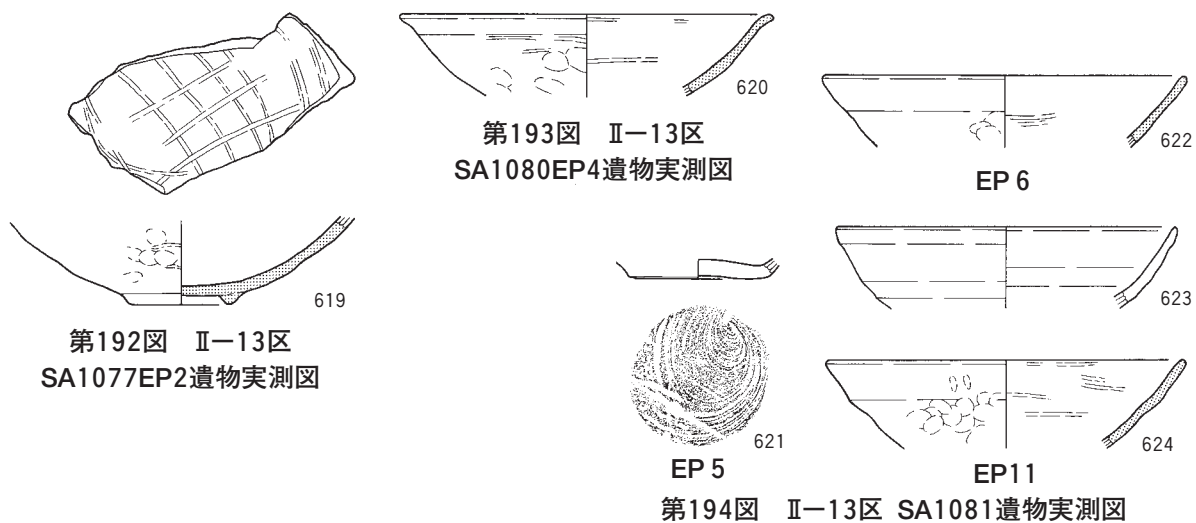


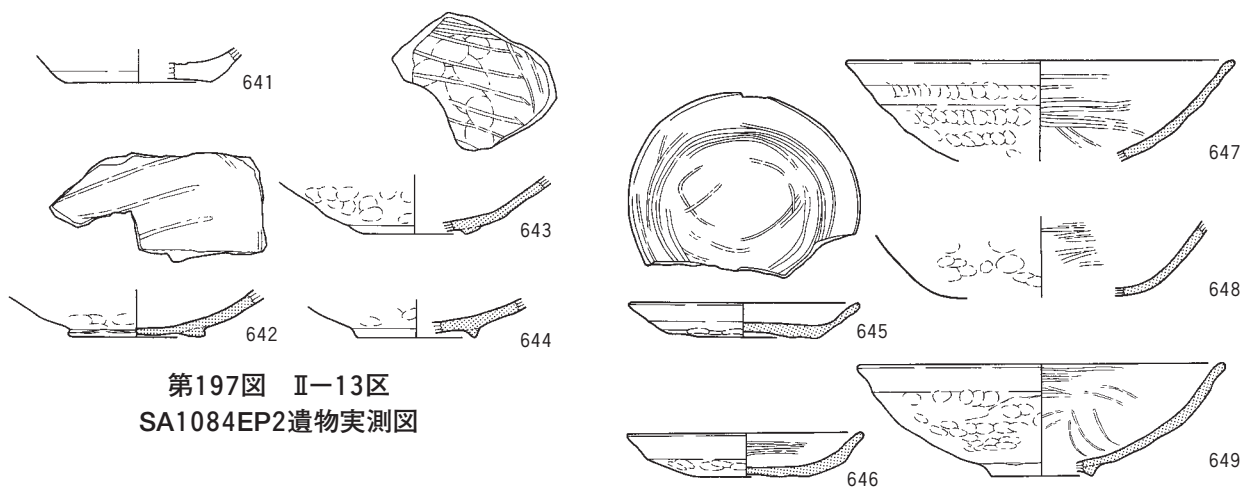
第 190 图 II - 13 区 SA1094 遺構実測図



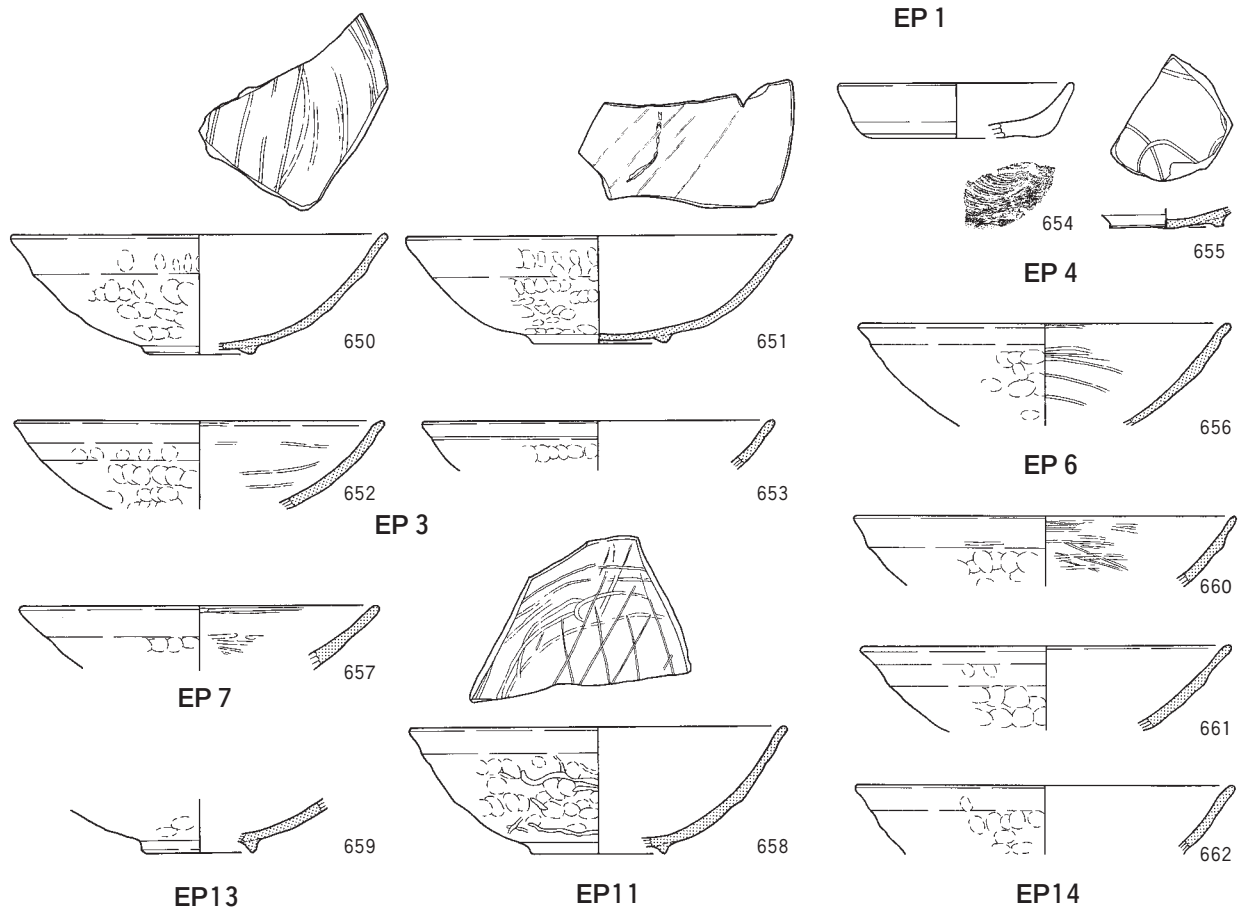
第 191 图 II - 13 区 SA1095 遺構実測図



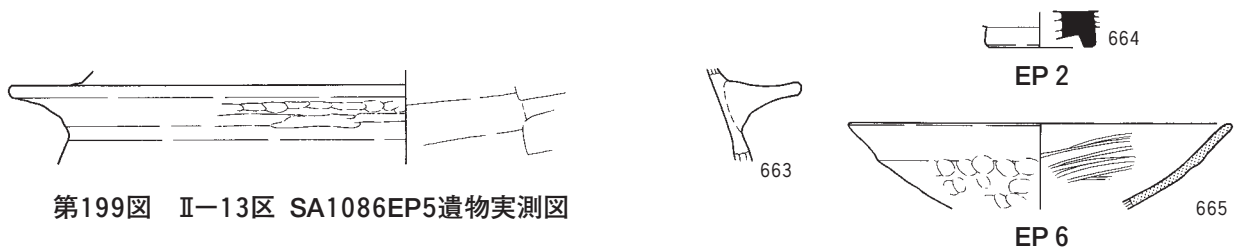




第197图 II-13区
SA1084EP2遺物実測図



第198图 II-13区 SA1085遺物実測図



第199图 II-13区 SA1086EP5遺物実測図

第200图 II-13区
SA1095遺物実測図



金雲母を含むことから、瀬戸内沿岸域からの搬入品とみられる。備前焼碗の焼成不良品である可能性もあり。667は底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成品で、磨耗気味。

668・669は瓦器碗の上半部、670は下半部である。668は歪みのため復元径過小。内外面に粗い横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成品のため磨耗し調整不明瞭。胎土は概ね精良であるが、4mm大の石英粒を含む。和泉型瓦器碗Ⅱ-3～Ⅲ-1期（12世紀後葉）に相当。669は軟質焼成品で磨耗著しい。内面に粗い横位のヘラミガキが確認できる。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。670は高台断面が低い逆三角形を呈する。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられる。

671・672はEP2の出土遺物である。671は瓦器皿。外面のヨコナデは弱く、接合痕を残す。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。胎土は粗い。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。672は土師質土器杯。体部外面下半～底部に指頭圧痕を残す。焼成不良で磨耗著しい。内外面に炭素がごくわずかに付着。瓦器碗の可能性もある。

673はEP6の出土遺物で、土師質土器杯の下半部。底部の器壁が厚い。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。

遺構の年代は、出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 97号（Ⅱ地区 SA1097）（第202図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、p・q 14・15グリッドに位置する。東西3間（3.7m）南北1間（2.2m）床面積8.1㎡（庇部含めて南北2間（2.9m）10.7㎡）、8基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物である。東西主軸でN75°Eを向く。柱穴は円形を呈し、径22～56cm、深度15～41cmを測る。柱痕はEP2・8で確認。

遺物はEP1～4・7でみられ、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器片、が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物およびSD1006を切ることから、概ね13世紀代と考えられる。

掘立柱建物 98号（Ⅱ地区 SA1098）（第203図）

Ⅱ-13区中央部南側、o・p 15・16グリッドに位置する。東西2間（4.3m）南北2間（3.0m）床面積12.9㎡、（庇部含めて南北4間（4.4m）18.9㎡）、12基の柱穴をもつ南・北庇付きの側柱建物である。東西主軸でN86°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径26～56cm、深度15～48cmを測る。柱痕はEP1・9で確認し、EP5に柱痕を伴う可能性がある。

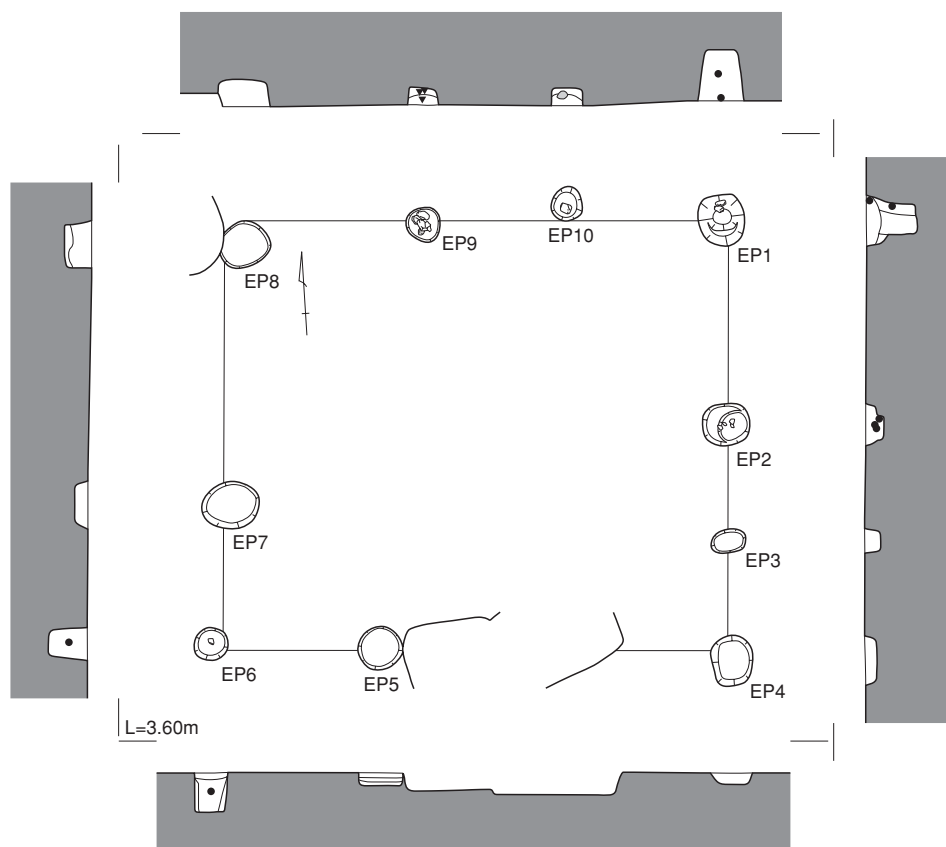
遺物はEP1・2・4～7・10・11でみられ、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・碗・皿、瓦質土器羽釜、チャート礫、が出土するが、実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

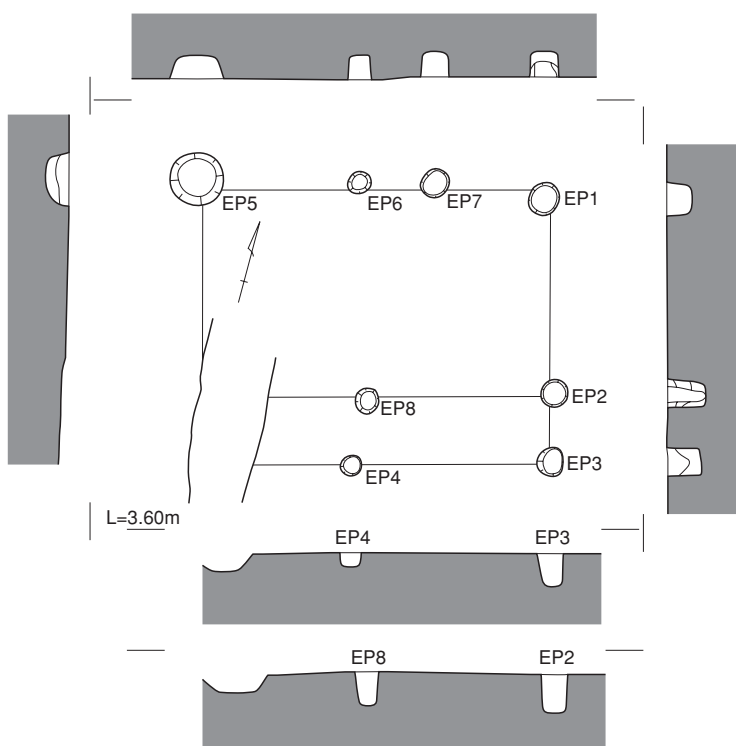
掘立柱建物 99号（Ⅱ地区 SA1099）（第204図）

Ⅱ-13区西部南寄り、n・o 13グリッドに位置する。東西2間（3.8m）南北1間（2.5m）床面積9.5㎡、5基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN90°WEを向く。柱穴は円形を呈し、径23～35cm、深度7～19cmを測る。

遺物はEP3・4でみられ、土師質土器片・煮炊具、が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年

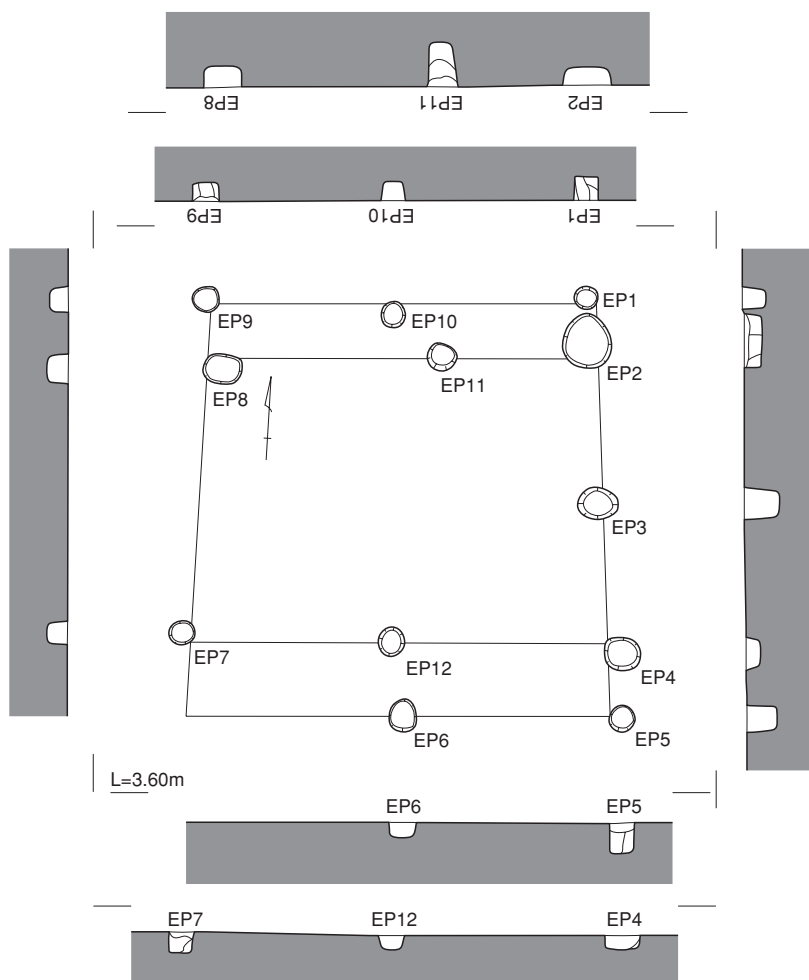


第 201 图 II - 13 区 SA1096 遺構実測図

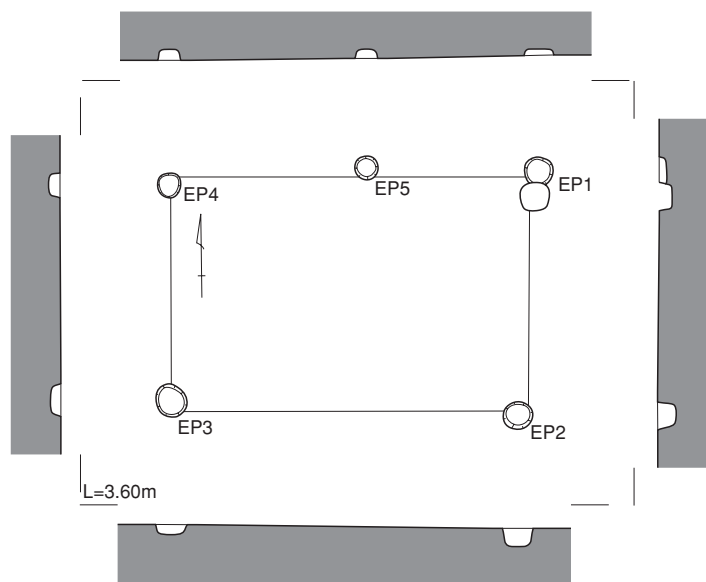


第 202 图 II - 13 区 SA1097 遺構実測図





第 203 図 II - 13 区 SA1098 遺構実測図



第 204 図 II - 13 区 SA1099 遺構実測図



代について、決定の根拠となる遺物を欠くが、主軸が正方位を指向することから、中世末～近世初頭の可能性も考えられる。

掘立柱建物 100 号 (Ⅱ地区 SA1100) (第 205・214 図)

Ⅱ - 13 区西部北端、p・q 11・12 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.1 m) 南北 2 間 (3.7 m) 床面積 15.2m²、7 基の柱穴をもつ掘立柱建物である。東西主軸で N82° E を向く。柱穴は円形または楕円形を呈し、径 26～54cm、深度 10～48cm を測る。柱痕は EP2 で確認。

遺物は EP1～6 でみられ、土師器碗・壺か、黒色土器碗 (A・B 類)、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・椀・鍋、瓦器片・椀、白磁皿・碗、鉄滓、砂岩製台石、が出土。

674 は EP2 の出土遺物で、砂岩製の台石である。4 面を使用。表面には図左上半部の凹みを中心に敲打痕が集中する。凹みは集中的な敲打によって穿たれたものとみられるが、周囲に鉄分の付着が顕著である。側面は幅広くやや深い筋状の擦痕が確認できる。

675・676 は EP3 の出土遺物である。675 は土師質土器碗の底部。高台は低い逆三角形を呈する。焼成不良により調整不明瞭。胎土は粗く、浅黄色の色調を呈することから吉備系土師質土器碗とみられる。山本編年Ⅲ - 3 期 (14 世紀前葉) 頃に位置付けられる。676 は白磁碗の上部で、小片のため復元径過小。口縁は小さく外反し端部を尖らせる。体部外面にヘラケズリか。わずかに釉とびを伴う。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗の V 類 (11 世紀後半～12 世紀前半) または VIII 類 (12 世紀中頃～13 世紀前半) の可能性がある。

677 は EP5 の出土遺物で、土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土は精良であるが、5mm 大の赤色粒を含む。軟質焼成品。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの、吉備系碗 (675) の年代から 13 世紀後半～14 世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 101 号 (Ⅱ地区 SA1101) (第 206 図)

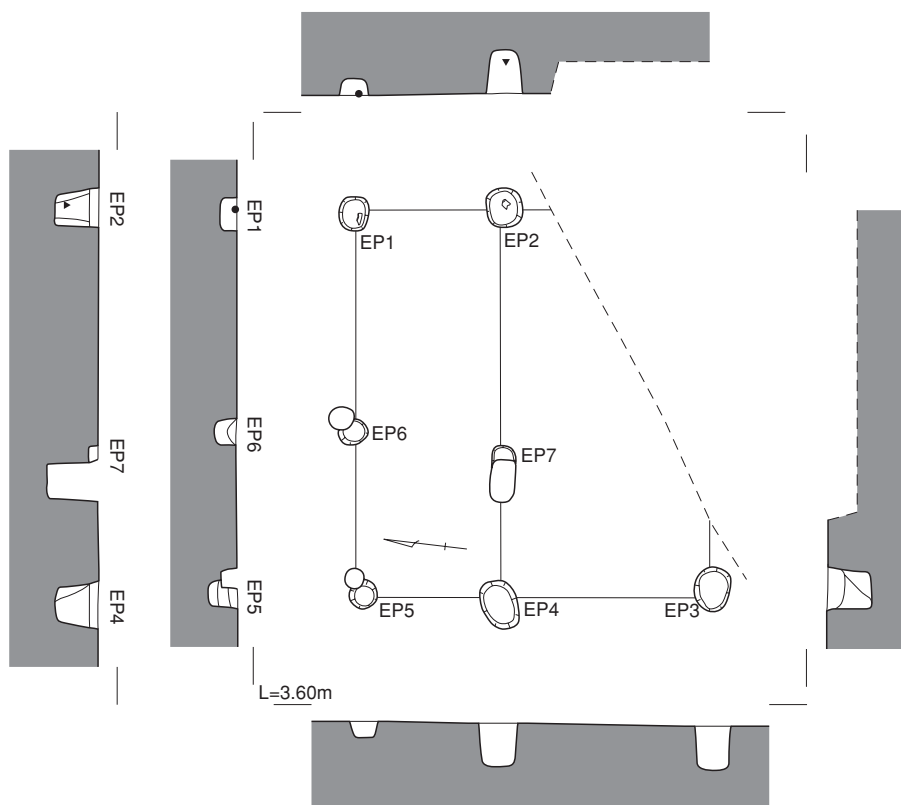
I - 9 区南東隅、Ⅱ - 13 区西部北端にまたがって位置する。p・q 10・11 グリッドに位置する。東西 3 間 (5.3 m) 南北 2 間 (4.1 m) 床面積 21.7m²、7 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N83° E を向く。柱穴は円形または不整形円形を呈し、径 30～56cm、深度 17～56cm を測る。柱痕は EP3 で確認。

遺物は EP1・3・4・6・7 から、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、が出土するが実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられる。

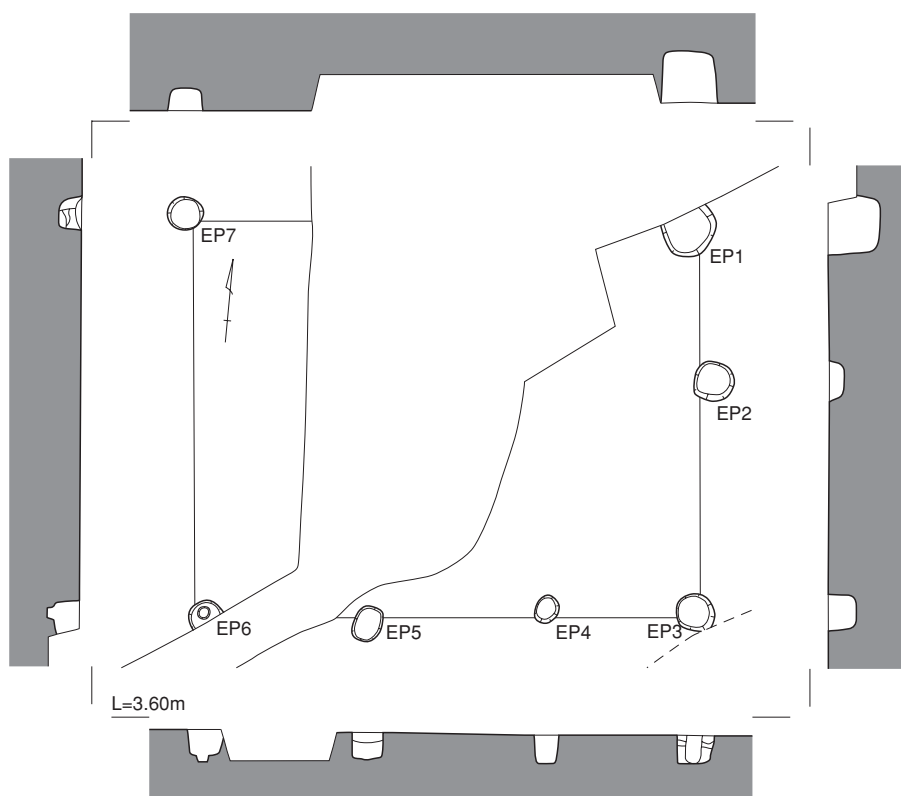
掘立柱建物 102 号 (Ⅱ地区 SA1102) (第 207 図)

I - 9 区南東隅、Ⅱ - 13 区西部北端にまたがり、p・q 9～11 グリッドに位置する。「宮ノ本遺跡 I」の整理作業時に I 地区 SA1070 として報告したが、本書ではⅡ地区の遺構として扱う。東西 2 間 (5.2 m) 南北 2 間 (4.0 m) 床面積 20.8m²、6 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N90° WE を向く。柱穴は円形・不整な隅丸方形あるいは不整形を呈し、径 30～48cm、深度 10～40cm を測る。

遺物は EP1・4・5 でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片、片岩礫、が出土しているが実測可能な遺物はない。遺構の年代について、決定の根拠となる遺物を欠くが、主軸が SA1104 と同じ正方位を向くことから 13 世紀前半、あるいは中世末～近世初頭の可能性も考えられる。



第 205 図 II - 13 区 SA1100 遺構実測図



第 206 図 II - 13 区 SA1101 遺構実測図



掘立柱建物 103号 (Ⅱ地区 SA1103) (第208図)

I-9区南東隅、II-13区西部北端にまたがり、o・p 9・10グリッドに位置する。「宮ノ本遺跡I」の整理作業時にI地区SG1018として報告したが、本書ではII地区の掘立柱建物として扱う。東西3間(6.3m)南北2間(3.8m)床面積23.9㎡、7基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸でN88°Eを向く。柱穴は円形あるいは不整形円形を呈し、径26～41cm、深度9～40cmを測る。

遺物はEP1～4・6・7でみられ、土師質土器片・供膳具・杯・鍋、瓦器碗、が出土しているが実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代とみられる。

掘立柱建物 104号 (Ⅱ地区 SA1104) (第209・215図)

II-13区西部北側、o・p 11・12グリッドに位置する。東西3間(7.2m)南北2間(3.9m)床面積28.1㎡、11基の柱穴をもつ総柱建物である。東西主軸でN90°WEを向く。柱穴は円形あるいは不整形円形を呈し、径20～40cm、深度9～30cmを測る。柱痕はEP9で確認。遺物はEP1・7・8・11でみられ、土師質土器供膳具・鍋・土錘、瓦器碗、白磁碗か、片岩礫、が出土している。

678はEP11の出土遺物で瓦器碗の底部である。高台断面は逆三角形を呈し、高さを保つ。底径が大きく胎土に絹雲母を含むことから在地産とみられる。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着不良。本品は胎土分析を行い(胎土分析試料No.5)、蛍光X線分析では和泉型の領域から外れ、実体顕微鏡観察でも絹雲母が確認されている。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半と考えられる。

掘立柱建物 105号 (Ⅱ地区 SA1105) (第210・216図)

II-13区西部中央南寄り、m・n 11～13グリッドに位置する。東西6間(7.6m)南北2間(3.6m)床面積27.4㎡(庇部含めて東西7間(8.2m)南北4間(4.8m)39.4㎡)、28基の柱穴をもつ南・北・西の三面庇付きの側柱建物である。主軸でN76°Eを向く。柱穴は円形または不整形円形を呈し、径10～50cm、深度10～40cmを測る。柱痕はEP9・18・24で確認し、EP19・26・28に柱痕を伴う可能性あり。

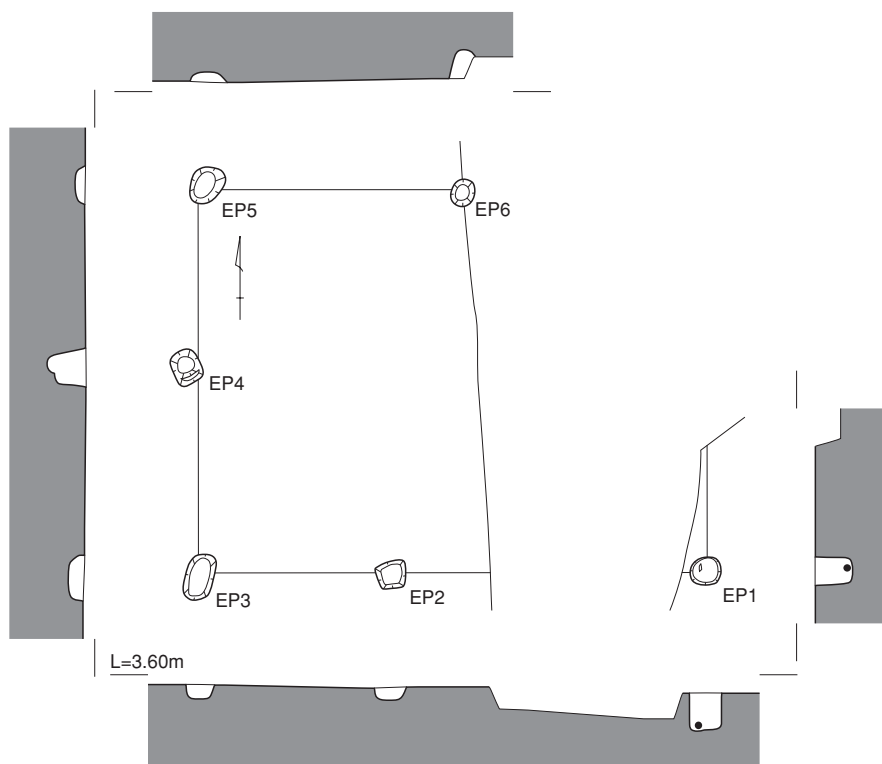
遺物はEP2・3・5～9・13・14・16～26・28でみられ、弥生土器小型壺、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具(回転糸切りほか)・杯・煮炊具・鍋・碗・土錘、須恵質土器甕、瓦器片・碗、鉄製品片、が出土。

679はEP8から出土した弥生土器小型壺である。口縁は短く直立し、端部は強いヨコナデによって尖らせる。最大径は体部中央よりやや上となる。底部は平底である。体部外面に指頭圧痕を残し、体部内面上位は縦位のユビナデで仕上げる。焼成不良により磨耗しており、ヘラミガキ等は確認できない。胎土に2～5mm大の結晶片岩を含む。弥生時代後期末の第VI様式期に位置付けられる。

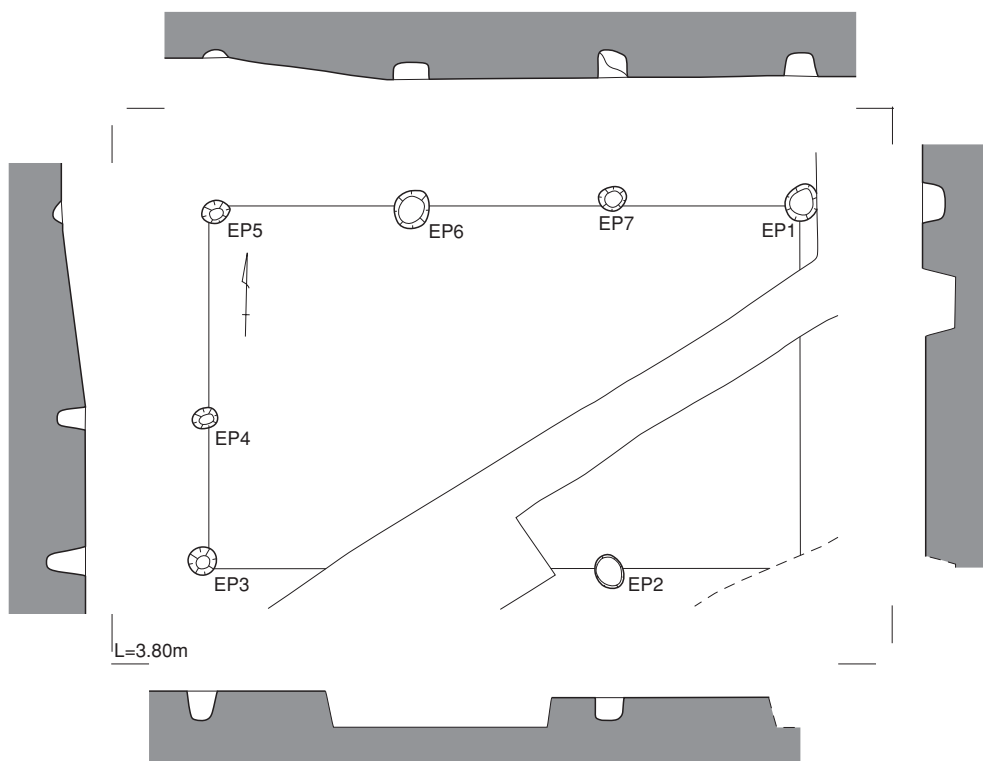
680・681はEP23の出土遺物である。680は瓦器碗で底部を欠く。軟質焼成品で、磨耗により調整不明瞭であるが、内面に粗い横位のヘラミガキが確認できる。炭素吸着は外面～口縁内面が良好で、以下炭素の吸着はみられない。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)に相当。

681は土師質土器碗の底部。高台断面はしっかりとした逆台形状。焼成不良により磨耗。酸化炎焼成するが内面はわずかに炭素付着することから黒色土器A類碗または瓦器碗の可能性も考えられる。胎土・色調から吉備系とは考えにくい。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀末～13世紀前半と考えられる。

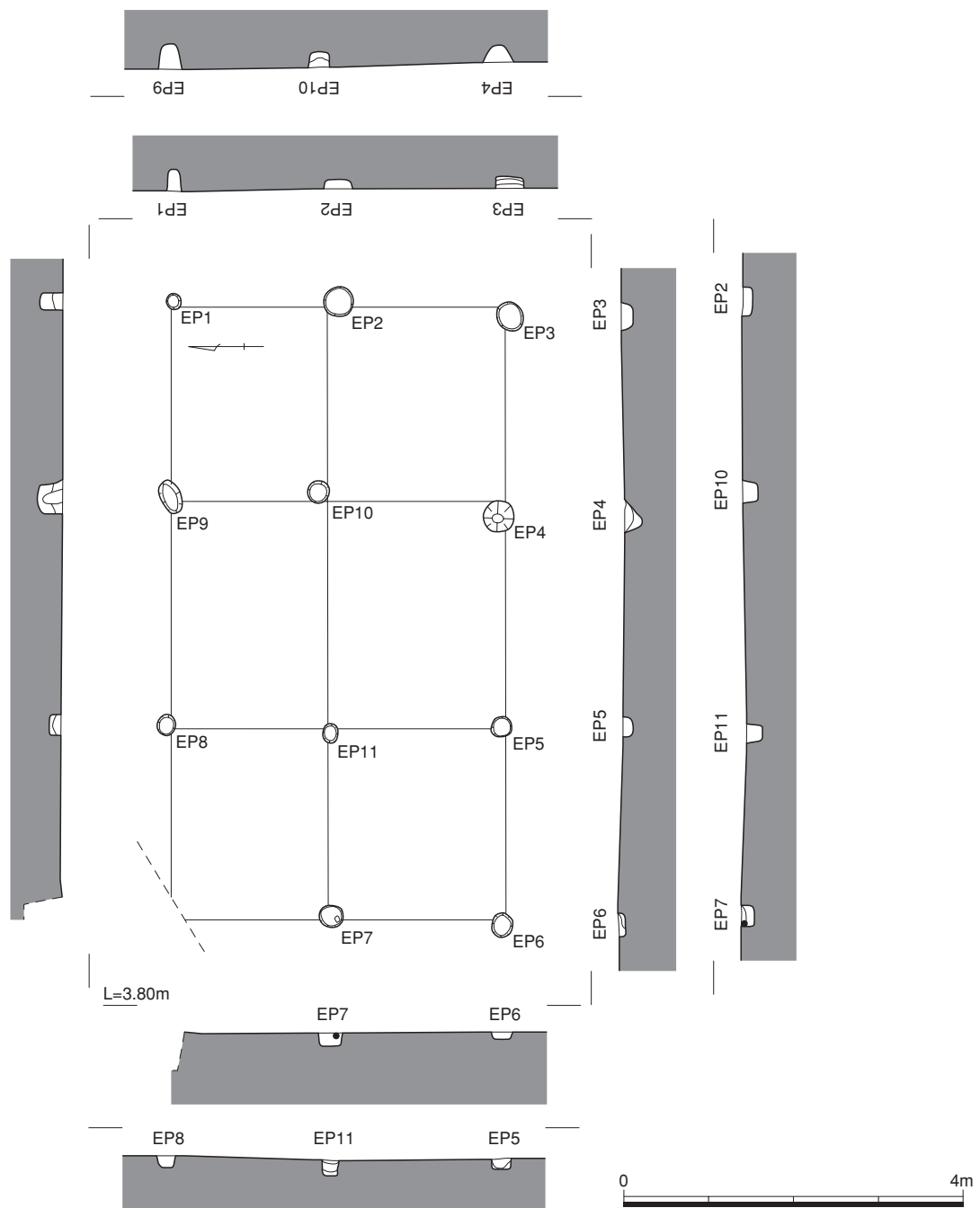


第 207 図 II - 13 区 SA1102 遺構実測図



第 208 図 II - 13 区 SA1103 遺構実測図



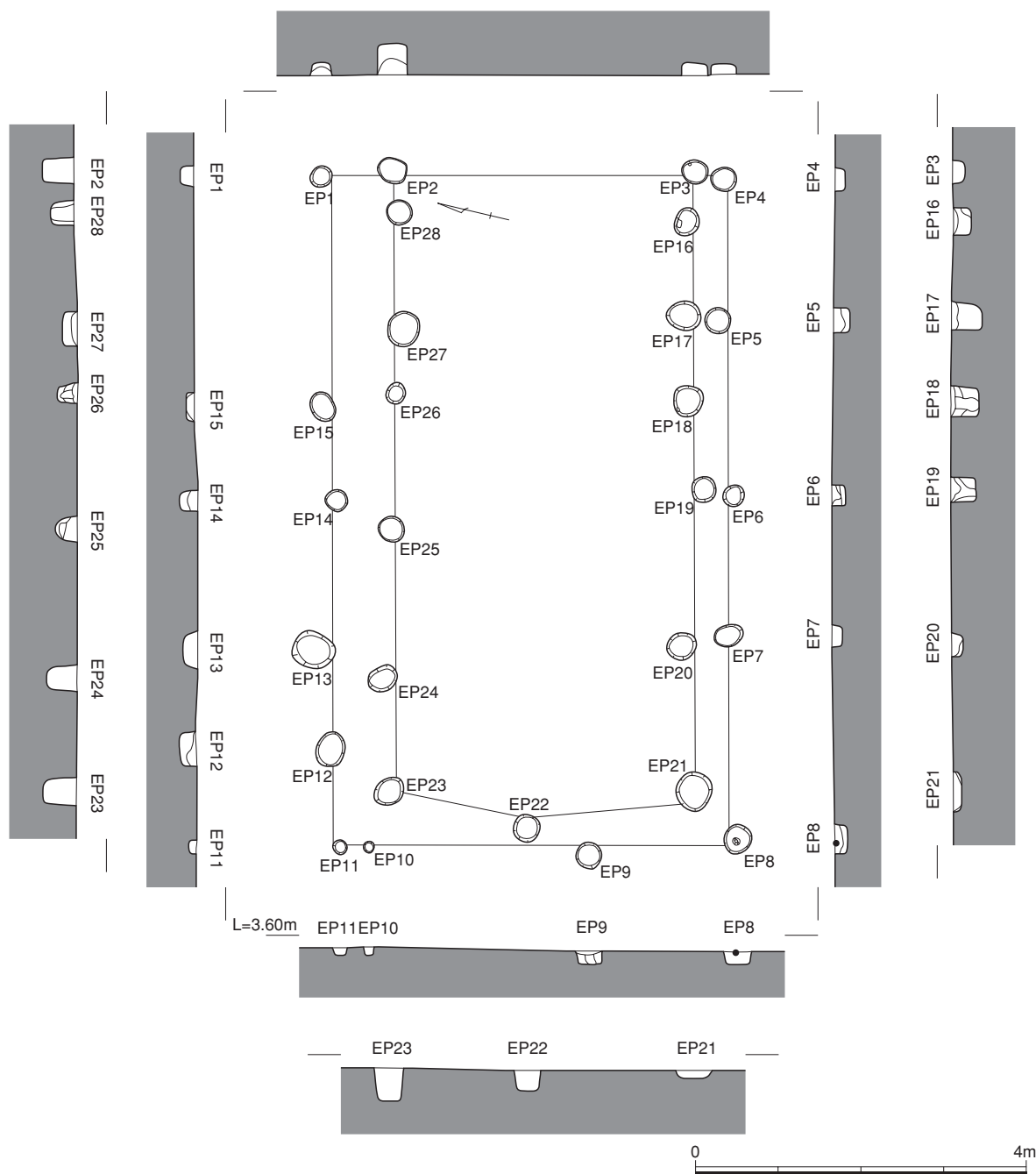


第209図 II-13区 SA1104 遺構実測図

掘立柱建物 106号 (II地区 SA1106) (第211・217図)

II-13区西部中央、m・n 9～11グリッドに位置する。東西4間(7.7m)南北2間(4.2m)床面積32.3㎡、14基の柱穴をもつ掘立柱建物である。東西主軸でN87°Eを向く。柱穴は不整円形を呈し、径16～64cm、深度6～36cmを測る。柱痕はEP5・6で確認。遺物はEP1・4～9・11・13・14でみられ、黒色土器片(A類)、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具・鍋・土錘・釜、瓦器片・椀、鉄製品片、片岩礫・チャート礫、が出土。

682はEP4の出土遺物。板状鉄製品で、器種不明。683はEP5の出土遺物で、土師質土器釜の把手部あるいは鍋の口縁部か。端部に近い位置に、外面からの焼成前穿孔を施す。軟質焼成気味。



第210図 II-13区 SA1105 遺構実測図

684はEP7から出土した土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。

685はEP9出土の瓦器椀下半部。断面三角形のしっかりとした高台をもつ。見込みに平行ヘラミガキ暗文。炭素吸着良好。II-3期（12世紀後葉）前後とみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半と考えられる。

掘立柱建物 107 号 (Ⅱ地区 SA1107) (第 212 図)

Ⅱ - 13 区西端部中央、i・m 9・10 グリッドに位置する。東西 3 間 (5.4 m) 南北 2 間 (3.7 m) 床面積 20.0㎡、8 基の柱穴をもつ側柱建物である。東西主軸で N75° E を向く。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径 26 ~ 34cm、深度 6 ~ 34cm を測る。柱痕は EP4・8 で確認。

遺物は EP1・3・4・8 でみられ、黒色土器片 (B 類)、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、が出土するが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀代と考えられる。

土坑 1130 号 (Ⅱ地区 SK11130) (第 218・261 図)

Ⅱ - 13 区南東隅、t 6 グリッドに位置し、西側を SP14373 と SP14374 に切られる。長軸 142cm 短軸 140cm 深度 31cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は方形で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器鍋、瓦器椀・皿、白磁碗、板状鉄製品、が出土している。

686 は瓦器皿。口縁内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃とみられる。687 は瓦器椀の底部で、高台はしっかりとした逆台形状を呈する。軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) 前後に位置付けられる。

688 は白磁皿で、底部を欠く。口縁は端反りに作る。体部内面に横位の浅い沈線を引く。内面~体部外面上位に施釉する。大宰府分類白磁皿Ⅳ - 1 a 類 (11 世紀後半~12 世紀前半) またはⅢ類 (12 世紀中頃~後半) とみられる。

689 は土師質土器鍋の上部片である。口縁は若干肥厚し、端部を丸く作る。外面煤付着。胎土は粗く金雲母を含むことから、瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

690 は板状の鉄製品で、鉄鍋の口縁部片とみられる。端部は上方にわずかに引き上げ、頸部はくの字に屈曲する。X 線撮影により径 2mm の孔が確認できるが、人為的な穿孔であるかは不明。

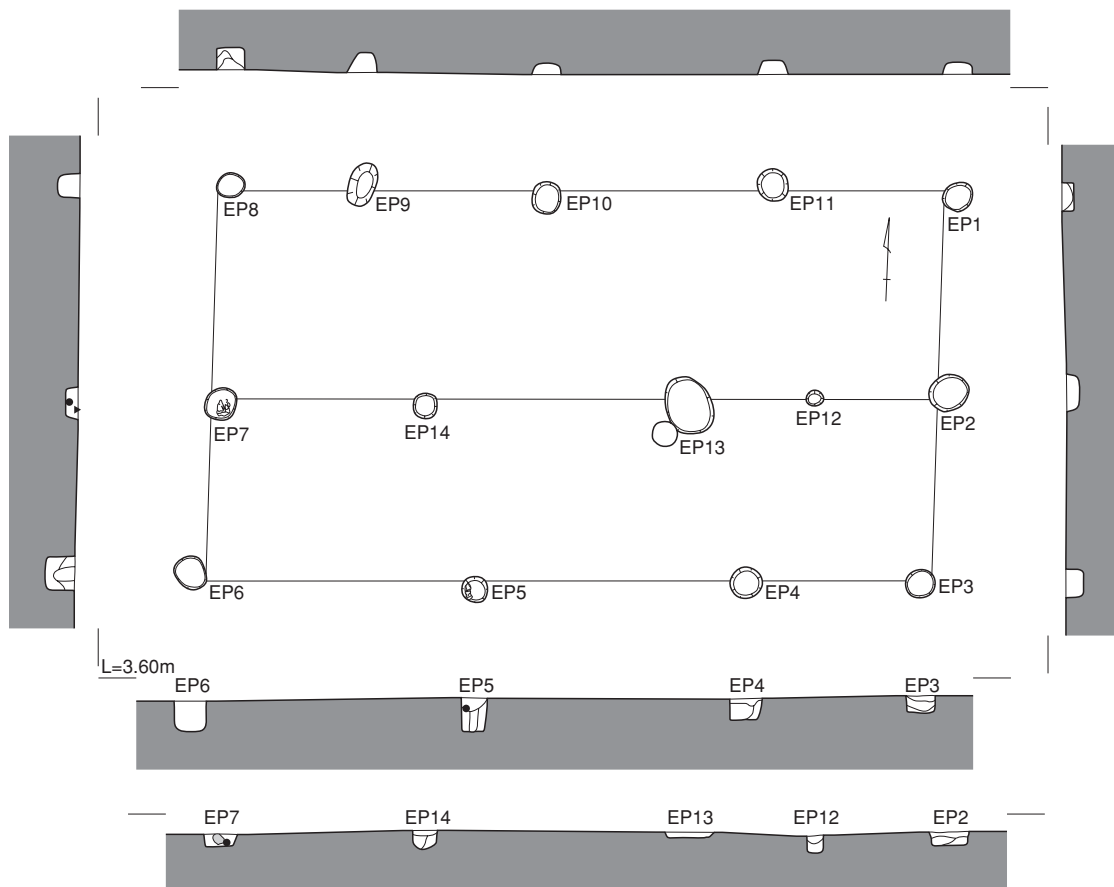
土坑 1132 号 (Ⅱ地区 SK11132) (第 219・262 図)

Ⅱ - 13 区南東隅、t 6 グリッドに位置する。長軸 140cm 短軸 120cm 深度 46cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は方形で、埋土は 4 層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片、須恵質平瓦、白磁皿・碗、鉄滓、が出土している。

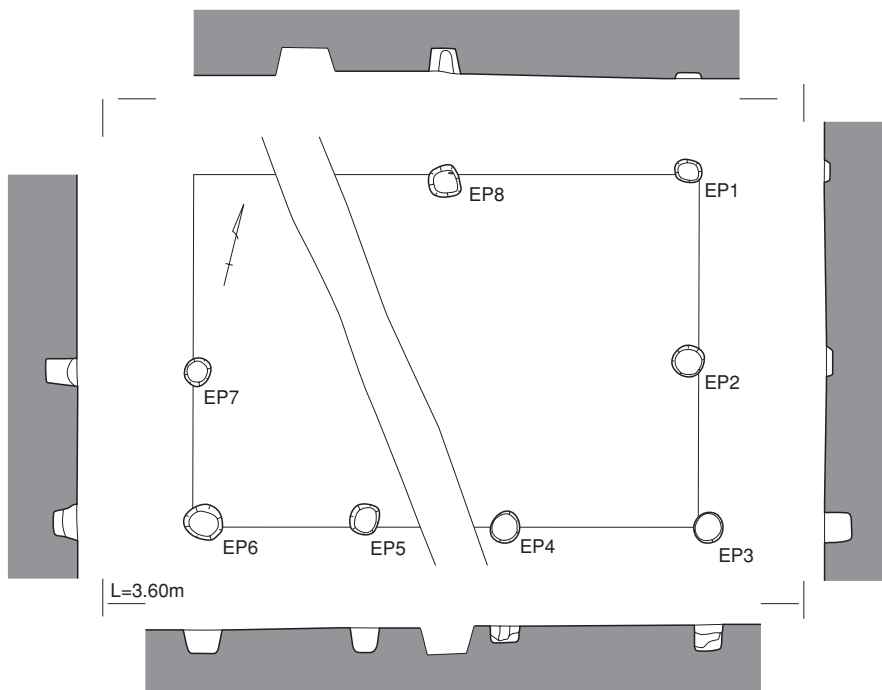
691 は瓦器皿。口縁外面~内面に横位のヘラミガキを施す。底部外面に接合痕を確認。炭素吸着良好で、口縁内外面のみ重焼により吸着不良。和泉型瓦器Ⅱ期後半~Ⅲ期前半頃とみられる。692 は瓦器椀の底部で、高台はやや低い逆台形状を呈する。軟質焼成により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) 前後とみられる。

693 は白磁皿の口縁部。口縁はわずかに端反りに作り、端部を尖らせる。わずかに釉とびあり。大宰府分類白磁皿Ⅲ類 (12 世紀中頃~後半) とみられる。694 は白磁碗の上半部。口縁を玉縁に作る。わずかに釉とびあり。大宰府分類白磁碗Ⅳ類 (11 世紀後半~12 世紀前半) に相当。

695 は土師質管状土錘。軟質焼成で磨耗する。胎土にチャートを含む。696 は須恵質の平瓦。凹面に布目圧痕、凸面は板ナデを施すとみられる。焼成良好だが、炭素吸着なし。

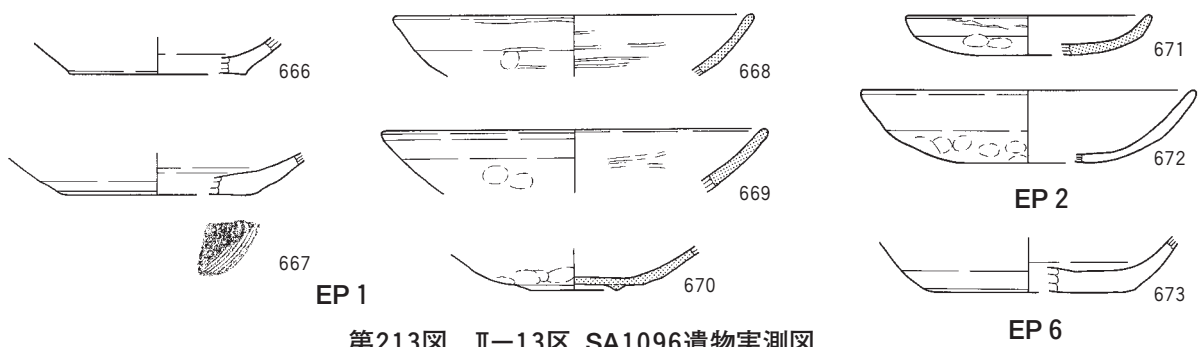


第 211 图 II - 13 区 SA1106 遺構実測図

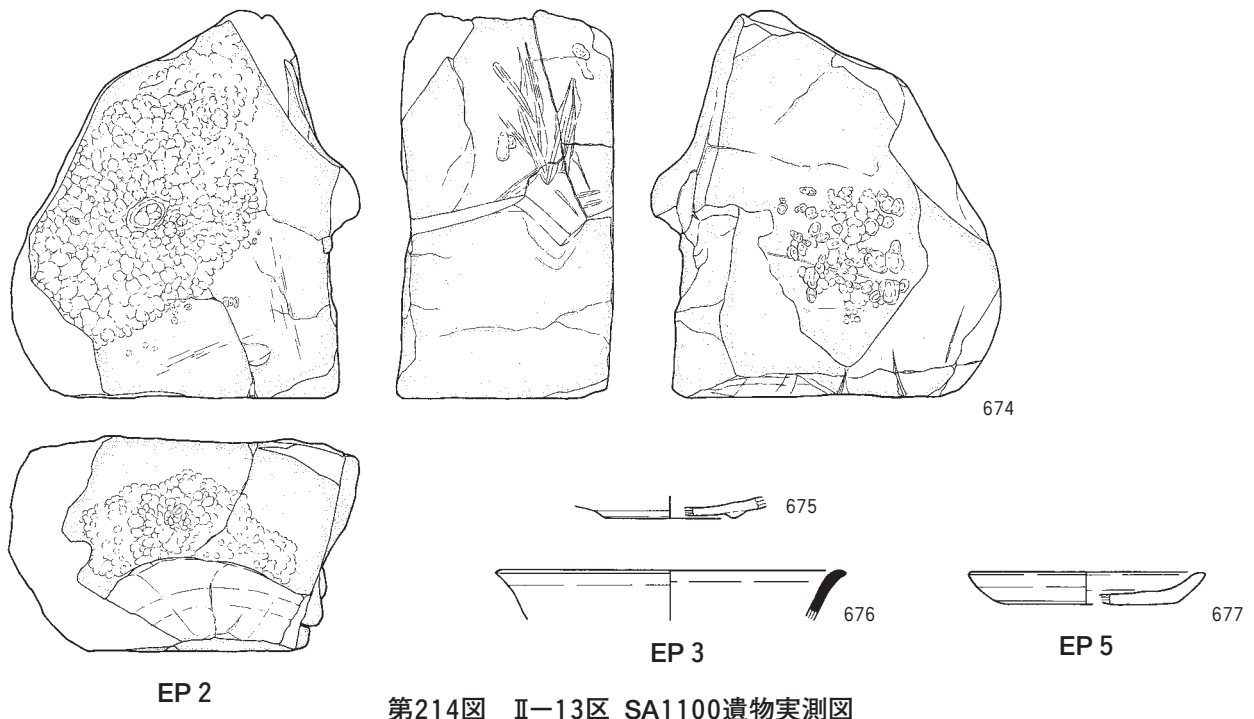


第 212 图 II - 13 区 SA1107 遺構実測図



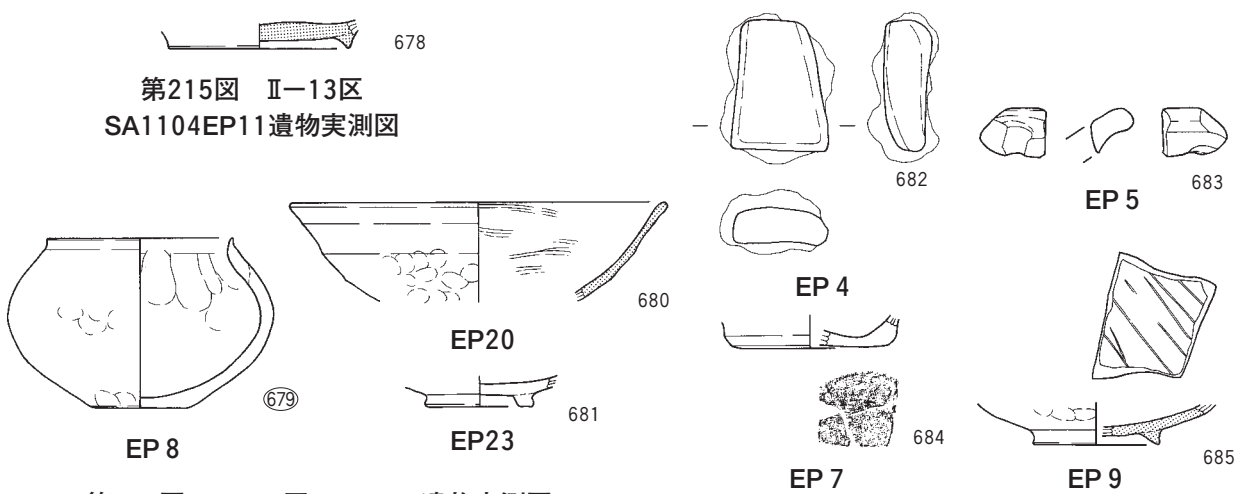


第213図 II-13区 SA1096遺物実測図



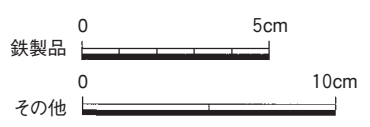
第214図 II-13区 SA1100遺物実測図

第215図 II-13区 SA1104EP11遺物実測図



第216図 II-13区 SA1105遺物実測図

第217図 II-13区 SA1106遺物実測図



土坑 1139 号 (Ⅱ地区 SK11139) (第 220・263 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t 5 グリッドに位置し、東側を SK11140 に切られる。長軸残存長 110cm 短軸 99cm 深度 18cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、須恵器壺、土師質土器杯（回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・椀・皿、鉄釘・鏝か、が出土。697 は鉄釘とみられ、残存部中位ではほぼ直角に折れ曲がる。両端部を欠く。

土坑 1140 号 (Ⅱ地区 SK11140) (第 221・264 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t 5 グリッドに位置する。長軸 98cm 短軸 92cm 深度 39cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・皿・鍋、須恵質土器甕、瓦器椀・皿、が出土している。

698 は完形の瓦器椀。高台は粘土紐を粗雑な輪状に貼り付けたもので、断面は潰れて扁平である。器壁は厚く、口縁外面のヨコナデはやや弱い。体部外面に横位に細かく連続した指頭圧痕を残す。内面は螺旋状のヘラミガキを外側から中心に向けて逆時計回りに施す。炭素吸着良好だが、体部外面は重焼により部分的に吸着不良。焼成良好。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）に相当する。

土坑 1141 号 (Ⅱ地区 SK11141) (第 222・265 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t 5 グリッドに位置する。長軸 104cm 短軸 102cm 深度 40cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は方形で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢か・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、白磁碗、結晶片岩礫、が出土している。

699 ~ 701 は瓦器皿である。699 は底部の殆どを欠く。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着・焼成ともに良好。700 は底部に円形の粘土板を貼り付け円盤状高台様に作るが、回転台成形ではなく底部外面に指頭圧痕を残す。見込みには密なヘラミガキを施す。炭素吸着良好。701 は底部中央を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着良好。699・700 は和泉型瓦器Ⅲ期前半頃、701 は同Ⅲ期頃とみられる。

702 は瓦器椀の上半部である。歪みにより復元径はやや過大。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面良好、外面やや不良である。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 ~ 3 期（12 世紀末 ~ 13 世紀前葉）に相当する。

703 は土師質土器鍋の上部片である。口縁端部はわずかに拡張し、端面を平坦に作る。胎土に金雲母や花崗岩を含む。瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

土坑 1146 号 (Ⅱ地区 SK11146) (第 223・266 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t 4 グリッドに位置し、北側を SA1087EP06 に切られる。長軸 68cm 短軸 64cm 深度 13cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は不整な逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器椀、が出土している。

704 は遺構底部から出土した東播系須恵質土器捏鉢の上部片で、片口部にあたる。口縁端部をわずかに上方に拡張する。口縁外面に重焼による炭素付着。森田編年第Ⅱ期第 1 段階（12 世紀中葉 ~ 後半）に相当。

土坑 1147号 (Ⅱ地区 SK11147) (第224・267図)

Ⅱ-13区東部南側、t 4グリッドに位置する。長軸98cm短軸86cm深度18cmを測る不整円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器片・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、が出土している。

705・706は瓦器椀の上部である。705は小片のため復元径過大か。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。706は内面に横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成により不明瞭。炭素吸着良好。いずれも和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。

707は土師質土器鍋の上半部片。口縁内面にヨコハケ、体部内面に斜位のハケを施し、外面に縦位・斜位のハケを施す。ハケは一様に粗く、同じ原体を使用する。外面煤付着。胎土に金雲母や角閃石を含むことから、瀬戸内方面からの搬入品とみられ、ハケ調整から吉備産の可能性あり。

708は東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁端部は拡張しない。外面わずかに炭素付着。焼成良好。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅰ期第1段階(11世紀後半)に相当。

土坑 1162号 (Ⅱ地区 SK11162) (第225・268図)

Ⅱ-13区東部南側、s 2・3グリッドに位置する。長軸99cm短軸82cm深度25cmを測る隅丸長方形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。長軸が短いことから土壙墓としなかった。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器供膳具、瓦器片・椀、瓦質土器羽釜脚部、が出土。

709は瓦器椀の上半部で、器壁がやや厚い。焼成不良によりきわめて軟質で、内面の調整は不明。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面なし、外面はやや不良。胎土にチャートとみられる粒子を含むが不確実。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に位置付けられる。

土坑 1189号 (Ⅱ地区 SK11189) (第226・269図)

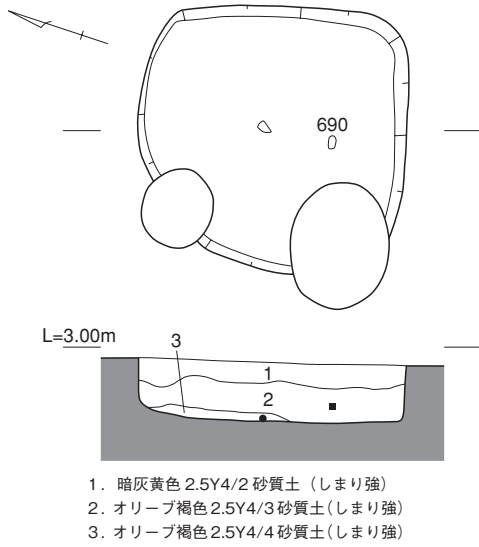
Ⅱ-13区東部南側、s 1グリッドに位置する。長軸140cm短軸87cm深度50cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。土壙墓の可能性も考えられる。遺物は、黑色土器椀(A類)、土師質土器片・供膳具・皿(ともに回転糸切り)・煮炊具・鍋、瓦器片、鉄製品片・鉄釘、が出土。

710は鉄釘である。頂部を叩いて伸ばしL字に折り曲げて頭部を作る。先端部は屈曲し大きく変形する。711は黑色土器A類椀の底部である。高台は逆台形状で、底径は大きい。軟質焼成で磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。内面の炭素吸着は良好。

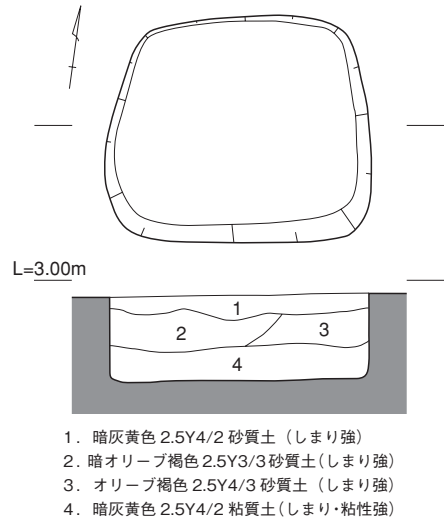
土坑 1215号 (Ⅱ地区 SK11215) (第227・270図)

Ⅱ-13区中央部北端、t 18グリッドに位置する。長軸147cm短軸100cm深度15cmを測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。浅く、底面に起伏があることから土壙墓から除外した。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、鉄釘、が出土している。

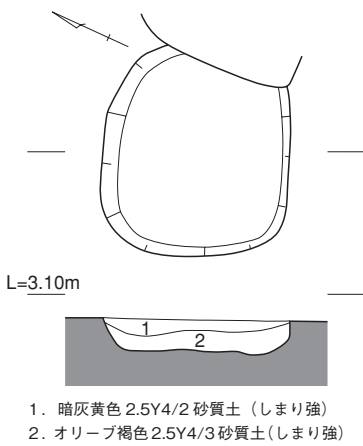
712は瓦器椀の上半部。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期(13世紀前葉～中葉)頃に相当する。713は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁を上方にわずかに拡張する。口縁外面は強いナデによって凹線状に作り、重焼により炭素お



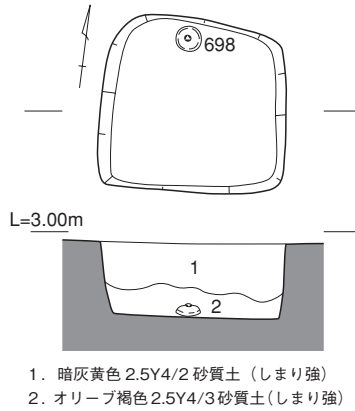
第 218 図 II - 13 区 SK11130 遺構実測図



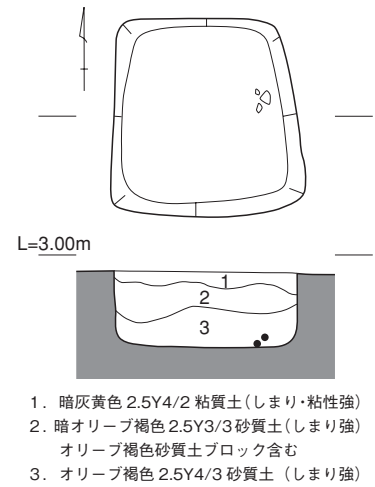
第 219 図 II - 13 区 SK11132 遺構実測図



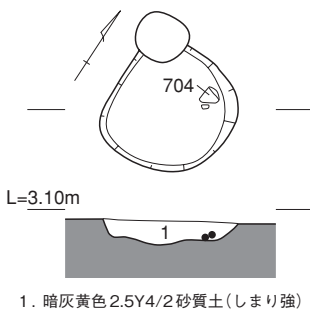
第 220 図 II - 13 区 SK11139 遺構実測図



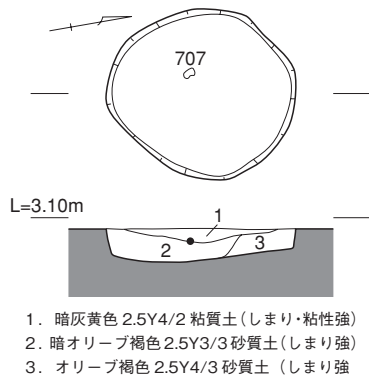
第 221 図 II - 13 区 SK11140 遺構実測図



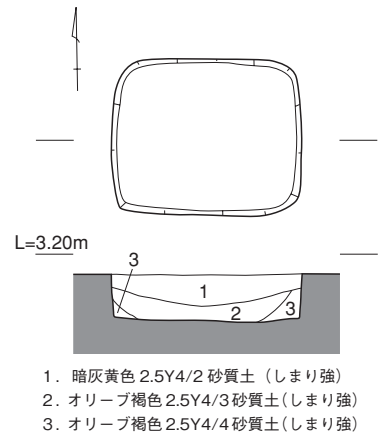
第 222 図 II - 13 区 SK11141 遺構実測図



第 223 図 II - 13 区 SK11146 遺構実測図



第 224 図 II - 13 区 SK11147 遺構実測図



第 225 図 II - 13 区 SK11162 遺構実測図



よび自然釉が付着。森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）に相当。714は鉄釘である。下部がくの字に屈曲変形する。両端部を欠損。

土坑 1219号（Ⅱ地区 SK11219）（第228・271図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、s 18グリッドに位置する。長軸110cm短軸83cm深度13cmを測る不整な楕円形の土坑である。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切りほか）・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片、青磁碗、が出土している。

715・716は回転台成形の土師質土器皿である。715は底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成で磨耗気味。716は磨耗により切り離し技法不明。焼成不良で軟質。胎土に在地花崗岩を含む。717は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁端部を上方にわずかに拡張する。口縁外面は重焼により自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）に相当。

土坑 1225号（Ⅱ地区 SK11225）（第229・272図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、s 18グリッドに位置し、北側をSK11224に切られる。長軸残存長104cm短軸70cm深度10cmを測る不整な隅丸長方形の土坑。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯（回転糸切りほか）・煮炊具、瓦器片・椀、常滑甕、壁土か、が出土。

718は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。軟質焼成で磨耗により調整不明瞭。719は土師質土器杯で、口縁を欠く。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成で磨耗により調整不明瞭。ともに遺構埋土第1層から出土。

土坑 1231号（Ⅱ地区 SK11231）（第230・273図）

Ⅱ-13区中央部南側、q 18グリッドに位置し、東側をSK11230に西側をSA1096EP02に切られる。長軸96cm短軸78cm深度32cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・椀・皿、瓦質土器羽釜、青磁碗、が出土。

720は瓦器皿で、底部中央を欠く。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキが確認できない。炭素吸着なし。和泉型瓦器Ⅳ期頃か。721は瓦質羽釜の上部片。口縁はやや高く内傾する。鏝部は貼り付け。口縁・鏝の両端部とも方形を意識する。下半部は残存しないが脚部を有するタイプであろう。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。炭素吸着は口縁内面～外面にかけてやや不良、内面不良。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられ、13世紀代の年代が与えられる。722は土師質管状土錘。焼成やや不良。

土坑 1237号（Ⅱ地区 SK11237）（第231・274図）

Ⅱ-13区中央部北端、t・a 17・18グリッドに位置する。長軸90cm短軸70cm深度29cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。土壙墓とするには長軸が短い。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・椀、鑿、が出土。

723は残存長8.1cmの棒状鉄製品で、下方に向けて細る。鑿か。両端部を欠く。

土坑 1246 号 (Ⅱ地区 SK11246) (第 232・275 図)

Ⅱ - 13 区中央部北端、t 16・17 グリッドに位置し、東側を SK11245 に切られる。長軸 136cm 短軸残存長 50cm 深度 23cm を測る不整楕円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・皿 (回転糸切り)、瓦器片・椀、鉄釘か・楔、が出土。

724 は土師質土器皿で、口径 6.7cm の小型品。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良で磨耗気味。胎土にチャートを含む。725 は鉄製の楔。多角錐形を呈する。先端部はわずかに欠損か。

土坑 1251 号 (Ⅱ地区 SK11251) (第 233・276 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 17 グリッドに位置する。長軸 154cm 短軸 80cm 深度 24cm を測る隅丸長方形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層。やや浅いため土壙墓から除外した。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・杯・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、が出土。

726 は第 2 層から出土した回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。器壁は薄い。焼成不良できわめて軟質であり、磨耗著しい。胎土に在り花崗岩を含む。727 は瓦器椀の上半部である。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。

728・729 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。728 は第 1 層から出土。口縁端を上方に拡張させる。焼成不良で、酸化炎焼成する。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第 2 段階 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。728 の内面下位は使用により磨耗。

土坑 1255 号 (Ⅱ地区 SK11255) (第 234・277 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s・r 17 グリッドに位置する。長軸 88cm 短軸 74cm 深度 21cm を測る不整楕円形の土坑である。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師器羽釜、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀・皿、鉄釘、が出土している。

730 は鉄釘。頂部を叩いて伸ばし、屈曲させて頭部を作る。下方にかけて変形し、先端部を欠く。

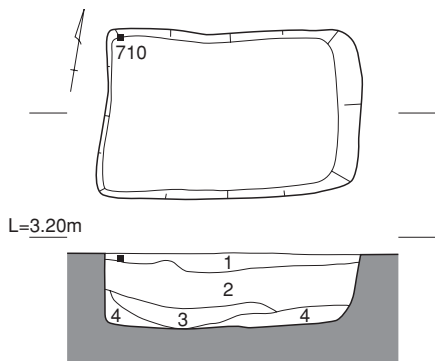
土坑 1258 号 (Ⅱ地区 SK11258) (第 235・278 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 17・18 グリッドに位置し、東側を SP14891 に切られる。長軸 160cm 短軸 94cm 深度 30cm を測る不整な隅丸長方形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。平面形が不整形であることから土壙墓から除外。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・皿、青磁碗 (蓮弁)、白磁碗、が出土している。

731 は白磁碗の上半部で、口縁を玉縁に作る。体部外面にわずかな釉とびを伴う。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類 (11 世紀後半～12 世紀前半) に相当する。732 は土師質土器鍋の上部である。頸部外面にタテハケを施し、図化できていないが口縁内面に横位の板ナデもしくは微細なハケを施す。外面煤付着。胎土に金雲母と角閃石を含むため、瀬戸内方面からの搬入品とみられ、吉備系の可能性も考えられる。

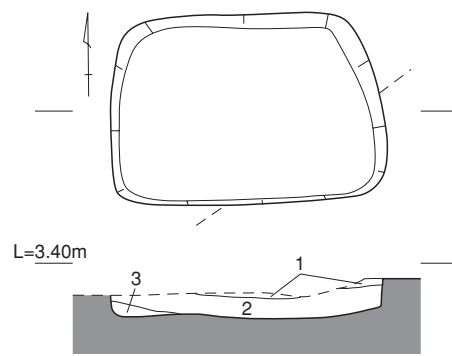
土坑 1261 号 (Ⅱ地区 SK11261) (第 236・279 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 17 グリッドに位置し、南側を SK11260 に切られる。長軸残存長 56cm 短軸



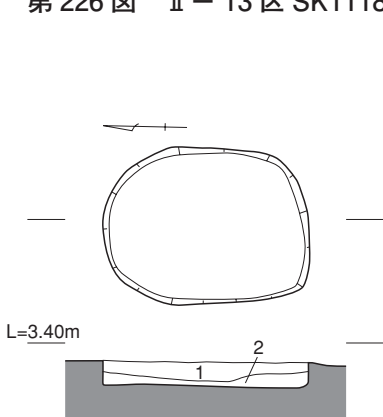
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 226 図 II - 13 区 SK11189 遺構実測図



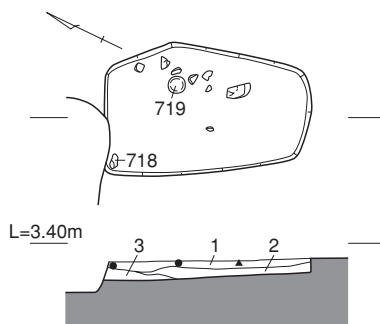
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 粘質土砂質土 (しまり強)

第 227 図 II - 13 区 SK11215 遺構実測図



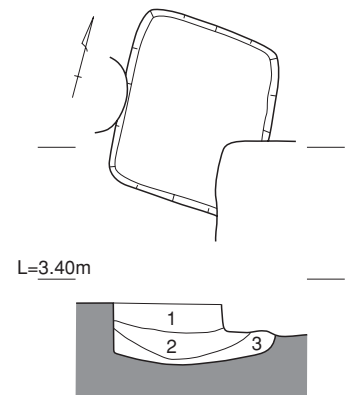
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 228 図 II - 13 区 SK11219 遺構実測図



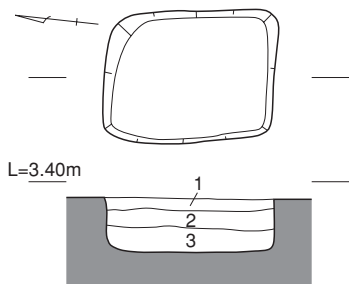
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 229 図 II - 13 区 SK11225 遺構実測図



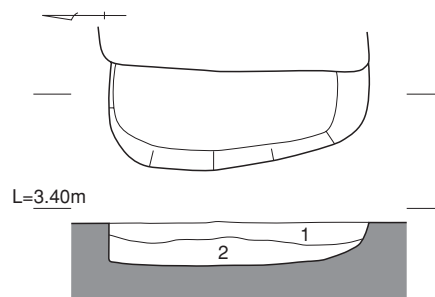
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 230 図 II - 13 区 SK11231 遺構実測図



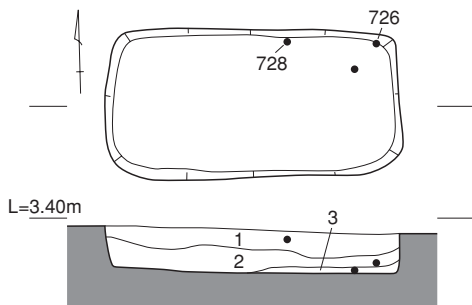
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 231 図 II - 13 区 SK11237 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 232 図 II - 13 区 SK11246 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 233 図 II - 13 区 SK11251 遺構実測図



60cm深度 30cmを測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・皿か杯・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、粘板岩製砥石、が出土。

733は土師質土器杯か皿の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成により磨耗気味。734は灰白色を呈する粘板岩製の砥石。肌理細かい。3面を使用するが、側面は使用感に乏しい。

土坑 1262号（Ⅱ地区 SK11262）（第237・280図）

Ⅱ-13区中央部北側、s・r 17グリッドに位置する。長軸86cm短軸61cm深度25cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、鉄製品片・鉄釘・鉄鏟、が出土。

735は鉄鏟で、ほぼ完存する。長頸の鏟で、全長は11.6cmを測る。頸は上方に向かうにつれて幅を広げ、剣菱形に作る。頸の基部を拡大させ、矢柄上端のストッパーとしての役割を果たす。茎は下方に向けて先細りとなる。

土坑 1263号（Ⅱ地区 SK11263）（第238・281図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、r 17・18グリッドに位置する。長軸120cm短軸82cm深度36cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、底面はわずかに起伏あり。埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（A類）、土師質土器片・供膳具・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、鉄釘・鉄滓・楔、が出土している。

736は土師質土器杯の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。外面に炭素付着。胎土に在地花崗岩を含む。737は瓦器椀の上半部である。小片・歪みのため復元径過大。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期（12世紀後葉）に相当。738は多角錐形の鉄製品で、先端部は鈍く尖らせる。楔であろう。

土坑 1267号（Ⅱ地区 SK11267）（第239・282図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、r 17グリッドに位置する。長軸76cm短軸72cm深度25cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で南に段をもつ。埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋、須恵質土器片、瓦器片、鉄製品片・スラグ、が出土。

739は板状鉄製品片で、厚みは6mmを測る。亀甲状の亀裂があり、鋳造品とみられる。鉄鍋等の一部であろうか。

土坑 1280号（Ⅱ地区 SK11280）（第240・283図）

Ⅱ-13区中央部南寄り、q 17・18グリッドに位置する。長軸158cm短軸94cm深度16cmを測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（A類）、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器片・椀・皿、が出土している。

740は土師質土器皿で、底部中央を欠く。回転台成形であるが、焼成不良により磨耗のため切り離し技法不明。741は瓦器皿で、底部中央を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。和泉型瓦器Ⅲ～Ⅳ期前半頃とみられる。

742は黒色土器A類椀の上半部。外面は磨耗著しく調整不明。内面は横位・斜位の密なヘラミガキを

施す。内面～口縁外面にかけて炭素吸着良好。胎土に角閃石・花崗岩の疑いがある粒子を含む。

743は瓦器碗の上半部。小片・歪みにより復元径過大。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

土坑 1285号（Ⅱ地区 SK11285）（第241・284図）

Ⅱ－13区中央部南側、p・q 17グリッドに位置する。長軸174cm短軸116cm深度13cmを測る不整な隅丸方形土坑。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。遺物は、黒色土器碗（A類）、須恵器貯蔵具・高杯脚部、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具、瓦器片・碗、青磁碗、鉄滓、が出土。

744は須恵器高杯の脚部。円柱状の脚部に2条の沈線を挟んで2段の透かしを2方向に穿つ長脚形態で、その上半部分の破片。脚部の短脚化傾向がみられることから、TK43型式にあたとみられる。6世紀後半。

土坑 1290号（Ⅱ地区 SK11290）（第242・285図）

Ⅱ－13区中央部南側、p 17グリッドに位置し、南側をSK11289に切られる。長軸110cm短軸108cm深度16cmを測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層。遺物は、黒色土器碗（B類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋・碗、瓦器片、鉄釘・鉄鏃、が出土。

745は鉄鏃である。長頸の鏃とみられる。茎の上端はやや絞る。頸の基部は拡大させ、矢柄上端のストッパーとしての役割を果たす。頸はほぼ直上に伸びるものとみられ、失われた先端には雁又や方頭状の鏃がつくとみられる。

土坑 1292号（Ⅱ地区 SK11292）（第243・286図）

Ⅱ－13区中央部南側、p 17グリッドに位置し、西側を攪乱に切られる。長軸108cm短軸残存長82cm深度31cmを測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器片・捏鉢、瓦器片・碗・皿、鉄釘、が出土。

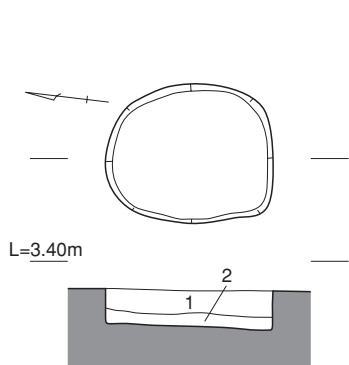
746は土師質土器皿で、底部の大部分を欠く。器壁は薄い。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが残存部小さく不確定。胎土に在地花崗岩を含む。

747は瓦器碗の上部。器壁がきわめて薄い。口縁外面のヨコナデ幅が狭く、口縁内面に稜を作る。内面に横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面不良、外面吸着みられず、全体的に酸化炎焼成。胎土に花崗岩とみられる粒子を含む。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）とみられる。

748は東播系須恵質土器捏鉢の上部片で、口縁端部を上方に拡張。口縁外面には重焼により自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。749は鉄釘で、頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。

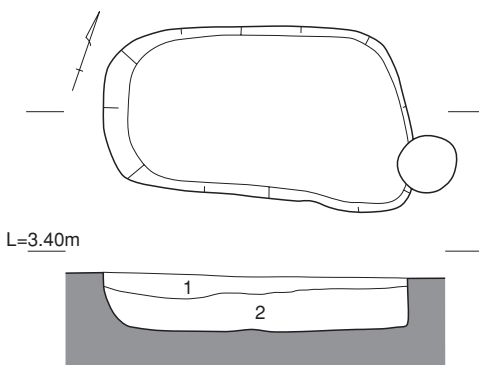
土坑 1293号（Ⅱ地区 SK11293）（第244・287図）

Ⅱ－13区中央部南側、o・p 17グリッドに位置し、南側をSP15028に切られる。長軸123cm短軸98cm深度26cmを測る不整な隅丸方形の土坑。断面は緩い逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（B類）、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器碗、が出土している。



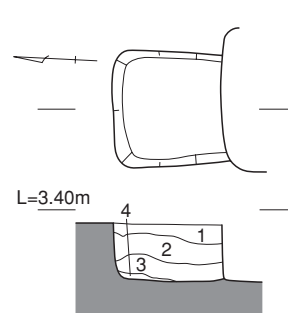
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 234 図 II - 13 区
SK11255 遺構実測図



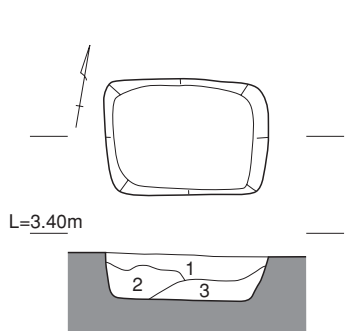
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 235 図 II - 13 区
SK11258 遺構実測図



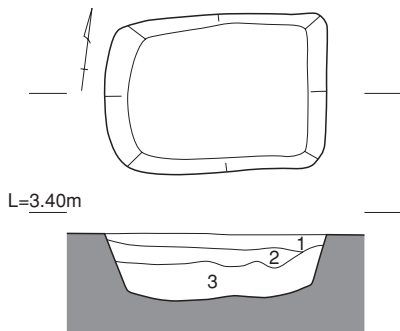
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 236 図 II - 13 区
SK11261 遺構実測図



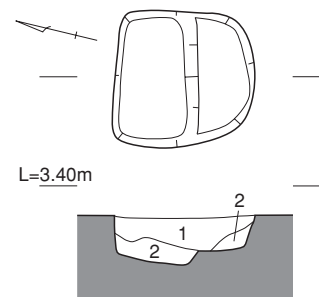
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 237 図 II - 13 区
SK11262 遺構実測図



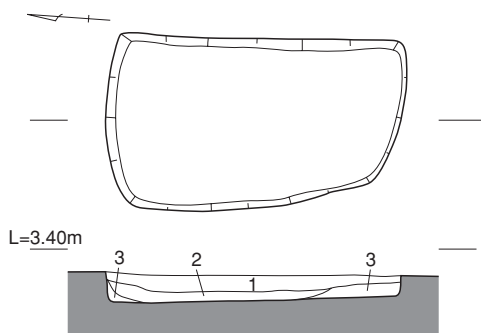
1. 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 238 図 II - 13 区
SK11263 遺構実測図



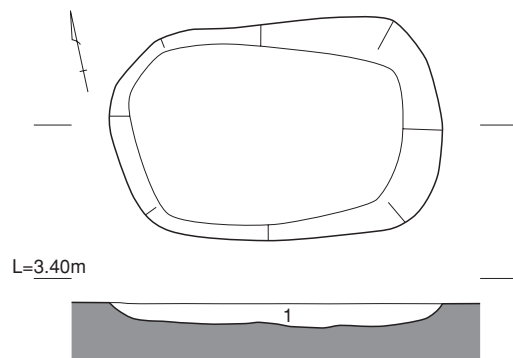
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 239 図 II - 13 区
SK11267 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 240 図 II - 13 区 SK11280 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第 241 図 II - 13 区 SK11285 遺構実測図



出土層位は、751 が第 1 層、750・752 が第 2 層。

750・751 は瓦器碗の下部である。750 は高台断面が逆台形状で、高さを保つ。体部外面に粗い横位のヘラミガキ、体部内面に密な横位のヘラミガキ、見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着・焼成ともに良好。和泉型瓦器碗Ⅱ－3 期（12 世紀後葉）前後とみられる。751 は高台断面が逆台形状で、やや外方に踏ん張る。見込みに螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施すが、磨耗気味でやや不明瞭。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3 期（12 世紀末～13 世紀前葉）頃とみられる。

752 は東播系須恵質土器捏鉢の底部である。底部外面に回転糸切り痕を残すが、不明瞭。内面は回転ナデのち板ナデで調整する。使用により磨耗し、わずかに煤付着。胎土にチャートを含む。

土坑 1294 号（Ⅱ地区 SK11294）（第 245・288 図）

Ⅱ－13 区中央部南側、o・p 17 グリッドに位置し、東側を SK11293、南側を SP15030 に切られる。長軸 152cm 短軸残存長 108cm 深度 29cm を測る不整な隅丸長方形の土坑。断面は不整な逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗、が出土している。

753 は回転台成形の土師質土器皿で、底部を欠く。軟質焼成により調整不明瞭。754 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁を上方に拡張する。口縁外面は重焼により炭素付着。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第 1 段階（12 世紀中葉～後半）に相当。

土坑 1297 号（Ⅱ地区 SK11297）（第 246・289 図）

Ⅱ－13 区中央部北端、t 16 グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。長軸 88cm 短軸 84cm 深度 16cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器皿・杯（ともに回転糸切り）・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗、が出土している。

755・756 は回転台成形の土師質土器皿。755 は底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが、磨耗により不明瞭。口径 6.8cm の小型品である。焼成不良で、きわめて軟質。756 は底部が残存し、回転糸切りのち板目痕を残す。底径 4.2cm の小型品。焼成良好。757 は土師質土器杯で、底部中央を欠く。回転台成形で、底部の切り離し技法は回転糸切りとみられるが、磨耗により不明瞭。軟質焼成である。

758 は瓦器碗の下部。高台は小さな逆三角形を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すが、軟質焼成で磨耗気味。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－3 期（13 世紀前葉）頃とみられる。

759 は東播系須恵質土器捏鉢の底部。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用により磨耗。

土坑 1300 号（Ⅱ地区 SK11300）（第 247・290 図）

Ⅱ－13 区中央部北端、s 16 グリッドに位置し、南側を SK11299 に切られる。長軸 112cm 短軸 76cm 深度 17cm を測る隅丸長方形の土坑。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（A 類）、須恵器供膳具、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・碗・皿、壁土、が出土。

760・761 は瓦器碗。760 は第 1 層から出土。底部を欠く。内面に横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。外面のヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面やや不良、外面不良。胎土は粗い。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3 期（12 世紀末～13 世紀前葉）に相当。761 は上半部で、体部内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗著しく調整不明瞭。炭素吸着不良で、酸化炎焼成気味。

和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

土坑 1331号（Ⅱ地区 SK11331）（第248・291図）

Ⅱ－13区中央部、p 16グリッドに位置し、西側をSK11330に、東側をSP15090に切られる。長軸残存長100cm短軸90cm深度19cmを測る不整形土坑。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土している。

762は瓦器椀で、1・2層境から出土。底部を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すがやや不明瞭。焼成不良により磨耗気味。炭素吸着良好だが、部分的に吸着なし。胎土は粗めで、砂岩やチャートを含むとみられる。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に位置付けられる。

土坑 1333号（Ⅱ地区 SK11333）（第249・292図）

Ⅱ－13区中央部南側、o・p 16グリッドに位置する。長軸106cm短軸94cm深度27cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（B類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、鉄釘、が出土している。

763は鉄釘である。頂部を叩いて伸ばし、屈曲させて頭部を作る。先端部を欠く。

土坑 1335号（Ⅱ地区 SK11335）（第250・293図）

Ⅱ－13区中央部南側、o 16グリッドに位置する。長軸106cm短軸81cm深度20cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・鍋、瓦器皿、鉄滓、が出土している。長軸が短く、浅いことから土壙墓から除外した。

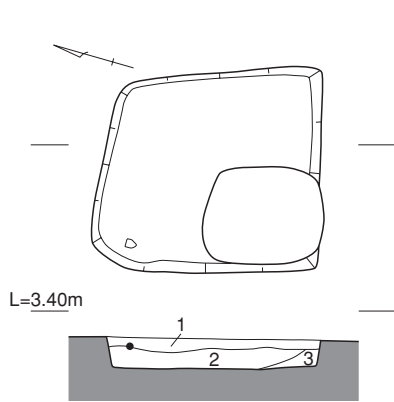
764は土師質土器皿。口径5.9cmときわめて小型で、器壁も薄い。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残すとみられるが、磨耗により不明瞭。765は瓦器皿で、底部中央を欠く。内面に横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

土坑 1403号（Ⅱ地区 SK11403）（第251・294図）

Ⅱ－13区中央部北端、s 15グリッドに位置する。長軸76cm短軸46cm深度19cmを測る隅丸長方形土坑。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。南に握拳大～犬頭大の礫が集中。遺物は、土師質供膳具・煮炊具・羽釜・鍋、瓦器片・椀、壁土か、が出土。

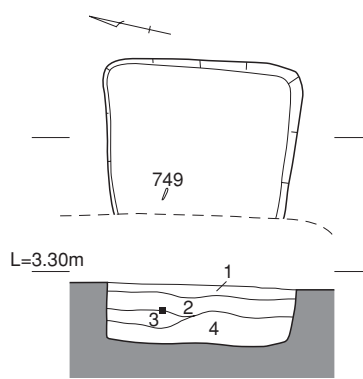
766は土師質土器羽釜の上部で、埋土上位から出土。鏝部は貼り付けで作る。口縁・鏝部ともに短く、口縁端部は外方に拡張する。口縁はやや外方に開く。口縁外面に連続した指爪痕を残す。胎土は概ね精良で、金雲母と角閃石を含む。このタイプは広島県東部～岡山県西部に分布の中心をもつもので、本品は搬入品である。山城型瓦質羽釜（奥井分類山城Ⅰ型）を祖形とする。

本県では中島田遺跡など眉山北西麓に出土事例があり、四国では愛媛県中予・東予で出土している。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.23）、蛍光X線分析では瀬戸内産として集中する分布域に収まり、実体顕微鏡観察では黒雲母を確認している。



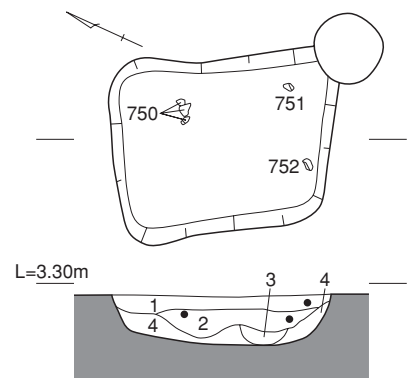
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第242図 II-13区
SK11290 遺構実測図



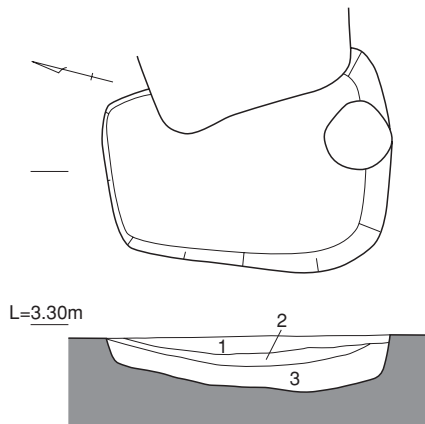
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
4. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第243図 II-13区
SK11292 遺構実測図



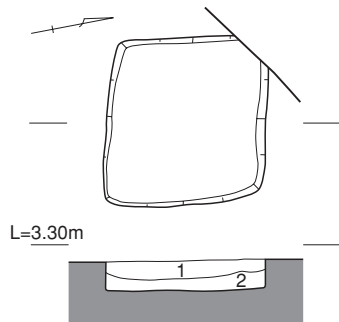
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第244図 II-13区
SK11293 遺構実測図



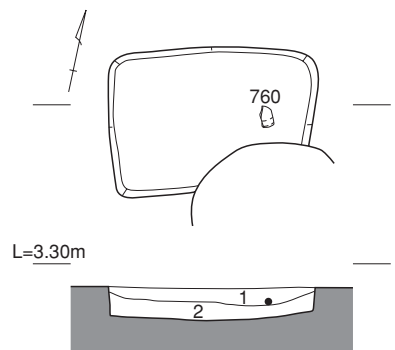
1. 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第245図 II-13区
SK11294 遺構実測図



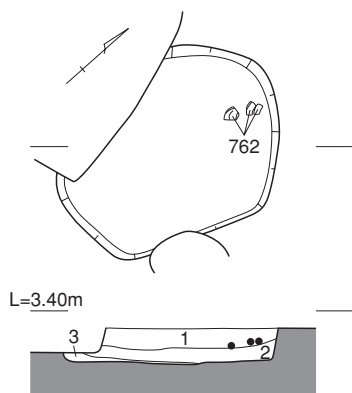
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第246図 II-13区
SK11297 遺構実測図



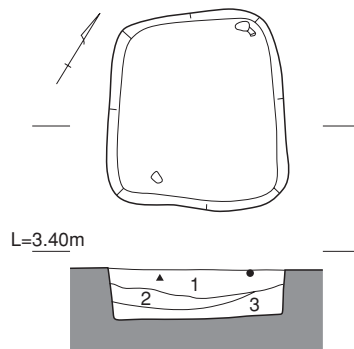
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第247図 II-13区
SK11300 遺構実測図



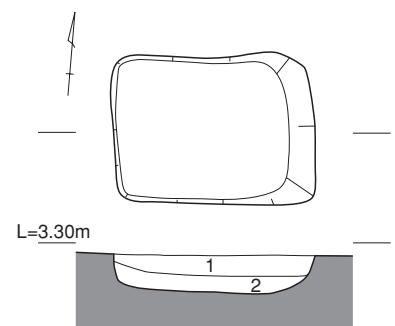
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第248図 II-13区
SK11331 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第249図 II-13区
SK11333 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第250図 II-13区
SK11335 遺構実測図



土坑 1406 号 (Ⅱ地区 SK11406) (第 252・295 図)

Ⅱ - 13 区中央部北端、r 15 グリッドに位置する。長軸 110cm 短軸 76cm 深度 38cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は方形で、埋土は 4 層に分層できる。第 4 層は西端部で縦位に入る土層で、木棺痕跡の可能性も考えられるが、平面形が不整形であるため土壙墓から除外した。遺物は、土師質土器供膳具(回転糸切りほか)・杯・鍋、瓦器椀・皿、須恵質瓦、鉄製品片、白碁石か、が出土している。出土層位は、768・771 が遺構底部から出土。

767 は回転台成形の土師質土器杯上半部で、底部を欠く。内彎する体部をもつ。768 は土師質土器杯で、口縁を欠く。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残すとみられるが不明瞭。焼成不良によりきわめて軟質。

769 は瓦器皿。外面の体底部境と体部内面に横位のヘラミガキ、底部内面にジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。体部外面～内面は炭素吸着良好で、重焼によるものか底部外面は吸着なし。焼成良好。和泉型瓦器Ⅱ～Ⅲ期前半頃か。

770・771 は瓦器椀の上半部。770 は外面にやや粗い横位のヘラミガキ、内面に密な横位のヘラミガキを施す。口縁外面にヨコナデによるとみられる浅い沈線を 1 条引く。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 2 期(12 世紀中葉)前後とみられる。771 は内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は口縁内外面のみわずかにみられ、他の部分は重焼により吸着不良。焼成は良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3～Ⅲ - 1 期(12 世紀後葉)に相当。

772 は石英の扁平な円礫である。自然礫で加工痕はみられない。白碁石とみられる。

土坑 1411 号 (Ⅱ地区 SK11411) (第 253・296 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、r 15 グリッドに位置し、東側を SK11409 と SK11410 に切られる。長軸 84cm 短軸残存長 72cm 深度 16cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・杯・鍋、瓦器椀・皿、スラグ、が出土している。

773 は土師質土器皿で、底部の大半を欠く。歪みのためか復元径はやや大きい。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により軟質で、内外面に炭素付着。

774 は瓦器皿で、底部中央を欠く。口縁内側は強いヨコナデによってわずかに凹線状に作る。軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。

775 は瓦器椀の上半部。小片のため復元径過大。内面に密な横位のヘラミガキを施すが、外面は磨耗気味でヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期(12 世紀末～13 世紀初頭)に相当。

土坑 1418 号 (Ⅱ地区 SK11418) (第 254・297 図)

Ⅱ - 13 区中央部北端、r 14 グリッドに位置する。長軸 120cm 短軸 74cm 深度 20cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層である。やや浅いが土壙墓の可能性も考えられる。遺物は、弥生土器甕、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、鉄製刀子、が出土している。

776 は鉄製の刀子である。身部・茎ともに端部を欠く。

土坑 1419 号 (Ⅱ地区 SK11419) (第 255・298 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t 3・4 グリッドに位置する。長軸 90cm 短軸 77cm 深度 13cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、底面は北に向けて傾斜する。埋土は 1 層である。出土遺物は、掲載した瓦器碗と白磁碗のみ。遺構埋土上位から、伏せた状態の白磁碗に瓦器碗を重ねた状態で出土。

777 は瓦器碗で、高台の断面は低い逆三角形を呈する。口縁外面は 2 段にヨコナデし、凸部に横位のヘラミガキを施す。内面は横位のヘラミガキ、見込みは平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好だが、焼成不良により磨耗気味。和泉型瓦器碗Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) に相当。

778 は白磁碗で、8 割が残存する。口縁端部はわずかに外反する。外面は口縁付近まで回転ヘラケズリを施す。高台は細く高く直立する。内面の口体部境に浅い沈線 1 条を引き、底体部境に小さな段を作る。内面～体部外面下位まで施釉し、口縁外面に釉垂れがみられる。釉に粗い貫入を伴う。大宰府分類白磁碗 V - 2・a 類 (11 世紀後半～12 世紀前半) に相当。

土坑 1425 号 (Ⅱ地区 SK11425) (第 256・299 図)

Ⅱ - 13 区西部北側、p 13 グリッドに位置する。長軸 80cm 短軸 75cm 深度 11cm を測る隅丸方形土坑。断面は浅い逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、黒色土器碗 (B 類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・碗、鉄製品片・鉄滓、が出土。

779 は埋土上位から出土した黒色土器 B 類碗の下半部である。高台断面は高い逆台形状で、底径も広い。見込みに平行状のヘラミガキを施すが、部分的に不明瞭。炭素吸着良好。

土坑 1441 号 (Ⅱ地区 SK11441) (第 257・300 図)

Ⅱ - 13 区西部中央南寄り、m 12 グリッドに位置する。長軸 76cm 短軸 73cm 深度 50cm を測るほぼ円形の土坑である。断面は U 字状で、埋土は 5 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗・皿、が出土している。

780 は瓦器碗の上半部。小片のため復元径過小。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅱ - 3～Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当する。

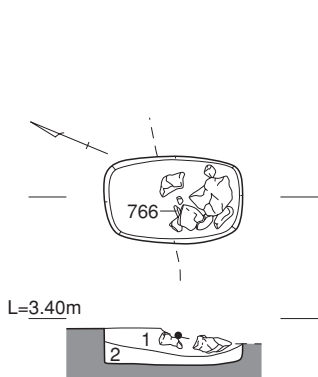
土坑 1450 号 (Ⅱ地区 SK11450) (第 258・301 図)

Ⅱ - 13 区西部中央南寄り、n 11・12 グリッドに位置し、西側を SK11449 に切られる。長軸残存長 138cm 短軸 84cm 深度 40cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、黒色土器碗 (A 類)、須恵器供膳具、土師質土器供膳具・皿・煮炊具、瓦器碗・皿、鉄釘・鉄滓、が出土。781 は鉄釘で、上部は変形のため屈曲し、両端部を欠く。

土坑 1467 号 (Ⅱ地区 SK11467) (第 259・302 図)

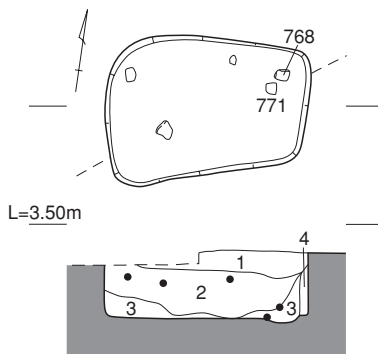
Ⅱ - 13 区西端部北側、m・n 9 グリッドに位置し、西側は調査区外に延びる。長軸残存長 72cm 短軸 74cm 深度 19cm を測る不整円形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師器甑、土師質土器片・供膳具・煮炊具、砂岩礫、が出土している。

782 は土師器甑で、円筒状の器形を持ち、口縁部外面直下には粘土貼り付けによる把手を一对もつ。



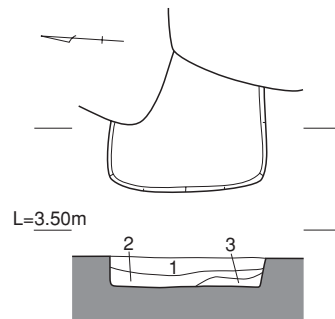
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
灰色砂質土ブロック含む
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 251 図 II - 13 区
SK11403 遺構実測図



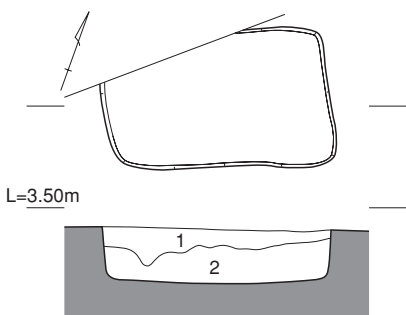
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 252 図 II - 13 区
SK11406 遺構実測図



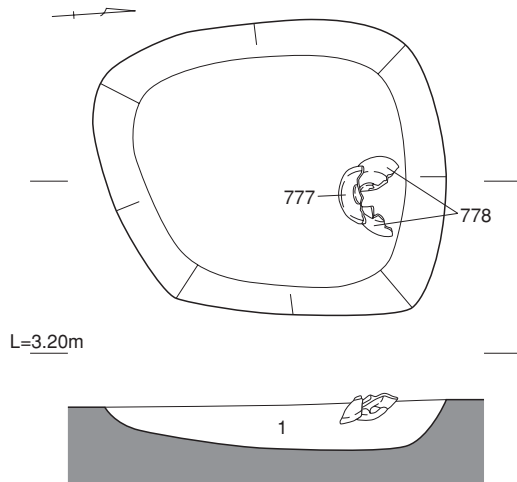
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 253 図 II - 13 区
SK11411 遺構実測図



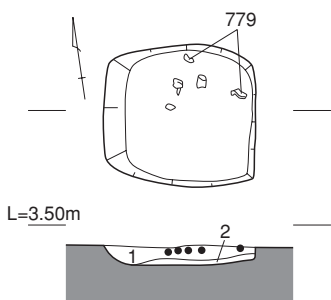
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 254 図 II - 13 区 SK11418 遺構実測図



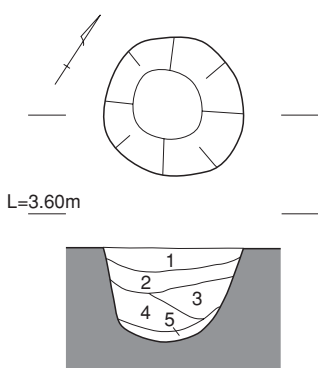
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 255 図 II - 13 区 SK11419 遺構実測図



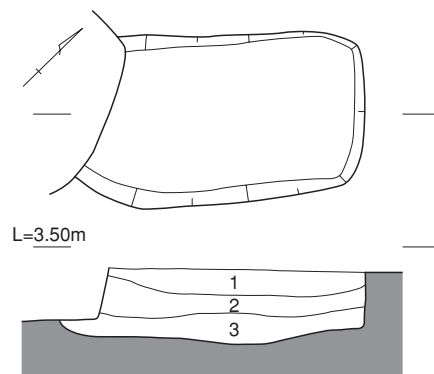
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 256 図 II - 13 区
SK11425 遺構実測図



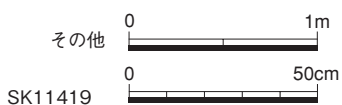
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土 (しまり強)
4. 黒褐色 2.5Y3/1 砂質土 (しまり強)
5. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

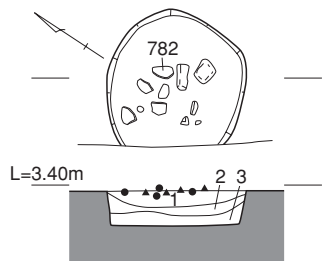
第 257 図 II - 13 区
SK11441 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

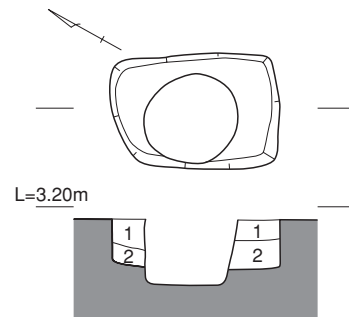
第 258 図 II - 13 区
SK11450 遺構実測図





1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 259 図 II - 13 区 SK11467 遺構実測図



1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 260 図 II - 13 区 SK11472 遺構実測図



内外面とも器壁はナデにより整形される。

土坑 1472 号 (II 地区 SK11472) (第 260・303 図)

II - 13 区東部北側、a 20・1 グリッドに位置する。まん中を SP14739 に切られる。長軸 88cm 短軸 62cm 深度 27cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯 (回転糸切り)・煮炊具、瓦器碗、が出土している。

783・784 は瓦器碗の上半部である。783 は内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。軟質焼成で、磨耗により調整不明瞭。炭素吸着は良好だが、わずかに酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗 III - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。784 は内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成ともに良好だが、わずかに酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗 III - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

土坑 (土壙墓)

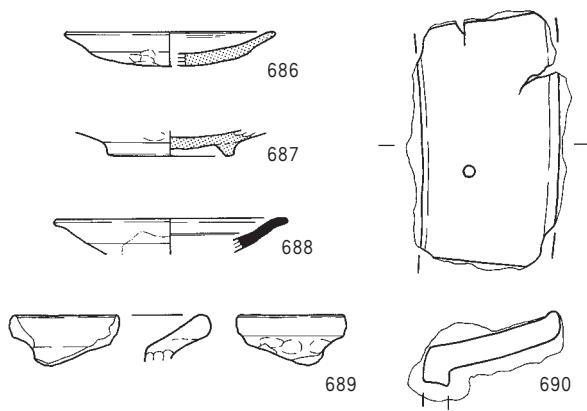
本調査区では土坑 284 基のうち、平面形態や土層などから 66 基を土壙墓である可能性がきわめて高いものとして抽出し、22 基について掲載した。土壙墓は複数が並列あるいは縦列、小グループで集合するなどの配置パターンがみられる。長方形土坑まで含めると、SD1034 - 1116 の溝群と SD1005 - 1007 の溝群に挟まれた幅 20 m の区画内に密集する傾向があるといえる。また区画溝の方向と一致する土壙墓も多いことから、これらの溝に規制されて配置していることが推測される。

土坑 (土壙墓) 1144 号 (II 地区 SK11144) (第 304 図)

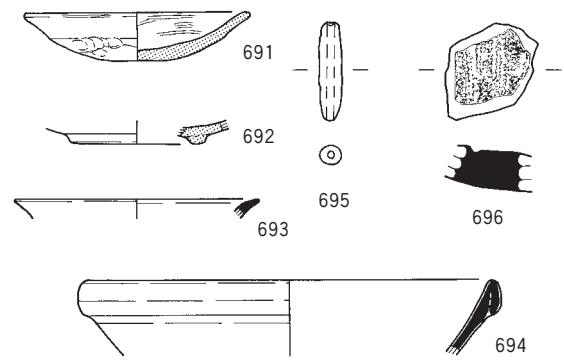
II - 13 区東部中央北寄り、b 4 グリッドに位置し、東側を SP14470 に切られる。長軸 180cm 短軸 70cm 深度 49cm を測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器片・碗、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑 (土壙墓) 1191 号 (II 地区 SK11191) (第 305・326 図)

II - 13 区東部南側、r・s 1 グリッドに位置し、北側を SK11189 に切られる。長軸 146cm 短軸残存長 108cm 深度 35cm を測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、黒色土器片 (B 類)、土師質土器供膳具・皿 (回転ヘラ切り)・杯・煮炊具・鍋、が



第261図 II-13区 SK11130遺物実測図

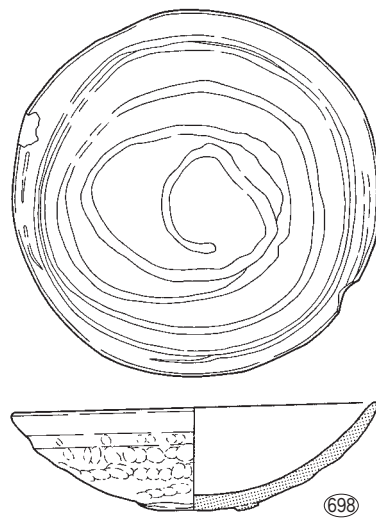


第262図 II-13区 SK11132遺物実測図

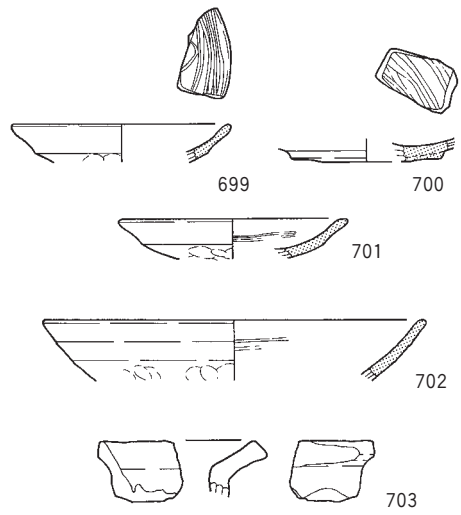


第263図 II-13区
SK11139遺物実測図

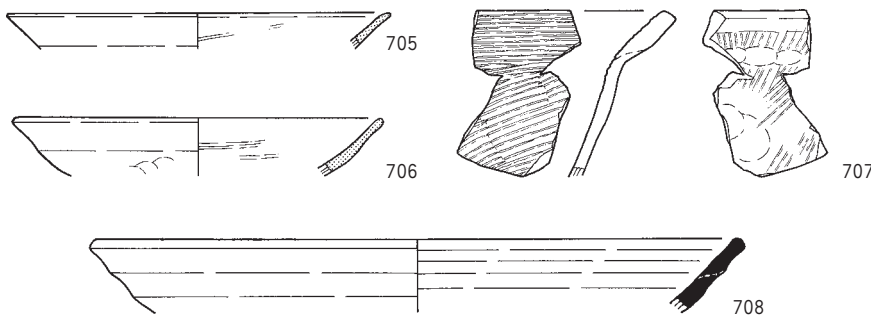
第266図 II-13区
SK11146遺物実測図



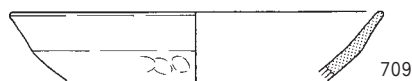
第264図 II-13区
SK11140遺物実測図



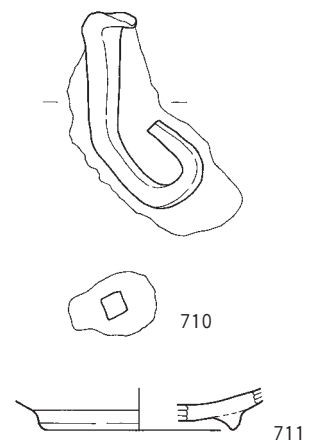
第265図 II-13区
SK11141遺物実測図



第267図 II-13区 SK11147遺物実測図



第268図 II-13区 SK11162遺物実測図

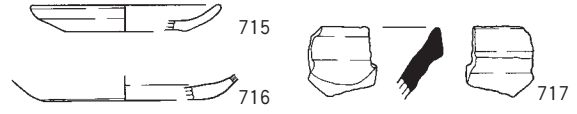


第269図 II-13区
SK11189遺物実測図

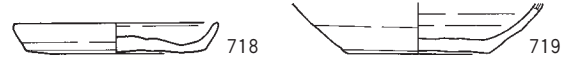




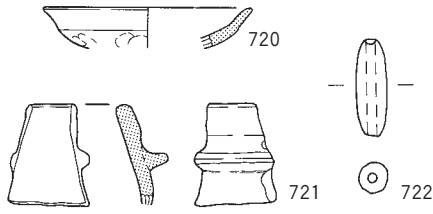
第270図 II-13区
SK11215遺物実測図



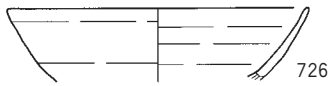
第271図 II-13区 SK11219遺物実測図



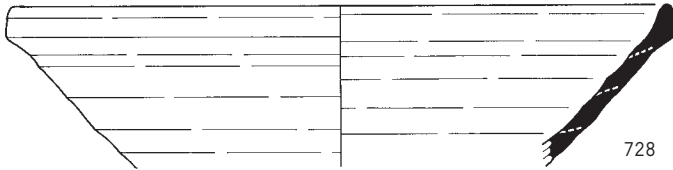
第272図 II-13区 SK11225遺物実測図



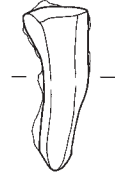
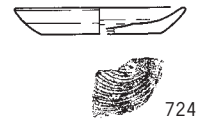
第273図 II-13区 SK11231遺物実測図



第276図 II-13区 SK11251遺物実測図

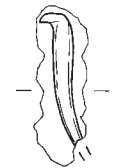


第278図 II-13区 SK11258遺物実測図

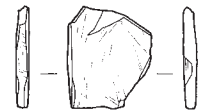


第274図 II-13区
SK11237遺物実測図

第275図 II-13区
SK11246遺物実測図

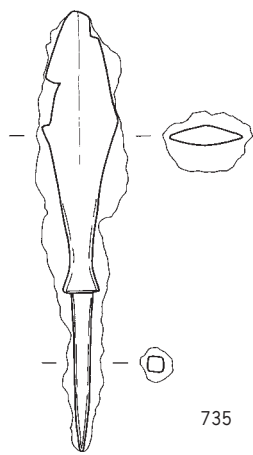


第277図 II-13区
SK11255遺物実測図

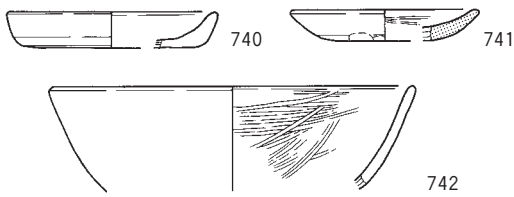


第279図 II-13区
SK11261遺物実測図

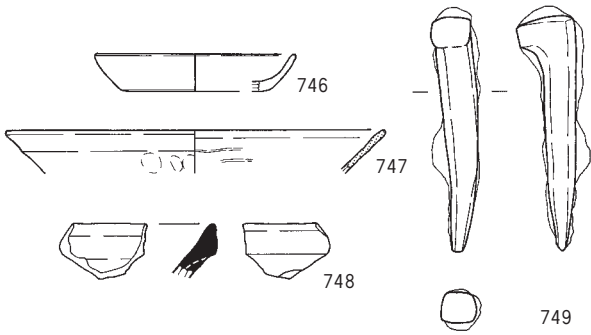




第280図 II-13区
SK11262遺物実測図



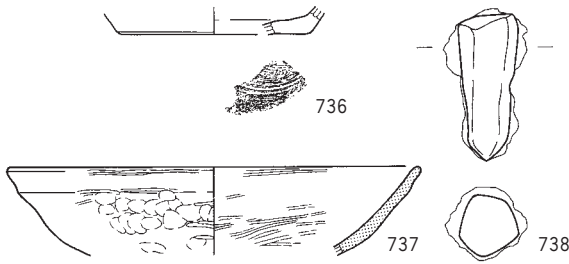
第283図 II-13区 SK11280遺物実測図



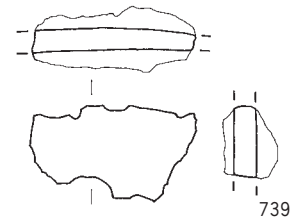
第286図 II-13区 SK11292遺物実測図



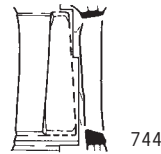
第288図 II-13区 SK11294遺物実測図



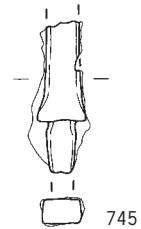
第281図 II-13区
SK11263遺物実測図



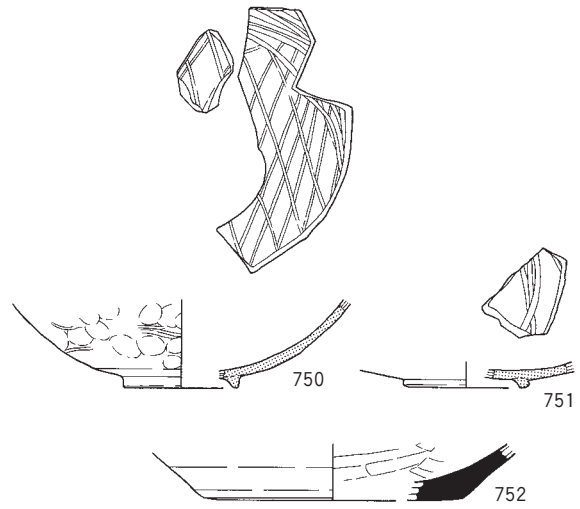
第282図 II-13区
SK11267遺物実測図



第284図 II-13区
SK11285遺物実測図

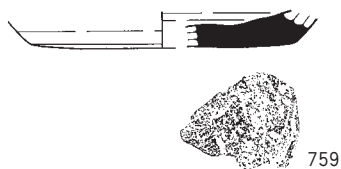


第285図 II-13区
SK11290遺物実測図

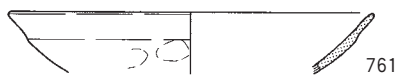
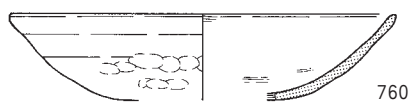


第287図 II-13区 SK11293遺物実測図

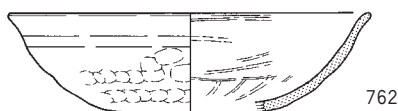




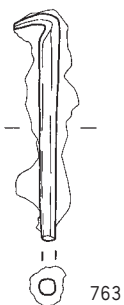
第289図 II-13区 SK11297遺物実測図



第290図 II-13区 SK11300遺物実測図



第291図 II-13区 SK11331遺物実測図



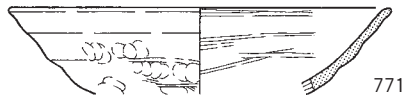
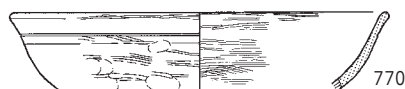
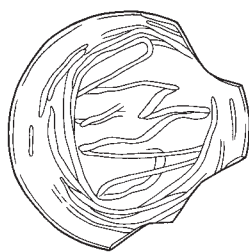
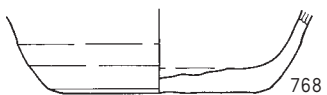
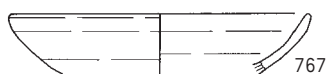
第292図 II-13区 SK11333遺物実測図



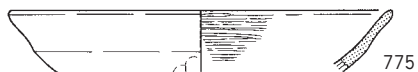
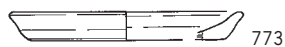
第293図 II-13区 SK11335遺物実測図



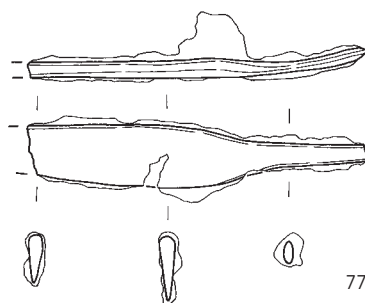
第294図 II-13区 SK11403遺物実測図



第295図 II-13区 SK11406遺物実測図

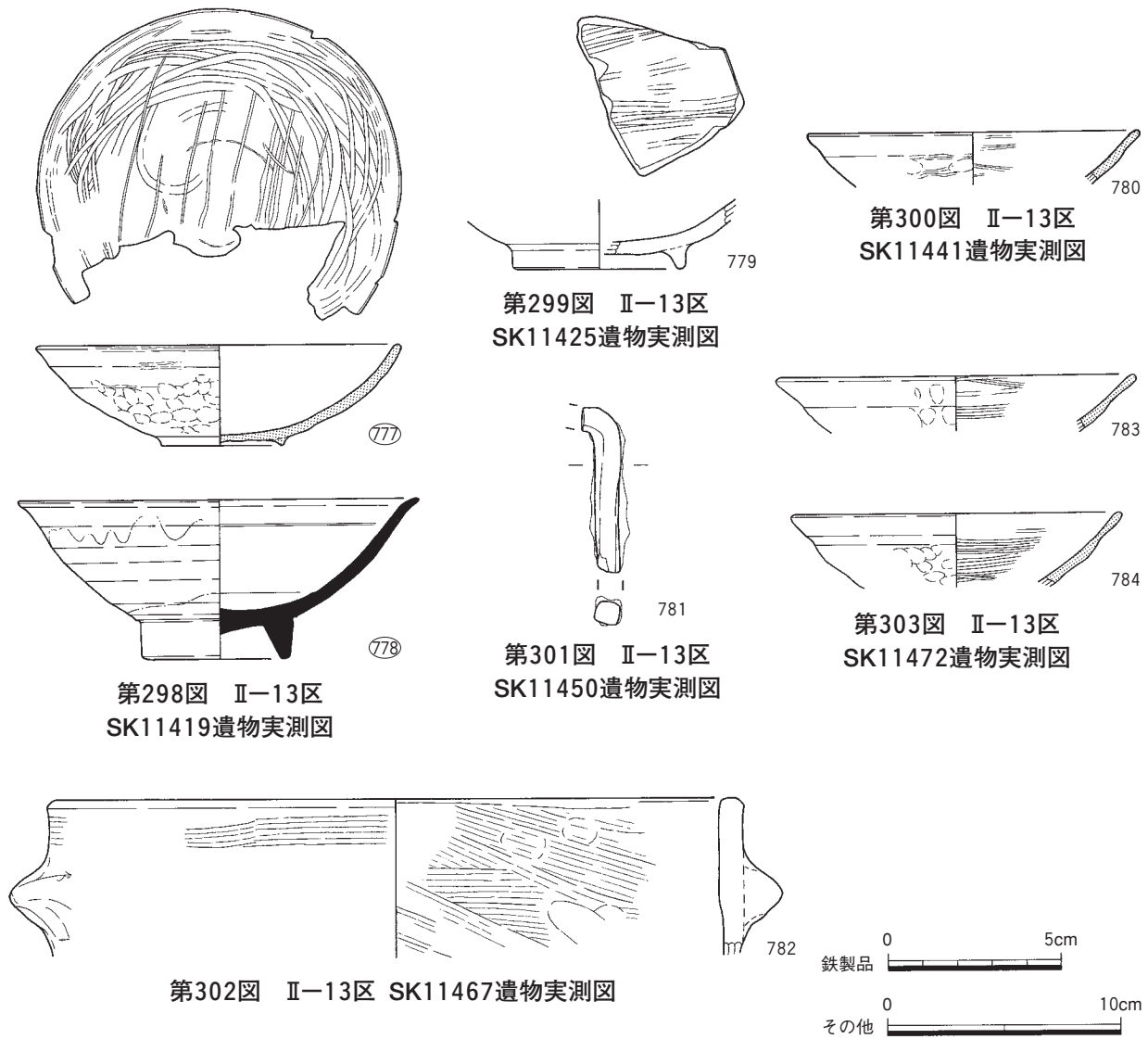


第296図 II-13区 SK11411遺物実測図



第297図 II-13区 SK11418遺物実測図





出土している。

785は土師質土器皿で、低平な器形。回転台成形で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられるが、磨耗により不明瞭。焼成不良により軟質。

土坑（土墳墓）1200号（II地区 SK11200）（第306図）

II-13区東部中央北寄り、t 20グリッドに位置する。長軸173cm短軸95cm深度34cmを測る隅丸長方形の土坑で、土墳墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（B類）、土師質土器供膳具（回転糸切り）・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器片・甕、瓦器片・碗・皿、瓦質土器鍋（受口）、常滑甕、鉄釘、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1208号（Ⅱ地区 SK11208）（第307図）

Ⅱ-13区中央部北端、a 18グリッドに位置する。長軸163cm短軸89cm深度46cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、弥生土器甕か、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、常滑甕、結晶片岩礫、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1228号（Ⅱ地区 SK11228）（第308・327図）

Ⅱ-13区中央部、r 18グリッドに位置し、北側をSA1095EP2に切られる。長軸160cm短軸90cm深度43cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（B類）、須恵器片・貯蔵具、土師質土器供膳具・皿（回転糸切りほか）・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器片、瓦器椀、瓦質土器羽釜、青磁碗（蓮弁）、鉄製品片・鉄釘、が出土。

786は土師質土器皿。器壁は薄い。焼成不良によりきわめて軟質で、磨耗著しい。回転台成形であるが、底部切り離し技法不明。

787は瓦器椀の底部。高台は断面逆三角形形状で高さを保つ。軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-1～2期（12世紀後葉～13世紀初頭）か。788は瓦器椀の下半部。高台は断面やや低い逆台形状を呈する。見込みに螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

789は瓦質羽釜の上部片。鏝部を貼り付けで作り、端部を方形に仕上げる。きわめて軟質で、磨耗著しい。炭素吸着不良。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられ、脚部をもつタイプ。13世紀代に位置付けられる。

790は鉄釘である。頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。中位で屈曲し、全体的にJ字状に変形。

土坑（土壙墓）1245号（Ⅱ地区 SK11245）（第309・328図）

Ⅱ-13区中央部北端、t 17グリッドに位置する。長軸142cm短軸87cm深度28cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢・貯蔵具、瓦器片・椀、常滑甕、鉄釘か鏝、が出土。

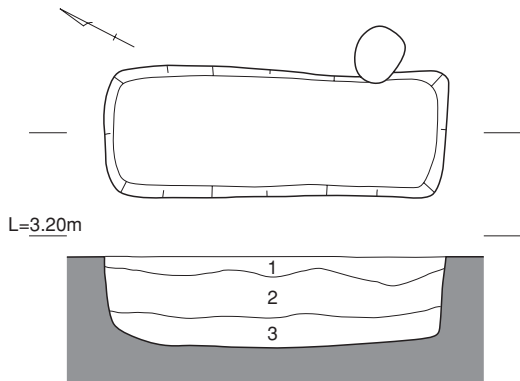
791は鉄釘か鏝。頂部を折り曲げて頭部を作る。上位でくの字に変形。

792は第2層出土の土師質土器皿底部。回転台成形だが、磨耗著しく切り離し技法は不明。焼成不良により軟質。胎土に在地花崗岩を含む。793は回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。器壁は薄く、体部は大きく開く。軟質焼成で、磨耗著しい。

794は東播系須恵質土器捏鉢の上部。小片のため復元径不正確。比較的器壁が薄い。口縁は体部との境で屈曲し、上方に大きく拡張する。口縁外面に重焼による炭素付着。焼成が甘く、やや黄味を帯びた色調。胎土にチャートとみられる粒子を含む。森田編年Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）に相当。

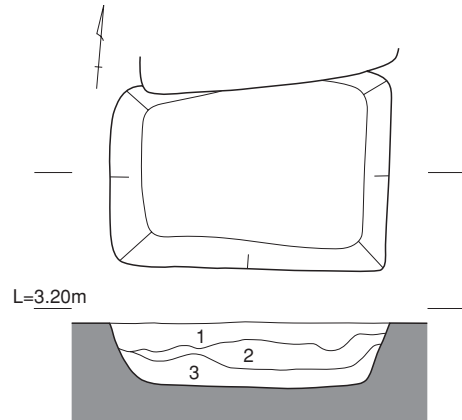
土坑（土壙墓）1248号（Ⅱ地区 SK11248）（第310・329図）

Ⅱ-13区中央部北側、s・t 17グリッドに位置し、中でSP14967に切られる。長軸残存長166cm短軸90cm深度38cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（B類）、須恵器片、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具、須恵質土器片・捏鉢、瓦器椀、瓦質土器羽釜脚部、鉄製品片・鉄製刀子か、が出土。



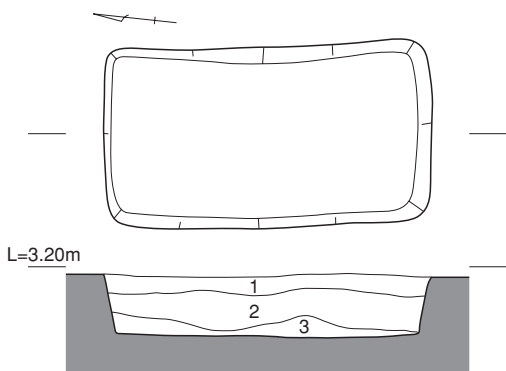
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 304 図 II - 13 区 SK11144 遺構実測図



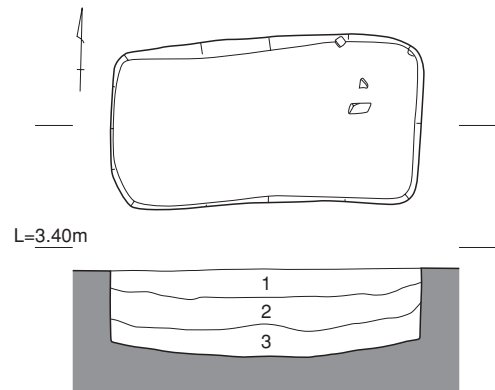
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 305 図 II - 13 区 SK11191 遺構実測図



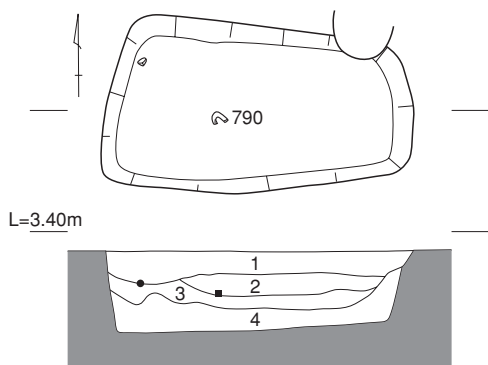
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 306 図 II - 13 区 SK11200 遺構実測図



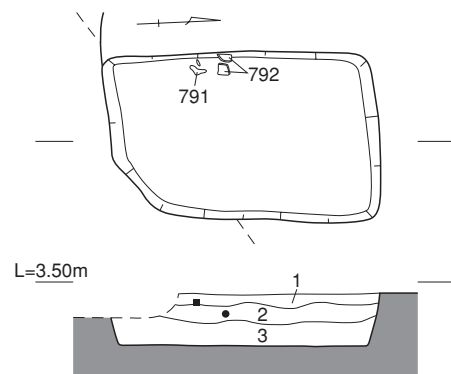
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 307 図 II - 13 区 SK11208 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
4. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 308 図 II - 13 区 SK11228 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 309 図 II - 13 区 SK11245 遺構実測図



795～797は回転台成形の土師質土器皿である。795は底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土にチャートを含む。796は底部で、底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが、磨耗により不明瞭。胎土にチャートを含む。797は底部で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成で磨耗気味。胎土に在地花崗岩を含む。

798・799は回転台成形の土師質土器杯上半部である。798は口縁がわずかに肥厚する。胎土にチャートを含む。799は口縁外面に板状工具を用いた回転ナデを施したとみられる。口縁内面～外面に煤付着。胎土にチャートを含む。

800は瓦器碗の上半部。口縁は強いヨコナデにより、内外面とも体部との境に稜を作る。体部外面に接合痕を残す。軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。器形や技法から和泉型を模倣した在地産瓦器碗とみられる。

801・802は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。801は片口部にあたる。口縁端部を上方に拡張する。口縁外面に重焼による炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。802は口縁を大きく上方に拡張し、口縁外面に重焼により炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階～第Ⅲ期第1段階（12世紀末～13世紀後半）に相当。

803は瓦質煮炊具（羽釜）の脚部で、鏝部直下からスムーズに伸びる形状をもつとみられる。焼成不良により磨耗や剥離が著しく、調整は不明瞭。外面に炭素吸着の痕跡があることから、瓦質土器とした。胎土はきわめて粗く、2mm大の結晶片岩や砂岩を多量に含む。山城型瓦質羽釜の在地模倣品とみられる。胎土分析を行い（胎土分析試料No.20）、蛍光X線分析では山城型の領域から外れ、実体顕微鏡観察では片岩を含むことがわかった。

804は鉄製の刀子とみられ、刀身・茎ともに先を欠損。

土坑（土壌墓）1295号（Ⅱ地区 SK11295）（第311・330図）

Ⅱ-13区中央部南側、o 17グリッドに位置する。長軸100cm短軸72cm深度35cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（A類）、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・土錘、瓦器片・碗・皿、が出土している。

805は土師質土器杯で、底部中央を欠く。回転台成形で、底部外面は回転ヘラ切りとみられるが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。胎土に金雲母を含むことから、搬入品と考えられる。

806は瓦器皿。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着なし。胎土は粗く、チャートを含む。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期頃に位置付けられるが、胎土から模倣品の可能性も考えられる。807は瓦器碗の下部で、高台断面は低い逆台形状。見込みに螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は不良であるが、焼成は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当する。

808はやや細身の土師質管状土錘。軟質焼成で磨耗気味。胎土にチャートを含む。

土坑（土壌墓）1296号（Ⅱ地区 SK11296）（第312・331図）

Ⅱ-13区中央部北端、t 16グリッドに位置し、北側を北側溝に切られる。長軸98cm短軸残存長52cm深度50cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（B類か）、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具（回転糸切り）・煮炊具・羽釜・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器碗、瓦質平瓦、が出土。

809は第4層出土の瓦質平瓦片で、凹面に布目圧痕、凸面に板ナデのちユビナデ痕を残す。炭素吸着・焼成ともに不良。

土坑（土壙墓）1298号（Ⅱ地区 SK11298）（第313・332図）

Ⅱ-13区中央部北端、s・t 16グリッドに位置し、東側をSP15043に切られる。長軸108cm短軸94cm深度42cmを測る隅丸方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は4層に分層できる。遺物は、黒色土器椀（B類）、土師質土器片・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器甕、瓦器片・椀・皿、が出土。

810・811は瓦器皿。810は内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。焼成不良により軟質。体部外面～内面にかけて炭素吸着良好だが、底部外面は重焼により吸着なし。酸化炎焼成する。和泉型瓦器Ⅲ期頃であろう。811は軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。

812は瓦器椀の上半部。内面にやや密なヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられる。

土坑（土壙墓）1302号（Ⅱ地区 SK11302）（第314・333図）

Ⅱ-13区中央部北側、s 16グリッドに位置し、南側をSP15052に切られる。長軸106cm短軸104cm深度51cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は4層に分層できる。南北端部にそれぞれ縦位の土層がみられる。木棺の痕跡だと認識される土層であるが木質は確認されない。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器甕、瓦器椀・皿、白磁碗、鉄滓、黒碁石か、が出土。

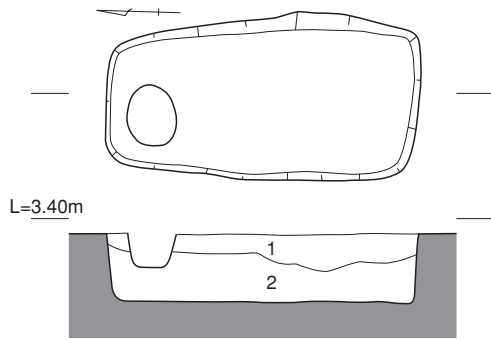
813は瓦器椀の上半部。小片・歪みのため復元径過大。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面不良、外面吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。814は瓦器椀の底部で、高台は断面逆台形状を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

815は白磁碗の上半部である。口縁端部を外方に短く屈曲させ上端を水平に仕上げるが、釉が厚く乗る。内面の口体部境に細い沈線を1条引き、体部内面に櫛描花文を施文する。大宰府分類白磁碗V-4・b類（12世紀中頃～後半）に相当。

816は土師質土錘。軟質焼成により磨耗気味。817は扁平な円礫で、わずかな透明度をもつ灰色を呈し、不規則な黒斑がみえる。泥岩等の堆積岩系の石材であろう。表面はきわめて滑らかで、擦痕等はみられないものの表裏ともに平坦面をもつことから、研磨加工しているものと考えられる。白黒どちらともとれる色調であるが、碁石としておく。

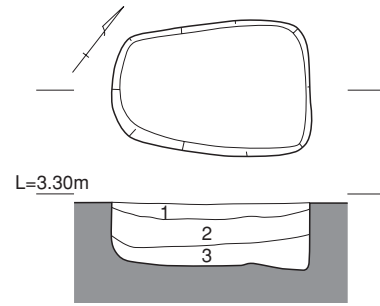
土坑（土壙墓）1313号（Ⅱ地区 SK11313）（第315図）

Ⅱ-13区中央部北側、r 16グリッドに位置する。長軸191cm短軸61cm深度33cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は5層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具、須恵質土器鉗鉢・甕、瓦器片・椀・皿、鉄製品片、が出土しているが、実測可能な遺物はない。



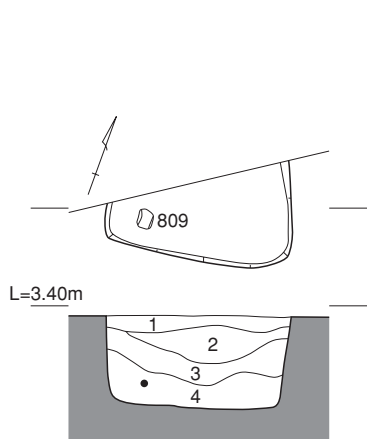
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 310 図 II - 13 区 SK11248 遺構実測図



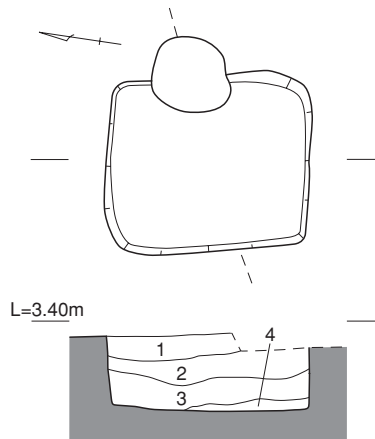
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 311 図 II - 13 区 SK11295 遺構実測図



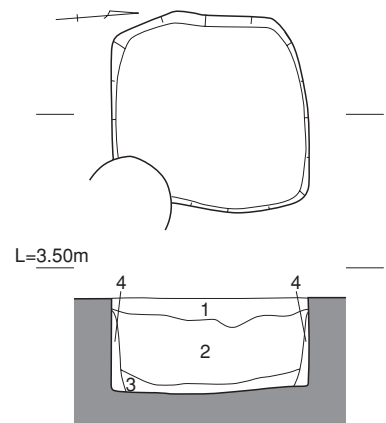
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 312 図 II - 13 区
SK11296 遺構実測図



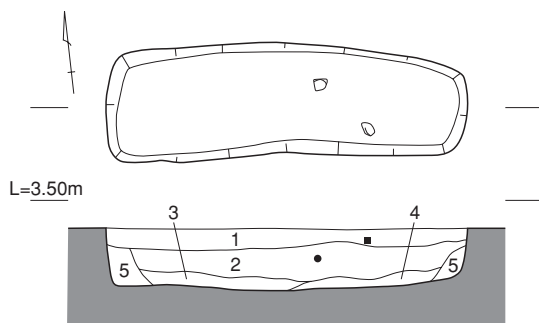
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 313 図 II - 13 区
SK11298 遺構実測図



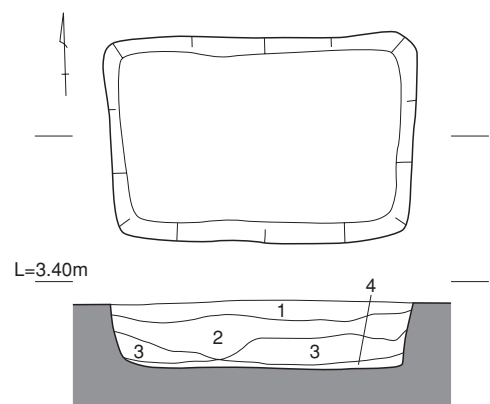
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 314 図 II - 13 区
SK11302 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)
5. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第 315 図 II - 13 区 SK11313 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 316 図 II - 13 区 SK11319 遺構実測図

土坑（土壙墓）1319号（Ⅱ地区 SK11319）（第316図）

Ⅱ-13区中央部北寄り、q 16・17グリッドに位置する。長軸165cm短軸108cm深度36cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、土師器羽釜、須恵器杯、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器片・瓦、瓦器片・椀、瓦質土器煮炊具・脚部、白磁碗、鉄製品片・鉄釘・鉄製刀子か・鉄滓、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1325号（Ⅱ地区 SK11325）（第317・334図）

Ⅱ-13区中央部、q 16グリッドに位置し、北をSP15087に切られる。長軸128cm短軸76cm深度26cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器椀、瓦器片・椀・皿、白磁碗、が出土。

818は東播系須恵質土器椀の底部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。内面の底体部境に段を作る。焼成が甘くやや軟質。胎土にチャートとみられる粒子を含む。森田編年第Ⅰ期第Ⅰ段階（11世紀後半）に相当。

819は土師質土器鍋の口縁部片である。口縁端部を外方に拡張する。内面に粗いヨコハケを施す。胎土に花崗岩と角閃石を含むことから、瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

土坑（土壙墓）1404号（Ⅱ地区 SK11404）（第318・335図）

Ⅱ-13区中央部北端、s 14・15グリッドに位置する。長軸118cm短軸84cm深度47cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形。埋土は6層に分層できるが、第1層は後世に掘り込まれたピットかもしれない。遺物は、黒色土器椀（B類）、土師質土器供膳具・杯（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器片・貯蔵具、瓦器椀、壁土、が出土。

820・821は埋土上位から出土。820は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残すが、不明瞭。焼成不良によりきわめて軟質。胎土は精良でチャートを含む。821は瓦器椀の底部で、高台断面は低平な逆三角形状であるが底径は大きい。軟質焼成で磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられるが、底径が大きく胎土が粗いことから非和泉型の可能性あり。

土坑（土壙墓）1405号（Ⅱ地区 SK11405）（第319・336図）

Ⅱ-13区中央部北端、r・s 14・15グリッドに位置し、北側をSK11404に切られる。長軸残存長110cm短軸107cm深度33cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は5層に分層できる。第5層は木棺痕跡とも考えられる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（柱状高台）・煮炊具・羽釜か・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、が出土。

822は遺構底部から出土した土師質土器柱状高台付皿の底部。回転台成形であるが、底部の切り離し技法は磨耗により不明。他遺跡で出土する同種の遺物と同様に、焼成不良できわめて軟質であり、胎土は精良。本品は在地花崗岩を含む。823は瓦器椀の底部である。高台断面は逆三角形状を呈するが、高さに対して不相応に幅広である。軟質焼成で、磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）とみられる。

土坑（土壙墓）1413号（Ⅱ地区 SK11413）（第320図）

Ⅱ-13区中央部北側、q 15グリッドに位置し、北側をSP15140に切られる。長軸130cm短軸72cm深度49cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。出土遺物は皆無である。

土坑（土壙墓）1427号（Ⅱ地区 SK11427）（第321・337図）

Ⅱ-13区西部北側、o・p 13グリッドに位置する。長軸126cm短軸120cm深度25cmを測る隅丸方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器甕か壺、瓦器片・椀、が主に第1層から出土している。

824は埋土上位から出土した須恵質土器甕か壺の下部である。体部外面に粗い平行タタキを施す。底部外面は不調整で、稲粃や稲藁状植物の圧痕を残す。底部内面は指頭圧痕、体部内面にユビナデ痕を残す。また粘土紐接合痕が明瞭で、円盤状粘土を底部において基礎とし、粘土紐を輪積みにして重ねて作ったことが見てとれる。十瓶山系とみられるが、同地産であるかは不明。

土坑（土壙墓）1434号（Ⅱ地区 SK11434）（第322・338図）

Ⅱ-13区西部北端、q 12グリッドに位置し、南側を攪乱に切られる。長軸124cm短軸112cm深度33cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋、須恵質土器貯蔵具、瓦器椀・皿、白磁碗、鉄製刀子、が出土。

825は瓦器皿で、底部中央を欠く。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により他の部位のミガキは確認できない。炭素吸着は内面やや不良、外面不良。焼成不良。和泉型瓦器皿期頃か。826は瓦器椀の底部。高台断面は逆台形状、幅広で高さを保つが底径は小さい。磨耗気味で不明瞭だが、見込みに密なヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期（12世紀後葉）前後であろう。

827は白磁碗の上部。口縁を玉縁に作る。体部外面は、口縁の直下から横位のヘラケズリを施す。釉に貫入を伴い、体部外面に釉とびが顕著。焼成不良により、素地は陶器質。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

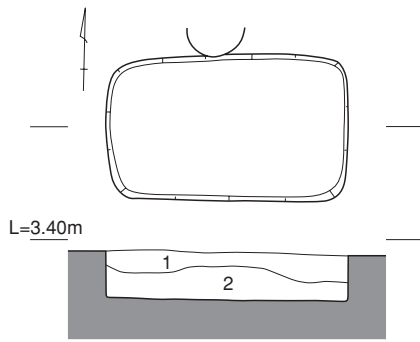
828は白磁碗の下半部。高台外側から内面に施釉するが、高台の釉は削り取り、見込みには蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台内側のエッジに連続した欠損が認められ、畳付部は磨耗することから、スクレーパー的な二次使用が推測される。大宰府分類白磁碗Ⅷ-2類（12世紀中頃～後半）に相当する。

829は鉄製の刀子とみられ、刀身部・茎ともに先を欠損する。

土坑（土壙墓）1440号（Ⅱ地区 SK11440）（第323・339図）

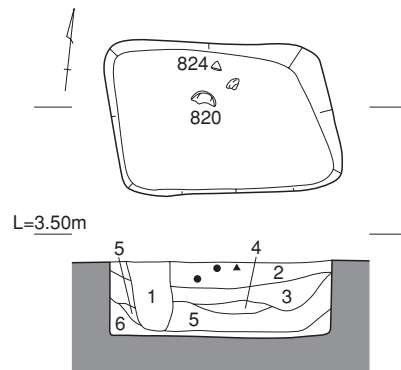
Ⅱ-13区西部中央南寄り、n 12グリッドに位置する。長軸134cm短軸100cm深度31cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具（回転糸切り）・煮炊具・土錘、須恵質土器壺、瓦器片・椀、白磁碗、鉄釘・鑿・鉄滓・スラグ、が出土している。

830・831は瓦器椀の底部。830は高台断面が逆三角形で、やや低い。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。軟質焼成により磨耗。炭素吸着は内面良好、外面不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13



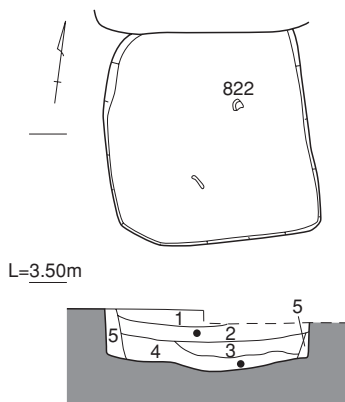
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 317 図 II - 13 区 SK11325 遺構実測図



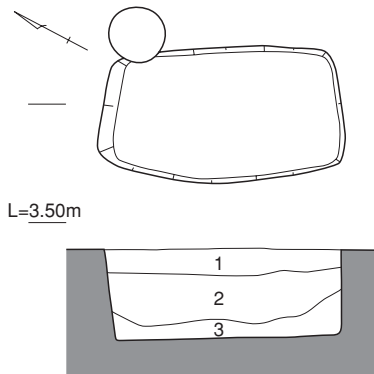
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
5. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
6. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 318 図 II - 13 区 SK11404 遺構実測図



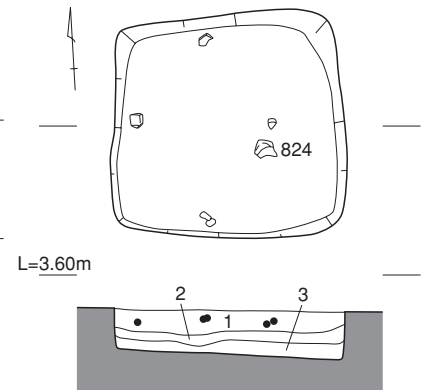
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
5. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 319 図 II - 13 区 SK11405 遺構実測図



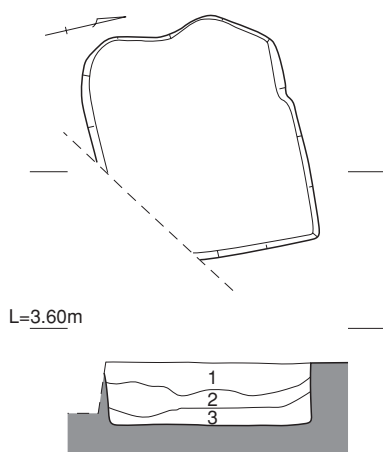
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 320 図 II - 13 区 SK11413 遺構実測図



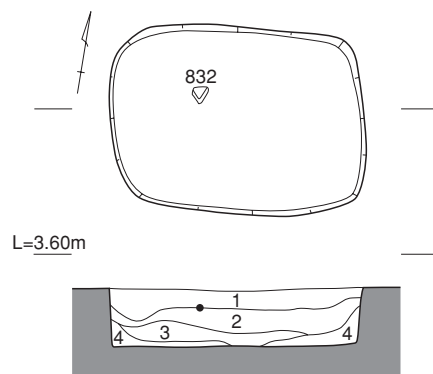
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 321 図 II - 13 区 SK11427 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

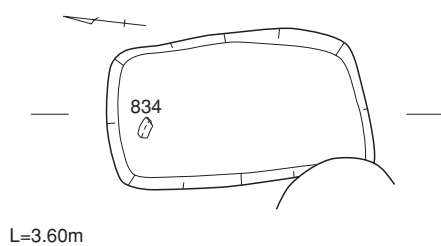
第 322 図 II - 13 区 SK11434 遺構実測図



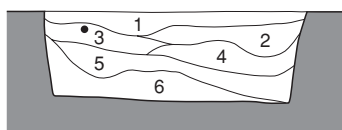
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 323 図 II - 13 区 SK11440 遺構実測図



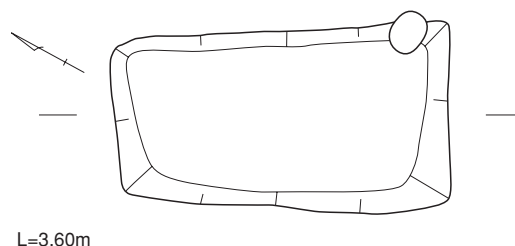


L=3.60m

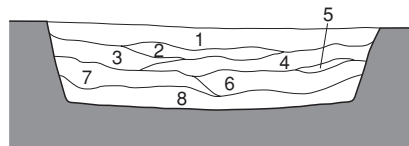


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり・粘性強)
4. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
オリーブ褐色粘質土ブロック含む
5. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む
6. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む

第 324 図 II - 13 区 SK11442 遺構実測図



L=3.60m



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
4. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり・粘性強)
5. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
6. 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土 (しまり強)
7. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
8. 黒褐色 2.5Y3/1 砂質土 (しまり強)

第 325 図 II - 13 区 SK11446 遺構実測図



世紀初頭)前後であろう。831は高台断面が逆台形状で幅広。軟質焼成により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面やや不良、外面は吸着なし。酸化炎焼成する。胎土は粗く、チャートを含む。和泉型瓦器碗の在地模倣品であろう。

832は1・2層境から出土した須恵質土器壺の肩部片。器壁は厚く、最大1.8cmを測る。内面にヨコハケのち縦位のユビナデ、外面に格子タタキを施す。焼成良好。十瓶山系とみられるが、同地産とはいえない。12～13世紀頃か。

833は棒状の鉄製品で、下方はやや細る。釘か鑿とみられる。両端部を欠く。

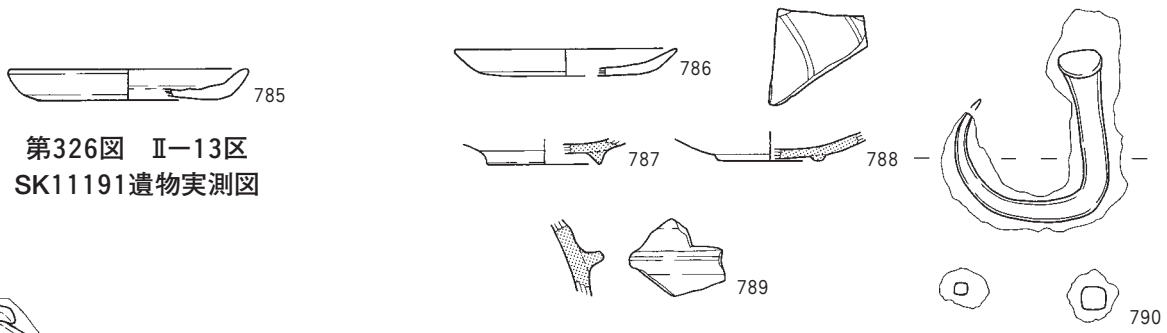
土坑(土壌墓) 1442号(II地区 SK11442)(第324・340図)

II-13区西部中央南寄り、m・n 12グリッドに位置し、西側をSK11441に切られる。長軸138cm短軸80cm深度49cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は6層に分層できる。遺物は、土師器甕、黒色土器碗(A類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・杯(回転糸切り)・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器供膳具、瓦器片・碗、白磁碗、スラグ・鉄滓、チャート礫、が出土。

834は第3層から出土した土師器甕の上部である。きわめて厚い器壁をもつ。口縁は大きく外反し、端面はヨコナデによって平坦に作る。胎土に石灰石または貝殻片とみられる白色・軟質の混入物が確認できる。内外面に炭素付着し、焼成時の剥離やハゼ痕がみられる。産地・時期等は不明。

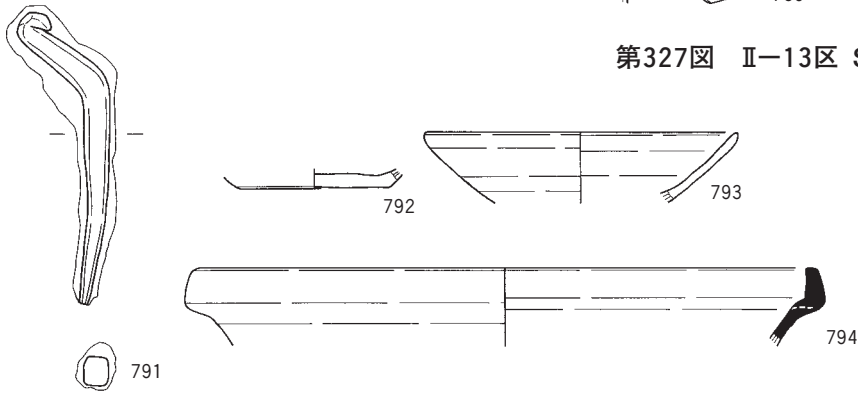
土坑(土壌墓) 1446号(II地区 SK11446)(第325図)

II-13区西部北側、o・p 11グリッドに位置する。長軸180cm短軸100cm深度44cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は8層に分層できる。出土遺物は皆無。

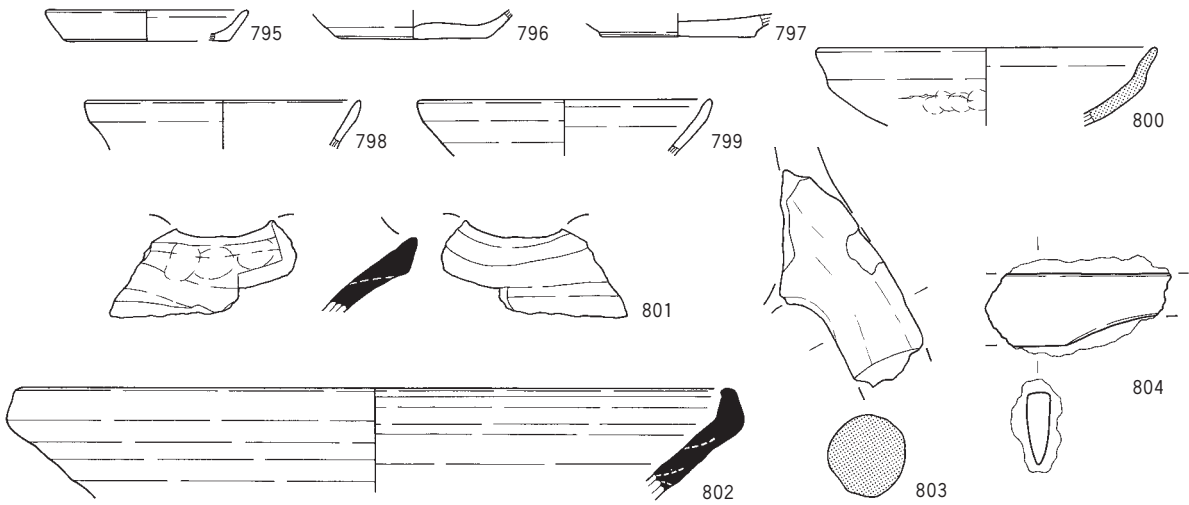


第326図 II-13区
SK11191遺物実測図

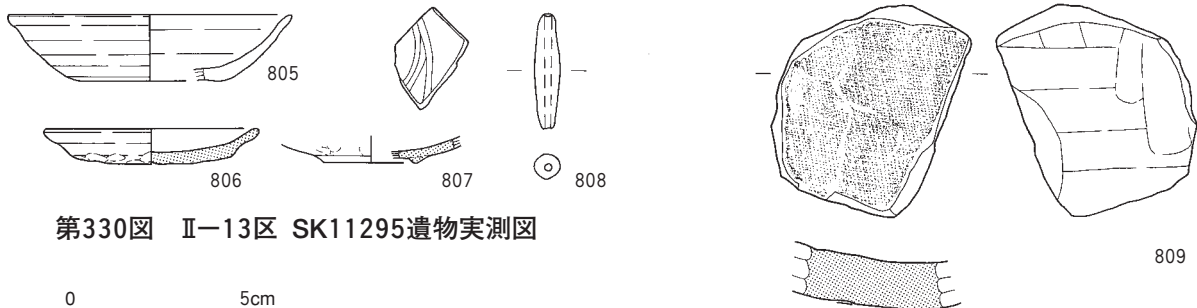
第327図 II-13区 SK11228遺物実測図



第328図 II-13区 SK11245遺物実測図



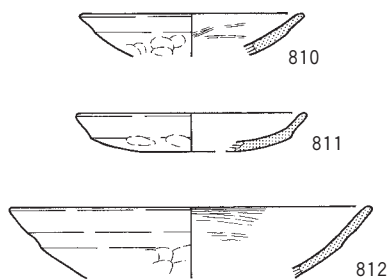
第329図 II-13区 SK11248遺物実測図



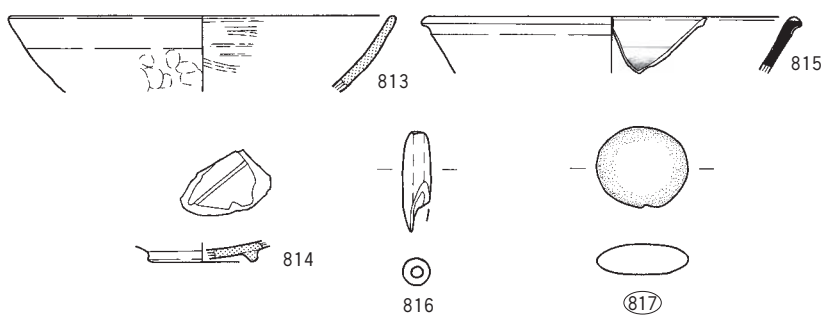
第330図 II-13区 SK11295遺物実測図

第331図 II-13区 SK11296遺物実測図

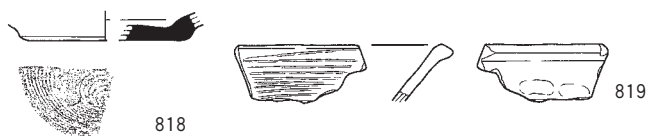




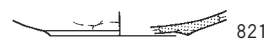
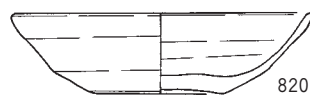
第332図 II-13区
SK11298遺物実測図



第333図 II-13区 SK11302遺物実測図



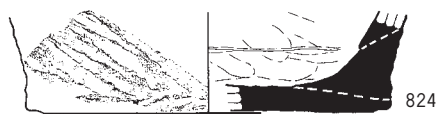
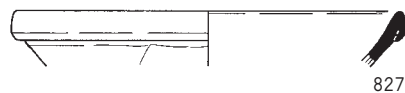
第334図 II-13区 SK11325遺物実測図



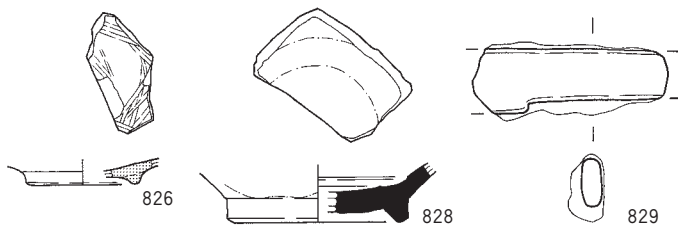
第335図 II-13区
SK11404遺物実測図



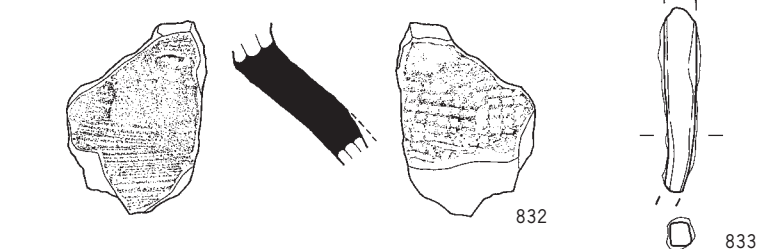
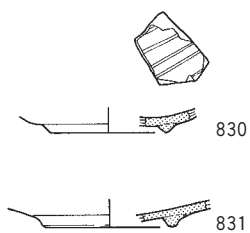
第336図 II-13区
SK11405遺物実測図



第337図 II-13区 SK11427遺物実測図



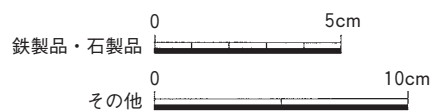
第338図 II-13区 SK11434遺物実測図



第339図 II-13区 SK11440遺物実測図



第340図 II-13区 SK11442遺物実測図



溝5号(Ⅱ地区 SD1005)(第172・341・350・356・357図)

Ⅱ-1~3・13区、 $\delta \cdot \varepsilon$ -Ⅳ m~j 12~14グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長87.5m幅132cm深度42cmを測り、主軸はN6°Wを向く。今回Ⅱ-13区では西部、m~r 14グリッドに位置し、検出長27.4m幅91cm深度40cmを測り、主軸はN3°Wを向く南北方向の溝。断面は緩い逆台形状または船底状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は、土師器羽釜、黒色土器片(A類か・B類)・椀(A・B類)、須恵器片・甕・貯蔵具、土師質土器片・供膳具(回転ヘラ切りほか)・皿(回転ヘラ切りほか)・杯・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢・甕・供膳具・椀・壺、瓦器片・椀・皿、瓦質平瓦、瓦転用球状加工品、青磁(龍泉)碗、白磁碗、近世瓦、鉄製品片・鉄滓、砂岩製砥石・砂岩製叩石・砂岩礫・片岩礫・チャート礫、が出土。

埋土上位から848、埋土下位から840~842・844・845・850・851、遺構底部から838・839が出土。

835・836は回転台成形の土師質土器杯。835は底部を欠く。器壁はやや厚い。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。836は回転ヘラ切り痕を残す。外面煤付着。焼成不良により内面磨耗気味。

837は瓦器皿。外面は強いヨコナデによって段を作るが、幅は狭い。内面は口縁~体部に横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状のヘラミガキ暗文を施すが、ミガキの幅は太い。炭素吸着良好。胎土にチャートを含むこと、暗文の形状から非和泉型と考えられる。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃に併行か。

838~844は瓦器椀。Ⅱ期に遡るものは838~840である。838は高台断面が逆三角形形状を呈し、幅と高さを保つ。口縁は2段にヨコナデし、体部内外面に横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成により調整不明瞭。見込みにヘラミガキ暗文を施すとみられるが、形状不明。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅱ-2~3期(12世紀中葉~後葉)に相当。

839は下半部である。器壁が厚い。高台は断面三角形形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みに平行状のヘラミガキを施すが、ヘラ先による暗文ではなく、幅広で弱いものである。炭素吸着・焼成ともにやや不良。和泉型瓦器椀Ⅱ-3~Ⅲ-2期(12世紀後葉~13世紀初頭)頃とみられる。840は器形がやや歪む。高台断面は逆台形状で幅と高さを保つ。外面に粗い横位のヘラミガキ、体部内面にやや粗い横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期(12世紀後葉)。

841~844はⅢ期の瓦器椀である。841は高台断面が低平・幅広の逆台形状で、貼り付け時の強いユビナデ痕を残す。口縁のヨコナデは弱く、やや内彎する。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を残すとみられるが、いずれも磨耗により不明瞭。炭素吸着は概ね良好だが、体部外面は重焼により部分的に吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-1~2期(12世紀後葉~13世紀初頭)に相当。

842~844は和泉型瓦器椀Ⅲ-2期(12世紀末~13世紀初頭)に相当。842はやや低平な形状。高台断面はしっかりとした逆台形状を呈する。体部内外面に横位のヘラミガキ、見込みにヘラミガキを施すが形状は不明。軟質焼成で、磨耗により調整は不明瞭。炭素吸着は外面~口縁内面がやや不良で、体部内面以下は不良。酸化炎焼成気味。胎土にチャート含む。外面にミガキを伴うため、若干遡る可能性もある。

843は下半部で高台断面は逆台形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキを施す。見込みにヘラミガキ暗文を施すが形状は不明。焼成不良により調整不明瞭。炭素吸着は内面やや不良、外面は不良。高台の形状から和泉型瓦器椀Ⅲ-2期(12世紀末~13世紀初頭)前後とみられる。

844は歪みのためやや扁平な器形に復元される。高台は逆台形状で、幅と高さを保つ。外面に粗い横

位のヘラミガキを施す。口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに連結輪状とみられるヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好だが焼成不良により磨耗。外面にミガキを伴うため、若干廻る可能性もある。

845 は白磁碗の上半部。体部外面は回転ヘラケズリで作る。内面の口・体部境に沈線 1 条、体部は櫛目文を施す。外面に釉とびあり。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗 VI-1・b 類（11 世紀後半～12 世紀前半）とみられる。

846・847 は白磁碗の下半部。846 は高台が細く高く直立する。体部外面は回転ヘラケズリを施し、中途まで施釉する。内面の体底部境に浅い段を作る。胎土に微細な黒色粒を伴う。大宰府分類白磁碗 V 類（11 世紀後半～12 世紀前半）とみられる。

847 は白磁碗の下半部。高台は削り出しで作り、やや低い。釉は内面および体部外面下端まで掛けられ、細かい貫入を伴う。高台畳付部はやや磨耗していることから、スクレイパー的な転用が推測できる。大宰府分類白磁碗 II 類（11 世紀後半～12 世紀前半）とみられる。

848～851 は土師質土器鍋の上部・上半部で、厚い器壁をもつ。848 は口縁がとくに肥厚する。端部は強いヨコナデによって凹線状に作る。口縁外面にヨコハケ、頸部外面以下は粗いタテハケを施す。内面は横位の板ナデを施すことによって頸部に明瞭な稜線を作り、工具による擦痕を伴う。外面煤付着。

849 は口縁端部がやや丸みを帯びる。口縁外面に粗いヨコハケ、体部外面に粗いタテハケ、体部内面に横位の板ナデを施す。外面煤付着。

850 は口縁がとくに肥厚する。口縁端部は強い板ナデにより鈍角の稜を作る。外面は指頭圧痕および体部に縦位の板ナデを施すが、磨耗により不明瞭。内面は横位の板ナデを施す。

851 は底部を欠く。口縁端部はやや丸みを帯びる。外面は横位に連続したユビオサエのち主に縦位のハケを施す。内面は横位の板ナデを施し、頸部内面に明瞭な稜線を作る。外面煤付着。848～851 はいずれも胎土が粗く、金雲母あるいは花崗岩を含むため、瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

852 は紀伊型土師質土器鏝付鍋の上部。口縁端部を内上方につまみ上げる。頸部外面は強いヨコナデにより凹線状に作る。体部外面上位に断面が低い三角形の鏝部を貼り付ける。外面煤付着。胎土は粗く、結晶片岩を含む。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

853 は瓦を転用した球状加工土製品。瓦質瓦片を研削整形し、球状に作る。素材となった瓦は炭素吸着良好で、胎土は酸化炎焼成する。854 は砂岩製叩石。砂岩の自然礫を用いる。やや扁平な球体で、一部分に敲打が集中する。

遺構の年代は、遺物に II 期の瓦器碗を含み III-2 期が主体となること、煮炊具は器壁が厚い鍋が主体となることから、概ね 12 世紀後半がピークと考えられ、概ね 13 世紀前半にかけて埋没するとみられる。

溝 6 号（II 地区 SD1006）（第 172・342・351・358 図）

II-1～3・13 区、 $\delta \cdot \varepsilon - IV n \sim i$ 12～15 グリッドに位置する。北は II-3 区まで延び、南は攪乱に切られる。検出長 81.7 m 幅 154cm 深度 42cm を測り、主軸は N7° W を向く南北方向の溝。

今回 II-13 区では西部、 $n \sim s$ 14・15 グリッドに位置し、検出長 25.4 m 幅 124cm 深度 27cm を測り、主軸は N5° W を向く。断面は船底状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、弥生土器壺、土師器竈、黒色土器碗（B 類）、須恵器蓋付杯、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・甕・瓦、瓦器片・碗・皿、常滑甕、青磁碗、白磁碗、鉄製品片・鉄

釘・スラグ、石灰岩礫、が出土。埋土上位から 857～859 が出土。

855 は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は粗くチャートを含む。焼成不良。856 は白磁碗の上半部。口縁を大きな玉縁につくる。体部外面は回転ヘラケズリを施す。外面釉とびあり。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

857 は土師質土器鍋で、底部を欠く。器壁は厚く、体部下位で 1.2cm を測る。口縁端部はわずかに肥厚し、方形に仕上げる。外面の頸部～体部上位に指頭圧痕が顕著。体部中位はタテハケを施すが、のちナデによって不明瞭。体部下位はヨコハケで仕上げる。内面は横位の板ナデを施す。外面煤付着。胎土は粗く、金雲母と花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

858 は円筒状の器形をもつ土師器甑で、体部中位以下は失われている。外面はタテハケで、内面は主に横方向のハケにより整形されている。口縁部内面には煤が付着している。859 は土師器竈の底部から体部にかけて。最下部より約 3cm は自重によりやや厚みを増しているが、それ以上については丁寧なハケにより器壁は 7～8mm に薄く保たれている。内外面ともに被熱による器壁の変色がみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀後半に位置付けられる。

溝 7 号（Ⅱ地区 SD1007）（第 172・342・359 図）

Ⅱ-1～3・13 区、 $\delta \cdot \varepsilon - IV$ n～j 13～15 グリッドに位置する。北は調査区外に延び、南は攪乱に切られる。検出長 60.5 m 幅 137cm 深度 48cm を測り、主軸は N10° W を向く南北方向の溝。

今回Ⅱ-13 区では西部、n～r 14・15 グリッドに位置し、検出長 25.5 m 幅 81cm 深度 19cm を測り、主軸は N4° W を向く。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、黒色土器碗（A 類 B 類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗・皿、白磁碗、砂岩製叩石・砂岩礫・チャート礫、が出土。掲載遺物は埋土上位から出土したものである。

860 は白磁碗の下半部。高台は細く高いもので、やや外下方に開く。体部外面は回転ヘラケズリのち粗い櫛目文を施文する。内面の底体部境に段を作る。釉は内面と体部外面下位まで掛けられ、細かい貫入を伴う。大宰府分類白磁碗Ⅴ-2・b 類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

861 は土師質土器鍋で、底部中央を欠く。体部外面に斜位のハケ、口縁内面と底部内面にヨコハケを施す。頸部外面は横位に連続した指頭圧痕を残す。外面煤付着。胎土に金雲母と花崗岩を含み、角閃石を含む可能性があることから、瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

遺構の年代は、前回出土の瓦器碗から概ね 12 世紀後半～13 世紀初頭に位置付けられる。

溝 34 号（Ⅱ地区 SD1034）（第 172・343・352・360 図）

Ⅱ-4・5・13 区、 $\delta - IV \cdot V \cdot \varepsilon - V$ q～g 19～1 グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長 73.8 m 幅 170cm 深度 60cm を測り、主軸は N7° W を向く南北方向の溝。今回Ⅱ-13 区では東部、q～b 20・1 グリッドに位置し、検出長 28.5 m 幅 183cm 深度 40cm を測り、主軸は N10° W を向く。断面は逆台形状で部分的に梯形となる。埋土は 3 層に分層できる。

遺物は、土師器高杯・羽釜、黒色土器片（A 類）・碗（A・B 類）、須恵器供膳具・杯・貯蔵具・蓋付杯身、土師質土器片・供膳具・皿・杯（回転ヘラきりほか）・煮炊具・羽釜・鍋、須恵質土器片・甕・貯蔵具・壺、瓦器片・碗・皿、瓦質土器片・羽釜、青磁（龍泉）碗、白磁皿、青白磁皿か、鉄刀・鉄滓（碗形ほか）、白碁石・砂岩製叩石・砂岩礫・チャート礫、が出土。

埋土中位から 867・869、下位から 862・863 が出土。

862～866 は瓦器碗。862 は和泉型瓦器碗Ⅲ-1 期（12 世紀後葉）、863～866 はⅡ-3～Ⅲ-1 期に位置付けられる。862 は底部を欠く。体部内面にやや密な横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。外面は磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着は内面～口縁外面まで良好で、以下は重焼により吸着なし。

863 は高台断面が幅広の逆台形状を呈する。口縁～体部内外面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みは平行または斜格子状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好だが、焼成はやや不良。864 は上半部。外面にやや密な横位のヘラミガキを施す。内面は横位・斜位のヘラミガキが確認できるが、弧を描くものがあるため螺旋状のヘラミガキか。炭素吸着・焼成ともに良好。

865 は底部を欠く。体部外面にごく粗い横位のヘラミガキ、内面にやや粗い横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状または連結輪状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は口縁内外面のみ良好で、内面やや不良、外面は吸着なし。焼成良好。866 は底部を欠く。体部内外面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに形状不明のヘラミガキを施す。内面は磨耗気味。炭素吸着良好。

867 は黒色土器 B 類碗の上半部。口縁内面に横位の沈線 1 条を引く。体部内面に密な横位のヘラミガキ、外面に横位のヘラミガキを施すとみられるが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好で、胎土も黒化する。焼成不良で、やや軟質。胎土はきわめて精良。末期の畿内系黒色土器碗か初期の楠葉型瓦器碗、もしくはその模倣品か。12 世紀前後であろうか。

868 は青白磁の皿とみられる破片。器壁は薄く、口縁端部は尖り気味に仕上げる。釉は透明度高く、貫入を伴う。口禿に作るが、搔き取りを施したものであろうか。合子蓋の可能性もあるが、復元径が大きい皿としておく。869 は土師器高杯または高脚高台付の皿であろうか。器壁厚い。回転台成形で、皿底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土に花崗岩を含むことから搬入品と考えられる。

870 は須恵質土器甕の底部である。体部外面は斜位の粗い平行タタキ、下端部はヨコナデを施す。底部外面は離れ砂とみられる砂粒が付着する。内面は横位のユビナデ・板ナデを施す。十瓶山系とみられるが、同地産かは不明。概ね 12 世紀代に位置付けられる。871 は鉄刀である。刀身の長さ 20.7cm 残存長 24.9cm を測る。茎の過半を欠く。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀代に位置付けられる。

溝 35 号（Ⅱ地区 SD1035）（第 172・344 図）

Ⅱ-4・5・13 区、 $\delta \cdot \varepsilon - IV p \sim g$ 18～20 グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長 74.4 m 幅 58cm 深度 46cm を測り、主軸は $N2^\circ W$ を向く南北方向の溝。

今回Ⅱ-13 区では東部、 $p \sim b$ 19・20 グリッドに位置し、検出長 28.4 m 幅 45cm 深度 21cm を測り、主軸は $N11^\circ W$ を向く。断面は方形に近い逆台形状で、壁面はほぼ直立する。埋土は 1 層で、しまりは弱い。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器片・貯蔵具、瓦器片・碗、常滑甕、肥前陶器皿、鉄釘、砂岩製砥石か・砂岩礫・チャート礫、が出土するが、実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの、概ね中世末～近世初頭に位置付けられる。

溝 38 号（Ⅱ地区 SD1038）（第 172・345・361 図）

Ⅱ-4・13 区、 $a \sim e$ 18・19 グリッドに位置する。北はⅡ-4 区に延びる。全長 23.2 m 幅 105cm 深

度 16cmを測り、主軸は N8° W を向く南北方向の溝。今回 II - 13 区では東部、a・b 19 グリッドに位置し、検出長 6.9 m 幅 30cm 深度 3cm を測り、主軸は N10° W を向く。南の延長上に SD1112 があり、同一遺構の可能性あり。断面は浅い船底状で、埋土は 1 層である。

遺物は、土師質土器片・供膳具・皿、瓦器片、鉄製鑿、が出土。872 は鉄製の鑿とみられる。断面は扁平な長方形を呈する。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられる。

溝 108 号 (II 地区 SD1108) (第 172・346・362 図)

II - 13 区東部南側、s・t 3 グリッドに位置する。全長 7.4 m 幅 63cm 深度 7cm を測り、主軸は N1° W を向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は 1 層である。東に同方位の主軸をもつ建物 SA1087 が隣接する。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

873 は瓦器椀で、底部を欠く。焼成不良により磨耗著しく、調整不明瞭でヘラミガキは確認できない。口縁内面にヨコナデにより弱い稜を作る。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀の在り地模倣品であろう。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 109 号 (II 地区 SD1109) (第 172・347 図)

II - 13 区東部南側、 $\delta \cdot \varepsilon - V r \sim a$ 3 グリッドに位置する。全長 11.0 m 幅 55cm 深度 8cm を測り、主軸は N13° W を向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土するが、実測可能な遺物はない。

溝 110 号 (II 地区 SD1110) (第 172・348・363 図)

II - 13 区東部南端、q ~ s 1・2 グリッドに位置する。北側を SK11191 に切られる。検出長 6.7 m 幅 130cm 深度 60cm を測り、主軸は N20° W を向く南北方向の溝。断面は U 字状で西側に段をもつ。埋土は 4 層に分層できる。遺物は、黒色土器椀 (A・B 類)、須恵器供膳具・蓋杯杯身、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

874 は黒色土器 B 類椀の底部である。見込みに密な分割ヘラミガキを施す。炭素吸着良好。

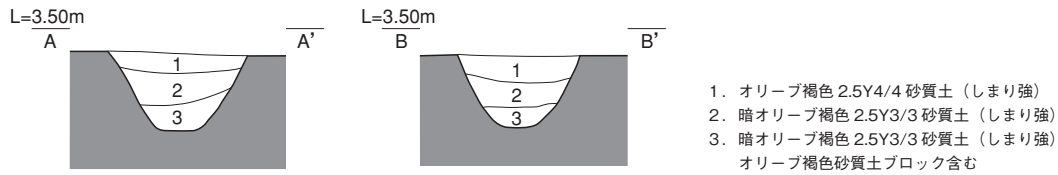
遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀前後に位置付けられる。

溝 113 号 (II 地区 SD1113) (第 172・349・364 図)

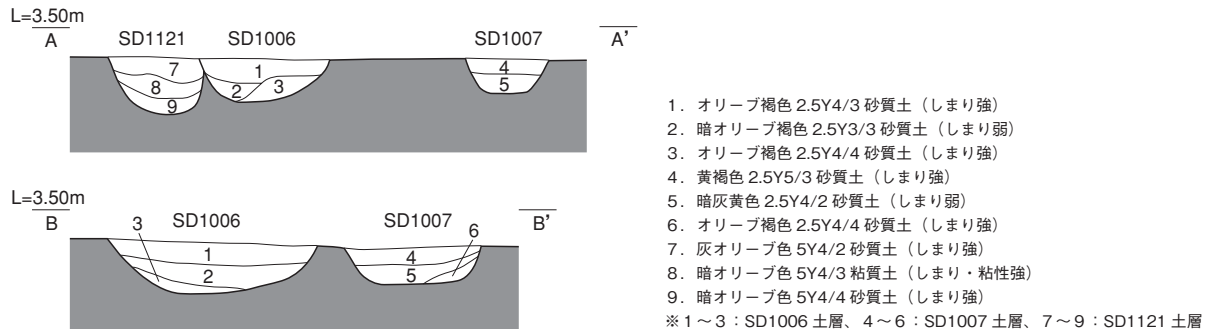
II - 13 区中央部、r ~ t 19・20 グリッドに位置する。全長 13.2 m 幅 39cm 深度 7cm を測り、主軸は N11° W を向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は 1 層である。北の延長上に SD1038 が位置するため、同一遺構の可能性ある。SD1112 ~ 1114 が狭い範囲で並行し、南端部を揃える。

遺物は、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器片・捏鉢、瓦器片・椀、瓦質土器片・角火鉢・丸瓦、常滑甕、中世陶器貯蔵具、が出土。

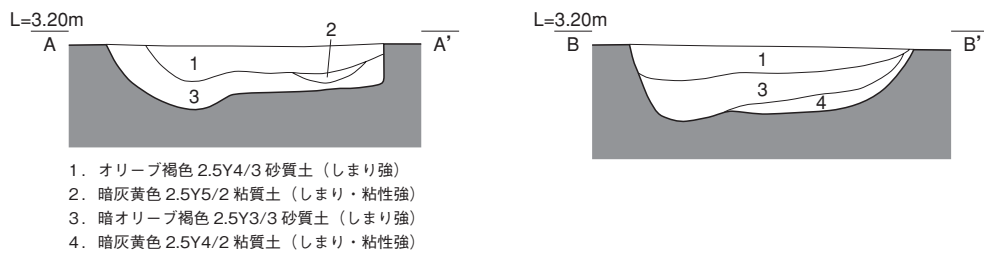
875 は瓦質土器角火鉢の体部片で、器高の低い浅鉢形を呈するもの。内面は縦位のヘラミガキ、外面は菊花文スタンプを 2 ヶ所および横位のヘラミガキを施す。全体的に磨耗気味で、調整は不明瞭。炭素吸着は内面にみられず、外面良好。火鉢の生産地についてはまず大和が挙げられる。本品は、胎土・燻し・焼成および縦位のヘラミガキについて、大和産として違和感はないものの、外面の菊花文スタンプ



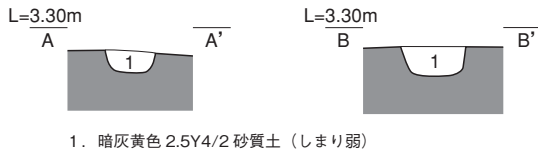
第341図 II-13区 SD1005 遺構断面図



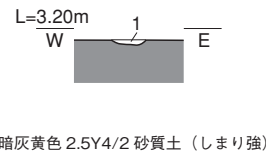
第342図 II-13区 SD1006・1007・1121 遺構断面図



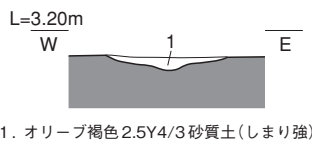
第343図 II-13区 SD1034 遺構断面図



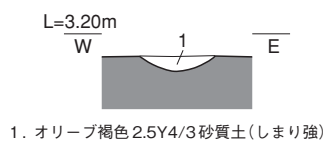
第344図 II-13区 SD1035 遺構断面図



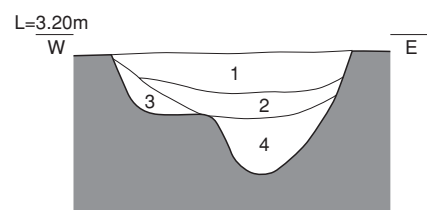
第345図 II-13区 SD1038 遺構断面図



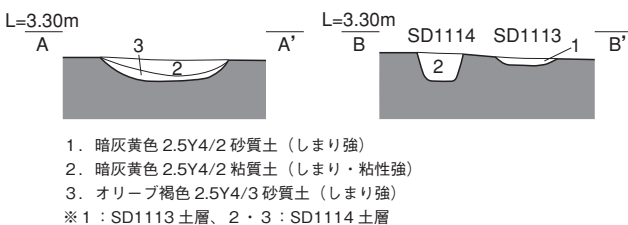
第346図 II-13区 SD1108 遺構断面図



第347図 II-13区 SD1109 遺構断面図

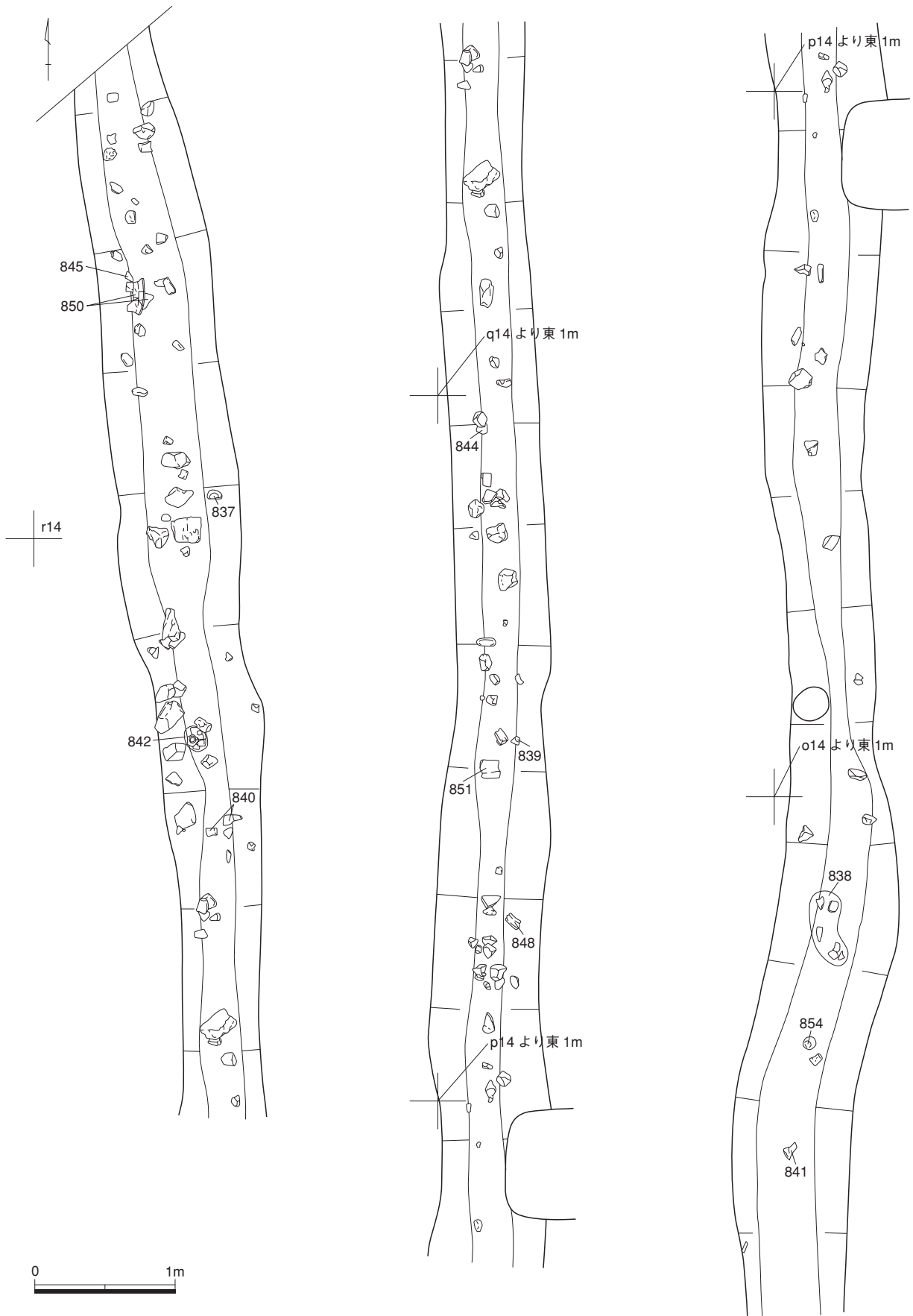


第348図 II-13区 SD1110 遺構断面図

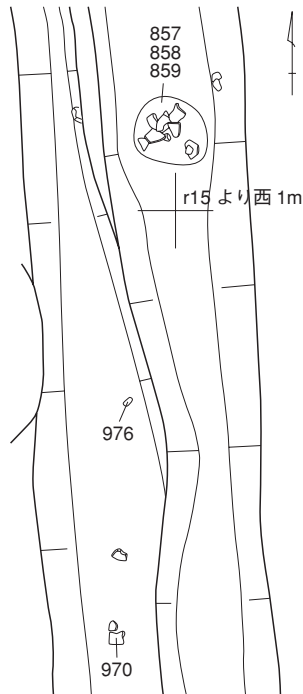


第349図 II-13区 SD1113・1114 遺構断面図

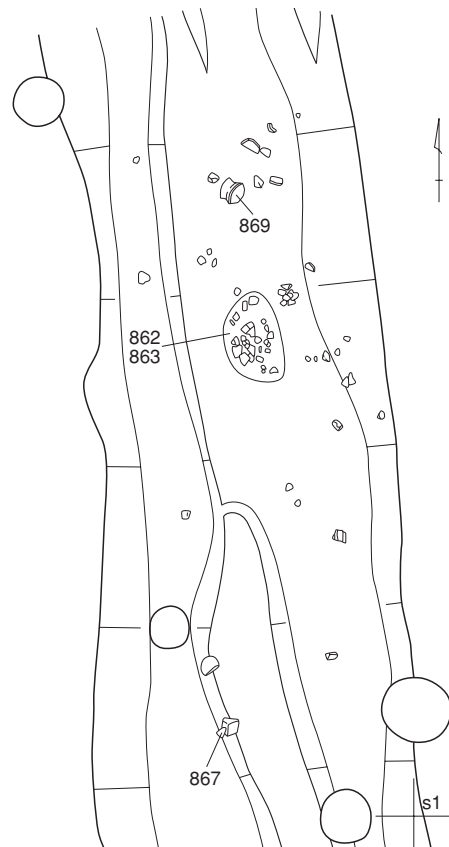




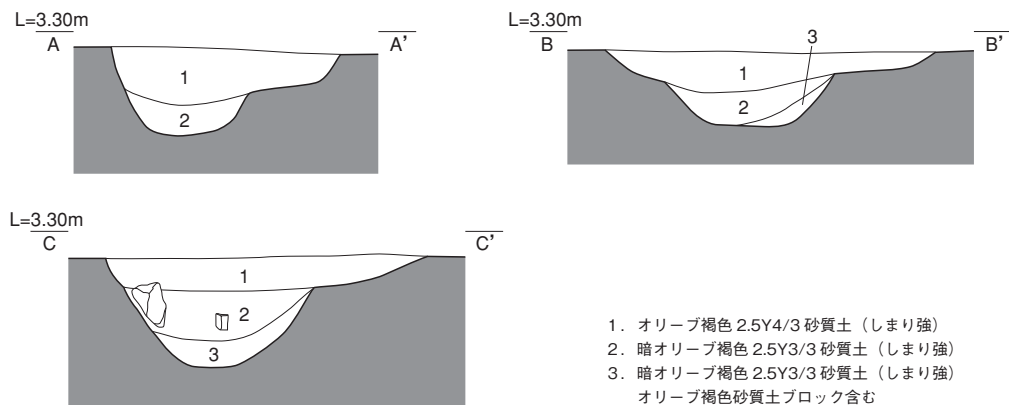
第 350 図 II - 13 区 SD1005 出土平面図



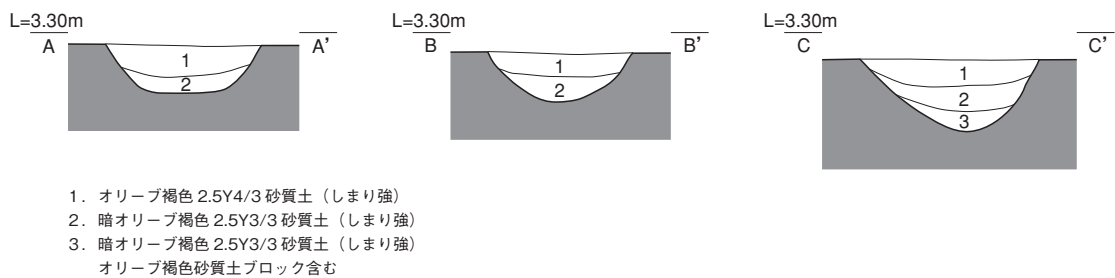
第351図 II-13区 SD1006・1121 出土平面図



第352図 II-13区 SD1034 出土平面図

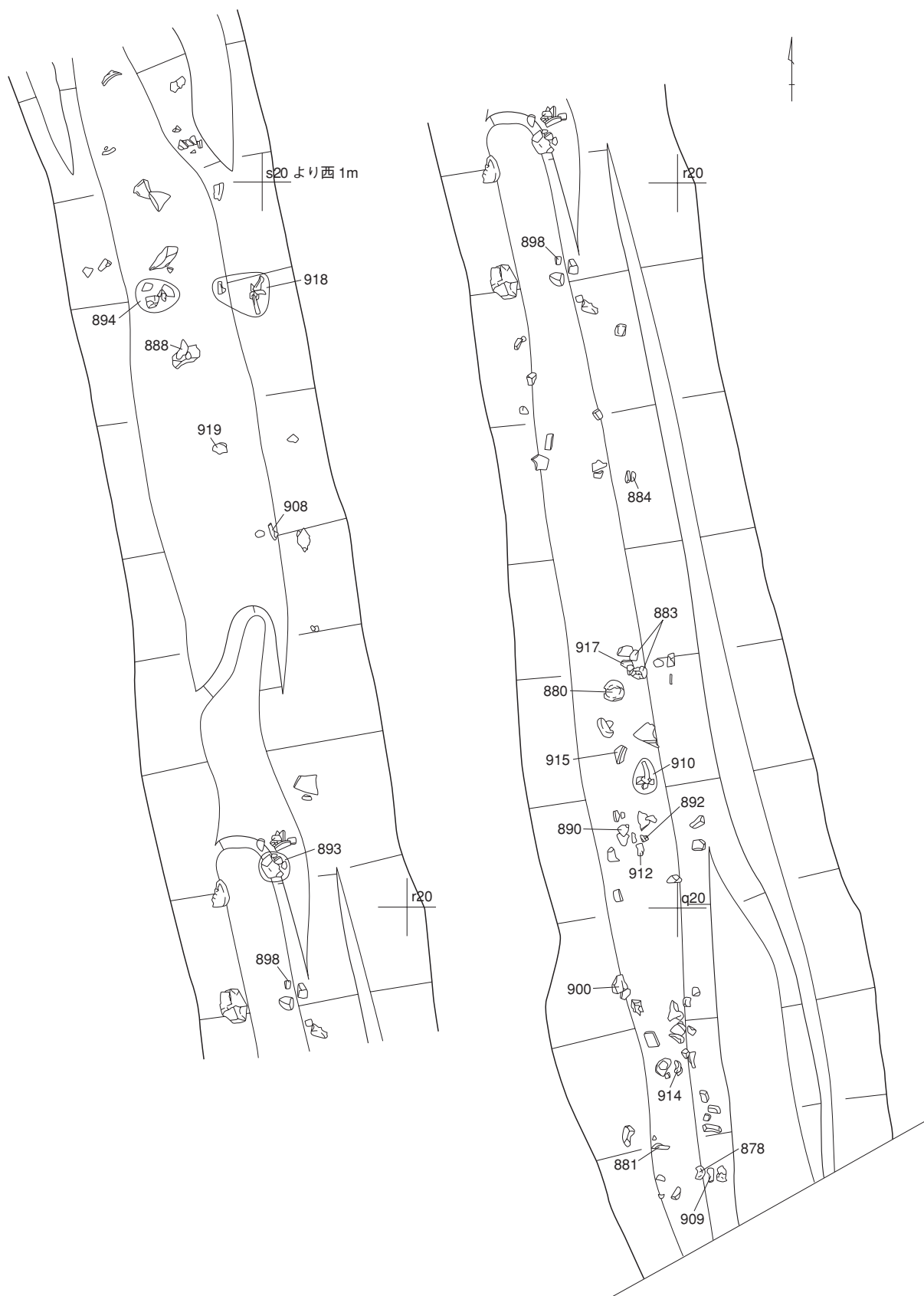


第353図 II-13区 SD1115 遺構断面図

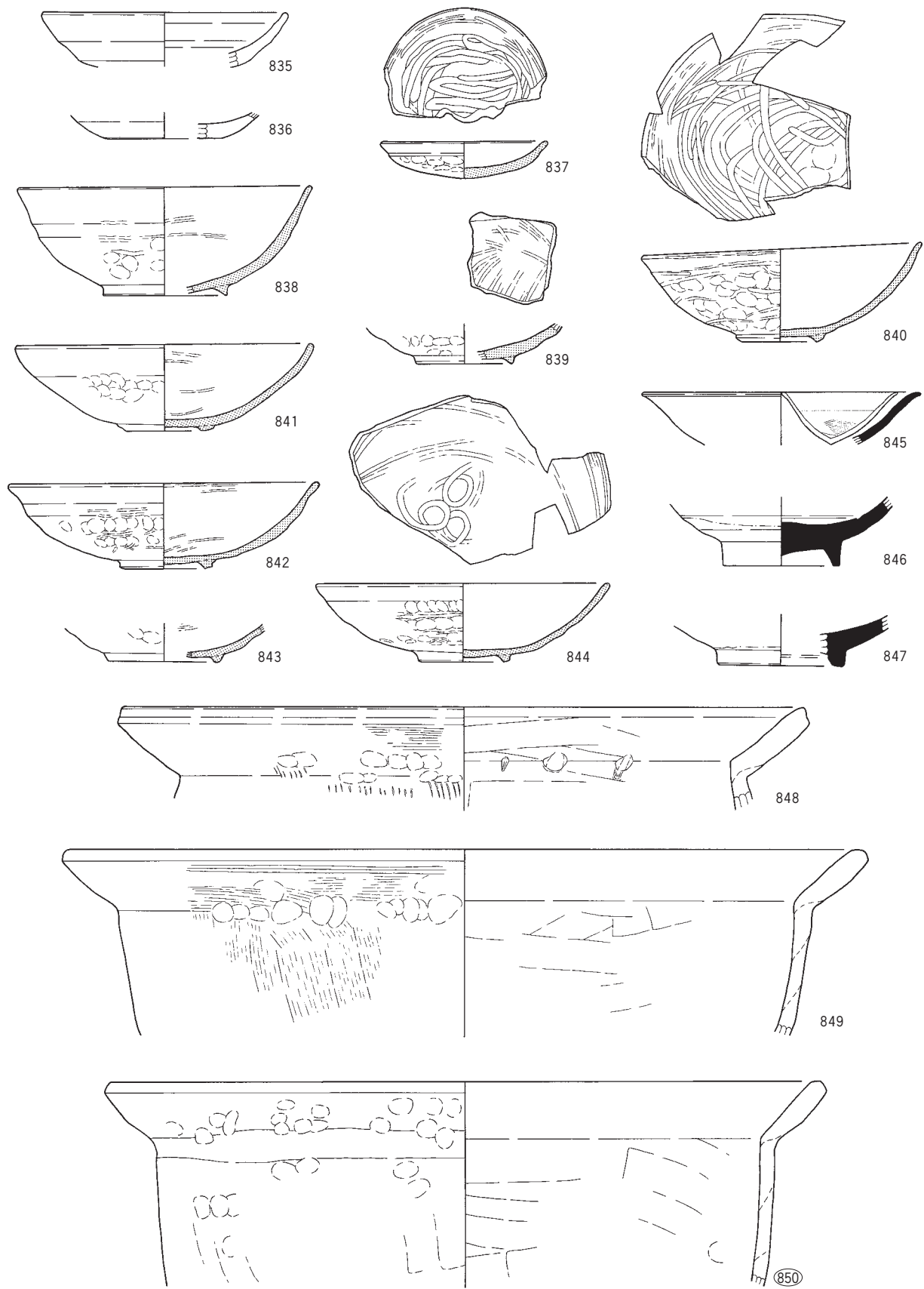


第354図 II-13区 SD1116 遺構断面図



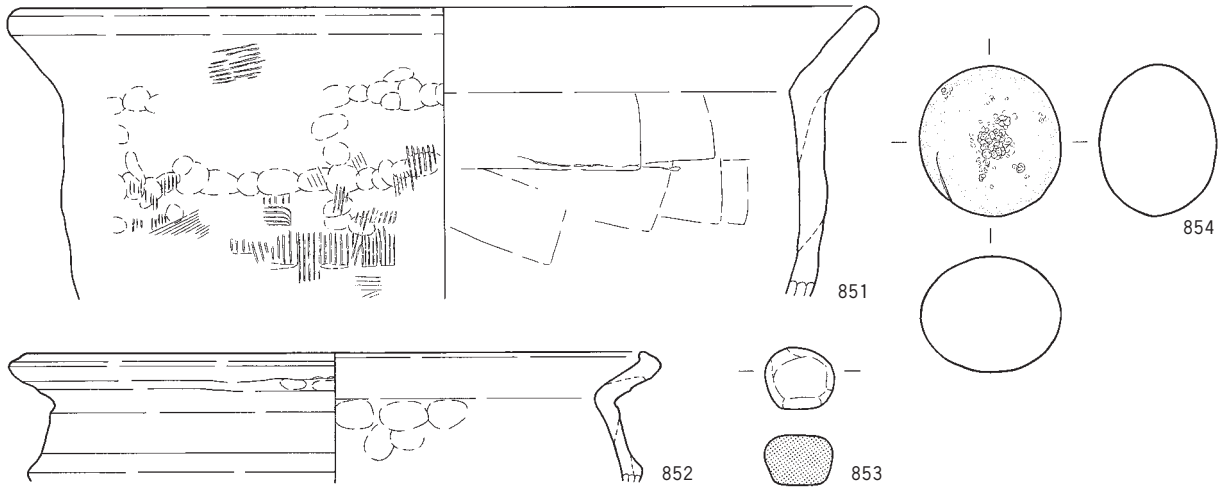


第 355 図 II - 13 区 SD1115 出土平面図

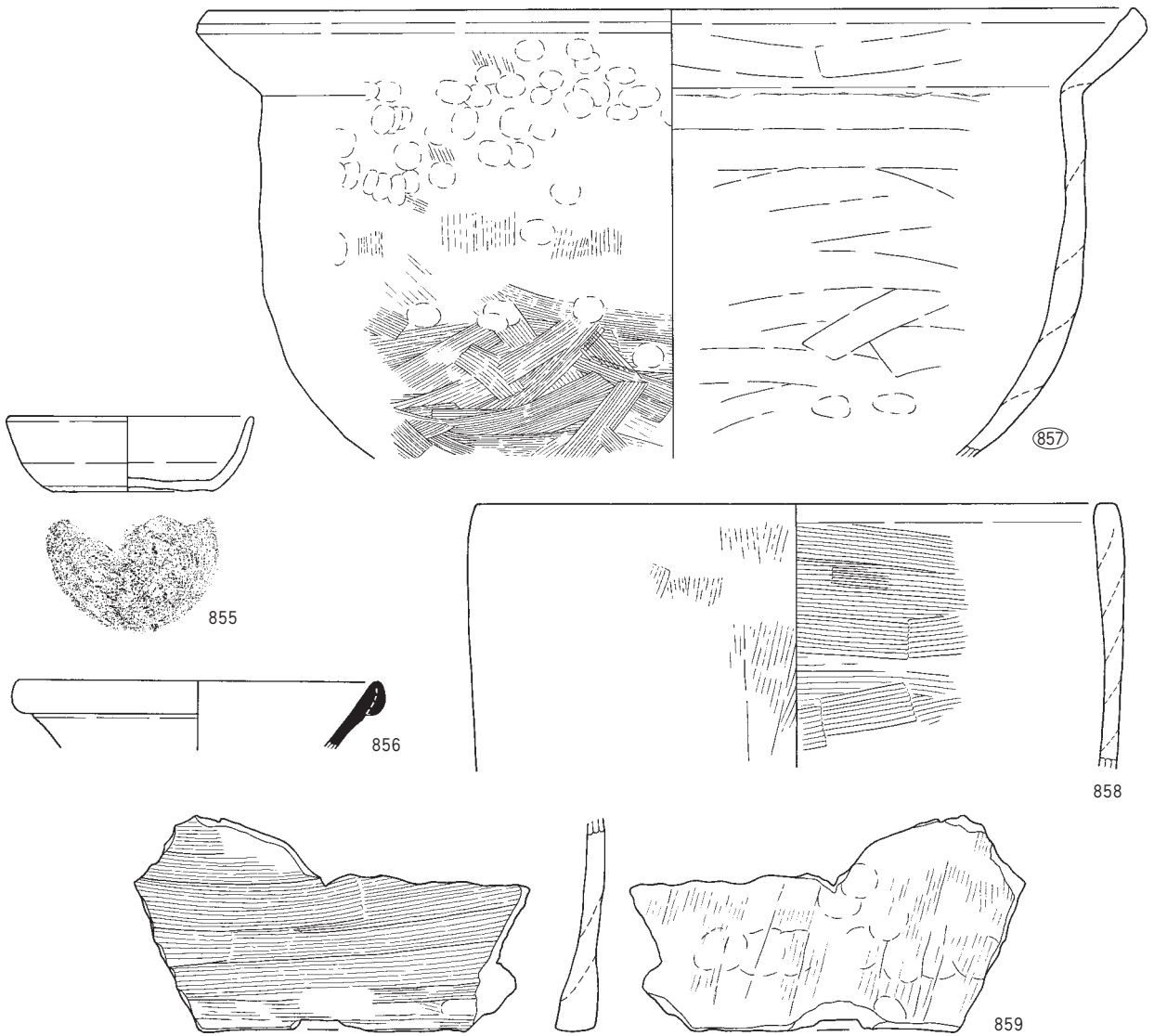


第356图 II-13区 SD1005遺物実測図(1)

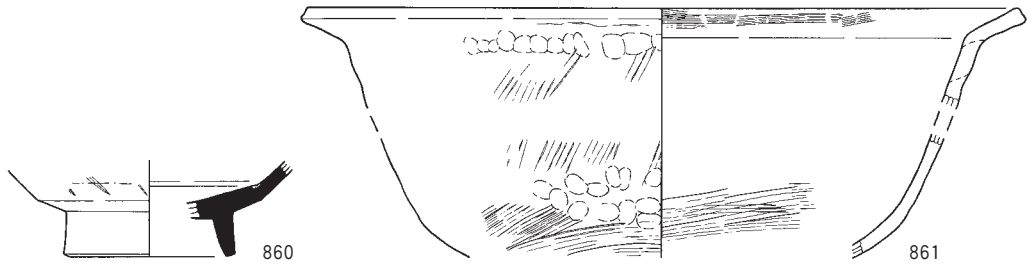
0 10cm



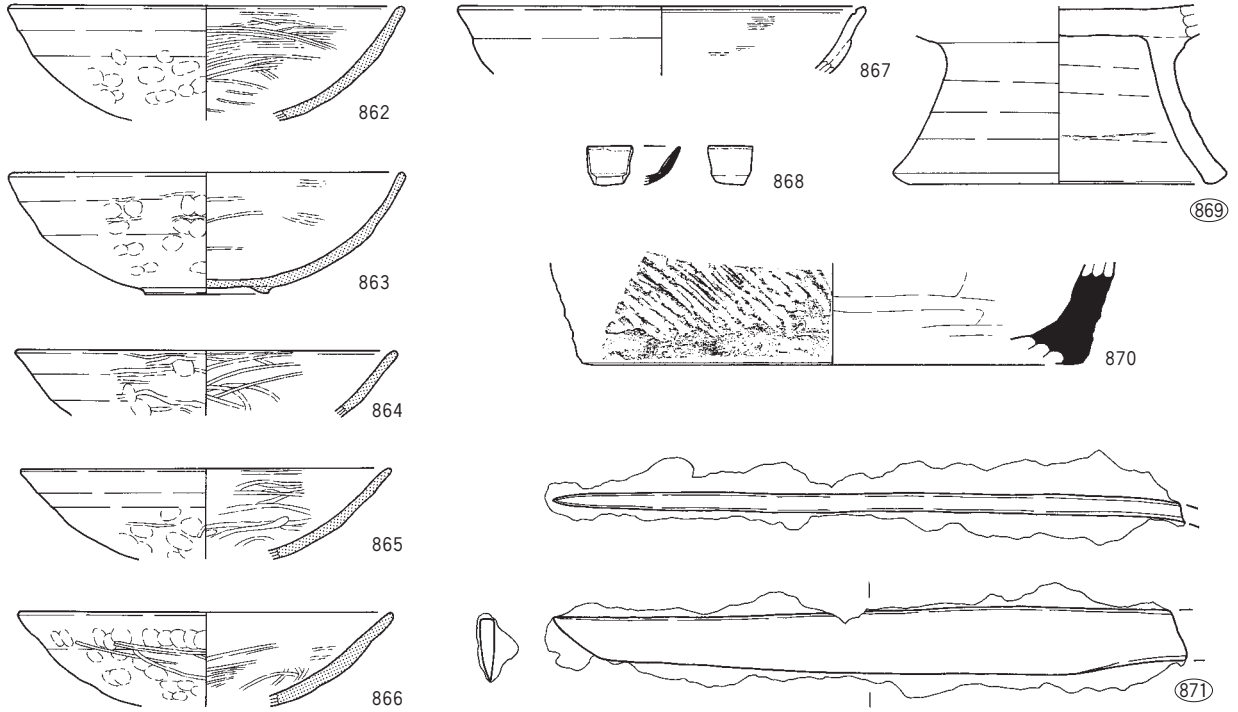
第357图 II-13区 SD1005遺物実測図(2)



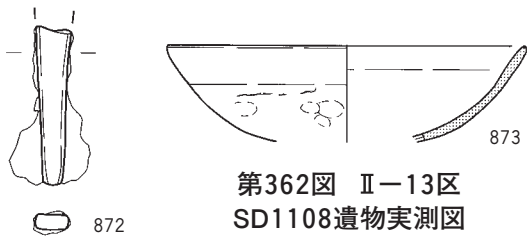
第358图 II-13区 SD1006遺物実測図



第359図 II-13区 SD1007遺物実測図

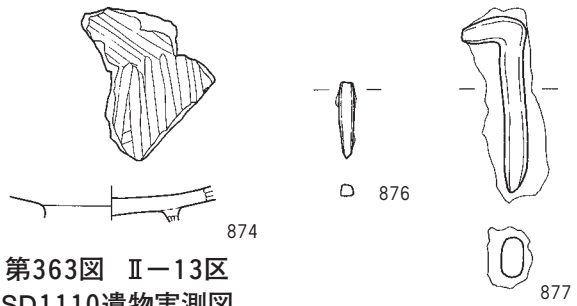


第360図 II-13区 SD1034遺物実測図



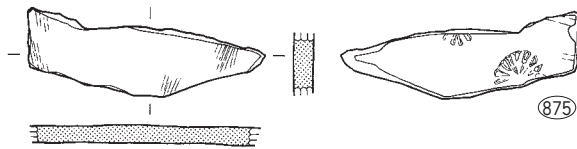
第362図 II-13区
SD1108遺物実測図

第361図 II-13区
SD1038遺物実測図



第363図 II-13区
SD1110遺物実測図

第365図 II-13区
SD1114遺物実測図



第364図 II-13区 SD1113遺物実測図



が小さく器壁も薄いことから同種の火鉢としては小型の部類に属するものである。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 114 号 (Ⅱ地区 SD1114) (第 172・349・365 図)

Ⅱ - 13 区中央部、 $\delta \cdot \varepsilon - IV r \sim b 19 \cdot 20$ グリッドに位置する。北側は調査区外に延びるがⅡ - 4 区には延びない。検出長 22.0 m 幅 70cm 深度 15cm を測り、主軸は $N11^\circ W$ を向く南北方向の溝。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。SD1112 ~ 1114 が狭い範囲で並行し、南端部を揃える。

遺物は、須恵器片、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、瓦質土器片・丸瓦、常滑甕、青磁碗、鉄製品片・鉄釘・鉄滓、が出土。

876 は鉄釘の先端部である。877 は鑿か釘とみられる鉄製品で、頂部を L 字に屈曲させ頭部を作る。断面は隅丸長方形を呈する。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 115 号 (Ⅱ地区 SD1115) (第 172・353・355・366 ~ 368 図)

Ⅱ - 13 区中央部、 $\delta \cdot \varepsilon - IV p \sim b 18 \sim 20$ グリッドに位置する。南北とも調査区外に延びる。北は未調査区を挟んでⅡ - 3 区に延びるとみられるが、SD1012 ~ 1015 のどれに繋がるのか特定できなかった。検出長 28.6 m 幅 180cm 深度 85cm を測り、主軸は $N10^\circ W$ を向く南北方向の溝。断面は逆台形状または U 字状で、東側に段をもつ。埋土は 3 層に分層できる。

遺物は、土師器甕・羽釜、黒色土器椀 (A・B 類)、須恵器片・貯蔵具、土師質土器片・供膳具 (回転糸切りほか)・皿・杯 (ともに回転糸切り・ユビオサエほか)・煮炊具・羽釜・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器羽釜 (脚部ほか)・煮炊具 (脚部ほか)・鍋・鍋か羽釜・火鉢か、常滑甕、青磁 (龍泉) 碗 (蓮弁ほか)、白磁片・白磁碗 (口禿ほか)、羽口・羽口または溶解炉壁、鉄製品片・鉄滓・スラグ、滑石製石鍋片・砂岩製叩石・砂岩製円礫・砂岩礫・結晶片岩礫・チャート礫、が出土。

埋土中位から 888・908・918、埋土下位から 883・884・917・919、遺構底部から 878・880・881・890・892 ~ 894・898・900・909・910・912・914・915 が出土。

878・879 は回転台成形の土師質土器皿である。878 は回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。879 は磨耗により底部の切離し技法は不明。焼成不良により軟質。胎土に在地花崗岩を含む。

880 ~ 882 は回転台成形の土師質土器杯で、底部外面に回転糸切り痕を残す。880 は磨耗著しく切り離し痕不明瞭。焼成不良。胎土にチャートを含む。881 は板目痕を伴うが、磨耗著しく不明瞭。焼成不良。胎土は精良で、チャートを含む。882 は体部が内彎する。弱い板目痕を残す。内外面に煤付着。

883 は非回転台成形の土師質土器杯。底部外面に約 3cm の幅で布目圧痕が付く。布を巻いた木板を押し当てたか、またはその上に置いて乾燥させた痕跡であろうか。胎土にチャートを含む。884 は土師質土器杯である。非回転台成形とみられるが、焼成不良により磨耗著しいため調整不明瞭。胎土に在地花崗岩を含むとみられる。京都系土師皿 E タイプの在地模倣品か。13 世紀代か。

885 は回転台成形の土師質土器杯上半部。体部は内彎する。886 は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土にチャートを含む。焼成不良により磨耗気味。887 は回転台成

形の土師質土器杯である。底部の切離し技法は磨耗により不明。焼成不良により軟質で、体底部に炭素の付着がみられ、胎土もやや黒化する。

888～896は瓦器碗である。888は底部中央を欠く。高台断面は低平な逆台形状を呈する。底部は器壁が厚めで、口縁にかけて厚みを減じる。磨耗著しく調整不明瞭で、内面は調整不明。炭素吸着なし。胎土は粗く、花崗岩粒を含む。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられる。889は上半部で、小片のため復元径過大、かつ歪みのため本来の傾きはやや立つものと推測できる。内面にごく粗い横位のヘラミガキを施す。口縁のみ部分的に炭素吸着し、他の部位は吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当する。胎土にチャートを含むとみられるが不確定。

890～892は和泉型瓦器碗Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当する。890は低平な器形で歪みあり。高台はごく低いもので、貼り付け方はきわめて粗雑。内面の口縁～体部に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行状とみられるヘラミガキ暗文を施すが不明瞭。炭素吸着良好だが、焼成は不良。891は上半部。内面にごく粗いヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成ともに良好。892は高台が低平で、貼り付け方はきわめて粗雑。焼成不良により磨耗著しく調整不明瞭。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で、部分的に酸化炎焼成する。胎土は粗い。高台の形状・焼成および胎土から模倣品の可能性もあり。

893～896は模倣品の疑いがある瓦器碗である。893は器形が低平で歪む。高台断面は低い逆三角形状で貼り付けは粗雑。口縁外面のヨコナデは弱く不明瞭。底部～体部下位は器壁が薄い、体部上位から口縁にかけて肥厚する。焼成不良により磨耗し、調整は不明瞭でヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面不良、外面やや不良。器形や調整から和泉型の模倣品である疑いがあり、和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期に併行か。

894は口縁端部がヨコナデによって尖り気味に仕上げる。高台はきわめて低平で、退化著しい。焼成不良により磨耗著しく調整不明瞭。炭素吸着は口縁および外面の一部にみられるのみで、他は吸着なし。口縁は細るものの器壁は全般的に厚い。胎土に砂岩を含むことから在地産の疑いがある。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期（13世紀前葉）、またはその併行期か。

895は口縁に強いヨコナデを施すことによって内面にも稜をつくる。高台は幅広で低平。焼成不良により磨耗しヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。胎土に砂岩やチャートを含む。在地産瓦器碗と考えられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.6）、蛍光X線分析では和泉型の領域に入るものの、実体顕微鏡観察では絹雲母を含むという結果を得ている。

896は下半部。高台はきわめて低平で、粗雑に貼り付ける。器壁は厚く、最大6mmを超える。焼成不良で軟質のため磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面やや不良で、外面は吸着なし。胎土は比較的粗い。和泉型瓦器碗の模倣品とみられ、高台の形状から概ね13世紀代と考えられる。

897は口禿の白磁皿。小片のため復元径不正確。口縁はやや外反する。口縁端部は釉を掻き取る。大宰府分類白磁皿Ⅸ-1・b類か同c類（13世紀中頃～14世紀初頭）とみられる。898は白磁碗の上部。口縁を玉縁につくる。釉は部分的に厚く、外面に釉垂れがみられる。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当する。

899は青磁碗の上部。体部内面にヘラ片彫によって花文を施すが、文様の周囲を削って陽出したように見える。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類（12世紀中頃～後半）とみられる。破面のエッジが部分的に磨耗しており、スクレイパー的な用途に転用したものと考えられる。900は青磁碗の下半部。体部外面にヘラ片彫によって鑄蓮弁文を施文する。高台外面まで施釉し、一部は畳付を越えて高台内側に

まわる。釉は透明度高く貫入あり。大宰府分類 I - 5・b 類（13 世紀初頭～前半）に相当。

901～903 は紀伊型土師質土器鏝付鍋の上部である。901 は口縁端部を内上方にわずかに折り曲げる。頸部外面は強いヨコナデによって凹線状に作る。体部外面はユビナデ痕を残す。胎土は粗く、結晶片岩を含む。概ね 13 世紀代とみられる。

902 は口縁端部を内上方に拡張する。頸部外面は強いヨコナデ、体部外面はユビナデで調整する。断面がきわめて低平な三角形の鏝部を貼り付ける。内面は横位のユビナデを施すとみられる。外面に部分的に煤付着。胎土は粗く、結晶片岩とチャートを含む。鏝部が退化した形状から概ね 13 世紀後半に位置付けられる。

903 は口縁端部をわずかに内方に折り返す。頸部外面は強いヨコナデによって凹線状に作る。体部外面上位に、断面が低い三角形の鏝部を貼り付ける。体部内外面はユビナデ痕を残す。うち内面上位のユビナデ痕はそれぞれ中央部にごく弱い稜があるが、指の第 1 関節部分であろうか。胎土は粗く、チャートを含む。鏝部の形状から概ね 13 世紀後半の年代が与えられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料 No. 26）、蛍光 X 線分析では紀伊型鍋の試料 No. 24 と近似し、実体顕微鏡観察では黒雲母およびチャート・砂岩が確認された。

904・905 は土師質羽釜の上部で、広島県東部～岡山県西部からの搬入品と考えられる。904 は口縁から 1cm 下に断面台形状の鏝部を貼り付ける。口縁・鏝端部とも方形に作る。内面および口縁外面はヨコハケを施す。外面煤付着。胎土に金雲母と角閃石を含む。905 は体部が直線的で、やや開き気味に伸びる。口縁に近接して断面台形状の短い鏝部を貼り付ける。鏝部の上下に指頭圧痕を残し、体部外面は粗いタテハケを施す。内面は横位の板ナデを施す。口縁～外面にかけて煤付着。胎土に角閃石や花崗岩を含む。

906 は土師質土器羽釜脚部の上部。本体との取り付け部から大きく屈曲して下方に伸びる。胎土は粗く砂岩やチャートを含むことから在地産と考えられる。吉野川下流域や沿岸域においては、15 世紀以降は無脚の羽釜がほとんどを占めること、胎土に花崗岩や金雲母を含む搬入品が主体となることから、本品の年代は概ね 13 世紀後半から 14 世紀代と考えておく。

907～910 は瓦質羽釜脚部。いずれも明瞭な屈曲部をもたずにスムーズに伸びるものである。907 は外面に縦位の板ナデ痕が明瞭。炭素吸着は外面やや不良、内面は吸着なし。908 は鏝部の直下に取り付く。縦位の板ナデ・ユビナデで仕上げる。上位外側に横位の浅い傷がみられ、新しいものではないが意図的なものかは不明。炭素吸着は体部内面不良、脚部外面良好だが、脚部内側は二次被熱のためカーボンを消失。909 は鏝部直下に取り付く。炭素吸着良好だが、焼成不良により磨耗する。胎土にチャートを含む。910 は外面を縦位のユビナデによって仕上げる。炭素吸着は内面やや不良、外面良好であるが、脚部内側は被熱によりカーボン消失。909 が在地産の可能性をもつほかは全て山城型瓦質羽釜の搬入品とみられる。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

911～918 は瓦質羽釜の上部または上半部である。911 の体部は内彎し、口縁からやや下がった位置に鏝部を貼り付ける。口縁端部は丸く収めるが、鏝端部は方形を意識する。焼成不良で磨耗により調整は不明瞭。山城型瓦質羽釜で、有脚タイプとみられる。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

912 は鏝部を貼り付け、端部を方形に作る。口縁は高く、端部は丸く仕上げる。外面はヨコナデ、内面は横位の板ナデを施すが、磨耗により調整不明瞭。炭素吸着・焼成ともにやや不良。胎土にチャートを含むとみられるが不確定。5mm 大の石英粒を含む。山城型瓦質羽釜の模倣品とみられるが、在地産であるかは不明。概ね 13 世紀後半に位置付けられる。

913 は鏝部を貼り付けで作る。鏝断面は台形状で、端部は方形を意識するがエッジは鈍い。口縁端部はやや上方に引き上げ、尖らせ気味に作る。外面はヨコナデ・ナデ、内面は横位の板ナデを施すが、軟質焼成により磨耗のため調整不明瞭。炭素吸着不良。形状は山城型瓦質羽釜に近似するが、胎土にチャートを含むことから模倣品と考えられる。在地産かは不確定。13世紀代か。

914 は体部から口縁にかけて大きく内傾する。球形の体部をもつことから有脚タイプとみられる。鏝部は口縁からやや下がった位置に貼り付ける。断面は低い逆台形状で、口縁・鏝両端部とも方形に仕上げる。内面は横位の板ナデを施す。炭素吸着は外面～口縁内面が良好、体部内面は不良。焼成不良により軟質で、調整不明瞭。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられ、13世紀代の年代が与えられる。

915 は鏝部を貼り付けで作る、断面はやや低い台形状を呈する。口縁・鏝ともに端部は方形に作る。鏝部下面にハケ状の擦痕が確認できるが、これは工具を用いたものではなくヨコナデによるものと考えられる。内面は磨耗によって不明瞭ながら、ヨコハケを施す。炭素吸着は良好だが胎土は酸化炎焼成気味で、軟質である。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられる。

916 は鏝部を貼り付けで作る、断面は低い台形状を呈する。鏝・口縁両端部は方形を意識する。内面は横位の板ナデを施す。炭素吸着・焼成ともに良好。山城型瓦質羽釜の搬入品と考えられ、13世紀代に位置付けられる。

917 は小片のため復元径は不正確。口縁端部は内外にやや拡張し、平坦な端面を作る。鏝部は水平に伸び、端部を尖らせる。口縁・鏝間はヨコナデにより弱い段状の稜を作る。内面は横位の板ナデを施すとみられる。炭素吸着は内面不良、外面良好。焼成不良により軟質。形状から河内型羽釜の可能性が考えられるが不確定。

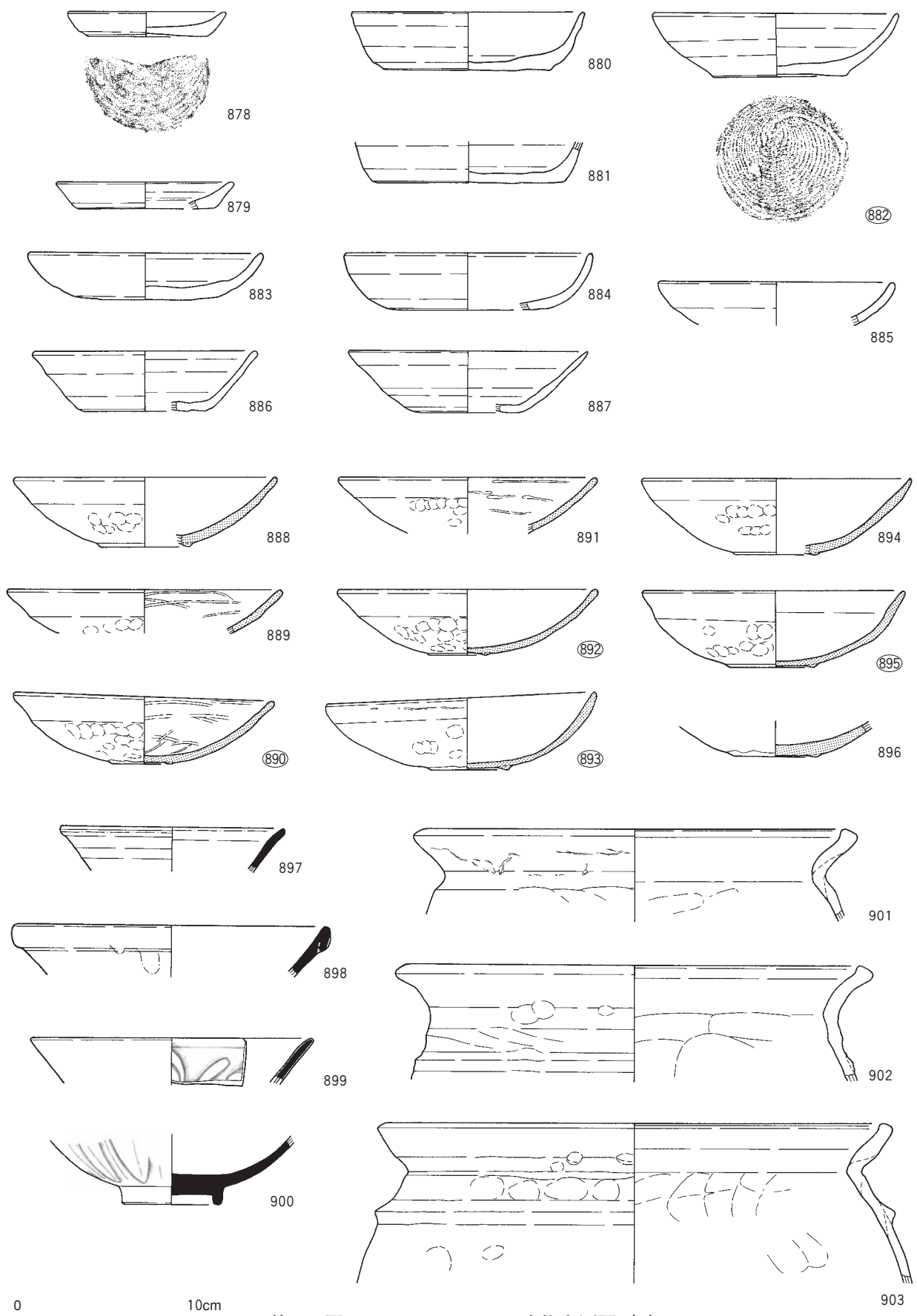
918 は球形の体部をもち、体部から口縁にかけて大きく内彎する。鏝部は貼り付けで作る、断面逆台形状を呈する。口縁・鏝とも端部を方形に仕上げるが、鏝端部はやや丸みを帯びる。脚部は鏝下端から約1cm下がった位置から取り付き、明瞭な屈曲部をもたずに下方へと伸びる。外面はユビオサエ・ナデ、内面は板ナデを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面不良、外面やや不良。焼成不良により軟質。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられるが、胎土に砂岩と疑われる粒子を含むため模倣品の可能性も考えられる。概ね13世紀代に位置付けられる。

919 は瓦質土器鍋で、頸部～体部のみ残存。体部外面は平行タタキを施す。頸部外面はヨコハケ状の痕跡を残すが、ヨコナデによるものか。内面の調整は磨耗により不明。炭素吸着はやや不良。外面に炭化物の付着がみられる。焼成不良で、軟質のため磨耗する。産地・時期は特定できない。

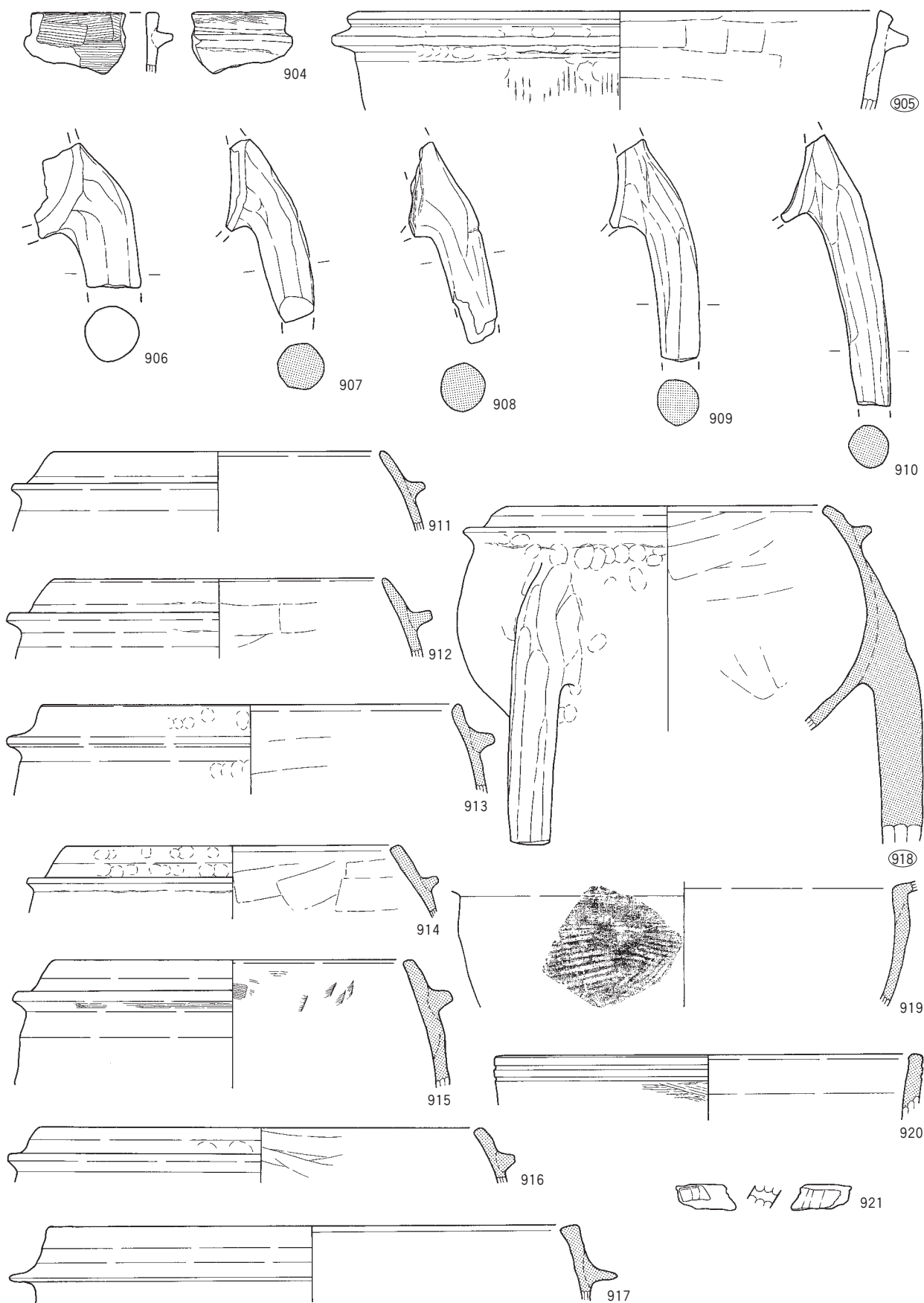
920 は瓦質土器の上部である。小片のため復元径は不正確。わずかに外傾し、口縁外面に2条の沈線を施す。体部外面には緻密な横位のヘラミガキを施す。内面はヨコナデを施すとみられるが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好であるが、焼成はやや軟質。ヘラミガキを施すことから煮炊具等の日用雑器ではなく、火鉢等の奢侈品であろうと考えるが、この器形は大和近隣では目にしない。

921 は滑石製石鍋の体部片である。内面に横位のケズリ、外面に縦位のケズリを施す。

922～924 は東播系須恵質土器捏鉢である。922 は上半部。口縁は上方に拡張。口縁外面に重焼による炭素付着。体部外面に縦位の工具痕を残す。一見すると櫛状の播目原体によって一回で施した様にも見えるが、実際には数度にわたって繰り返す。意図は不明。体部内面は回転ナデのち斜位のユビナデ痕を残す。体部内面下位は使用により剥離・磨耗。焼成不良によりやや軟質。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。923 は口縁端部を上方に拡張。重焼痕は確

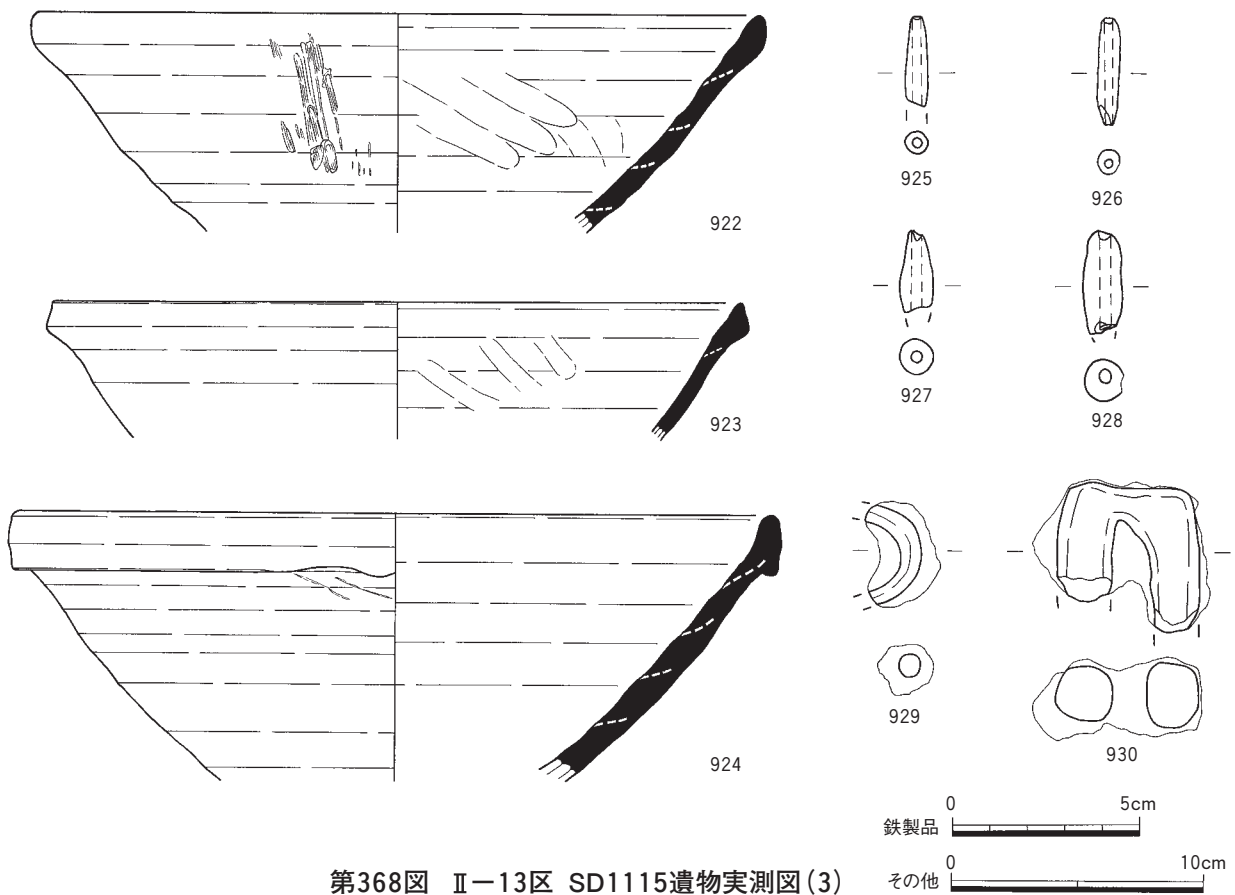


第366图 II-13区 SD1115遺物実測図 (1)



第367图 II-13区 SD1115遺物実測図(2)

0 10cm



第368図 II-13区 SD1115遺物実測図(3)

認できない。内面は回転ナデのち斜位のユビナデ痕を残す。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。924は底部を欠く。口縁は大きく上下に拡張し、外側に広い端面を作る。口縁外面は重焼により自然釉付着。内面は使用により磨耗し、とくに下半部は剥離が著しい。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅲ期第2段階（14世紀前半）に相当。

925～928は土師質管状土錘。925は細身。焼成不良により軟質で、磨耗する。

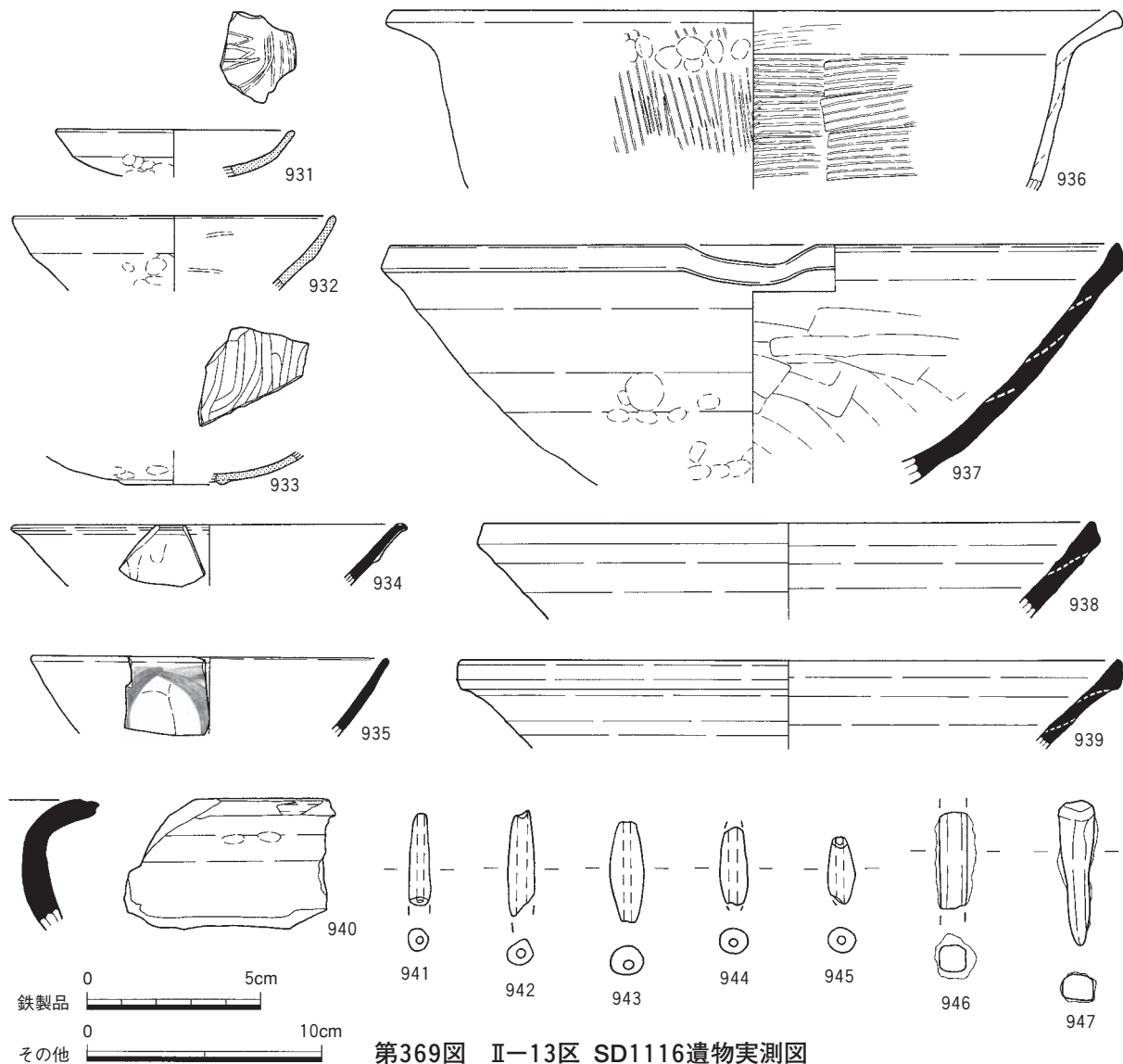
926は胴部に膨らみをもたない。焼成不良で軟質のため磨耗する。外面に炭素の付着がみられ、胎土も黒化する。在地花崗岩を含むとみられるが不確定。927は焼成不良により磨耗気味。928は比較的大型品。焼成不良により軟質で、磨耗する。胎土にチャートを含む。

929は半円状を呈する鉄製品で、欠損により全体の形状は不明。930はコの字形を呈する用途不明鉄製品である。錆による亀甲形の亀裂が生じていることから铸造品とみられる。

遺構の年代は、瓦器碗がⅣ-1期を主体とすること、口禿の白磁（897）が出土していることから概ね13世紀中頃がピークで、東播系捏鉢（924）の年代から14世紀前半にかけて存続したと考えられる。

溝116号（Ⅱ地区 SD1116）（第172・354・369図）

Ⅱ-13区中央部、 $\delta \cdot \varepsilon - IV p \sim a 18 \cdot 19$ グリッドに位置する。南北とも調査区外に延びる。北Ⅱ-3区に延びるとみられるが、SD1012～1015のいずれに繋がるか特定できない。検出長28.0m幅115cm深度36cmを測り、主軸はN11°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は3層に分層できる。



第369図 II-13区 SD1116遺物実測図

遺物は、黒色土器片（A類か・B類）・碗（A・B類）、須恵器片・貯蔵具・蓋付杯身、土師質土器片・供膳具（回転糸切りほか）、皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢か・甕・貯蔵具、瓦器片・碗・皿、瓦質土器羽釜、常滑甕、青磁碗（蓮弁）、白磁碗、鉄製品片・鉄釘・鉄滓、砂岩製砥石・砂岩礫・チャート礫、が出土。

931は瓦器皿で、底部中央を欠く。内面の口縁～体部にかけてやや粗い横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅱ～Ⅲ期前半頃とみられる。

932は瓦器碗の上半部。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当。933は瓦器碗の下半部。高台断面はきわめて低平な逆台形状で退化著しい。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みは螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施す。ミガキの幅は太い。炭素吸着は外面良好、内面は吸着なし。焼成良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当。

934 は白磁碗の上半部。口縁は短く外反し、上端を水平に作る。このタイプとしては釉は比較的厚く、体部外面に釉垂れがみられる。また粗い貫入を伴う。大宰府分類白磁碗Ⅴ類の可能性もあるが、直線的に伸びる体部をもつことからⅧ類（12世紀中頃～後半）としておく。935 は青磁碗の上半部。外面にヘラ片彫による鎬蓮弁文を施文する。釉は透明度高く、部分的にごく粗い貫入を伴う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類（13世紀初頭～前半）に相当。

936 は土師質土器鍋の上半部。口縁端部が肥厚。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施し、いずれも粗い。外面煤付着。胎土に角閃石と花崗岩を含むことから、瀬戸内沿岸域からの搬入品であろう。

937～939 は東播系須恵質土器捏鉢の上部。937 は片口を設ける。口縁端部は上方に拡張し、口縁外面は重焼によって炭素付着。体部外面に指頭圧痕、体部内面に横位・斜位のユビナデおよび板ナデを施す。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。938 は口縁端部をわずかに上方に拡張。口縁外面に重焼によりわずかに炭素付着。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）に相当。939 は口縁端部を上下に拡張する。口縁外面は重焼によりわずかに炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

940 は常滑焼甕の上部片。頸部は内傾し、口縁は大きく外反する。口縁端部は強いヨコナデによってやや尖らせ気味に仕上げ、口縁内側と端面は凹線状に作る。口縁内面と頸部外面に自然釉が付着。中野編年3～4型式（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

941～945 は土師質管状土錘である。941・942・944 は焼成不良により磨耗。943 は外面に炭素の付着がみられ、胎土もやや黒化する。945 は径に比して全長が短い。胎土に砂岩を含む。

946 は鉄釘で両端部を欠く。947 は鉄釘である。頂部を叩いて平頭に作る。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代に位置付けられる。

溝117号（Ⅱ地区 SD1117）（第172・370・376図）

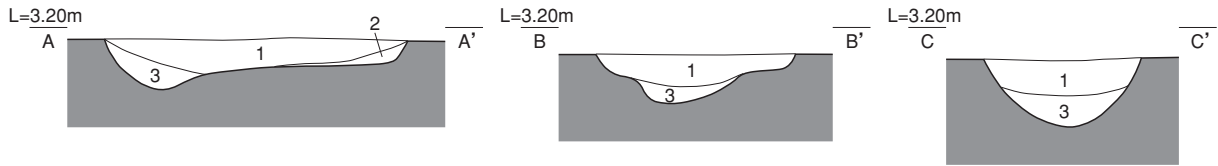
Ⅱ-13区東部、ε-Ⅳ・Ⅴa・b18～6グリッドに位置する。東側は調査区外に延びるが、Ⅱ-12区では検出されていない。西側は北側溝の手前で消え、以西には延びない。検出長38.8m幅210cm深度35cmを測り、主軸はN83°Eを向く東西方向の溝。断面は逆台形状または船底状で、部分的に段を有する。埋土は3層に分層できる。底面は東に向けて下がる。切り合い関係がある全ての溝に切られる。

遺物は、土師器高台付皿、黒色土器片（A類）・椀（A類）、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・杯・高台付皿か杯・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・甕・貯蔵具、瓦器片・椀、瓦質平瓦、砂岩製叩石・砂岩製砥石・砂岩製台石・砂岩礫・チャート礫、が出土。

948 は瓦器椀の底部。ハの字に開くしっかりとした高台をもつ。見込みには密なヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好、外面吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅰ-3期（11世紀末～12世紀初頭）頃か。

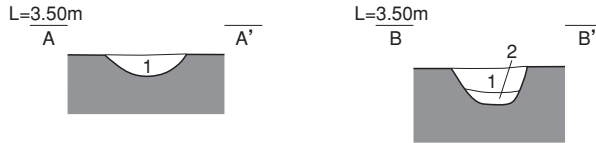
949・950 は土師質土器鍋。949 は上部。1.5cmを超える厚い器壁をもつ。口縁端部は方形を意識する。口縁外面はヨコハケ、頸部～体部外面は粗いタテハケを施す。内面は横位の板ナデで仕上げ、頸部に明瞭な稜を作る。外面煤付着。胎土は粗く、花崗岩を含む。950 は底部を欠く。1.2cmを超える厚い器壁をもつ。口縁端部は方形を意識する。体部外面上位は粗いタテハケ、下位は斜位のハケを施す。内面は横位の板ナデを施す。内外面に煤付着。胎土は粗く、金雲母と花崗岩を含む。いずれも瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

951～954 は土師質管状土錘。ともに焼成不良により磨耗。953・954 は外面に炭素付着し、胎土にチャー



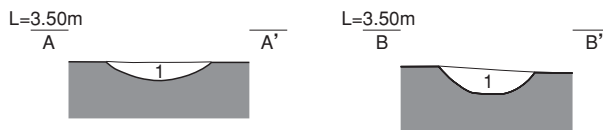
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第370図 II-13区 SD1117 遺構断面図



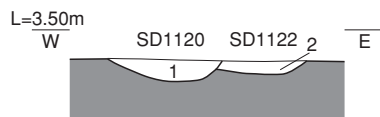
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第371図 II-13区 SD1118 遺構断面図



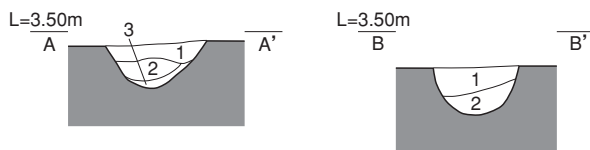
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第372図 II-13区 SD1119 遺構断面図



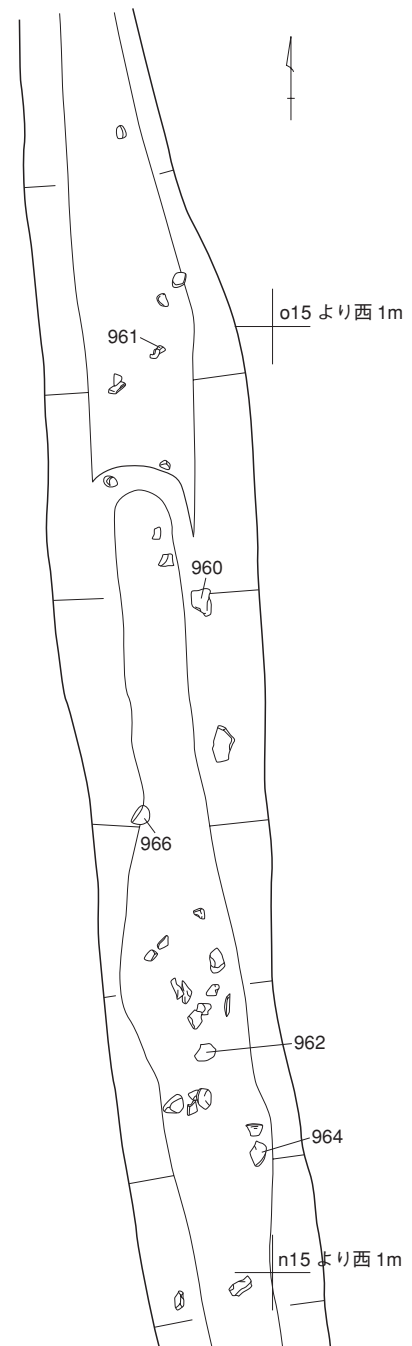
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
 2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)
- ※ 1 : SD1120 土層、2 : SD1122 土層

第373図 II-13区 SD1120・1122 遺構断面図



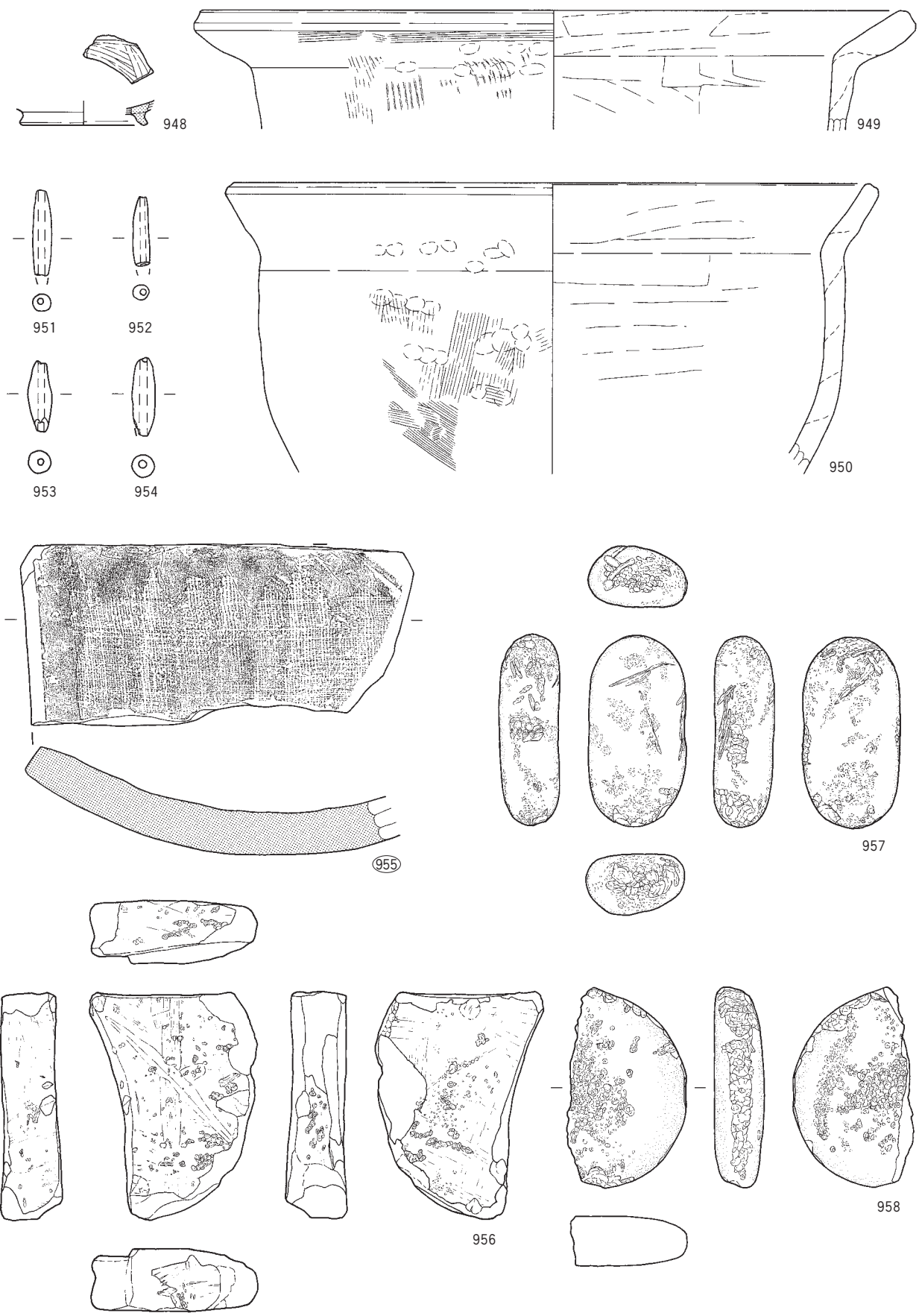
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第375図 II-13区 SD1123 遺構断面図



第374図 II-13区 SD1120 出土平面図





第376图 II-13区 SD1117遺物実測図

トを含む。952は胎土に砂岩を含む。955は瓦質平瓦。広端部側を残す。凹面に布目圧痕、凸面および広端面と側面は板ナデを施す。炭素吸着は不良だが、焼成良好。胎土は精良で砂岩を含む。

956は砂岩製の砥石。扁平な形状で、6面を砥面として使用。各面には敲打痕を残す。面によっては集中的な使用により浅い溝状の凹みを作る。957は小判形の平面形をもつ叩石。弱い敲打はほぼ全面にみられるが、両端部および側面中央は強い敲打が集中する。部分的に溝状の擦痕を確認。958は砂岩製の叩石。扁平な円礫を用い、過半を欠損。表裏面の中央部、および側面に多数の敲打痕を残す。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀前半に位置付けられる。

溝118号(Ⅱ地区 SD1118)(第172・371図)

Ⅱ-13区中央部、q～s 15～17グリッドに位置する。北側は攪乱に切られ、南側はSK11285に切られる。検出長14.4m幅62cm深度19cmを測り、主軸はN39°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状または逆台形状で、埋土は2層に分層できる。出土遺物は皆無である。

溝119号(Ⅱ地区 SD1119)(第172・372・377図)

Ⅱ-13区中央部、n～r 15グリッドに位置する。北側はSD11409に切られる。検出長18.0m幅78cm深度13cmを測り、主軸はN8°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は1層である。

遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、瓦質土器羽釜脚部、常滑甕、中世陶器鍋、白磁碗、砂岩製叩石、が出土。959は紀伊型土師質土器鐔付鍋の上部。小片のため復元径は不正確。口縁端部を内側に折り曲げる。胎土は粗く結晶片岩を含む。概ね13世紀代に位置付けられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代に位置付けられる。

溝120号(Ⅱ地区 SD1120)(第172・373・374・378図)

Ⅱ-13区西部、m～q 14グリッドに位置する。南側は調査区外に延びる。検出長20.9m幅110cm深度15cmを測り、主軸はN6°Wを向く南北方向の溝。断面は浅い船底状で、埋土は1層である。

遺物は、土師器高台付杯・平高台椀か皿・羽釜、黒色土器片(A類か)・椀(A・B類)、土師質土器供膳具・皿・杯(回転ヘラ切りか・ユビオサエほか)・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢、瓦器片・椀、瓦質土器片、白磁碗、鉄製刀子か・スラグ、砂岩製叩石・片岩礫、が出土。

埋土中位から964、埋土下位から960、遺構底部から961・962が出土。

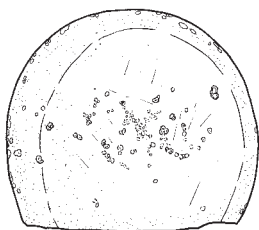
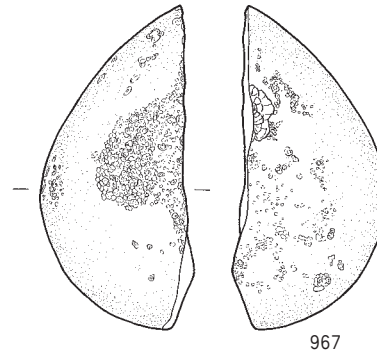
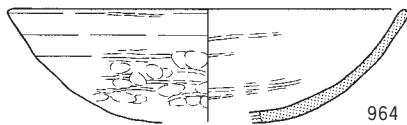
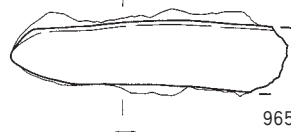
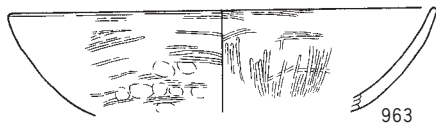
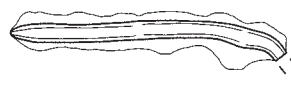
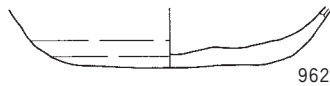
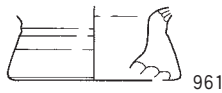
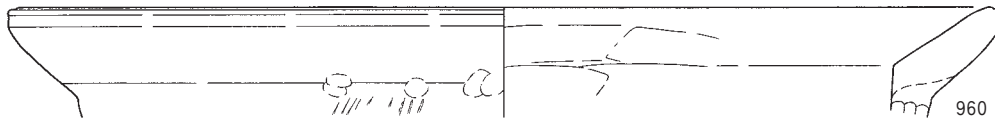
960は土師質土器鍋の上部である。器壁は厚く、頸部で2cmを測る。口縁端部は摘んでヨコナデを施したために細い突帯状に作る。体部外面に粗いタテハケ、内面は強い横位の板ナデを施す。胎土は粗く、花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

961は土師器平高台椀か皿の底部。見込みを押し出して大きな凹みを作り、外面に柱状の高台を形成する。回転台成形とみられるが、磨耗により底部の切り離し痕は確認できない。焼成不良により磨耗著しい。本タイプは伊予・土佐に類例が散見されるが、本県では珍しい。胎土に片岩や砂岩・チャートを含まないことから搬入品とみられるが、確証はない。962は土師質土器杯で、口縁を欠く。焼成不良品できわめて軟質のため、磨耗著しく調整は不明瞭であるが、底部外面に指頭圧痕状の凹みを残すことから非回転台成形とみられる。

963は黒色土器B類椀の上半部。小片のため復元径はやや過大。外面～口縁内面に横位のヘラミガキ、



第377図 II-13区
SD1119遺物実測図



966

鉄製品 0 5cm

その他 0 10cm

第378図 II-13区 SD1120遺物実測図

体部内面は部分的な横位のヘラミガキののち密な縦位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好で胎土も黒化する。964は瓦器碗で、底部を欠く。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好だが、焼成不良により磨耗。和泉型瓦器碗Ⅱ-3期（12世紀後葉）頃に相当。

965は鉄製の刀子。刀身基部を折損する。966は砂岩製の叩石。扁平な円礫で、約1/5を欠損する。主に側面を使用するが、敲打痕は概ね細かで深く抉れた部分もなく、使用感は弱い。上・下面の敲打痕は疎らで、わずかに擦痕が見える程度である。967は扁平な砂岩礫を用いた叩石。大きく欠損し、破面

のエッジも打撃が加えられていることから、破損後も使用されたとみられる。敲打は平面中央に集中するが、打撃は弱く大きく抉れることはない。側面の使用は低調である。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀代に位置付けられる。

溝 121 号 (Ⅱ地区 SD1121) (第 172・342・351・379 図)

Ⅱ - 13 区西部、o ~ r 14 グリッドに位置する。南北とも調査区外に延び、北側に隣接するⅡ - 1 区では検出されていない。検出長 30.3 m 幅 102cm 深度 28cm を測る。主軸は N4° W を向く南北方向の溝であるが、南半部はやや蛇行する。断面は U 字状で、埋土は 3 層に分層できる。

遺物は、土師器碗か皿・羽釜、黒色土器碗 (A 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・杯 (回転ヘラ切り)・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・碗・皿、青磁碗 (蓮弁)・皿、白磁碗・皿、鉄製楔か・鉄、砂岩製砥石、が出土。

968 は土師質土器皿の底部。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。969 は土師器の碗または高脚高台付皿の底部。断面逆三角形の高台をもつが、底部との接合部の幅が広いことから高脚の可能性ある。回転台成形か。胎土にチャートを含む。

970 は埋土中位から出土した瓦器碗の下半部。高台断面は低平な三角形で、退化が顕著。軟質焼成品で磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) とみられる。

971 は白磁皿の底部。削り出しによって低平な高台を作る。内面および高台外側まで施釉し、釉には微細な貫入を伴う。大宰府分類白磁皿Ⅶ - 1・a 類 (11 世紀後半 ~ 12 世紀前半) に相当。972 は同安窯系青磁碗の体部下半。外面に縦位の櫛描文、内面に斜位の櫛描文を施文する。釉は黄味を帯びた透明度の高いもので、内面および体部外面下位まで施釉する。粗い貫入を伴う。外面は部分的な研磨によって磨耗しており、砥石としての転用が想定される。同安窯系青磁碗Ⅰ - 1・b 類 (12 世紀中頃 ~ 後半) に相当。

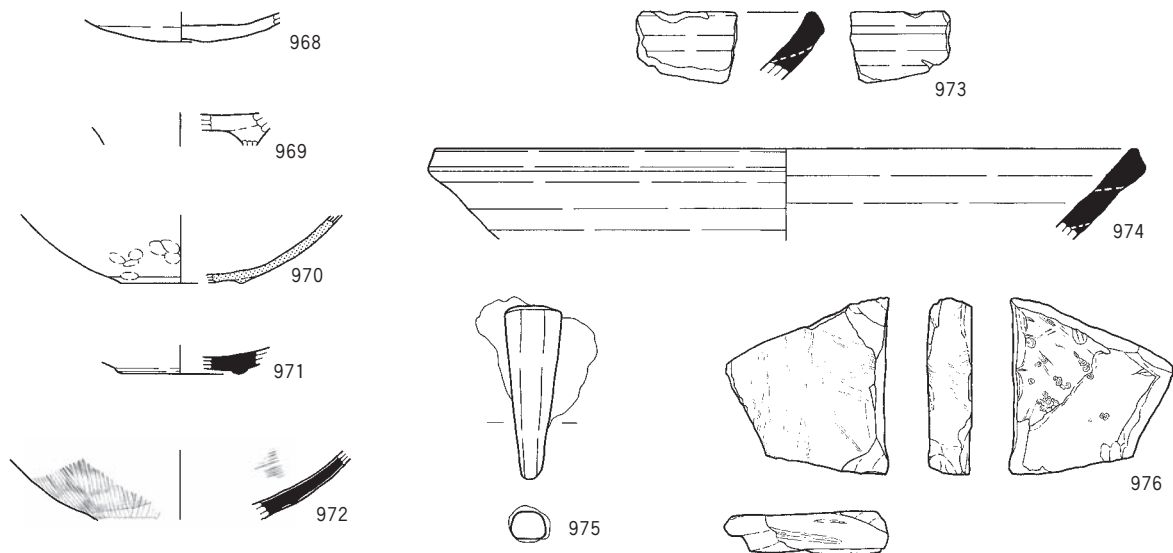
973・974 は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。973 は口縁端部を上方にわずかに拡張。口縁外面に重焼による自然釉と炭素が付着。森田編年第Ⅰ期第 2 段階 (11 世紀末 ~ 12 世紀前半) に相当。974 は口縁端部は上方にわずかに拡張する。口縁外面に重焼によりわずかに炭素付着。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第 1 段階に相当し、12 世紀中葉 ~ 後半の年代が与えられる。

975 は鉄製の楔とみられる。頂部中央は浅く陥没する。976 は砂岩製の砥石である。扁平な角礫を用い、4 面を使用する。細かな擦痕と、部分的に敲打痕を残す。

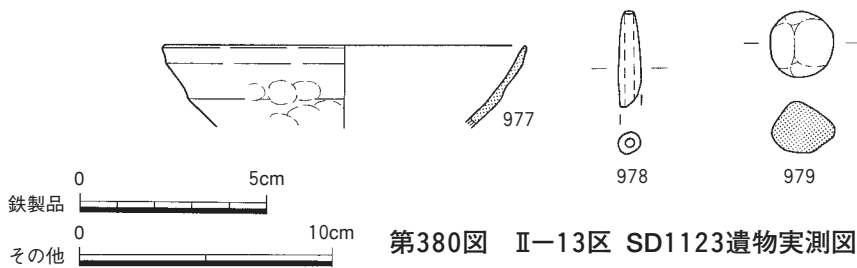
遺構の年代は、出土遺物にやや新しいものもみられるが、概ね 12 世紀前半頃と考えておく。

溝 122 号 (Ⅱ地区 SD1122) (第 172・373 図)

Ⅱ - 13 区西部、o ~ q 14 グリッドに位置する。検出長 12.3 m 幅 80cm 深度 13cm を測り、主軸は N4° W を向く南北方向の溝。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、黒色土器碗 (A・B 類)、土師質土器片・供膳具・杯 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器片、瓦器片・碗・皿、瀬戸焼皿、鉄滓、が出土。遺構の年代は、出土遺物に新しいものもみられるが、概ね 12 世紀代としておく。



第379図 II-13区
SD1121遺物実測図



第380図 II-13区 SD1123遺物実測図

溝 123 号 (II 地区 SD1123) (第 172・375・380 図)

II-13 区西部、i~n 9~13 グリッドに位置する。南側は調査区外に延びる。検出長 24.3 m 幅 72 cm 深度 24cm を測る。東西方向の溝であるが、2ヶ所で屈曲しクランク状を呈する。主軸は N84° E を向く。断面は U 字状または船底状で、埋土は 3 層に分層できる。底面は南に向けて下がる。

遺物は、土師器碗、黒色土器碗 (B 類)、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具 (回転糸切りほか)・皿・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・碗、瓦転用球状加工品、緑釉碗、チャート碟、が出土。

977 は瓦器碗の上半部。磨耗により調整不明瞭で、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好であるが、軟質で酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗 III-3 期 (13 世紀前葉) に相当。978 は土師質管状土錘である。一端を欠損する。軟質焼成により磨耗。979 は瓦質土器瓦片を転用した球形加工品である。径約 2.5 cm。周囲を研削整形して作る。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

小穴 4374 号 (II 地区 SP14374) (第 390 図)

II-13 区南東隅、t 6 グリッドに位置する、径 66cm 深度 22cm を測る楕円形の小穴。遺物は、黒色土器碗 (B 類)、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・碗、が出土。

980 は瓦器碗の上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。焼成不良。炭素

吸着やや不良で酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ－3～Ⅳ－1期（13世紀前葉～中葉）に相当。

小穴 4375 号（Ⅱ地区 SP14375）（第 381・391 図）

Ⅱ－13区南東隅、t 6 グリッドに位置する、径 42cm 深度 23cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・鍋、須恵質土器片、瓦器片・碗・皿、鉄滓、花崗岩礫、が出土。

第 1 層上位から 983・985、第 1 層下位から 981・982・987、第 2 層から 984、第 3 層下位から 986 が出土している。

981～983 は瓦器皿である。981 は口縁～体部内面に横位のヘラミガキを施す。見込みのヘラミガキは磨耗により形状不明。炭素吸着良好だが焼成不良。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃とみられる。982 は口縁～体部内面に横位のヘラミガキを施す。見込みの平行ヘラミガキ暗文は磨耗により不明瞭。炭素吸着は良好だが、焼成やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。983 は口縁～体部内面にやや密な横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好だが焼成不良により磨耗気味。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

984～987 は瓦器碗。984・985 は和泉型瓦器碗Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。984 は高台断面がしっかりとした逆台形状を呈する。外面の口縁～体部境に横位のヘラミガキを施す。内面の口縁～体部に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施し、中央部には乾燥時に重ねた別個体の高台剥離痕を確認。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味。985 は高台断面がやや幅のある逆三角形形状。外面に横位に連続した指頭圧痕を残す。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良だが焼成良好。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料 No.14）、蛍光 X 線分析では和泉型の領域に入り、実体顕微鏡観察では黒雲母と微量のチャートを含むという結果を得ている。

986・987 は和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当する。986 は底部を欠く。外面に横位に連続する指頭圧痕を残し、体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良で磨耗により調整不明瞭。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。987 は下半部である。高台断面は逆三角形形状を呈する。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。見込みは平行ヘラミガキ暗文を施すとみられるが、磨耗により不確定。炭素吸着・焼成ともにやや不良。

小穴 4376 号（Ⅱ地区 SP14376）（第 392 図）

Ⅱ－13区南東隅、t 6 グリッドに位置する、径 39cm 深度 30cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯（回転糸切り）、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗、白磁皿、砂岩礫、が出土。

988 は瓦器碗の上半部。内面に横・斜位の粗いヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成とも良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。989 は瓦器碗の下半部。高台断面は逆三角形形状。器壁やや厚い。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－1期（12世紀後葉）とみられる。

990 は白磁皿で見込みに草花文のスタンプを施す。釉は細かい貫入あり、内外面に微細な釉とびを伴う。口縁の釉に厚い。素地はやや陶器質。大宰府分類白磁皿Ⅷ－2・a類（13世紀初頭～前半）に相当。

小穴 4377 号（Ⅱ地区 SP14377）（第 382・393 図）

Ⅱ - 13 区南東隅、t 6 グリッドに位置する、径 42cm 深度 22cm を測る不整な楕円形の小穴。SK11132 に切られる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿、瓦器片・椀、が出土。

掲載遺物はいずれも瓦器椀で、991 が第 2 層、992・993 が第 3 層から出土。口縁あるいは体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。

991 は高台断面がやや小さな逆台形状。体部外面に横位に連続した指頭圧痕を残す。炭素吸着は内面不良、外面やや不良でムラあり。焼成は概ね良好。992 は底部を欠く。炭素吸着やや不良。焼成良好。993 は下半部。高台断面は低い逆台形状。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文。炭素吸着やや不良で、内面磨耗気味。

小穴 4381 号（Ⅱ地区 SP14381）（第 394 図）

Ⅱ - 13 区東端部南側、a 6 グリッドに位置する、径 44cm 深度 40cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器片・椀、が出土。埋土は 3 層で、柱痕を残す。

994・995 は瓦器椀。994 は上半部。歪みのため復元径過小か。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3～Ⅲ - 1 期（12 世紀後葉）に相当。995 は底部。高台断面はやや幅広の低い逆三角形。畳付部は丸みをもつ。見込みの暗文は螺旋状か。軟質焼成でやや磨耗。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期（13 世紀前葉）とみられる。

小穴 4397 号（Ⅱ地区 SP14397）（第 395 図）

Ⅱ - 13 区東部南側、a 5 グリッドに位置する、径 42cm 深度 32cm を測る不整な楕円形の小穴。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・皿・杯（ともに回転糸切りほか）・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、白磁碗、鉄滓、が出土。

996 は土師質土器杯の底部。回転台成形とみられるが、焼成不良により磨耗著しく、底部切り離し技法は不明。997 は土師質土器杯か皿の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。精良な胎土をもち、焼成良好。

998 は瓦器椀の上半部。小片のため復元径は不正確。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着はみられず酸化炎焼成する。胎土きわめて粗い。器形や調整から和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期とみられるが、焼成や胎土から非和泉型瓦器の可能性もあり。

999・1000 は白磁碗の上半部。999 は小片のため復元径は過大。口縁端部を小さく外方に屈曲させる。体部内面上位に 1 条の沈線を引く。口縁内面に部分的に貫入を伴い、内外面にわずかに釉とびあり。大宰府分類 V - 4・a 類（12 世紀中頃～後半）に相当。1000 はわずかに外反気味の口縁をもつ。外面は口縁付近まで回転ヘラケズリを施す。見込みにごく弱い段を伴う。釉は不透明で灰色がかかる。残存部は全面施釉し、体部内面上位に釉垂れを作る。内外面に釉とびあり。大宰府分類白磁碗 V - 1 類か V - 3 類に相当し、11 世紀後半～12 世紀前半の年代が与えられる。

1001 は東播系須恵質土器捏鉢の上部。復元口径 20.0cm 器高 5.1cm で、小型かつ低平な器形に復元されるが、小片のためやや不正確とみられる。口縁端部は未発達で方形に作る。重焼により外面のみ炭素付着。森田編年第 I 期第 2 段階（11 世紀末～12 世紀前半）に位置付けられる。

1002～1007は土師質の管状土錘。1002を除きほぼ完存。いずれも全長に比して径が小さく、細身のタイプである。焼成良好だが、外面に炭素が付着する。胎土は概ね精良。

小穴 4402号 (Ⅱ地区 SP14402) (第383・396図)

Ⅱ-13区東部南側、a5グリッドに位置する、径47cm深度35cmを測る不整形の小穴。遺物は、土師質土器片・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・椀、白磁碗、が出土。

1008は埋土中位から出土した瓦器椀。高台断面は低平な蒲鋒形。焼成不良により軟質で磨耗著しく、内面のヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面不良、外面は吸着なし。酸化炎焼成する。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。

小穴 4407号 (Ⅱ地区 SP14407) (第384・397図)

Ⅱ-13区東部南側、a5グリッドに位置する、径20cm深度40cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、が出土。

1009は遺構底部出土の土師質管状土錘。全長7.6cm径4.5cmの大型品で、両端が窄まらない土管のような形状。外面に指頭圧痕あるいはユビナデ痕が明瞭。焼成不良により磨耗。胎土に石灰岩とみられる軟質の白色粒を含む。

小穴 4412号 (Ⅱ地区 SP14412) (第398図)

Ⅱ-13区東部南側、a5グリッドに位置する、径46cm深度54cmを測る円形の小穴。遺物は、瓦器椀、壁土、が出土。

1010は環状の鉄製品で、径約6mm長さ約8cmの鉄棒を環状に曲げる。両端部は尖るが、斜めに切断したことによるものか。幅約2mmの帯状に膨らんだ部分が一ヵ所あり、針金状の金属線(材質不明)を巻き付けたものとみられる。

小穴 4419号 (Ⅱ地区 SP14419) (第399図)

Ⅱ-13区東部南側、a5グリッドに位置する、径42cm深度33cmを測る円形の小穴。SP14418に切られる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・椀・皿、が出土。

1011は土師質土器皿。底部が厚く断面で接合痕を確認。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成気味。胎土は精良で、チャートを含む。1012は瓦器皿で、底部中央を欠く。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

1013～1015は瓦器椀。1013は上半部。小片のため復元径過小気味。内外面に横位のヘラミガキを施すが磨耗により不明瞭で、内面は本来密に施す。炭素吸着良好。酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)に相当。1014は下部。高台断面は逆三角形で高さと同幅を保つ。見込みの暗文は斜格子状であろう。炭素吸着は内面不良、外面は吸着なし。軟質焼成で磨耗。和泉型瓦器椀Ⅲ-1期(12世紀後葉)前後。1015は底部。器壁薄い。高台断面はやや低い逆台形状。軟質焼成により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着せず酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)。

1016は土師質の管状土錘。径に比して長さが短い。胎土粗く、チャートを含む。形状や胎土が他の

土鍾と異なる。

小穴 4422 号 (Ⅱ地区 SP14422) (第 400 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、a 5 グリッドに位置する、径 44cm 深度 20cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器椀、が出土。

1017 は紀伊型土師質土器鍔付鍋の上部である。口縁端部は強く内方に屈曲させる。頸部外面は強いヨコナデによって凹線状に作り、のち部分的にユビナデを加える。体部外面上位に断面が小さい三角形の細く退化した鍔部を貼り付ける。胎土は粗く、2mm 大の結晶片岩やチャートを含む。13 世紀代に位置付けられる。

小穴 4430 号 (Ⅱ地区 SP14430) (第 401 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、a 5 グリッドに位置する、径 36cm 深度 26cm を測る不整な楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿 (回転ヘラ切り)・煮炊具、瓦器片・椀、スラグ、が出土。

1018 は土師質土器皿である。大きく焼き歪む。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。口縁に部分的に炭素付着。焼成良好。胎土に花崗岩とみられる粒子を含む。

1019 ~ 1022 は和泉型瓦器椀。1019 は上半部。歪みのため復元径過小。内外面に粗い横位・斜位のヘラミガキを施すが、内面は部分的に磨耗する。炭素吸着良好。Ⅱ - 3 ~ Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。

1020 ~ 1022 はⅢ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。1020 は体部外面に横位に連続した指頭圧痕を残す。内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面やや不良、外面良好、体部外面下位は重焼により吸着なし。1021 は器壁が比較的薄い。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。焼成不良。炭素吸着良好。1022 は下部で、高台断面が低平な逆台形状。見込みに平行ヘラミガキ暗文。炭素吸着良好。焼成不良により磨耗気味。

小穴 4432 号 (Ⅱ地区 SP14432) (第 402 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t・a 5 グリッドに位置する、径 56cm 深度 21cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、砂岩製叩石、が出土。

1023 は瓦器椀。口縁~体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。口縁端部外面のみ炭素吸着し、全体的に酸化炎焼成。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期 (12 世紀末~13 世紀初頭) に相当。

小穴 4434 号 (Ⅱ地区 SP14434) (第 403 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、t・a 5 グリッドに位置する、径 34cm 深度 42cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯 (ともに回転糸切り)・煮炊具、瓦器片・椀・皿、が出土。

1024 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切りのち板目痕を残す。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。胎土に金雲母を含むことから搬入品と考えられる。

1025 は瓦器皿。体部内外面に横位のヘラミガキを施し、体部内面はやや密。見込みに密な平行状ヘラミガキ。口縁内面~体部外面に炭素吸着良好で、他の部位は重焼により吸着なし。和泉型瓦器Ⅱ期後半~Ⅲ期前半頃とみられる。

1026 は瓦器椀で 8 割が残存。高台断面は逆三角形状。口縁外面は 2 段にヨコナデ。口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すが、磨耗により不明瞭。炭素吸着は内面～口縁外面が良好で、以下重焼により吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3 期（13 世紀前葉）に相当。

小穴 4440 号（Ⅱ地区 SP14440）（第 385・404 図）

Ⅱ－13 区東部南側、t 5 グリッドに位置する、径 32cm 深度 34cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・鍋・土錘、瓦器椀・皿、が出土。

1027 は柱痕下位出土の瓦器皿。口縁外面のヨコナデは弱い。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにやや崩れたジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。外面に粘土板の接合痕、底部外面に胎土に混入した稲糊のハゼ痕が確認できる。炭素吸着良好で、外面は重焼により部分的に吸着しない。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃とみられる。

小穴 4452 号（Ⅱ地区 SP14452）（第 405 図）

Ⅱ－13 区東部北側、d 4 グリッドに位置する、径 52cm 深度 43cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、白磁皿、が出土。

1028 は瓦器椀。低平な器形。高台はごく低い逆台形状で、底径も小さく退化著しい。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。見込みのヘラミガキは形状不明。焼成不良により磨耗し調整不明瞭。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅳ－1 期（13 世紀中葉）に相当。

1029 は白磁皿の上半部。器壁は薄く、釉の掛かりも薄い。微細な貫入を伴う。大宰府分類白磁皿Ⅴ類（11 世紀後半～12 世紀前半）か。

小穴 4478 号（Ⅱ地区 SP14478）（第 406 図）

Ⅱ－13 区東部中央南寄り、b 4 グリッドに位置する、径 29cm 深度 36cm を測る不整円形の小穴。遺物は、砂岩製砥石が出土。

1030 は肌理細かい砂岩製の砥石。砥面として上下面および 1 側面の合わせて 3 面を使用する。上下両面とも中央部に敲打が集中し、浅い凹みを作る。側面のうち 3 面は欠損部であるが、エッジが緩く破面に磨耗がみられることから、欠損後も継続して使用されたとみられる。

小穴 4507 号（Ⅱ地区 SP14507）（第 407 図）

Ⅱ－13 区東部中央南寄り、a 4 グリッドに位置する、径 34cm 深度 41cm を測る不整楕円形の小穴。SP14506 に切られる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（底部穿孔）、須恵質土器貯蔵具、瓦器椀、が出土。

1031 は土師質土器皿の底部。回転台成形だが、磨耗により底部の切り離し技法は不明。底部中央に径 6mm の焼成後穿孔を施す。1032 は瓦器椀の上半部。外面は横位に連続した指頭圧痕を残し、内面はやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3 期（13 世紀前葉）に相当。

小穴 4509 号（Ⅱ地区 SP14509）（第 386・408 図）

Ⅱ－13 区東部中央南寄り、a 4 グリッドに位置する、残存径 39cm 深度 29cm を測る不整楕円形の小穴。SA1080EP2 に切られる。

遺物は第1層から出土した1033の白磁碗が1点のみ。口縁端部は外方に短く屈曲する。体部外面は回転ヘラケズリを施す。内面は口体部境と体底部境にそれぞれ1条の浅い沈線を引く。見込みに窯体の碎片が付着。大宰府分類白磁碗V-4・a類(12世紀中頃～後半)に相当。

小穴4512号(Ⅱ地区 SP14512)(第409図)

Ⅱ-13区東部中央南寄り、a4グリッドに位置する、径42cm深度63cmを測る不整円形の小穴。遺物は、黒色土器碗(B類か)、土師質土器供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、白磁皿・碗、鉄滓、が出土。

1034・1035は瓦器碗。1034の高台は幅広だが断面は低平な逆三角形状。口縁外面および口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面～体部外面中位まで良好で、以下は重焼により吸着なし。和泉型瓦器碗Ⅱ-3期(12世紀後葉)に相当。

1035は上半部。小片のため復元径不正確。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。外面のヘラミガキはみえない。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)か。

1036は白磁碗の底部。施釉後、内面の底部部境にヘラケズリによって段を設ける。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。残存部外面は露胎。釉に貫入を伴う。大宰府分類Ⅷ-2類またはⅧ-3類(12世紀中頃～13世紀前半)に相当。

1037は東播系須恵質土器捏鉢の底部。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用により磨耗。胎土は粗く、チャートを含む。1038は土師質の管状土錘。軟質焼成により磨耗気味。部分的に炭素付着。

小穴4515号(Ⅱ地区 SP14515)(第387・410図)

Ⅱ-13区東部中央南寄り、a4グリッドに位置する、径56cm深度43cmを測る不整な隅丸長方形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具、瓦器碗、瓦質土錘、鉄滓、が出土。1039は遺構底部出土の瓦質管状土錘。全長7.9cm径4.2cmの大型品で、両端が窄まらない土管状を呈する。外面に指頭圧痕が明瞭。炭素吸着・焼成ともに不良。胎土は精良で、チャートと在地花崗岩を含む。

小穴4521号(Ⅱ地区 SP14521)(第411図)

Ⅱ-13区東部南側、t・a4グリッドに位置する、径80cm深度55cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿(ともに回転糸切り)・煮炊具、瓦器片・椀・皿、鉄滓、が出土。

1040・1041は瓦器皿。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着・焼成ともに良好。和泉型瓦器Ⅳ期頃であろう。

小穴4553号(Ⅱ地区 SP14553)(第412図)

Ⅱ-13区東部北端、d3グリッドに位置する、径53cm深度44cmを測る不整形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、砂岩礫、が出土。

1042は土師質管状土錘。外面に斜格子状の焼成前線刻を施す。図の左上一右下方向のラインを先に引き、次いで右上一左下方向のラインを引く。完形品で、全長5.3cm径1.6cmを測る比較的大型のもの。

小穴 4648 号 (Ⅱ地区 SP14648) (第 413 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、b 2 グリッドに位置する、径 30cm 深度 37cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・杯 (回転糸切りほか)・鍋、瓦器片・椀・皿、鉄滓、が出土。

1043 は瓦器皿。外面に粗い横位のヘラミガキを施すが、内面は磨耗により不明。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅱ期頃か。

小穴 4655 号 (Ⅱ地区 SP14655) (第 414 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、b 2 グリッドに位置する、径 64cm 深度 16cm を測る隅丸長方形の小穴。遺物は、黒色土器椀 (B 類)、土師質土器片・供膳具、瓦器片、瓦質平瓦、が出土。

1044 は須恵質焼成の平瓦片。凹面に布目圧痕、凸面に格子タタキを施す。炭素吸着はみられない。

小穴 4665 号 (Ⅱ地区 SP14665) (第 415 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、a 1 グリッドに位置する、径 40cm 深度 36cm を測る隅丸長方形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯・煮炊具、瓦器片、が出土。

1045・1046 は回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。1045 は口縁端部を尖らせ、焼成不良により内外面に煤付着。1046 は焼成良好。

小穴 4691 号 (Ⅱ地区 SP14691) (第 416 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、b 1 グリッドに位置する、径 34cm 深度 33cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・鍋、瓦器片、鉄釘、が出土。

1047 は細い棒状鉄製品で、S 字状に蛇行する。釘が変形したものか。

小穴 4697 号 (Ⅱ地区 SP14697) (第 417 図)

Ⅱ - 13 区東部北側、b 1 グリッドに位置する、径 26cm 深度 30cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、白磁合子、が出土。

1048 は白磁の合子身。体部外面に蓮弁文を型押しで作る。口縁～内面はロクロナデ。体部外面および内面の口縁端部以下に施釉し、他は露胎。

小穴 4708 号 (Ⅱ地区 SP14708) (第 418 図)

Ⅱ - 13 区東部中央南寄り、t 1 グリッドに位置する、径 47cm 深度 32cm を測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土。

1049 は瓦器椀。口縁の歪みが大きく最大口径は 14.0cm となる。高台は幅広で低い逆三角形を呈し、貼り付けは粗雑。焼成不良により磨耗著しくヘラミガキは確認できず、とくに内面の調整は不明。炭素吸着は外面の一部にのみみられる。胎土は粗く、結晶片岩・砂岩・チャートを含むことから在地産と考えられる。和泉型瓦器椀Ⅳ - 1 期 (13 世紀中葉) 前後に併行か。本品は胎土分析を行い (胎土分析試料 No. 8)、蛍光 X 線分析では和泉型の領域に入るものの、実体顕微鏡観察では絹雲母を確認している。

小穴 4720 号 (Ⅱ地区 SP14720) (第 419 図)

Ⅱ - 13 区東部北端、b 20 グリッドに位置する、径 27cm 深度 48cm を測る円形の小穴。遺物は、黒色土器片 (B 類)、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・皿・杯 (回転糸切りほか)、鉄滓、が出土。

1050・1051 は回転台成形の土師質土器杯である。1050 は上部。1051 は底部で、体部外面の一部から底部外面にかけて回転糸切り痕を残す。軟質焼成により磨耗気味。

小穴 4721 号 (Ⅱ地区 SP14721) (第 420 図)

Ⅱ - 13 区東部北端、b 20 グリッドに位置する、径 32cm 深度 46cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・土錘、瓦器片、が出土。

1052 は土師質管状土錘。他の土錘と比較して大型品。孔径は図の上端で 7mm だが、下端では 4mm に狭まる。焼成やや不良。

小穴 4728 号 (Ⅱ地区 SP14728) (第 421 図)

Ⅱ - 13 区東部中央南寄り、s・t 1 グリッドに位置する、径 46cm 深度 28cm を測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、瓦器碗、が出土。

1053 は紀伊型土師質土器鏝付鍋の体部上半である。肩部に断面が低い三角形の鏝部を粗雑に貼り付け、接合痕を残す。内面は指頭圧痕と縦位のユビナデ痕が明瞭に残る。内面の一部と外面に煤付着。胎土に結晶片岩と泥岩を含む。鏝部の形状から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

小穴 4834 号 (Ⅱ地区 SP14834) (第 422 図)

Ⅱ - 13 区東部南側、r・s 20 グリッドに位置する、径 27cm 深度 38cm を測る円形の小穴。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片、チャート礫、が出土。

1054 は須恵質土器貯蔵具の体部片。器壁薄い。内面の同心円状当具痕は中心部から放射状に沈線がのびる。焼成不良。

小穴 4849 号 (Ⅱ地区 SP14849) (第 423 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、t 19 グリッドに位置する、径 30cm 深度 26cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師器鍋、須恵器硯、土師質土器片、が出土。

1055 は須恵器硯。全体の 1 / 3 ほどの残存で海部と陸部の半分ほどを失っている。硯面は海部側が半円形、陸部側が方形となる「風字硯」となり、陸部の硯面裏に傾斜を付けるための脚が付く (一方は欠損)。硯面周縁には断面三角形の周堤が貼り付けられ、同様の粘土帯が陸部を二つに分ける二面風字硯 (山中 1983) となる。硯面も含めて表裏面ともにヘラケズリによって整形されている。硯面使用の有無はケズリが擦られることによって平滑になっているかどうかで認識できる。

徳島県下で風字硯の出土は、阿波国府跡神明地区・観音寺遺跡 (ともに徳島市国府町) について 3 例目。これまで陶硯類は 30 個体余りが知られ、国府推定地周辺および官衙との関連が推定される遺跡に多く、宮ノ本遺跡にこの風字硯がもたらされた状況は不明である。

小穴 4855号 (Ⅱ地区 SP14855) (第424図)

Ⅱ-13区中央部北寄り、s 19グリッドに位置する、径24cm深度23cmを測る円形の小穴。遺物は、土師器羽釜、土師質土器片・供膳具・杯、が出土。

1056は摂津C型土師器羽釜の上部。口縁端部は内上方につまみ上げ、鏝部は外面上端部に貼り付けるが、口縁との境は不明瞭。外面に指頭圧痕と接合痕を残し、内面は横位の板ナデを施す。胎土は粗く花崗岩を含む。11～12世紀代か。

小穴 4873号 (Ⅱ地区 SP14873) (第425図)

Ⅱ-13区中央部北側、t 18グリッドに位置する、径20cm深度32cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯(回転糸切り)、須恵質土器貯蔵具、瓦器片、が出土。

1057は土師質土器杯。器壁薄く、口縁は内彎。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成品。

小穴 4888号 (Ⅱ地区 SP14888) (第426図)

Ⅱ-13区中央部北側、s 18グリッドに位置する、径36cm深度24cmを測る隅丸方不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具、瓦器椀、鉄製鑿、が出土。

1058は鉄製の鑿。残存長13.0cmを測り、先端部を片刃状に尖らせる。上端部を欠く。

小穴 4898号 (Ⅱ地区 SP14898) (第427図)

Ⅱ-13区中央部南寄り、r 18グリッドに位置する、径33cm深度36cmを測る不整円形の小穴。遺物は、黒色土器片(B類)、土師質土器供膳具(回転糸切りほか)・杯・煮炊具、瓦器片・椀、鉄釘か・鉄製鑿か、凝灰岩製砥石、が出土。

1059は土師質土器杯で、底部外面に粗い回転糸切り痕を残す。胎土は精良で、チャートを含む。

1060は瓦器椀。高台断面は低い三角形を呈し、貼り付けは粗雑。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良によりきわめて軟質で磨耗著しく不明瞭。炭素吸着は口縁外面良好で内面不良。体部外面以下は重焼により吸着なし。胎土はやや粗めでチャートを含む。和泉型瓦器椀の在地模倣品とみられる。本品は胎土分析を行い(胎土分析試料No.7)、蛍光X線分析では和泉型の領域に収まるが、実体顕微鏡観察では絹雲母を含むという結果を得ている。

1061は鉄釘か鑿で、頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。1062は鉄製の鑿か犬釘で、頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。1063は鉄釘とみられ、両端部を欠く。1064は凝灰岩製の砥石。肌理は細かい。4面を砥面として使用し、うち1面に敲打痕が確認できる。

小穴 4903号 (Ⅱ地区 SP14903) (第428図)

Ⅱ-13区中央部北寄り、r 18グリッドに位置する、径30cm深度14cmを測る不整な隅丸方形の小穴。SP14904に切られる。遺物は、土師器竈、土師質土器片、瓦器椀、が出土。

1065は土師器竈の焚口の袖部分。前面への庇状の張り出しは粘土帯の貼り付けによる。内外面ともに熱による器壁の変色著しい。1066は瓦器椀。高台はしっかりとした逆台形状。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗著しく不明瞭。炭素吸着不良。体部

外面下端に接合痕を残す。胎土は粗い。和泉型瓦器碗Ⅱ－3期（12世紀後葉）前後とみられる。

小穴 4911号（Ⅱ地区 SP14911）（第429図）

Ⅱ－13区中央部北寄り、r 18グリッドに位置する、径36cm深度46cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師器壺か、土師質土器供膳具・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋、瓦器片・碗・皿、水晶、が出土。

1067は土師質土器杯の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土は粗く、砂岩と在地花崗岩を含む。軟質焼成気味。

1068は瓦器碗の上半部。磨耗により調整不明瞭で、口縁内面にのみ横位のヘラミガキを確認。炭素吸着は良好だが酸化炎焼成気味。器壁厚く、口縁外面のヨコナデ弱い。胎土は粗い。和泉型瓦器碗Ⅲ－3～Ⅳ－1期とみられるが、調整や胎土などから非和泉型瓦器碗の可能性もある。

小穴 4925号（Ⅱ地区 SP14925）（第430図）

Ⅱ－13区中央部南寄り、q 18グリッドに位置する、径32cm深度30cmを測る不整楕円形の小穴。SA1096EP01に切られる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・碗、が出土。

1069は瓦器碗の上半部。小片のため復元径は過小。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅳ－1期（13世紀中葉）に相当。

小穴 4946号（Ⅱ地区 SP14946）（第431図）

Ⅱ－13区中央部南側、p 18グリッドに位置する、径40cm深度15cmを測る不整円形の小穴。SP14945に切られる。遺物は、黒色土器碗（B類）、土師質土器片・煮炊具、瓦質土器羽釜、が出土。

1070は瓦質土器羽釜の上部。口縁からやや下がった位置に鏝部を貼り付け。口縁・鏝ともに端部を方形に作る。炭素吸着は外面良好、内面不良。軟質焼成気味。山城型瓦質土器羽釜だが、胎土が粗く模倣品の可能性あり。

小穴 4952号（Ⅱ地区 SP14952）（第432図）

Ⅱ－13区中央部南側、p 18グリッドに位置する、径32cm深度26cmを測る不整円形の小穴。遺物は、黒色土器碗（B類）、土師質土器供膳具・皿、が出土。

1071は回転台成形の土師質土器皿で、底部を欠く。器壁厚い。胎土に結晶片岩を含むとみられる。軟質焼成気味。1072は黒色土器B類碗の上部。口縁内面にヨコナデによって沈線を作る。体部内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好で、胎土も黒化する。

小穴 4965号（Ⅱ地区 SP14965）（第433図）

Ⅱ－13区中央部北側、t 17グリッドに位置する、径49cm深度51cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器碗、鉄製刀子か、が出土。

1073は鉄製の鑿とみられる。頭部をL字に屈曲させる。先端部を欠く。

小穴 5048 号 (Ⅱ地区 SP15048) (第 434 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 16 グリッドに位置する、径 37cm 深度 29cm を測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具 (回転ヘラ切り)・杯、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、が出土。

1074 は東播系須恵質土器捏鉢の上半部。口縁端部を大きく上方に拡張。口縁外面に重焼により炭素付着。内面に炭化物が厚く付着しており、煮炊具として使用された可能性がある。森田編年第三期第 1 段階 (13 世紀前半～後半) に相当。

小穴 5058 号 (Ⅱ地区 SP15058) (第 435 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 16 グリッドに位置する、径 32cm 深度 39cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具 (回転糸切り)、瓦器椀、が出土。

1075・1076 は和泉型瓦器椀で、Ⅲ - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) とみられる。1075 は底部を欠く。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良だが焼成は良好。胎土にチャートまたは緑色岩とみられる粒子を含むことから模倣品の可能性も考えられる。1076 は上半部。外面にヘラミガキが確認できず、内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。

小穴 5063 号 (Ⅱ地区 SP15063) (第 388・436 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、s 16 グリッドに位置する、径 30cm 深度 30cm を測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿 (回転糸切り)・鍋、須恵質土器片、瓦器片・椀、が出土。

掲載遺物は遺構埋土上位から出土したものである。

1077 は土師質土器皿で、全体的に厚い作り。焼成不良で磨耗著しい。非回転台成形で底部外面に指頭圧痕を残すとみられるが不確定。1078 は瓦器椀で、底部を欠く。歪みのため復元径は過大。外面に粗い横位のヘラミガキ、体部内面にやや密な横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好で、体部内外面に重焼痕を伴う。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。

小穴 5073 号 (Ⅱ地区 SP15073) (第 437 図)

Ⅱ - 13 区中央部北側、r 16 グリッドに位置する、径 50cm 深度 30cm を測る円形の小穴。SK11313 に切られる。遺物は、黒色土器片 (A 類)、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片、が出土。

1079 は瓦器椀の下半部。高台断面は逆台形状で高さを保つ。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) 頃とみられる。

小穴 5084 号 (Ⅱ地区 SP15084) (第 438 図)

Ⅱ - 13 区中央部南寄り、p・q 16・17 グリッドに位置する、径 46cm 深度 26cm を測る不整楕円形の小穴。試掘トレンチに切られる。遺物は、土師質土器供膳具・杯、須恵質平瓦、が出土。

1080 は須恵質の平瓦片。凹面に布目圧痕、凸面に縄蓆文を施す。胎土は粗く、チャートを含む。

小穴 5087 号 (Ⅱ地区 SP15087) (第 439 図)

Ⅱ - 13 区中央部北寄り、q 16 グリッドに位置する、径 30cm 深度 45cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿、が出土。

1081 は土師質土器皿。焼成不良により磨耗著しく、調整不明瞭。回転台成形で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられる。

小穴 5105 号 (Ⅱ地区 SP15105) (第 389・440 図)

Ⅱ - 13 区中央部南側、o・p16 グリッドに位置する、径 24cm 深度 29cm を測る円形の小穴。遺物は、瓦器皿、片岩礫、が出土。

1082 は遺構底部出土の瓦器皿。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良だが焼成良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。

小穴 5112 号 (Ⅱ地区 SP15112) (第 441 図)

Ⅱ - 13 区中央部南側、o 16 グリッドに位置する、径 54cm 深度 39cm を測る楕円形の小穴。遺物は、土師質土器片・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器椀、が出土。

1083・1084 は瓦器椀の上半部である。1083 は小片のため復元径・傾き不正確。内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 1 期 (12 世紀前葉) 前後に相当。1084 は体部外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施すが磨耗により不明瞭。焼成不良で軟質。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 3 ~ Ⅲ - 1 期 (12 世紀後葉) に相当。

1085 は東播系須恵質土器捏鉢の底部。底部外面の回転糸切り痕は不鮮明。内面は使用により磨耗著しい。焼成良好。

小穴 5190 号 (Ⅱ地区 SP15190) (第 442 図)

Ⅱ - 13 区西部南寄り、n 13 グリッドに位置する、径 23cm 深度 6cm を測る円形の小穴。遺物は 1 点のみで、1086 は鉄製の刀子である。刀身・茎ともに端部を欠く。

小穴 5228 号 (Ⅱ地区 SP15228) (第 443 図)

Ⅱ - 13 区西部北側、p 12 グリッドに位置する、径 32cm 深度 40cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、鉄製楔、が出土。1087 は四角錐の形状をもつ鉄製品で、楔とみられる。先端部を欠く。

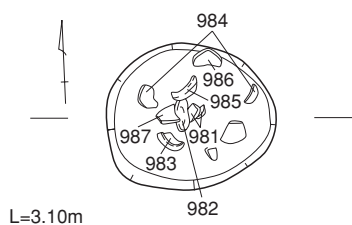
小穴 5282 号 (Ⅱ地区 SP15282) (第 444 図)

Ⅱ - 13 区西部北端、q 11 グリッドに位置する、径 44cm 深度 54cm を測る隅丸長方形の小穴。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

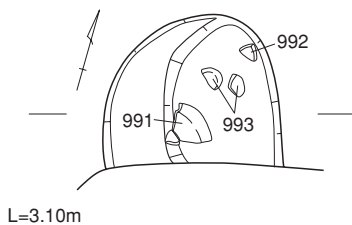
1088 は瓦器椀の底部。高台断面はしっかりとした逆三角形形状。見込みにやや密な平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅱ - 1 期 (12 世紀前葉) とみられる。1089 は瓦器椀の下半部。高台断面は幅広で低い逆台形状。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) とみられる。

小穴 5289 号 (Ⅱ地区 SP15289) (第 445 図)

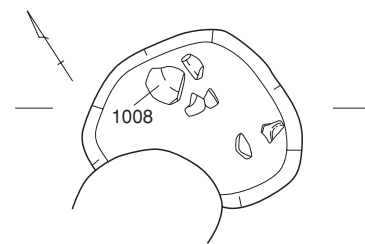
Ⅱ - 13 区西部北端、p11 グリッドに位置する、径 38cm 深度 33cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質



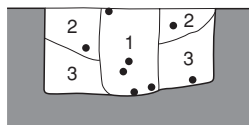
L=3.10m



L=3.10m

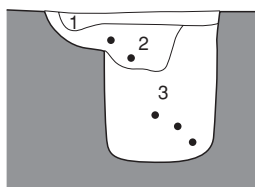


L=3.20m



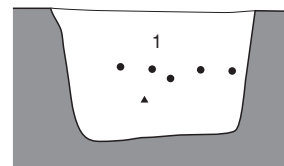
1. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)
焼土粒・黄褐色砂質土ブロック含む
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)

第381図 II-13区
SP14375 遺構実測図



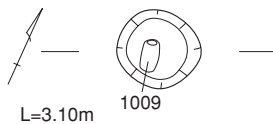
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片多く含む
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
3. 暗褐色 10YR3/3 シルト (しまり強)

第382図 II-13区
SP14377 遺構実測図

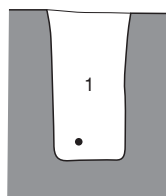


1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・黄褐色砂質土ブロック含む

第383図 II-13区
SP14402 遺構実測図

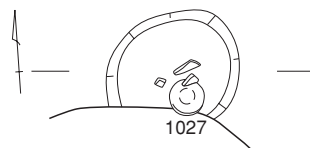


L=3.10m

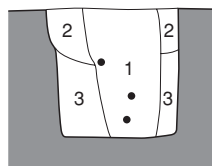


1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・黄褐色砂質土ブロック含む

第384図 II-13区
SP14407 遺構実測図

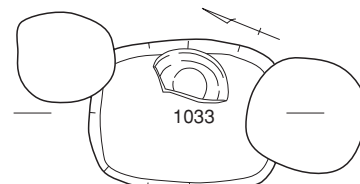


L=3.00m

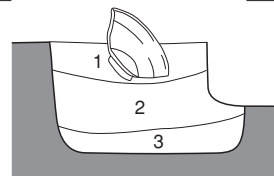


1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
地山ブロック含む

第385図 II-13区
SP14440 遺構実測図

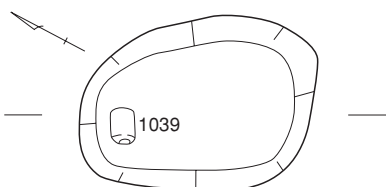


L=3.00m

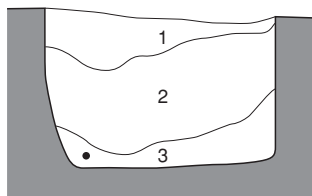


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第386図 II-13区
SP14509 遺構実測図

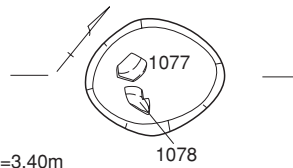


L=3.10m

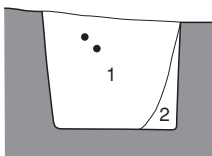


1. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (しまり強)
2. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第387図 II-13区
SP14515 遺構実測図

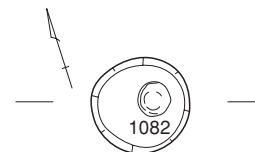


L=3.40m

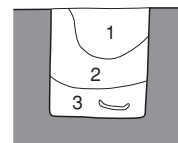


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第388図 II-13区
SP15063 遺構実測図



L=3.40m



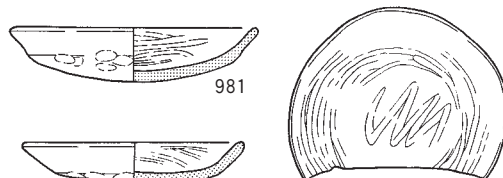
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第389図 II-13区
SP15105 遺構実測図

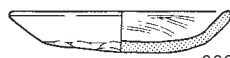




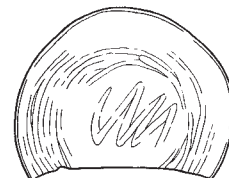
第390图 II-13区
SP14374遺物実測図



981



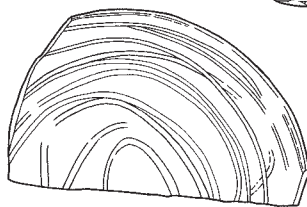
982



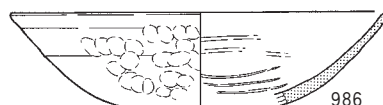
983



984



985



986

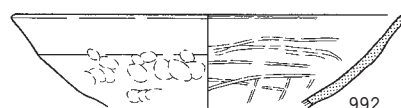


987

第391图 II-13区 SP14375遺物実測図



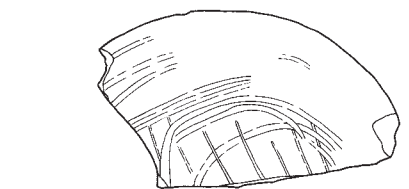
988



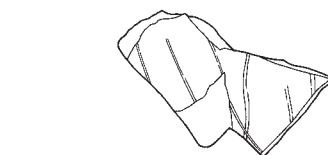
992



989



991



993



990

第393图 II-13区
SP14377遺物実測図



994



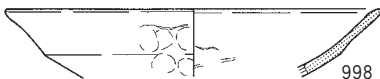
995

第392图 II-13区
SP14376遺物実測図

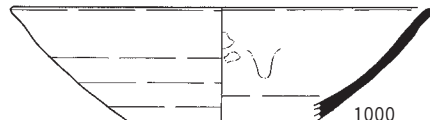
第394图 II-13区
SP14381遺物実測図



996



998



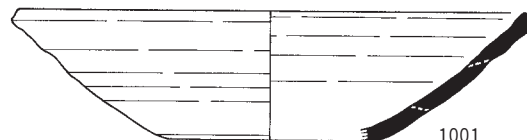
1000



997



999



1001



1002



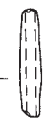
1003



1004



1005



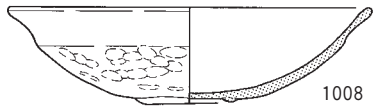
1006



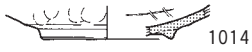
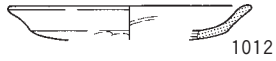
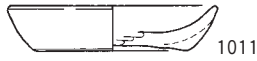
1007

第395图 II-13区
SP14397遺物実測図

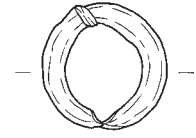
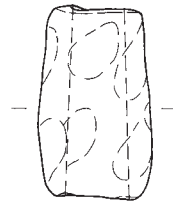




第396図 II-13区
SP14402遺物実測図

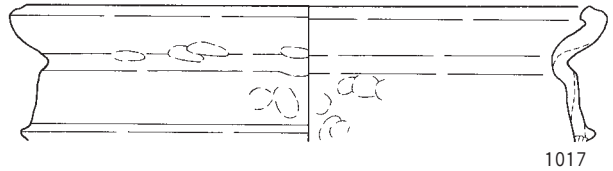


第399図 II-13区 SP14419遺物実測図

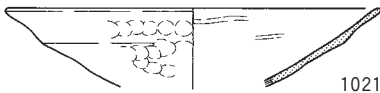
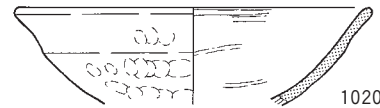
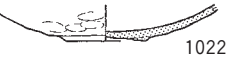
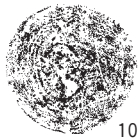


第397図 II-13区
SP14407遺物実測図

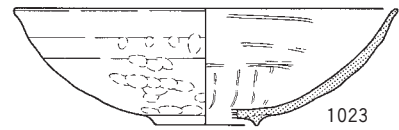
第398図 II-13区
SP14412遺物実測図



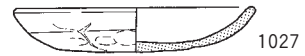
第400図 II-13区 SP14422遺物実測図



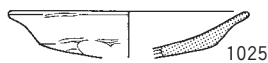
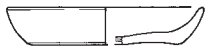
第401図 II-13区 SP14430遺物実測図



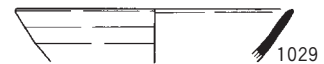
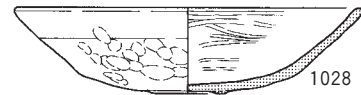
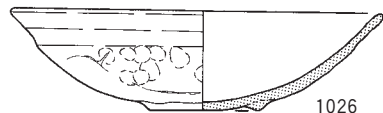
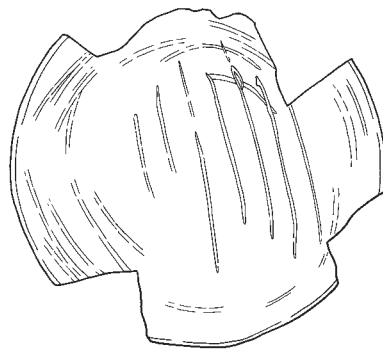
第402図 II-13区
SP14432遺物実測図



第404図 II-13区
SP14440遺物実測図

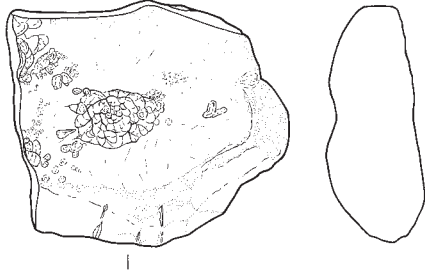
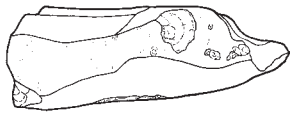


第403図 II-13区 SP14434遺物実測図

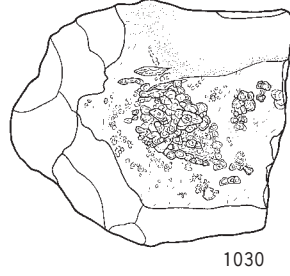


第405図 II-13区
SP14452遺物実測図





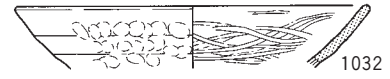
第406図 II-13区 SP14478遺物実測図



1030

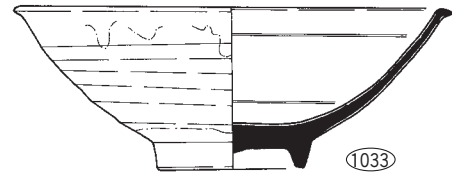


1031



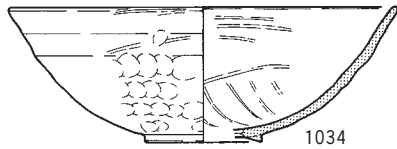
1032

第407図 II-13区
SP14507遺物実測図



1033

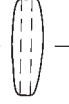
第408図 II-13区
SP14509遺物実測図



1034



1036



1038

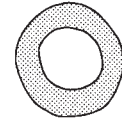
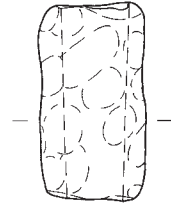


1035



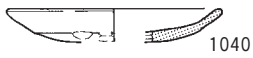
1037

第409図 II-13区 SP14512遺物実測図

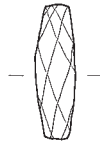


1039

第410図 II-13区
SP14515遺物実測図



1040



1042

第412図 II-13区
SP14553遺物実測図



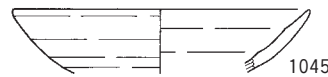
1043

第413図 II-13区
SP14648遺物実測図



1041

第411図 II-13区
SP14521遺物実測図

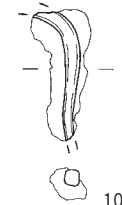


1045



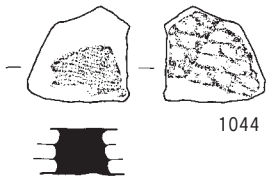
1046

第415図 II-13区
SP14665遺物実測図



1047

第416図 II-13区
SP14691遺物実測図



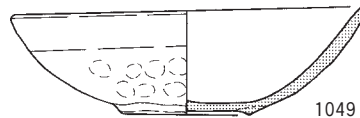
1044

第414図 II-13区
SP14655遺物実測図



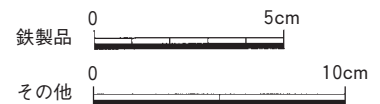
1048

第417図 II-13区
SP14697遺物実測図



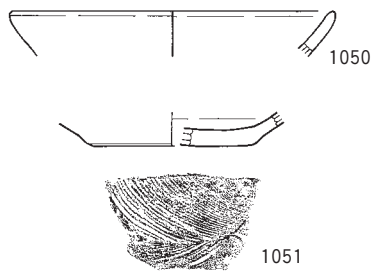
1049

第418図 II-13区
SP14708遺物実測図

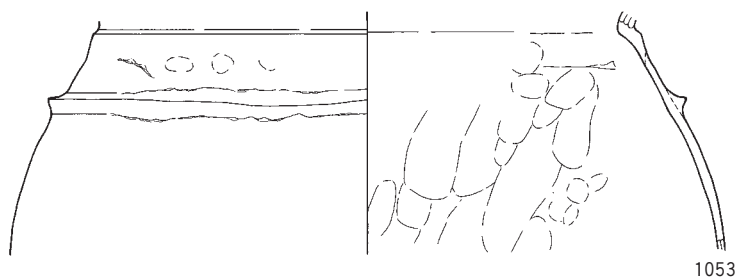


鉄製品

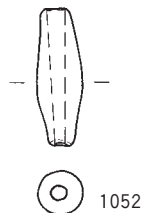
その他



第419図 II-13区 SP14720遺物実測図



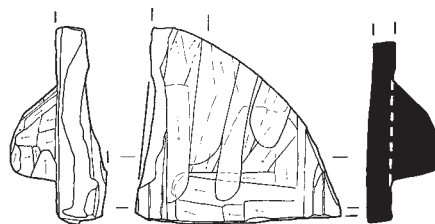
第421図 II-13区 SP14728遺物実測図



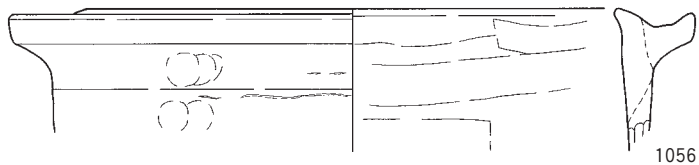
第420図 II-13区
SP14721遺物実測図



第422図 II-13区
SP14834遺物実測図



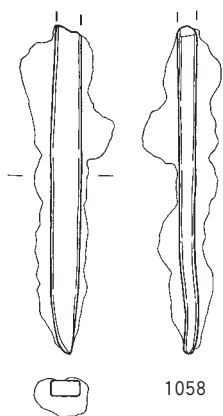
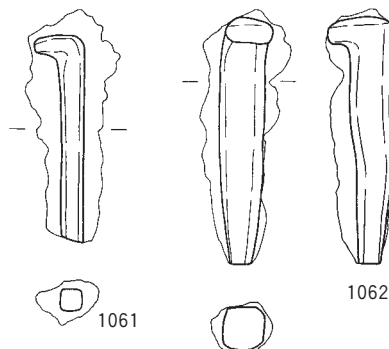
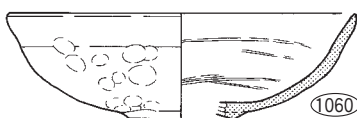
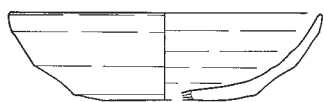
第423図 II-13区
SP14849遺物実測図



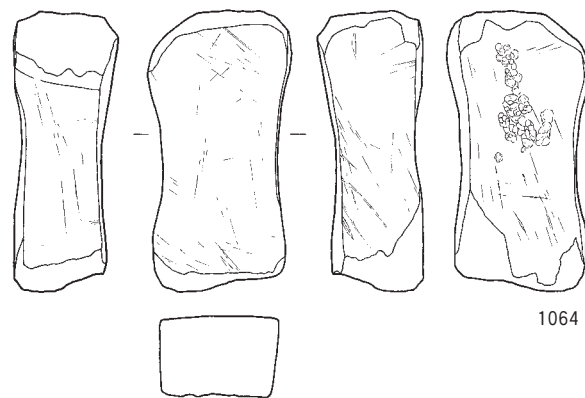
第424図 II-13区 SP14855遺物実測図



第425図 II-13区
SP14873遺物実測図

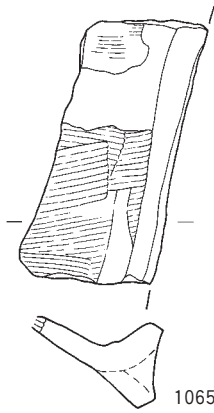


第426図 II-13区
SP14888遺物実測図

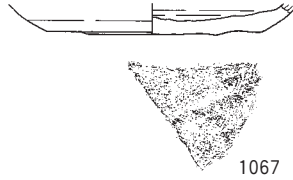
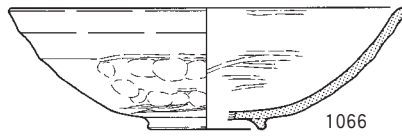


第427図 II-13区 SP14898遺物実測図





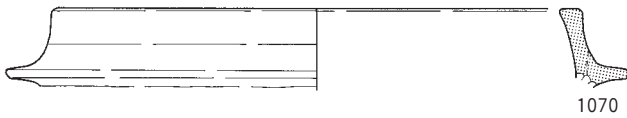
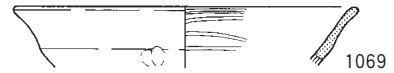
第428図 II-13区 SP14903遺物実測図



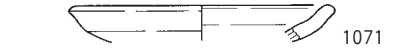
第429図 II-13区
SP14911遺物実測図



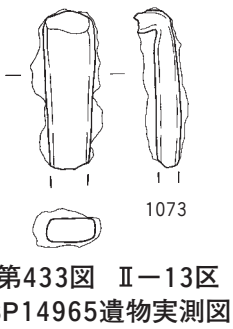
第430図 II-13区
SP14925遺物実測図



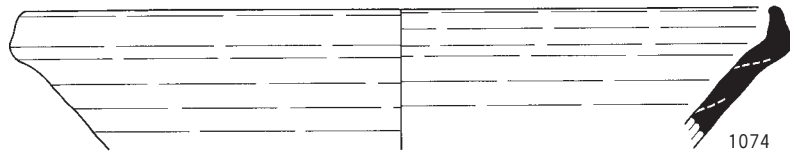
第431図 II-13区 SP14946遺物実測図



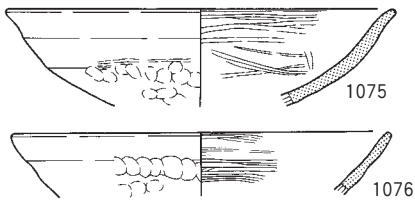
第432図 II-13区
SP14952遺物実測図



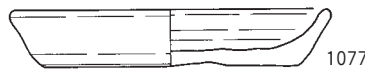
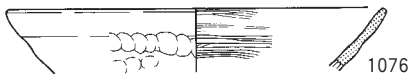
第433図 II-13区
SP14965遺物実測図



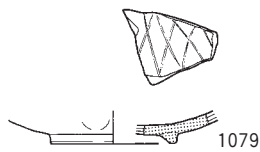
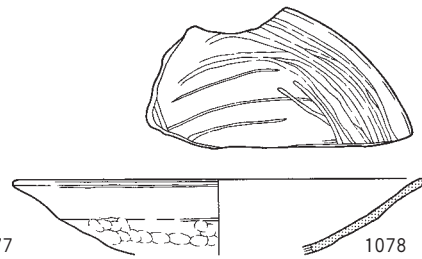
第434図 II-13区 SP15048遺物実測図



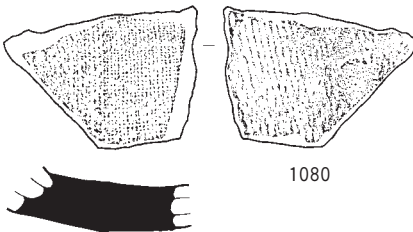
第435図 II-13区
SP15058遺物実測図



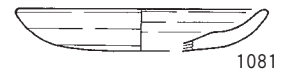
第436図 II-13区 SP15063遺物実測図



第437図 II-13区
SP15073遺物実測図



第438図 II-13区
SP15084遺物実測図



第439図 II-13区
SP15087遺物実測図



土器煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀か・皿、が出土。

1090 は瓦器皿。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、軟質焼成で磨耗により不明瞭。炭素吸着はみられず、酸化炎焼成する。和泉型瓦器Ⅱ～Ⅲ期前半頃とみられる。

1091・1092 は瓦器椀の上半部。1091 は外面にヘラミガキは確認できず、内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良で、口縁内外面のみわずかに吸着。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）前後に位置付けられる。1092 は小片のため復元径は不正確。焼成不良により磨耗しヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良で、口縁内外面のみわずかに吸着。和泉型瓦器椀Ⅳ－1～2期（13世紀中葉～後葉）に相当するが、口縁の形状から非和泉型瓦器の可能性も考えられる。

小穴 5325 号（Ⅱ地区 SP15325）（第 446 図）

Ⅱ－13区西部中央北寄り、n 11 グリッドに位置する、径 35cm 深度 29cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿、瓦器片・椀、が出土。

1093 は瓦器椀の上半部。小片で歪みを伴うため復元径は過大。口縁外面～内面に横位のヘラミガキを施す。軟質焼成品で、磨耗により調整不明瞭。炭素吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－1期（12世紀後葉）前後に相当。

小穴 5328 号（Ⅱ地区 SP15328）（第 447 図）

Ⅱ－13区西部中央北寄り、n 10・11 グリッドに位置する、径 42cm 深度 40cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器片・椀、が出土。

1094 は瓦器椀で底部を欠く。口縁外面～内面に横位のヘラミガキを施す。体部外面に接合痕を残す。軟質焼成気味。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅱ－3～Ⅲ－1期（12世紀後葉）に相当。

小穴 5338 号（Ⅱ地区 SP15338）（第 448 図）

Ⅱ－13区西部中央南寄り、m 11 グリッドに位置する、径 34cm 深度 19cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転ヘラ切りほか）・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

1095 は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質焼成気味。

小穴 5342 号（Ⅱ地区 SP15342）（第 449 図）

Ⅱ－13区西部中央南寄り、m 11 グリッドに位置する、径 25cm 深度 22cm を測る不整円形の小穴。SP15341 に切られる。遺物は、土師質土器片・供膳具、瓦器椀・皿、が出土。

1096 は瓦器皿。他の比較的器壁が薄い。軟質焼成品で、磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

小穴 5347 号（Ⅱ地区 SP15347）（第 450 図）

Ⅱ－13区西部中央南寄り、m 11 グリッドに位置する、径 27cm 深度 28cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師器羽釜、土師質土器片・供膳具・鍋、瓦器片・椀・皿、が出土。

1097 は瓦器皿。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成ともに良好。和泉型瓦器Ⅱ～Ⅲ期前半頃とみられる。

小穴 5376号 (Ⅱ地区 SP15376) (第451図)

Ⅱ-13区西部北側、n 10グリッドに位置する、径34cm深度36cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器椀、鉄製品片、が出土。

1098は撥形を呈する板状鉄製品で、鑿とみられる。端部は尖らせる。

小穴 5381号 (Ⅱ地区 SP15381) (第452図)

Ⅱ-13区西部北側、n 10グリッドに位置する、径34cm深度37cmを測る楕円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、が出土。

1099は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残すとみられるが、磨耗により不明瞭。焼成不良品。

小穴 5403号 (Ⅱ地区 SP15403) (第453図)

Ⅱ-13区西端部中央南寄り、l 10グリッドに位置する、径42cm深度34cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器皿・煮炊具、瓦器椀、が出土。

1100は土師質土器皿である。焼成不良により磨耗。回転台成形で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りか。胎土は粗く、チャートを含む。

小穴 5425号 (Ⅱ地区 SP15425) (第454図)

Ⅱ-13区西部北側、n 9グリッドに位置する、径56cm深度31cmを測る隅丸方形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器椀・皿、が出土。

1101は瓦器皿。歪みにより復元高過小か。口縁外面～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に平行状のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。1102は瓦器椀。高台断面は低い逆三角形。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗著しく不明瞭。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成する。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期(13世紀前葉～中葉)に相当。

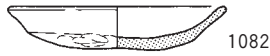
小穴 5439号 (Ⅱ地区 SP15439) (第455図)

Ⅱ-13区西端部北側、m 9グリッドに位置する、径34cm深度18cmを測る不整円形の小穴。遺物は、黒色土器片(A類)、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器椀、緑釉碗か皿、が出土。

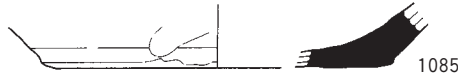
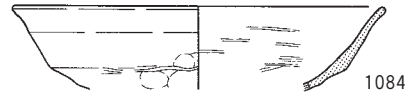
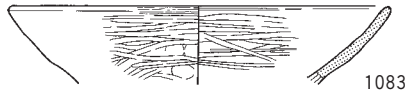
1103は緑釉陶器皿か碗の底部である。高台は輪状で、削り出しとみられるが不確定。釉は濃緑色で、微細な貫入を伴い、剥離が著しい。胎土は土師質焼成で、きわめて軟質である。平安京近郊産で、高橋編年Ⅱ期(9世紀中葉～後葉)とみられる。

〈Ⅱ-13区 第1包含層出土遺物〉(第456～459図)

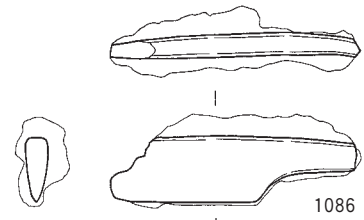
弥生土器には、壺1104・1105と甕1106がある。1104は筒形の頸部が上部で一端すぼまり、口縁部は屈曲して水平に大きく開く広口壺。外面は体部から頸部にかけて一連の縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリによって整形される。1105は弥生土器壺の底部である。磨耗により外面の調整は不明で、タタキの痕跡は確認できないことから、ヘラミガキを施すと推測される。内面は縦位の指ナデまたはケズリとみられる。1106は上半が球形をなし、下半で小さくすぼまる形態。口縁部は短く屈曲して外傾



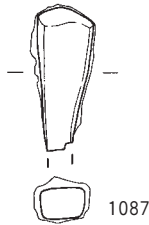
第440図 II-13区
SP15105遺物実測図



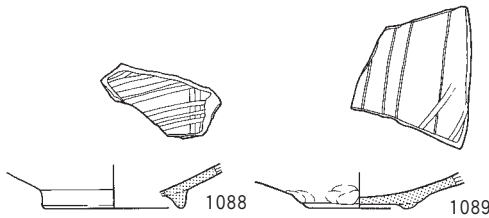
第441図 II-13区
SP15112遺物実測図



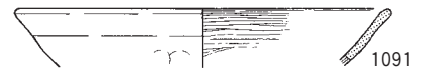
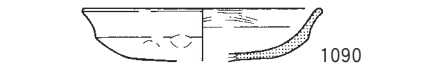
第442図 II-13区
SP15190遺物実測図



第443図 II-13区
SP15228遺物実測図



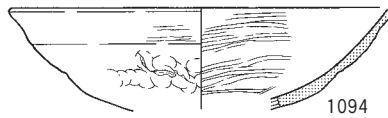
第444図 II-13区
SP15282遺物実測図



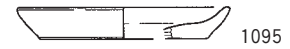
第445図 II-13区
SP15289遺物実測図



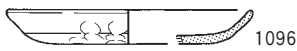
第446図 II-13区
SP15325遺物実測図



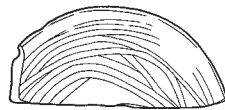
第447図 II-13区
SP15328遺物実測図



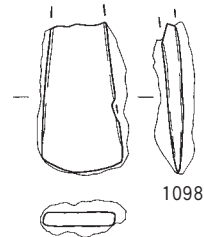
第448図 II-13区
SP15338遺物実測図



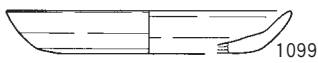
第449図 II-13区
SP15342遺物実測図



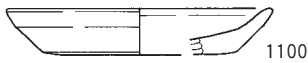
第450図 II-13区
SP15347遺物実測図



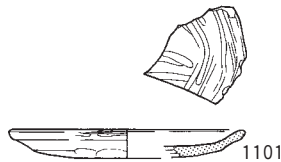
第451図 II-13区
SP15376遺物実測図



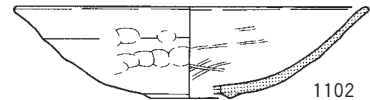
第452図 II-13区
SP15381遺物実測図



第453図 II-13区
SP15403遺物実測図



第454図 II-13区
SP15425遺物実測図



第455図 II-13区
SP15439遺物実測図



する。体部内面のヘラケズリは縦方向で、頸部直下にまで及ぶ。体部下半は熱による器壁の剥落が著しい。いずれも菅原・瀧山編年Ⅵ-1～2様式であろうか。

土師器甕 1107 は球形で小形の体部から、緩やかに外反する口縁部へとつながる。小形の器形であるため、外面のハケ・内面のヘラケズリともに方向はランダム。体部下半には水平方向にドーナツ状に器壁の剥落がみられ、竈へ据えていた状況を明瞭に痕跡としてとどめる。須恵器 1108 は蓋杯の蓋、1109 は蓋杯の身である。いずれも口径が 11～12cm と小型化が顕著であり、TK217 型式にあたるもの。

1110・1111 は非回転台成形の土師質土器皿である。底部外面に指頭圧痕を残す。1110 は胎土に在地花崗岩を含むほか、赤色粒子が目立つ。1111 はチャートを含む。ともに京都系土師皿の在地模倣品とみられる。概ね 13 世紀代か。

1112～1115 は底部外面に回転ヘラ切り痕を伴う土師質土器供膳具。1112～1114 は皿。1114 は底部内面に黒漆が皮膜となって付着することから、漆液容器として使用されたと考えられる。1115 は杯。

1116～1123 は底部外面に回転糸切り痕を残す土師質土器皿である。1116・1117 は小型品。口径 7.0 cm 前後に対し、底径 4.0cm 前後で、体部は大きく開く。器壁は薄い。軟質焼成により調整不明瞭。1117 は在地花崗岩を含む。1121 は板目痕を残す。胎土にチャートを含む。1124 は土師質土器杯。底部のみ残存。底部外面は回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土に在地花崗岩を含む。1125 は回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。体部から口縁にかけて内彎する。

1126 は土師質土器碗の底部。器壁が約 1cm ときわめて厚い。底部外面に断面逆三角形の厚い高台を貼り付け。高台の接合痕を明瞭に残す。軟質焼成により磨耗著しく調整不明瞭。胎土に泥岩を含むとみられる。1127 は土師質土器の高脚高台付皿である。回転台成形であるが、高台貼り付けにより切り離し技法不明。焼成不良により磨耗。胎土に絹雲母・チャートを含む。概ね 12 世紀代とみられる。

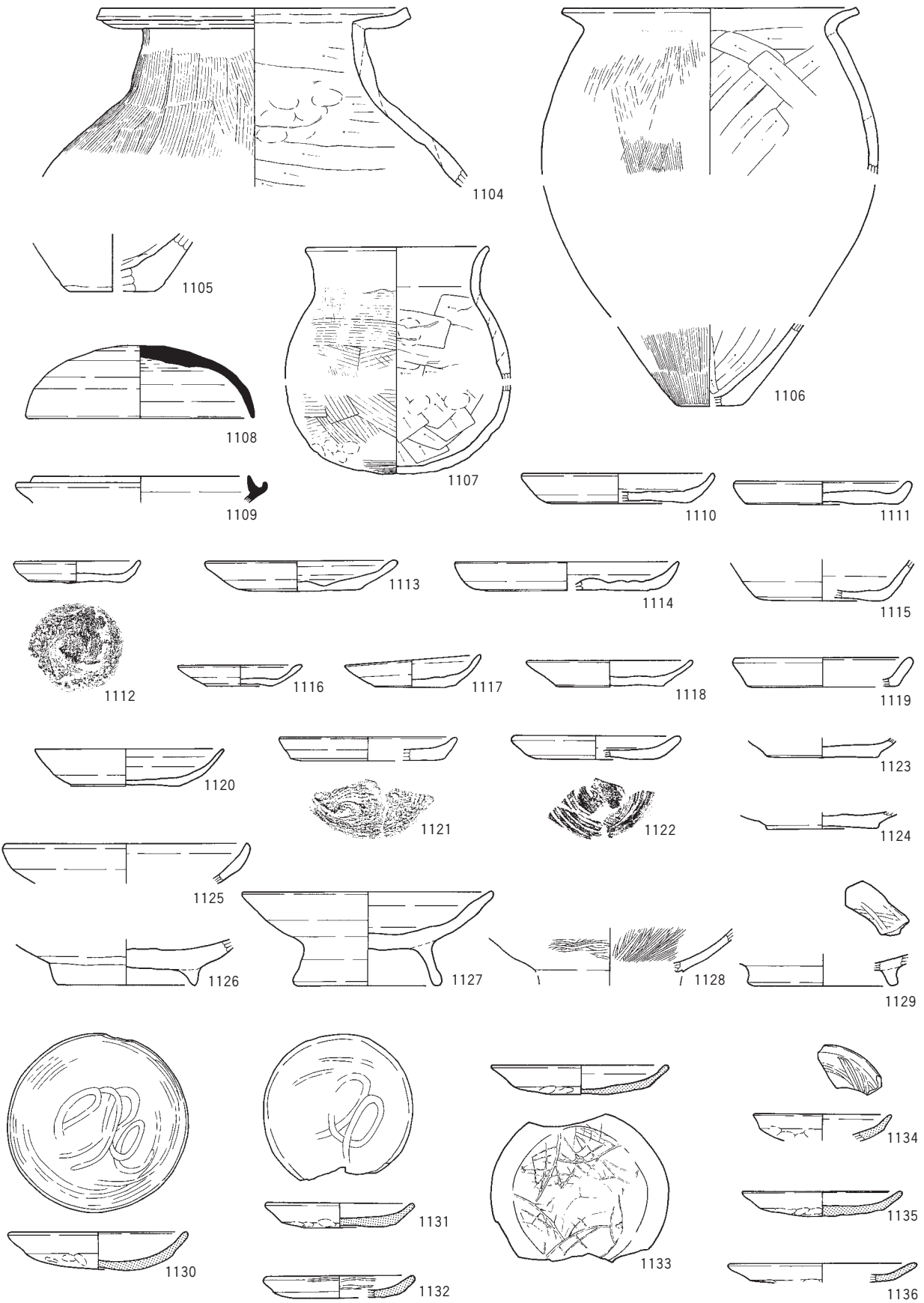
1128 は黒色土器 B 類碗の体部下半。外面下端に高台の剥離痕を残し、本体側に輪状の沈線を引く。外面に密な横位のヘラミガキ、内面に密な縦位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。胎土は精良で、微細な石英粒のみ視認できる。1129 は黒色土器 B 類碗の底部。高台断面は逆台形状。見込みにヘラミガキを施す。炭素吸着良好で、胎土も黒化する。

1130 は完形の瓦器皿である。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに連結輪状のヘラミガキを施す。口縁の一部に鉄分が付着しており、鉄製品と密着していた可能性がある。炭素吸着良好だが、焼成不良により部分的に磨耗。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。

1131～1136 は瓦器皿である。1131 はほぼ完形。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに連結輪状ヘラミガキが 2 回転分確認できる。炭素吸着良好だが、焼成不良により磨耗。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。1132 は復元径過小か。口縁外面と内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良だが焼成堅緻。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。

1133 は内面が磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着良好。底部外面に掌紋圧痕が明瞭に残る。左掌上に皿を乗せ、右手の指で内面を時計回りにヨコナデした際の痕跡とみられ、反時計回りに 6 回置き直したものと推測できる。和泉型瓦器Ⅲ期後半～Ⅳ期前半頃か。

1134 は復元径過小か。見込みにやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良。外面にヘラミガキが確認できないことから、和泉型瓦器Ⅲ期後半頃とみられる。1135・1136 は磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。胎土に 1～3mm 大の石英粒が目立つ。ともに和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。



0 10cm

第456图 II-13区 第1包含層遺物実測図(1)

1137～1147は瓦器椀。1137・1138は和泉型瓦器椀Ⅲ-1期（12世紀後葉）とみられる。1137は断面逆台形状の高台。底部外面にヘラミガキを施し、高台貼り付け後にヨコナデを施すものとみられる。見込みには密なヘラミガキを施す。炭素吸着は良好で、金属光沢を伴う。1138は断面逆三角形のやや退化した高台をもつ。見込みに斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は外面良好、内面不良。焼成良好。

1139～1143は和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられる。1139は高台断面が低い逆三角形で、貼り付けは粗雑。口縁外面は2段にヨコナデ。口縁～体部内面は横位のヘラミガキを施すが、磨耗により不明瞭。見込みにヘラミガキを施すが、形状は不明。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。焼成不良。口縁断面で接合痕が確認でき、部分的に接合面で剥離する。1140は全体的に歪みが大きい。高台は幅広で、断面は低平な逆台形状。底部中央が高台下端よりわずかに下方に突出する。口縁～体部内面に横位の太いヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。胎土にチャートを含む。1141は内面にのみ横位のヘラミガキを施す。炭素吸着不良。1142・1143は小片のため復元径過小。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。ともに炭素吸着は良好で、1143の外面は金属光沢を伴う。

1144は内面にのみ横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。1145はⅢ-3期（13世紀前葉）に相当。1146は内面にのみ横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好で、外面に金属光沢を伴う。Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当。1147は内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗・剥離し不明瞭。炭素吸着やや不良。和泉型を模倣した在地産瓦器椀とみられる。

1148は東播系須恵質土器椀の下半部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。見込みに段を有することから、森田編年第Ⅰ期第2段階～第Ⅱ期第1段階（11世紀末～12世紀後半）に相当。

1149は陶器皿の底部。高台は削り出しで作る。白色の化粧土を塗布し、施釉後に高台畳付部の釉を掻き取る。釉は透明度に乏しい灰色で、貫入を伴う。焼成は堅緻で、緻密な胎土をもつ。肥前系陶器とみられ、形状では長崎の現川焼が近似する。現川焼なら17世紀後葉～18世紀前半頃か。

1150～1152は白磁皿。1150は上部で、口縁端部の釉を掻き取るいわゆる口禿である。大宰府分類白磁皿Ⅸ類（13世紀中頃～14世紀初頭）に相当。1151は底部。見込みの底体部境に圏線状の沈線を回す。底部外面は削り出しにより作り、残存部は露胎。釉に微細な貫入を伴う。大宰府分類白磁皿Ⅵ-1・b類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

1152は体部の中程を欠く。見込みに重焼による目痕を2カ所残すが、完形であれば計4カ所と推定される。高台は削り出しで作る、のち4カ所の抉りを入れた割高台である。畳付部には釉が付着する。釉は微細な貫入があり、内面～体部外面まで施釉し一部は高台外側に及ぶ。焼成不良により素地は陶器質。森田分類白磁D群（15世紀前半頃）に相当。

1153～1157は白磁碗。1153は上部で、口縁端部を外方に短く屈曲させる。体部外面は横位のヘラケズリを施す。体部内面上位に横位の沈線を1条施す。釉とびを伴う。大宰府分類白磁碗Ⅴ-4・a類（12世紀中頃～後半）に相当。1154は上半部。直線的に開く体部をもち、口縁端部はわずかに外反して尖り気味に作る。体部外面に斜位のヘラケズリを施す。釉にごく粗い貫入とわずかな釉とびを伴う。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅴ-1類（11世紀後半～12世紀前半）としたが、口縁内面の沈線は確認できない。

1155・1156は口縁部を玉縁に作る白磁碗の上半部である。1156は体部外面はヘラケズリを施す。内面～体部外面上位まで施釉。釉に貫入およびわずかな釉とびあり。1155は釉に貫入および釉とびを伴い、内面は釉の肌が荒れて微細な凹凸を生じる。ともに焼成不良によりやや陶器質である。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。1157は白磁碗の底部。高台は削り出しで作り、内側は浅い。内面に施釉し、残存部外面は露胎。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ-1類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

1158・1159は青磁皿。1158は底部を欠く。体部内面下端に沈線を施す。釉の透明度高い。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ類（12世紀中頃～後半）とみられる。1159は下半部で、底部中央を欠く。内面に櫛描文を施文。全面施釉後に底部外面の釉を掻き取る。釉の透明度高く、粗い貫入を伴う。大宰府分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2類（12世紀中頃～後半）に相当。

1160・1161は青磁碗。1160は端反りの口縁をもつ。釉に貫入を伴い、肌は荒れ気味である。上田分類青磁碗D-II類（14世紀後葉～15世紀前葉）に相当。1161は上部片。外面にヘラ片彫による鎬蓮弁文を施文する。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類（13世紀初頭～前半）に相当。

1162は青白磁の合子蓋である。天井部外面は型押しで作る。内外面の天井部～体部上位に施釉し、以下露胎。釉の透明度高く、ごく粗い貫入を伴う。

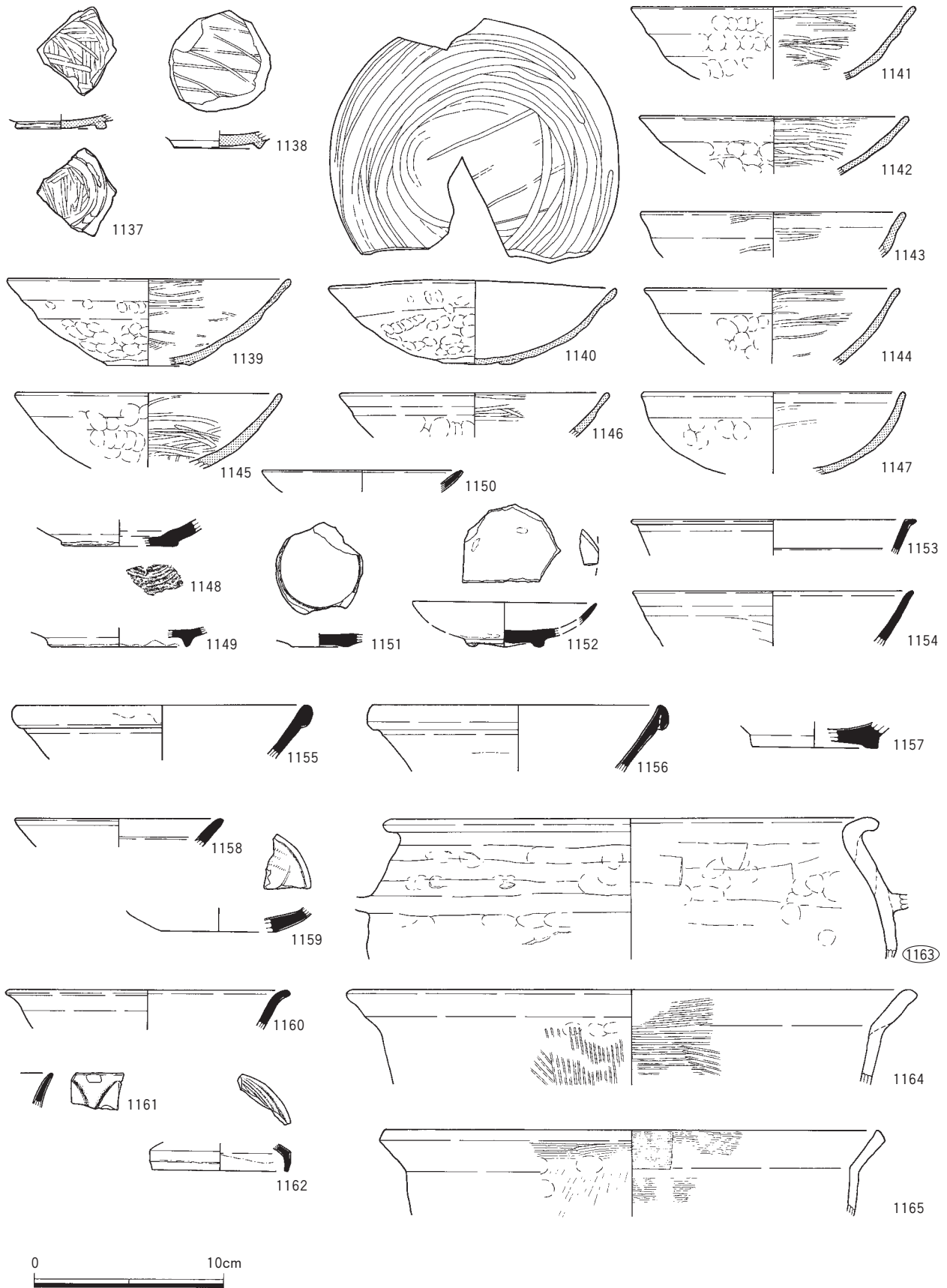
1163は土師質土器鍔付鍋の上半部。体部上位が内彎しており、失われた下半部は球形を呈するとみられる。口縁は短く外反し、端部は丸く収める。鍔は体部中央よりやや上位に貼り付ける。鍔端部を欠くが、基部は1cm以上あり、ある程度水平に伸びるものと推測される。体部外面はユビオサエのちヨコナデ、体部内面はユビオサエのち横位の板ナデを施す。口縁内面～外面に煤付着。胎土に花崗岩を含む。河内からの搬入品とみられ、13世紀代に位置付けられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.27）、実体顕微鏡観察により黒雲母およびチャート・砂岩を確認。

1164～1166は土師質土器鍋の上部である。1164は頸部外面以下タテハケ、内面はヨコハケを施す。内外面ともハケは粗い。外面煤付着。1165は頸部が外方に屈曲し、内面に稜線を作る。口縁端部はやや肥厚する。口縁外面はヨコハケ、頸部外面はユビオサエのちヨコナデ、体部外面はタテハケのちナデを施す。内面はヨコハケにより頸部の稜線が明瞭。外面煤付着。胎土に花崗岩・金雲母・角閃石を含み、1167～1169の羽釜と酷似することから瀬戸内沿岸の産と考えられる。ハケを多用する技法から吉備系とみられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.30）、蛍光X線分析では瀬戸内産として集中する分布域に収まり、実体顕微鏡観察では金雲母を確認している。

1166は口縁を受口状に作る。軟質焼成で、磨耗により調整不明瞭。外面に煤および炭化物が厚く付着。胎土は粗く、花崗岩を含む。京都の山城型瓦質鍋の焼成不良品とするには胎土が粗いことから、その模倣品と考えられる。概ね13世紀後半～14世紀前半頃か。

1167～1169は土師質土器羽釜の上部。やや外方に開く直線的な体部をもち、口縁端部を外方に拡張する。鍔部は口縁直下に貼り付け、端部を丸く仕上げる。1167は体部外面にユビオサエのちタテハケを施す。内面はいずれもヨコハケを施す。胎土は3点ともに酷似し、金雲母と角閃石・花崗岩を含む。いずれも広島県東部～岡山県西部からの搬入品と考えられる。1167は胎土分析を行い（胎土分析試料No.22）、蛍光X線分析では瀬戸内産の分布域に収まり、実体顕微鏡観察では黒雲母を確認している。

1170は瓦質土器鍋の上部。受口状口縁をもつ。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。軟質焼成で、器表面は磨耗気味。胎土はきわめて精良で、金雲母を含むほか、角閃石とみられる黒色粒子を含む。山



第457图 II-13区 第1包含層遺物実測图(2)

城型瓦質土器鍋の搬入品とみられ、概ね13世紀代に位置付けられる。

1171～1175は東播系須恵質土器捏鉢で、いずれも上部あるいは上半部を残す。1171は口縁端部を上方に拡張。口縁外面は重焼により自然釉付着。胎土にチャートを含む。1172は口縁端部をわずかに上方に拡張。口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)に相当。

1173は口縁端部を上方にわずかに拡張し、内面～口縁端部外面に自然釉付着。内面全体に自然釉が付着することから、焼成時に内面を上に向けた状態で重焼の最上位に位置したと推測できる。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)に相当。1174は口縁端部を上方に拡張する。口縁外面に重焼による自然釉が付着し、重ねられた別個体の剥離痕も残る。森田分類第Ⅲ期第1段階(13世紀前半～後半)に相当。

1175は口縁端部を内上方に小さく拡張する。口縁外面に重焼により炭素付着。体部内面上位に接合痕を残す。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期(12世紀中葉～13世紀初頭)に相当。1176は東播系須恵質土器捏鉢の下半部。回転台成形で、外面に指頭圧痕、内面に斜位の指ナデを施す。底部外面に回転糸切り痕を残す。見込みは使用により磨耗。

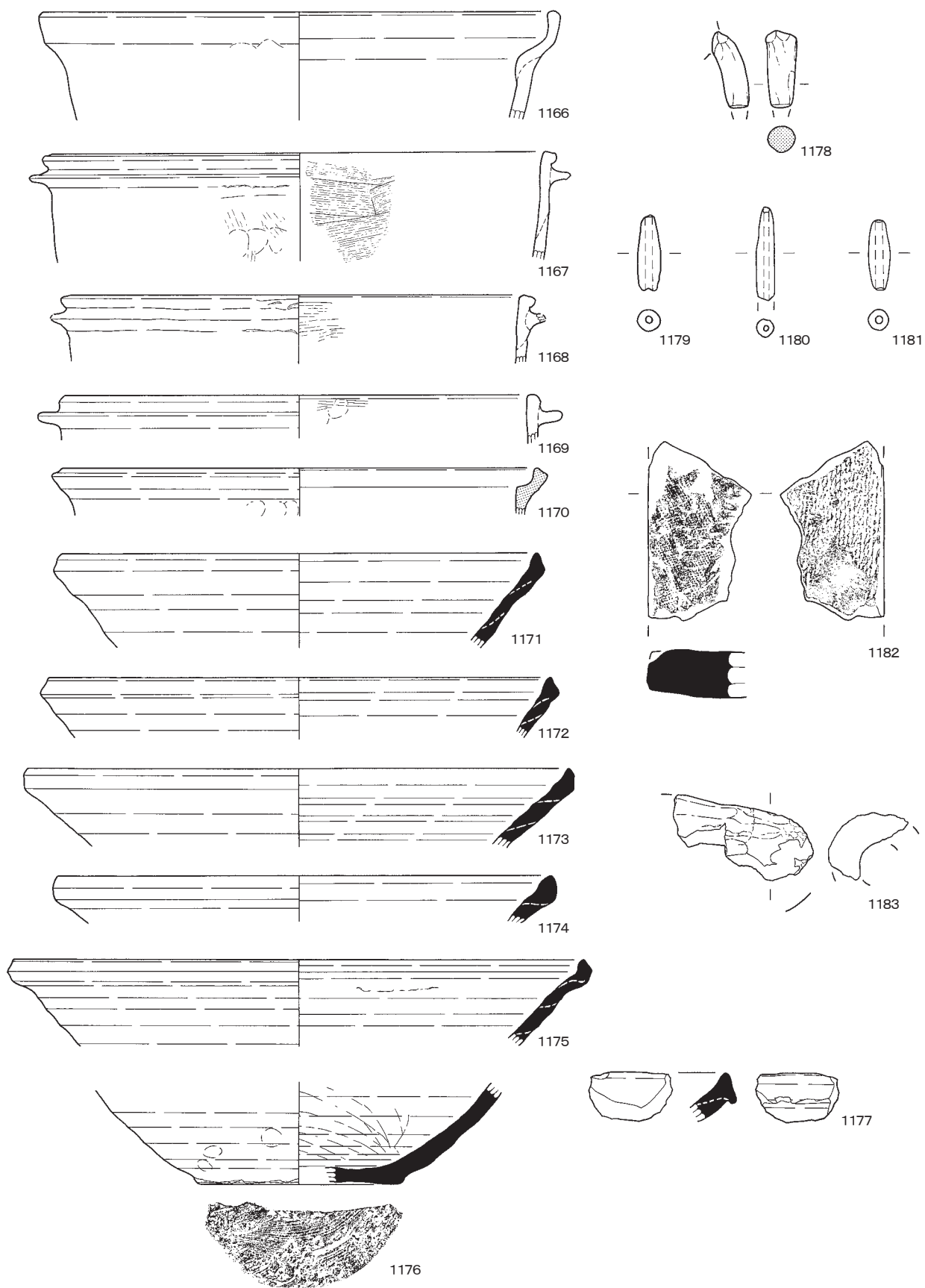
1177は備前焼陶器播鉢の上部片。口縁外面を小さく下方に拡張する。重根編年ⅣA-1期(14世紀後葉)に相当。1178は棒状の瓦質土器で、両端を欠く。ミニチュア羽釜の脚部とみられる。上部は緩やかに屈曲し、下方は細る。炭素吸着は良好。

1179～1181は土師質管状土錘。1179は焼成不良により磨耗著しい。1180は細身でやや扁形。胎土は粗く、チャートを含む。焼成良好。1181は軟質焼成品で、胎土にチャートを含む。1182は須恵質土器の平瓦片。凹面に布目圧痕、凸面に縄蓆文を残し、側面は板ナデを施す。1183は土師質の鞆羽口。先端から7.5cmが残存。復元孔径は2.6cmと小さいことから鍛冶用の羽口と考えられる。前半部外面表層は被熱により気泡がみられ、とくに先端部は強い被熱により気泡著しく、黒化する。胎土にチャートを含む。

1184は陶器甕の体部上位とみられる破片。外面に格子状の押印文タタキを施し、格子内に※印などの文様がみえる。自然釉が付着。「宮ノ本遺跡Ⅰ」のⅠ-3区SD1028出土No.952と同型の押印文である。内面は接合痕が明瞭で、横位の板ナデを施す。胎土に泥岩とみられる粒子や黒色粒を含む。常滑焼とみられるが、型式・時期等は不明。1185は常滑焼甕底部。体部外面に縦位の板ナデを施し、残存部の底部外面は不調整である。内面はユビオサエおよびユビナデ調整を施す。残存部内面に自然釉が付着することから、より大きな口径をもつとみられる。

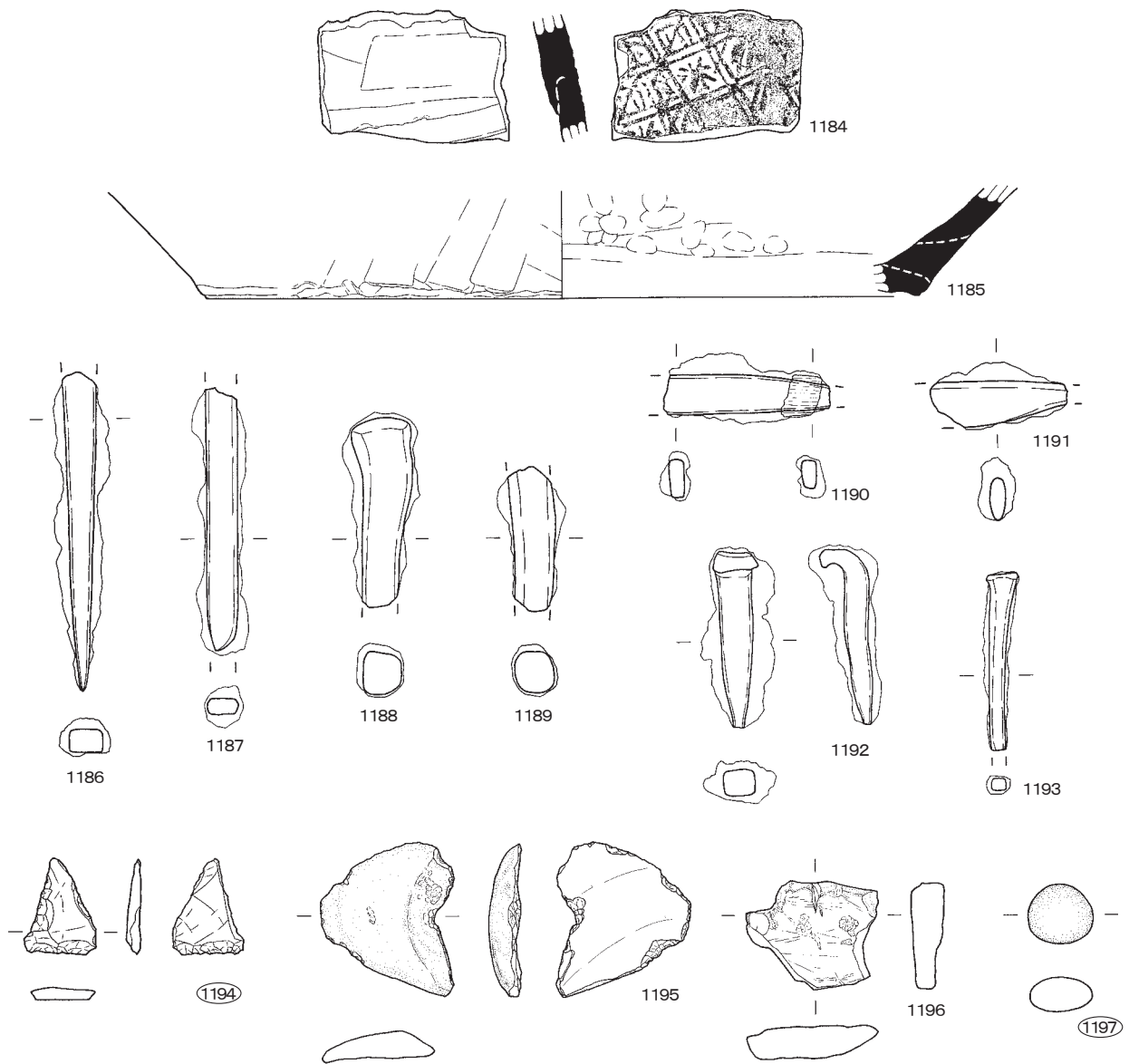
1186～1193は鉄製品。1186は棒状で先端部を鋭く尖らせる。鑿とみられる。上部を欠く。1187は棒状で残存長7.7cmを測る。先端部を鈍く尖らせる。鑿であろうか。1188は鑿であろう。頂部を叩いて平頭に作る。下部を欠損。1189は太い棒状であることから鑿か楔であろう。両端部を欠く。1190は刀子の茎で、木質部がわずかに残存。1191は刀子で、身・茎ともに大きく欠損。1192は鉄釘。頂部を叩いて伸ばし、折り曲げて頭部を作る。1193は鉄釘。頂部を平頭に作り、先端部を欠く。

1194は完形のサヌカイト製石鏃である。平基式で、重量0.92gの小型品。1195は砂岩の剥片を用いたスクレイパーとみられる。エッジは使用により細かく剥離し、いくつか集中する部分がみられる。自然面には敲打痕を残す。1196は砂岩製の砥石。1面のみ使用し、他は欠損するが破面はやや風化する。砥面に敲打痕、エッジには部分的に擦痕が確認できる。1197は石英の自然礫。長径1.8cmの扁平な円礫で、加工痕は確認できない。白碁石とみられる。



第458图 II-13区 第1包含層遺物実測図(3)

0 10cm



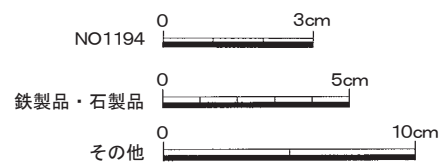
第459図 II-13区 第1包含層遺物実測図(4)

〈II-5区 SD1036 出土遺物〉(第460図)

1198は、「宮ノ本遺跡I」で掲載から外れていた遺物であるが、特異な形状をもつことから本書で掲載する。瓦器の供膳具上半部で、皿であろうか。口縁は短く外反し、端部を小さな玉縁状に仕上げる。体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。産地・時期不明。



第460図 II-5区 SD 1036遺物実測図



〈I-12区 第1遺構面〉(第461～462図)

I-12区(2009年度調査7区)は調査地西半部東側に位置する、東西長約90m、南北幅約28mの調査区である。遺構面は1面のみ検出し、標高は3.1～3.3mで北から南に向けて緩やかに傾斜する。遺構面検出時、調査区南西側で広範囲にグライ化した部分が検出された。II-13区で検出した近世～近代の流路と近似した土であったため当初攪乱として重機による掘削を行ったが、のちに遺構面ベース土がグライ化したものと判明した。

遺構数は、掘立柱建物(SA)19棟、柵列(SG)4基、土坑(SK)147基(うち土壙墓の可能性あるもの9基)、溝(SD)16条、小穴(SP)518基で、ほぼ中世に属する。

掘立柱建物74号(I地区 SA1074)(第463・474図)

I-12区東端部南側からII-13区西端部、j～l 10グリッドに位置する。東西2間(2.6m)南北3間(8.7m)床面積22.6㎡、9基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸はN1°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径24～38cm、深度10～34cmを測る。柱痕はEP3で確認。

遺物はEP2～5・9でみられ、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯(回転糸切り・ユビオサエ)・鍋、須恵質土器片、瓦器片・椀、スラグ、が出土。

1199はEP3第1層中位出土の土師質土器杯。柱痕とみられる埋土の上位から破砕した状態で出土している。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に砂岩を含むとみられるが不確定。

1200・1201はEP4の出土遺物。1200は土師質土器杯で、柱穴のほぼ中央で正位に埋置された状態で出土。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土にチャートを含む。1201は瓦器椀の上半部。小片のため復元径過小。内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面～口縁内面に良好で、体部内面は重焼により吸着なし。胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀II-3期(12世紀後葉)頃に相当。

1202・1203はEP9から出土した非回転台成形の土師質土器供膳具で、底部外面に指頭圧痕を残す。1202は杯。器壁が厚い。胎土にチャートを含む。京都系土師皿Eタイプの在地模倣品であろう。1203は皿。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含むとみられるが不確定。京都系土師皿の在地模倣品。いずれも概ね13世紀代に位置付けられる。

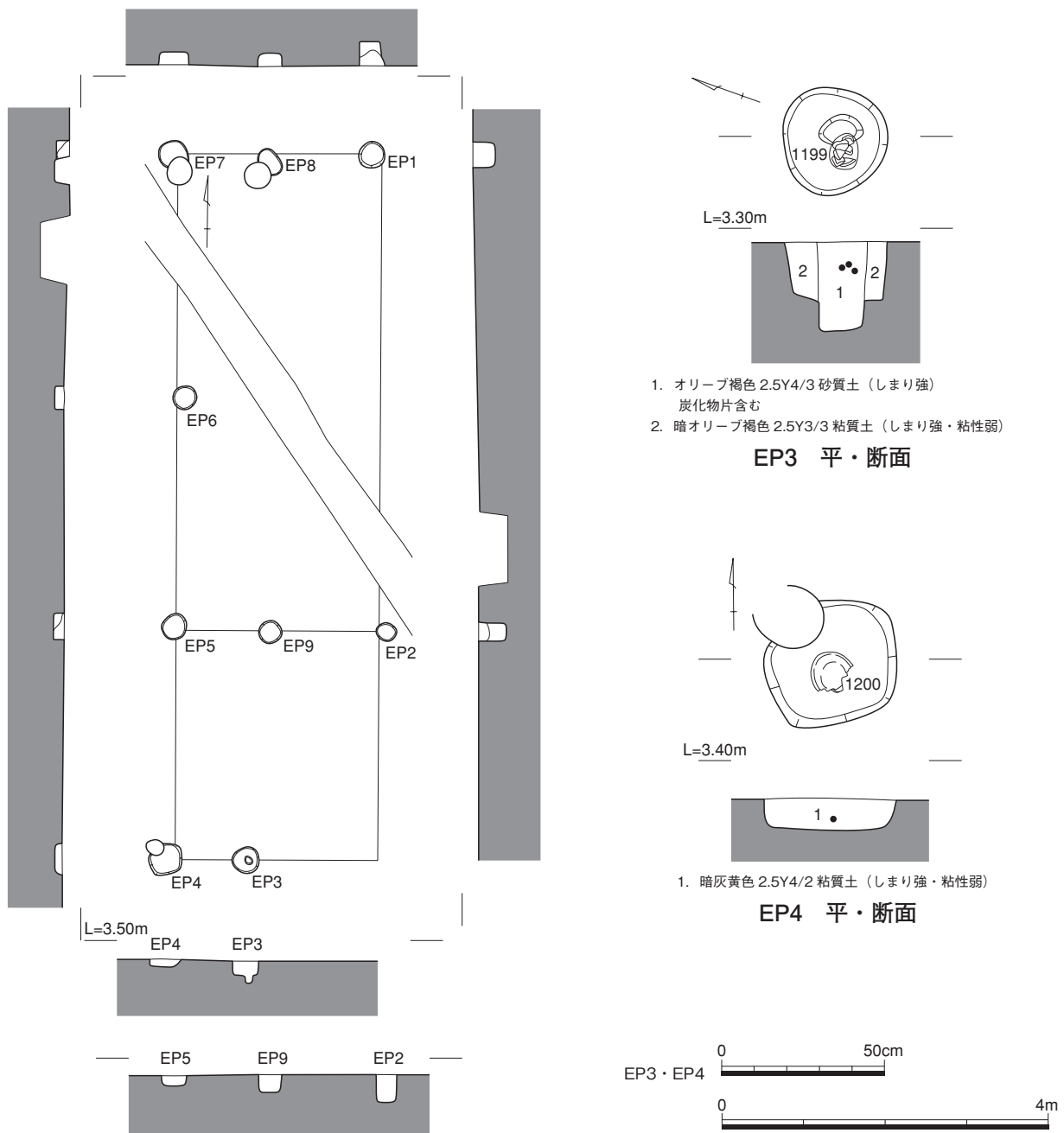
遺構の年代は、出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物75号(I地区 SA1075)(第464・475図)

I-12区東部中央北寄り、k～m 7～9グリッドに位置する。東西3間(7.2m)南北2間(3.8m)床面積27.4㎡(庇部を含めて南北4間(6.0m)43.2㎡)、17基の柱穴をもつ南北庇付きの側柱建物で、建物主軸はN81°Eを向く。柱穴は不整形円形を呈し、径16～48cm、深度12～50cmを測る。柱痕はEP1・2・5～9・11・15・16で確認。

遺物はEP1～10・12～17から、黒色土器片(B類)・椀(A類)、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具・鍋、瓦器片・椀・皿、青磁碗(龍泉含む)、白磁皿、壁土、が出土。

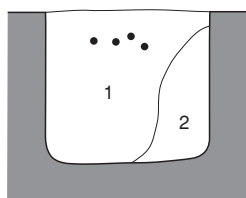
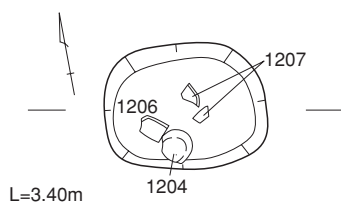
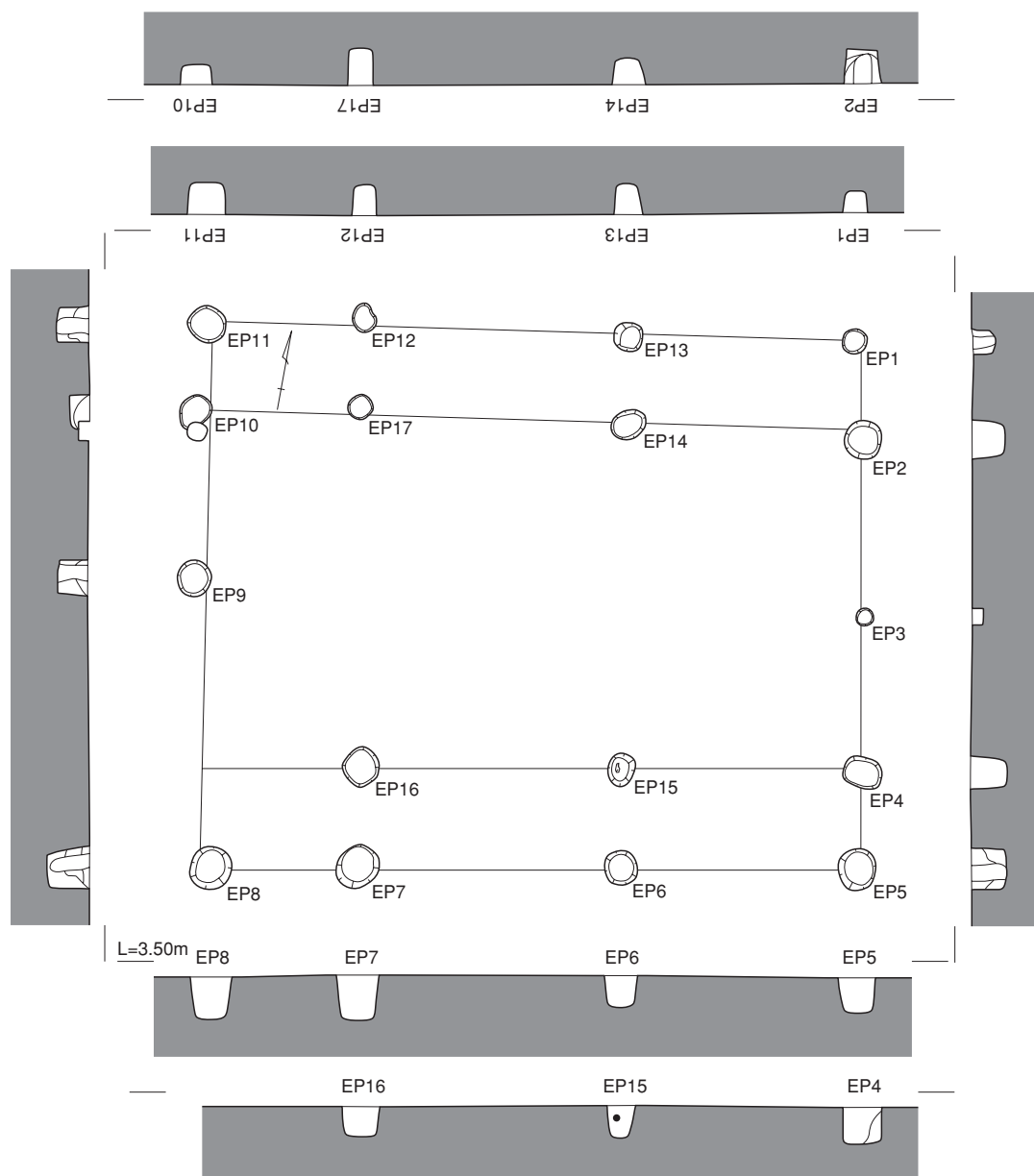
1204～1208はEP4の出土遺物。1204・1206・1207は埋土上位から出土し、1204のみ残存率良好。1204・1205は瓦器皿。1204の器形は大きく歪み、平面形は楕円を呈する。口縁～体部内面は横位のヘラミガキ、見込みは平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器皿期前半頃か。1205は



第 463 図 I - 12 区 SA1074 遺構実測図

底部の大部分を欠く。低平な器形。焼成不良により磨耗しており、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器Ⅳ期頃か。

1206～1208は瓦器碗。1206は底部を欠く。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。器形・法量から和泉型瓦器碗Ⅲ-1期(12世紀後葉)に相当。1207は上半部。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良で、わずかに酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)に相当。1208は上半部。歪みにより復元径過小。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～3期(12世紀後葉～13世紀前葉)に相当。



EP4 平・断面

1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)



第 464 図 I - 12 区 SA1075 遺構実測図

1209～1211はEP15の出土遺物。1209は瓦器皿。口縁～体部内面に横位のヘラミガキを施すが、磨耗により見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だがわずかに酸化炎焼成。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃か。1210・1211は瓦器碗の上半部。1210は内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅲ－2期(12世紀末～13世紀初頭)とみられる。1211は内面にやや粗い横位のヘラミガキ。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良。胎土に花崗岩を含む。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期(13世紀前葉)に相当。遺構の年代は、出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 76号 (I地区 SA1076) (第465・476図)

I－12区東部北側、1・m6～8グリッドに位置する。東西3間(9.4m)南北1間(3.0m)床面積28.2㎡、11基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物で、建物主軸はN87°Eを向く。柱穴は不整円形または隅丸方形を呈し、径29～65cm、深度9～47cmを測る。柱痕はEP4・7・8で確認。遺物はEP1～11でみられ、黒色土器片(B類)、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具・鍋、瓦器片・碗・皿、白磁碗、鉄製刀子か、が出土。

1212～1214はEP1の出土遺物で、1212・1213は第1層から出土。1213は完形品で、柱材の抜き取り後に埋置されたもの。1212は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土にチャートを含む。1213はほぼ完形の瓦器碗。腰が張った器形。口縁は強いヨコナデによって外反し、内面に稜を作る。高台断面は幅広・低平な逆台形状で径が大きい。貼り付けは粗雑で、多くの亀裂が生じる。内面は粗い横位のヘラミガキを施すが、幅1～3mmで一定しない。焼成不良により磨耗し、見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着は部分的で、一部は茶褐色を呈する。胎土に砂岩やチャートを含む。在地産瓦器碗であろう。1214は刀子である。身・茎とも大きく欠損する。

1215はEP9埋土第2層から出土した完形の土師質土器皿である。柱抜き取り後に埋置されたものか。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 77号 (I地区 SA1077) (第466・477図)

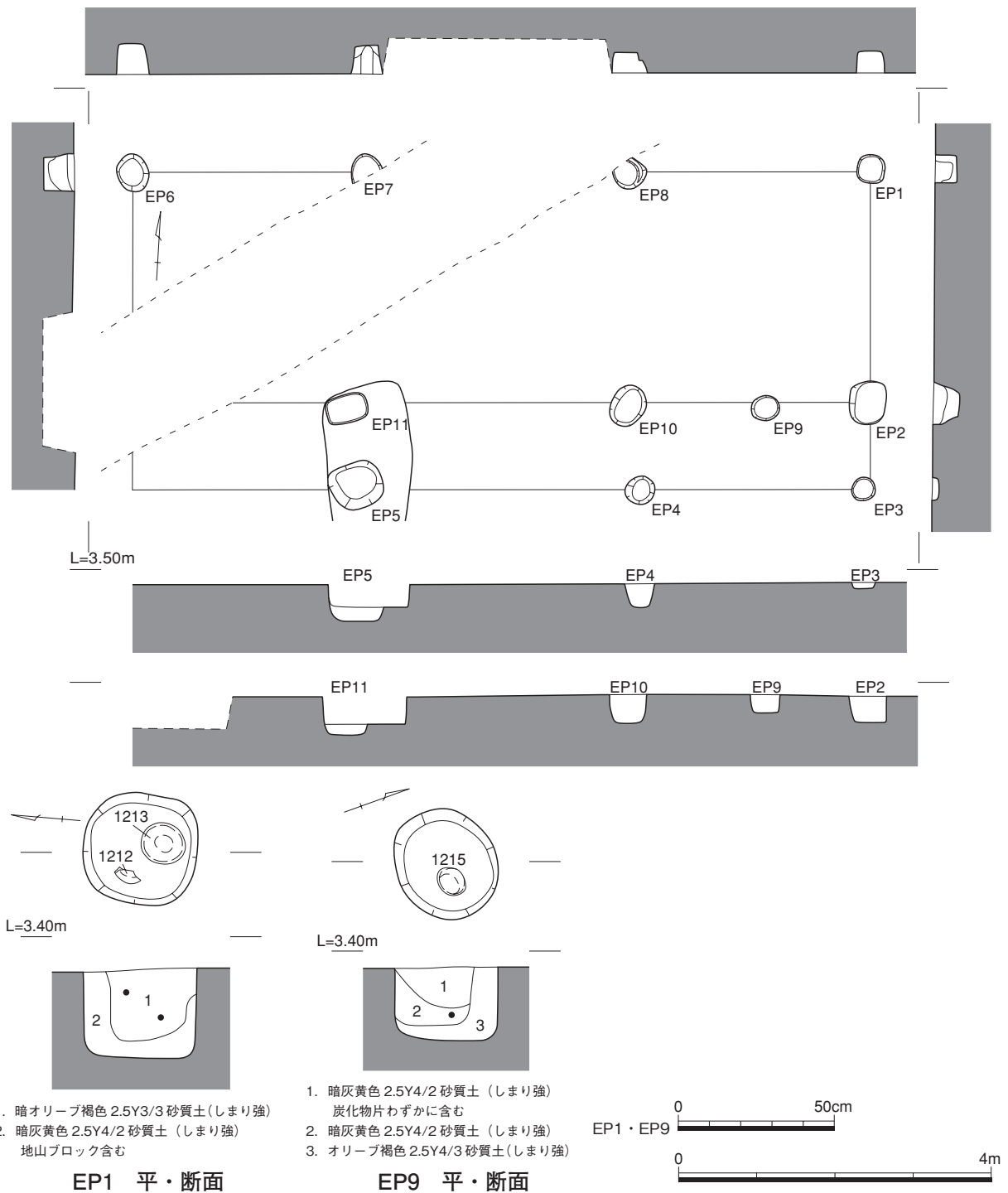
I－12区東部中央、k・18・9グリッドに位置する。東西3間(5.0m)南北2間(5.2m)床面積26.0㎡、10基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸はN90°WEを向く。柱穴は円形または不整な隅丸方形を呈し、径23～42cm、深度11～28cmを測る。遺構に切られ南東隅の柱穴を欠く。柱痕はEP3・10で確認。遺物はEP3・4・6・7・9・10でみられ、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・煮炊具・碗、瓦器片・碗、が出土。

1216はEP9から出土した吉備系土師質土器碗の底部である。高台は細く高く、ハの字に開く。胎土に金雲母と花崗岩を含む。山本編年Ⅲ－2期(13世紀後半)に相当。

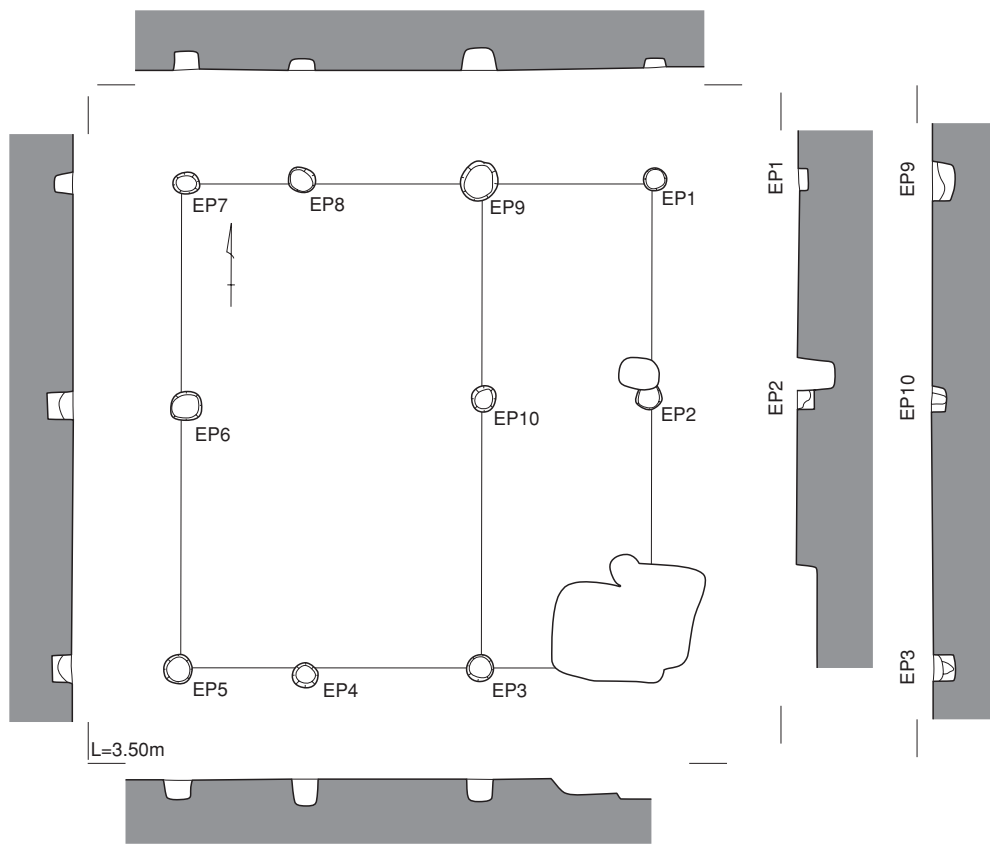
掘立柱建物 78号 (I地区 SA1078) (第467図)

I－12区東部中央、k・18グリッドに位置する。東西2間(3.0m)南北5間(6.6m)床面積19.8㎡(庇部を含めて南北6間(7.5m)22.5㎡)、13基の柱穴をもつ北庇付きの側柱建物で、建物主軸はN4°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径17～30cm、深度7～43cmを測る。遺構に切られ南東隅の柱穴を欠く。柱痕はEP2で確認。

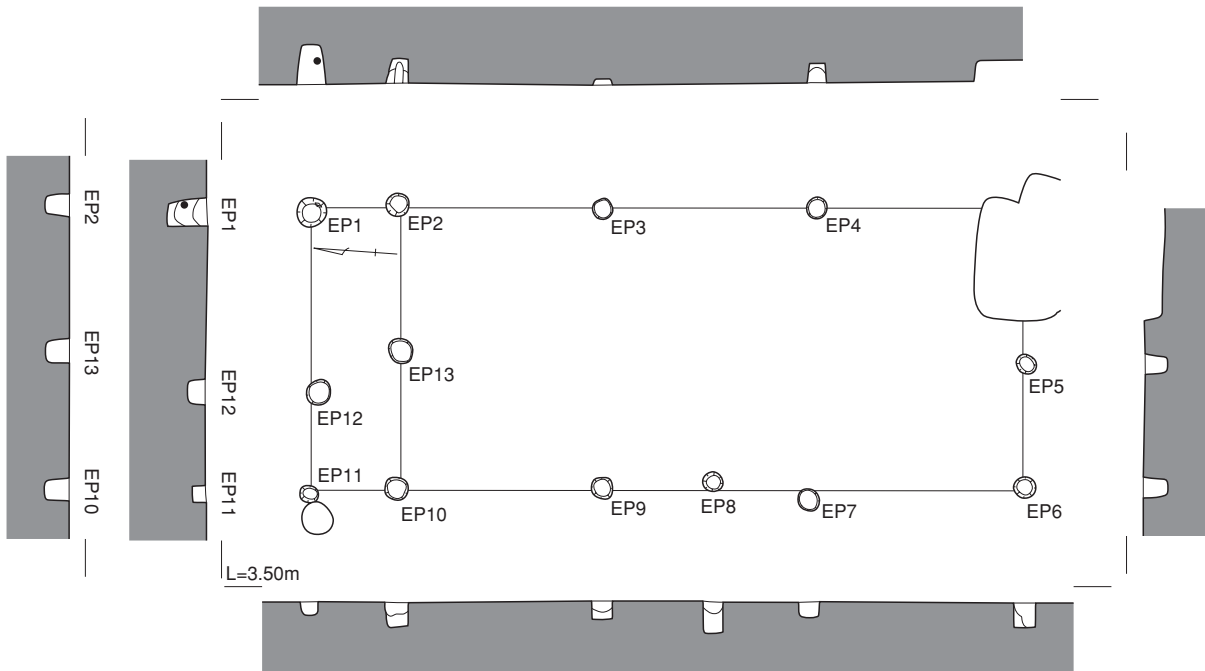
遺物は EP1・2・5・10～12 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、青磁（龍泉）碗、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀頃とみられる。



第 465 図 I - 12 区 SA1076 遺構実測図



第 466 图 I - 12 区 SA1077 遺構実測図



第 467 图 I - 12 区 SA1078 遺構実測図

0 4m

掘立柱建物 79 号 (I 地区 SA1079) (第 468・478 図)

I - 12 区東部中央、k・17～9 グリッドに位置する。東西 3 間 (7.3 m) 南北 2 間 (4.5 m) 床面積 32.9㎡、10 基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸は N75° E を向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径 32～71cm、深度 9～42cm を測る。遺構に切られ南西隅の柱穴を欠く。柱痕は EP8 で確認。

遺物は EP2・4・5・7～9 でみられ、土師器片・須恵器片・土師質土器片・供膳具・煮炊具・皿・椀、瓦器片・椀・皿、が出土。

1217 は EP2 出土の瓦器皿である。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

1218 は EP5 の出土遺物。土師器の高台付供膳具底部で、椀であろうか。外方に踏ん張るしっかりとした高台をもつ。回転台成形とみられる。焼成不良により磨耗著しい。胎土は粗く、砂岩を含む。古代に属すると考えられるが、詳細時期は不明。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀頃と考えられる。

掘立柱建物 80 号 (I 地区 SA1080) (第 469 図)

I - 12 区東部南側、i～k 7・8 グリッドに位置する。東西 1 間 (2.8 m) 南北 4 間 (7.4 m) 床面積 20.7㎡、9 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N1° W を向く。柱穴は隅丸方形または不整円形を呈し、径 26～39cm、深度 20～46cm を測る。柱痕は EP9 で確認。

遺物は EP4～9 でみられ、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・煮炊具、須恵質土器片、瓦器片、白磁碗、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物および主軸方位から概ね 13 世紀前半頃とみられる。

掘立柱建物 81 号 (I 地区 SA1081) (第 470 図)

I - 12 区東部中央南寄り、j 7・8 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.9 m) 南北 1 間 (2.1 m) 床面積 10.3㎡、5 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N87° E を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 20～32cm、深度 9～17cm を測る。

遺物は EP5 でみられ、土師質土器供膳具、瓦器椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物に瓦器椀を含むことから、概ね 13 世紀代と考えられる。

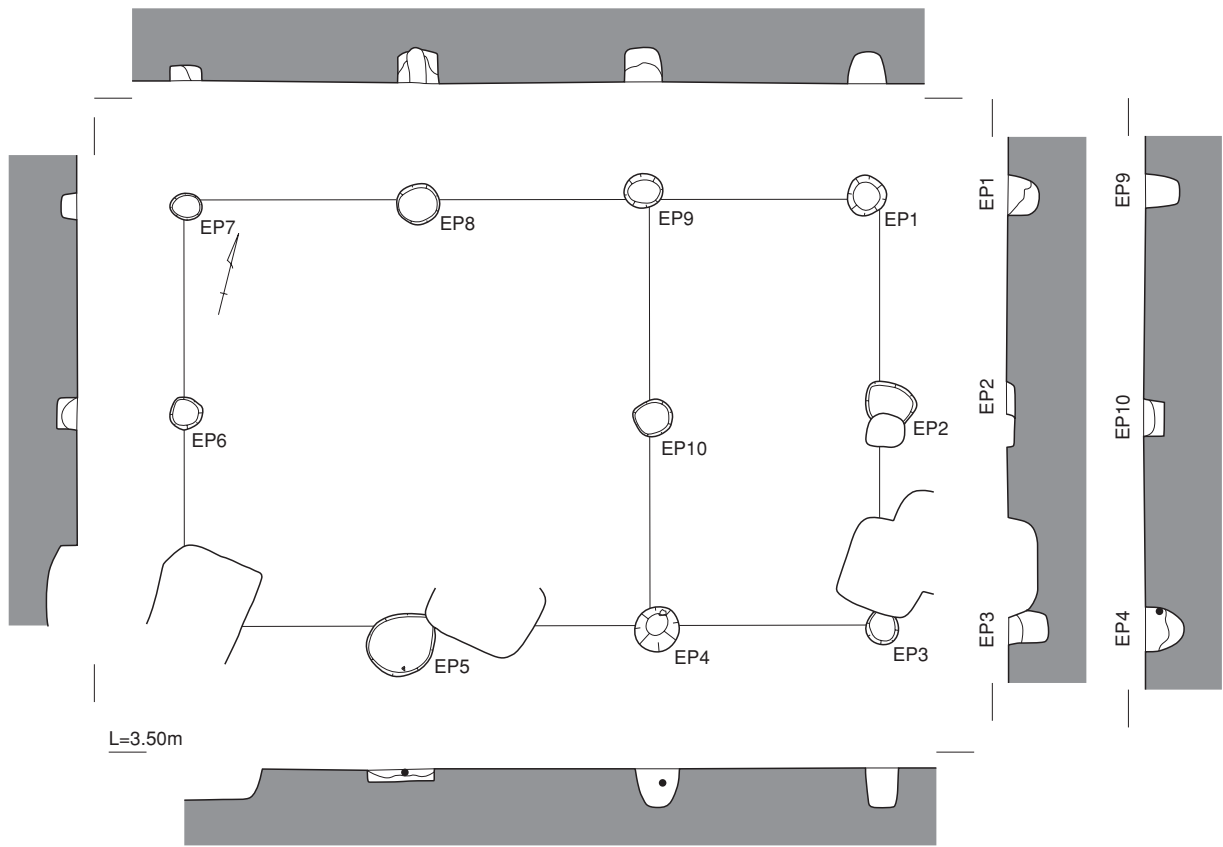
掘立柱建物 82 号 (I 地区 SA1082) (第 471 図)

I - 9 区西部南端と I - 12 区東部北端にまたがり、l・m 5・6 グリッドに位置する。東西 3 間 (5.7 m) 南北 2 間 (4.2 m) 床面積 23.9㎡、8 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N73° E を向く。南東隅を攪乱に切られる。柱穴は不整円形を呈し、径 28～42cm、深度 12～30cm を測る。柱痕は EP4 で確認。

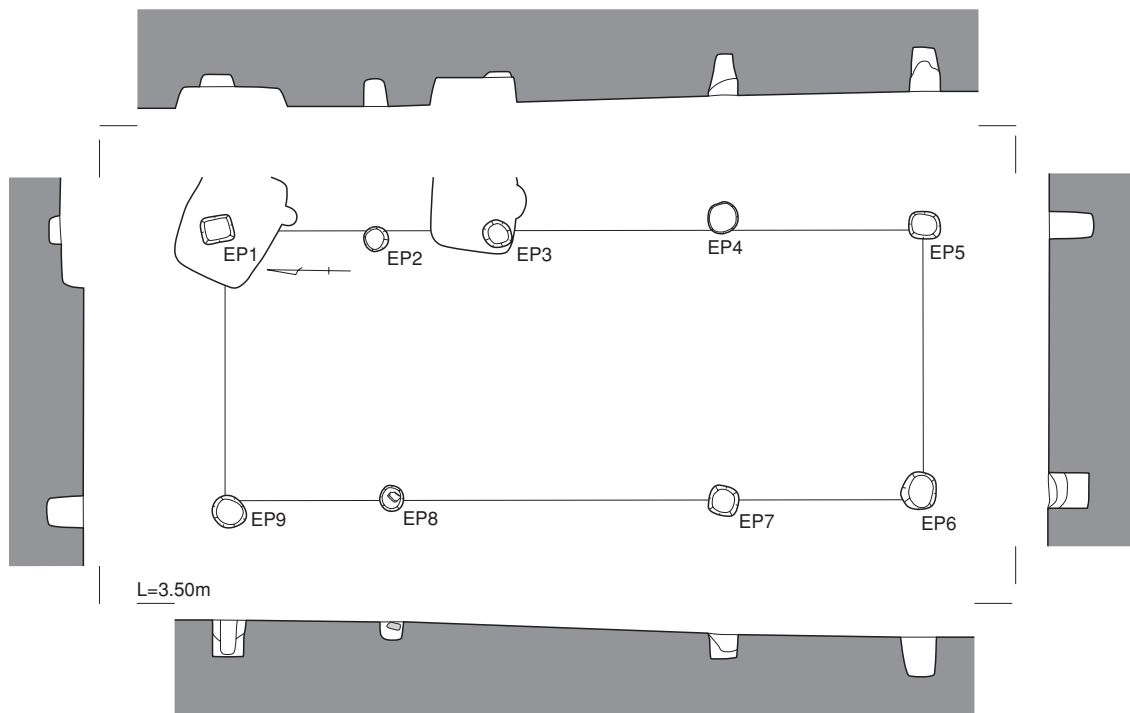
遺物は EP1～4・8 でみられ、土師質土器片・供膳具、瓦器片・椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代については決定の材料を欠くため、不明である。

掘立柱建物 83 号 (I 地区 SA1083) (第 472・479 図)

I - 12 区東部北側、k・15～7 グリッドに位置する。東西 3 間 (5.1 m) 南北 2 間 (3.0 m) 床面積 15.3㎡ (底部を含めて南北 3 間 (3.6 m) 18.4㎡)、10 基の柱穴をもつ南庇付きの側柱建物で、建物主

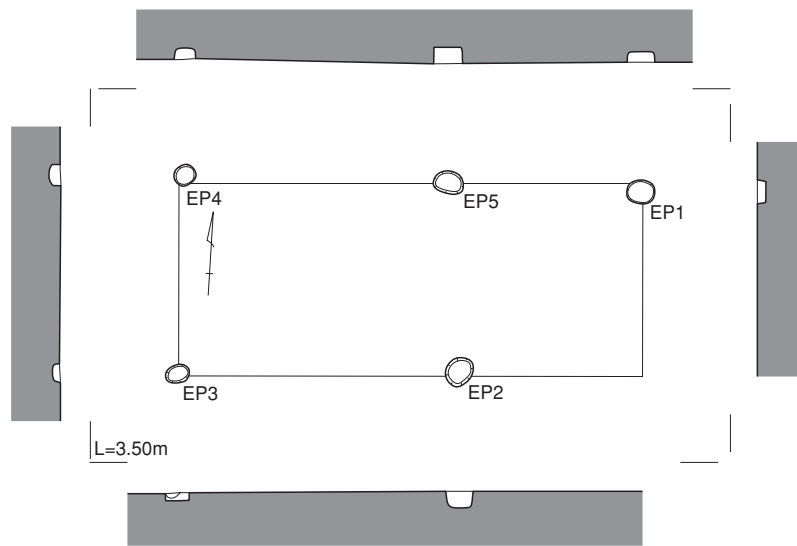


第 468 図 I - 12 区 SA1079 遺構実測図

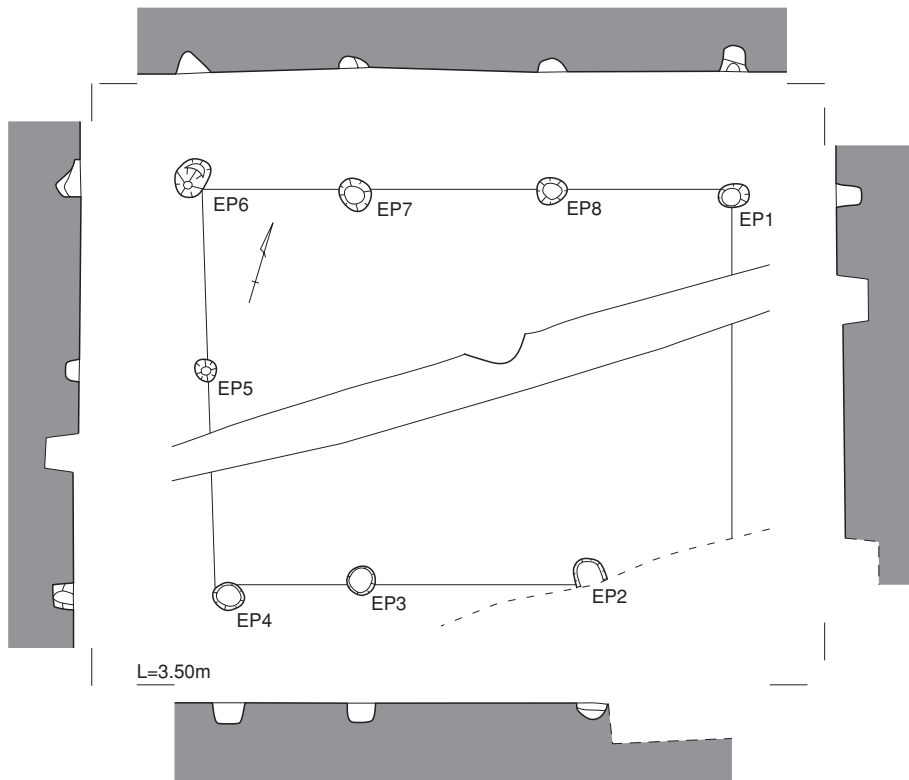


第 469 図 I - 12 区 SA1080 遺構実測図





第 470 図 I - 12 区 SA1081 遺構実測図



第 471 図 I - 12 区 SA1082 遺構実測図



軸は N87° E を向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径 26 ~ 50cm、深度 14 ~ 45cm を測る。北東側を攪乱に切られる。柱痕は EP10 で確認。

遺物は EP1 ~ 3・5 ~ 10 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿（回転ヘラ切り・回転糸切りほか）・杯（回転糸切り）・煮炊具・土錘、須恵質土器片・捏鉢・甕、瓦器片・椀、砂岩製叩石、が出土。

1219 は EP1 の出土遺物で、棒状の砂岩自然礫を用いた叩石である。両端部に敲打痕を残し、図の下

端は強い打撃により後部を欠損する。1220はEP3の出土遺物で刀子とみられる。身・茎ともに大きく欠損する。1221はEP8から出土した土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀頃とみられる。

掘立柱建物 84号 (I地区 SA1084) (第473・488図)

I-12区東部中央北寄り、k6・7グリッドに位置する。東西3間(5.3m)南北2間(3.3m)床面積17.5㎡、9基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN85°Eを向く。柱穴は円形または不整な隅丸方形を呈し、径22～42cm、深度10～25cmを測る。南西隅の柱穴は検出されなかった。柱痕はEP3・5・7、根石はEP5で確認。

遺物はEP1・2・4～7・9でみられ、土師質土器片・供膳具(回転糸切り、ほか)・杯・土錘、瓦器片・皿、瓦質土器羽釜脚部、中世陶器甕、白磁皿、砂岩製叩石、が出土している。

1222はEP5の出土遺物で扁平な砂岩円礫を用いた叩石である。根石として転用されていたもの。側面部は敲打痕がほぼ全周し、部分的に溝状の強い擦痕が確認できる。表裏面とも中央部に敲打痕が集中する。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀頃とみられる。

掘立柱建物 85号 (I地区 SA1085) (第480・489図)

I-12区東部北側、j・k5グリッドに位置する。東西3間(4.0m)南北4間(5.0m)床面積20.0㎡、17基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸はN2°Wを向く。柱穴は円形または不整円を呈し、径24～41cm、深度8～40cmを測る。柱痕はEP6・14で、根石はEP13・14で確認。遺物はEP2・3・6～12・14～16でみられ、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切りほか)・煮炊具、瓦質脚付香炉、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、壁土、が出土。

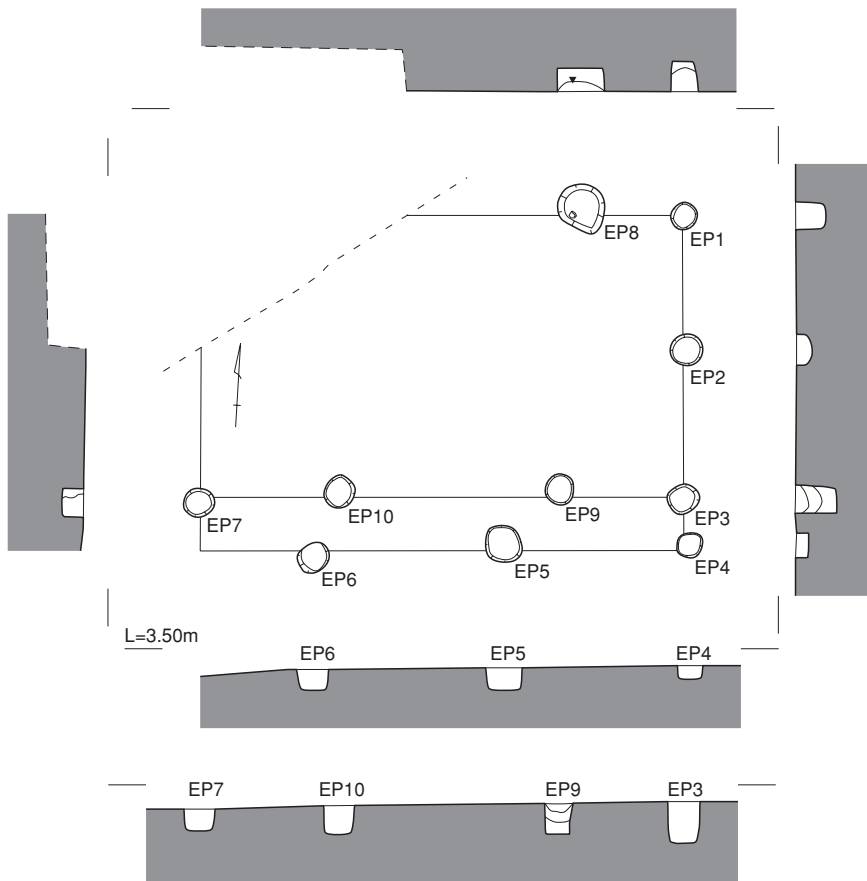
1223はEP8の出土遺物である。脚付きの瓦質土器香炉で全体の3割程度が残存。口縁に受け部を作ることから本来は蓋付きと考えられる。回転台成形で作るが、底部外面の切り離し痕はナデ消す。脚は平面形が長方形、断面が逆台形状を呈する。貼り付けの配置から三脚に復元できる。脚の基部に工具痕がみえることから、本体に貼り付け後ヘラ状工具で切って整形したことがわかる。本品は蓋付きの銅製香炉を模したもので、菅原分類瓦質香炉A型に分類され(菅原1989)、奈良県仏塚古墳出土品に類例がある。ただしこれらは脚をナデ付けによって作るもので、その点が本品とは異なる。焼成不良か二次的な被熱によるものかは不明だが、カーボンの殆どを消失して中心まで酸化炎焼成する。胎土にチャートや在地花崗岩とみられる粒子を含み、在地産の可能性も考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃とみられる。

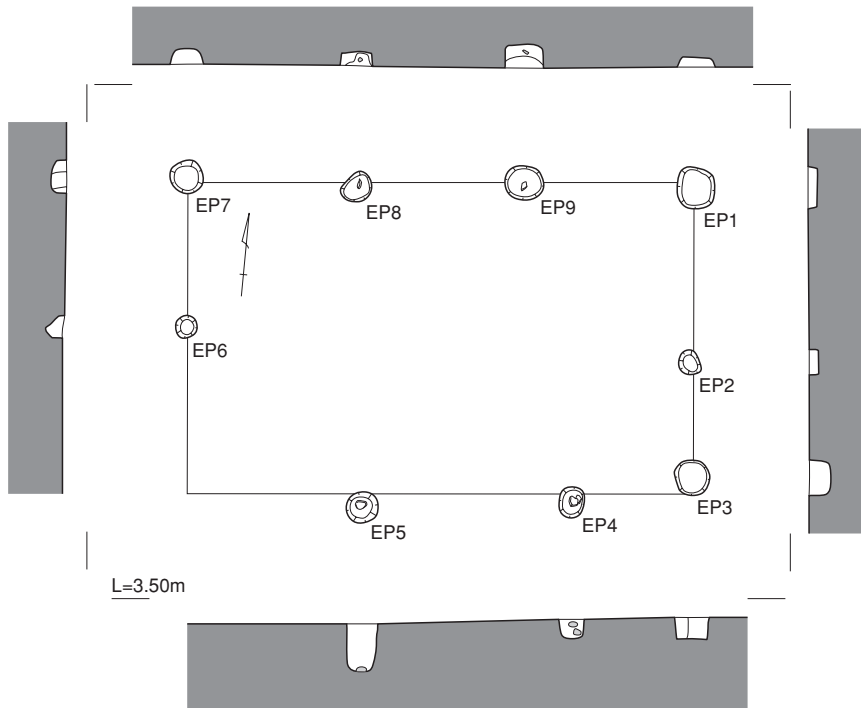
掘立柱建物 86号 (I地区 SA1086) (第481・490図)

I-12区中央部北側、i2・3グリッドに位置する。東西2間(2.8m)南北2間(3.8m)床面積10.6㎡、9基の柱穴をもつ総柱建物で、建物主軸はN1°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径26～36cm、深度10～40cmを測る。遺物はEP2・4・5・9でみられ、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具・土錘、須恵質土器甕、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

1224はEP2の出土遺物で瓦器椀の下半部。腰が張る器形。高台はきわめて低平な逆三角形状で、粗雑な貼り付けにより途切れ気味。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。

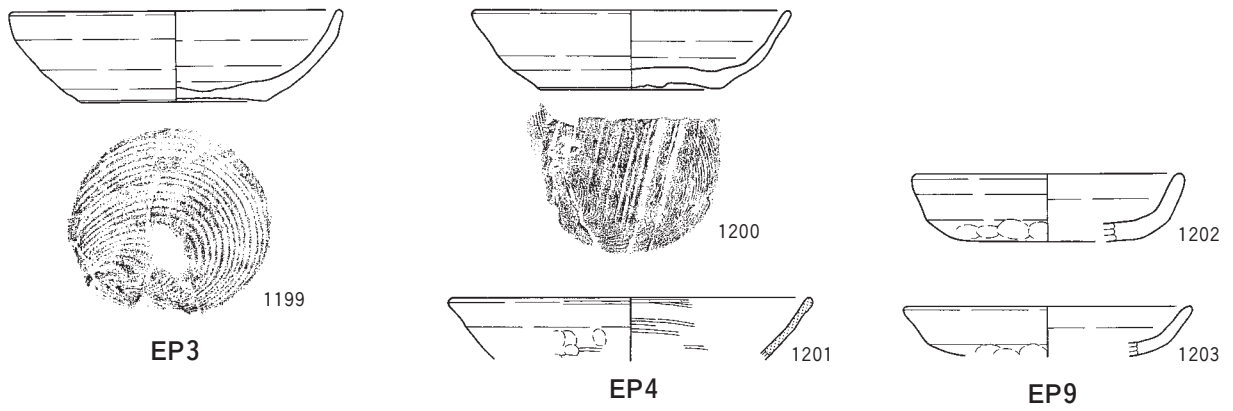


第 472 図 I - 12 区 SA1083 遺構実測図

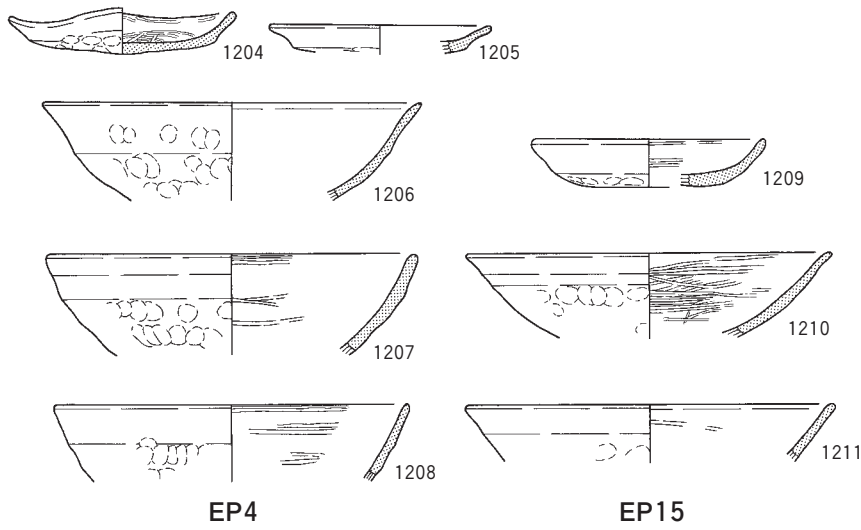


第 473 図 I - 12 区 SA1084 遺構実測図

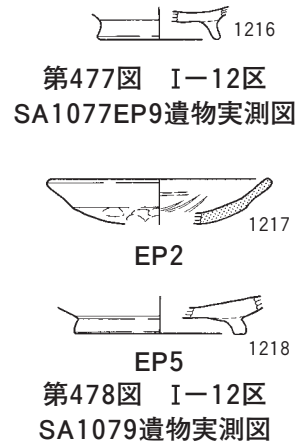




第474図 I-12区 SA1074遺物実測図

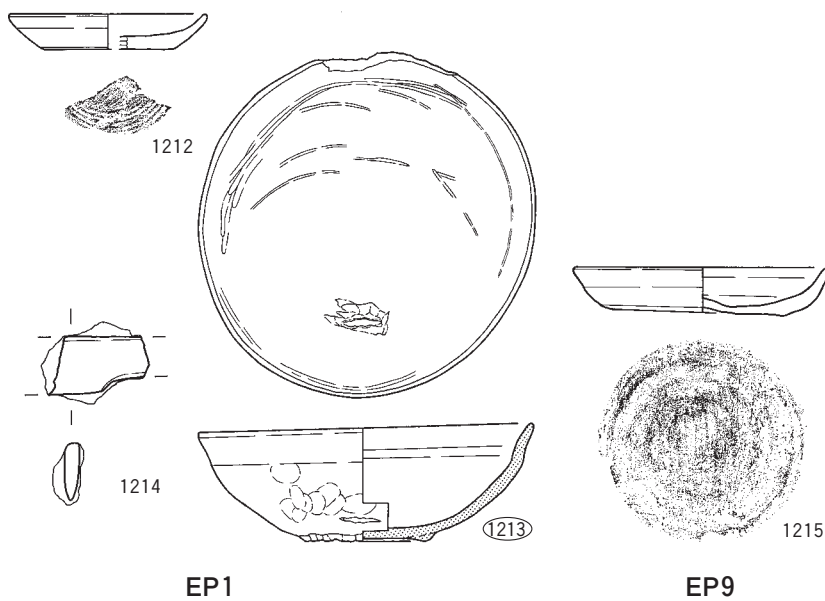


第475図 I-12区 SA1075遺物実測図

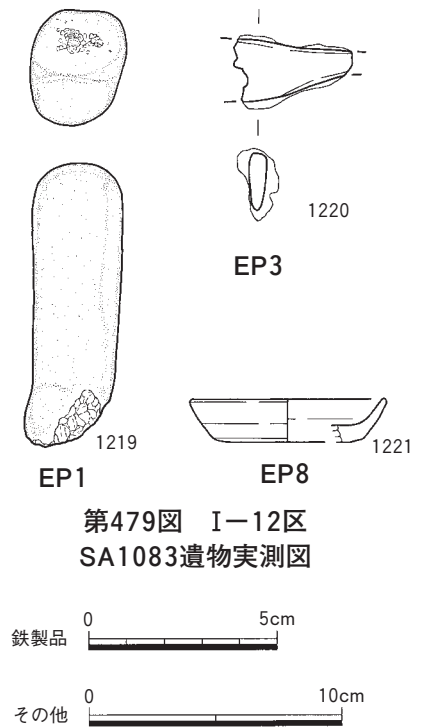


第477図 I-12区 SA1077EP9遺物実測図

第478図 I-12区 SA1079遺物実測図

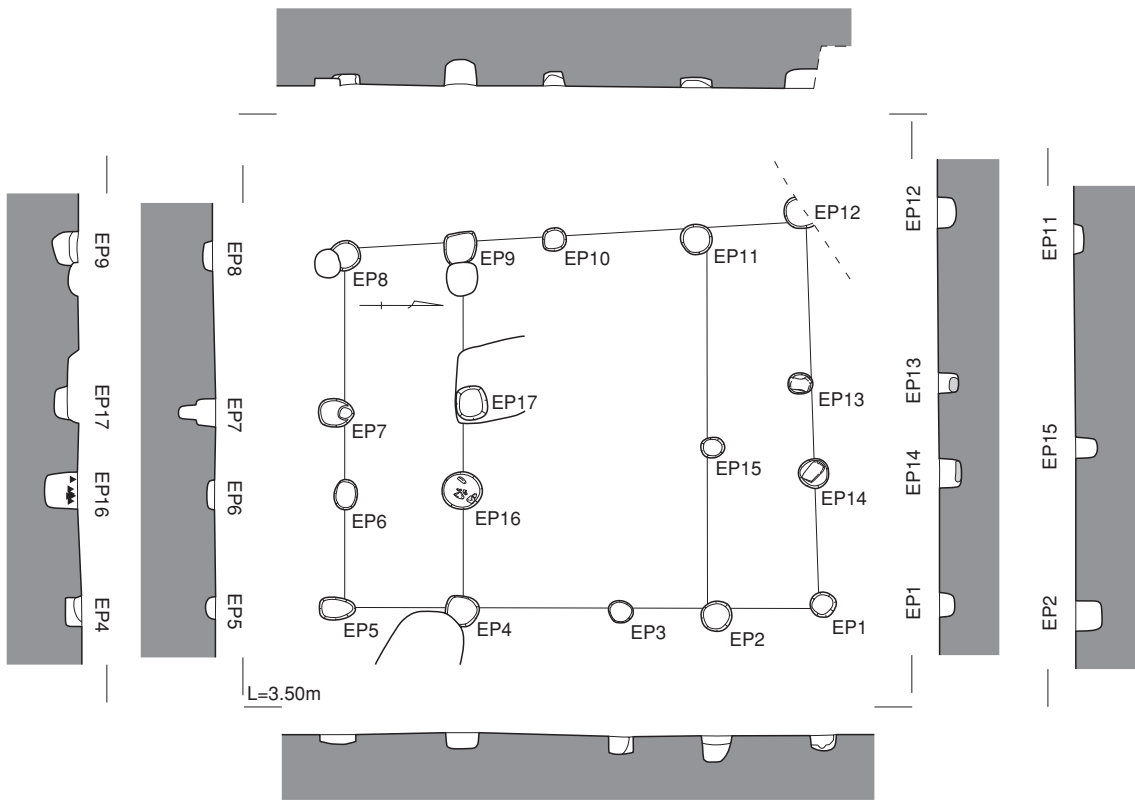


第476図 I-12区 SA1076遺物実測図

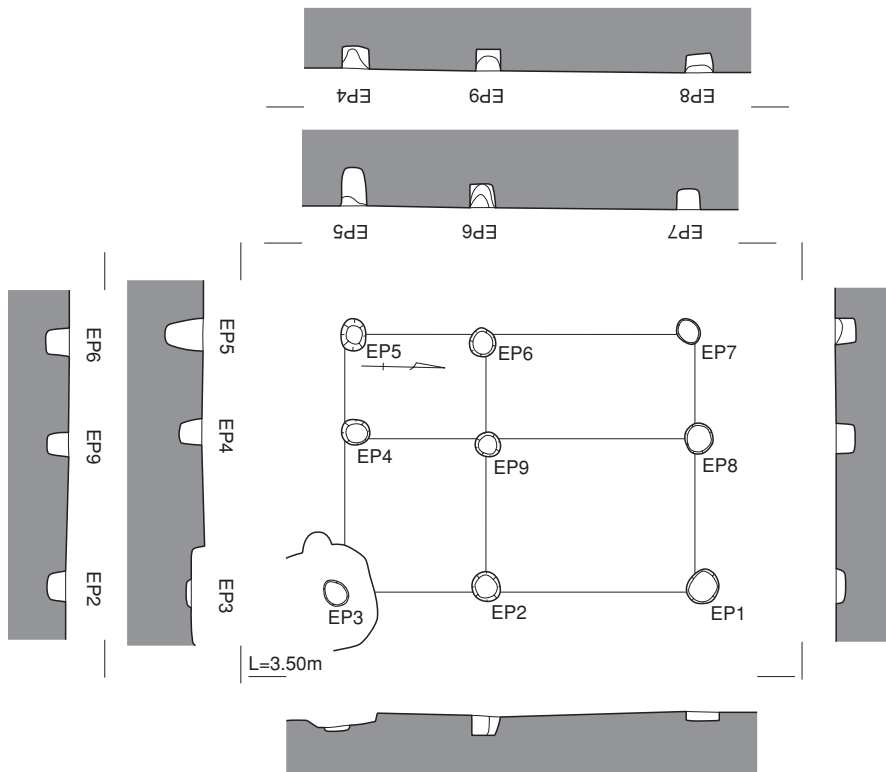


第479図 I-12区 SA1083遺物実測図





第 480 图 I - 12 区 SA1085 遺構実測図



第 481 图 I - 12 区 SA1086 遺構実測図



焼成不良により磨耗し、炭素吸着はやや不良。胎土にチャートとみられる粒子を含むが不確定。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 87号（I地区 SA1087）（第482・492図）

I－12区中央部北側、h～j 1～3グリッドに位置する。東西6間（11.1m）南北1間（3.6m）床面積40.0㎡（庇部を含めて南北3間（5.1m）56.6㎡）、23基の柱穴をもつ南北庇付きの側柱建物で、建物主軸はN82°Eを向く。柱穴は隅丸方形または不整円形を呈し、径25～80cm、深度8～66cmを測る。北西の一部を攪乱に切られる。柱痕はEP3・18で確認。

遺物はEP1～6・8・9・18・22・23から、土師質土器片・供膳具・皿・杯（ともに回転糸切りほか）・煮炊具・鍋、須恵質土器片・甕、瓦器片・碗・皿、白磁碗、鉄製品片・鉄釘・スラグ、が出土。

1226・1227はEP2の出土遺物である。1226は非回転台成形の土師質土器皿。短く直立気味の体部をもつ。焼成不良により磨耗。胎土に絹雲母を含む。京都系土師皿Dタイプの在地模倣品か。概ね13世紀代。1227は瓦器皿。器形に歪みがあるため復元径はきわめて小さい。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキが確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられる。

1228・1229はEP3の出土遺物である。1228は回転台成形の土師質土器杯上半部。焼成不良により磨耗。口縁内外面に煤が付着するが、灯明皿ではなく焼成時に付着したものか。1229は白磁碗の上部で、口縁を玉縁に作る。体部外面は横位のヘラケズリを施す。わずかに釉とびがみられる。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当する。

1230はEP4出土の瓦器碗で、底部を欠く。体部外面のユビオサエは弱い。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は外面不良、内面は吸着なし。口縁内外面は吸着不良のため褐色を呈する。和泉型瓦器碗Ⅲ－3～Ⅳ－1期（13世紀前葉～中葉）に相当する。

1231・1232はEP22の出土遺物で回転台成形の土師質土器皿である。1231は底部の切離し技法不明。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。1232は口縁を欠く。底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃と考えられる。

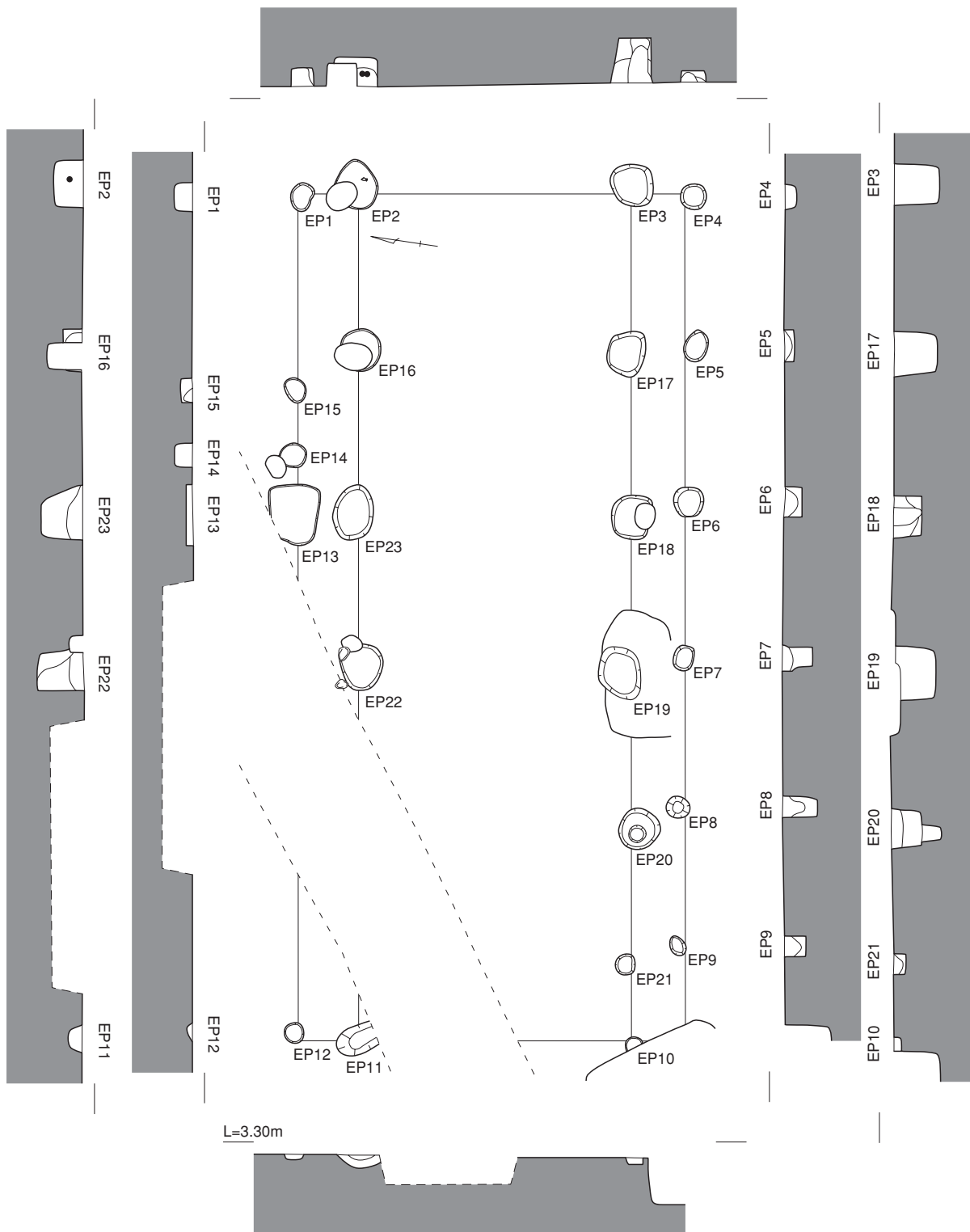
掘立柱建物 88号（I地区 SA1088）（第483・491図）

I－12区中央部北寄り、h・i 1・2グリッドに位置する。東西1間（3.2m）南北3間（6.4m）床面積20.5㎡、7基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN6°Wを向く。柱穴は隅丸方形または不整円形を呈し、径28～35cm、深度9～47cmを測る。南東隅の柱穴は検出されない。柱痕はEP1・3・7で確認。

遺物はEP2～7でみられ、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・碗、鉄釘・鉄滓・羽口か、が出土している。EP3から鉄滓2点（1991・1992）、EP4から羽口とみられる破片が2点（1987・1988）出土。

1225はEP6の出土遺物で鉄釘とみられる。頂部をL字状に折り曲げ、頭部を作る。下半部を欠く。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀頃とみられる。



第 482 図 I - 12 区 SA1087 遺構実測図

0 4m

掘立柱建物 89 号 (I 地区 SA1089) (第 484・493 図)

I - 12 区西部北側、f・g 18・19 グリッドに位置する。東西 3 間 (6.2 m) 南北 2 間 (3.0 m) 床面積 18.6㎡、9 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N85° E を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 23 ~ 40cm、深度 16 ~ 31cm を測る。南西隅の柱穴は検出されていない。遺物は EP1・2・5 ~ 9 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・杯、須恵質土器甕、瓦器片・椀、が出土。

1233 は EP1 出土の土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土に砂岩を含む。

本遺構は SD1048 が区画するエリアの南端に位置し、同じ主軸方位をもつことから、双方の遺構は同時期性が高いとみられ、13 世紀後半頃に位置付けられる。

掘立柱建物 90 号 (I 地区 SA1090) (第 485・494 図)

I - 12 区西部南端、a・b 18・19 グリッドに位置する。南東側は調査区外に延びる。東西 2 間 (3.3 m) 南北 3 間以上 (4.5 m 以上) 床面積 14.9㎡以上、6 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N1° E を向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径 30 ~ 40cm、深度 10 ~ 31cm を測る。柱痕は EP2・4 で確認。遺物は EP1・3・4・6 でみられ、須恵器貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具、瓦器椀、鞆羽口、スラグ、が出土している。

1234・1235 は EP1 の出土遺物。1234 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。1235 は瓦器椀の上部。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

遺構の年代は、出土した瓦器椀の時期などから概ね 13 世紀前半頃に位置付けられる。

掘立柱建物 91 号 (I 地区 SA1091) (第 486・495 図)

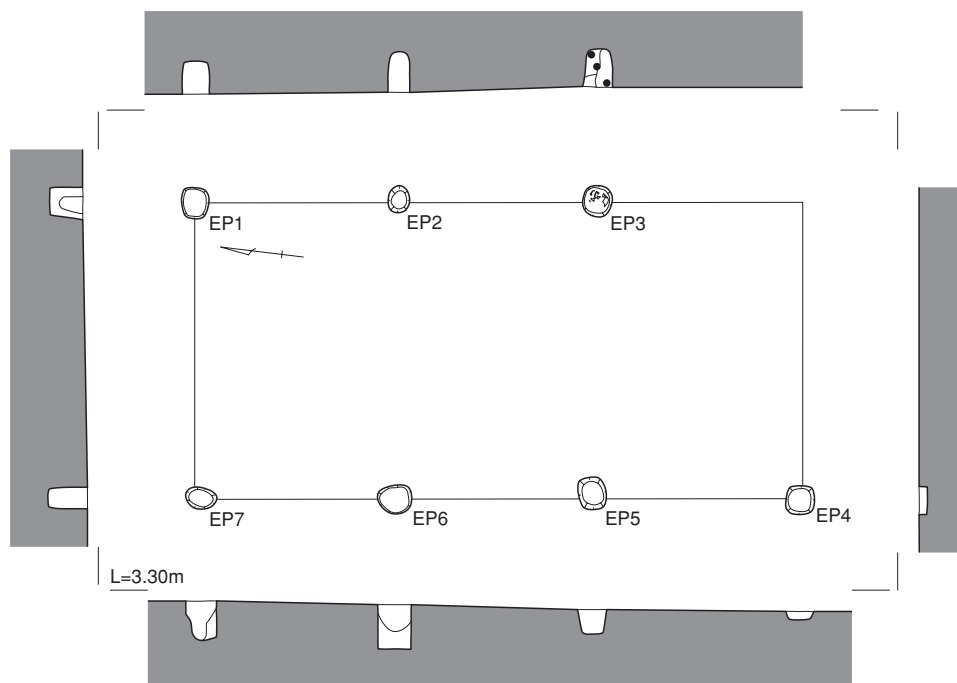
I - 12 区西部南端、a・b 17・18 グリッドに位置する。東西 2 間 (3.5 m) 南北 2 間 (3.1 m) 床面積 10.9㎡、7 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N77° E を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 30 ~ 50cm、深度 8 ~ 45cm を測る。柱痕は EP4・7 で確認。遺物は EP1 ~ 6 でみられ、黒色土器片 (A 類)、土師質土器片・供膳具・皿・杯 (回転糸切りほか)・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・椀、が出土している。

1236 ~ 1238 は EP1 の出土遺物である。1236・1237 は回転台成形の土師質土器杯である。1236 は上半部。1237 は下半部で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。

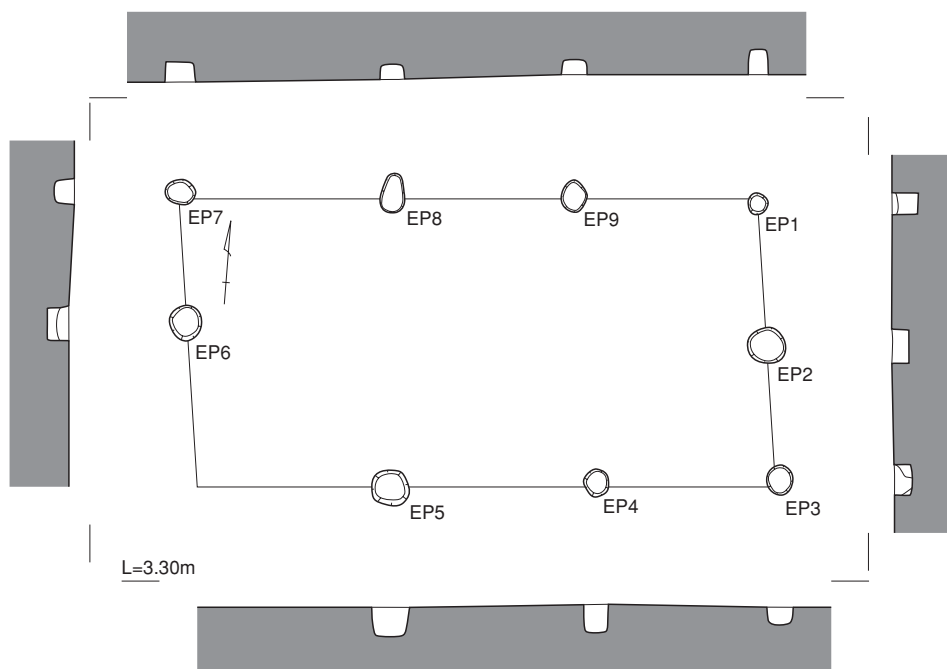
1238 は瓦器椀。器形は低平・小型で、口縁~体部は直線的に外上方に伸びる。高台はごく低平な逆三角形の断面をもつ。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗・剥離著しい。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。胎土は粗く、チャートとみられる粒子を含むほか、白色粒子が目立つ。金雲母を確認。和泉型瓦器椀Ⅳ - 1 期 (13 世紀中葉) 頃とみられる。本品は胎土分析を行っている (胎土分析試料 No. 10)。蛍光 X 線分析では和泉型瓦器椀の分布域に収まり、実体顕微鏡観察でも少量の金雲母を含むという結果を得ている。

1239 は EP5 から出土した瓦器椀の上半部である。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅳ - 1 ~ 2 期 (13 世紀中葉~後葉) に相当。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀後半頃に位置付けられる。

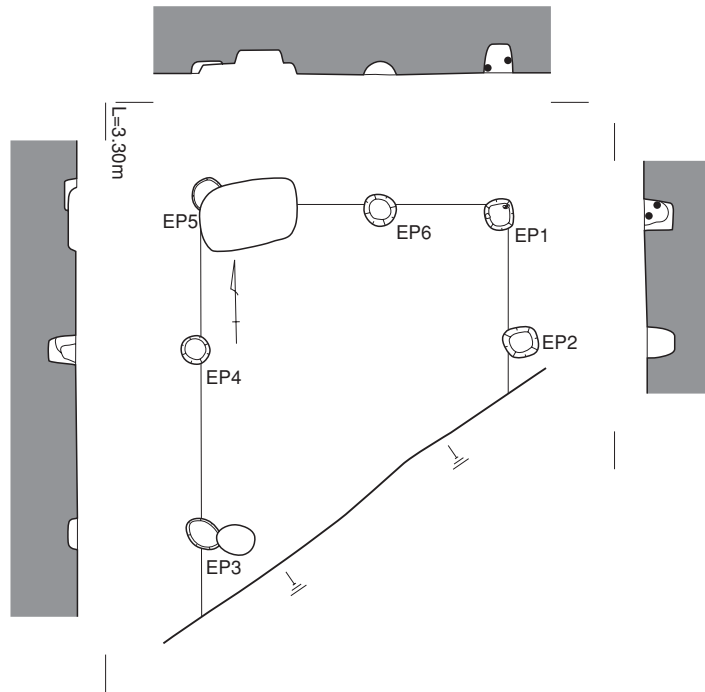


第 483 図 I - 12 区 SA1088 遺構実測図

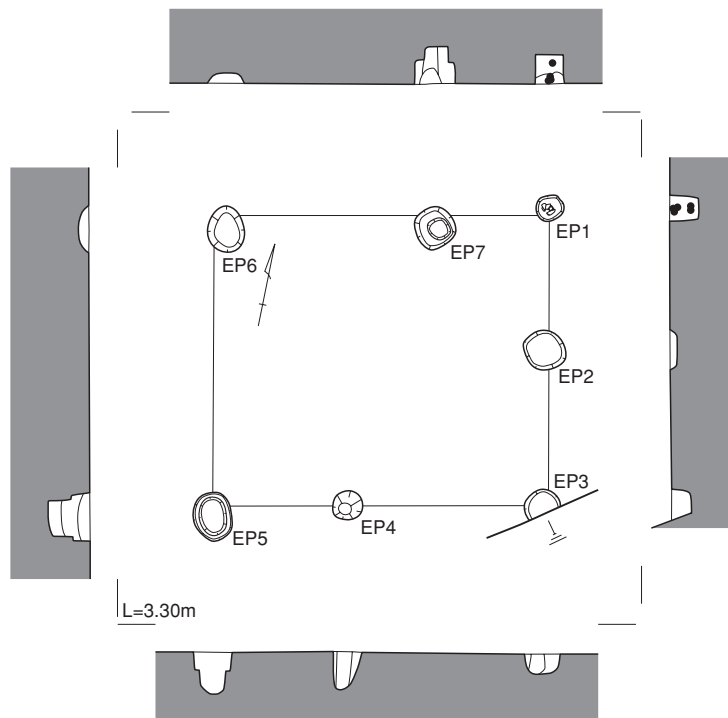


第 484 図 I - 12 区 SA1089 遺構実測図



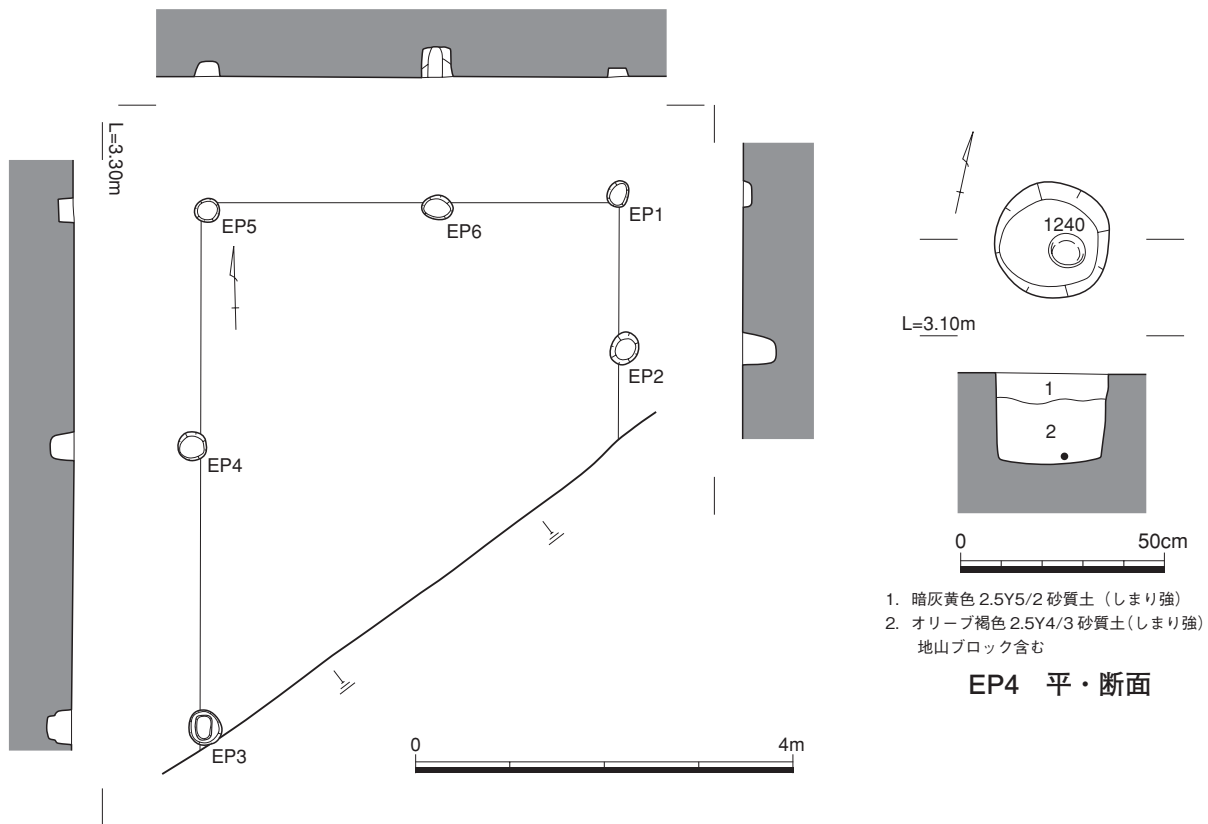


第 485 图 I - 12 区 SA1090 遺構実測図



第 486 图 I - 12 区 SA1091 遺構実測図





第 487 図 I - 12 区 SA1092 遺構実測図

掘立柱建物 92 号 (I 地区 SA1092) (第 487・496 図)

I - 12 区西部南端、t・a 16・17 グリッドに位置する。南東側は調査区外に延びる。東西 2 間 (4.5 m) 南北 2 間以上 (5.8 m 以上) 床面積 26.1㎡以上、6 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N1° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 25 ~ 34cm、深度 9 ~ 38cm を測る。柱痕は EP3・6 で確認。遺物は EP2 ~ 4・6 でみられ、黒色土器椀 (A 類)、土師質土器片・供膳具・皿 (回転糸切り)・杯・煮炊具、瓦器片・椀、が出土している。

1240 は EP4 の底部から出土した完形の土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は、出土遺物および SA1090 と同じ主軸方位をもつことから、13 世紀前半頃とみられる。

柵列 21 号 (I 地区 SG1021) (第 497 図)

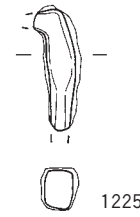
I - 12 区東部中央北寄り、k 7・8 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.3 m) 南北 1 間 (1.9 m)、4 基の柱穴が L 字形に列ぶ柵列で、主軸は N81° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 22 ~ 34cm、深度 13 ~ 31cm を測る。掘立柱建物 SA1075 の南西側に位置し同じ主軸方位をもつことから、SA1075 を画する柵列と考えられる。遺物は EP2・4 でみられ、土師質土器片・供膳具 (回転糸切り)・煮炊具、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、SA1075 の南東に位置し、同じ主軸方位をもつことから、12 世紀末 ~ 13 世紀前半頃に位置付けられる。

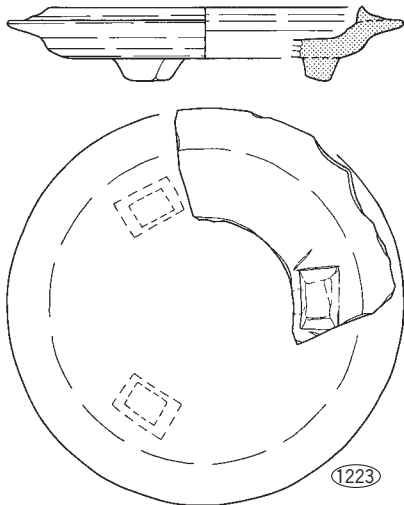


第490図 I-12区
SA1086EP2遺物実測図

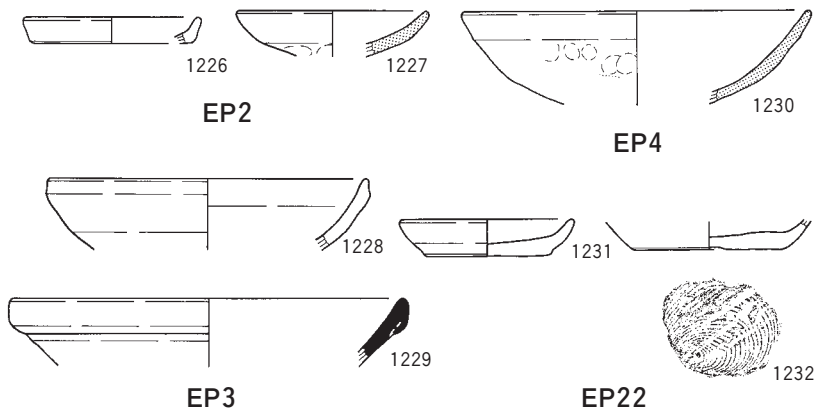
第488図 I-12区 SA1084EP5遺物実測図



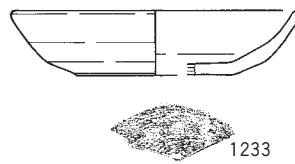
第491図 I-12区
SA1088EP6遺物実測図



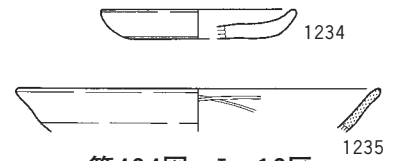
第489図 I-12区
SA1085EP8遺物実測図



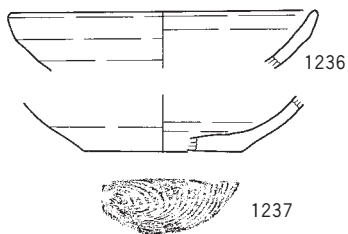
第492図 I-12区 SA1087遺物実測図



第493図 I-12区
SA1089EP1遺物実測図

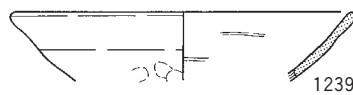


第494図 I-12区
SA1090EP1遺物実測図



EP1

第495図 I-12区 SA1091遺物実測図



EP5



第496図 I-12区
SA1092EP4遺物実測図



柵列 22号 (I地区 SG1022) (第498・501図)

I - 12区東部中央北寄り、j・k 5・6グリッドに位置する。東西3間(6.5m)南北4間(5.4m)、8基の柱穴がL字形に列ぶ柵列で、主軸はN84°Wを向く。柱穴は不整な隅丸方形または不整円形を呈し、径36～50cm、深度10～44cmを測る。柱痕はEP1・4・8で、根石はEP4で確認。遺物はEP1～3・5・7・8でみられ、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・椀、青磁(同安)皿、鉄滓、が出土。

1241はEP2出土の土師質管状土錘。比較的長身で細身。焼成不良により磨耗。胎土に泥岩を含む。

1242～1244はEP3の出土遺物である。1242・1243は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1243は胎土にチャートを含む。1244は瓦器椀の下半部。高台断面は低平な逆三角形状で退化著しく、貼り付けが粗雑なため途切れがみられる。見込みに連結輪状とみられるヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期(13世紀前葉～中葉)に相当。

1245はEP7の出土遺物で土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。砂岩を含む可能性がある。

1246はEP8の出土遺物で土師質管状土錘である。胎土精良、焼成良好。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃と考えられる。

柵列 23号 (I地区 SG1023) (第499図)

I - 12区東部中央、j 5・6グリッドに位置する。東西2間(4.9m)南北1間(3.0m)、4基の柱穴がL字形に列ぶ柵列で、主軸はN80°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径21～34cm、深度14～31cmを測る。柱痕はEP3で確認。

遺物はEP1・2でみられ、土師質土器皿(回転糸切り)・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代とみられる。

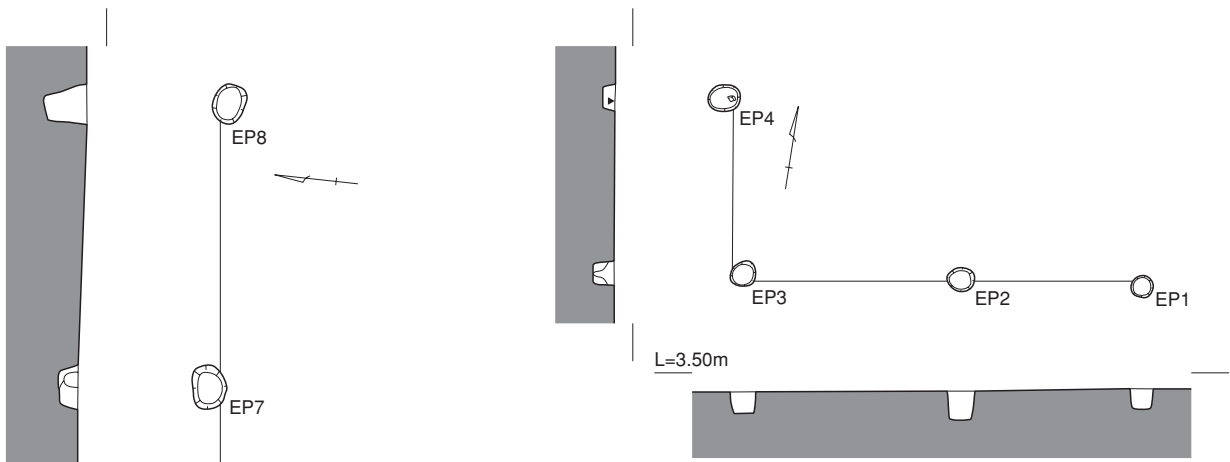
柵列 24号 (I地区 SG1024) (第500図)

I - 12区東部南側、グリッドに位置する。東西3間(7.8m)、4基の柱穴が一字形に列ぶ柵列で、主軸はN87°Wを向く。溝SD1059と直交する主軸方位をもつことから、強い関連性が窺われる。柱穴は円形または不整円形を呈し、径27～40cm、深度15～19cmを測る。柱痕はEP2で確認。遺物はEP1・3でみられ、土師器甕・土師質土器片・煮炊具、瓦器椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

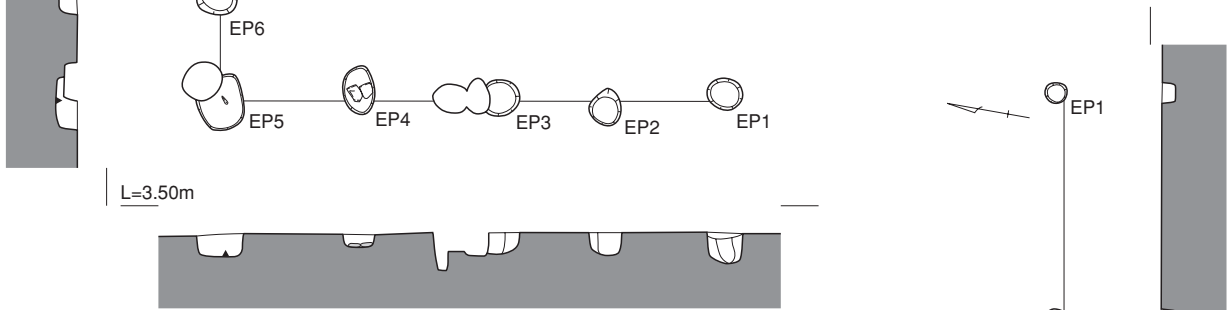
遺構の年代は、近接するSD1059とほぼ直交する主軸方位をもつこと、および出土遺物に瓦器椀を含むことから概ね13世紀代と考えられる。

土坑 1002号 (I地区 SK11002) (第502・536図)

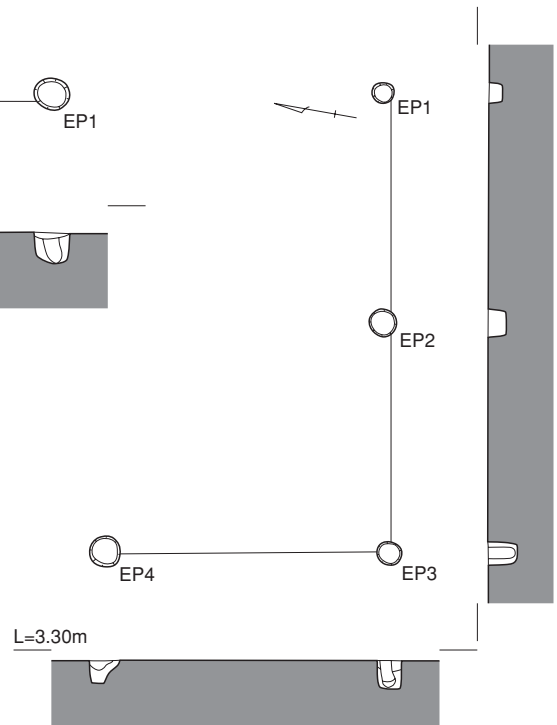
I - 12区東端部中央北寄り、m 9グリッドに位置し、西側をSA1075EP2に切られる。長軸130cm短軸72cm深度26cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。南西よりの底面に浅い落ち込みあり。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器杯・煮炊具、瓦器椀、が出土。土壙墓の可能性も考えられる。



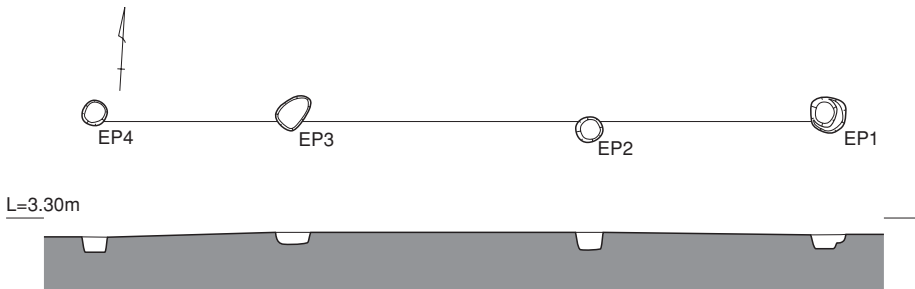
第 497 图 I - 12 区 SG1021 遺構実測図



第 498 图 I - 12 区 SG1022 遺構実測図

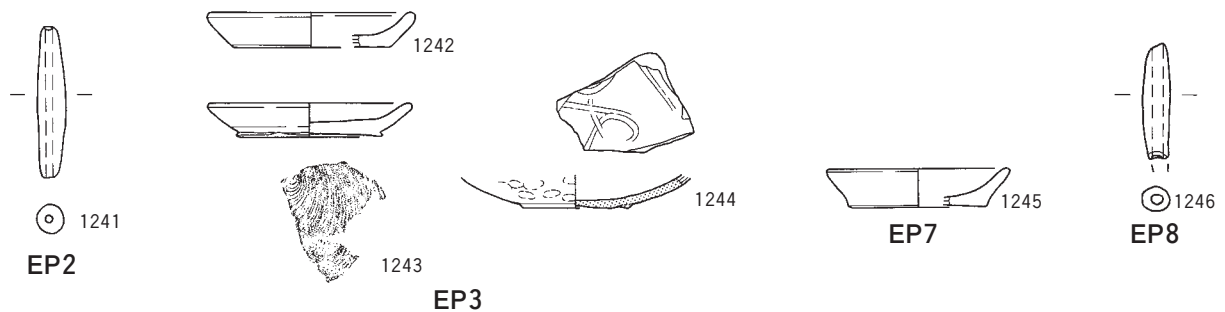


第 499 图 I - 12 区 SG1023 遺構実測図



第 500 图 I - 12 区 SG1024 遺構実測図





第501図 I-12区 SG1022遺物実測図

1247 は瓦器碗の下部。高台断面は幅広の逆台形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成良好。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)前後とみられる。

土坑 1004 号 (I 地区 SK11004) (第 503・537 図)

I-12区東端部中央南寄り、19グリッドに位置する。長軸66cm短軸62cm深度28cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、須恵器甕、土師質土器煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・碗、が出土。

1248 は瓦器碗の下半部。高台断面は小さな逆台形状。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。高台の形状から和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)前後とみられる。

土坑 1006 号 (I 地区 SK11006) (第 504・538 図)

I-12区東部中央北寄り、k9グリッドに位置する。長軸118cm短軸104cm深度16cmを測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器碗、瓦質土器羽釜脚部、が出土。

1249 は瓦器碗の上部である。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良で、胎土は酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。1250 は瓦器碗の底部で、高台断面は低い逆三角形を呈する。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着せず酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当か。

1251 は埋土中位出土の瓦質土器羽釜脚部。明瞭な屈曲部をもたず外下方に直線的に伸びる。焼成不良により磨耗し、炭素吸着は脚部外方のみ良好で脚部内方と体部内面は吸着不良。胎土が粗く結晶片岩とチャートを含むことから、山城型瓦質羽釜の在地模倣品か。概ね13世紀代に位置付けられる。

土坑 1011 号 (I 地区 SK11011) (第 505・539 図)

I-12区東部南側、k8・9グリッドに位置する。長軸120cm短軸84cm深度18cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、

須恵質土器貯蔵具、瓦器椀、青磁（同安）碗、が出土している。

1252は瓦器椀の上半部である。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。1253は第1層から出土した青磁碗の下半部。体部外面に縦位の櫛描文を施す。釉の透明度高く、内面にごく粗い貫入を伴う。内面および体部外面下位まで施釉し、以下露胎。大宰府分類同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類（12世紀中頃～後半）に相当。

土坑 1020号（Ⅰ地区 SK11020）（第506・540図）

Ⅰ-12区東部北側、1・m7グリッドに位置する。長軸200cm短軸110cm深度44cmを測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。土壙墓の可能性も考えられる。遺物は、黒色土器椀（A類）須恵器供膳具、土師質土器供膳具・皿（ともに回転糸切り）・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器鍋（受口）、青磁碗（蓮弁）、白磁片・碗、鉄釘・スラグ・鉄滓、砂岩礫、が出土。

1254は第2層から出土した土師質土器皿の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。加工円盤の可能性あり。1255は瓦器皿で、底部の大部分を欠く。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

1256は第2層から出土した東播系須恵質土器捏鉢の下部である。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用によりわずかに磨耗。やや軟質焼成で、部分的に酸化炎焼成する。1257は土師質管状土錘である。焼成不良により磨耗。1258は鉄釘である。細身で、両端部を欠く。1259は棒状の鉄製品で釘とみられる。下部は彎曲し、両端部を欠く。

土坑 1021号（Ⅰ地区 SK11021）（第507・541図）

Ⅰ-12区東部北側、17グリッドに位置し、北側をSK11020・SA1075EP10・SA1076EP5に切られる。長軸222cm短軸126cm深度29cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状だが、底面は中央付近が凹む。埋土は5層に分層できる。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具・鍋・貯蔵具・椀・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、不明鉄製品、が出土。

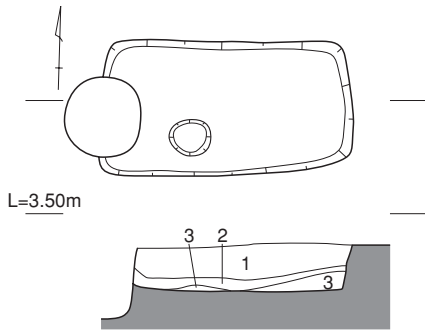
1260は土師質土器皿。低平な器形で、口縁端部は尖る。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕の明瞭な指頭圧痕を1カ所残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。1261は土師質土器杯の下半部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良で磨耗気味。胎土に砂岩を含む。

1262は瓦器椀の底部である。高台は幅広・低平な逆台形状。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施すとみられる。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面やや不良、外面不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-1～2期（12世紀後葉～13世紀初頭）とみられ、の年代が与えられる。

1263はレントゲン画像から雁又鏃と判断したが、鏃としてはやや厚く重量がある。

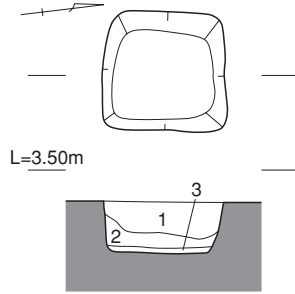
土坑 1024号（Ⅰ地区 SK11024）（第508・542図）

Ⅰ-12区東部中央北寄り、k・17グリッドに位置し、北をSP14177に西をSG1021EP4に切られる。長軸131cm短軸112cm深度12cmを測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺



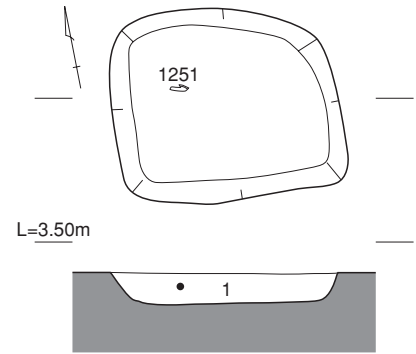
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
2. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (しまり強)
にぶい黄褐色砂質土ブロック含む
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)

第 502 図 I - 12 区
SK11002 遺構実測図



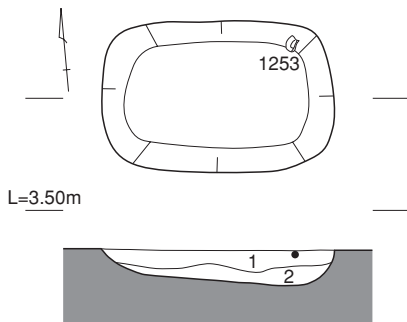
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 褐色 10YR4/4 砂質土 (しまり強)
3. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片含む

第 503 図 I - 12 区
SK11004 遺構実測図



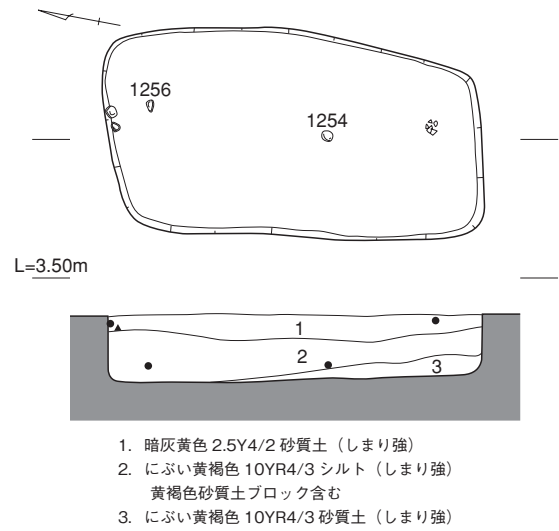
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 504 図 I - 12 区
SK11006 遺構実測図



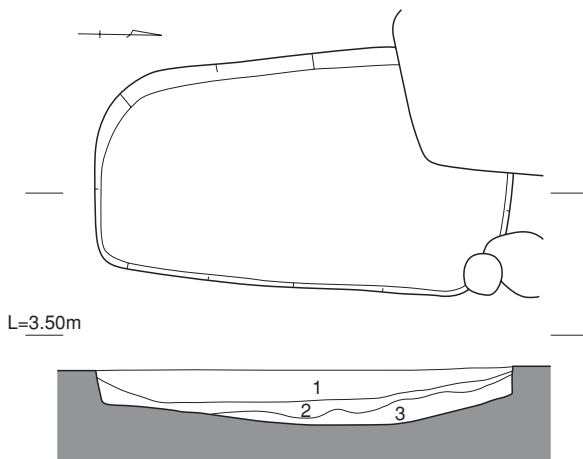
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
暗褐色砂質土ブロック含む

第 505 図 I - 12 区 SK11011 遺構実測図



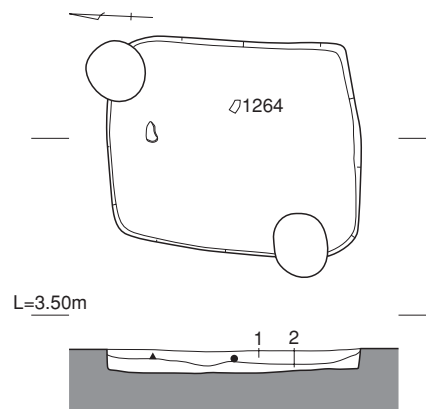
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 506 図 I - 12 区 SK11020 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 507 図 I - 12 区 SK11021 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む

第 508 図 I - 12 区 SK11024 遺構実測図



物は、土師質土器供膳具・杯・煮炊具・土錘、須恵質土器片、瓦器碗、青磁碗（蓮弁）、が出土。

1264 は第 1 層から出土した青磁碗の上半部。外面の口縁に 1 条の沈線を引き、体部にヘラ片彫によって蓮弁文を施文する。蓮弁に鎬をもたないことから、大宰府分類龍泉窯系青磁碗 I - 5・a 類（13 世紀初頭～前半）に相当。

土坑 1025 号（I 地区 SK11025）（第 509・543 図）

I - 12 区東部中央、k 7 グリッドに位置する。長軸 144cm 短軸 103cm 深度 32cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は不整な逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器捏鉢・貯蔵具、瓦器片・碗、瓦質土器羽釜脚部、白磁碗、スラグ、砂岩製叩石、が出土。

1265 は遺構底部から出土した瓦質土器羽釜脚部の上部。胎土は粗く、砂岩・泥岩・チャートを含む。山城型瓦質羽釜の模倣品とみられ、在地産の可能性もあり。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

土坑 1026 号（I 地区 SK11026）（第 510・544 図）

I - 12 区東部中央、k 7 グリッドに位置し、北側を SA1084EP2 に切られる。長軸 132cm 短軸 76cm 深度 21cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。深度が浅いことから土壌墓から除外した。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器片、瓦器碗、常滑甕、が出土。

1266 は第 1 層出土の土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。胎土にチャートを含むため在地産の可能性はあるが、色調が他と異なり赤味が強い。1267 は瓦器碗の底部。高台断面は小さな逆三角形を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗 III - 2～3 期（12 世紀末～13 世紀前葉）に相当。

土坑 1027 号（I 地区 SK11027）（第 511・545 図）

I - 12 区東部中央南寄り、j・k 7 グリッドに位置する。長軸 142cm 短軸 86cm 深度 25cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は緩い逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・杯（回転糸切り）・土錘、須恵質土器片・捏鉢、が出土。

1268 は遺構底部から出土した土師質土器杯の底部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

土坑 1035 号（I 地区 SK11035）（第 512・546 図）

I - 12 区東部北端、m 6 グリッドに位置し、北側を調査区外に延びる。長軸 114cm 短軸 108cm 深度 18cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具（回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・碗・皿、白磁皿、スラグ、が出土している。

掲載遺物は第 1 層からの出土である。1269 は土師質土器皿である。非回転台成形で、底部外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。京都系土師皿の模倣品で、13 世紀代に位置付けられる。

1270 は瓦器碗の下半部。高台は低平で幅広の蒲鋒形を呈し、底径は大きい。見込みに螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面良好、外面不良。胎土に砂岩とチャー

トを含むことから在地産とみられる。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期に併行か。

土坑 1038号 (I地区 SK11038) (第513・547図)

I－12区東部北側、15・6グリッドに位置し、南西をSP14278とSP14359に切られる。長軸143cm短軸98cm深度19cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器椀、が出土。

1271は瓦器椀で、底部を欠く。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成・炭素吸着ともに良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期(13世紀前葉)に相当。

土坑 1039号 (I地区 SK11039) (第514・548図)

I－12区東部北側、k6グリッドに位置する。長軸95cm短軸87cm深度28cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、弥生土器甕か、土師質土器供膳具・皿(ユビオサエ)・杯(回転糸切り)・煮炊具・鍋・土錘(大型ほか)、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器椀、中世陶器片、白磁碗、鉄釘か、が出土している。

第1層からは1272・1275、第2層からは1273・1276・1277が出土。

1272は土師質土器皿である。非回転台成形で、底部外面に指頭圧痕を残す。外面体底部境に接合痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。京都系土師皿の在地模倣品とみられ、13世紀代に位置付けられる。1273は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土に泥岩を含む。本品は胎土分析を行い(胎土分析試料No.36)、実体顕微鏡観察では少量の金雲母が確認され、非在地産の可能性がある。

1274は瓦器椀の上半部。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期(13世紀前葉～中葉)に相当。

1275は白磁碗の底部。内面の体底部境に1条の沈線を引く。施釉は内面のみで残存部外面は露胎。高台の畳付部が磨耗しており、二次的な使用の可能性あり。大宰府分類白磁碗Ⅳ－1・a類(11世紀後半～12世紀前半)に相当。

1276～1279は土師質管状土錘である。いずれも焼成不良により磨耗。1277は胎土にチャートを含み、1279は胎土が粗く砂岩とチャートを含む。1280は鉄釘。頂部を短く折り曲げ、頭部を作る。

土坑 1040号 (I地区 SK11040) (第515・549図)

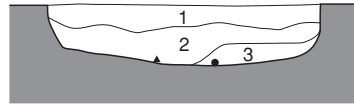
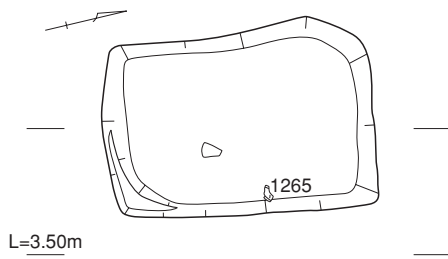
I－12区東部中央北寄り、j6グリッドに位置する。長軸140cm短軸56cm深度16cmを測る隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器供膳具・杯・煮炊具、瓦器椀、スラグ、が出土。

1281は回転台成形の土師質土器杯上半部である。焼成不良により磨耗。

土坑 1041号 (I地区 SK11041) (第516・550図)

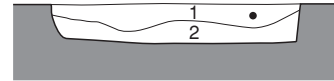
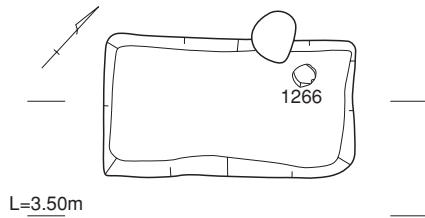
I－12区東部中央北寄り、j・k5・6グリッドに位置し、東側をSK11040に切られる。長軸182cm短軸94cm深度21cmを測る長楕円形土坑。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、土師質土器供膳具・皿(ユビオサエ)・杯・煮炊具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片、青磁(同安)



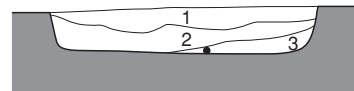
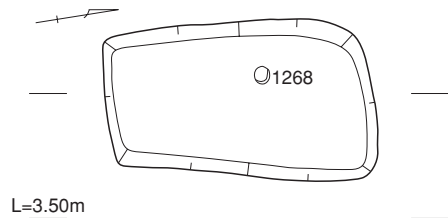
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 褐色 10YR4/4 砂質土 (しまり強)

第 509 図 I - 12 区 SK11025 遺構実測図



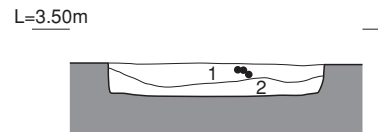
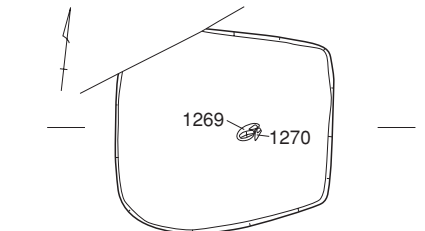
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
黄褐色・灰黄褐色砂質土ブロック含む

第 510 図 I - 12 区 SK11026 遺構実測図



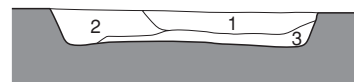
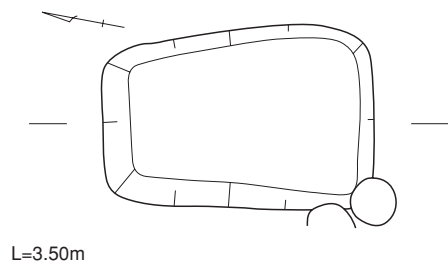
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・灰黄褐色砂質土ブロック含む
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (しまり強)

第 511 図 I - 12 区 SK11027 遺構実測図



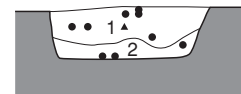
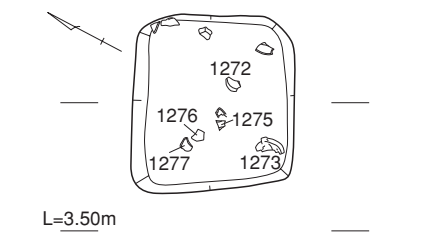
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 512 図 I - 12 区 SK11035 遺構実測図



1. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり強)
3. 褐色 10YR4/4 砂質土 (しまり強)

第 513 図 I - 12 区 SK11038 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 514 図 I - 12 区 SK11039 遺構実測図



皿、鉄滓、が出土。1282・1283は回転台成形の土師質土器杯上半部。焼成不良により磨耗。1282は第2層の出土遺物。

土坑 1043号 (I地区 SK11043) (第517・551図)

I-12区東部中央、j6グリッドに位置する。長軸160cm短軸92cm深度26cmを測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は不整な逆台形状で、埋土は3層に分層できる。中央南寄りの底面にピット状の落ち込みを伴う。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、壁土、が出土。

1284は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1285は土師質管状土錘。焼成良好だが部分的に剥離・磨耗。

土坑 1046号 (I地区 SK11046) (第518・552図)

I-12区東部北側、k5グリッドに位置し、南側をSA1085EP10に切られる。長軸162cm短軸104cm深度21cmを測る隅丸長方形土坑。断面はエッジの緩い逆台形状で、埋土は5層に分層。遺物は、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、常滑甕、鉄、鉄釘か、壁土、が出土。

1286は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土は粗く、在地花崗岩を含む。1287は瓦器椀の上半部。外面に見える斜位の沈線は焼成前に付いた工具の擦痕であろう。内面は横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は外面～口縁内面まで良好で、以下吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期(13世紀中葉)とみられる。

1288は土師質管状土錘。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。1289は鉄釘とみられる。頂部をL字状に屈曲させ、頭部を作る。下半部を欠く。

土坑 1048号 (I地区 SK11048) (第519・553図)

I-12区東部中央南寄り、i5グリッドに位置する。長軸124cm短軸80cm深度17cmを測る隅丸長方形土坑。断面は緩い逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・杯・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、中世陶器貯蔵具、鉄釘か・鉄滓、が出土。

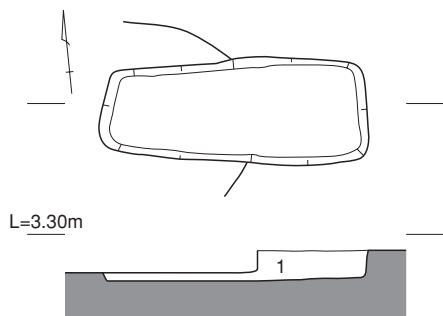
1290は鉄釘とみられる。両端部を欠く。

土坑 1049号 (I地区 SK11049) (第520・554図)

I-12区東部北側、k4・5グリッドに位置し、北側を攪乱に切られる。長軸138cm短軸98cm深度17cmを測る不整な隅丸方形土坑。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具、瓦器片・椀・皿、白磁碗、鉄製品片・板状鉄製品(casting品)・鉄釘・壁土か、が出土。

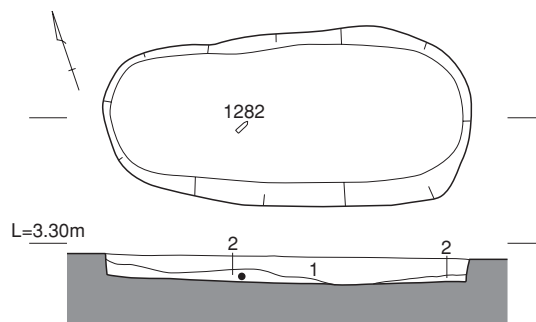
1291は土師質土器皿。非回転台成形とみられ、底部外面に指頭圧痕を残すが不明瞭。焼成不良により磨耗。1292は瓦器椀の底部。高台は幅広の逆三角形を呈する。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着なく酸化炎焼成する。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期(13世紀前葉～中葉)に相当。1293は遺構底部出土の白磁碗下半部。二次的な被熱により釉の表面が荒れてざらつく。大宰府分類白磁碗Ⅲ類(11世紀後半～12世紀前半)か。

1294は鉄釘で、両端部を欠く。1295は棒状の鉄製品で、釘であろうか。2ヶ所で屈曲変形する。両



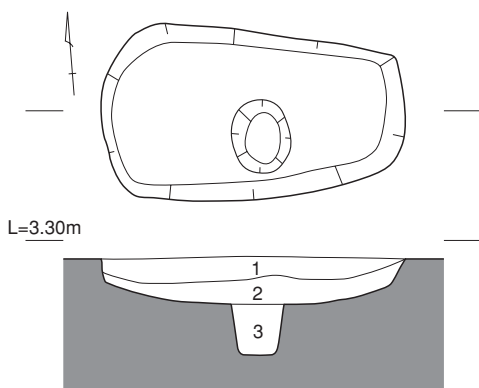
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)

第 515 図 I - 12 区 SK11040 遺構実測図



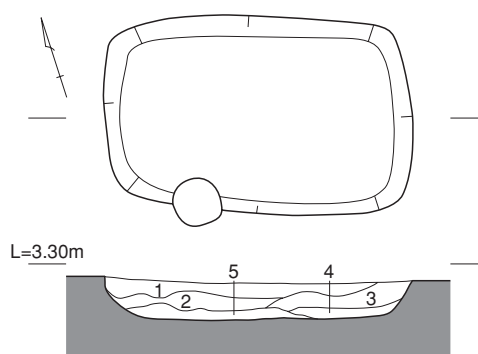
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 516 図 I - 12 区 SK11041 遺構実測図



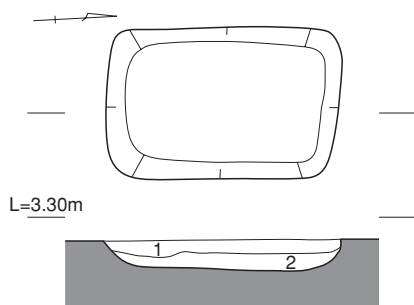
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片・黄褐色砂質土ブロック含む
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・黄褐色砂質土ブロック含む

第 517 図 I - 12 区 SK11043 遺構実測図



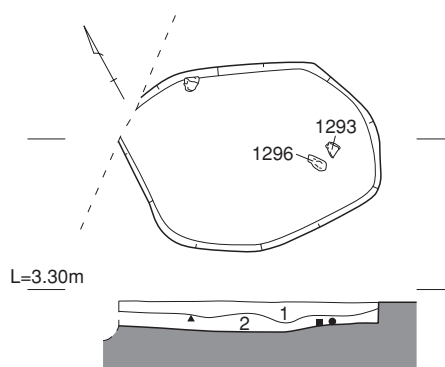
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
4. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
5. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 518 図 I - 12 区 SK11046 遺構実測図



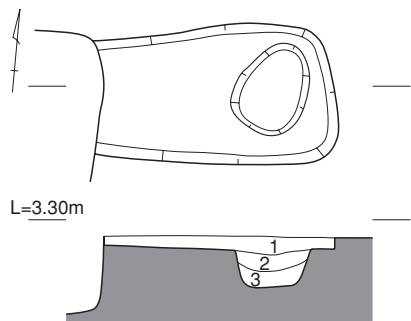
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 519 図 I - 12 区 SK11048 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)

第 520 図 I - 12 区 SK11049 遺構実測図



1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 521 図 I - 12 区 SK11050 遺構実測図



端部を欠く。1296 はやや彎曲する厚い板状の鉄製品で、鉄鍋か鋤先の一部とみられる。亀甲状の亀裂がみられることから鑄造品と考えられる。

土坑 1050 号 (I 地区 SK11050) (第 521・555 図)

I - 12 区東部北側、j・k 4 グリッドに位置し、西側を SK11051 に切られる。長軸残存長 126cm 短軸 74cm 深度 28cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、東側の底面にピット状の掘り込みを伴う。埋土は 3 層に分層できる。

遺物は、弥生土器か、土師質土器供膳具・皿・土錘、瓦器片・椀、スラグ、が出土。1297 は土師質管状土錘。比較的長身で細身。焼成不良により磨耗。部分的に炭素付着。

土坑 1052 号 (I 地区 SK11052) (第 522・556 図)

I - 12 区東部北側、k 4 グリッドに位置し、南側を SK11050・SK11051 に切られる。長軸残存長 146cm 短軸 98cm 深度 21cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀・皿、が出土している。

1298 は瓦器皿としたが、復元径が大きいことから小型化した椀の可能性もある。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。胎土に金雲母と角閃石を含む。皿ならば和泉型瓦器 II～III 期頃とみられるが、椀なら IV 期後半に位置付けられる。

土坑 1062 号 (I 地区 SK11062) (第 523・557 図)

I - 12 区中央部北側、j 3・4 グリッドに位置する。長軸 116cm 短軸 90cm 深度 30cm を測る隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具 (回転糸切り)・杯 (回転ヘラ切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片、鉄製品片、が出土。

1299 は土師質土器杯の下部。器壁が厚い。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土に在地花崗岩を含む。1300 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片である。口縁端部は下方にやや拡張。口縁外面は重焼により炭素と自然釉が付着。森田編年第 II 期第 2 段階 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当する。

土坑 1063 号 (I 地区 SK11063) (第 524・558 図)

I - 12 区中央部北側、j3・4 グリッドに位置する。長軸 156cm 短軸 90cm 深度 18cm を測る隅丸長方形土坑。断面は方形で、埋土は 2 層に分層。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具 (回転糸切り)・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、が出土。

1301 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁を上下にわずかに拡張し、口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年第 II 期第 2 段階 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。1302 は長身の土師質管状土錘。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

土坑 1070 号 (I 地区 SK11070) (第 525・559 図)

I - 12 区中央部北寄り、h・i 3 グリッドに位置し、西側を SA1087EP5 に切られる。長軸 144cm 短軸 110cm 深度 17cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、須恵器供膳具、土師質土器皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具・椀、須恵質土器甕、瓦器片、土器転用加工円盤、が出土。

1303 は瓦器か瓦質土器の体部片を転用した加工円盤。ナデや指頭圧痕が残り、炭素吸着不良で酸化炎焼成する。胎土にチャートを含む。1304 は回転台成形の土師質土器杯上半部。焼成不良により磨耗。

土坑 1071 号 (I 地区 SK11071) (第 526・560 図)

I - 12 区中央部、h 2・3 グリッドに位置する。長軸 116cm 短軸 102cm 深度 9cm を測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。

遺物は、土師質土器供膳具・杯（回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・椀、が出土。1305 は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。胎土にチャートを含む。

土坑 1079 号 (I 地区 SK11079) (第 527・561 図)

I - 12 区中央部南端、e 3 グリッドに位置し、南側を SP14471 に切られる。長軸 106cm 短軸 54cm 深度 18cm を測る隅丸長方形の土坑。断面はで、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・杯・鍋、瓦器椀、鉄釘か、が出土。

1306 は鉄釘。頂部を L 字に屈曲させ頭部を作る。中位で屈曲折損する。

土坑 1096 号 (I 地区 SK11096) (第 528・562 図)

I - 12 区中央部北寄り、h 2 グリッドに位置する。長軸 112cm 短軸 76cm 深度 13cm を測る楕円形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 2 層である。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器皿、が出土。

1307 は瓦器皿。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。1308 は東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁をわずかに上下に拡張。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。

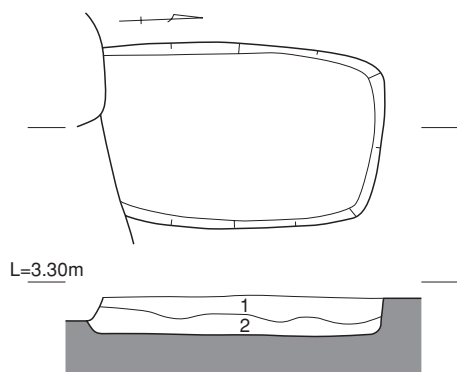
土坑 1099 号 (I 地区 SK11099) (第 529・563 図)

I - 12 区中央部南端、d 1・2 グリッドに位置する。長軸 170cm 短軸 94cm 深度 22cm を測る隅丸長方形土坑。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。土壙墓の可能性も考えられる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（ともに回転糸切り）・煮炊具・鍋須恵質土器甕、瓦器片・椀、白磁碗、が出土。

1309 は白磁碗の上部。口縁を玉縁につくる。釉に微細な貫入を伴う。焼成やや不良。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11 世紀後半～12 世紀前半）に相当。

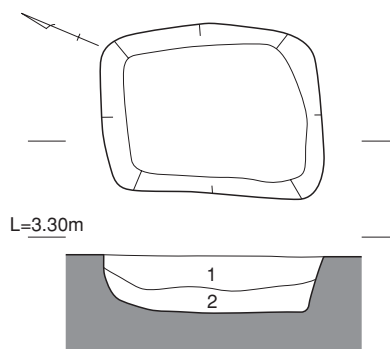
土坑 1100 号 (I 地区 SK11100) (第 530・564 図)

I - 12 区中央部南端、d 2 グリッドに位置し、南西を SK11099 に切られる。長軸 216cm 短軸 85cm 深



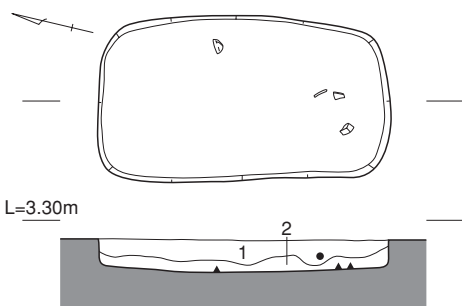
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 522 図 I - 12 区 SK11052 遺構実測図



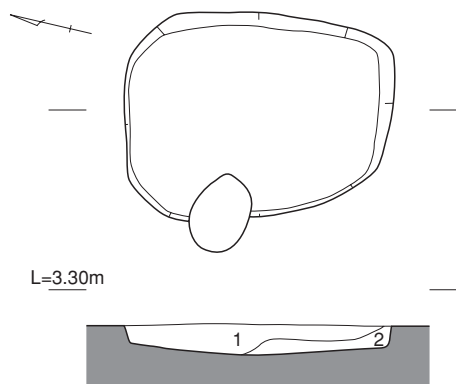
1. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む
2. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (しまり強)
黄褐色・黒褐色砂質土ブロック含む

第 523 図 I - 12 区 SK11062 遺構実測図



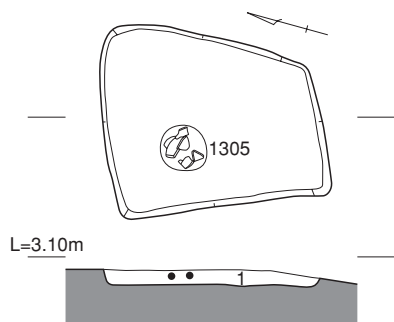
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)

第 524 図 I - 12 区 SK11063 遺構実測図



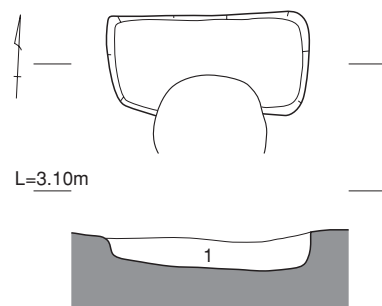
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強) 炭化物片わずかに含む
2. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (しまり強)

第 525 図 I - 12 区 SK11070 遺構実測図



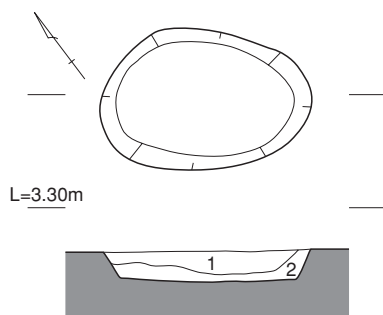
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 526 図 I - 12 区 SK11071 遺構実測図



1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第 527 図 I - 12 区 SK11079 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 528 図 I - 12 区 SK11096 遺構実測図



度 25cmを測る不整な隅丸長方形土坑である。断面は緩い逆台形状で、西端部に段を伴う。埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（ともに回転糸切り）・杯（回転糸切り）・鍋、須恵質土器捏鉢・鉢、瓦器片・椀、鉄滓、砂岩製砥石、が出土。

1310 は柱状の砂岩礫を用いた砥石で、下半を欠損。砥面として表裏 2 面を使用する。肌理細かく、使用により部分的に光沢を生じる。

土坑 1105 号 (I 地区 SK11105) (第 531・565 図)

I - 12 区中央部南側、d 1・2 グリッドに位置する。南東を SK11099、北西を SK11104 に切られる。長軸 182cm 短軸 104cm 深度 16cm を測る隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で、埋土は 2 層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、が出土。

1311 は土師質土器杯の下部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1312 は遺構底部から出土した東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁端部は上方に拡張し、口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年第 II 期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。

土坑 1115 号 (I 地区 SK11115) (第 532・566 図)

I - 12 区西部南端、b・c 20 グリッドに位置する。長軸 118cm 短軸 70cm 深度 10cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・杯・羽釜、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

1313 は遺構底部から出土した土師質土器羽釜の上部片。鏝部は貼り付けで作る。外面煤付着。産地および時期不明。

土坑 1124 号 (I 地区 SK11124) (第 533・567 図)

I - 12 区西部南端、b 18・19 グリッドに位置し、南西角を SP14632 に切られる。長軸 130cm 短軸 86cm 深度 24cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器供膳具、瓦器片・椀、スラグ、砂岩製砥石、が出土。

1314 は遺構東側で出土した砂岩割石を用いた砥石である。1 面のみ使用し、他の面は破面のまま残す。砥面の周縁は使用により丸みを帯びる。弱い敲打痕を残す。

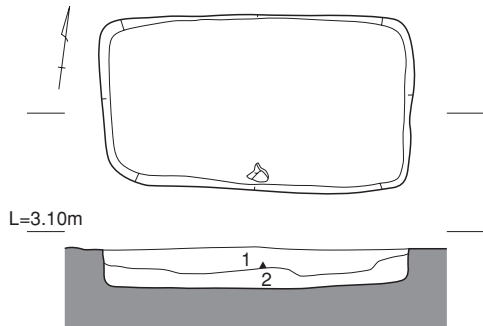
土坑 1137 号 (I 地区 SK11137) (第 534・568 図)

I - 12 区西部北側、f 17 グリッドに位置する。長軸 138cm 短軸 114cm 深度 9cm を測る不整な隅丸長方形土坑。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、白磁碗、が出土。

1315 は以降中央部から出土した白磁碗の底部。高台は削り出しで作る、高台内側は浅い。見込みの底体部境に段を設ける。大宰府分類白磁碗 IV 類（11 世紀後半～12 世紀前半）に相当。

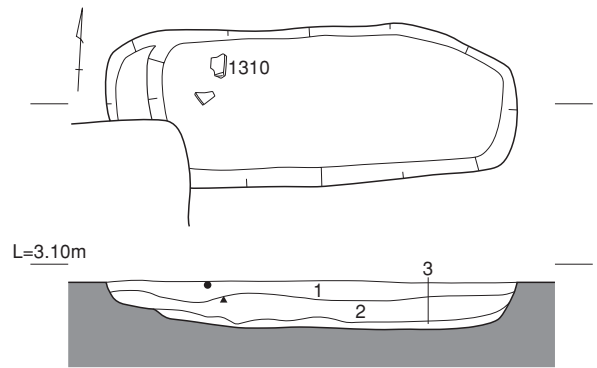
土坑 1144 号 (I 地区 SK11144) (第 535・569 図)

I - 12 区西部南側、b 17 グリッドに位置し、北側を攪乱に切られる。長軸 172cm 短軸残存長 104cm 深度 13cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、



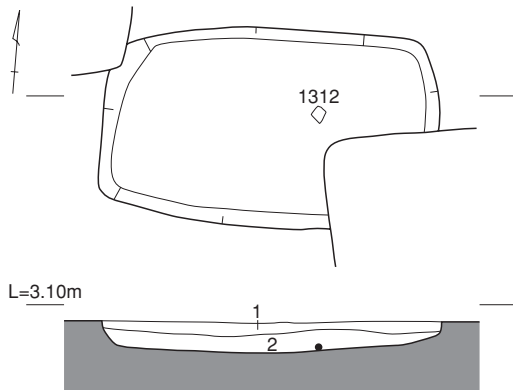
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 529 図 I - 12 区 SK11099 遺構実測図



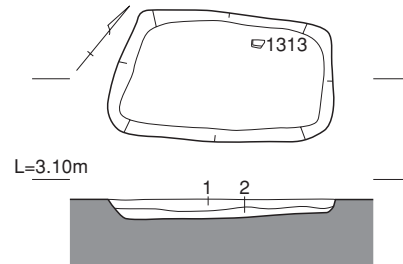
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土 (しまり強)
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 530 図 I - 12 区 SK11100 遺構実測図



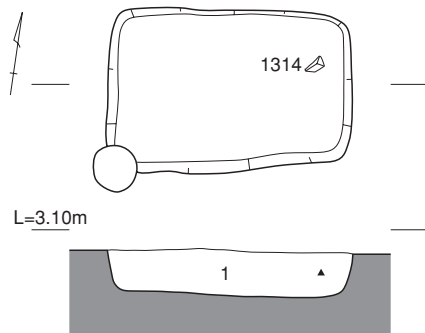
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 531 図 I - 12 区 SK11105 遺構実測図



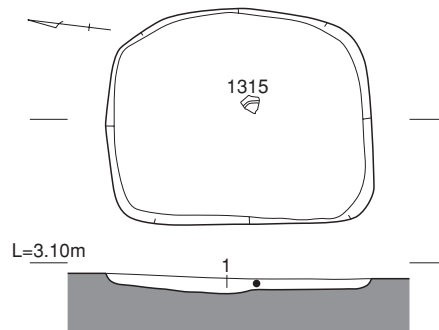
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり強)

第 532 図 I - 12 区 SK11115 遺構実測図



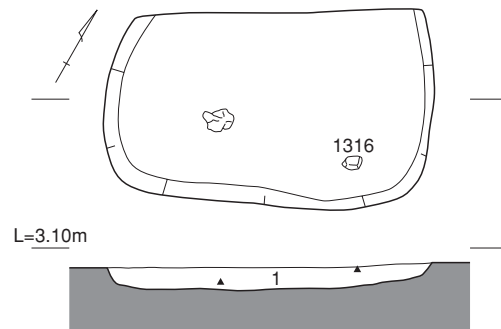
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第 533 図 I - 12 区 SK11124 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

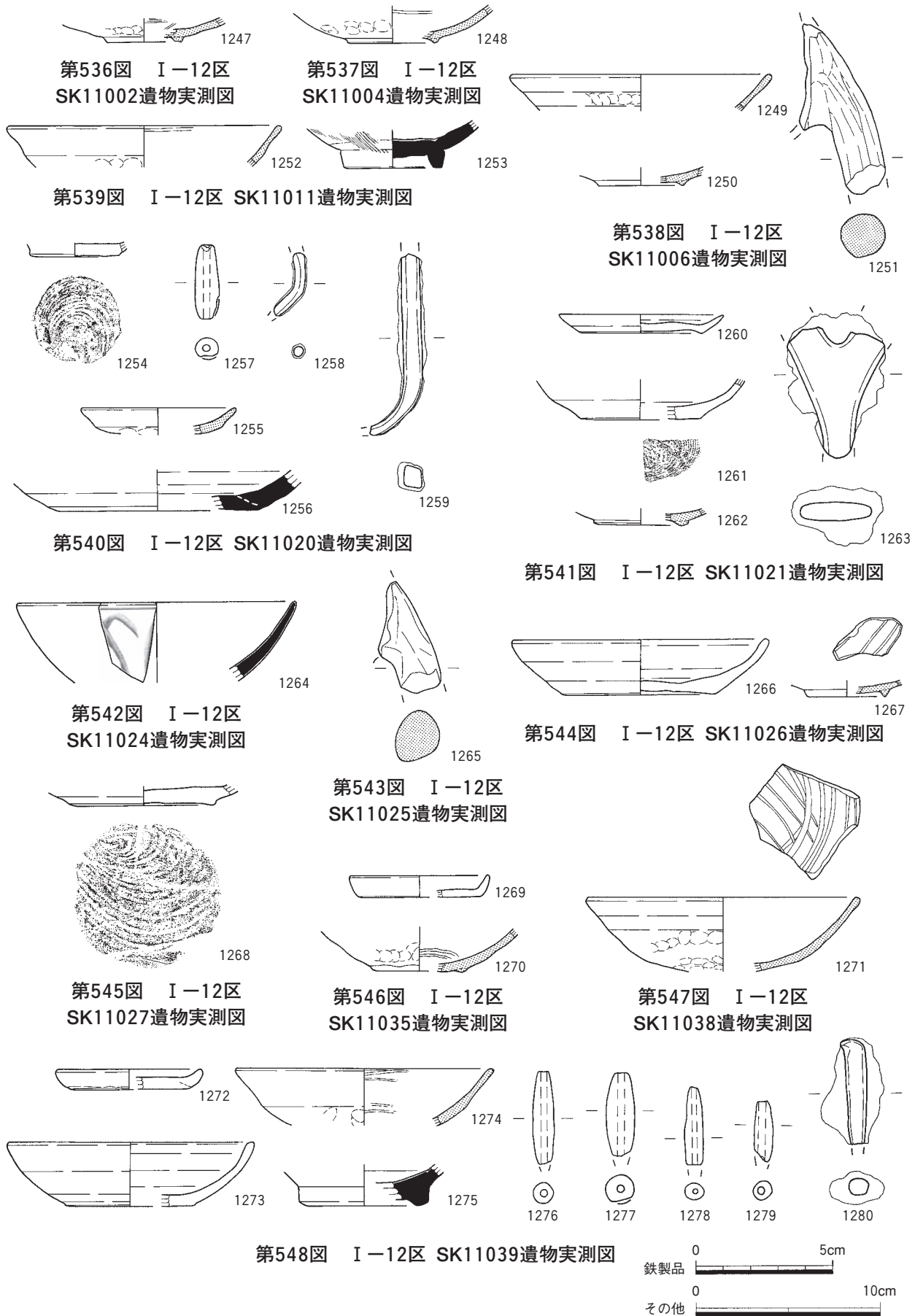
第 534 図 I - 12 区 SK11137 遺構実測図



1. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 (しまり強)

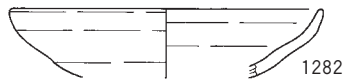
第 535 図 I - 12 区 SK11144 遺構実測図



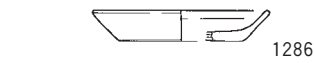
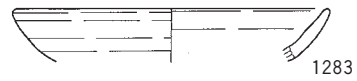




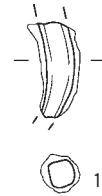
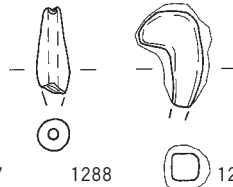
第549図 I-12区
SK11040遺物実測図



第550図 I-12区 SK11041遺物実測図



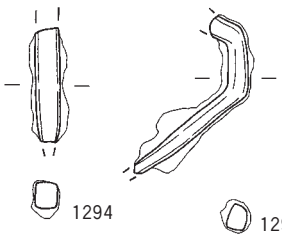
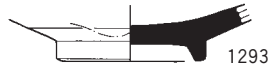
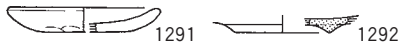
第552図 I-12区 SK11046遺物実測図



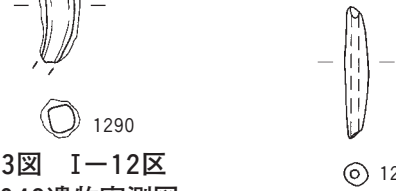
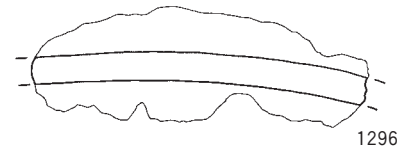
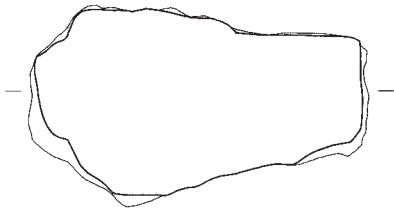
第553図 I-12区
SK11048遺物実測図



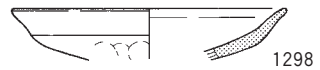
第551図 I-12区
SK11043遺物実測図



第554図 I-12区 SK11049遺物実測図



第555図 I-12区
SK11050遺物実測図



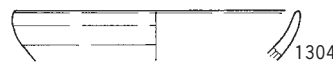
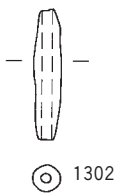
第556図 I-12区
SK11052遺物実測図



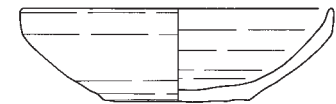
第557図 I-12区
SK11062遺物実測図



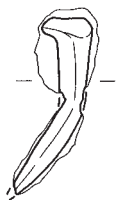
第558図 I-12区 SK11063遺物実測図



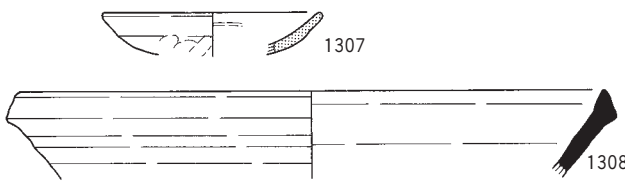
第559図 I-12区
SK11070遺物実測図



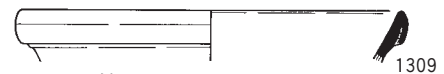
第560図 I-12区
SK11071遺物実測図



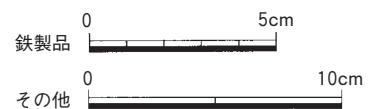
第561図 I-12区
SK11079遺物実測図

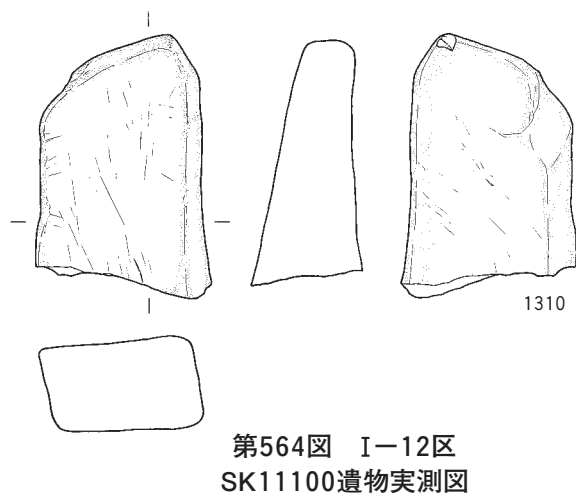


第562図 I-12区 SK11096遺物実測図



第563図 I-12区
SK11099遺物実測図

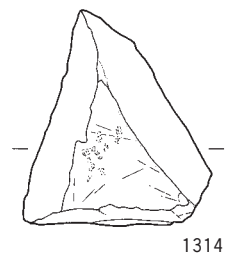




第564図 I-12区
SK11100遺物実測図



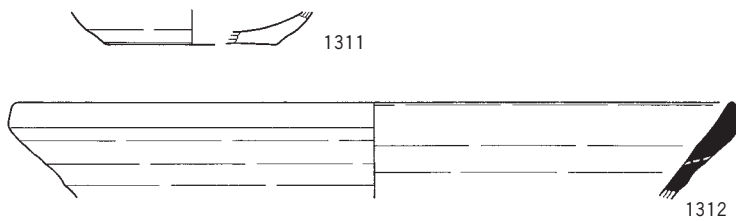
第566図 I-12区
SK11115遺物実測図



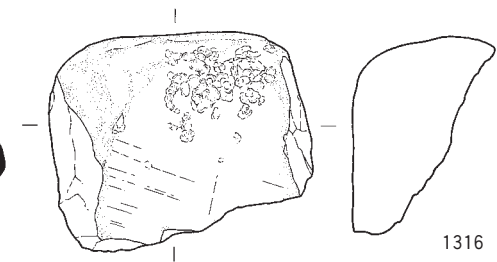
第567図 I-12区
SK11124遺物実測図



第568図 I-12区
SK11137遺物実測図



第565図 I-12区 SK11105遺物実測図



第569図 I-12区
SK11144遺物実測図

土師質土器片・供膳具、砂岩製砥石、が出土している。

1316は砂岩礫を用いた砥石片である。下半および背面は欠損し、1面のみ使用する。図の上部に敲打痕が集中する。

土坑（土壙墓）

本調査区では土坑 147 基のうち、平面形態や土層などから土壙墓である可能性がきわめて高いものとして 9 基を抽出した。本調査区の土壙墓と長方形土坑は、掘立柱建物や溝に規制された配置をみせるものがある。

土坑（土壙墓）1014号（I地区 SK11014）（第570・579図）

I-12区東部中央南寄り、k8グリッドに位置し、東をSK11013に南をSA1078EP5に切られる。長軸124cm短軸98cm深度24cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・碗・皿、瓦質土器羽釜、が出土。

1317～1319は瓦器碗である。1317は体部で、内面に横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。1318は上半部で、内面に

横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅳ－Ⅰ期（13世紀中葉）に相当。1319は底部。高台はきわめて低平な蒲鋒形断面で、退化著しい。体部内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面良好、外面やや不良で、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ－Ⅲ～Ⅳ－Ⅰ期（13世紀前葉～中葉）頃とみられる。

1320は瓦質土器羽釜の体部片。鏝部は貼り付けで、断面逆台形状でやや低い。脚部は鏝下部から取り付く。焼成不良により磨耗し、炭素吸着は内面やや不良、外面良好。胎土に砂岩を含むことから山城型瓦質羽釜の模倣品とみられるが、在地産であるかは不明。概ね13世紀代に位置付けられる。

土坑（土壙墓）1015号（Ⅰ地区 SK11015）（第571・580図）

Ⅰ－12区東部中央南寄り、k8グリッドに位置する。長軸113cm短軸96cm深度31cmを測る隅丸方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器甕、瓦器片・碗、瓦質土器鍋（受口）・羽釜、常滑甕、が出土。

1321は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1322は瓦器碗の上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ－Ⅲ期（13世紀前葉）に相当。1323は受口状口縁をもつ瓦質土器鍋の上部片。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。山城型瓦質土器鍋の搬入品とみられ、概ね13世紀代。

土坑（土壙墓）1018号（Ⅰ地区 SK11018）（第572・581図）

Ⅰ－12区東部南側、j8グリッドに位置し、南側をSP14141に切られる。長軸106cm短軸90cm深度27cmを測る隅丸方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・杯（回転糸切りか）・土錘、瓦器片、が出土。

1324は回転台成形の土師質土器杯である。焼成不良により磨耗著しく底部の切離し技法は不明。

土坑（土壙墓）1034号（Ⅰ地区 SK11034）（第573図）

Ⅰ－12区東部南端、g7グリッドに位置する。長軸161cm短軸88cm深度50cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。

遺物は、土師質土器煮炊具が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1045号（Ⅰ地区 SK11045）（第574図）

Ⅰ－12区東部南端、h6・7グリッドに位置する。長軸166cm短軸86cm深度50cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。出土遺物は皆無。

土坑（土壙墓）1077号（Ⅰ地区 SK11077）（第575・582図）

Ⅰ－12区中央部南端、e3グリッドに位置する。長軸160cm短軸94cm深度34cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）、須恵質土器片・捏鉢・貯蔵具、瓦器皿、瓦質土器羽釜、鉄滓、が出土。

1325は土師質土器皿の底部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成良好。1326は瓦器皿である。口縁外面のヨコナデは弱く、幅が狭い。口縁～体部内面に横位のヘラミガキを

施すが、見込みには確認できない。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃とみられる。

1327は瓦質土器羽釜の上部。罫部は貼り付けで作り、口縁・罫ともに端部は方形を意識する。内面はヨコハケを施す。炭素吸着やや不良。胎土に搬入花崗岩を含む。山城型瓦質羽釜としては形状にやや違和感があるため、その模倣品であろうか。1328は東播系須恵質土器捏鉢の上部。口縁は内上方に屈曲し、大きく拡張する。口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）に相当。

土坑（土壌墓）1108号（I地区 SK11108）（第576図）

I-12区中央部北側、h1グリッドに位置する。長軸185cm短軸84cm深度62cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。出土遺物は皆無。

土坑（土壌墓）1123号（I地区 SK11123）（第577・583図）

I-12区西部南端、b19グリッドに位置し、南側は調査区外に延びる。長軸139cm短軸91cm深度32cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面はエッジの緩い逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・杯・煮炊具・土錘、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、瓦質土器羽釜脚部、鉄釘、が出土。

1329は回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。焼成不良により磨耗。胎土に絹雲母らしき鉱物を含むが不確定。1330は瓦器椀の底部。高台断面は逆三角形形状を呈し、高さを保つ。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着・焼成ともに良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）頃か。

1331～1333は土師質管状土錘。1331・1333はともに焼成不良により磨耗。1332は細身で、胎土精良、焼成良好で、外面炭素付着。1333は胎土精良。1334は鉄釘の下半部である。

土坑（土壌墓）1151号（I地区 SK11151）（第578図）

I-12区西端部北側、d15グリッドに位置し、南西隅をSP14711に切られる。長軸116cm短軸108cm深度26cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壌墓とみられる。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。

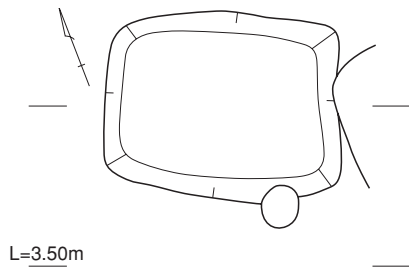
遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・貯蔵具、瓦器片・椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

溝2号（I地区 SD1002）（第462・584・587図）

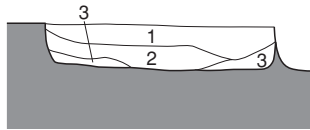
I-1・12・13区、 $\gamma \cdot \delta$ -Ⅲ t～e2～19グリッドに位置する。大きく蛇行しながら東西に走り、両端とも調査区外に延びる。検出長112.7m幅142cm深度55cmを測り、主軸はN75°Eを向く。今回I-12区では西部北側、e15～19グリッドに位置する。検出長47.7m幅112cm深度20cmを測り、主軸はN90°WEを向く。断面は逆台形状または船底状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、黒色土器片（B類）、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・皿（ともに回転糸切り）・杯（回転糸切り）・煮炊具・羽釜脚部・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀、瓦質土器羽釜・貯蔵具、常滑甕か、近世染付（肥前）、肥前陶器片、肥前磁器碗、スラグ・鉄滓、が出土。

1335・1336は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1335は胎土に在地花

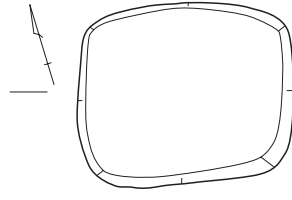


L=3.50m

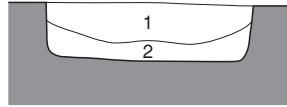


1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土(しまり強)
2. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (しまり強)
3. 暗褐色 10YR3/4 シルト (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む

第 570 図 I - 12 区
SK11014 遺構実測図

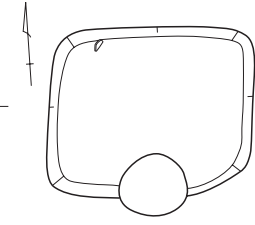


L=3.50m

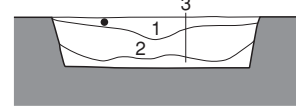


1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり強)
暗褐色砂質土ブロック含む

第 571 図 I - 12 区
SK11015 遺構実測図

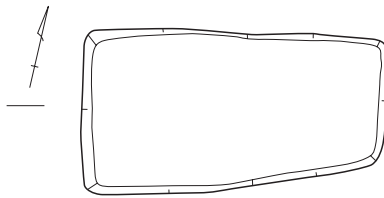


L=3.50m

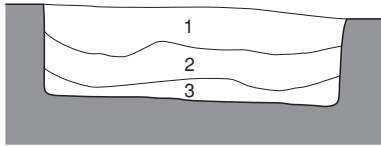


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 572 図 I - 12 区
SK11018 遺構実測図

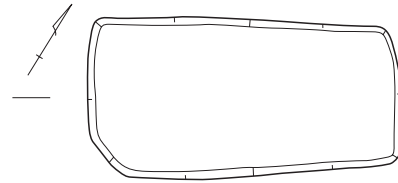


L=3.10m

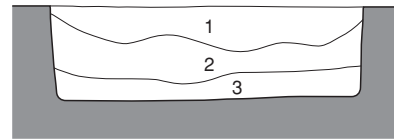


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 灰黄褐色 10YR4/2 砂質土 (しまり強)
3. 暗褐色 10YR3/3 砂質土 (しまり強)

第 573 図 I - 12 区 SK11034 遺構実測図

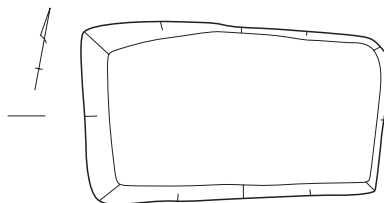


L=3.30m

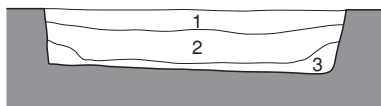


1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
黒褐色・褐色砂質土ブロック含む
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 574 図 I - 12 区 SK11045 遺構実測図

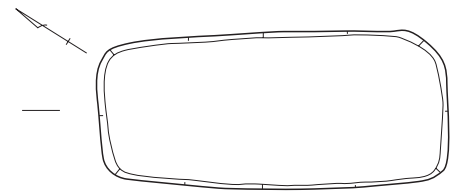


L=3.10m

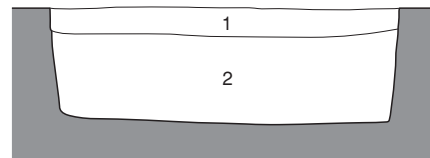


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土(しまり強)
3. 黄褐色 2.5Y5/4 砂質土 (しまり強)

第 575 図 I - 12 区 SK11077 遺構実測図



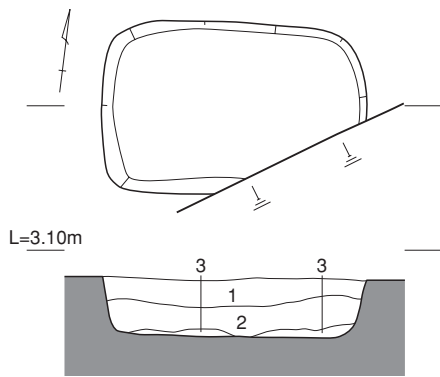
L=3.30m



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗褐色 10YR3/3 粘質土 (しまり・粘性強)

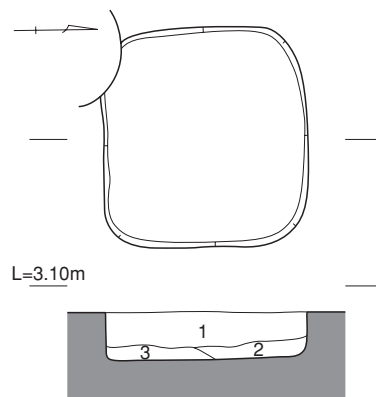
第 576 図 I - 12 区 SK11108 遺構実測図





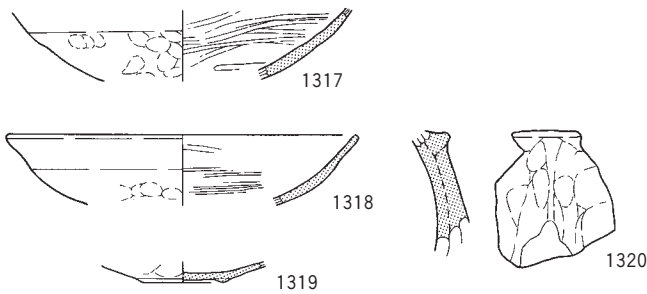
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
黄褐色地山ブロック多く含む
3. オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土 (しまり強)
炭化物片含む

第577図 I-12区 SK11123 遺構実測図

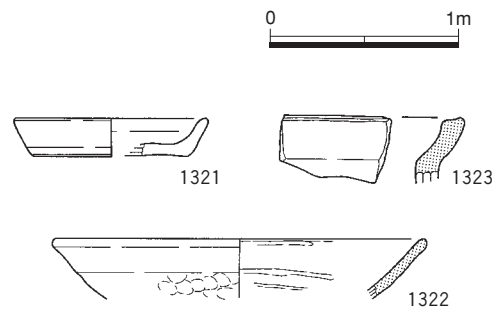


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

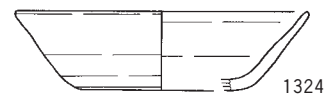
第578図 I-12区 SK11151 遺構実測図



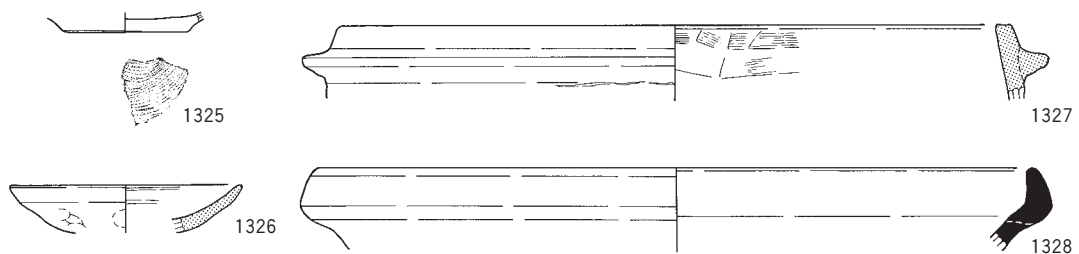
第579図 I-12区
SK111014 遺物実測図



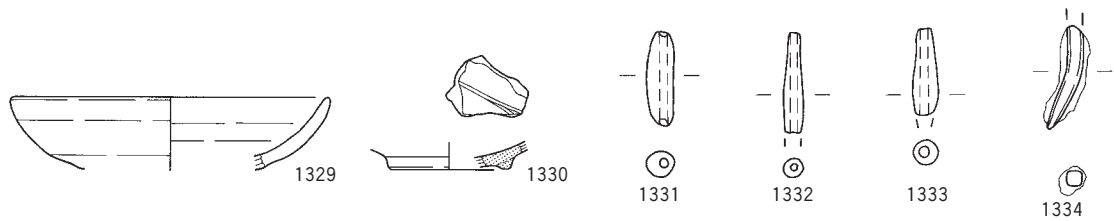
第580図 I-12区
SK111015 遺物実測図



第581図 I-12区
SK111018 遺物実測図



第582図 I-12区 SK111077 遺物実測図



第583図 I-12区 SK11123 遺物実測図



崗岩を含む。焼成不良により磨耗。1336は見込みにも先に切り離した回転糸切り痕が残る。焼成良好。

1337は土師質土器羽釜の脚部。体部下位に取り付くもので、脚部上位で下方に大きく屈曲。焼成良好。胎土は粗く、砂岩とチャートを含むことから在地産であろう。

1338は土師質土器鍋の口縁部。端部はヨコナデによりわずかに上方に拡張する。胎土は粗く、チャートを含むとみられるが不確定。焼成不良により磨耗。紀伊型の土師質土器鍔付鍋か。

1339は瓦質土器羽釜の上半部。鍔部は貼り付けで作り、鍔・口縁とも端部を方形に仕上げる。焼成不良により磨耗。炭素吸着は良好。山城型瓦質羽釜（有脚タイプ）の搬入品か、または胎土にチャートを含むとみられることから模倣品の可能性あり。概ね13世紀代に位置付けられる。

1340は陶器甕の体部片。外面に多重方形の押印文タタキを施す。常滑焼であろう。1341は常滑焼とみられる陶器甕の下部。体部外面に縦位の板ナデ、内面に横位の板ナデを施し、底部外面は不調整。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

溝 25 号（I 地区 SD1025）（第 462・585・588・595・596 図）

I-3・4・12区、 δ -III・IV e～19～2グリッドに位置する。北はI-4区まで延びるが、I-5区では検出されない。検出長91.7m幅186cm深度43cmを測る。南北主軸（N32°W）から、I-3区で向きを東に変える。今回I-12区では西部北側、e～g14～2グリッドに位置する。蛇行する傾向にあり、直進性に乏しい。検出長39.0m幅154cm深度43cmを測り、主軸はN89°Eを向く。断面は船底状または逆台形状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は、土師器椀、黒色土器椀（A・B類）、須恵器蓋・貯蔵具・甕、土師質土器片・供膳具・皿（ともに回転糸切り）・杯（回転糸切り）・煮炊具・鍋・甕・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片・羽釜脚部、常滑甕か、青磁（龍泉）碗・同碗、白磁碗、鉄釘・鉄滓・スラグ、砂岩製叩石・花崗岩礫、が出土。

1342は土師質土器杯の上半部。焼成不良により磨耗著しく調整不明瞭。胎土は粗く、チャートを含む。焼成や胎土から非回転台成形の土師質土器杯としたが、器壁が薄く瓦器椀の可能性もあり。

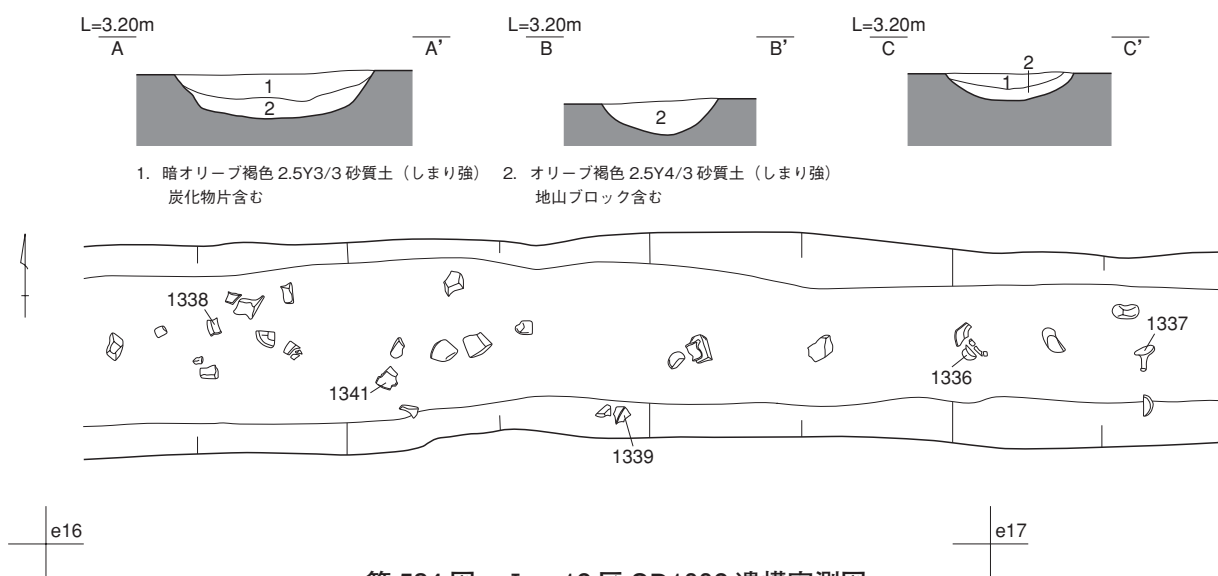
1343～1345は瓦器椀の上半部である。1343は内面に横位のヘラミガキを施す。焼成良好であるが部分的に磨耗。重焼により口縁にのみ炭素吸着。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）前後に位置付けられる。

1344・1345は和泉型瓦器椀Ⅲ-3期（13世紀前葉）とみられる。1344は内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着なし。1345は口縁外面のヨコナデ幅が狭い。内面に横位・斜位のヘラミガキをやや密に施す。重焼により口縁内面～体部外面上位にのみ炭素吸着。

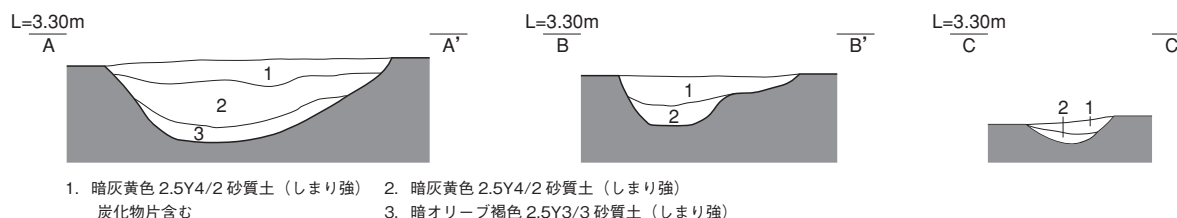
1346は瓦器椀の下半部。高台断面はしっかりとした逆台形状。見込みはジグザグ状のヘラミガキ暗文を施すとみられる。焼成・炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-1期（12世紀後葉）前後。

1347は埋土下位出土の白磁碗上半部。口縁を玉縁につくる。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。

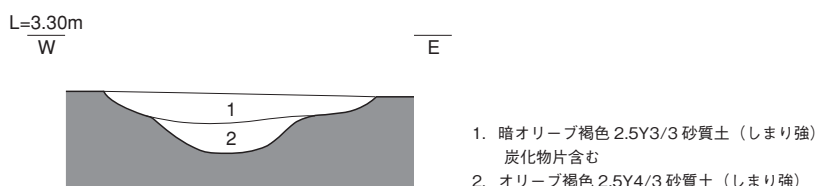
1348は紀伊型土師質土器鍔付鍋の上半部。口縁端部は内方に小さく折り返す。頸部外面は強いヨコナデにより凹線状に作る。体部外面上位に鍔部の剥離痕がみられ、幅が狭いことから鍔部は低平な断面三角形状と想定される。体部内面は横位の板ナデを施す。胎土は粗く、結晶片岩・絹雲母を含む。概ね13世紀代に位置付けられる。



第 584 図 I - 12 区 SD1002 遺構実測図



第 585 図 I - 12 区 SD1025 遺構断面図



第 586 図 I - 12 区 SD1028 遺構断面図

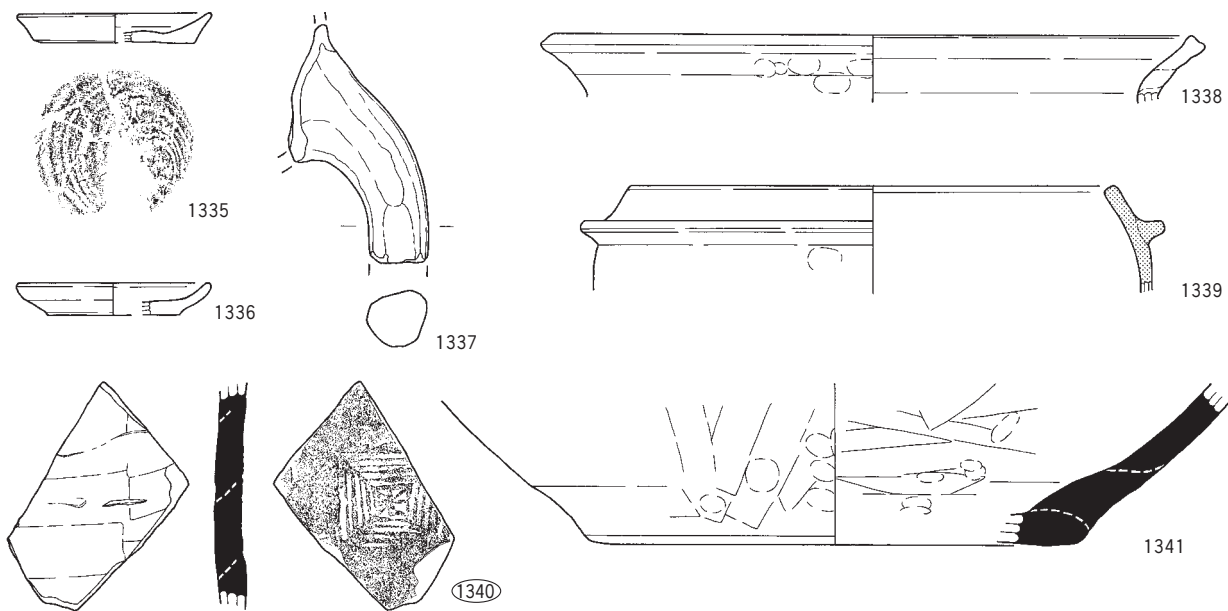


1349 は瓦質土器羽釜の脚部。明瞭な屈曲部をもたずに下方に伸びる。基部の下半は補強のため粘土を帯状に巻く。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好だが、脚の内側は使用による被熱でカーボンを消失。胎土はやや粗めでチャートを含む。山城型瓦質羽釜の搬入品、またはその模倣品とみられ、概ね 13 世紀代に位置付けられる。1350 は常滑焼とみられる陶器甕の体部片。外面に押印文タタキを施す。

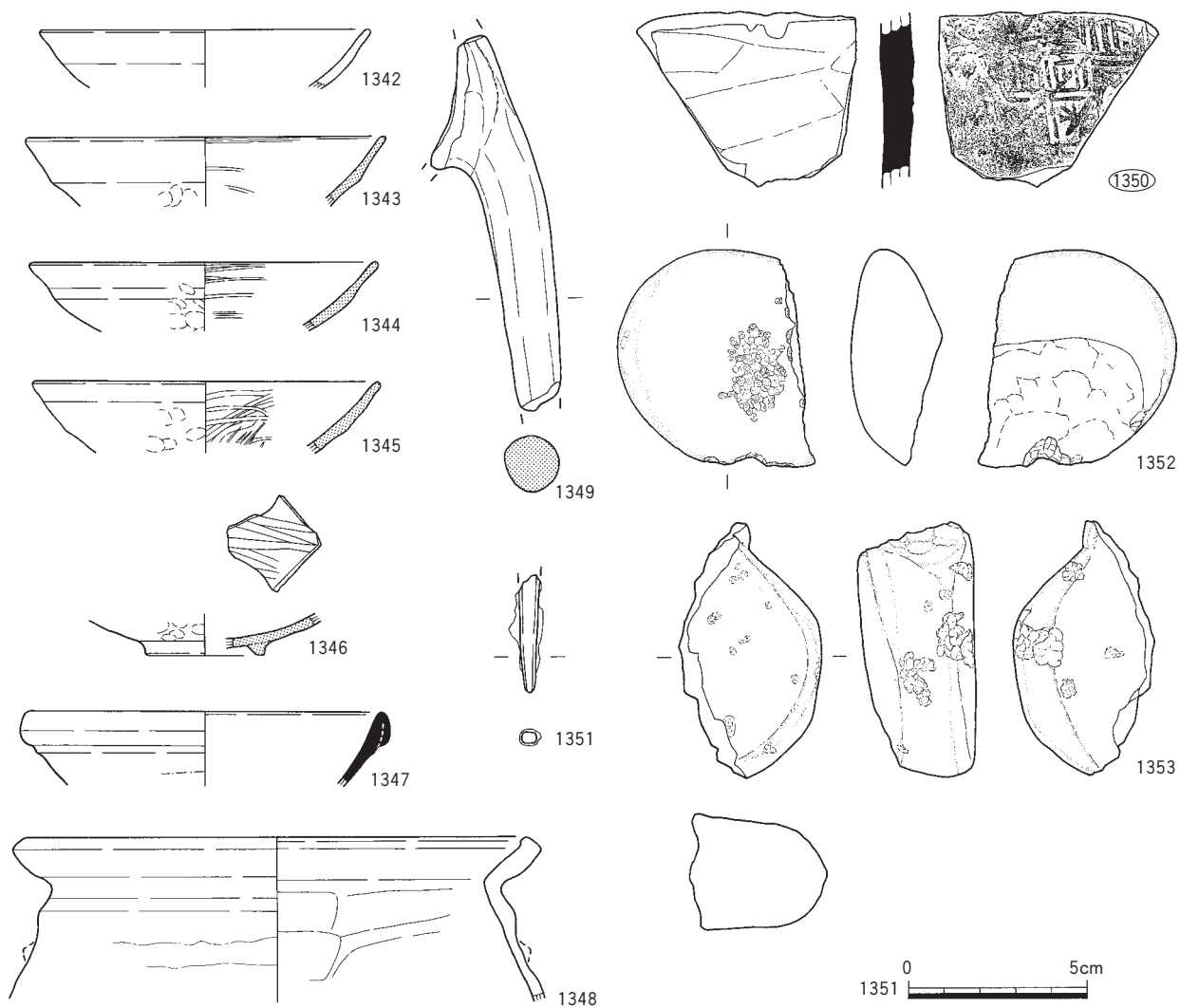
1351 は鉄釘である。上半部を欠く。1352 は砂岩円礫を用いた叩石。図の下端部は強い打撃によって凹み、背面の剥離欠損はこの打撃によるものと考えられる。正面中央に敲打痕が集中する。

1353 は花崗岩系の礫を用いた台石の一部である。表裏 2 面が平滑で敲打痕を伴うほか、側面には敲打の集中部がみられることから叩石としての使用も推測される。石材は石英・長石・角閃石・金雲母といった花崗岩を構成する鉱物が含まれるが、等粒状・均質の構造ではなく粒子が不均一であることから、風化花崗岩が再堆積した礫岩の一種か、もしくは火成岩であれば紀伊南部などに産出する花崗斑岩の一種ではないかと考える。いずれにせよ本県では産出しないもので、搬入品であることは疑う余地がない。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀後葉～ 13 世紀代に位置付けられる。



第587図 I-12区 SD1002遺物実測図



第588図 I-12区 SD1025遺物実測図

0 5cm
1351
0 10cm
その他

溝 27 号 (I 地区 SD1027) (第 462・597 図)

I - 3・4・6・7・12 区、f ~ q 15 ~ 17 グリッドに位置し、I 地区のほぼ中央を SD1028 と並行して南北に走る。北は調査区外に延び、南は攪乱に切られ、以南では検出されない。検出長 56.1 m 幅 160 cm 深度 56cm を測り、主軸は N10° W を向く。断面は U 字状または逆台形状で、埋土は 4 層に分層できる。今回 I - 12 区では西部北端、f・g 16・17 グリッドに位置する。検出長 2.2 m 幅 126cm 深度 49cm を測り、主軸は N5° W を向く。今回は検出距離が短く記録を残せなかったため、断面図を掲載していない。

遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・椀、青磁（龍泉）碗、が出土。

1354 は土師質土器皿。回転台成形だが、焼成不良により磨耗し底部の切離し技法不明。

1355・1356 は瓦器椀の上半部で、ともに口縁外面のヨコナデ弱く狭い。器壁厚め。1355 は口縁が内彎。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味。胎土にチャートを含むことから在地産瓦器椀の可能性あり。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 ~ Ⅳ - 1 期頃（13 世紀前葉 ~ 中葉）に併行か。1356 は内面は横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅳ - 2 期（13 世紀後葉）に相当。

1357 は青磁碗で、底部を欠く。内面にヘラ片彫により草花文を施文。釉は使用により部分的に光沢を失う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗 I - 2・b 類（12 世紀中頃 ~ 後半）に相当。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられるが 13 世紀前半がピークであると考えられる。

溝 28 号 (I 地区 SD1028) (第 462・586 図)

I - 3・4・6・7・12 区、c ~ q 14 ~ 17 グリッドに位置し、I 地区のほぼ中央を SD1027 と並行して南北に走る。北は調査区外に延び、南は攪乱に切られ以南では検出されない。検出長 70.4 m 幅 310cm 深度 124cm を測り、主軸は N9° W を向く。断面は逆台形状で、埋土は 10 層に分層できる。今回 I - 12 区では西部北端、c ~ g 16・17 グリッドに位置する。検出長 16.0 m 幅 290cm 深度 30cm を測り、主軸は N10° W を向く。断面は浅いレンズ状で、緩い段をもつ。埋土は 2 層に分層できる。

遺物はこれまでに、弥生土器片・甕、須恵器杯、土師質土器片・椀・皿・杯・羽釜・鍋・把手（甑か）・土錘、須恵質土器捏鉢・壺・甕・貯蔵具、瓦器椀・皿、瓦質土器杯・羽釜・捏鉢・甕・瓦、備前陶器甕・壺・播鉢、常滑甕、青磁碗、白磁碗、近世陶磁、須恵質平瓦、鉄製品片・釘・鉄滓、滑石製温石か・砂岩製叩石・被熱砂岩・片岩礫、が出土。今回は、土師質土器片、瓦質瓦、が出土しているが、今回は実測可能な遺物はなかった。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀後半 ~ 13 世紀代とみられる。

溝 48 号 (I 地区 SD1048) (第 462・589・595・596・598 ~ 603 図)

I - 7・12 区、f ~ i 17 ~ 20 グリッドに位置する。I - 7 区から南に延び、I - 12 区でコの字形に屈曲し、I - 7 区 SD1051 と繋がる。西辺 25.2 m 南辺 13.2 m 東辺 21.5 m (SD1051 含む) で全長 59.9 m 幅 110cm 深度 47cm を測る。今回 I - 12 区では西部北側、f ~ i 17 ~ 20 グリッドに位置する。検出長 32.2 m 幅 110cm 深度 47cm を測り、南北主軸は N7° W、東西主軸は N87° E を向く。断面は U 字状で、埋土は 3 層に分層できる。底面は南西隅に向けて低下するが、この部分の滞水を排水する施設は検出さ

れないことから屋敷地の区画を目的とした溝と考えられる。

今回の遺物は、黒色土器椀（B類か）、須恵器供膳具・杯身・甕、土師質土器片・供膳具・皿（ともに回転糸切り・ユビオサエほか）・杯（回転糸切り・ユビオサエほか）・煮炊具・羽釜・鍋・土錘・鉢・火鉢か、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器捏鉢・皿（回転糸切り）、常滑甕か、中世陶器甕、青磁（龍泉）碗（蓮弁）・皿、白磁碗（口禿ほか）、鞆羽口・鉄釘か・スラグ・鉄滓（椀形ほか）、壁土、砂岩製砥石・凝灰岩製砥石、が出土。

埋土上位から1362・1363・1367・1375・1381・1387・1388・1394・1396・1397・1405～1407・1410・1412・1415・1422・1426・1430・1433～1435・1439～1442・1444・1449・1453・1455・1456・1462・1463・1478・1483・1492・1499・1511、中位から1369・1383・1413・1424・1428・1437・1464・1465・1473・1489・1503・1508、下位から1419・1423・1454・1460・1507・、遺構底部から1398・1421・1452・1457・1458・1461・1487・1490・1505・1512が出土。

1358～1424は回転台成形の土師質土器皿（底部のみ残存の個体については杯の可能性もあり）で、底部外面に回転糸切り痕を残す。板目痕を伴うものは1361・1364・1365・1369・1370・1373・1375・1381・1382・1387～1389・1391・1392・1395・1398・1400・1404・1405・1407・1409・1411・1413～1416・1418・1424の28点である。

焼成良好なものは1358・1359・1370・1384・1390・1394・1397・1400・1401・1405・1407・1408の12点で、本遺構出土土師皿の2割弱に過ぎない。他は焼成不良品である。

胎土が粗いものは1365・1376・1423である。チャートを含むものは1362・1363・1365・1369・1371・1376・1380・1387～1389・1392・1393・1400・1402・1404・1405・1409・1410・1413～1415・1419・1421、在地花崗岩を含むものは1361・1382・1386・1423、砂岩を含むものは1391・1402で、これらは在地産が確実視される。

1368は底部中央の器壁がきわめて薄い。1375は低平な器形で、歪み大きい。1394は胎土きわめて精良。1397は復元口径6.5cmの小型品であるが、比較的器高が高い。焼成良好で胎土きわめて精良。1405は口径6.4cmの小型品。1407は糸切りの痕跡からみて切離しの途中で回転が停止したものと考えられる。焼成良好だが底部に焼歪みによる亀裂が生じる。1422は全体的に器壁が厚い。磨耗著しく回転糸切り痕不明瞭。

1425は非回転台成形の土師質土器皿。体部の立ち上がりが小さく低平な器形をもつ。底部外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。京都系土師皿の在地模倣品であろう。

1426～1481は回転台成形の土師質土器杯。1426～1453が箱形の器形に近いもの、1454～1477が口径に比して底径が小さく椀形の器形をもつものである。底部が残存する個体はすべて回転糸切り痕を残す。

板目痕を伴うものは1426・1430・1434・1435・1438・1439・1449・1452・1454・1456～1458・1460・1462・1469・1478・1479の17点で、約3割である。

焼成良好なものは1426・1443・1448・1449・1451・1455・1462・1474・1479・1480の10点で、皿と同じく2割弱の比率である。

胎土が粗いものはみられないが、精良なものは1427・1439・1453・1456・1462である。胎土にチャートを含むものは1427・1430・1435・1439・1441・1443・1444・1448・1450・1452・1454・1456～1458・1461・1463・1465・1467・1477・1480・1481の21点、砂岩あるいは泥岩を含むものは1437（5

mm大の砂岩)・1455・1470、在地花崗岩を含むもの1452・1465である。

1439は底部に焼歪みとみられる亀裂あり。1449は内外面に部分的に炭素付着。1454は見込みに指頭圧痕を確認。1455は底部外面の中央部がわずかに突出し擦痕または弱い板目痕が確認できる。口縁内外面に部分的に炭素付着。1474は焼成良好だが器表面に炭素付着。1476は体部外面に回転ナデのち指頭圧痕を残す。回転台から外す際の指掛け痕か。1479は焼成堅緻。1481は底部中央の器壁が薄く径約1cmの破孔を伴うが、人為的なものかは不明。なお1458は胎土分析を行い(胎土分析試料No.37)、実体顕微鏡観察で少量の黒雲母と微量のチャートが確認された。

1482は瓦器皿で、底部のほとんどを欠く。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。和泉型瓦器Ⅳ期頃か。1483は完形の瓦質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗するが、還元炎焼成され器面に炭素を吸着させる。胎土は粗く、砂岩・泥岩を含む。ヘラミガキは確認できない。

1484～1500は瓦器椀である。1484は上部。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は口縁内面～外面が良好、体部内面は不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に相当。1485は底部を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良。胎土にチャートを含むとみられるが不確定。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。1486は上半部。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期(13世紀前葉～中葉)に相当。

1487はほぼ完形。低平で腰が張った器形。口縁外面は2段でヨコナデする。高台は径が大きく、断面は低平な逆三角形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状のヘラミガキを施すが、焼成不良により不明瞭。炭素吸着は内面の一部～口縁外面が良好なほかは重焼により吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に位置付けられるが、胎土に泥岩とチャートを含むことから在地産の可能性ある。本品は胎土を行い(胎土分析試料No.9)、蛍光X線分析では和泉型の領域に含まれるが、実体顕微鏡観察では絹雲母が確認された。

1488～1491は和泉型瓦器椀Ⅳ-1期(13世紀中葉)に相当する。1488は上半部。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良。1489は上半部。焼成不良により磨耗・剥離著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良。胎土が粗くチャートを含むことから在地産の疑いあり。1490は高台断面が低平な逆三角形状を呈する。体部外面はユビオサエにより凹凸が激しい。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みは板ナデのち螺旋状ヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成共に良好。1491は内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。

1492～1500は和泉型瓦器椀Ⅳ-2期(13世紀後葉)に相当する。1492は復元口径12.1cmの小型品であるが、小片のため過小復元の可能性あり。高台は幅広だが、断面はきわめて低平で退化著しい。口縁～体部内面に螺旋状ヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好。1493は上半部で、復元口径約12.6cmの小型品。内面にごく粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。1494は底部を欠く。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好で堅緻。炭素吸着は良好で部分的に金属光沢をもつ。無高台ならⅣ-3期まで下る可能性をもつ。1495は上半部である。内面に粗い横位または螺旋状のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。1496は上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。内面～口縁外面にかけて炭素吸着良好だが、体部外面は重焼により吸着なし。1497は上半部。復元口径約12.4cmの小型品。内面にごく粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗するが、炭素吸着良好。

1498 は上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好だが、器面にハゼ痕が多い。1499 は器形が大きく歪む。高台は小さく低平で、退化著しい。口縁～体部内面に螺旋状ヘラミガキを途切れ気味に施す。焼成・炭素吸着ともに良好で、部分的に金属光沢をもつ。1500 は上半部。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。内面～口縁外面に炭素吸着良好で、重焼により体部外面は吸着なし。焼成良好。

1501 は白磁碗の上半部。口縁は外反し、端部の釉を掻き取って口禿に仕上げる。大宰府分類白磁碗Ⅷ類（13世紀中頃～14世紀初頭）に相当。1502 は白磁碗の上部片。口縁端部はわずかに外反。外面に粗い貫入とわずかな釉とびを伴う。大宰府分類白磁碗Ⅴ類（11世紀後半～12世紀前半）か。1503 は青磁碗の上部片。外面にヘラ片彫によって蓮弁文を施文する。鎬の有無は不明。釉の透明度高く、外面に粗い貫入あり。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類（13世紀初頭～前半）に相当する。

1504・1505 は紀伊型土師質土器鐔付鍋の口縁部である。1504 は端部を内方に短く折り返す。胎土は粗く、結晶片岩を含む。概ね13世紀代に位置付けられる。1505 は口縁端部を内方に折り返す。胎土は粗く、結晶片岩を含む。口縁の形状から14世紀代に下る可能性がある。

1506 は常滑焼甕の口縁部片。端部は上方に大きく、下方に小さく拡張していることから、中野編年常滑焼6a型式に相当し、13世紀3四半期の年代が与えられる。1507 は常滑焼甕の体部片である。ほぼ平らな破片で、大型甕の体部下位にあたるとみられる。外面は縦位の板ナデのち長格子の押印文タタキを施す。焼成時のハゼ痕がみられる。内面はユビオサエのち横位の板ナデを施す。1508 は常滑焼甕の体部片である。外面に升目状の押印文タタキを施す。

1509 は瓦質土器捏鉢の上半部。口縁は肥厚し、端部に強いヨコナデを施す。体部外面に横位に連続する指頭圧痕を残す。焼成不良により摩耗・剥離著しい。炭素吸着良好。胎土に砂岩を含むとみられるが不確定。

1510～1512 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片で、いずれも森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。1510 は口縁端部をわずかに上方に拡張。口縁外面に重焼によりわずかに炭素付着。1511 は口縁端部をわずかに拡張する。内面に回転ナデのち斜位のユビナデを施す。1512 は口縁端部を上方に拡張する。口縁外面に重焼による自然釉付着。回転台成形のち体部外面にユビオサエ、体部内面に斜位のユビナデを施す。体部内面下半、使用により磨耗。胎土にチャートを含む。1513 は東播系須恵質土器捏鉢の下部である。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用により磨耗。

1514 は小型品の土師質管状土鉢。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。1515 は土師質管状土鉢。焼成不良により磨耗。胎土に砂岩を含む。

1516 は瓦質土器火鉢である。口径38.9cm器高10.4cm（脚部除いて7.2cm）、平底で三脚が取り付く浅鉢形と考えられる。体部はやや内彎し、口縁端部はわずかに肥厚する。体部内面はヨコハケ、見込みは円周に沿ってハケを施す。外面の底体部境には横位のケズリを施し、この点は京都・奈良産と共通する。

底部外面の調整は粗雑で凹凸が激しい。凹部には禾本科植物の圧痕がみられる。当初ランダムに施した粗いハケではないかと考えていたが、この痕跡が動いていないことから、当て具に藁状の植物を巻き付けたものを原体として押し当てた圧痕と推測される。京都・奈良では底部外面に離れ砂や粉殻痕をもつことから、本品のような圧痕をもつものはきわめて特異な調整といえる。同じ圧痕は底部内面にも観察され、こちらはハケによりナデ消している。

脚部は古代の土器にみられる把手に近似した形状で、下部は外方に彎曲させる。装飾は施さない。本

体側にヘラ先による斜格子状の刻みを施したのちに脚部を貼り付けるが、この点は京都・奈良と共通する。

胎土は概ね精良で、砂岩を含むとみられるが不確定。表層および破面は酸化炎焼成しており、胎土中央部は黒色化することから、破損後に二次被熱したもので本来は瓦質焼成品であったと考えてよい。形態は12～13世紀代の瓦質火鉢に近似するが、京都・奈良産のものと同調整・胎土が異なることから、その模倣品であろうと推測される。

1517～1520は鉄釘とみられる。1517は上部が彎曲し、下半部を欠く。1518は頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。1519は頂部をL字状に折り曲げ、頭部を作る。先端部を欠く。1520はくの字に屈曲し、両端を欠く。1521は断面方形の棒状鉄製品で両端を欠く。鉄釘であろうか。1522は凝灰岩製の砥石。上端部は自然面、下端は欠損し、4面を使用する。部分的に敲打痕を残す。1523は砂岩礫を用いた砥石。5面を使用するが、部分的に摩滅や微細な擦痕が確認できる程度で使用痕に乏しい。

また、本遺構からは鉄滓・スラグが41点（2027～2067）出土しており、他の遺構と比較して数が多い。

本遺構の年代は、他の遺構との切り合い関係からみて最も新しく構築されたものである。和泉型瓦器椀がⅣ-1～2期を主体とすること、口禿の白磁が出土することから13世紀後半にピークがあり、概ね14世紀初頭まで継続したものと考えられる。

溝 57号（Ⅰ地区 SD1057）（第462・590・604・606図）

Ⅰ-9・12区、h～n 3・4グリッドに位置する。北は調査区外に延び、以北では検出されない。検出長32.0m幅110cm深度42cmを測る。南北に直進する溝で、主軸はN4°Wを向く。断面は逆台形状または船底状で、埋土は4層に分層できる。今回Ⅰ-12区では東部北側、h～l 4グリッドに位置する。検出長17.0m幅84cm深度20cmを測り、主軸はN6°Wを向く。埋土は1層である。

遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・杯（ともに回転糸切りほか）・鍋・土錘、瓦器椀、白磁片、鉄滓、砂岩製叩石・砂岩礫、が出土。鉄滓は11点（2068～2078）出土。

埋土上位から1524・1528、中位から1525・1527が出土。

1524は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗。1525～1527は回転台成形の土師質土器杯である。1525は底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗。1526は上半部である。焼成不良により磨耗。1527は底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートと在地花崗岩を含む。

1528は瓦器椀。高台断面はきわめて低平で、幅広の逆三角形状を呈する。体部内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し、見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。胎土は粗く、花崗岩を含むとみられる。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当。1529は紀伊型土師質土器鍔付鍋の口縁部片。端部を内上方に拡張。胎土は粗く、結晶片岩とチャートを含む。概ね13世紀代。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半に位置付けられる。

溝 59号（Ⅰ地区 SD1059）（第462・591・605・607図）

Ⅰ-9・10・12区、 $\delta \cdot \varepsilon - IV$ g～b 4・5グリッドに位置する。北は10区でSD1056に切られる。検出長76.8m幅68cm深度39cmを測る。南北に直進する溝で、主軸はN3°Wを向く。今回Ⅰ-12区では東部北側、g～l 4・5グリッドに位置する。検出長27.5m幅66cm深度30cmを測り、主軸はN4°W

を向く。断面は船底状またはU字状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は、須恵器片・甕、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り・ユビオサエ）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀・皿、瓦質土器片・羽釜、常滑甕、青磁（龍泉）碗、鉄滓（椀形ほか）、砂岩製叩石・砂岩礫・石灰岩礫、が出土。

埋土上位から1531・1532・1538・1541・1544が出土。

1530は土師質土器の皿、1531～1533は杯である。いずれも回転台成形で、回転糸切り痕を残す。1533を除き焼成不良により磨耗。1532は板目痕を残す。胎土にチャートを含み、2～5mm大の含有物が目立つ。1533は焼成良好。胎土にチャートおよび砂岩とみられる粒子を含む。

1534・1535は瓦器皿。1534は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し、見込みのヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期前半頃。1535は低平な器形で、底部器壁は厚い。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、見込みのヘラミガキは不明瞭。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は内面不良、外面吸着なし。酸化炎焼成気味。胎土は粗めでチャートを含む。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃。

1536～1544は瓦器椀である。1536・1537は和泉型瓦器椀Ⅲ－2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。ともに底部を欠く。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。胎土は粗めで、砂岩・チャートを含む。1537はやや腰が張った器形。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好で胎土も黒化。

1538・1539は和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当する。1538は高台断面がやや低い逆台形状を呈し、底径は小さい。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、見込みは平行状とみられるヘラミガキを施す。使用による手ズレによって部分的に磨耗する。焼成良好。炭素吸着は外面～口縁内面が良好で、体部内面以下不良。1539は上半部。器壁はやや厚い。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できず内面の調整は不明。炭素吸着は良好だが、胎土も黒化する。

1540は上半部。焼成不良により磨耗・剥離著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好だが、胎土も黒化する。胎土に砂岩らしき粒子を含むが不確定。和泉型瓦器椀Ⅳ－1期（13世紀中葉）に相当するが、胎土・焼成から模倣品の疑いあり。1541は口縁部。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期（13世紀前葉～中葉）頃とみられる。

1542～1544は模倣品とみられる。1542は上半部。口縁のヨコナデにより内面に稜をつくる。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で、外面は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀の模倣品とみられるが在地産かは不確定。

1543は完形品。口縁の歪み大きく、口径は13.0～14.2cmを測る。腰が張る。高台の貼り付けは粗雑で、断面は幅広で低平な逆台形状を呈する。全体的に器壁は厚く底部で6mmに達するが、口縁は内外面からのヨコナデにより細る。体部内面に横位のヘラミガキを施すが、見込みのヘラミガキは確認できない。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着はやや不良で、ムラがある。胎土は粗めで最大6mmの含有物がみられ、チャートを含む。在地産瓦器椀とみられる。

1544は底部を欠く。やや腰が張った器形。内面は横位または螺旋状のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良でムラあり。胎土に泥岩を含む。在地産瓦器椀の可能性があり、和泉型瓦器椀Ⅲ－3期頃に併行か。

1545 は瓦質土器羽釜の上部。小片のため復元径は不正確。鋳部は貼り付けで作り、断面は低い台形状を呈する。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。胎土は精良である。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられ、概ね 13 世紀代に位置付けられる。

1546 は東播系須恵質土器捏鉢の底部である。底部外面に回転糸切り痕を残す。見込みは使用により著しく磨耗。

1547・1548 は土師質管状土錘。焼成不良により磨耗。1548 の断面は楕円形を呈し、胎土に砂岩を含む。遺構の年代は出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 62 号 (I 地区 SD1062) (第 462・592・608 図)

I - 12 区東部南側、h ~ j 6・7 グリッドに位置する。全長 13.0 m 幅 24cm 深度 6cm を測る。南北主軸の溝で方位は N7° W ~ N53° W を向くが、北半が北西方向に彎曲する。断面は浅いレンズ状で、埋土は 1 層。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・土錘、須恵質土器片・捏鉢、瓦器片、が出土。

1549 は土師質管状土錘。焼成良好。胎土精良。1550 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁は上方に拡張し内彎する。口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年第 II 期第 2 段階(12 世紀末 ~ 13 世紀初頭)に相当。

溝 63 号 (I 地区 SD1063) (第 462・590・609 図)

I - 12 区中央部、h ~ k 4 グリッドに位置する。北側を攪乱に切られ、以北には延びない。検出長 11.4 m 幅 40cm 深度 13cm を測る。南北に直進する溝で、主軸は N5° W を向く。断面はレンズ状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器供膳具(回転糸切り)・杯・煮炊具・鍋・土錘・平瓦、瓦器片・椀、瓦質平瓦、スラグ・鉄滓、が出土。

1551 は瓦器椀の上半部。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良で、胎土は酸化炎焼成する。胎土はやや粗めで、チャートを含む。和泉型瓦器椀 III - 2 ~ 3 期(12 世紀末 ~ 13 世紀前葉)に相当。

1552 は土師質土器鍋の口縁部片。内面はヨコハケを施す。胎土に花崗岩を含むとみられるが、不確定。

1553 は瓦質平瓦。焼成不良により磨耗著しく、不明瞭ながら凹面に布目痕、凸面に縄蓆文を残す。炭素吸着なく酸化炎焼成気味。胎土にチャートを含む。

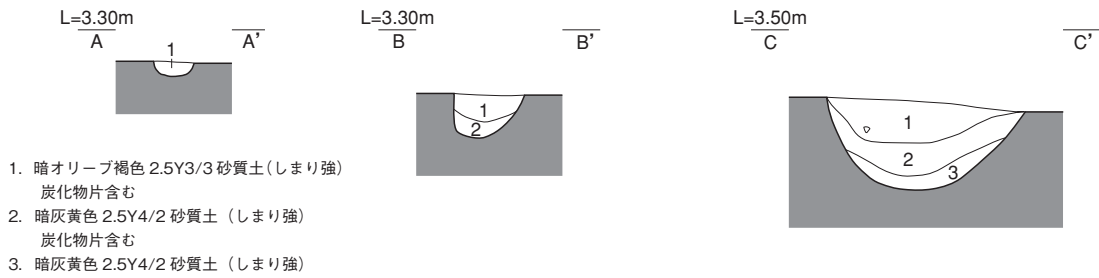
概ね 13 世紀代だが、13 世紀後半の SD1057 に切られていることから 13 世紀前半頃に位置付けられる。

溝 64 号 (I 地区 SD1064) (第 462・593 図)

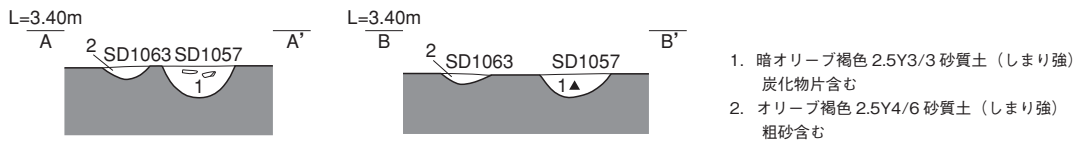
I - 12 区中央部、h ~ j 3 グリッドに位置する。北側を攪乱に切られ、以北には延びない。検出長 11.2 m 幅 66cm 深度 21cm を測る。南北に直進する溝で、主軸は N6° W を向く。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土。

溝 65 号 (I 地区 SD1065) (第 462・594・614 図)

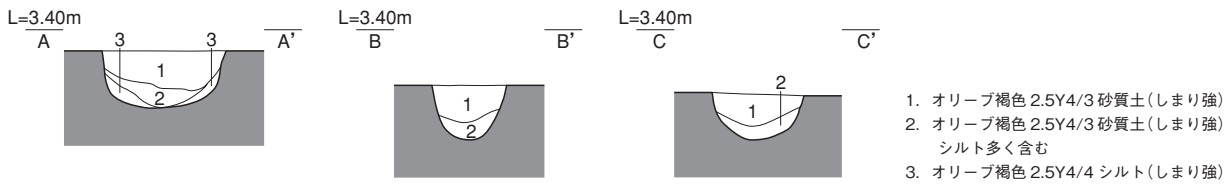
I - 12 区中央部、g ~ j 1・2 グリッドに位置する。全長 15.8 m 幅 56cm 深度 7cm を測る。SD1066 と並行して南北に直進する溝で、主軸は N13° W を向く。断面は浅いレンズ状で、埋土は 1 層である。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・煮炊具、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、が出土。



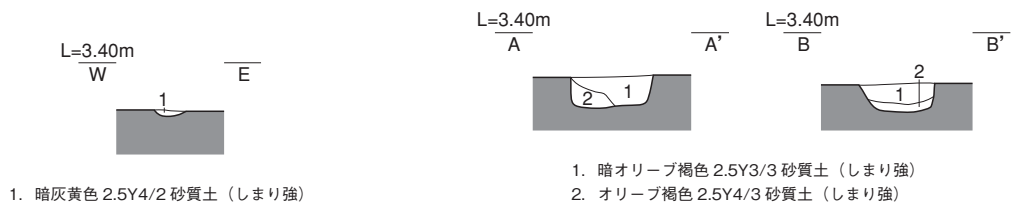
第 589 図 I - 12 区 SD1048 遺構断面図



第 590 図 I - 12 区 SD1057・1063 遺構断面図

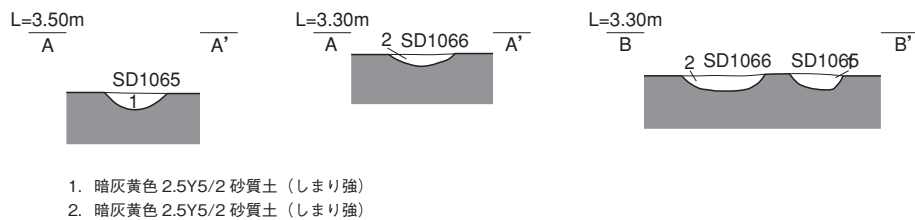


第 591 図 I - 12 区 SD1059 遺構断面図



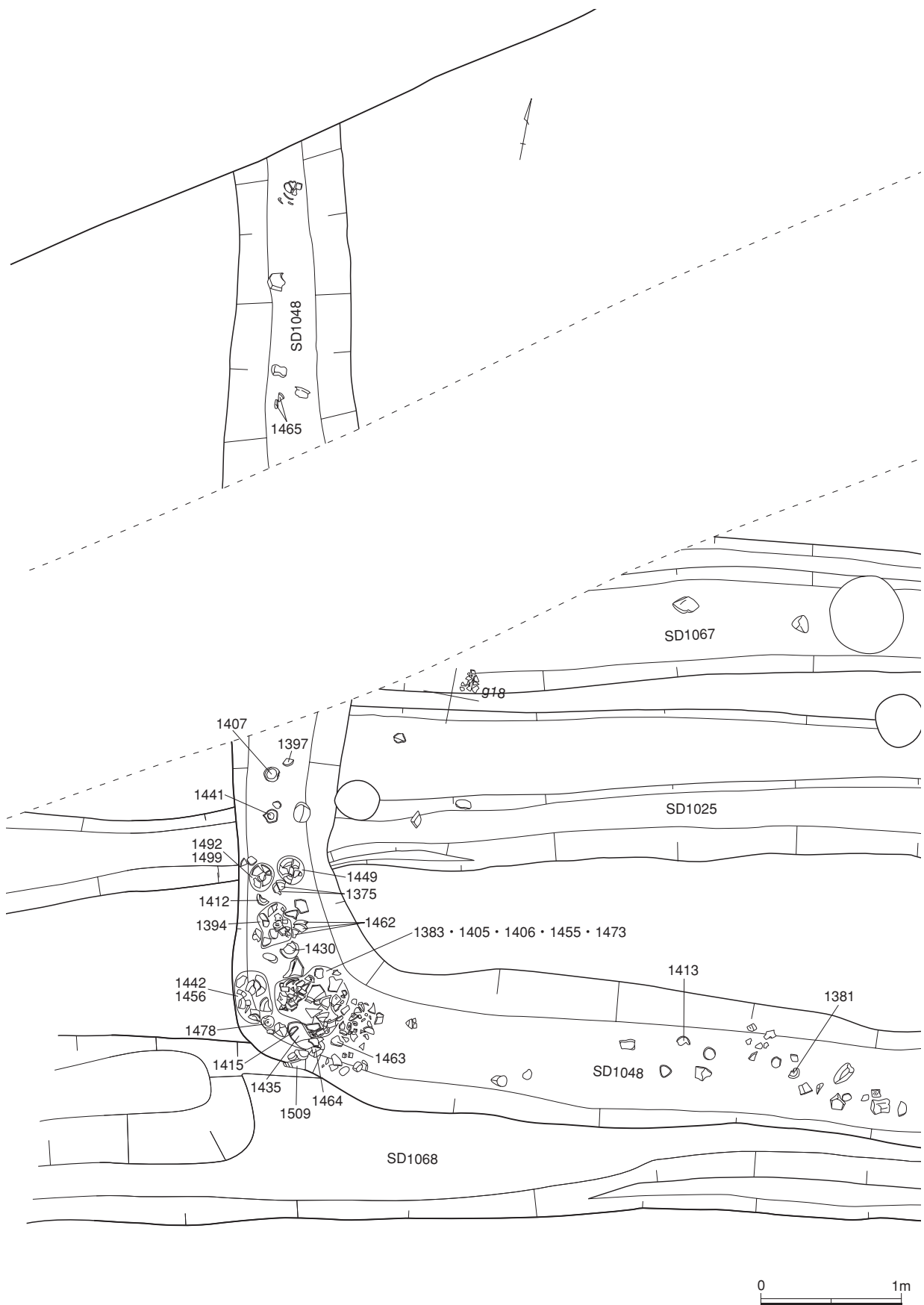
第 592 図 I - 12 区 SD1062 遺構断面図

第 593 図 I - 12 区 SD1064 遺構断面図

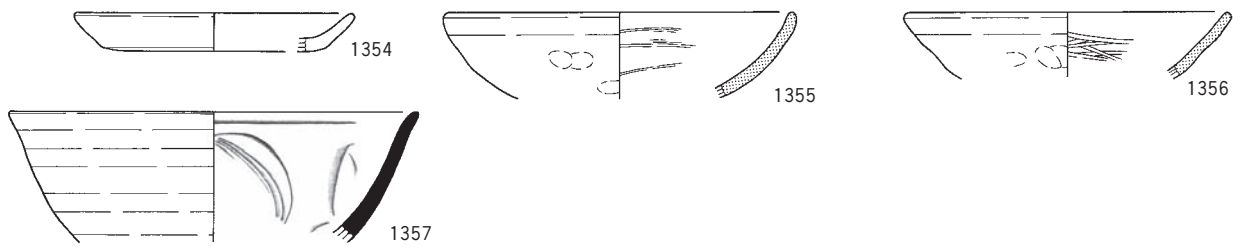


第 594 図 I - 12 区 SD1065・1066 遺構断面図

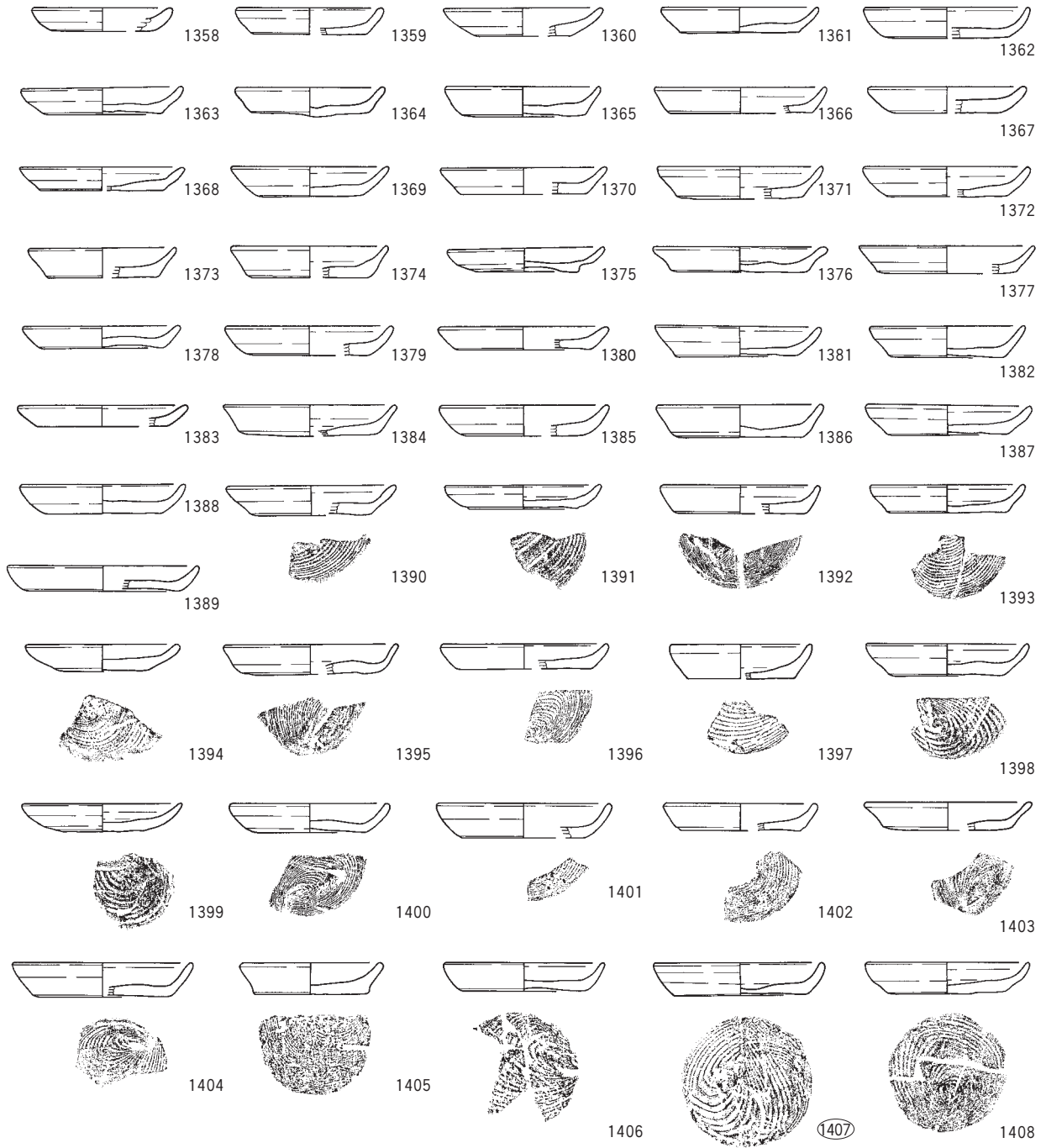




第 595 图 I - 12 区 SD1025 · 1048 · 1067 · 1068 遺物出土平面図 (1)

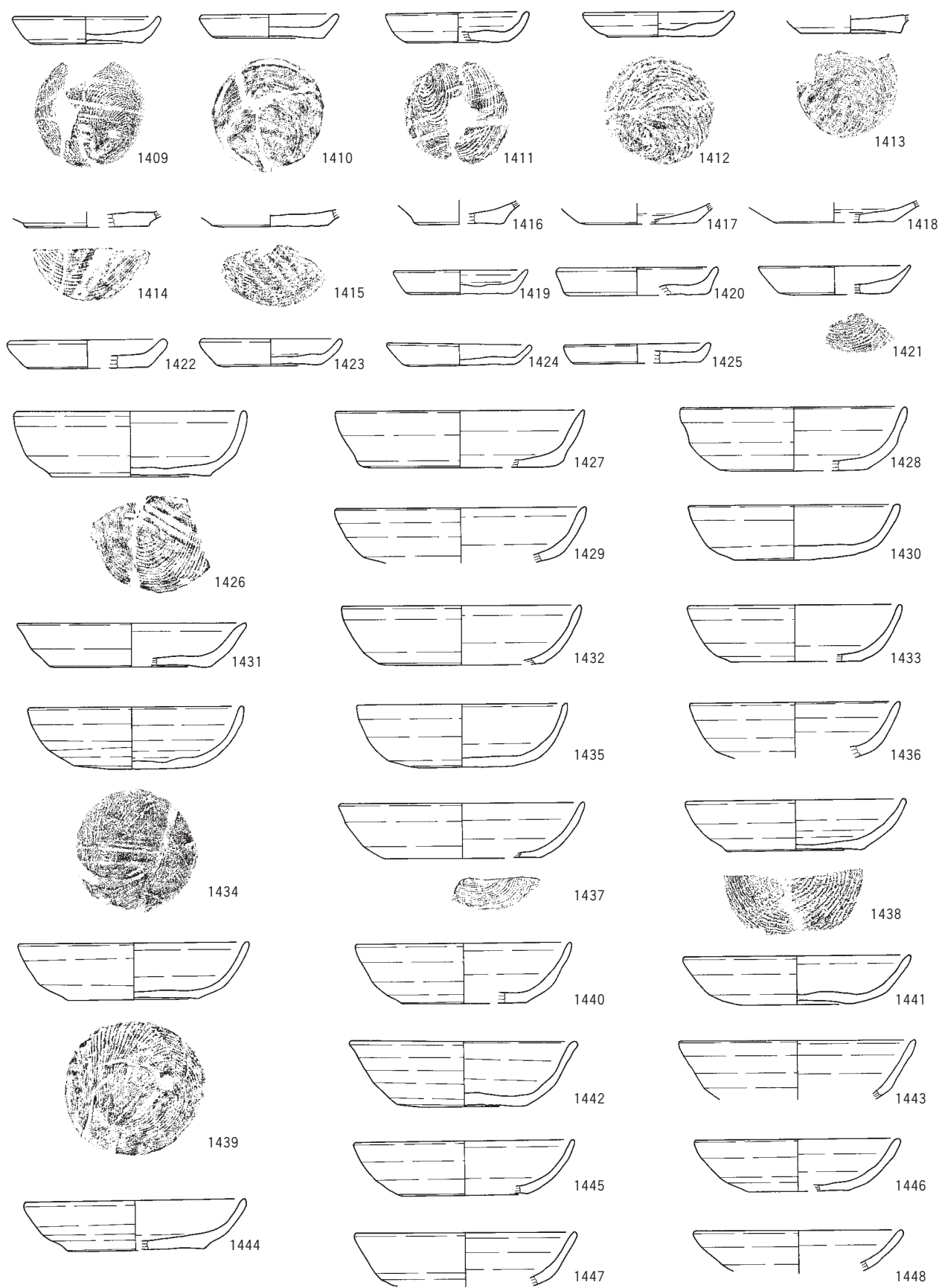


第597图 I-12区 SD1027遺物実測図

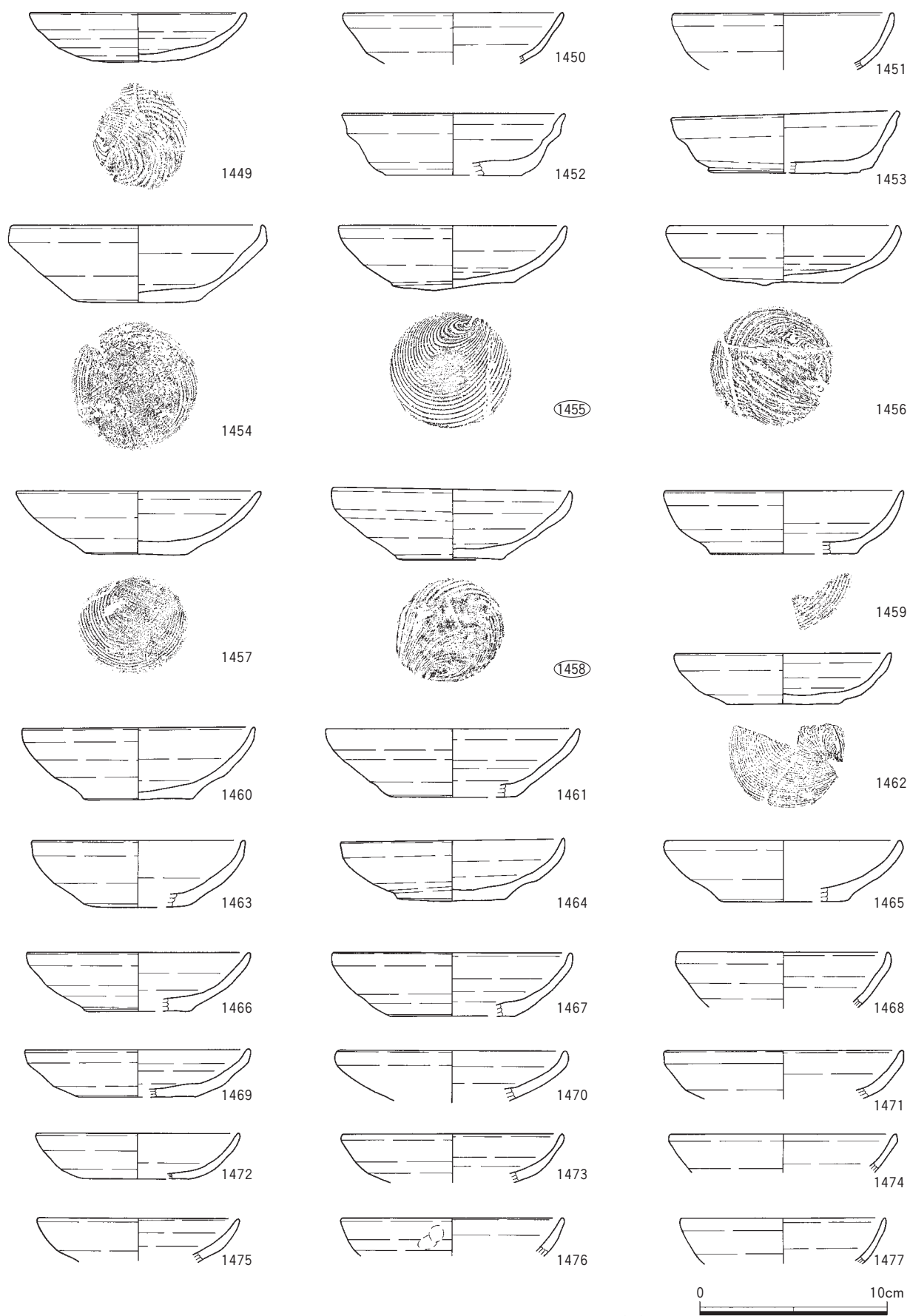


第598图 I-12区 SD1048遺物実測図 (1)

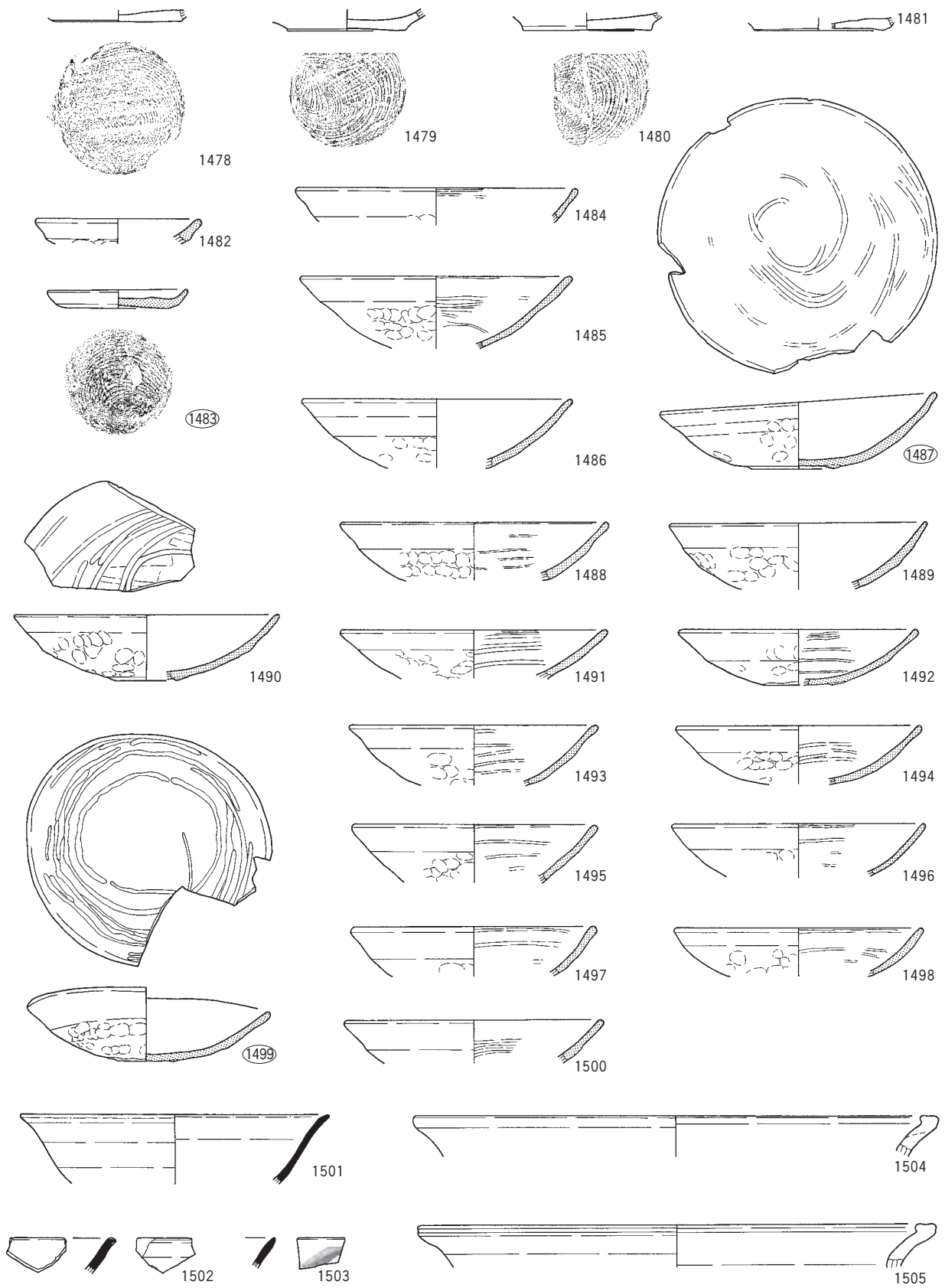




第599图 I-12区 SD1048遺物実測図(2)

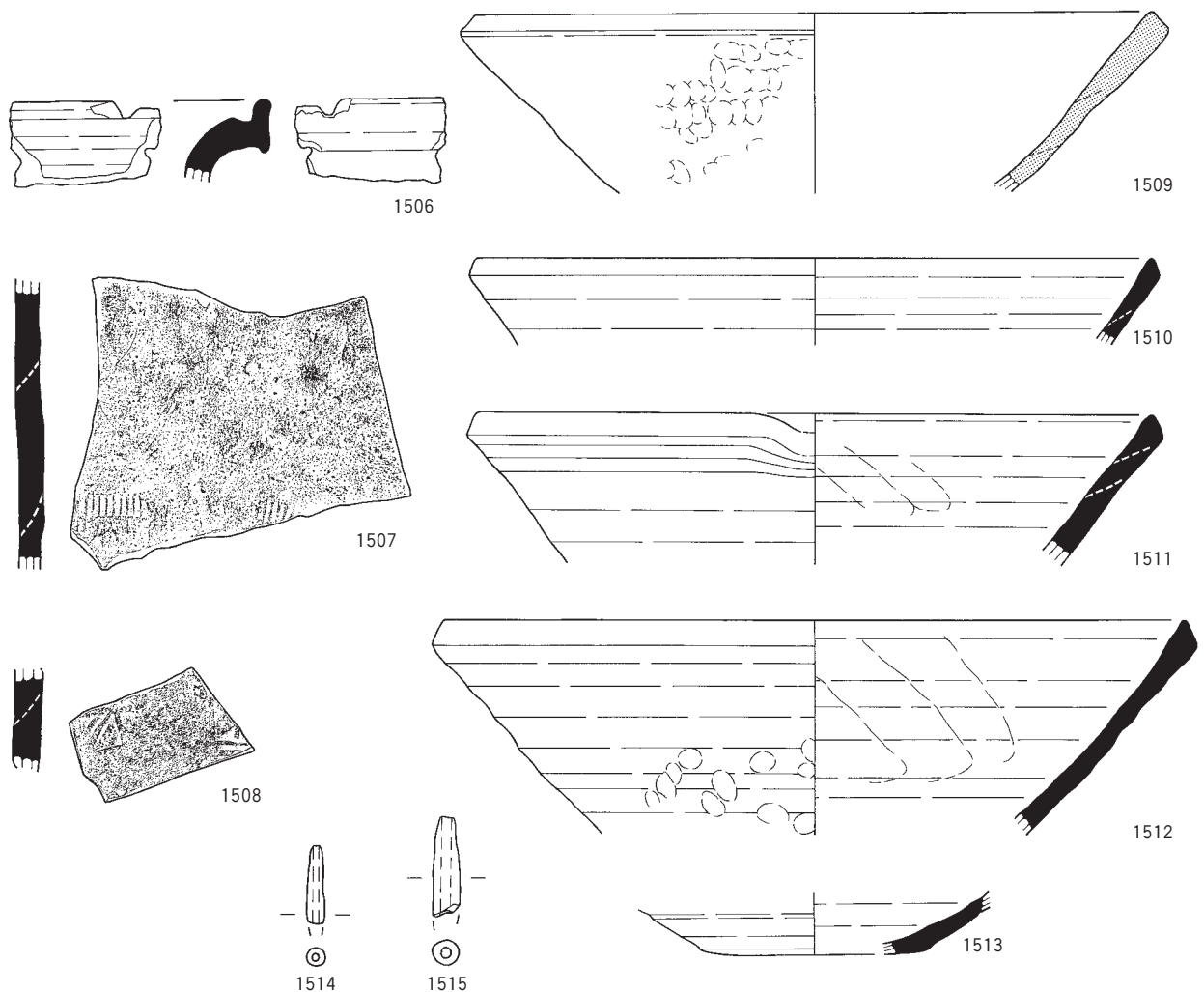


第600图 I-12区 SD1048遺物実測図(3)



第601図 I-12区 SD1048遺物実測図(4)

0 10cm



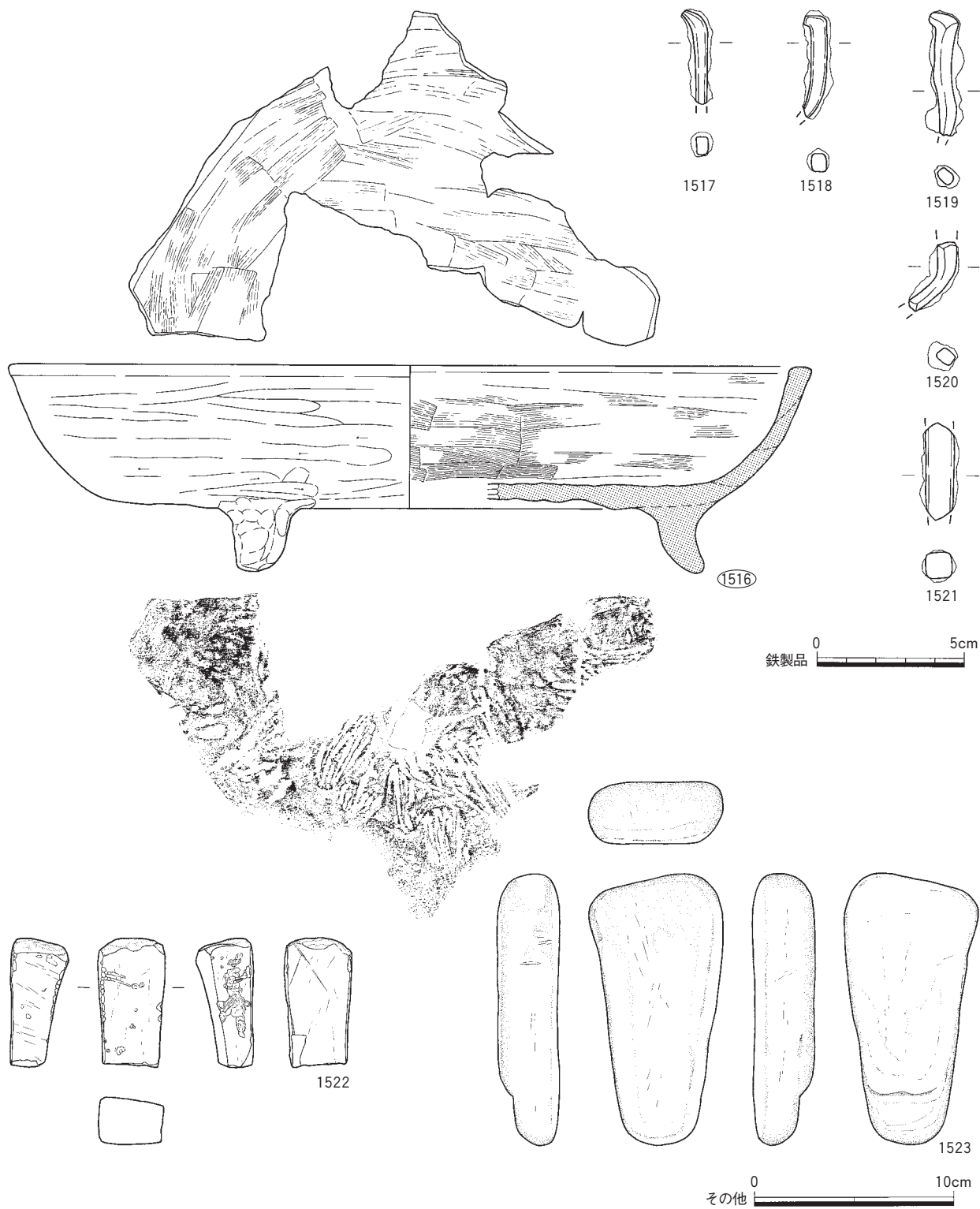
第602図 I-12区 SD1048遺物実測図(5)

1554 は瓦器碗の底部。高台は径が大きく、断面は小さな逆台形状で外方に踏ん張る。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成する。高台の形状から和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)とみられる。

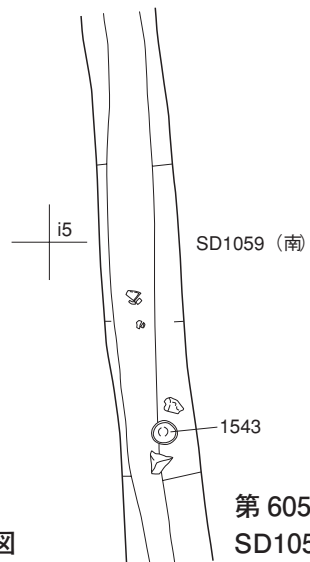
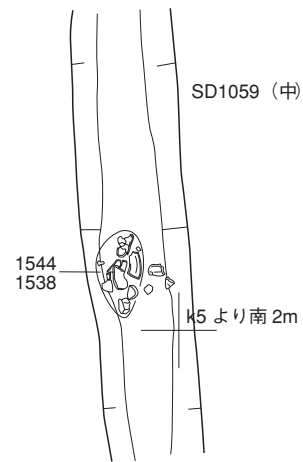
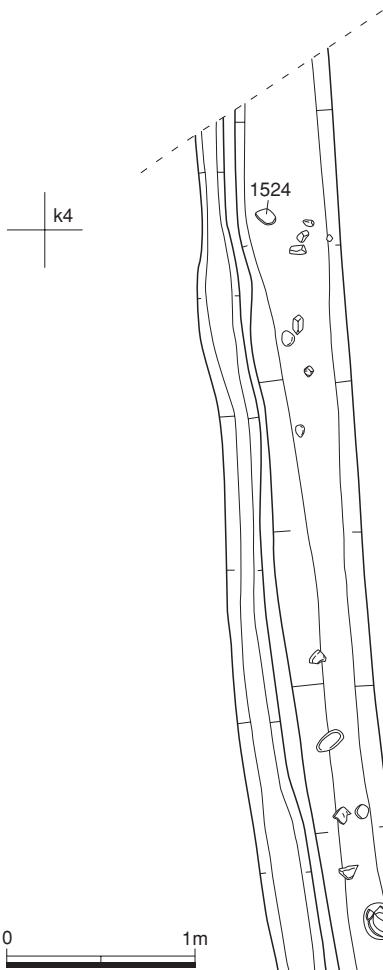
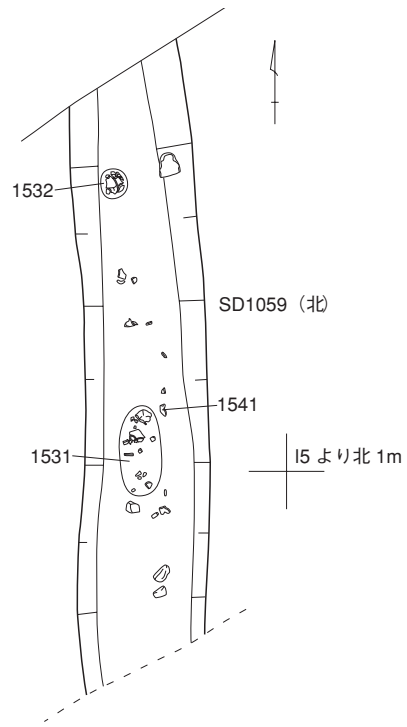
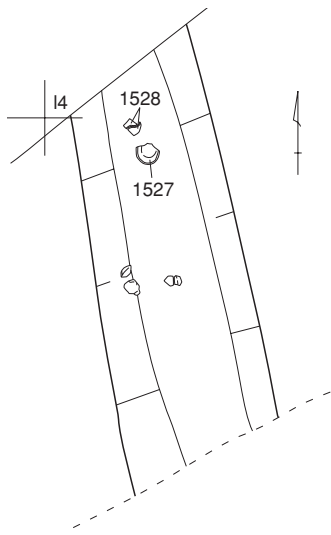
溝66号(I地区 SD1066)(第462・594・615図)

I-12区中央部、g~j 1・2グリッドに位置する。攪乱に切られ、北側は調査区外に延びるが、I-7区では検出していない。検出長15.2m幅44cm深度8cmを測る。SD1065と並行して南北に直進する溝で、主軸はN14°Wを向く。断面は浅いレンズ状で、埋土は1層。遺物は、土師質土器供膳具・杯(回転糸切り)、瓦器碗・白磁片、が出土。

1555 は瓦器碗の底部である。高台は断面逆三角形状で、径が大きく高さを保つ。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面不良、外面やや不良で、胎土は酸化炎焼成する。高台の形状から和泉型瓦器碗Ⅲ-2期(12世紀末~13世紀初頭)前後とみられる。

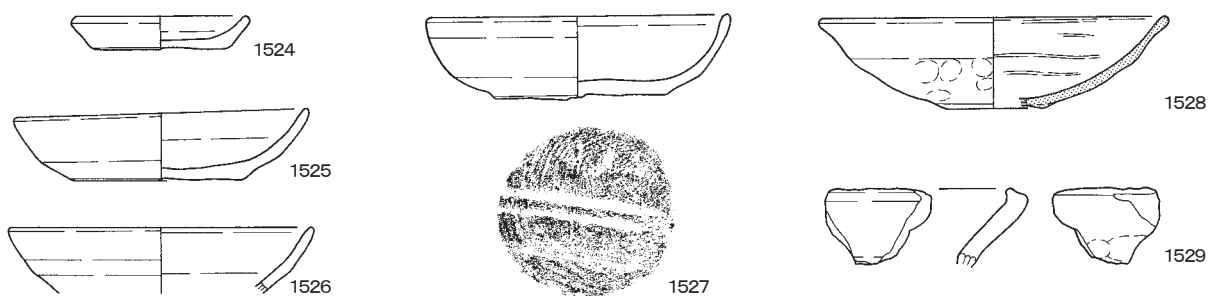


第603図 I-12区 SD1048遺物実測図(6)

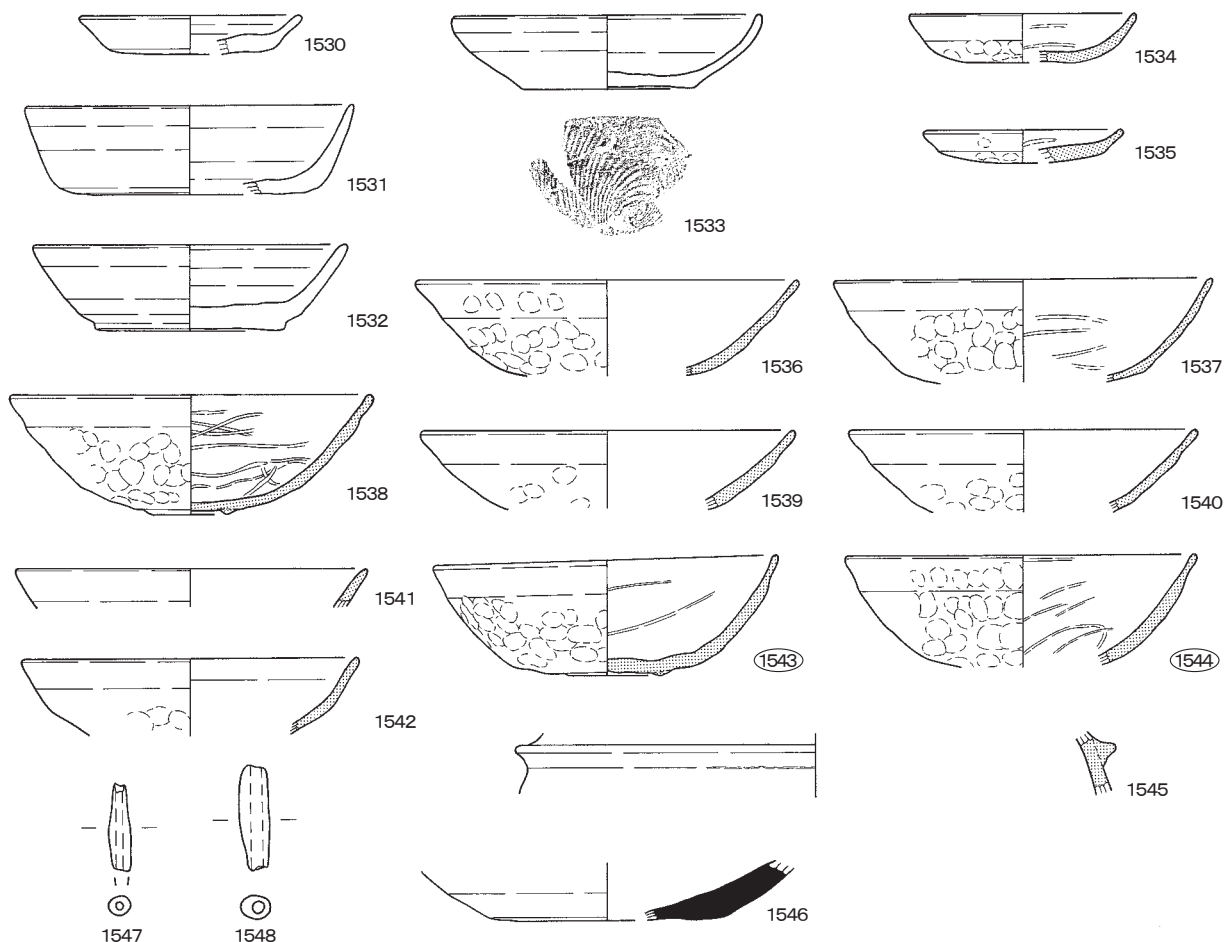


第604図 I-12区
SD1057 遺物出土平面図

第605図 I-12区
SD1059 遺物出土平面図



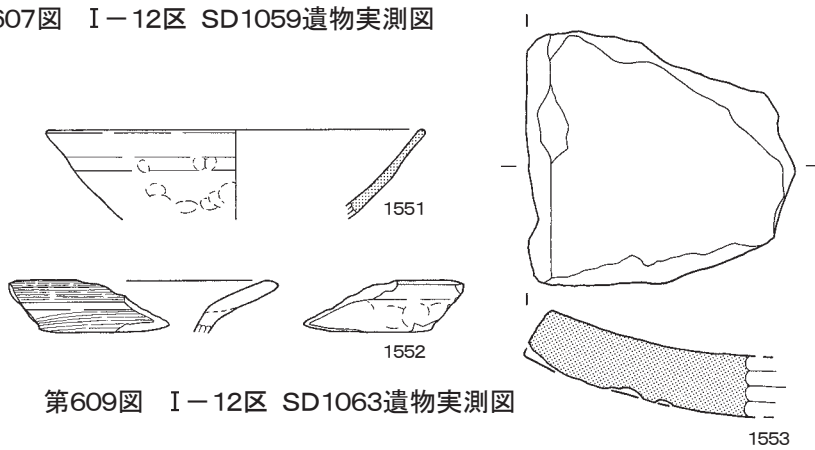
第606图 I-12区 SD1057遺物実測図



第607图 I-12区 SD1059遺物実測図



第608图 I-12区
SD1062遺物実測図



第609图 I-12区 SD1063遺物実測図

溝 67 号 (I 地区 SD1067) (第 462・595・596・610・616～618 図)

I - 12 区西部、f・g 18～4 グリッドに位置する。東側を SD1027 と攪乱に切られる。検出長 37.3 m 幅 115cm 深度 86cm を測る。東西方向に走る溝で、。主軸は N87° W を向く。やや蛇行する。断面は U 字状または逆台形状で、埋土は 4 層に分層できる。

遺物は、須恵器貯蔵具、土師質土器供膳具・皿 (柱状・高脚高台付)・杯・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・貯蔵具、瓦器片・椀・皿、瓦質土器土錘・焙烙、備前甕か、陶器甕 (常滑か渥美焼)、青磁 (龍泉) 碗、白磁壺・碗・杯、鉄釘・鉄製刀子、砂岩製砥石・叩石、が出土。

埋土上位から 1556・1563・1567・1568・1572・1580・1581・1587、中位から 1565・1566・1569・1586、下位から 1564・1576～1578 が出土。

1556 は非回転台成形の土師質土器杯。ほぼ完形。体底部内外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。京都系土師皿 D または E タイプの在地模倣品とみられ、概ね 13 世紀代に位置付けられる。1557 は回転台成形の土師質土器杯。底部の殆どを欠く。底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが不明瞭。体部に外面からの穿孔が 2 ヶ所あり、補修痕か。胎土に在地花崗岩を含む。

1558 は土師質土器高脚高台付皿の底部。器壁厚い。回転台成形とみられる。焼成不良により磨耗。1559 は土師質土器柱状高台付皿の完形品。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。胎土きわめて精良。

1560 はほぼ完形の瓦器皿。内面に螺旋状とみられるヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好。和泉型瓦器皿 III 期後半～IV 期前半頃に位置付けられる。

1561～1582 は瓦器椀である。1561・1562 は和泉型瓦器椀 III - 2 期 (12 世紀末～13 世紀初頭) に相当。1561 は腰が張った器形。高台断面は幅広で低平な逆三角形状を呈する。外面は縦位・斜位のヘラミガキ、内面は螺旋状のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良で、重焼により部分的に吸着なく酸化炎焼成する。1562 は下半部である。高台は断面逆台形状で、高さを保つ。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。

1563 は口縁外面に 2 段の弱いヨコナデを施す。体部外面のユビオサエは弱く小さい。高台の断面はきわめて低平な逆三角形状を呈し、貼り付けは粗雑で全周しない。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。焼成良好であるが炭素吸着不良で、酸化炎焼成する。胎土にチャートを含む。和泉型瓦器椀 III - 2～3 期 (12 世紀末～13 世紀前葉) に相当。

1564～1576 は和泉型瓦器椀 III - 3 期 (13 世紀前葉) に相当する。1564 完形品。高台はきわめて低平。口縁～体部内面に螺旋状のヘラミガキ、見込みにやや不揃いな平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成および炭素吸着良好で、外面に重焼痕を残す。1565 は完形品。高台断面は小さく低い逆三角形状。底部中央は高台畳付のラインより下方へ突出しており高台の形骸化が著しい。口縁外面は 2 段にヨコナデするが弱い。口縁～体部内面はやや密な横位のヘラミガキ、見込みはジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。焼成および炭素吸着良好で、部分的に金属光沢を生じる。1566 はほぼ完形だが、底部外面は大きく剥離。口縁は 2 段にヨコナデし、内面は螺旋状のヘラミガキを施す。焼成良好で、炭素吸着は重焼により口縁部のみにみられる。

1567 は高台が幅広で、断面は低平な蒲鉾形。貼り付けは粗雑で途切れる。口縁～体部内面に粗い螺旋状、見込みに平行状のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。1568 は口縁外面に接合痕あり。高台の断面は低平で幅広の蒲鉾形を呈する。口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みにもヘラミガ

キを施すが、磨耗により不明瞭。焼成不良だが炭素吸着良好。1569はほぼ完形。高台断面は低平な蒲鉾形。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに不揃いな平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好で外面に重焼痕あり。1570は底部を欠く。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し、炭素吸着はみられない。1571は高台断面が逆台形状。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みは螺旋状および平行状のヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好。

1572は高台がきわめて低平。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状ヘラミガキ暗文を施す。焼成および炭素吸着良好。1573は高台断面が低平で小さな逆三角形を呈し、退化著しい。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は口縁の一部のみで、全体的に酸化炎焼成。1574は底部を欠く。焼成不良により磨耗著しく、内面の調整不明。炭素吸着は内面不良、外面良好。1575は上半部。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着は良好。1576は口縁を欠く。歪みによる復元径過小の疑いあり。高台はごく低平で径も小さく、退化著しい。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し、外面は著しい。炭素吸着良好。

1577は低平で腰が張った器形。口縁は2段にヨコナデするが弱い。高台は貼り付けが丁寧で断面は厚い逆台形状を呈する。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は口縁内外面と体部の一部にみられ、重焼痕を伴う。胎土に砂岩を含むとみられる。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期頃の模倣品とみられるが、在地産とは断定できない。1578は底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。胎土に泥岩を含む。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）に相当する。

1579～1581は和泉型瓦器碗Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当。1579は上半部。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は口縁～外面にかけて良好。1580は下半部。高台断面は低平な逆三角形。体部内面に粗く太い横位のヘラミガキを施し、見込みは平行ヘラミガキ。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面不良、外面は吸着なし。胎土にチャートを含む。1581は完形品。低平な器形。高台は偏った位置に貼り付け、断面は低い逆三角形。体部内面に横位あるいは螺旋状のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。見込みの暗文は体部のミガキ後に施す。焼成不良により磨耗し、炭素吸着もやや不良。

1582は瓦器碗の底部。高台の断面は低平な逆三角形。見込みの暗文は平行状か。炭素吸着なく酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀前葉～中葉）とみられる。

1583は白磁碗の上半部である。口縁を玉縁につくる。体部外面は回転ヘラケズリを施す。内面～体部外面中位まで施釉し、釉とびを伴う。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当。1584は白磁皿の上半部。口縁は小さく外反させる。釉に微細な貫入を伴う。素地は焼成不良により陶器質。森田分類白磁E群の皿E-2類に相当し、16世紀代に位置付けられる。

1585は青磁碗の上部片。体部内面に浅い沈線1条を引く。外面はヘラ片彫によって蓮弁文を施文するが鑄は確認できない。焼成不良により胎土は陶器質。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・a類（13世紀初頭～前半）に相当。1586は青磁碗の上半部。内面にヘラ片彫による区画文と飛雲文を施文する。釉にごく粗い貫入を伴う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・a類（12世紀中頃～後半）に相当。1587は白磁壺の口縁～頸部。口縁端部は下方に折り返し、玉縁状に作る。11世紀後半～13世紀前半頃の四耳壺であろう。

1588 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁端部を上方に拡張する。森田編年第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）に相当する。1589 は中世陶器甕の体部片である。内面に自然釉が付着しており、体部下位にあたとみられる。外面に綾杉状の押印文タタキを施す。常滑焼または渥美焼とみられる。1590 は瓦質焼成の管状土鍾である。焼成不良により磨耗。炭素吸着はやや不良。

1591・1592 は鉄釘とみられる。1593 はほぼ完形の鉄製小刀である。全長 26.2cm、身部長 16.8cmを測る。柄には木質部（図の網掛け部）が残存する。柄の基部には目釘孔をもつが、釘は残存しない。

1594 は砂岩角礫を用いた砥石である。1面のみ平滑で、溝状の擦痕および鑿状の工具痕を残す。他は破面のまま残すが、わずかに擦痕がみられる。1595 は扁平な砂岩円礫を用いた叩石である。主に側縁部に敲打痕を残すが使用痕は弱い。1596 は棒状の砂岩礫を用いた叩石である。端部およびエッジ部分が敲打により潰れる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 12 世紀末～ 13 世紀前半に位置付けられる。

溝 68 号（I 地区 SD1068）（第 462・595・596・611・612・619 図）

I - 12 区西部、f 16～5 グリッドに位置する。西側と中途を攪乱に切られ、東は調査区外に延びる。検出長 55.4 m 幅 202cm 深度 48cm を測り、主軸は N87° E を向く東西方向の溝。断面は U 字状または不整な逆台形状で、部分的に段を有する。埋土は 5 層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切りほか）・皿（回転糸切り）・杯（回転糸切り・ユビオサエほか）・煮炊具・羽釜脚部・鍋・土鍾（有溝ほか）・甕か、須恵質土器捏鉢・甕・貯蔵具・壺・椀か、瓦器片・椀、瓦質土器煮炊具・羽釜・鍋、常滑甕、青磁（龍泉）碗、白磁碗、近世染付碗、鉄釘・スラグ・鉄滓（椀形ほか）、が出土。

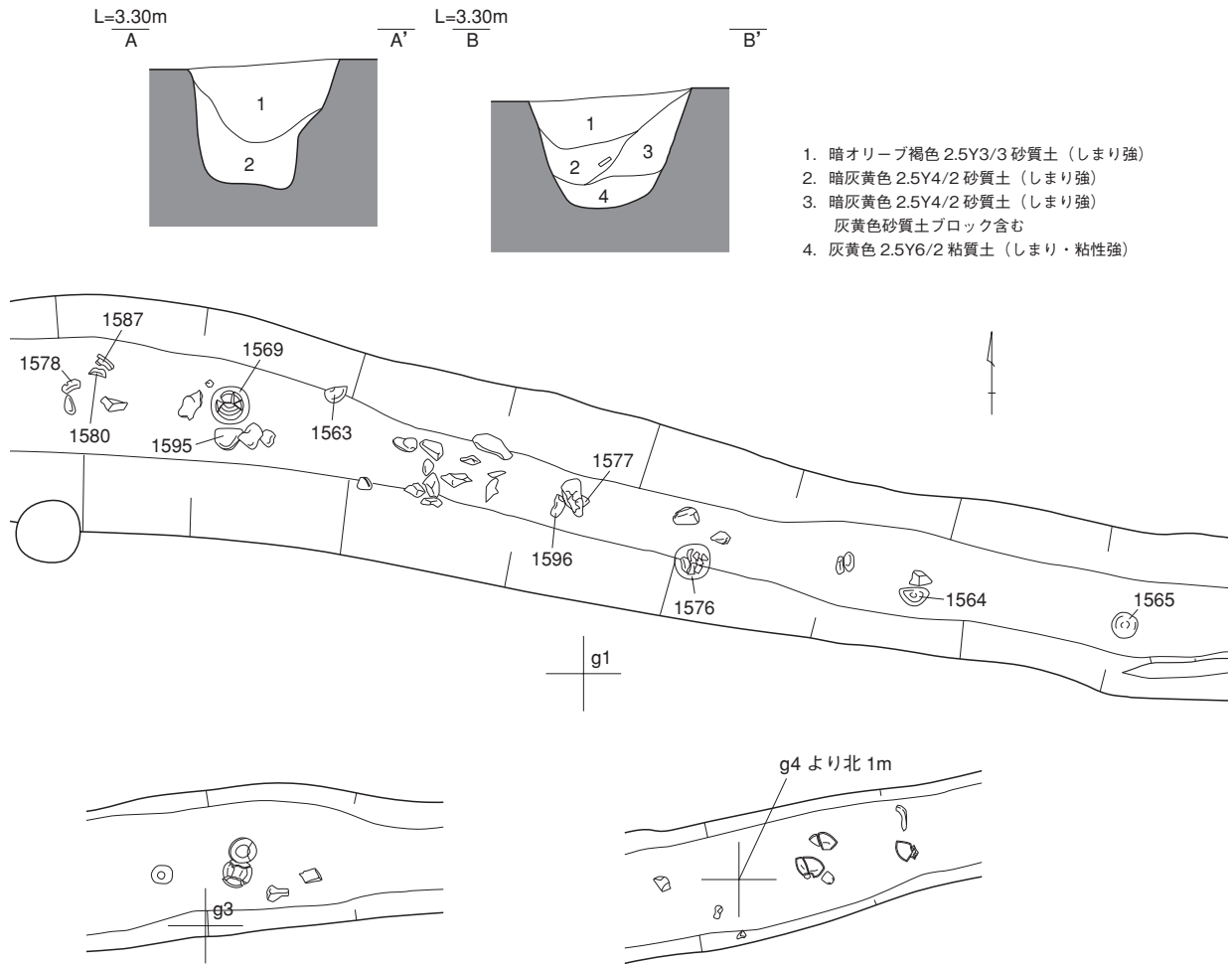
埋土上位から 1600・1602・1610・1613、中位から 1599、下位から 1615 が出土。

1597 は非回転台成形の土師質土器皿。きわめて低平な器形。底部外面はユビオサエのちナデを施す。焼成不良により磨耗。京都系土師皿の在地模倣品とみられ、概ね 13 世紀代に位置付けられる。

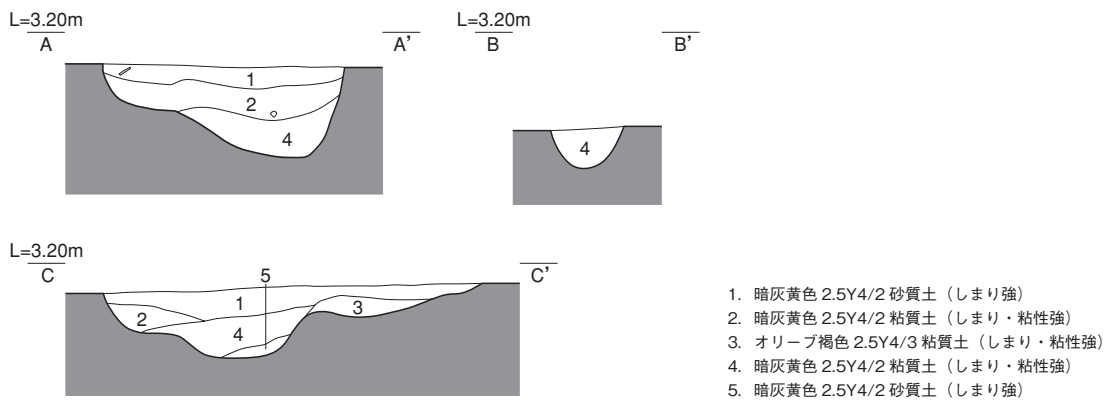
1598～1600 は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。体部内面に段状の稜を作る。1599 は板目痕を伴う。焼成不良により磨耗。胎土は精良。1600 は焼成不良により磨耗。1601 は回転台成形の土師質土器杯上半部である。胎土に絹雲母を含む。

1602～1604 は瓦器椀。1602 は高台断面が低平な逆台形状を呈する。口縁～体部内面に横位のヘラミガキを施すが不明瞭で、見込みのヘラミガキは確認できない。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は外面不良、内面吸着なし。胎土は粗く、チャートを含む。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。1603 は高台断面が低平な逆台形状で、退化著しい。内面は横位のヘラミガキを施すが不明瞭。焼成不良により磨耗。炭素吸着は不良。胎土にチャートを含むとみられる。1604 は高台断面が低平な逆台形状。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに太めの平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗するが、炭素吸着良好。1603・1604 は和泉型瓦器椀Ⅲ-3期（13世紀前葉）に相当。

1605 は白磁碗の上部片。口縁はごく短く外反し、上端部は丸みを帯びる。釉は全面に貫入と細かな釉とび、および口縁外面に釉垂れを伴う。大宰府分類白磁碗V-3類（11世紀後半～12世紀前半）か。1606 は青磁碗の上部。内面にヘラ描き文を施すが花文であろうか。釉は透明度高い。口縁部付近の釉は磨耗する。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-2類かI-3類に相当するとみられ、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

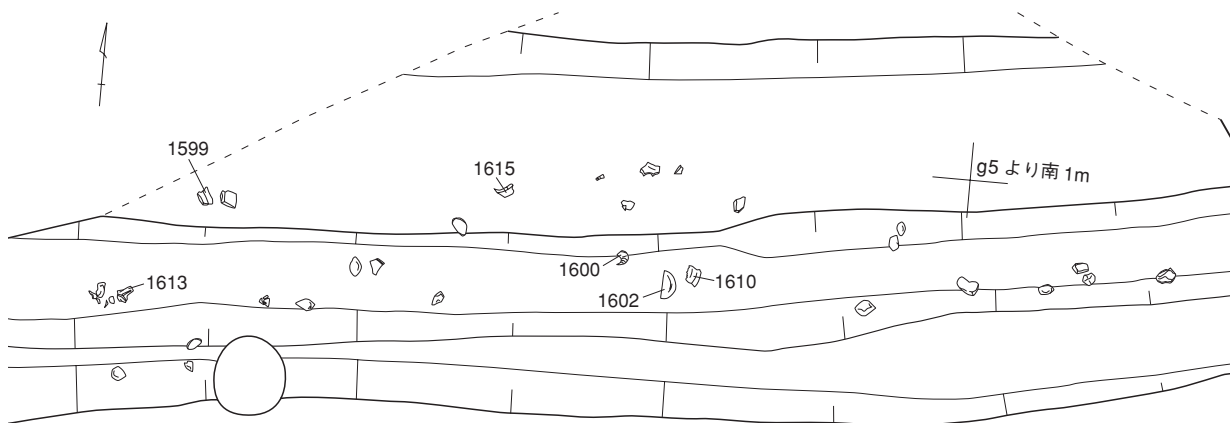


第 610 図 I - 12 区 SD1067 遺構実測図

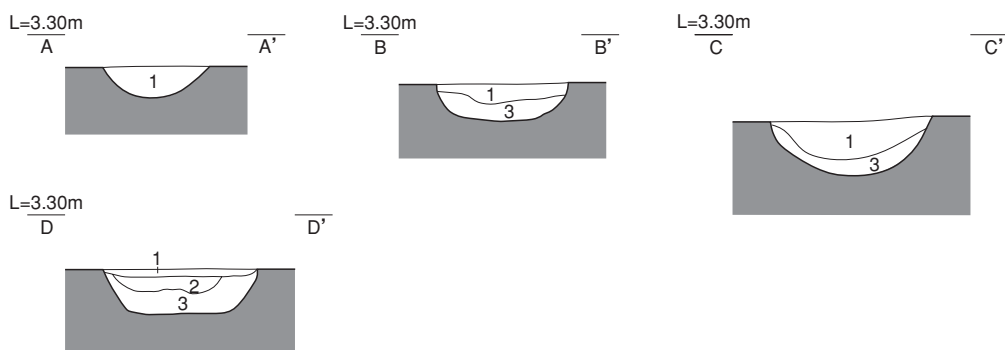


第 611 図 I - 12 区 SD1068 遺構断面図

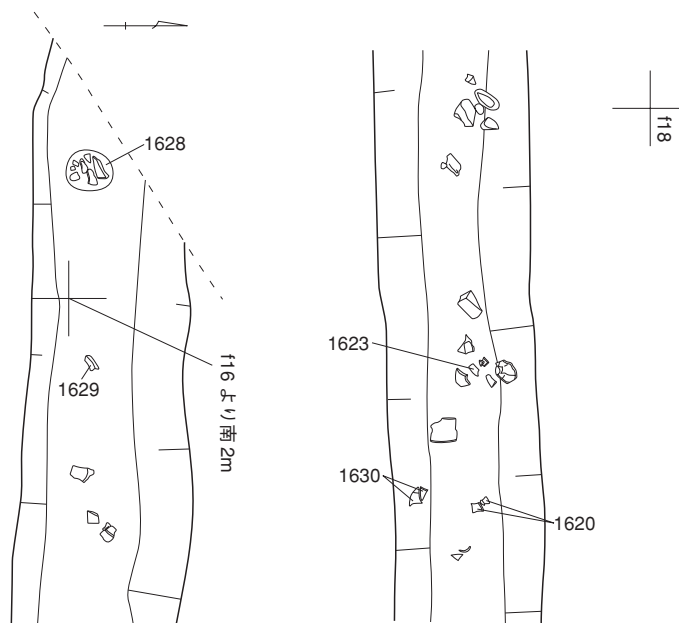




第 612 図 I - 12 区 SD1068 遺物出土平面図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)



第 613 図 I - 12 区 SD1070 遺構実測図



1607～1609は紀伊型土師質土器罏付鍋である。1607は口縁端部がわずかに肥厚する。胎土は粗く、結晶片岩のほか、泥岩やチャートとみられる粒子を含む。1608は口縁が内彎気味で、端部を内方にわずかに拡張する。胎土は粗く、結晶片岩・チャートを含む。1609は体部上位にあたり、断面が低い三角形状の退化した罏部を貼り付ける。焼成良好。胎土に結晶片岩を多く含む。いずれも13世紀代に位置付けられる。

1610～1612は受口状の口縁をもつ瓦質土器鍋である。1610は体部外面に平行タタキを施す。焼成不良により磨耗著しい。胎土に砂岩やチャートを含み、体部外面に砂粒の付着が目立つ。タタキを伴うことから山城型瓦質鍋の模倣品であり、在地産の可能性もある。13世紀代か。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.17）、蛍光X線分析では山城型の領域に含まれ、実体顕微鏡観察では微量の泥質片岩が確認された。

1611は焼成不良により内面の磨耗著しいが、炭素吸着良好。外面煤付着。山城型瓦質土器鍋の搬入品とみられ、概ね13世紀代に位置付けられる。1612は焼成不良により磨耗。炭素吸着は不良で、外面煤付着。胎土は精良。山城型瓦質鍋の搬入品とみられ、概ね13世紀代に位置付けられる。

1613・1614は瓦質土器羽釜である。罏部は貼り付けで、罏・口縁とも端部を方形に作る。1613は脚部が罏の下端に接して取り付く。焼成不良により磨耗著しいものの、炭素吸着は良好。胎土は粗く、砂岩・泥岩・チャートを含むことから、山城型瓦質羽釜の在地模倣品とみられ、13世紀前半頃に位置付けられる。本品は胎土分析を行い（胎土分析試料No.21）、蛍光X線分析では山城型の領域から外れ、実体顕微鏡観察ではチャートと砂岩が確認された。1614は焼成不良により磨耗し、炭素吸着は内面やや不良、外面良好。胎土に砂岩とチャートを含む。山城型瓦質羽釜の搬入品または模倣品で、13世紀前半頃に位置付けられる。

1615は常滑焼甕の下部である。外面は縦位の板ナデ、内面は横位の板ナデを施す。断面で底体部境に接合痕が確認できる。1616は土師質管状土錘である。径に比して全長が短く寸胴形。焼成不良により磨耗。胎土は粗く、チャートや在地花崗岩を含む。

1617は土師質有溝土錘である。紡錘形で、全長8.2cm重量99.0gを測る大型品。側面に棒状工具とユビナデによって4条の溝を作る。胎土は粗く、砂岩・泥岩・チャートを含む。

1618は細身の鉄釘。頂部を叩いて伸ばし、L字に折り曲げて頭部を作る。先端部を欠く。1619は鉄釘とみられるが、鑿か楔の可能性もある。両端部を欠く。

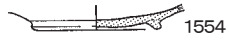
遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

溝70号（I地区 SD1070）（第462・613・620図）

I-12区西部、e・f 15～4グリッドに位置する。検出長51.2m幅102cm深度32cmを測る。東西に走る溝で、主軸はN87°Eを向く。断面は逆台形状またはレンズ状で、埋土は3層に分層できる。底面は東に向けて下がる傾向があるが、東端では上がる。

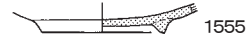
遺物は、黒色土器片（A類）、土師器羽釜、須恵器供膳具・貯蔵具、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切りほか）・杯（回転糸切りほか）・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢・貯蔵具、瓦器片・椀・皿・鉢、瓦質土器片（回転糸切り）・羽釜、常滑甕、中世陶器甕、青磁（龍泉）碗、白磁碗・壺、鉄滓（椀形ほか）・不明鉄製品、砂岩製叩石、が出土。

埋土上位から1620・1622・1623・1626、中位から1627・1628、遺構底部から1629が出土。



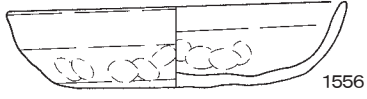
1554

第614图 I-12区
SD1065遺物実測図



1555

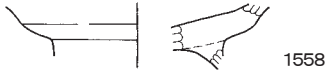
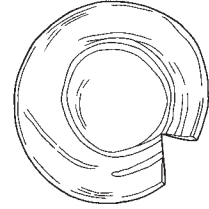
第615图 I-12区
SD1066遺物実測図



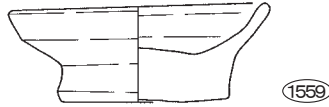
1556



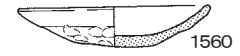
1557



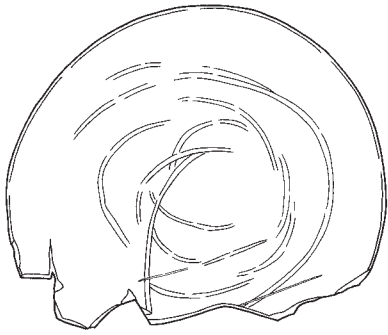
1558



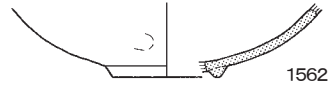
1559



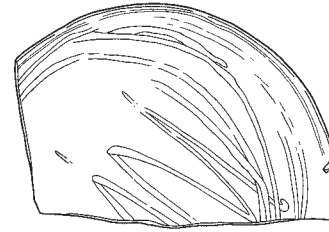
1560



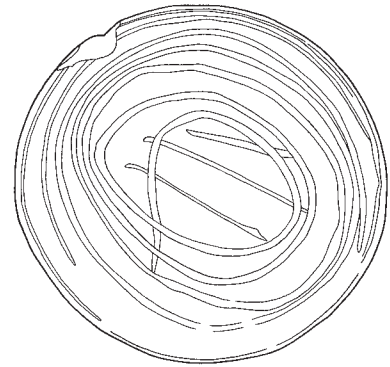
1561



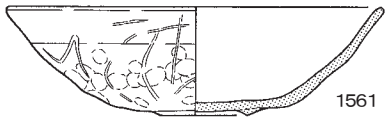
1562



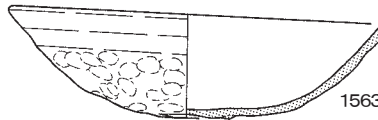
1563



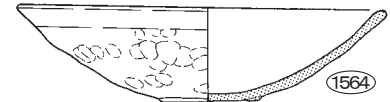
1564



1565



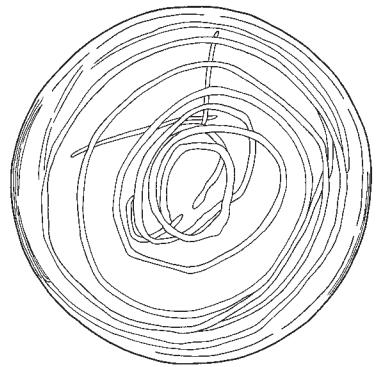
1566



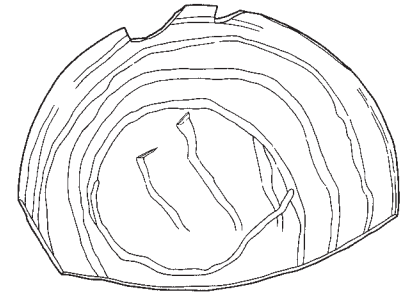
1567



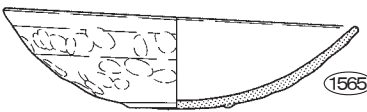
1568



1569



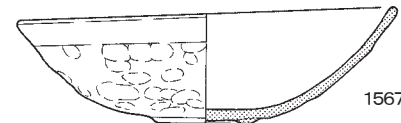
1570



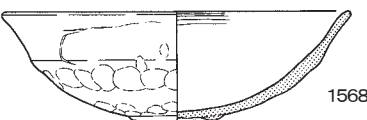
1565



1566



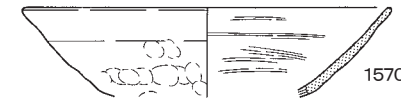
1567



1568



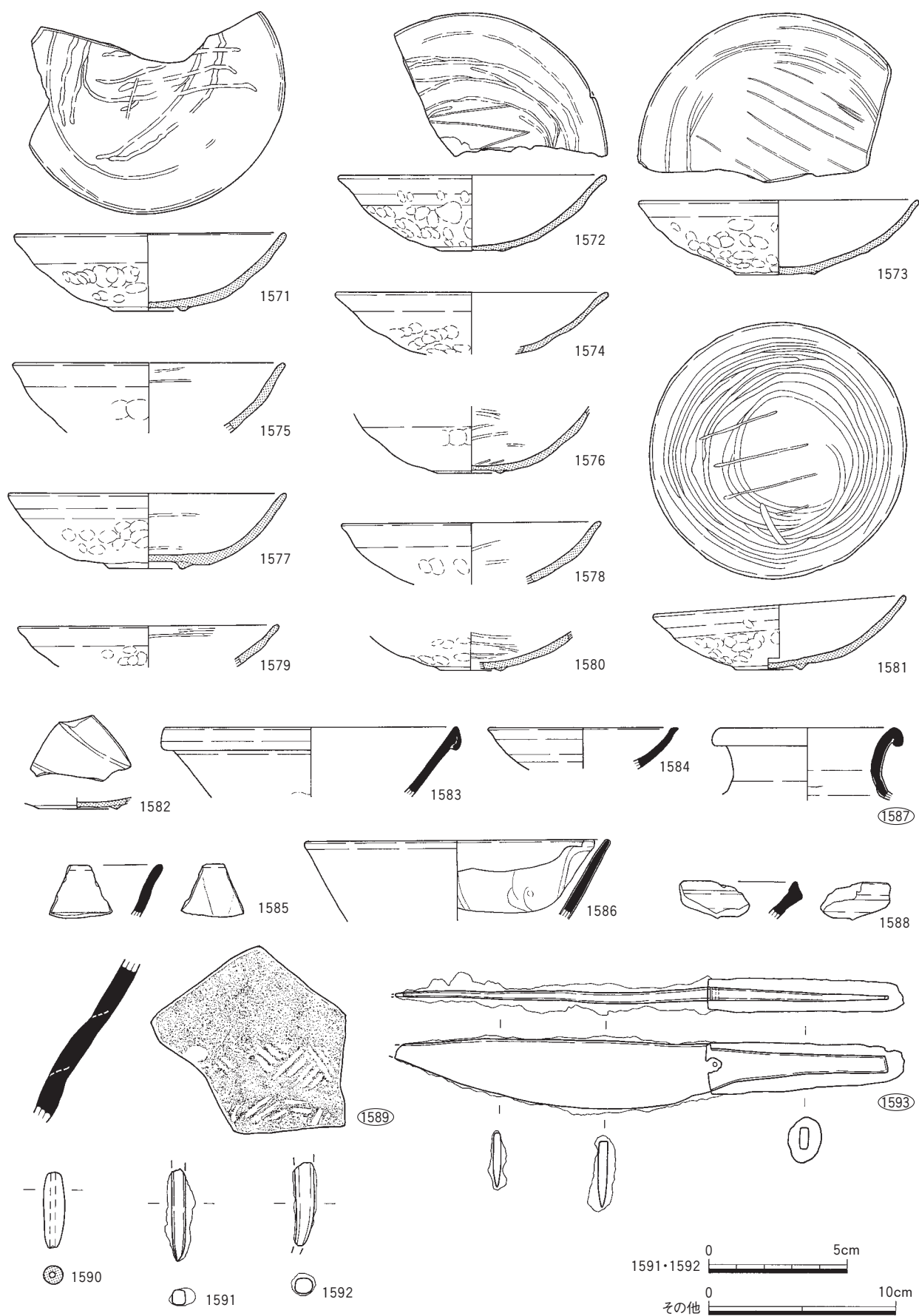
1569



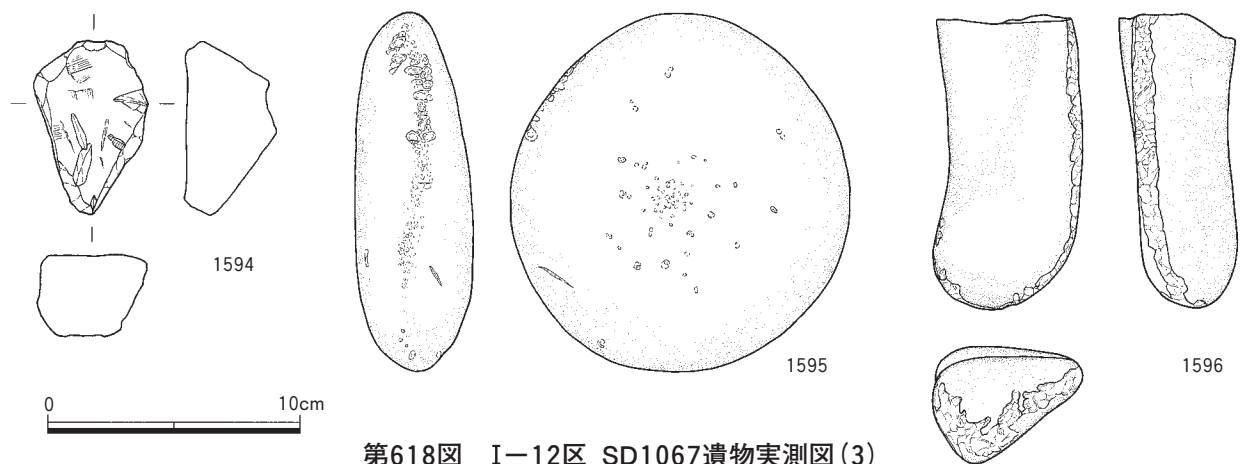
1570

第616图 I-12区 SD1067遺物実測図(1)





第617図 I-12区 SD1067遺物実測図(2)



第618図 I-12区 SD1067遺物実測図(3)

1620・1621は回転台成形の土師質土器杯である。1620は上半部で、内彎する口縁をもつ。焼成不良により磨耗著しい。胎土は粗く、5mm大のチャート・在地花崗岩を含む。1621は底部で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。胎土に5mm大のチャートを含む。

1622は瓦質土器杯である。回転台成形で、底部外面に細かな糸切り痕を残す。体部内面に接合痕を残す。焼成不良により磨耗・剥離。炭素吸着はやや不良であるが、断面は白色化することから瓦質焼成品と認められる。胎土に特徴がなく在地産であるかは不明。

1623～1627は瓦器椀である。1623は上半部。内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-1期(12世紀後葉)頃に相当。1624は底部を欠く。歪みのため復元高が高い。口縁外面は2段でヨコナデし、内面は横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗するが、炭素吸着は良好。1625は底部を欠く。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成ともに良好。1624・1625は和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期(12世紀末～13世紀前葉)に相当する。

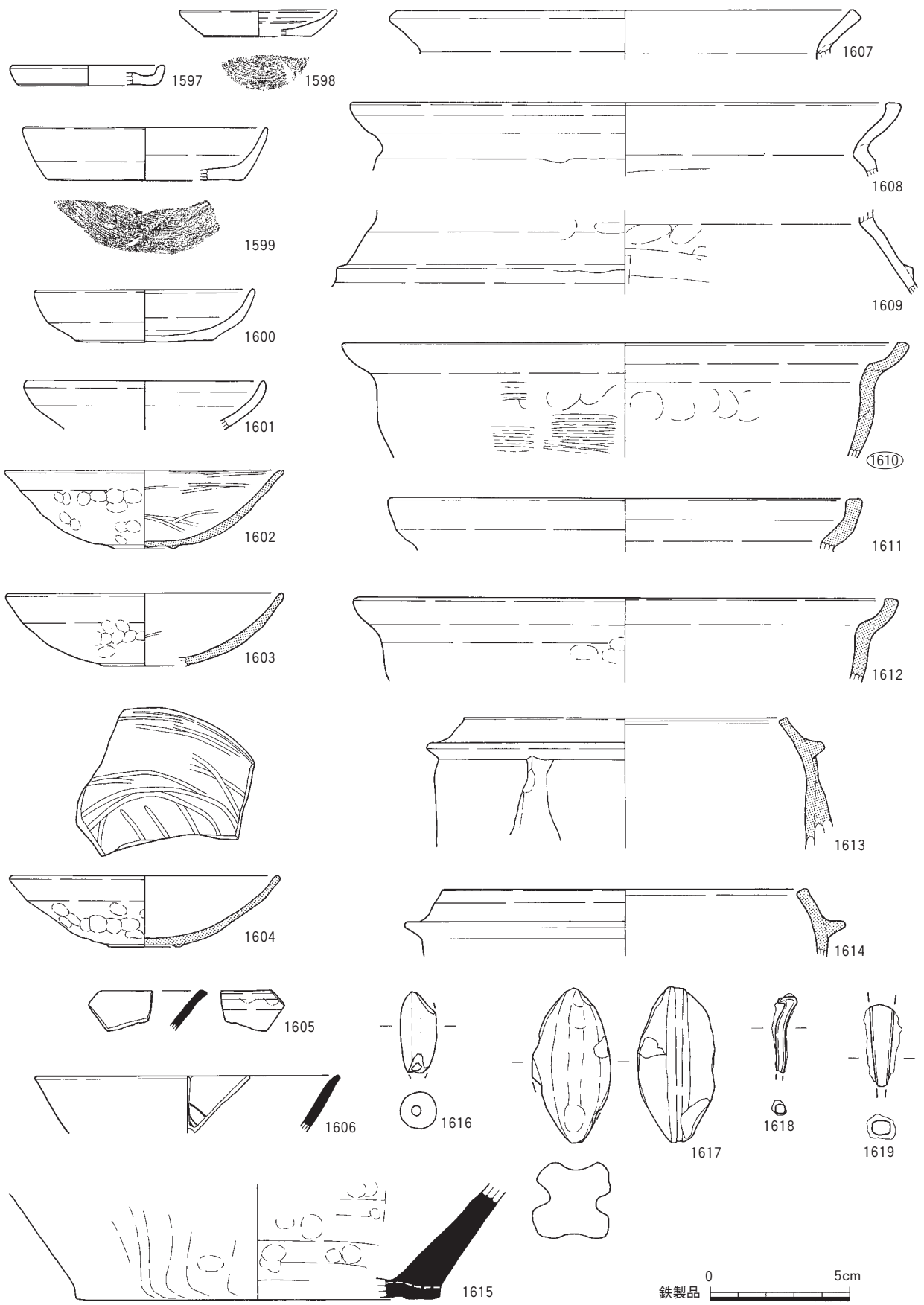
1626は上半部である。内面に横位のヘラミガキを施すが不明瞭。焼成不良により磨耗・剥離著しい。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。1627は低平な器形をもつ。高台の断面はきわめて低平な逆三角形状を呈し、退化著しい。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに太めの平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成良好で、炭素吸着は内面～口縁外面が良好、体部外面以下は重焼により部分的に吸着。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期(13世紀中葉)に相当。

1628は紀伊型土師質土器鍔付鍋の上部である。口縁端部をわずかに上方に拡張する。胎土は粗く、結晶片岩・チャートおよび絹雲母とみられる鉱物を含む。概ね13世紀代とみられる。

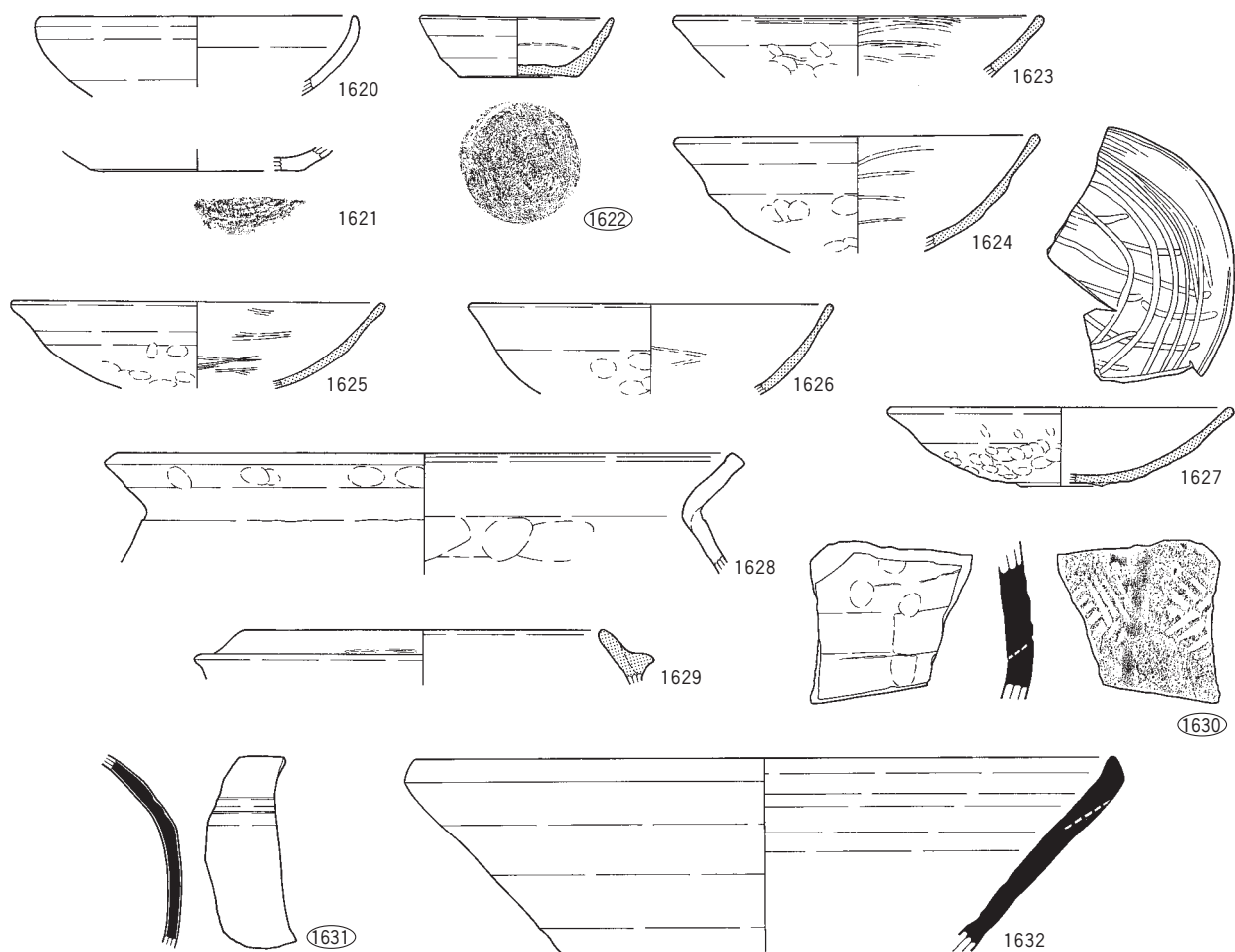
1629は瓦質土器羽釜の上部片。鍔部は貼り付けで作る。口縁・鍔両端部は丸みを帯びる。鍔上端と口縁との境に横位の沈線がみられるが、ヘラ状工具によるナデ付け痕か。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は外面良好、内面不良。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられるが、チャートとみられる粒子を含むことから模倣品の可能性がある。概ね13世紀代であろう。

1630は中世陶器甕の体部片である。外面に押印文タタキ、内面に板ナデを施す。外面に自然釉の釉垂れあり。タタキの形状から渥美焼の可能性を考えたが、円通寺遺跡出土の渥美焼製品と比較すると本品は胎土が粗く器面や胎土の色調が異なる。

1631は白磁壺の体部片。肩部に2条の浅い凹線を引く。わずかに釉とびを伴う。概ね11世紀後半～



第619図 I-12区 SD1068遺物実測図



第620図 I-12区 SD1070遺物実測図



12世紀前半頃に位置付けられる。

1632は東播系須恵質土器捏鉢の上半部である。口縁端部は上方にわずかに拡張する。焼成不良により軟質の瓦質焼成品となり、器面に炭素が付着。磨耗著しい。胎土に砂岩・泥岩・チャートを含む。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）としたが、模倣品の可能性も考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

小穴4017号（I地区 SP14017）（第629図）

I-12区東端部中央北側、m9グリッドに位置する、径40cm深度20cmを測る隅丸長方形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器片・椀、が出土。

1633～1635は和泉型瓦器椀。1633は底部を欠く。歪みのため復元径過小。口縁～体部内面にやや密な横位のヘラミガキを施し、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成・炭素吸着ともに良好。Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。1634は底部を欠く。内面に横位・斜位のヘラミガキを施す。焼成不良により部分的に磨耗。炭素吸着は良好。Ⅲ-3期（13世紀前葉）に相当。1635は埋土下位の出土遺物。高台は断面三角形状で、高さを保つ。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭

素吸着は内面やや不良、外面不良。Ⅱ－3期（12世紀後葉）前後とみられる。

小穴 4053号（Ⅰ地区 SP14053）（第621・630図）

Ⅰ－12区東部中央南寄り、19グリッドに位置する、径26cm深度22cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿、瓦器片・椀、が出土。

1636は土師質土器皿。径は小さいが器高が高く、杯を小型化したような器形。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。

小穴 4077号（Ⅰ地区 SP14077）（第622・631図）

Ⅰ－12区東端部中央北寄り、m8・9グリッドに位置する、径28cm深度25cmを測る不整な隅丸方形の小穴。柱痕を伴う。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土。

1637は柱痕の底部から出土した瓦器椀。高台断面は逆三角形で径がやや大きい。口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良。胎土にチャートを含む。和泉型瓦器椀Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に位置付けられるが、高台の形状や胎土から模倣品の可能性もある。

小穴 4081号（Ⅰ地区 SP14081）（第623・632図）

Ⅰ－12区東部北側、m8グリッドに位置する、径26cm深度16cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器片・杯・鍋、瓦器片・皿、が出土。掲載遺物2点とも第2層の出土で、ともに瓦器皿。

1638は内面に横位のヘラミガキを施すが、見込みのミガキは磨耗により形状不明。炭素吸着やや不良で焼成不良。胎土にチャートを含む。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

1639は口縁～体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ期頃に位置付けられる。本品はミガキの形状から紀伊型の疑いがあったため、胎土分析を行った（胎土分析試料No.15）。蛍光X線分析では和泉型の領域からわずかに外れ、実体顕微鏡観察では少量の黒雲母と微量のチャートを確認。

小穴 4159号（Ⅰ地区 SP14159）（第633図）

Ⅰ－12区東部北側、m7グリッドに位置する、径37cm深度23cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器椀、が出土。

1640は瓦器椀で、底部を欠く。口縁外面のヨコナデは弱い。体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。1641は瓦器椀の上半部。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、下部に円弧状のミガキがみえることから見込みは連結輪状のヘラミガキ暗文を施すとみられる。外面～口縁内面に炭素吸着良好で、体部内面は吸着なし。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期（13世紀前葉～中葉）に相当。

小穴 4183号（Ⅰ地区 SP14183）（第634図）

Ⅰ－12区東部中央北寄り、k7グリッドに位置する、径39cm深度40cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器皿・杯（ともにユビオサエ）・煮炊具、瓦器片、が出土。

1642・1643 は非回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。京都系土師皿の在地模倣品とみられ、ともに13世紀代に位置付けられる。1642 は歪みが大きく、平面形は長径8.0cm、短径6.8cmの楕円形を呈する。胎土に砂岩を含む。

小穴 4213 号 (I 地区 SP14213) (第 635 図)

I - 12 区東部中央北寄り、k 7 グリッドに位置する、径34cm深度20cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器煮炊具・土錘、瓦器椀、が出土。1644 は土師質管状土錘。焼成不良。胎土に砂岩を含む。

小穴 4225 号 (I 地区 SP14225) (第 636 図)

I - 12 区東部南側、j 7 グリッドに位置する、径38cm深度18cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器皿(回転糸切り)、瓦器片・椀、が出土。

1645 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャート、および絹雲母とみられる鉱物を含む。

小穴 4261 号 (I 地区 SP14261) (第 624・637 図)

I - 12 区東部北側、l 6 グリッドに位置する、径32cm深度24cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器椀、が出土。

1646 は第1層上位出土の瓦器椀。低平な器形。口縁外面のヨコナデは弱く幅が狭い。高台は低平な逆三角形状。体部内面のヘラミガキはランダムで、見込みは斜格子状のヘラミガキ暗文を施すが方向は一定しない。焼成不良により磨耗。炭素吸着は部分的で、酸化炎焼成する。器形・調整から非和泉型瓦器椀とみられるが、在地産であるかは不明。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3期に併行か。

小穴 4283 号 (I 地区 SP14283) (第 638 図)

I - 12 区東部中央北寄り、k 6 グリッドに位置する、径30cm深度28cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・鍋・土錘、瓦器片、が出土。

1647 は土師質管状土錘。比較的長身で細身。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

小穴 4284 号 (I 地区 SP14284) (第 639 図)

I - 12 区東部中央北寄り、k 6 グリッドに位置する、径38cm深度22cmを測る不整円形の小穴。SP14283 に切られる。遺物は、土師質土器供膳具・土錘、瓦器片、が出土。

1648 は土師質管状土錘である。短身で太い。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

小穴 4347 号 (I 地区 SP14347) (第 640 図)

I - 12 区東部北端、l 5 グリッドに位置する、径26cm深度26cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、1649 は土師質管状土錘。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

小穴 4348 号 (I 地区 SP14348) (第 641 図)

I - 12 区東部北端、l 5 グリッドに位置する、径25cm深度16cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点

のみで、1650は土師質管状土鍾。焼成不良により磨耗。

小穴 4374号 (I地区 SP14374) (第625・642図)

I-12区東部北側、k5グリッドに位置する、径35cm深度20cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿(ユビオサエ)・杯・煮炊具、瓦器片、が出土。

1651は第1層出土の土師質土器杯。非回転台成形で、底部内外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。京都系土師皿DタイプまたはEタイプの在地模倣品とみられ、13世紀代に位置付けられる。

小穴 4388号 (I地区 SP14388) (第643図)

I-12区東部北側、k5グリッドに位置する、径43cm深度16cmを測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器皿・杯・煮炊具、鉄釘か、が出土。1652は鉄釘。頂部をL字に折り曲げ頭部を作る。

小穴 4523号 (I地区 SP14523) (第644図)

I-12区中央部北端、j1グリッドに位置する、径51cm深度65cmを測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器皿(回転糸切り)・煮炊具、瓦器片・椀、鉄滓、が出土。

1653は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。

小穴 4525号 (I地区 SP14525) (第645図)

I-12区中央部北端、i・j1グリッドに位置する、径48cm深度53cmを測る楕円形の小穴。SD1065に切られる。遺物は、須恵器皿・貯蔵具、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・杯(回転糸切り)・煮炊具・土鍾、須恵質土器甕、瓦器片、瓦質土器土鍾、スラグ、が出土。

1654は太身の瓦質管状土鍾。炭素吸着良好、胎土は精良で黒化する。

小穴 4526号 (I地区 SP14526) (第646図)

I-12区中央部北端、j1グリッドに位置する、径38cm深度40cmを測る不整円形の小穴。SP14525に切られる。遺物は、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・土鍾、須恵質土器貯蔵具、瓦器片・椀、鉄製楔か、が出土。

1655は鉄製の楔であろう。短い四角錐形を呈し、頂部を叩いて平坦にする。

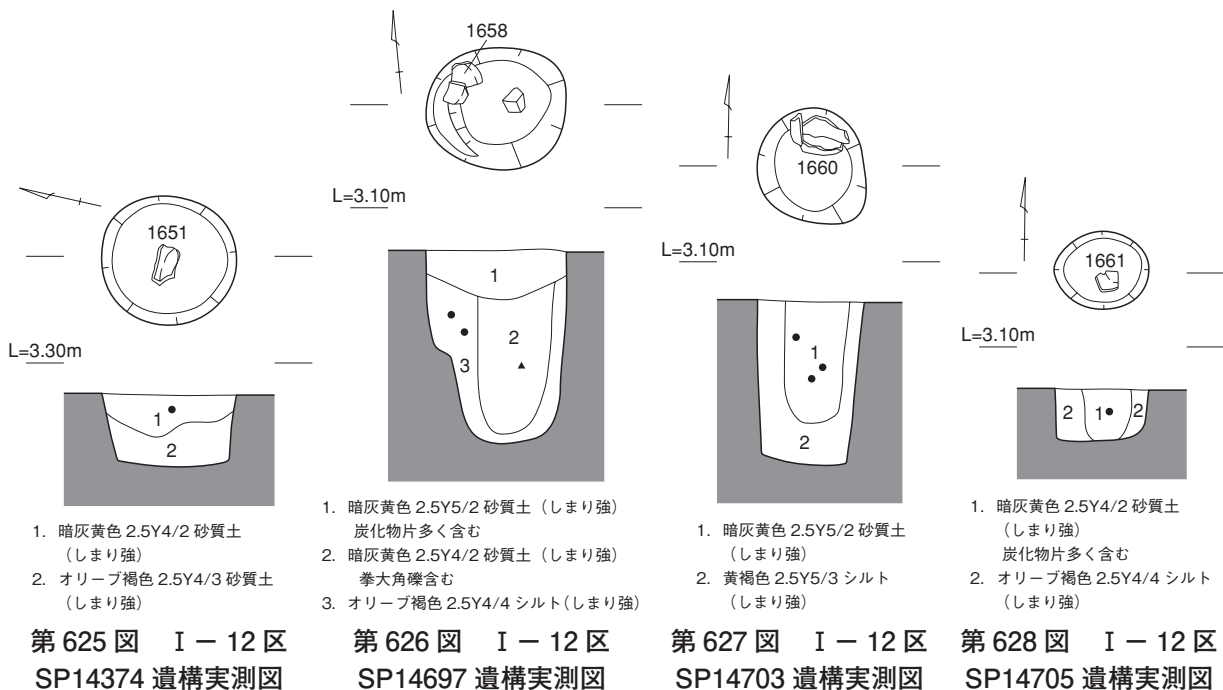
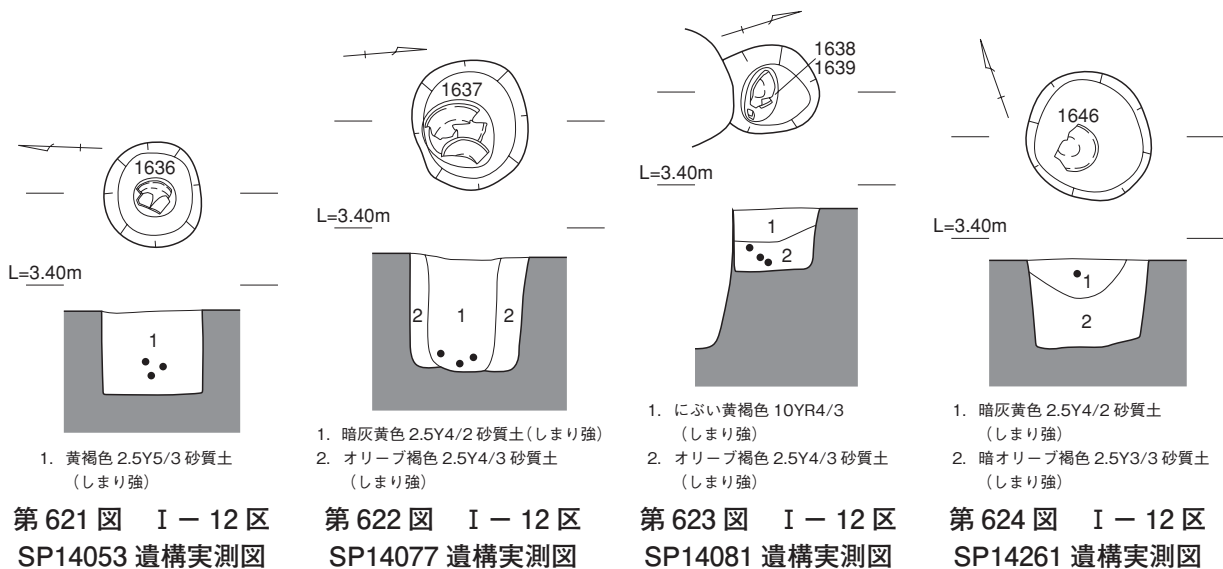
小穴 4610号 (I地区 SP14610) (第647図)

I-12区西部南端、b18・19グリッドに位置する、径30cm深度57cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・皿(回転糸切り)、青磁(龍泉)碗、が出土。

1656は土師質土器皿。口径6.1cmの小型品。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

小穴 4653号 (I地区 SP14653) (第648図)

I-12区西部南端、a17グリッドに位置する、径42cm深度27cmを測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具、瓦器片、青磁(龍泉)碗、が出土。

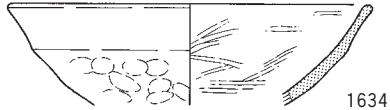
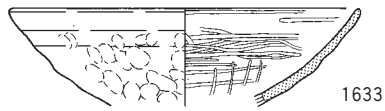


1657は青磁碗の上部。内外面無文。釉透明度高く、ごく粗い貫入を伴う。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-1類(12世紀中頃~後半)に相当。

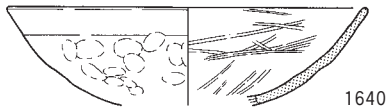
小穴4697号(I地区 SP14697)(第626・649図)

I-12区南西隅、t・a16グリッドに位置する、径37cm深度51cmを測る不整楕円形の小穴。柱痕を伴う。遺物は、土師質土器供膳具・杯・皿(回転糸切り)、瓦器碗、チャート礫、鉄製品片、が出土。

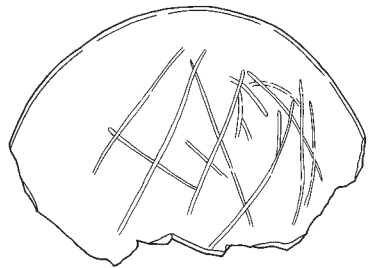
1658は第3層上位出土の土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗。1659は回転台成形の土師質土器杯上半部。焼成不良により磨耗。胎土にチャー



第629図 I-12区
SP14017遺物実測図



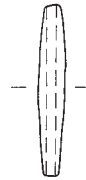
第633図 I-12区
SP14159遺物実測図



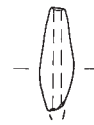
第634図 I-12区
SP14183遺物実測図



第636図 I-12区
SP14225遺物実測図

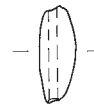


1647



1644

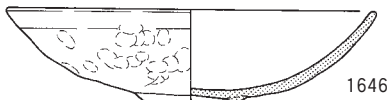
第635図 I-12区
SP14213遺物実測図



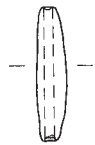
1648

第638図 I-12区
SP14283遺物実測図

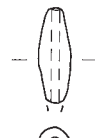
第639図 I-12区
SP14284遺物実測図



第637図 I-12区
SP14261遺物実測図



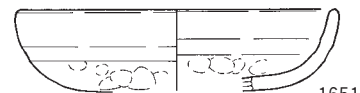
1649



1650

第640図 I-12区
SP14347遺物実測図

第641図 I-12区
SP14348遺物実測図



第642図 I-12区
SP14374遺物実測図

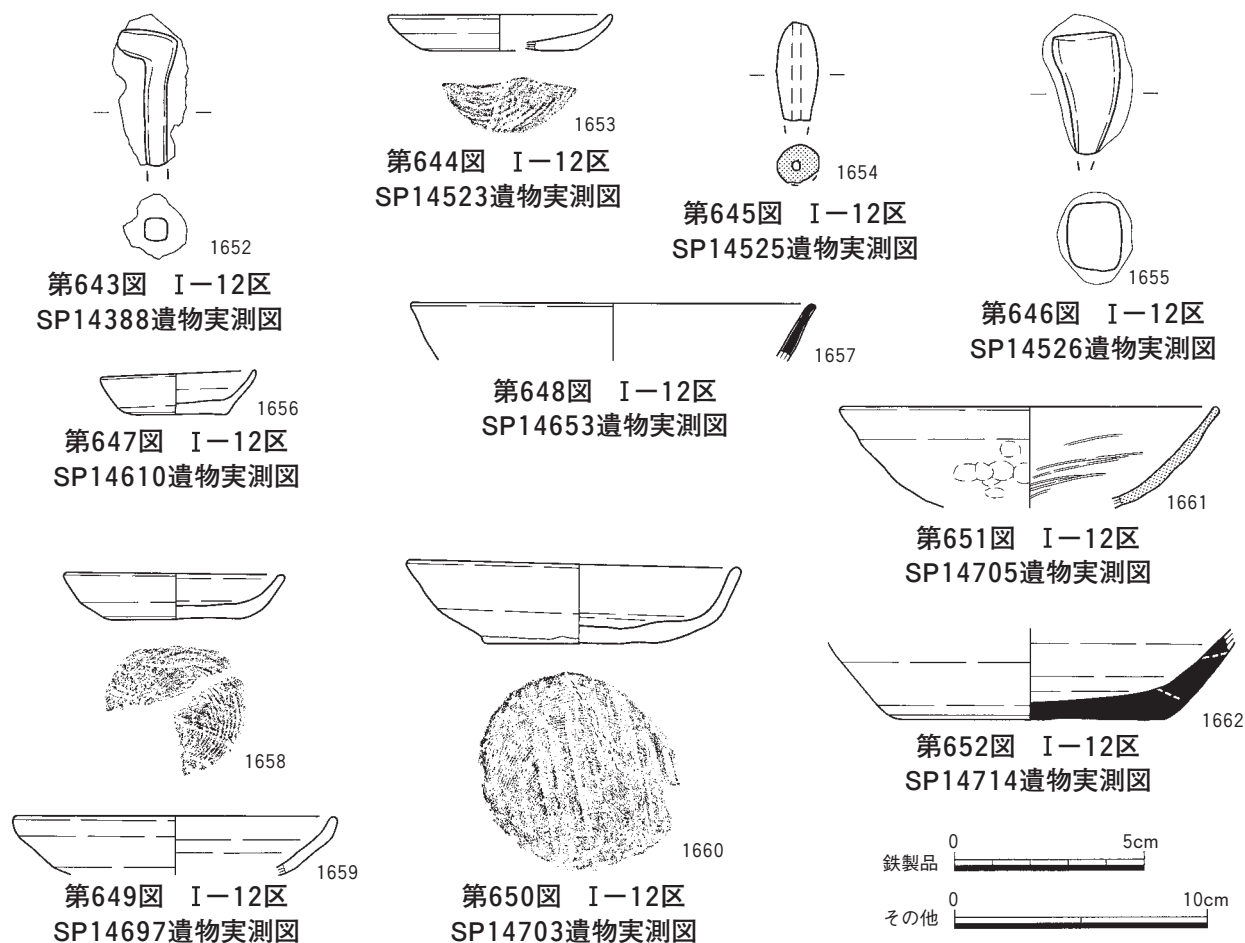


トを含む。

小穴 4703号 (I地区 SP14703) (第627・650図)

I-12区南西隅、t 16グリッドに位置する、径26cm深度43cmを測る不整形の小穴。柱痕を伴う。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯(ともに回転糸切り)・鍋、瓦器片、が出土。

1660は柱痕中位出土の土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土にチャートと在地花崗岩を含む。



小穴 4705 号 (I 地区 SP14705) (第 628・651 図)

I-12 区南西隅、t 16 グリッドに位置する、径 25cm 深度 14cm を測る不整円形の小穴。柱痕を伴う。遺物は、土師質土器供膳具 (回転糸切り)・煮炊具、瓦器椀、が出土。

1661 は柱痕中位出土の瓦器椀で底部を欠く。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好で、重焼により内外面とも残存部下位は吸着不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-3 期 (13 世紀前葉) に相当。

小穴 4714 号 (I 地区 SP14714) (第 652 図)

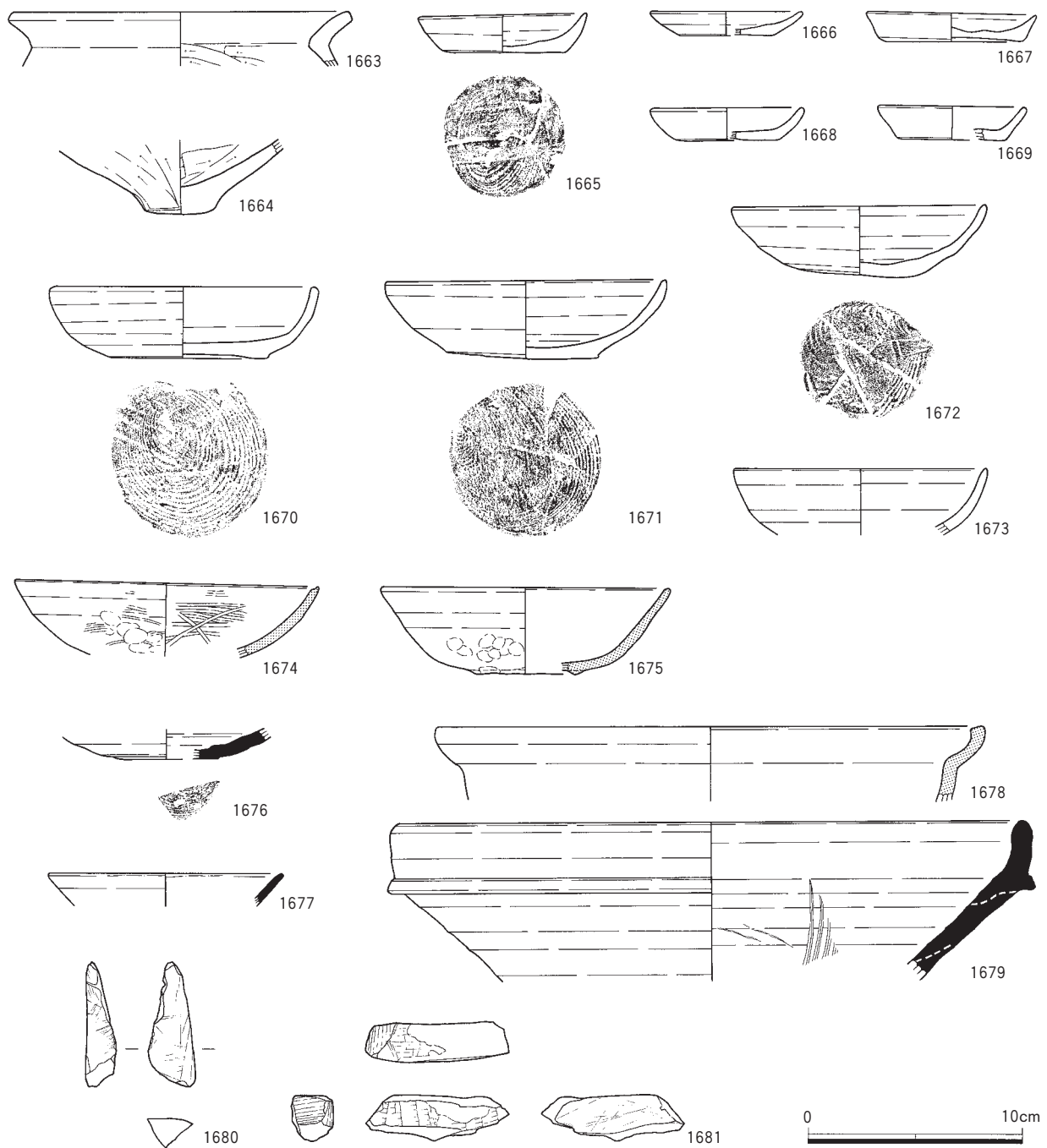
I-12 区北西隅、e 14 グリッドに位置する、径 62cm 深度 16cm を測る不整円形の小穴。

出土遺物は 1 点のみで、1662 は東播系須恵質土器捏鉢の下部である。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土にチャートを含む。

〈I-12 区 第 1 包含層出土遺物〉 (第 653 図)

弥生土器には、1663 の甕・1664 の壺がある。甕は頸部がくの字に屈曲するもので、体部最大径が上半にある器形で、弥生時代後期のものであろう。

1665～1669 は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1665 と 1669 は板目痕を伴う。1666 は小型で低平な器形。1667 は焼成不良により磨耗。胎土は精良でチャートを含む。



第653図 I-12区 第1包含層遺物実測図

1668 は焼成不良により磨耗。胎土に砂岩・チャートを含む。1669 は胎土にチャートを含む。

1670 ~ 1673 は回転台成形の土師質土器杯。底部が残存する個体は回転糸切り痕のち板目痕を残す。1670 は胎土に砂岩とみられる粒子とチャートを含む。1671 は胎土にチャート・砂岩・石灰岩を含む。1672 は胎土に泥岩とみられる粒子を含む。焼成不良により磨耗。1673 は底部を欠く。焼成不良により磨耗。

1674 は瓦器碗の上半部。内外面にやや密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。胎土にチャートを含むとみられる。口縁内側に沈線が巡り端部が尖る形状をもつとみられたことから、当初楠葉型あ

るいは大和型ではないかと考えた。しかしミガキがランダムに施されることや口縁部の沈線が単なる磨耗によることから和泉型と考えられ、Ⅱ期（12世紀前葉～後葉）に位置付けられる。

1675は瓦器碗。体部は直線的に外上方に伸び、腰が張った器形をもつ。口縁外面のヨコナデは2段だが、弱いため稜が不明瞭。高台は低平な蒲鋒形で、貼り付けは粗雑。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。胎土はやや粗めで1～2mm大の含有物が目立ち、砂岩・泥岩・チャートを含む。在地産と考えられ、和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1期併行期とみられる。

1676は東播系須恵質土器碗の底部。底部外面に回転糸切り痕を残す。見込みに段を作る。森田編年Ⅰ期第2段階（11世紀末～12世紀前半）に相当。

1677は白磁皿の上半部。口縁の釉を掻き取った口禿皿で、大宰府分類白磁皿Ⅸ-1・bかc類に相当し、13世紀中頃～14世紀初頭の年代が与えられる。

1678は受口状口縁をもつ瓦質土器鍋の上部。焼成不良により磨耗するが炭素吸着は良好。胎土はやや粗めで1～2mm大の含有物が目立ち、砂岩・チャートを含む。山城型瓦質土器鍋の模倣品とみられ、胎土から在地産の可能性も考えられる。13世紀代に位置付けられる。1679は備前焼播鉢の上半部である。口縁は大きく上方に拡張する。内面および断面で接合痕が確認できる。重根編年ⅣB-2期（15世紀中葉）に相当。

1680は肌理細かい泥岩礫を用いた砥石片。三角錐状で2面を使用する。1681は滑石製石鍋の体部片。外面に整形時の横位の鑿痕を残すが、内面はわずかな擦痕のみで整形痕は残らない。上面は部分的に磨耗し、図の左端部は切断痕とみられる。転用を試みた痕跡か。

〈Ⅰ-13区 第1遺構面〉（第654図）

Ⅰ-13区（2009年度調査8区）は調査地西端に位置する、東西長約71m、南北幅約27mの調査区である。遺構面は1面のみ検出し、標高は3.0mでほぼフラットである。遺構数は、掘立柱建物（SA）17棟、土坑（SK）140基（うち土壙墓の可能性あるもの18基）、溝（SD）19条、小穴（SP）397基で、ほぼすべて中世に属する。

Ⅰ-12・13区ともに調査区から南は数mで現桑野川河道であるが、遺構はさらに南に広がる様相を見せることから、中世の時点では桑野川が現在と異なる地点を流れていたか、分流のため比較的小さな流れであったと考えられる。

掘立柱建物93号（Ⅰ地区 SA1093）（第655図）

Ⅰ-13区南東隅、a 15・16グリッドに位置する。東西2間（3.0m）南北1間（1.4m）床面積4.2㎡、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN78°Eを向く。柱穴は円形または不整形円形を呈し、径20～30cm、深度10～24cmを測る。

遺物はEP4・5でみられ、土師質土器片・供膳具、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代について決定の根拠に乏しく、不明である。

掘立柱建物94号（Ⅰ地区 SA1094）（第656図）

Ⅰ-13区南東隅、t・a 15・16グリッドに位置する。東西2間（4.6m）南北1間（3.0m）床面積13.8㎡、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN90°WEを向く。攪乱により北西隅の柱穴を欠く。

柱穴は円形または不整円形を呈し、径31～50cm、深度29～60cmを測る。柱痕はEP1・2・4・5で確認。

遺物はEP1～5でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀、が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代は、瓦器椀が出土していることから概ね13世紀代とみられる。

掘立柱建物 95号 (I地区 SA1095) (第657・668図)

I-13区東部南側、t・a 13・14グリッドに位置する。東西1間(2.7m)南北3間(5.9m)床面積15.9㎡、8基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN10°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径22～37cm、深度6～29cmを測る。柱痕はEP1・2・4・6・7で確認。

遺物はEP1・2・4でみられ、土師質土器片・供膳具、青磁碗(蓮弁)、が出土。

1682はEP2出土の青磁碗で、底部を欠く。外面にヘラ片彫により鎬蓮弁文を施文。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-5・b類に相当し、13世紀初頭～前半の年代が与えられる。遺構の年代は、概ね13世紀代に位置付けられる。

掘立柱建物 96号 (I地区 SA1096) (第658・669図)

I-13区東部南端、s・t 13・14グリッドに位置する。東西2間(3.2m)南北2間(3.7m)床面積11.8㎡、8基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸はN17°Wを向く。柱穴は不整円形または不整な隅丸方形を呈し、径25～48cm、深度11～34cmを測る。柱痕はEP3・8で、根石はEP3で確認。EP1・6の埋土上位で礫を検出し、EP3では犬頭大の角礫が柱痕内に立った状態で出土。遺物はEP1～8でみられ、黒色土器片(B類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、が出土している。

1683・1684はEP5の出土遺物で、ともに瓦器椀である。1683は上半部である。口縁端部はわずかに外反し、内面に稜を作る。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面やや不良、外面良好。和泉型瓦器椀IV-1期(13世紀中葉)に相当。1684は底部で、高台の断面は小さな逆台形状を呈する。見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好だが胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀III-3期(13世紀前葉)に相当する。

1685はEP6の出土遺物で、瓦器椀の上半部である。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀IV-1～2期(13世紀中葉～後葉)に相当する。

遺構の年代は出土した瓦器椀から13世紀前葉～中頃に位置付けられる。

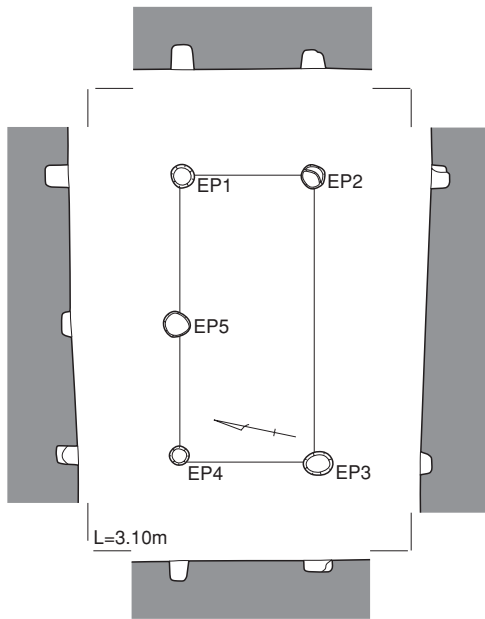
掘立柱建物 97号 (I地区 SA1097) (第659・670図)

I-13区東部中央南寄り、t・a 11～13グリッドに位置する。東西4間(4.7m)南北1間(2.6m)床面積12.2㎡(底部を含めて南北2間(4.0m)18.8㎡)、13基の柱穴をもつ北庇付きの側柱建物で、建物主軸はN82°Eを向く。柱穴は隅丸方形または不整円形を呈し、径20～48cm、深度7～56cmを測る。柱痕はEP3～7で確認。

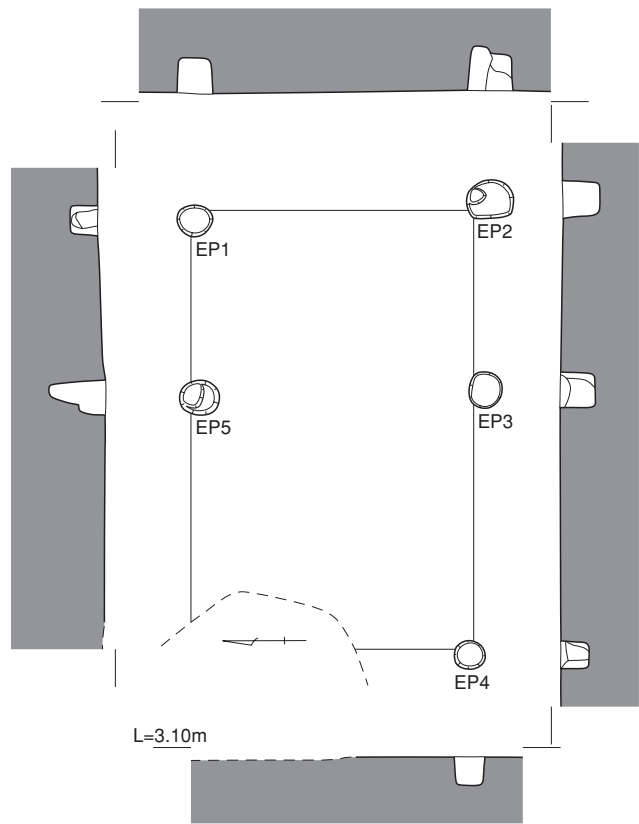
遺物はEP1～3・5・6・12でみられ、土師質土器片・供膳具(回転糸切りほか)・皿・杯(ともに回転糸切り)・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、スラグ、粘板岩製砥石、壁土か、が出土。

1686はEP2の出土遺物で、粘板岩製の砥石。薄い板状を呈し、上端は丸みを帯びる。上面と上端面の2面を使用し、右側面は切断痕か。

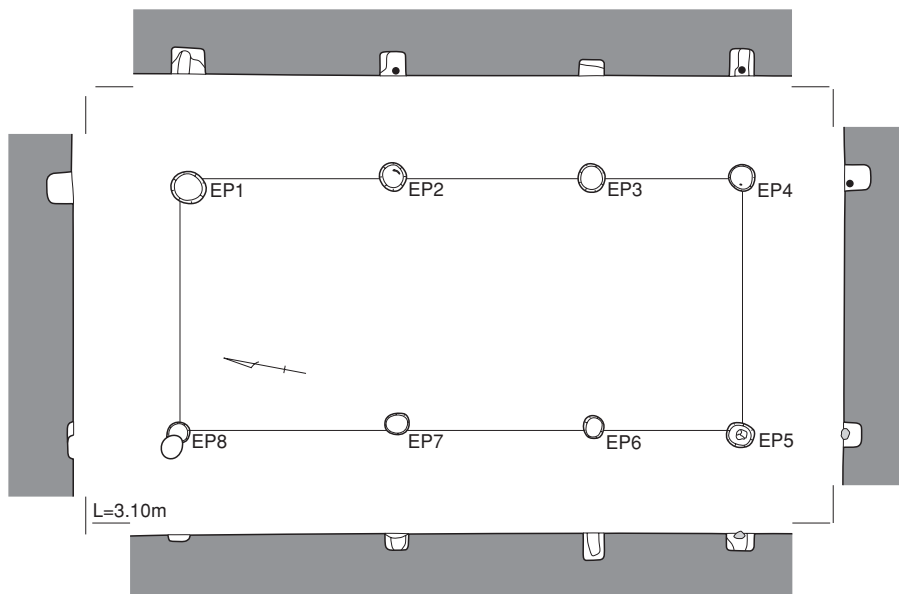
1687～1693はEP3の出土遺物である。1687～1689は土師質土器皿である。1687は回転台成形で、



第 655 图 I - 13 区 SA1093 遺構実測図



第 656 图 I - 13 区 SA1094 遺構実測図



第 657 图 I - 13 区 SA1095 遺構実測図



底部外面に回転糸切り痕を残すとみられるが不確定。焼成不良により摩耗。1688は回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に在地花崗岩を含む。1689は非回転台成形で、底部外面に指頭圧痕を残す。還元炎焼成気味で、かつ胎土精良であることからⅣ期頃の和泉型瓦器皿である可能性も考えられる。1690は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

1691は瓦器碗の上半部である。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。和泉型瓦器碗Ⅳ-1期(13世紀中葉)に相当。1692は瓦器皿である。見込みにジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着不良で、酸化炎焼成気味。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。1693は東播系須恵質土器捏鉢の上半部である。口縁端部を上方に拡張する。森田編年第Ⅱ期第2段階に相当し、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

遺構の年代は、概ね13世紀前半頃に位置付けられる。

掘立柱建物 98号 (I地区 SA1098) (第660・671図)

I-13区東部南側、s・t 12・13グリッドに位置する。東西3間(4.1m)南北2間(3.0m)床面積12.3㎡、9基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN77°Eを向く。柱穴は不整円形または不整な隅丸方形を呈し、径24～37cm、深度20～39cmを測る。柱痕はEP2・3・5・9で、根石はEP5で確認。

遺物はEP2・3・5・7・9でみられ、土師質土器片・供膳具・皿(回転糸切り)・杯(回転糸切りほか)・煮炊具・鍋、瓦器片・碗・皿、が出土している。

1694はEP2の出土遺物で瓦器碗の下半部である。高台は幅広で、断面は低平な逆三角形を呈し、貼り付けは粗雑。焼成不良により摩耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素は吸着しないが、瓦質焼成である。胎土はやや粗めで、砂岩・泥岩を含む。形状や胎土・焼成から在地産瓦器碗と考えられる。

1695・1696はEP9の出土遺物で、ともに回転台成形の土師質土器杯である。1695は底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により摩耗。部分的に炭素付着。胎土にチャートを含む。1696は上半部。焼成不良により摩耗・剥離著しい。器面に炭素付着。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代とみられる。

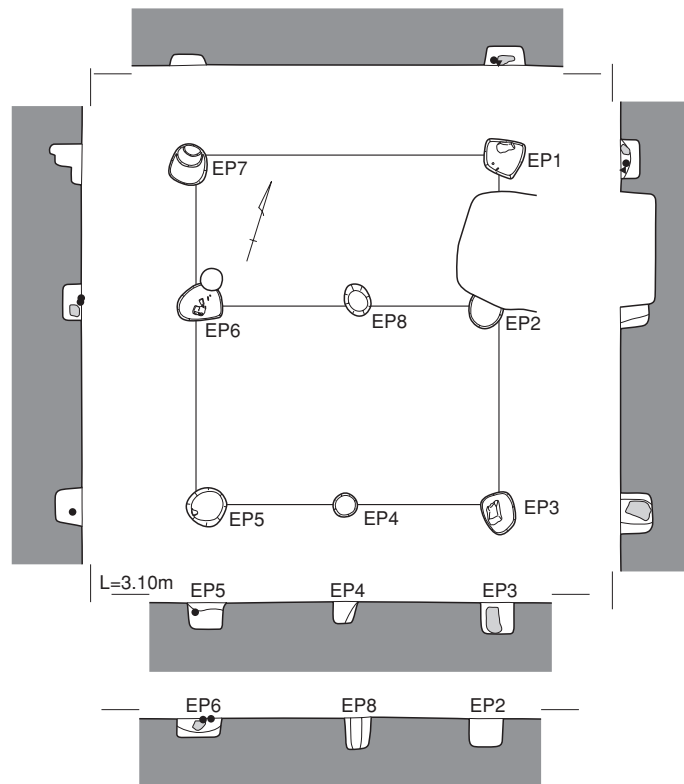
掘立柱建物 99号 (I地区 SA1099) (第661図)

I-13区中央部南端、q・r 9・10グリッドに位置する。東西2間(3.3m)南北2間(4.3m)床面積14.2㎡、9基の柱穴をもつ総柱建物で、建物主軸はN13°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し、径18～37cm、深度10～36cmを測る。柱痕はEP3・5～7で確認。遺物はEP3～7でみられ、土師質土器片・供膳具、瓦器片、チャート礫、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

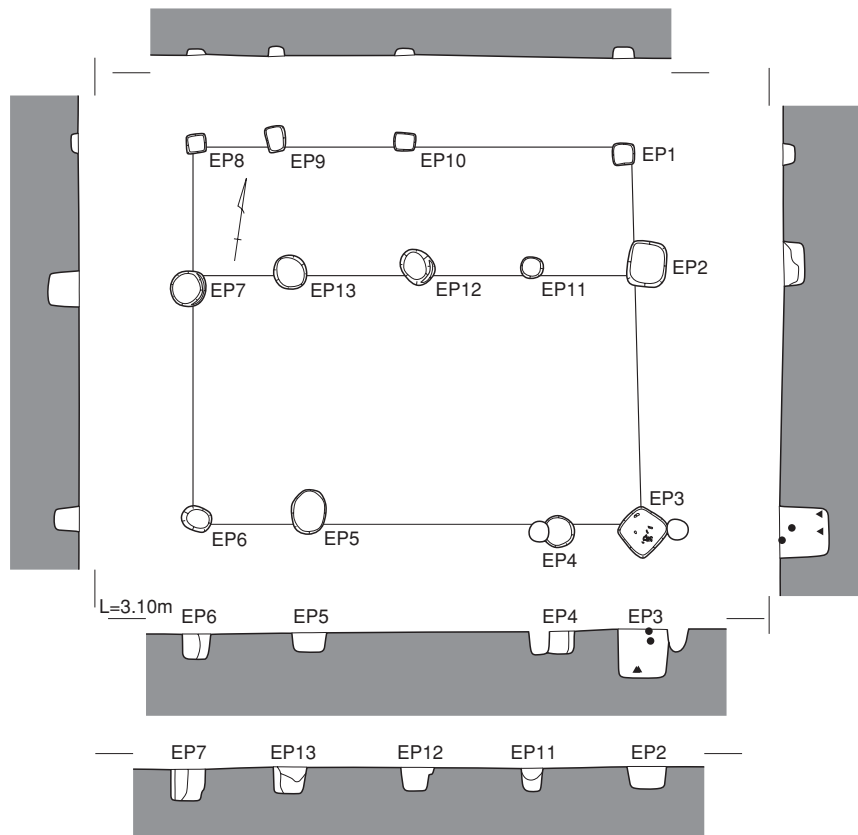
遺構の年代を決定する根拠に乏しいが、瓦器片が出土していること、近似した主軸方位をもつ建物の年代から、概ね13世紀代とみられる。

掘立柱建物 100号 (I地区 SA1100) (第662・672図)

I-13区中央部北側、t・a 8・9グリッドに位置する。東西2間(3.7m)南北3間(6.6m)床面積24.4㎡、9基の柱穴をもつ掘立柱建物で、建物主軸はN13°Wを向く。攪乱により北西隅の柱穴を欠く。柱穴は不整円形を呈し、径30～48cm、深度16～46cmを測る。柱痕はEP4～6で確認。遺物はEP1～5・8・9でみられ、土師質土器片・供膳具・皿(ともに回転糸切りほか)・煮炊具・鍋、瓦器片・碗、凝灰

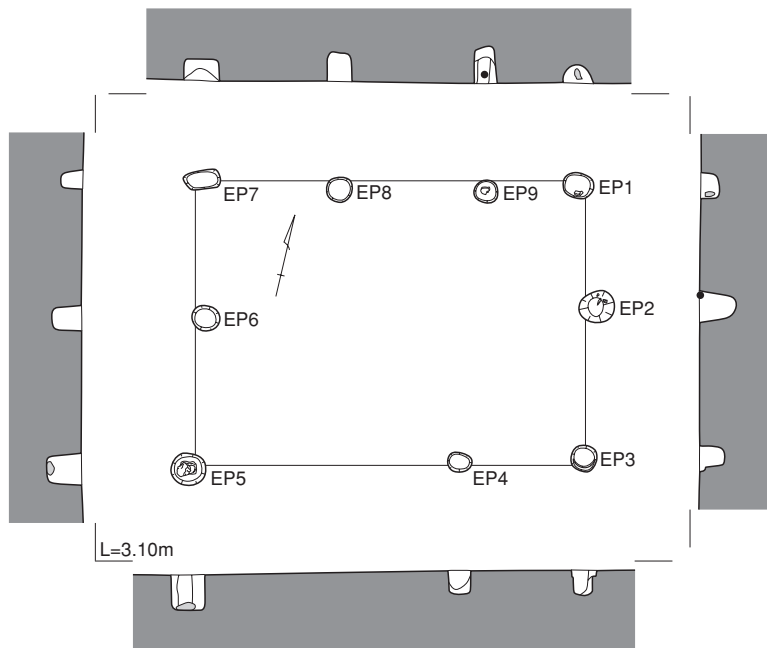


第 658 图 I - 13 区 SA1096 遺構実測図

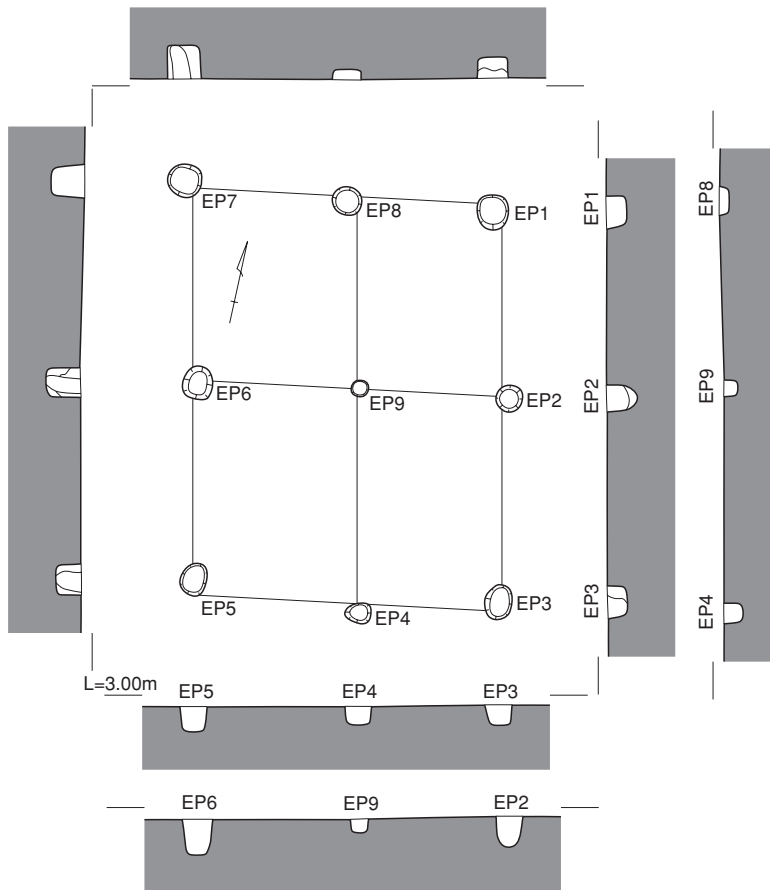


第 659 图 I - 13 区 SA1097 遺構実測図





第 660 图 I - 13 区 SA1098 遺構実測図



第 661 图 I - 13 区 SA1099 遺構実測図



岩製砥石、が出土。

1697 は EP3 の出土遺物で、回転台成形の土師質土器杯上半部である。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。1698 は EP9 の出土遺物で凝灰岩製の砥石である。5面を使用。うち2面に敲打痕を伴う。太い筋状の擦痕が確認できる。

遺構の年代は、出土遺物および主軸方位から概ね 13 世紀代とみられる。

掘立柱建物 101 号 (I 地区 SA1101) (第 663 図)

I - 13 区中央部北寄り、r・s 6・7 グリッドに位置する。東西 3 間 (6.8 m) 南北 1 間 (1.4 m) 床面積 9.5㎡、7 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N79° E を向く。きわめて細長い建物である。遺構に切られ北西隅の柱穴を欠く。柱穴は不整円形を呈し、径 16 ~ 40cm、深度 5 ~ 22cm を測る。

遺物は EP7 から土師質土器杯が出土している。遺構の年代を決定する材料に乏しいが、SA1107 と主軸方位を同じくすることから、概ね 12 世紀代と考えておく。

掘立柱建物 102 号 (I 地区 SA1102) (第 664・673 図)

I - 13 区西部北側、q ~ s 4 ~ 6 グリッドに位置する。東西 1 間 (3.5 m) 南北 3 間 (7.2 m) 床面積 25.2㎡、8 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N12° W を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 27 ~ 45cm、深度 15 ~ 43cm を測る。柱痕は EP1・2・7 で確認。遺物は EP1 ~ 5・7・8 でみられ、土師質土器供膳具・皿 (回転糸切り)・煮炊具・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、が出土している。

1699 は EP4 の出土遺物で土師質土錘。細身でやや長め。焼成良好で胎土精良。

1700 は EP5 の出土遺物で瓦器皿。歪みのため復元器形は低平で復元径も過大気味。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅳ期前半頃とみられる。

1701 は EP7 の出土遺物で瓦器椀の上半部。口縁外面のヨコナデ弱く、口縁端部はわずかに内彎し、体部外面のユビオサエは弱い。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 ~ Ⅳ - 1 期 (13 世紀前葉 ~ 中葉) 頃とみられ、形状から模倣品の疑いあり。

遺構の年代は、瓦器椀の年代から 13 世紀前半 ~ 中頃とみられる。

掘立柱建物 103 号 (I 地区 SA1103) (第 665・674 図)

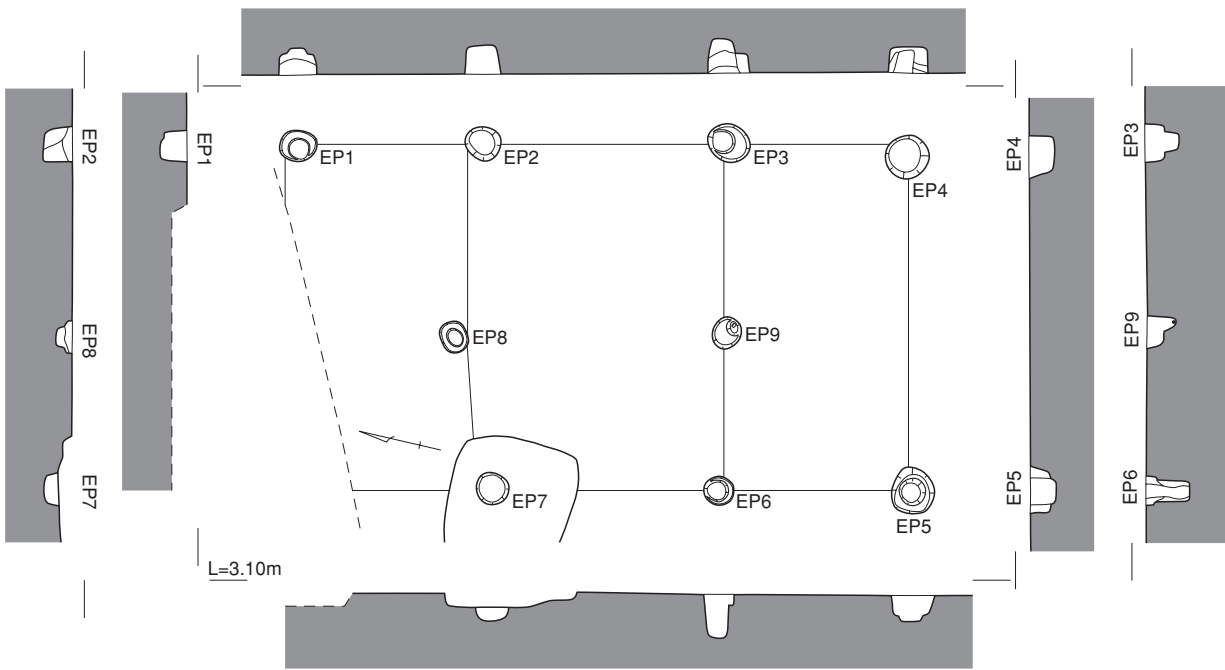
I - 13 区西部中央北寄り、q・r 5・6 グリッドに位置する。東西 2 間 (2.8 m) 南北 2 間 (4.2 m) 床面積 11.8㎡、7 基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸は N10° W を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 26 ~ 40cm、深度 12 ~ 39cm を測る。柱痕は EP3・4・6 で確認。遺物は EP3 ~ 5・7 でみられ、土師質土器片・土錘、瓦器片・椀、が出土。

1702 は EP4 出土の瓦器椀上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着不良で、酸化炎焼成する。和泉型瓦器椀Ⅳ - 2 期 (13 世紀後葉) に相当。

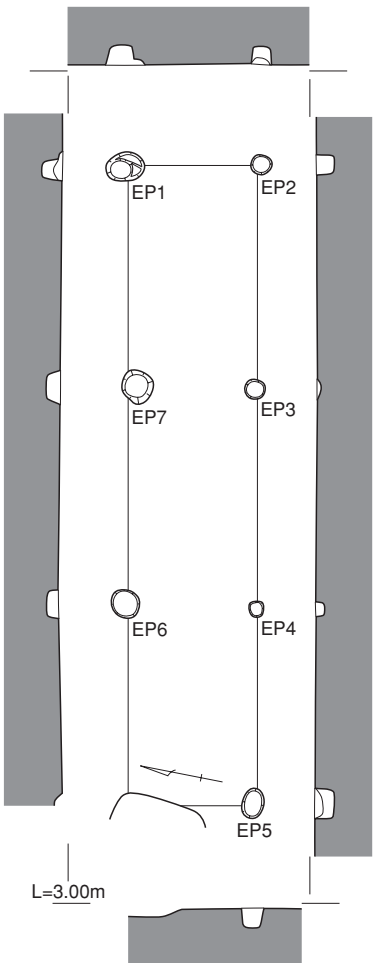
遺構の年代は、瓦器椀の年代から 13 世紀後半頃に位置付けられる。

掘立柱建物 104 号 (I 地区 SA1104) (第 666・675 図)

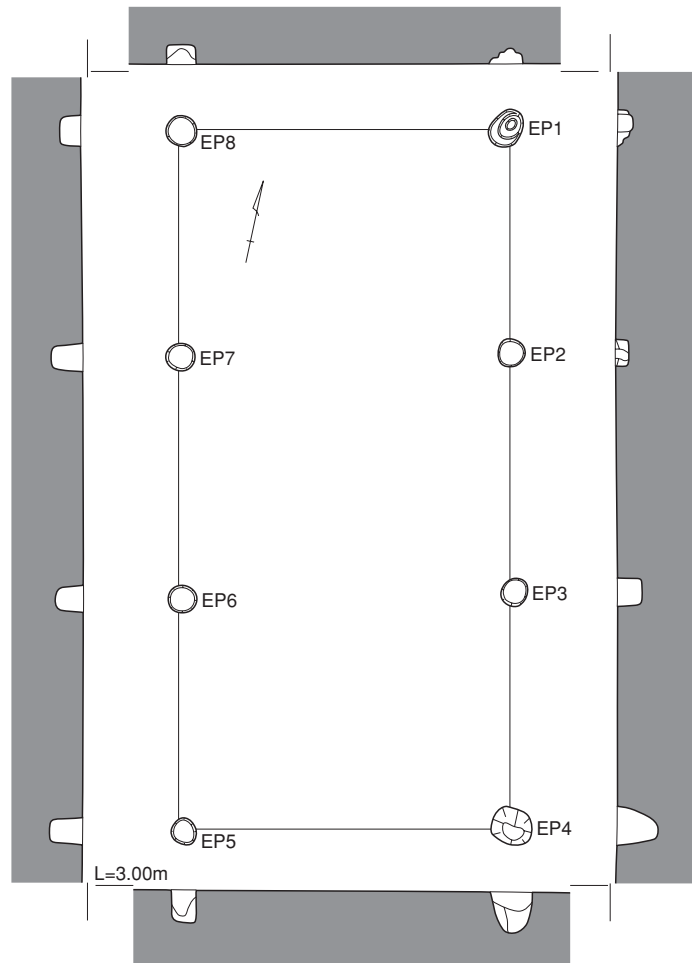
I - 13 区西部中央北寄り、q ~ s 4 ~ 6 グリッドに位置する。東西 2 間 (4.8 m) 南北 1 間 (3.1 m) 床面積 14.9㎡ (庇部を含めて南北 3 間 (5.8 m) 27.8㎡)、12 基の柱穴をもつ南北庇付きの側柱建物で、



第 662 图 I - 13 区 SA1100 遺構実測図

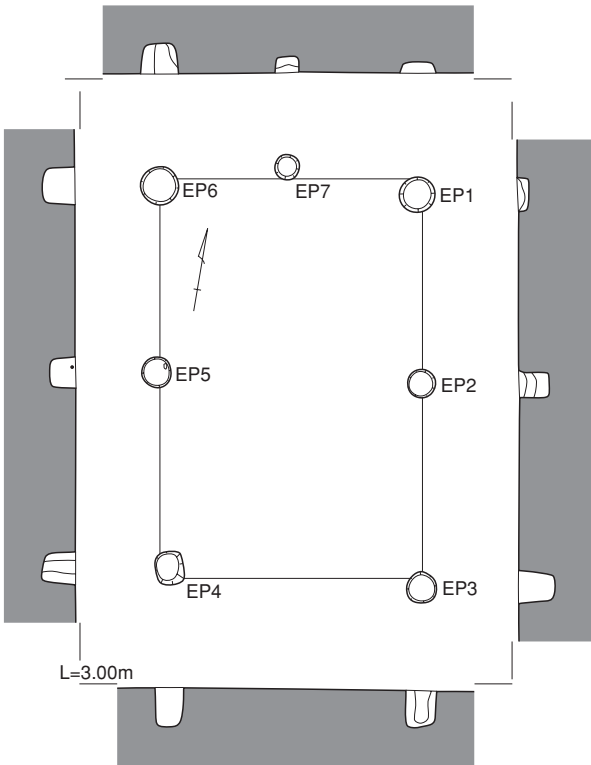


第 663 图 I - 13 区
SA1101 遺構実測図

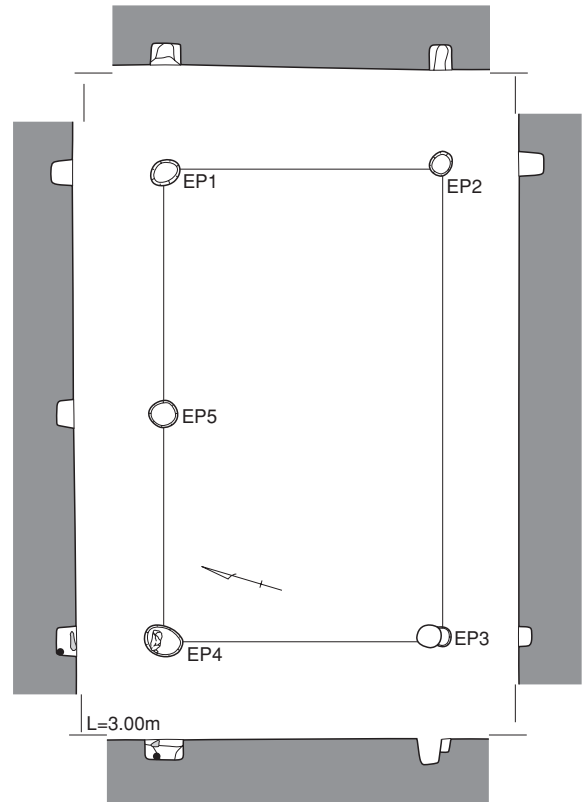


第 664 图 I - 13 区
SA1102 遺構実測図

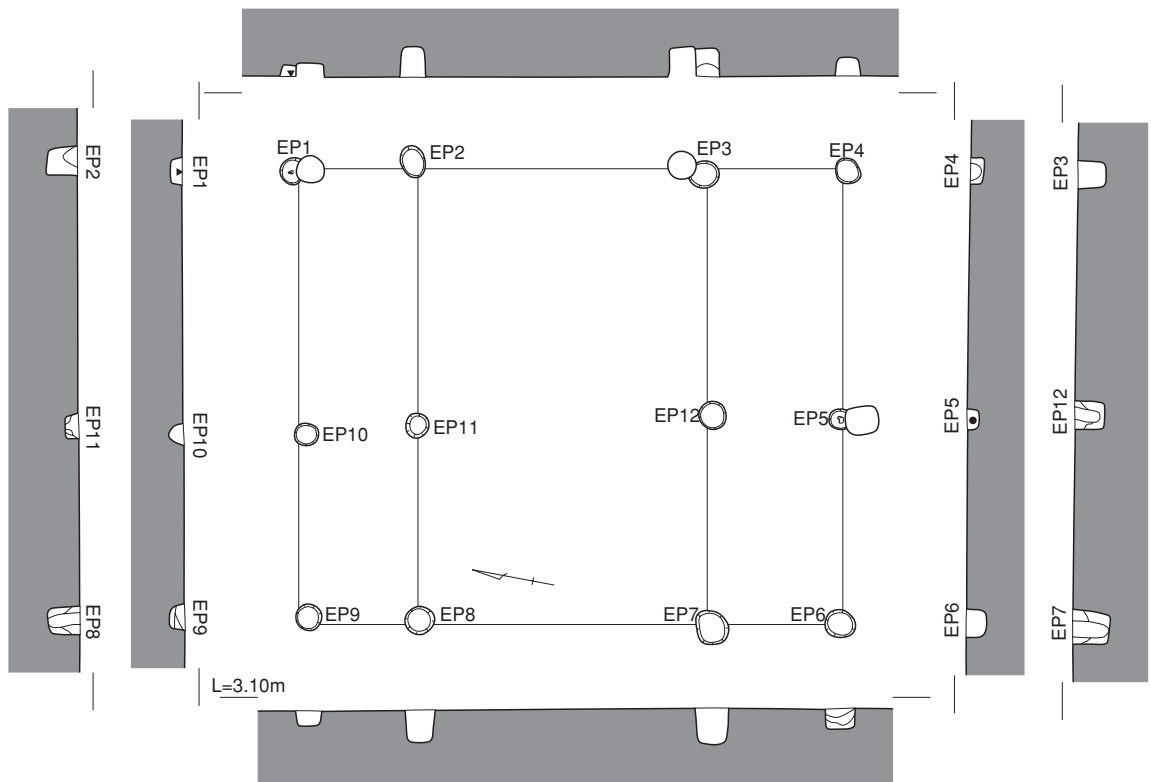




第 665 图 I - 13 区 SA1103 遺構実測図

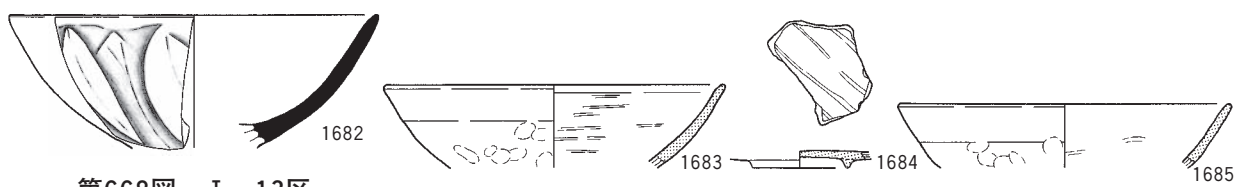


第 667 图 I - 13 区 SA1105 遺構実測図



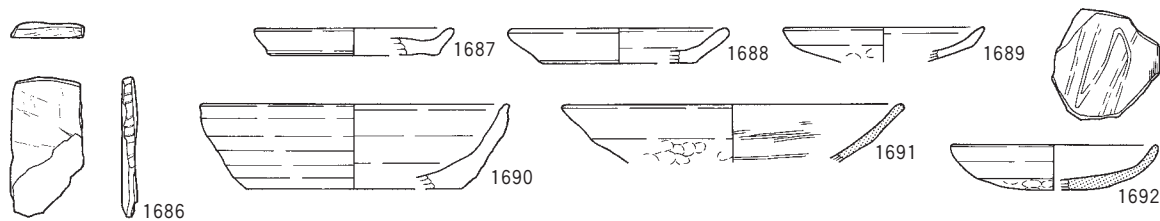
第 666 图 I - 13 区 SA1104 遺構実測図





第668图 I-13区
SA1095EP2遺物実測図

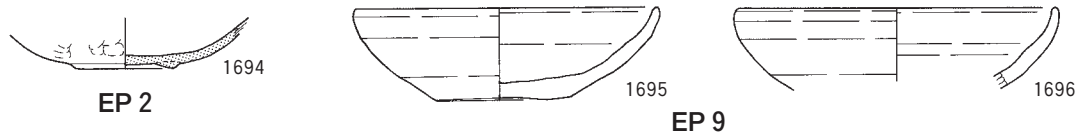
EP 5
第669图 I-13区 SA1096遺物実測図



EP 2

EP 3

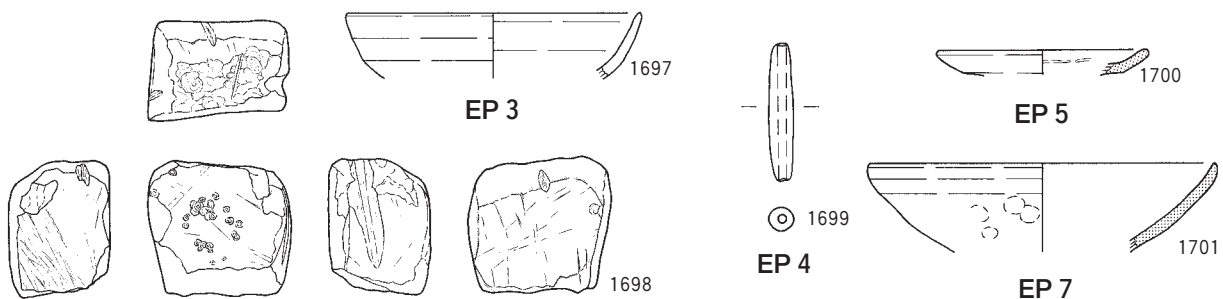
第670图 I-13区 SA1097遺物実測図



EP 2

EP 9

第671图 I-13区 SA1098遺物実測図



EP 3

EP 5

EP 4

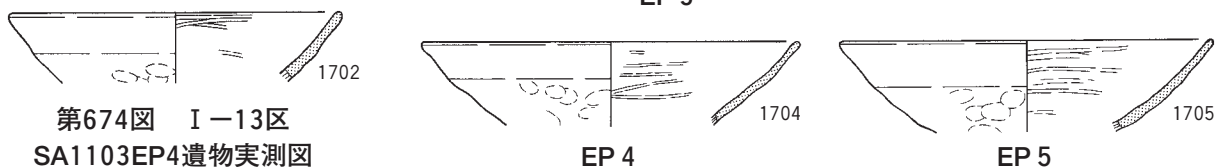
EP 7

第672图 I-13区 SA1100遺物実測図

第673图 I-13区
SA1102遺物実測図



EP 3



第674图 I-13区
SA1103EP4遺物実測図

EP 4

EP 5

第675图 I-13区 SA1104遺物実測図



建物主軸はN80°Eを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径23～39cm、深度12～39cmを測る。柱痕はEP4・7・8・12で確認。遺物はEP2～5・7・10・11でみられ、土師質土器片・供膳具・土錘、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、が出土。

1703はEP3の出土遺物で、東播系須恵質土器捏鉢の口縁部片。口縁端部をやや拡張。口縁外面は重焼により自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当する。

1704はEP4の出土遺物で瓦器椀の上半部。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。胎土に砂岩を含む。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

1705はEP5の出土遺物で瓦器椀の上半部。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2～3期（12世紀末～13世紀前葉）に相当。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前半頃に位置付けられる。

掘立柱建物105号（I地区 SA1105）（第667図）

I-13区西部中央南寄り、p・q5・6グリッドに位置する。東西2間（5.0m）南北1間（3.0m）床面積15.0㎡、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN73°Eを向く。柱穴は不整形円形を呈し、径20～41cm、深度14～26cmを測る。柱痕はEP1・2で確認。

遺物はEP4・5でみられ、土師質土器片、瓦器椀が出土しているが、実測可能な遺物はない。遺構の年代については、瓦器椀が出土することから概ね12世紀後半～13世紀代とみられるが、決定する根拠に乏しい。

掘立柱建物106号（I地区 SA1106）（第676・679図）

I-13区西部中央南寄り、p・q4・5グリッドに位置する。東西1間（3.7m）南北2間（5.7m）床面積21.1㎡（底部を含めて東西3間（5.0m）28.5㎡）、11基の柱穴をもつ東西庇付きの側柱建物で、建物主軸はN15°Wを向く。柱穴は概ね円形を呈し、径27～47cm、深度15～45cmを測る。柱痕はEP2・4・6・7・9・11で確認。

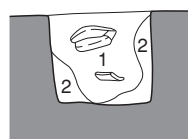
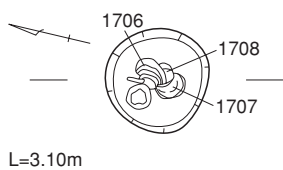
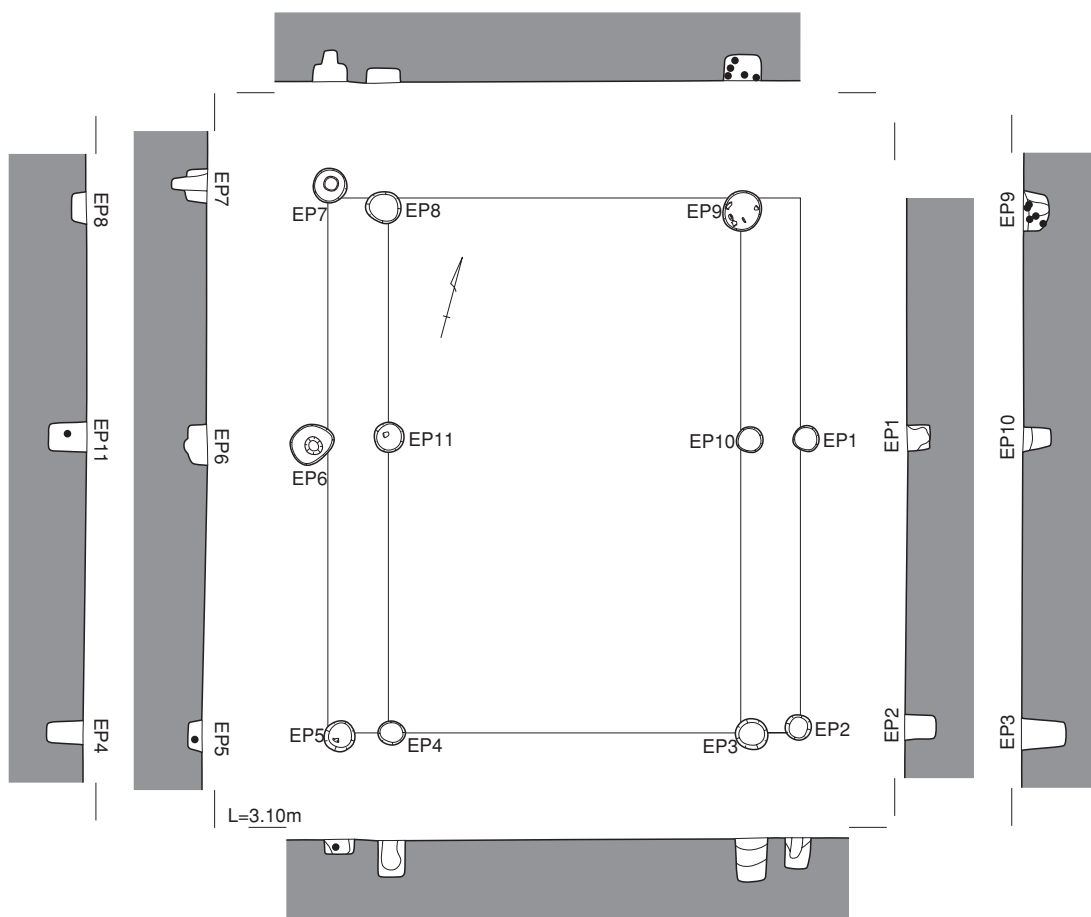
遺物はEP1・3・5・6・8～11でみられ、土師質土器片・供膳具（回転糸切りほか）・皿（回転糸切り・ユビオサエ）・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀・皿、が出土している。

1706～1708はEP1の出土遺物で、中央部に重なった状態で出土していることから柱抜き取り後に埋納されたものと考えられる。1706は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。器面に炭素付着。1707は完形の土師質土器皿。低平で器形に歪みあり。非回転台成形で底部外面に指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗著しい。胎土にチャートを含む。京都系土師皿Dタイプの在地模倣品と考えられ、概ね13世紀代に位置付けられる。1708はほぼ完形の瓦器皿。器形に歪みあり。焼成不良により磨耗しヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期後半頃か。

1709はEP5の出土遺物である。瓦器椀の上半部である。外面にきわめて粗い横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面不良、外面やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

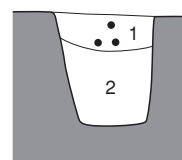
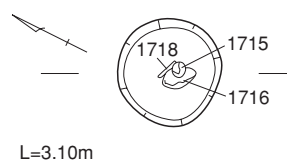
1710～1714はEP9の出土遺物である。1710～1713は和泉型瓦器椀の上半部で、1710～1712はⅢ-3期（13世紀前葉）に相当、1713は瓦器椀Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当する。

1710は内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良で酸化炎焼成



1. 灰オリーブ色 7.5Y5/2 シルト (しまり強)
2. 灰オリーブ色 5Y5/3 シルト (しまり強)

EP1 平・断面



1. 灰オリーブ色 5Y5/2 シルト (しまり強)
炭化物片・焼土粒含む
2. オリーブ色 5Y5/4 シルト (しまり強)
炭化物片含む

EP10 平・断面



第 676 図 I - 13 区 SA1106 遺構実測図

気味。1711 は焼成不良により摩耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素は外面に部分的に吸着するのみで酸化炎焼成する。1712 は内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着は内面不良、外面良好。1713 は口縁外面は 2 段でヨコナデする。内面は粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着やや不良で、外面に重焼痕を残す。

1714 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片である。口縁端部を上方に拡張する。酸化炎焼成し、わずかに炭素付着。焼成不良により摩耗著しい。胎土は粗く、チャートを含む。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当するとみられるが、胎土や焼成から模倣品の可能性も考えられる。

1715～1718 は EP10 の出土遺物で、1717 を除き遺構中央部第 1 層から出土。1715 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成良好。1716 は完形の瓦器皿。器形に歪みあり。口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状か連結輪状のヘラミガキを施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着やや不良。胎土はやや粗めでチャートを含む。和泉型瓦器Ⅲ期頃か。

1717 は瓦器碗の上半部である。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好だが炭素吸着不良。和泉型瓦器碗Ⅲ-3 期（13 世紀前葉）に相当。1718 は瓦器碗で、底部を欠く。口縁～体部内面に横位のヘラミガキ、見込みに螺旋状か連結輪状ヘラミガキを施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着良好。法量から和泉型瓦器碗Ⅲ-1 期（12 世紀後葉）に相当。

1719 は EP11 の出土遺物で、瓦器碗の下半部である。腰が張った器形で、器壁は厚め。高台の断面は低平な逆三角形を呈する。体部内面は横位のヘラミガキ、見込みは平行ヘラミガキを施すとみられるが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好だが、胎土は酸化炎焼成する。胎土は粗く、チャートを含むとみられる。和泉型瓦器碗Ⅲ-3～Ⅳ-1 期（13 世紀前葉～中葉）頃の模倣品か。

遺構の年代は、出土遺物から 12 世紀後半～13 世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物 107 号（I 地区 SA1107）（第 677・680 図）

I-13 区西部南端、n～p 6・7 グリッドに位置し、南東側は調査区外に延びる。東西 2 間（4.7 m）南北 2 間（3.8 m）床面積 17.9㎡〈庇部を含めて南北 3 間（4.8 m）22.6㎡〉、11 基の柱穴をもつ北庇付きの掘立柱建物で、建物主軸は N79° E を向く。柱穴は概ね円形を呈し、径 28～38cm、深度 12～44 cm を測る。柱痕は EP2・4・7 で確認。遺物は EP2～6・9・11 でみられ、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・碗、鉄製品片、炭化材、が出土している。

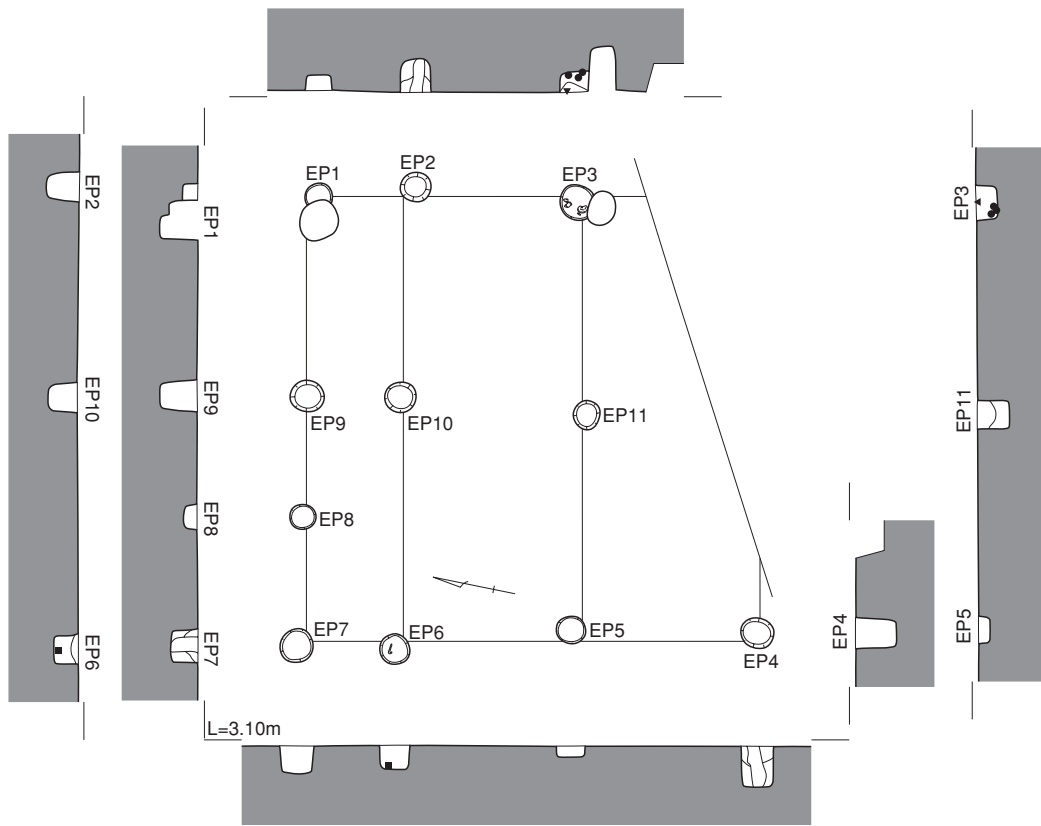
1720・1721 は EP3 の出土遺物で、ともに瓦器碗である。1720 は深身で、ハの字に開くしっかりとした高台をもつ。外面に粗い横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により摩耗し不明瞭。炭素吸着やや不良で、胎土は酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅱ-3 期（12 世紀後葉）頃とみられる。1721 は上半部。焼成不良により摩耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面不良、外面良好で、酸化炎焼成気味。法量から和泉型瓦器碗Ⅲ-3 期（13 世紀前葉）に相当すると考えられる。

1722 は EP6 出土の棒状の鉄製品で、下端を尖らせる。上部は大きく彎曲する。釘か鑿であろうか。

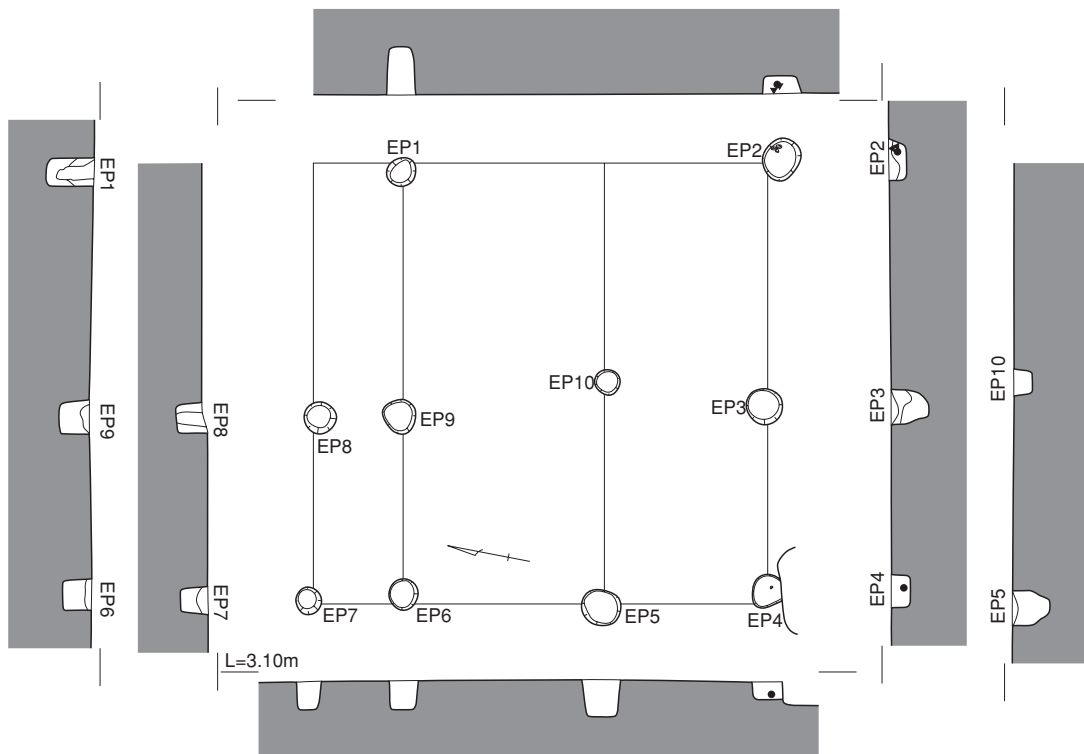
出土遺物に時期幅があるが、残存率に優れている 1720 の時期から、概ね 12 世紀後半と考えておく。

掘立柱建物 108 号（I 地区 SA1108）（第 678・681 図）

I-13 区西部南端、n・o 4・5 グリッドに位置する。東西 2 間（5.1 m）南北 2 間（4.2 m）床面積



第 677 图 I - 13 区 SA1107 遺構実測図



第 678 图 I - 13 区 SA1108 遺構実測図



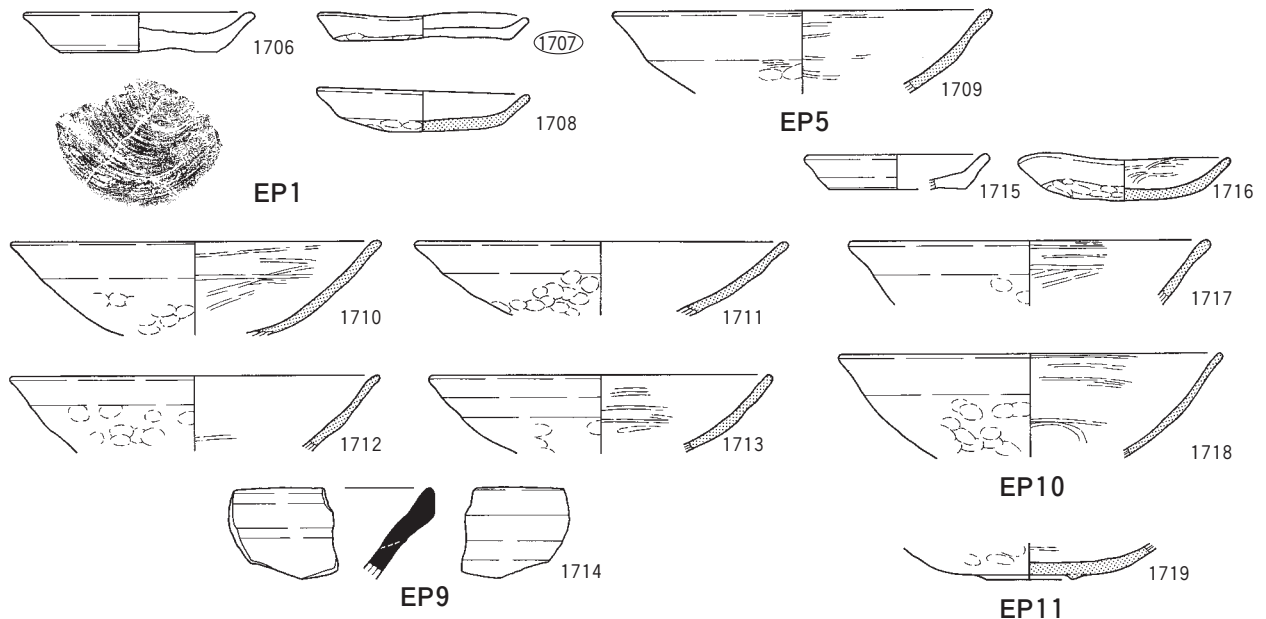
21.4㎡〈底部を含めて南北3間(5.2m) 26.5㎡〉、10基の柱穴をもつ北庇付きの掘立柱建物で、建物主軸はN79°Eを向く。北東隅の柱穴を欠く。柱穴は不整形円形を呈し、径26～44cm、深度18～50cmを測る。柱痕はEP1・8で確認。

遺物はEP1～4・6・9でみられ、黒色土器片(B類)、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋・土錘、砂岩礫・チャート礫、が出土。1723・1724はEP2出土の土師質管状土錘で、1723は瓦質焼成気味。

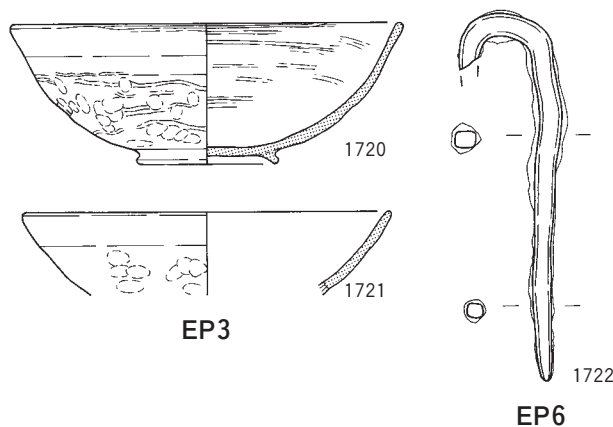
本遺構はSA1107と同方位の主軸で規模も近似し、東西に列んで配置する。年代についてはSA1107とほぼ同時期とみられるが、瓦器碗が出土していないことからやや幅をもたせて12世紀代としておく。

掘立柱建物 109号 (I地区 SA1109) (第682図)

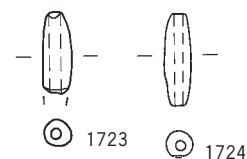
I-13区西部南側、n・o 4・5グリッドに位置する。東西2間(3.5m)南北2間(4.0m)床面積14.0㎡、



第679図 I-13区 SA1106遺物実測図

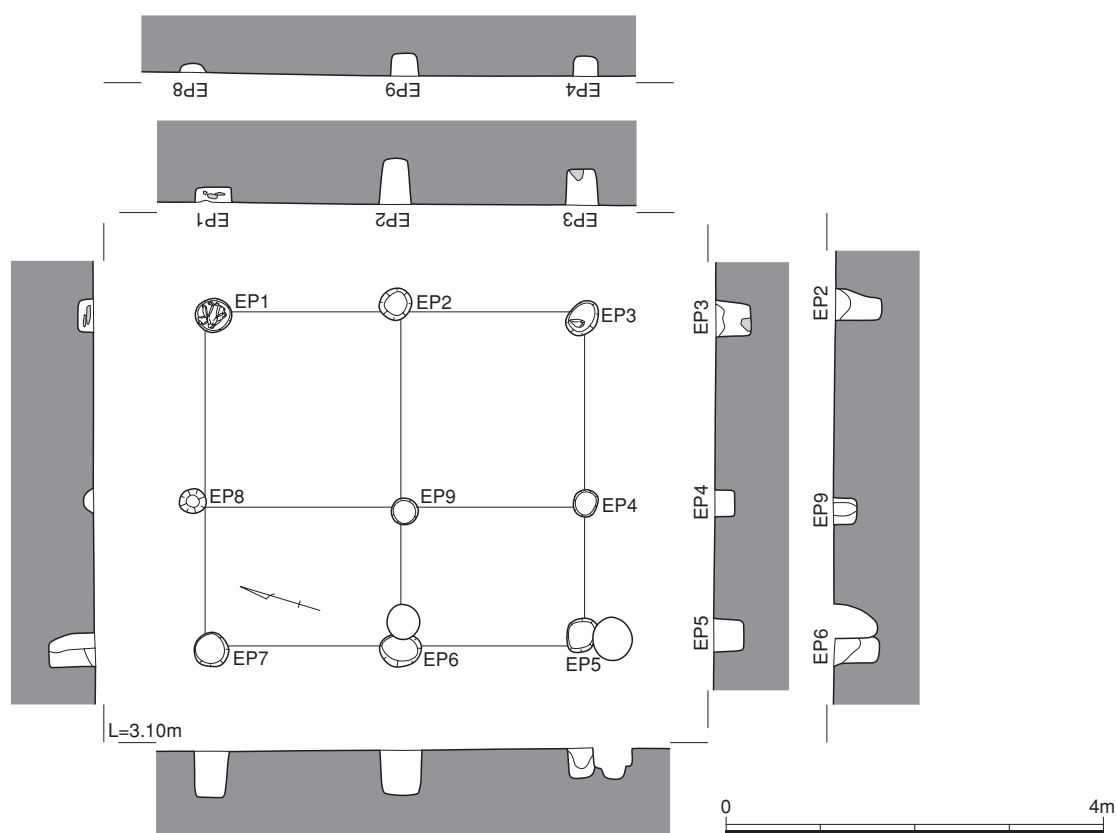


第680図 I-13区 SA1107遺物実測図



第681図 I-13区 SA1108EP2遺物実測図





第 682 図 I - 13 区 SA1109 遺構実測図

9 基の柱穴をもつ総柱建物で、建物主軸は N16° W を向く。柱穴は不整円形を呈し、径 28 ～ 43cm、深度 10 ～ 49cm を測る。柱痕は EP7・9 で確認。EP1 では角礫が充填された状態で検出されたほか、EP3 では根石の可能性ある礫を検出。

遺物は EP2・3・5 ～ 7・9 でみられ、土師質土器片・供膳具・皿・杯（回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・碗・皿、鉄滓、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代とみられる。

土坑 1153 号（I 地区 SK11153）（第 683・709 図）

I - 13 区南東隅、t・a 15・16 グリッドに位置し、東側は調査区外に延びる。長軸 90cm 短軸 82cm 深度 53cm を測る隅丸方形土坑である。断面は方形で、埋土は 2 層に分層。遺物は、土師質土器供膳具（回転糸切りほか）・皿（回転糸切り）、瓦器碗、青磁碗、が出土。

1725 は瓦器碗で、底部を欠く。厚めの器壁をもつ。口縁はヨコナデによって内面に稜をつくる。内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着は口縁内面のみ。胎土に砂岩を含む。在地産瓦器碗と考えられる。

土坑 1155 号（I 地区 SK11155）（第 684・710 図）

I - 13 区、t 14・15 グリッドに位置する。長軸 174cm 短軸 131cm 深度 21cm を測る不整な長方形土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 4 層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（ともに回転糸切り）・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、白磁片、鉄釘か、が出土。1726 は鉄釘とみられる。両端を欠く。

土坑 1162 号（I 地区 SK11162）（第 685・711 図）

I - 13 区東部南側、s・t 14 グリッドに位置する。長軸 158cm 短軸 122cm 深度 38cm を測る隅丸長方形土坑である。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・皿・杯（回転糸切りほか）・羽釜脚部・鍋、瓦器片・椀・皿、鉄製品片・鉄滓、が出土している。

1727 は土師質土器杯で、底部を欠く。外反する口縁をもち、内面の口体部境に稜をつくる。非回転台成形で、体部外面に弱い指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。京都系土師皿 D タイプの在地模倣品とみられる。1728 は土師質土器杯の下半部である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に泥岩とチャートを含む。

1729 は瓦器皿。外面のヨコナデは弱い。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。器表面は酸化炎焼成するものの、胎土の大部分は褐灰色を呈する。胎土にチャートを含む。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

1730 は瓦器椀の上半部。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成および炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅳ - 2 期（13 世紀後葉）に相当。1731 は瓦器椀の底部。高台の断面はきわめて小さな逆三角形形状を呈し、底径も小さい。見込みは螺旋状ヘラミガキか。焼成良好だが、炭素吸着は内面不良、外面やや不良。和泉型瓦器椀Ⅳ - 1 ~ 2 期（13 世紀中葉~後葉）に相当。

土坑 1204 号（I 地区 SK11204）（第 686・712 図）

I - 13 区東部北端、c 10 グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。長軸残存長 170cm 短軸 102cm 深度 14cm を測る不整な長楕円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切り・ユビオサエほか）・皿（ユビオサエ）・杯（回転糸切り・ユビオサエほか）・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢か、瓦器片・椀、常滑甕、白磁片、壁土か、凝灰岩製砥石・チャート礫、が出土している。

1732 ~ 1738 は土師質土器皿である。非回転台成形で、底部内外面に指頭圧痕を残す。焼成は良好なものが多いが、器面に炭素が付着するものもみられる。胎土は概して精良で、泥岩あるいはチャートを含む個体がある。京都系土師皿の在地模倣品とみられ、口縁を外反気味につくる 1734・1737・1738 は D タイプを模倣したものであろうか。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

1739 ~ 1747 は土師質土器杯である。1743 を除き埋土下位から出土。口縁~体部は強いヨコナデによって外反し、内面に稜線をつくる。非回転台成形で、底部内外面に弱い指頭圧痕を残す。焼成は良好なものが多い。胎土は概して精良で、泥岩あるいはチャートを含む。京都系土師皿 D タイプの在地模倣品とみられ、概ね 13 世紀代に位置付けられる。1746 は内面調整の最終で右上方にナデ上げる。

1748 は回転台成形の土師質土器杯で、底部を欠く。焼成不良により磨耗。器面に部分的に煤付着。焼成不良により磨耗。

1749 ~ 1752 は瓦器椀である。1749 は上半部。低平な器形で、器壁は厚い。内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成良好。炭素は吸着せず酸化炎焼成する。1750 は上半部である。低平な器形で、体部内面に粗い横位のヘラミガキを短い単位で施す。焼成良好で、炭素吸着は内面不良、外面良好。1749・

1750 は和泉型瓦器碗Ⅳ－２期（13世紀後葉）に相当する。

1751 は底部で、高台の断面はきわめて幅広・低平な逆台形状を呈する。見込みに螺旋状とみられるヘラミガキを施す。焼成良好で堅緻。炭素吸着は内面不良、外面吸着なし。胎土は粗めである。1752 は底部で、高台の断面はきわめて小さな逆三角形を呈する。見込みのヘラミガキは螺旋状か。焼成良好だが、炭素吸着なし。胎土に花崗岩を含む。1751・1752とも和泉型瓦器碗Ⅳ－１～２期（13世紀中葉～後葉）に相当。

1753 は東播系須恵質土器捏鉢である。口縁は上下に拡張し、口縁外面は重焼により炭素付着。回転台成形で、体部外面に指頭圧痕、体部内面に斜位のユビナデ、底部外面に不明瞭ながら回転糸切り痕を残す。体部内面下半は使用により磨耗。胎土にチャートを含む。森田編年第Ⅱ期第２段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。1754 は凝灰岩製の砥石で、４面を使用する。

本遺構からは土師質供膳具の殆どを京都系の非回転台土器が占めており、特異な様相を示す。近辺の屋敷地で使用され、廃棄されたものと考えられる。遺構の年代は和泉型瓦器碗から13世紀後葉に位置付けられる。

土坑 1207 号（Ⅰ地区 SK11207）（第 687・713 図）

Ⅰ－13 区中央部北側、b 10 グリッドに位置する。長軸 138cm 短軸 72cm 深度 37cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は方形で、底面は西に向けて下がりフラットでないことから土壌墓から除外した。埋土は 2 層に分層。遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・皿・煮炊具、瓦器碗、が出土。

1755 は埋土中位から出土した瓦器碗の上半部。体部外面の指頭圧痕は弱い。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着なく酸化炎焼成する。胎土は精良だが、チャートを含む。和泉型瓦器碗の模倣品とみられるが、在地産とは断定できない。

土坑 1210 号（Ⅰ地区 SK11210）（第 688・714 図）

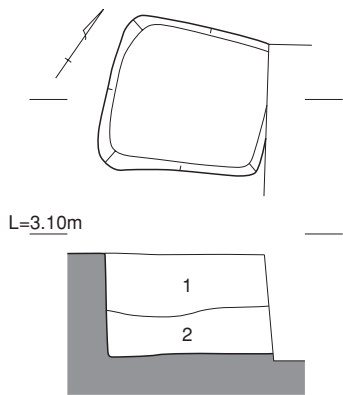
Ⅰ－13 区中央部北寄り、t・a 10 グリッドに位置し、SD1080 に切られる。長軸 192cm 短軸 130cm 深度 12cm を測る不整形の落ち込みである。断面は浅い皿状で、底面の南側はやや深い。埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）、瓦器片・碗、青磁（龍泉）碗、が出土している。

1756 は青磁碗の底部で、内外面とも無文。内面および体部～高台外側まで施釉し、一部は畳付を越えて高台内側に及ぶ。釉の表面は荒れて光沢を失い、露胎部は素地が赤化していることから二次被熱したのと考えられる。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類（12世紀中頃～後半）であろうか。

土坑 1217 号（Ⅰ地区 SK11217）（第 689 図）

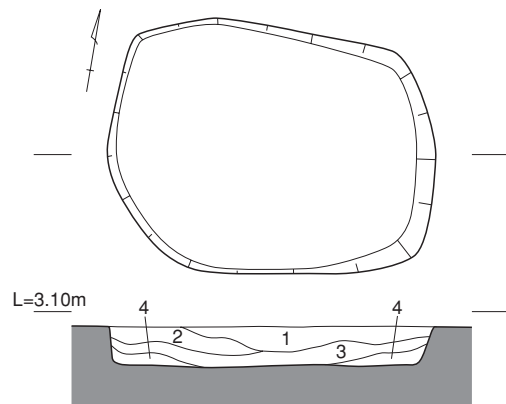
Ⅰ－13 区中央部南側、q・r 10 グリッドに位置する。長軸 140cm 短軸 97cm 深度 13cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。深度が浅いことから土壌墓から除外した。

遺物は、須恵器供膳具、土師質土器片・供膳具・杯（回転糸切り）、瓦器皿、が出土しているが、実測可能な遺物はない。



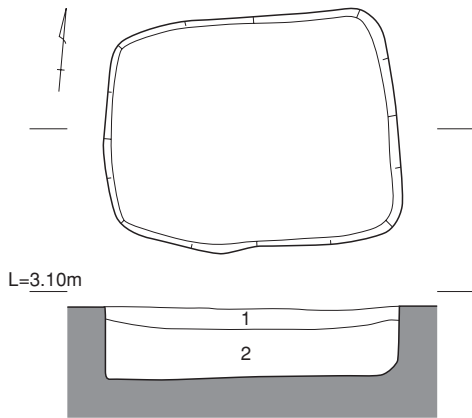
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 683 図 I - 13 区 SK11153 遺構実測図



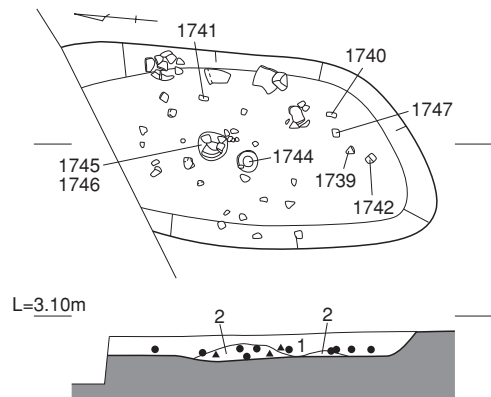
1. にぶい黄橙色 10YR6/3 砂質土 (しまり強)
2. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 (しまり強)
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片・焼土粒わずかに含む
4. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)

第 684 図 I - 13 区 SK11155 遺構実測図



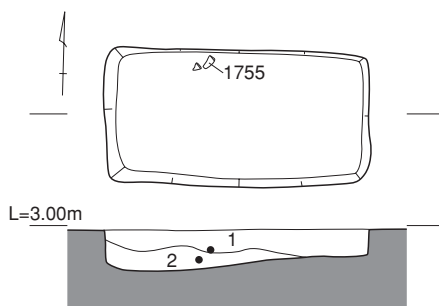
1. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (しまり強)
炭化物片多く含む
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト (しまり強)
黄褐色砂質土ブロック含む

第 685 図 I - 13 区 SK11162 遺構実測図



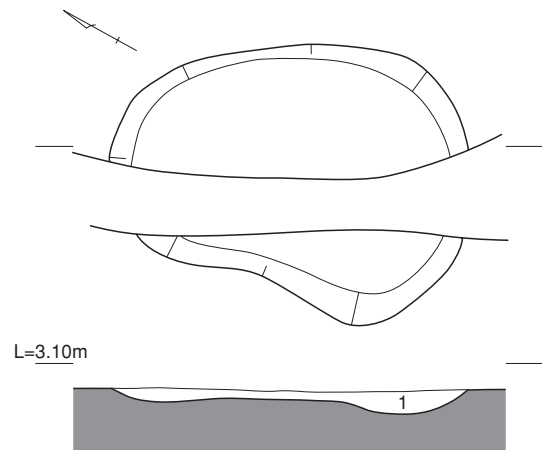
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片含む
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片・焼土粒多く含む

第 686 図 I - 13 区 SK11204 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第 687 図 I - 13 区 SK11207 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)

第 688 図 I - 13 区 SK11210 遺構実測図



土坑 1225 号 (I 地区 SK11225) (第 690・715 図)

I - 13 区中央部南側、r 9 グリッドに位置する。長軸 114cm 短軸 81cm 深度 20cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、瓦器椀・皿、が出土している。

1757 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1758 は瓦器皿。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。

土坑 1239 号 (I 地区 SK11239) (第 691・716 図)

I - 13 区中央部北端、t・a 7 グリッドに位置する。長軸 189cm 短軸 104cm 深度 14cm を測る隅丸長方形の土坑である。断面は浅い逆台形状で、埋土は 1 層である。遺物は、土師質土器杯 (回転糸切り)、瓦器椀、瓦質土器煮炊具、鞆羽口、鉄釘、が出土。

1759 は S 字状に変形した細身の棒状鉄製品で、釘としておく。両端を欠く。

土坑 1250 号 (I 地区 SK11250) (第 692・717 図)

I - 13 区西部中央南寄り、q 7 グリッドに位置し、北側を SK11249 に東側を SD1085 に切られる。長軸残存長 55cm 短軸残存長 50cm 深度 15cm を測る概ね円形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、須恵器杯、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、スラグ、が出土している。1760 は細身の土師質管状土錘である。焼成良好。胎土精良。

土坑 1259 号 (I 地区 SK11259) (第 693・718 図)

I - 13 区中央部北側、s 6 グリッドに位置する。長軸 120cm 短軸 92cm 深度 29cm を測る不整な隅丸長方形土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、が出土。

1761 は第 3 層出土の瓦器椀。高台断面は幅広で低い逆台形状。内面に横位・斜位のヘラミガキ、見込みに形状不明のヘラミガキを施すが、ともに不明瞭。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好だが酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 期 (13 世紀前葉) に相当。

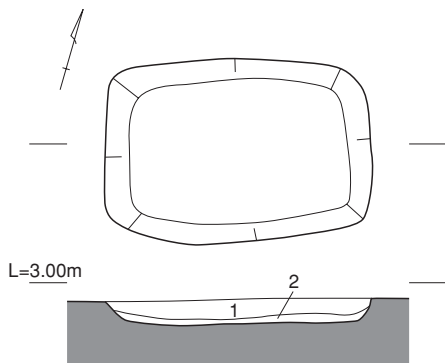
土坑 1268 号 (I 地区 SK11268) (第 694・719 図)

I - 13 区西部南側、o 5 グリッドに位置する。長軸 121cm 短軸 104cm 深度 50cm を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具・皿・煮炊具、瓦器片・椀、鉄釘か、が出土している。1762 は鉄釘とみられる。両端を欠き、やや変形する。

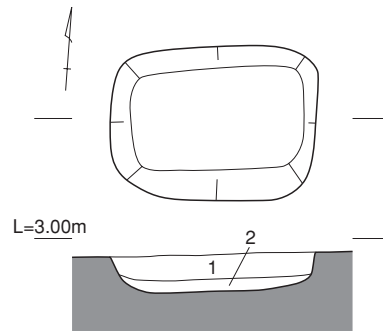
土坑 1271 号 (I 地区 SK11271) (第 695 図)

I - 13 区西部南端、n 5 グリッドに位置する。長軸 100cm 短軸 91cm 深度 25cm を測る隅丸方形の土坑である。断面はエッジの緩い方形で、埋土は 2 層に分層できる。



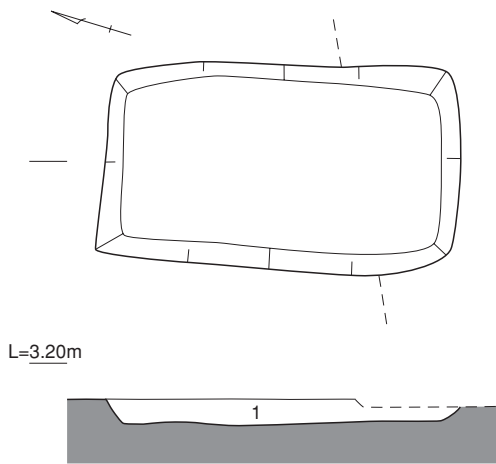
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 689 図 I - 13 区 SK11217 遺構実測図



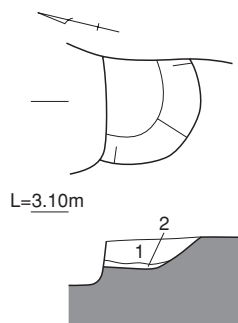
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 690 図 I - 13 区 SK11225 遺構実測図



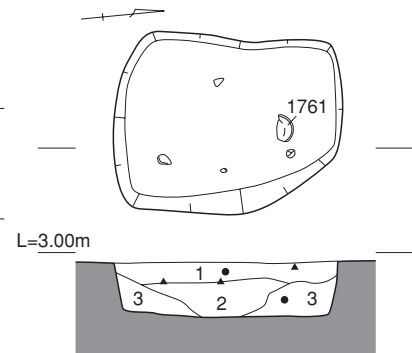
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)

第 691 図 I - 13 区 SK11239 遺構実測図



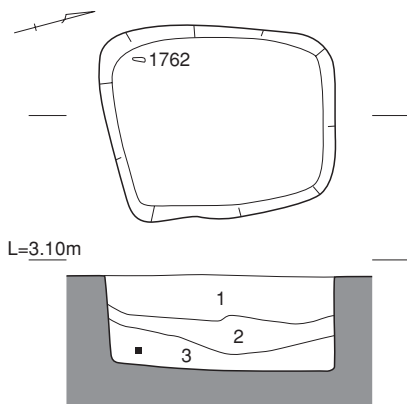
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 692 図 I - 13 区 SK11250 遺構実測図



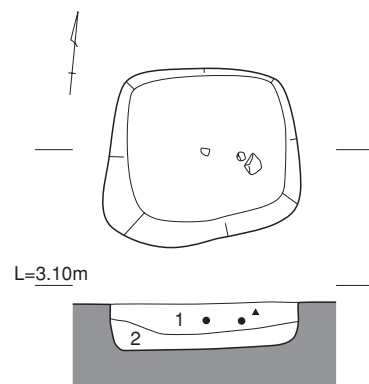
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)

第 693 図 I - 13 区 SK11259 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 694 図 I - 13 区 SK11268 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 695 図 I - 13 区 SK11271 遺構実測図



遺物は、黒色土器椀（A類）、土師質土器片・供膳具・煮炊具・土錘、瓦器片・椀、壁土か、鞆羽口か、鉄製品片、石灰岩礫、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑 1282 号（I 地区 SK11282）（第 696・720 図）

I - 13 区西部北側、q・r 3 グリッドに位置する。長軸 141cm 短軸 137cm 深度 22cm を測る隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。東側に 2ヶ所の落ち込みがある。

遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋・土錘、瓦器片・椀、青磁（龍泉）碗、白磁碗、鉄製品片・スラグ、が出土している。

1763・1764 は瓦器椀の底部である。1763 は高台断面が逆台形状を呈する。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成する。和泉型瓦器椀Ⅲ - 2 期（12 世紀末～13 世紀初頭）頃とみられる。1764 は高台断面が幅広できわめて低平であり、貼り付けは粗雑で途切れがある。焼成不良により磨耗するが、炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3～Ⅳ - 1 期（13 世紀前葉～中葉）に相当。

1765 は土師質土器鍋の口縁部片で、端部をわずかに下方に肥厚させる。焼成良好。胎土に花崗岩を含むことから、瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。

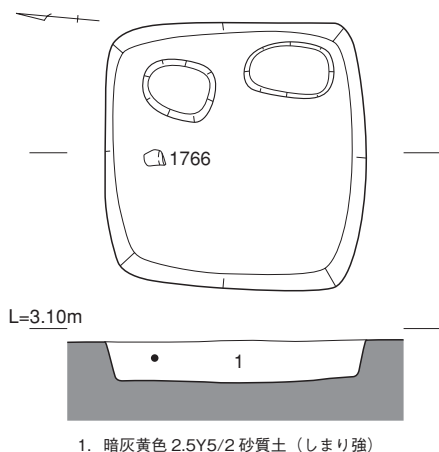
1766 は埋土中位から出土した土師質土器鍋で、底部を欠く。頸部で屈曲して口縁は外方に伸びて端部にかけて肥厚する。外面は体部上半に粗いタテハケ、下半はヨコハケ、内面はヨコハケを施す。体部外面下位にのみ煤の付着が認められることから、竈の使用が想定される。胎土は粗く、金雲母・角閃石・花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸域の産地が推定され、形態から吉備系土師質土器鍋とみられる。山本編年Ⅲ - 1 期（13 世紀前半）とみられる。

1767 は細身の鉄釘である。両端を欠き、くの字に屈曲変形する。

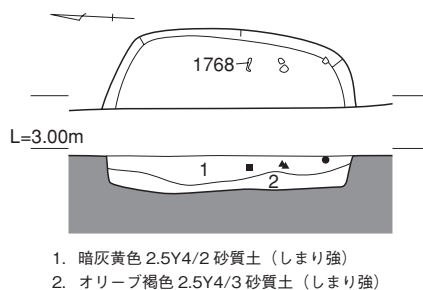
遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀前半と考えられる。

土坑 1290 号（I 地区 SK11290）（第 697・721 図）

I - 13 区中央部北側、a・b 9・10 グリッドに位置し、西側を SD1080 に切られる。長軸 134cm 短軸残存長 42cm 深度 43cm を測る不整な隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は 2 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・ユビオサエ）・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、青磁（龍泉）碗、



第 696 図 I - 13 区 SK11282 遺構実測図



第 697 図 I - 13 区 SK11290 遺構実測図



鉄釘・鉄滓か、砂岩礫、が出土。

1768 は鉄釘 2 点が融着したものの。右を釘 A、左を釘 B とする。釘 A は 2 ヶ所でほぼ直角に屈曲し、コの字状に変形。釘 B は頂部を L 字に屈曲させ、頭部を作る。下半は手前側に彎曲する。

土坑（土壙墓）

本調査区では土坑 140 基のうち、平面形態や土層などから土壙墓である可能性がきわめて高いものとして 18 基を抽出し、11 基について掲載した。本調査区の土壙墓と長方形土坑は列状配置は少数で、小グループで集合する配置パターンが目立つ。また掘立柱建物と近接するものの重複することが少ないことから、居住域を避けて墓を構築したことも推測できる。また区画溝と主軸方位が一致する土壙墓が多いことも他の調査区と同様である。

土坑（土壙墓）1157 号（I 地区 SK11157）（第 698・722 図）

I - 13 区東端部北側、d 14 グリッドに位置し、東側を側溝が切る。長軸残存長 117cm 短軸 88cm 深度 22cm を測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具、須恵質土器捏鉢、瓦器椀、瓦質土器羽釜、肥前陶器皿、が出土。

1769 は瓦質土器羽釜の上部片。鏝部は貼り付けで作り、鏝・口縁ともに端部を方形に仕上げる。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。胎土に泥岩・チャートを含むとみられるが、不確定。山城型瓦質羽釜の搬入品であろう。概ね 13 世紀代に位置付けられる。

1770 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁端部を上方に拡張し、口縁外面は重焼により自然釉付着。森田編年第 II 期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当する。

土坑（土壙墓）1188 号（I 地区 SK11188）（第 699 図）

I - 13 区中央部南側、r・s 11 グリッドに位置し、東側を SK11187 に切られる。長軸 150cm 短軸 80cm 深度 22cm を測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は方形で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、スラグ・鉄滓、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1190 号（I 地区 SK11190）（第 700 図）

I - 13 区中央部南側、r・s 11 グリッドに位置し、南側を SK11187・11188・11189 に切られる。長軸 167cm 短軸 100cm 深度 47cm を測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、西側に段をもつ。埋土は 4 層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片、鉄滓、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1201 号（I 地区 SK11201）（第 701・723 図）

I - 13 区中央部南側、r 10 グリッドに位置し、東側を SK11200 に西側を SP14876 に切られる。長軸 216cm 短軸 88cm 深度 35cm を測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（回転糸切り）・煮炊具・土錘、

須恵質土器捏鉢か、スラグ、が出土。

1771 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片。口縁端部をわずかに上下に拡張し、口縁外面は重焼によりわずかに炭素付着。森田編年第Ⅱ期第1段階に相当し、12世紀中葉～後半の年代が与えられる。1772 は土師質管状土錘。焼成不良により部分的に磨耗・剥離。

土坑（土壙墓）1202号（I地区 SK11202）（第702図）

I-13区中央部南端、q・r 10・11グリッドに位置し、SD1081に切られる。長軸163cm短軸82cm深度36cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、土師器羽釜、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・煮炊具・土錘、瓦器片、常滑甕か、スラグ・鉄滓、が出土。

土坑（土壙墓）1249号（I地区 SK11249）（第703図）

I-13区西部中央南寄り、q・r 6・7グリッドに位置し、東側をSD1085に切られる。長軸123cm短軸80cm深度24cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀・皿、鉄滓、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1269号（I地区 SK11269）（第704・724図）

I-13区西部南端、n・o 5・6グリッドに位置する。長軸172cm短軸84cm深度36cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は1点のみで、1773は須恵器の台付壺脚部である。第1層から出土。体部下半の器形などから長頸壺などに伴うものとみられる。屈曲して端部が開く形態は、6世紀後半以降の年代が想定される。

土坑（土壙墓）1272号（I地区 SK11272）（第705図）

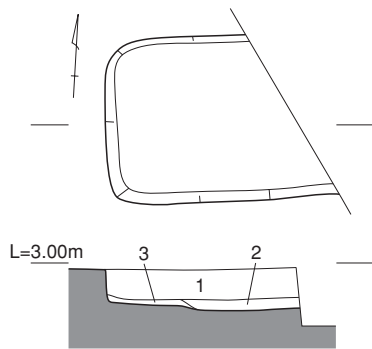
I-13区西部南端、n 4・5グリッドに位置する。長軸176cm短軸98cm深度25cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は6層に分層できる。

遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具、瓦器片・椀（楠葉）、白磁碗、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

土坑（土壙墓）1275号（I地区 SK11275）（第706・725図）

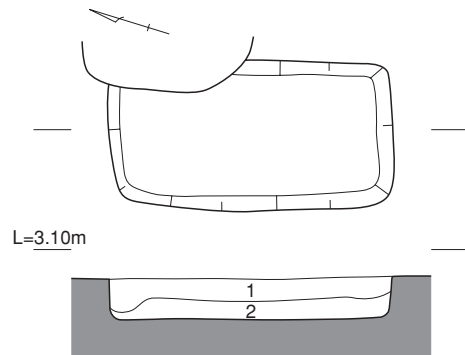
I-13区西部中央南寄り、p 4グリッドに位置する。長軸146cm短軸121cm深度33cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具・皿・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢か、瓦器椀・皿、白磁碗、壁土か、鞆羽口、鉄製品片、が出土している。

1774は白磁碗の上部片で、口縁を玉縁につくる。部分的に釉が荒れ、わずかに釉とびを伴う。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）に相当する。



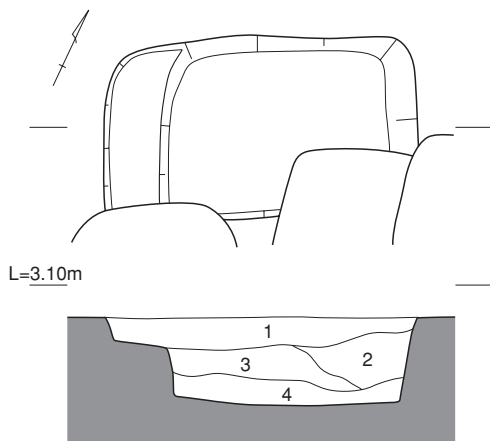
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 698 図 I - 13 区 SK11157 遺構実測図



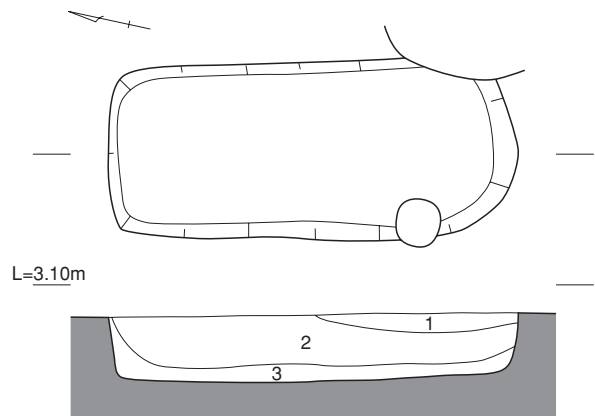
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 699 図 I - 13 区 SK11188 遺構実測図



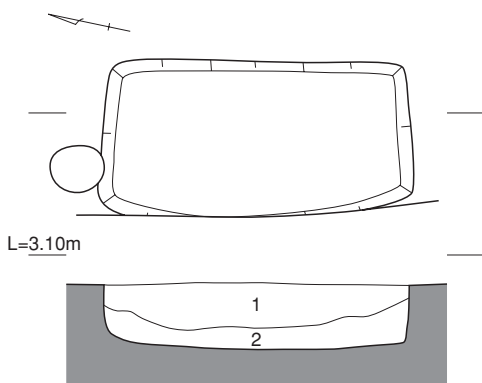
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
オリーブ褐色砂質土ブロック含む
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第 700 図 I - 13 区 SK11190 遺構実測図



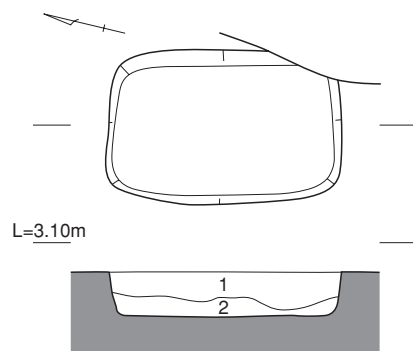
1. 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質土 (しまり・粘性強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 701 図 I - 13 区 SK11201 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

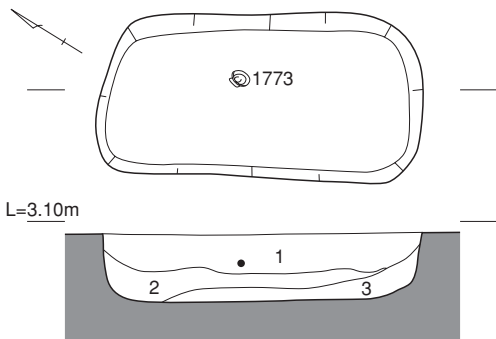
第 702 図 I - 13 区 SK11202 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

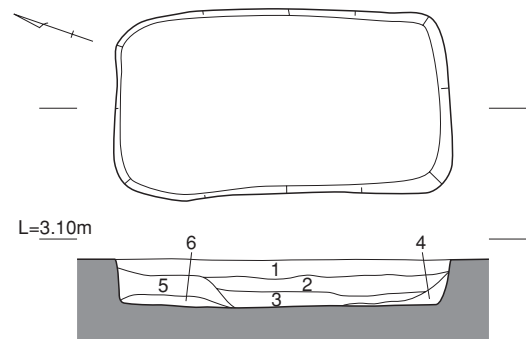
第 703 図 I - 13 区 SK11249 遺構実測図





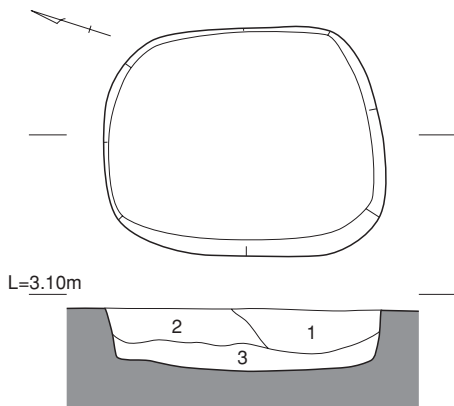
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第704図 I-13区 SK11269 遺構実測図



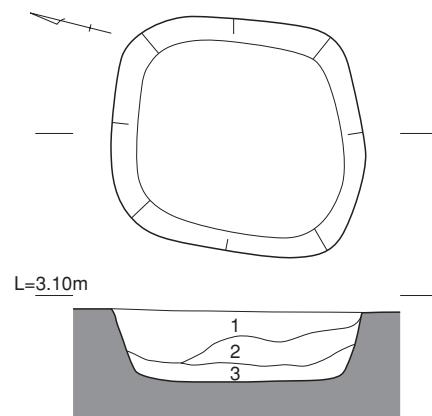
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
炭化物片含む
4. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
5. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 (しまり・粘性強)
6. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)

第705図 I-13区 SK11272 遺構実測図



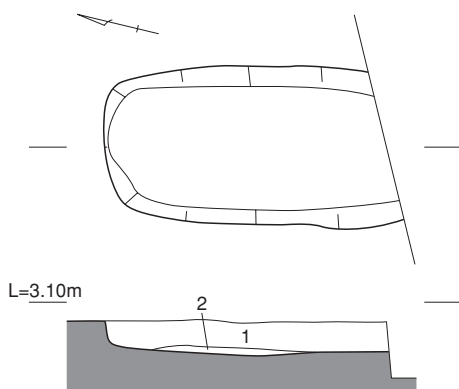
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片含む
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
黄褐色地山ブロック含む
3. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土 (しまり強)

第706図 I-13区 SK11275 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片・焼土粒含む
3. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
黄褐色地山ブロック含む

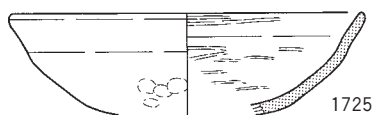
第707図 I-13区 SK11276 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 (しまり・粘性強)

第708図 I-13区
SK11278 遺構実測図



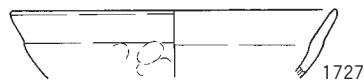


第709図 I-13区
SK11153遺物実測図



1726

第710図 I-13区
SK11155遺物実測図

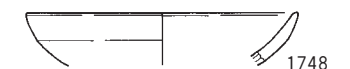
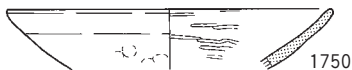
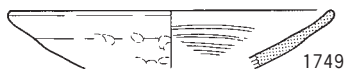
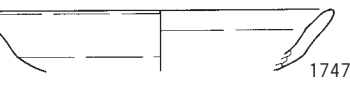
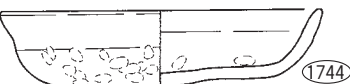
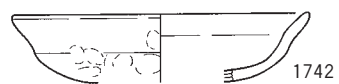
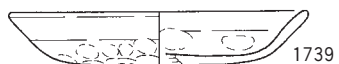
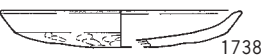
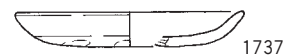
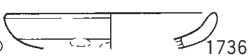
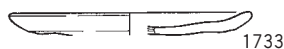
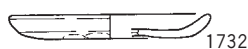


1728



1731

第711図 I-13区 SK11162遺物実測図

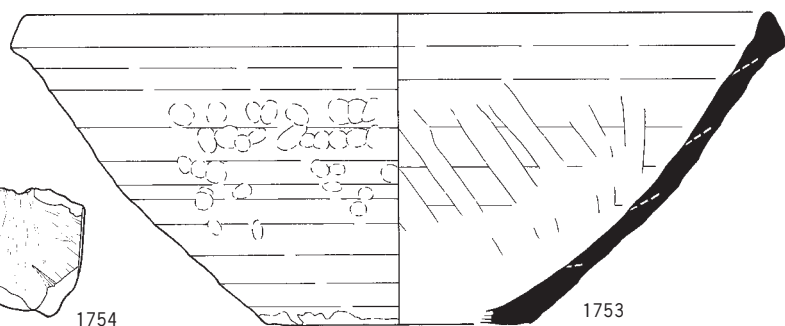


1751

1752



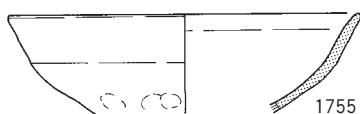
1754



1753



第712図 I-13区 SK11204遺物実測図



1755



1756

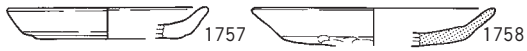
第713図 I-13区
SK11207遺物実測図

第714図 I-13区
SK11210遺物実測図



1726

その他



第715図 I-13区
SK11225遺物実測図



第718図 I-13区
SK11259遺物実測図



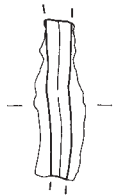
◎ 1759

第716図 I-13区
SK11239遺物実測図



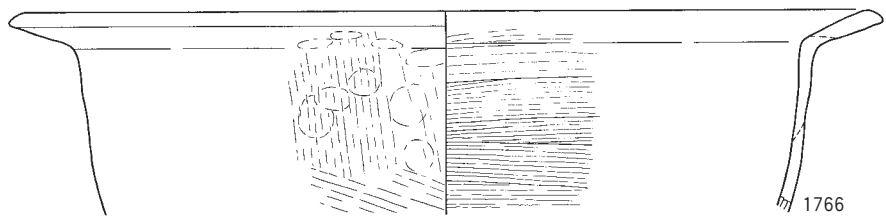
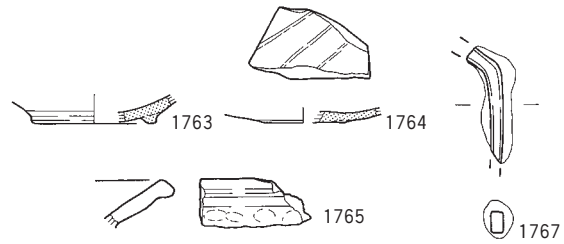
◎ 1760

第717図 I-13区
SK11250遺物実測図

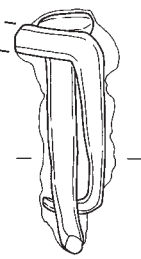


◎ 1762

第719図 I-13区
SK11268遺物実測図

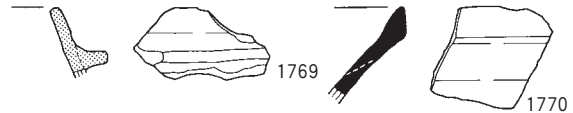


第720図 I-13区 SK11282遺物実測図



◎ 1768

第721図 I-13区
SK11290遺物実測図



第722図 I-13区
SK11157遺物実測図

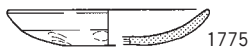


第723図 I-13区
SK11201遺物実測図



第724図 I-13区
SK11269遺物実測図

第725図 I-13区
SK11275遺物実測図



第726図 I-13区 SK11276遺物実測図



土坑（土壙墓）1276号（I地区 SK11276）（第707・726図）

I-13区西部中央南寄り、p3・4グリッドに位置する。長軸134cm短軸126cm深度37cmを測るやや不整な隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢か、瓦器片・椀・皿、白磁碗、鞆羽口、が出土。

1775は瓦器皿である。器形に歪みあり。ヘラミガキは伴わない。炭素吸着やや不良だが、見込みの一部に金属光沢をもつ。焼成堅緻。和泉型瓦器Ⅳ期とみられる。

1776・1777は瓦器椀の上半部。1776は内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗著しく不明瞭。炭素吸着やや不良で酸化炎焼成する。胎土は粗い。1777は内面に粗い横位のヘラミガキを短い単位で施す。焼成良好、炭素吸着なし。ともに和泉型瓦器椀Ⅳ-2期（13世紀後葉）に相当。

土坑（土壙墓）1278号（I地区 SK11278）（第708図）

I-13区南西隅、m・n4グリッドに位置し、南側は調査区外に延びる。長軸残存長150cm短軸84cm深度18cmを測る隅丸長方形の土坑で、土壙墓とみられる。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。

遺物は、土師質土器供膳具・煮炊具、瓦器椀、白磁碗、鞆羽口か、鉄製品片・スラグ、が出土しているが、実測可能な遺物はない。

溝2号（I地区 SD1002）（第654・727・729・739図）

I-13区北辺、a～e6～14グリッドに位置し、西はI-1区、東はI-12区へ延びる東西方向の溝。検出長44.8m幅142cm深度55cmを測り、総延長は112.7mに及ぶ。本調査区では蛇行していることから、主軸はN78°E～N42°Eを向く。断面はU字状で、埋土は2層に分層できる。本調査区では底面は西が低いが、他の調査区も合わせてみるとそれぞれ高低差があり、一定の水流方向は見いだせない。

遺物は、土師質土器片・供膳具・皿（ともに回転糸切りほか）・杯（回転糸切り・ユビオサエ）・煮炊具・鍋・土錘、須恵質土器片・捏鉢・貯蔵具・甕・壺、瓦器片・椀・皿、瓦質土器羽釜、白磁碗、近世染付、砂岩製印石・被熱砂岩礫・砂岩礫、獣骨（歯）、が出土。

1778は土師質土器皿である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1779は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。

1780・1781はほぼ完形の瓦器皿である。1780は見込みに螺旋状のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好。器面に微細なハゼ痕が確認できる。和泉型瓦器Ⅲ期頃とみられる。1781は器形の歪みが大きい。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが、外面に重焼痕を残す。胎土に砂岩・泥岩を含む。和泉型瓦器Ⅳ期頃とみられるが、模倣品で在地産の可能性も考えられる。

1782～1783・1787～1789は瓦器椀の上半部、1784～1786は瓦器椀の下半部あるいは底部である。1782は埋土中位の出土遺物。口縁が内彎気味で、外面のヨコナデ幅は狭い。内外面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗著しく不明瞭。炭素吸着やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-1期（12世紀後葉）前後とみられる。1783は口縁外面を2段でヨコナデする。内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗し、外面は著しい。炭素吸着は外面良好、内面は部分的に吸着し酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

1784は高台断面がしっかりとした逆台形状を呈する。見込みに細い平行ヘラミガキ暗文を施す。焼

成不良により磨耗著しい。炭素吸着は内面良好で、外面吸着なし。酸化炎焼成する。和泉型瓦器碗Ⅲ－1～2期（12世紀後葉～13世紀初頭）に相当。1785は腰が張った器形をもつと考えられる。高台断面は小さな逆台形状を呈する。見込みに連結輪状のヘラミガキ。焼成および炭素吸着は良好だが、胎土は酸化炎焼成。和泉型瓦器碗Ⅲ－2～3期（12世紀末～13世紀前葉）頃とみられる。

1786は器壁がやや厚い。高台の断面は逆三角形で、貼り付けは粗雑。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、見込みにランダムなヘラミガキを施す。内面に部分的に炭化物が付着。焼成不良により外面磨耗。炭素吸着やや不良でムラあり。胎土に泥岩を含む。在地産瓦器碗であろうか。和泉型ならばⅢ－2～3期頃に相当か。

1787は器壁が厚め。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成不良により部分的に磨耗・剥離する。炭素吸着は内面良好、外面やや不良で、酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ－3期（13世紀前葉）に相当。

1788は焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好だが酸化炎焼成する。胎土は粗く、チャートを含む。和泉型瓦器碗Ⅳ－2期（13世紀後葉）に相当するが、胎土や焼成から模倣品の可能性あり。

1789は口・体部の境で内彎し、口縁端部は外反する。口縁外面端部は強いヨコナデによって凹線状の段をつくるが、全周しない。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良でムラあり。焼成良好。胎土に泥岩を含むとみられるが、不確定。口縁内外面に煤や炭化物が付着（図の黒塗り部分）することから灯明皿として使用か。和泉型ならばⅣ－2期（13世紀後葉）に位置付けられるが、模倣品で在地産の可能性も考えられる。

1790は青磁碗の上部。外面にヘラ片彫により蓮弁文を施文する。鎬をもたないことから、大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5・a類（13世紀初頭～前半）に相当。

1791は須恵質土器壺の頸部である。上に向けてラツパ状に開く。最終調整は回転ナデであるが、外面に不明瞭ながらも縦位の稜線がみえることから、板状工具を当ててナデ整形したとみられる。内面の中位は幅の広い横位の板ナデ、下位は縦位のケズリを施す。断面で粘土接合痕が確認できる。十瓶山系とみられるが、同地産かは不明。佐藤編年の壺Cに分類され、第Ⅳ期1～4段階（11世紀後半～13世紀代）に位置付けられる。

1792は土師質管状土錘。外面炭素付着。胎土精良で、砂岩を含む。

1793・1794は東播系須恵質土器捏鉢である。1793は第1層の出土遺物。口縁端部は丸く仕上げ、器壁も薄いことから小型鉢と考えられる。外面に重焼により炭素付着。概ね森田編年第Ⅱ期（12世紀中葉～13世紀初頭頃）とみられる。1794は上半部。口縁を外方に肥厚させ、口縁外面は重焼により自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第2段階～第Ⅲ期第1段階（12世紀末～13世紀後半）に相当。

1795～1799は瓦質土器羽釜。いずれも鏝部は貼り付けで作り、鏝・口縁両端部とも方形に仕上げる。焼成良好なものは1795のみで、他は焼成不良により磨耗。1795は鏝部下端から外下方に伸びる脚部をもつ。他の個体も体部が内彎することから、脚部をもつタイプであろう。炭素吸着はいずれも概ね良好。胎土精良なものは1795のみで、他の個体はやや粗く不確定ながら砂岩・泥岩を含むとみられ、1799は結晶片岩を含む可能性がある。いずれも山城型瓦質土器であるが、焼成・胎土から山城産といえるものは1795だけで、他は模倣品で在地産の可能性もあり。概ね13世紀代に位置付けられる。

1800は土師質土器鍋の上部である。口縁外面をヨコナデし、端部を上方にやや拡張する。胎土は粗く、

チャートを含む。紀伊型鍔付鍋とみられ、概ね13世紀代に位置付けられる。

遺構の年代は、本調査区での出土遺物だけをみると12世紀後葉～13世紀後葉だが、他調査区での出土遺物の年代観から13世紀後半～14世紀前半頃と考えておく。

溝4号（I地区 SD1004）（第654・728・729・740図）

I-1・13区、a～d 2～12グリッドに位置する東西方向の溝。東西ともに調査区外に延びるが、東側はI-3区SD1038と合流する可能性もあるが不確定。検出長52.2m幅170cm深度49cmを測り、主軸はN75°Eを向く。今回I-13区では、調査区北辺のa～d 6～12グリッドに位置する。検出長30.0m幅90cmを測り、主軸はN73°Eを向く。断面は船底状あるいはU字状で、底面は東が低い。埋土は2層に分層。

遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切り）・皿・杯（ともに回転糸切り・ユビオサエほか）・鍋・土錘、須恵質土器捏鉢・甕・供膳具、瓦器片・椀、白磁壺、壁土、鞆羽口、鉄釘・スラグ・鉄滓、砂岩製砥石・被熱砂岩礫・砂岩礫・被熱チャート礫、が出土。

埋土上位から1808・1809・1814、中位から1803・1813・1816、下位から1801・1804・1807・1811が出土。

1801～1805は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1801は焼成不良により磨耗著しい。胎土はきわめて粗く、粒子も大きく、土師質の皿では稀である。砂岩とチャートを含む。1802は器壁がやや薄い。焼成不良により磨耗著しい。胎土にチャートを含む。1803は板目痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土は粗く、粒子は大きい。砂岩・泥岩・在地花崗岩を含む。1804は板目痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土は粗めで、チャートを含む。1805は焼成良好。1806は土師質土器皿である。底部に切り離し痕が確認できないことから、非回転台成形としておく。焼成不良により磨耗。

1807は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により磨耗。胎土にチャートを含む。

1808～1810は土師質土器杯である。1808は回転台成形。底部を欠く。焼成不良により磨耗。胎土に泥岩を含む。1809は上半部。体部外面に弱い指頭圧痕を残すことから非回転台成形とした。焼成不良により磨耗。口縁内外面、部分的に炭素付着。1810は底部を欠く。体部内外面に指頭圧痕を残すことから非回転台成形とした。焼成不良により磨耗著しい。

1811～1814は瓦器椀。1811・1812は低平な器形だが、和泉型瓦器椀Ⅳ-1期（13世紀中葉）に相当。1811はやや腰が張る。高台断面は低平な逆台形状。内面は螺旋状のヘラミガキか。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。1812は上半部である。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好。胎土は粗い。

1813は底部を欠く。内面に太い横位のヘラミガキを施すが、螺旋状であろうか。焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面良好、外面やや不良で、酸化炎焼成気味。胎土は粗い。和泉型瓦器椀Ⅳ-2期（13世紀後葉）に相当。1814は底部中央を欠く。口径に比して器高が高い。器壁は比較的薄い。口縁は直立気味で、外面のヨコナデは弱く、内面の口体部境に弱い稜をつくる。高台は径が大きく、幅広。断面はごく低平な逆三角形で内側は緩く、外側は急。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素付着やや不良でムラがあり、外面は酸化炎焼成気味。胎土は精良で、泥岩を含む。在地産瓦器椀とみられる。

1815は土師質土器鍋の上部片。口縁は外反し、頸部内面に稜を作る。端部は方形に仕上げる。外面

タテハケ、内面はヨコハケを施す。焼成不良により磨耗。外面炭素付着。胎土は粗くチャートを含む。

1816・1817は東播系須恵質土器捏鉢の上部である。1816は口縁外面を下方に拡張し、重焼により自然釉付着。回転台成形であるが、体部内面に斜位のナデを施す。1817は口縁端部を上方に摘み上げる。口縁外面は重焼により炭素付着。焼成やや不良で軟質。ともに森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に相当。

1818は白磁壺の下部である。底部外面に窯道具痕を残す。体部外面下位まで施釉し、体部下端～底部および内面は露胎。露胎部は赤褐色化する。釉に微細な貫入を伴い、釉厚は不均一。胎土は精良であるが、1mm大の長石と微細な黒色粒を含む。時期不詳。

1819～1824は土師質管状土錘である。概ね焼成良好であるが、1819・1823・1824は炭素の付着がみられる。胎土も概ね精良で、泥岩・チャートを含むものがある。1825は鉄釘である。頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。

遺構の年代は、出土した瓦器椀がⅣ-1～2期であることから、概ね13世紀後半と考えておく。

溝38号（Ⅰ地区 SD1038）（第654・730・741図）

Ⅰ-3・13区、a～e7～12グリッドの位置する。東西ともに調査区外に延びる。Ⅰ-13区では東西方向に延びるが、東側では北東方向に大きく湾曲し、SD1024に切られる。西は隣接するⅠ-1区では検出されない。検出長28.2m幅140cm深度41cmを測り、主軸はN72°EおよびN4°Wを向く。今回Ⅰ-13区では、北辺部のa～c7～11グリッドに位置する。検出長22.8m幅140cm深度41cmを測り、主軸はN72°Eを向く。断面は緩い逆台形状で、部分的に段を作る。埋土は2層に分層でき、1回の再掘削が認められる。東西で底面に顕著な高低差は認められない。

遺物は、土師質土器供膳具・杯（ともに回転糸切り）・皿・煮炊具・鍋、瓦器片・椀、白磁壺、鉄滓、溶解炉壁、が出土。

1826は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1827は金属の鑄造に用いた溶解炉壁片である。内面に灰白色および黒褐色の滓が薄く付着。断面中央は被熱により灰色を呈する。外面は橙色を呈し、焼成はきわめて軟質で調整痕は残らない。胎土に砂岩を含む。甑炉の体部の一部とみられ、上端部は比較的平坦であることから継目の可能性がある。

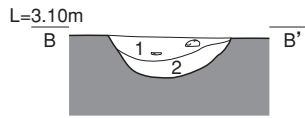
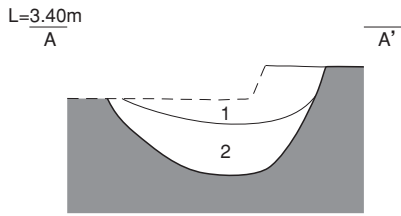
遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半とみられる。

溝71号（Ⅰ地区 SD1071）（第654・731・742図）

Ⅰ-13区東部北端、c～e11～14グリッドに位置する。西は攪乱に切られ、東は隣接するⅠ-12区では検出されない。検出長15.2m幅104cm深度47cmを測り、主軸はN57°Eを向く東西方向の溝。断面はU字状で、埋土は1層である。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯（ともに回転糸切り）・羽釜・鍋・鍋か、瓦器片・椀、瓦質土器土錘、白磁碗、鉄釘、が出土。

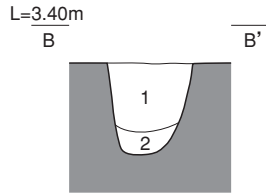
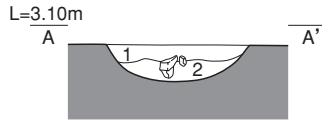
1828は土師質土器杯である。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土にチャートを含む。1829は白磁碗の下半部である。高台の削り出しが浅い。胎土に微細な黒色粒を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類（11世紀後半～12世紀前半）とみられる。

1830は土師質土器鍋で、底部を欠く。口縁はやや短く外反し、端部を方形にする。体部外面は縦位・斜位のハケ、内面はヨコハケを施す。内外面煤付着。胎土は粗く、金雲母と花崗岩を含む。瀬戸内沿岸



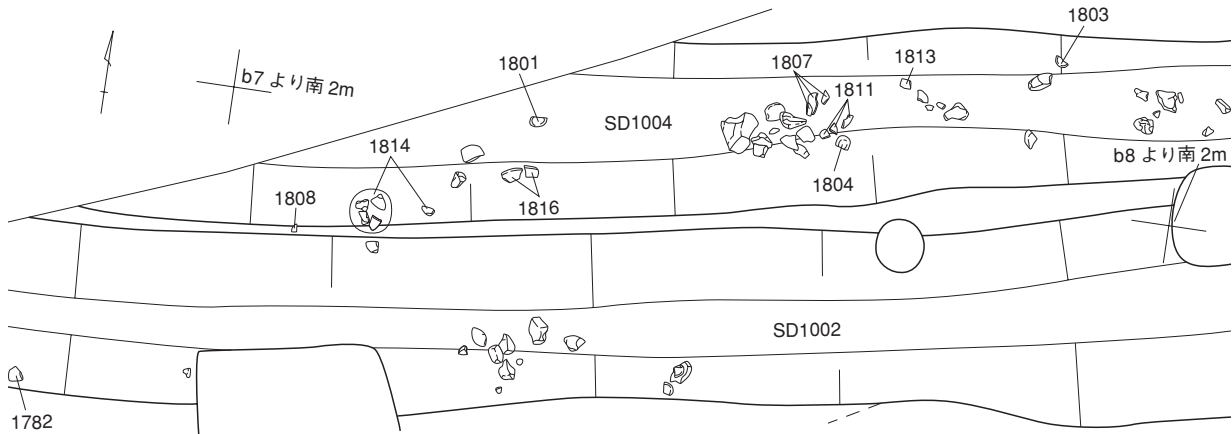
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり・粘性強)
下位に炭化物片多く含む

第 277 図 I - 13 区 SD1002 遺構断面図

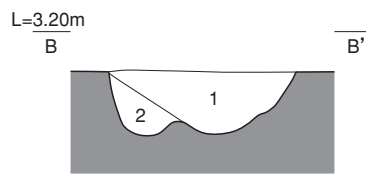
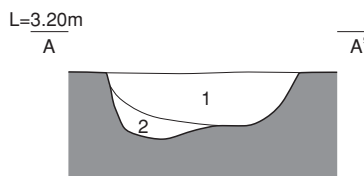


1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土 (しまり強)
炭化物片含む
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)

第 278 図 I - 13 区 SD1004 遺構断面図

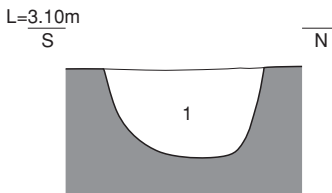


第 279 図 I - 13 区 SD1002・1004 出土平面図



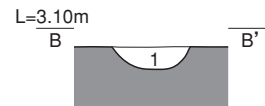
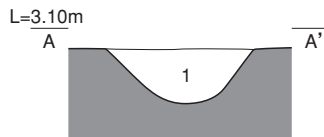
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (しまり強)
2. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 (しまり弱)

第 270 図 I - 13 区 SD1038 遺構断面図



1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 (しまり強・粘性弱)

第 271 図 I - 13 区
SD1071 遺構断面図



1. 暗オリーブ色 7.5Y4/3 砂質土 (しまり強)
全体にグライ化

第 272 図 I - 13 区 SD1072 遺構断面図



域からの搬入品と考えられる。

1831 は瓦質管状土錘である。全長 7.0cm 復元径 4.3cm の大型品。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。

1832 は楔か鑿である。頂部は欠損か否か不明。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 72 号 (I 地区 SD1072) (第 654・732 図)

I - 13 区東部、t ~ d 13 ~ 16 グリッドに位置する。北側を SD1071 が切り、以北では検出されない。北の延長上に SD1026 が位置するが、関連は不明。検出長 24.9 m 幅 82cm 深度 50cm を測り、主軸は N25° W を向く。断面は船底状で、埋土は 1 層である。底面は北に向けて下る。出土遺物は皆無である。

溝 78 号 (I 地区 SD1078) (第 654・733・743 ~ 746 図)

I - 13 区中央部、q ~ b 10・11 グリッドに位置し、南は調査区外に延びる。検出長 4.6 m 幅 28cm 深度 38cm を測り、主軸は N9° W を向く南北方向の溝。断面は不整な梯形状で、埋土は 2 層に分層できる。

遺物は、土師器羽釜、土師質土器供膳具（回転糸切りほか）・皿・杯（ともに回転糸切りほか）・煮炊具・羽釜・鍋、須恵質土器捏鉢・甕、瓦器片・椀・皿、瓦質土器羽釜（脚部ほか）・煮炊具、常滑甕か、黒釉陶器貯蔵具、白磁皿、近世陶器貯蔵具、焼土ブロック、鉄製品片・スラグ・鉄滓、粘版製砥石、が出土。

埋土上位から 1834・1845・1846・1852・1856・1858・1860・1862・1867・1871・1872、中位から 1837・1847・1848・1851・1857・1861・1863・1865・1866・1868、下位から 1833・1839・1840・1855・1859、遺構底部から 1864 が出土。

1833 ~ 1836 は回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1834・1835 は板目痕を伴う。1833 は胎土に在地花崗岩を含む。1834 は焼成不良により磨耗。内面に炭素付着。胎土に最大 5mm の砂岩粒含む。

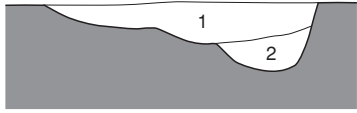
1837 ~ 1843 は回転台成形の土師質土器杯で、底部が遺る個体は回転糸切り痕を残す。1837 は焼成不良により磨耗。内面および外面の一部に炭素吸着。胎土は粗く、砂岩および在地花崗岩を含むとみられる。1838 は胎土に泥岩を含む。1839・1842 は焼成不良により磨耗。胎土は粗く、砂岩を含む。1840 は外面の一部に煤付着。胎土にチャートを含む。1841 は器形に歪みあり。板目痕を伴う。焼成不良により磨耗。胎土に 3 ~ 8mm 大の含有物目立ち、チャートを含む。1843 は内外面に稜が明瞭。焼成不良により磨耗著しい。外面炭素付着。胎土は粗い。

1844 は瓦器皿。口縁のヨコナデ幅は狭く、体部との境が不明瞭。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。和泉型瓦器Ⅳ期頃か、または在地産の可能性あり。

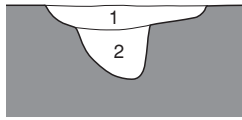
1845 ~ 1854 は瓦器椀。1845 は上半部。口縁外面のヨコナデ弱く、体部のユビオサエも弱い。内面に粗い横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗し不明瞭。炭素吸着良好だが外面は酸化炎焼成気味。胎土にチャートを含むとみられる。和泉型瓦器椀Ⅲ - 3 ~ Ⅳ - 1 期（13 世紀前葉 ~ 中葉）に相当。

1846・1847 は和泉型瓦器椀Ⅳ - 1 期（13 世紀中葉）に相当。1846 は腰が張った器形で、内面の底体部境に指で押し出した指頭圧痕を残す。外面の指頭圧痕は明瞭。高台の貼り付けは粗雑で、断面は幅広で低い逆三角形状を呈する。内面のヘラミガキは体部が横位、底部は形状不明。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着不良で酸化炎焼成気味。1847 は上半部である。口縁は強いヨコナデにより外反し、口

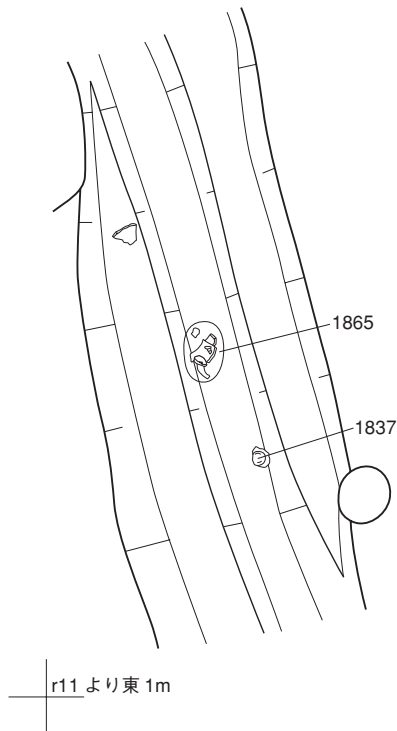
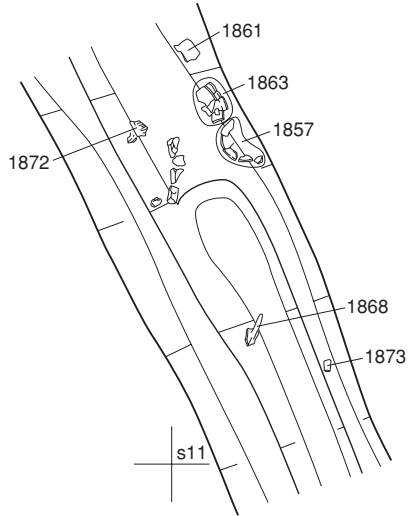
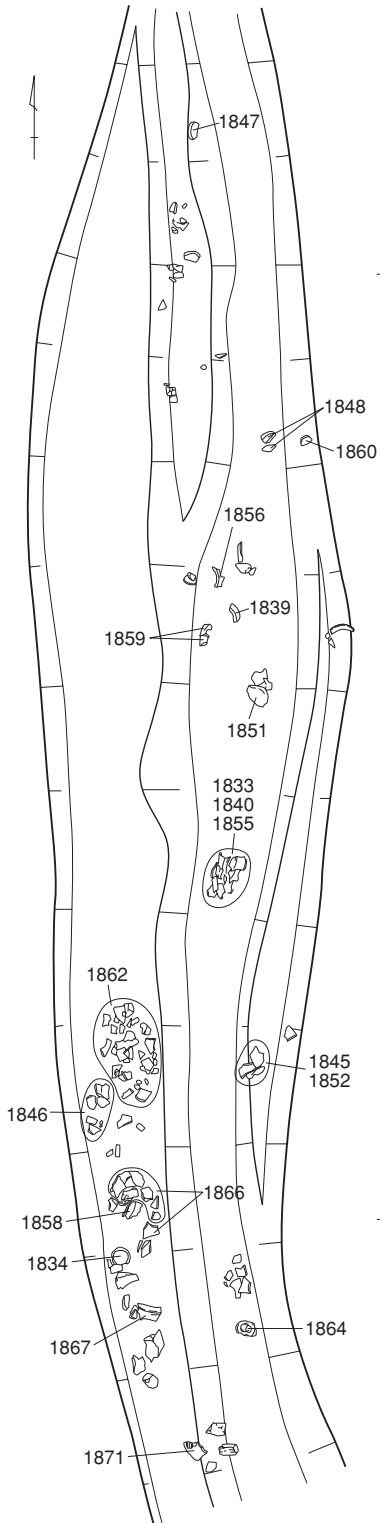
L=3.10m
A



L=3.10m
B



- 1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 (しまり・粘性強)
- 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 (しまり強)



第733図 I-13区 SD1078 遺構実測図



縁内面は凹線状に仕上げる。内面に粗い横位のヘラミガキを施すほか弱い指頭圧痕を残す。焼成不良により磨耗。炭素吸着やや不良。

1848・1849は和泉型瓦器椀Ⅳ-1～2期（13世紀中葉～後葉）に相当。1848は器壁がやや厚めで、器形はやや歪む。口縁外面は2段にヨコナデし、体部との境で段状の稜を作る。高台はきわめて低平で、径は小さい。内面に横位のヘラミガキを施し、見込みのヘラミガキは形状不明。焼成不良により内面は磨耗。炭素吸着良好。1849は上半部。口縁内面にヨコナデによるとみられる浅い凹線を2条引く。体部内面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好だが、胎土は酸化炎焼成気味。

1850は和泉型瓦器椀の模倣品とみられるが、在地産とは断定できない。口縁外面のヨコナデ弱い。内面に横位のヘラミガキを施すが、焼成不良により磨耗・剥離著しく不明瞭。炭素吸着は外面不良、内面やや不良。胎土は粗く、泥岩を含む。

1851～1854は在地産瓦器椀と考えられる。1851は口縁外面のヨコナデ弱く、内面に弱い稜を作る。体部外面のユビオサエも弱い。高台は径が大きく貼り付けが粗雑で、底部は高台畳付より下方に突出。断面は低平な逆三角形状を呈する。焼成不良により磨耗著しい。炭素吸着やや不良でムラがある。外面に重焼痕か。胎土に砂岩とチャートを含む。1852は底部を欠く。口縁のヨコナデにより、内面に弱い稜を作る。体部外面のユビオサエは弱い。焼成不良により磨耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着良好。1853は上半部。口縁のヨコナデにより内面に弱い稜を作る。外面の指頭圧痕は弱い。焼成不良により磨耗著しく、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着不良。胎土に砂岩を含む。1854は底部。高台は幅広で、貼り付けは粗雑、断面は低平な逆三角形状を呈する。見込みに螺旋状のヘラミガキを施す。焼成不良により磨耗気味。炭素吸着は内面良好、外面吸着なし。

1855～1859は紀伊型土師質土器鍔付鍋の上部・上半部、1861・1862は体部である。口縁端部は内上方に折り返す。頸部外面は強いヨコナデを施し、1855のようにヨコナデののち外方に屈曲させることによって深い谷状に作る個体もある。体部外面上端部は斜位のユビナデ痕が顕著。体部外面上位に断面三角形状あるいは台形状の鍔部を粗雑に貼り付ける。1856は鍔の剥離部に煤の付着が認められる。体部内面は斜位あるいは横位の板ナデを施し、指頭圧痕を残すものもある。胎土は概ね粗く、結晶片岩か砂岩・泥岩・チャートを含むものがある。概ね13世紀代に位置付けられる。

1863は土師質土器鍋で底部を欠く。口縁を受口状に作る。体部外面に縦位・斜位の平行タタキを施す。体部内面は指頭圧痕および横位の板ナデを施すが、当具痕は確認できない。外面煤付着。胎土に砂岩・チャートを含む。山城型瓦質土器鍋の模倣品とみられ、胎土から在地産の可能性が高い。

1864は土師質土器羽釜の体部。外面中位に脚部を貼り付ける。脚部上位で屈曲し、下方に向けて伸びるとみられる。内外面はヨコハケを施す。外面煤付着。胎土は粗く、砂岩・泥岩・チャートを含む。在地産とみられるが、吉野川流域でみられる底部の格子タタキは確認できない。上半を失っているため時期を絞り込めないが、共伴遺物から概ね13世紀後半～14世紀前半と推測される。

1865～1869は瓦質土器羽釜。いずれも山城型で、13世紀代に位置付けられる。1865は脚部を有する。鍔部は貼り付けで作り、断面は台形状を呈する。口縁端部は方形を意識するが若干尖り気味に仕上げる。脚部は鍔部直下に取り付くが、鍔と接しない。鍔部貼り付け位置の内面側に横位に連続した指頭圧痕を残す。断面観察で体底部境に接合痕が確認できることから、それぞれ別個に作り貼り合わせた可能性がある。内外面とも下半部は板ナデを施すが、外面の体底部境は接合痕が段差になって残る。焼成不良により磨耗。炭素吸着良好。胎土は粗く、砂岩・泥岩を含む。模倣品か。1866は底部を欠く。鍔

部は貼り付けで作り、口縁・鏝ともに端部は方形に仕上げる。体部外面上半は横位に連続した指頭圧痕を残し、下半および内面は横位の板ナデを施す。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良。胎土に泥岩を含む。模倣品の可能性もあり。1867は上半部。鏝部は貼り付けで作り、口縁・鏝ともに端部は方形に仕上げる。焼成不良により磨耗。炭素吸着は外面～口縁内面まで良好。胎土に泥岩を含む。模倣品の可能性もある。

1868・1869は脚部である。1868は焼成良好だが炭素吸着やや不良。胎土に泥岩を含むとみられるが不確定。1869は焼成不良により磨耗。炭素吸着は内面不良、外面やや不良で脚部内側は被熱によりカーボン消失。胎土に搬入花崗岩を含む。

1870は東播系須恵質土器甕の上部。口縁端部は上下にわずかに拡張する。頸部外面は平行タタキの痕跡を残す。焼成不良で器面に炭素付着し、胎土は酸化炎焼成気味。内面に剥離あり。胎土にチャートを含む。概ね12世紀代に位置付けられる。

1871・1872は常滑焼甕の体部片。外面に長格子押印文タタキを施す。1873は粘板岩製の砥石である。図の下端面を砥面として使用する。図の上面は工具による研削痕を残す。1874は鉄製の鑿か楔であろう。頂部をL字に屈曲させ頭部を作る。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半に位置付けられる。

溝79号（I地区 SD1079）（第654・734・747図）

I-13区中央部、t・a 10グリッドに位置する。西側をSK11211に、南側をSK11212に切られる。検出長7.9m幅88cm深度17cmを測り、主軸はN5°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器供膳具（回転糸切り）・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮炊具・鍋、須恵質土器甕、瓦器片・椀、瓦質土器羽釜、鉄滓、が出土。

埋土上位から1879・1883・1885・1886、中位から1878が出土。

1875～1877は瓦質土器羽釜である。1875は底部の大部分を欠く。鏝部は貼り付けで作り、鏝・口縁の両端部とも方形に作る。体部外面は横位に連続した指頭圧痕を残し、中位以下は横位の板ナデを施す。外面の体底境に格子タタキ状の圧痕が確認できるが不明瞭。体部・底部を別個に作り、接合した際の痕跡であろうか。底部外面は板ナデを施す。焼成不良により磨耗し、内面の調整は不明。炭素吸着やや不良。外面鏝部以下に煤付着。胎土はやや粗め。山城型瓦質羽釜の模倣品とみられる。概ね13世紀代であろう。

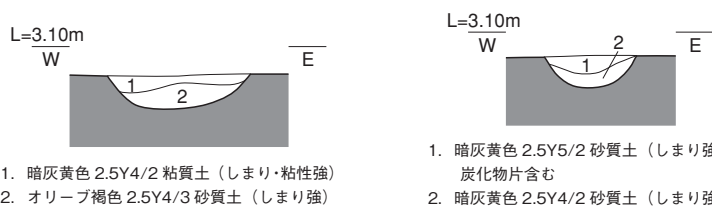
1876は上部片。鏝部は貼り付けで、断面は台形状を呈する。口縁は内傾し、端部を方形に仕上げる。内面横位の板ナデを施すが、微細なハケ状を呈する。焼成不良により磨耗。炭素吸着不良。胎土に砂岩を含む。山城型瓦質羽釜の搬入品か、または模倣品の可能性あり。概ね13世紀代に位置付けられる。

1877は上半部。鏝部は貼り付けで作る。鏝端部は丸みを帯びるが、口縁端部は方形に作る。内面は微細なハケ調整を残す。炭素吸着良好だが、焼成不良により外面は磨耗。胎土は精良。鏝部以下は使用により煤付着し、褐色に変色する。山城型瓦質羽釜の搬入品とみられ、器形から無脚のタイプとみられる。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代に位置付けられる。

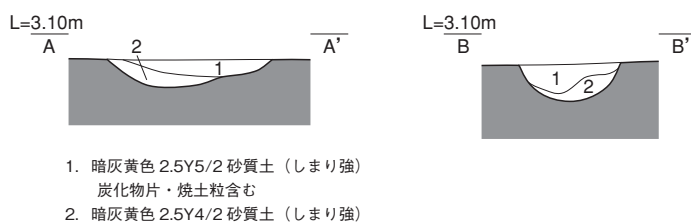
溝80号（I地区 SD1080）（第654・735・736・748図）

I-13区中央部北側、t～b 9・10グリッドに位置する。北側を攪乱に南側をSK11211に切られる。検出長7.6m幅62cm深度17cmを測り、主軸はN12°Wを向く南北方向の溝。断面は船底状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、土師質土器片・供膳具（回転糸切りほか）・皿・杯（ともに回転糸切り）・煮



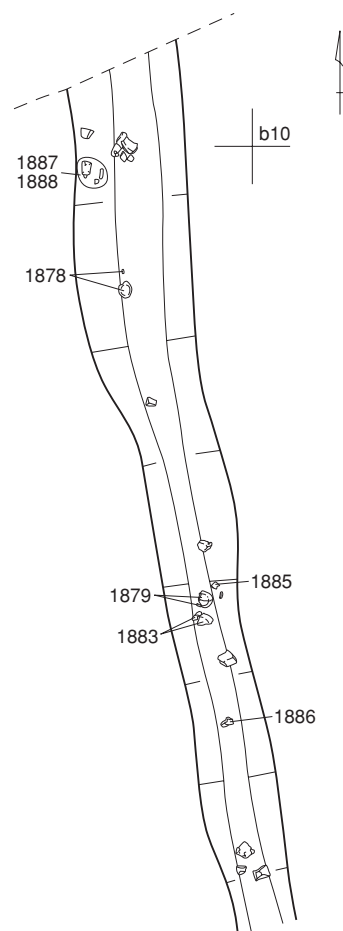
第 734 図 I - 13 区
SD1079 遺構断面図

第 735 図 I - 13 区
SD1080 遺構断面図



第 737 図 I - 13 区 SD1081 遺構断面図

第 738 図 I - 13 区 SD1083 遺構断面図



第 736 図 I - 13 区
SD1080 出土平面図

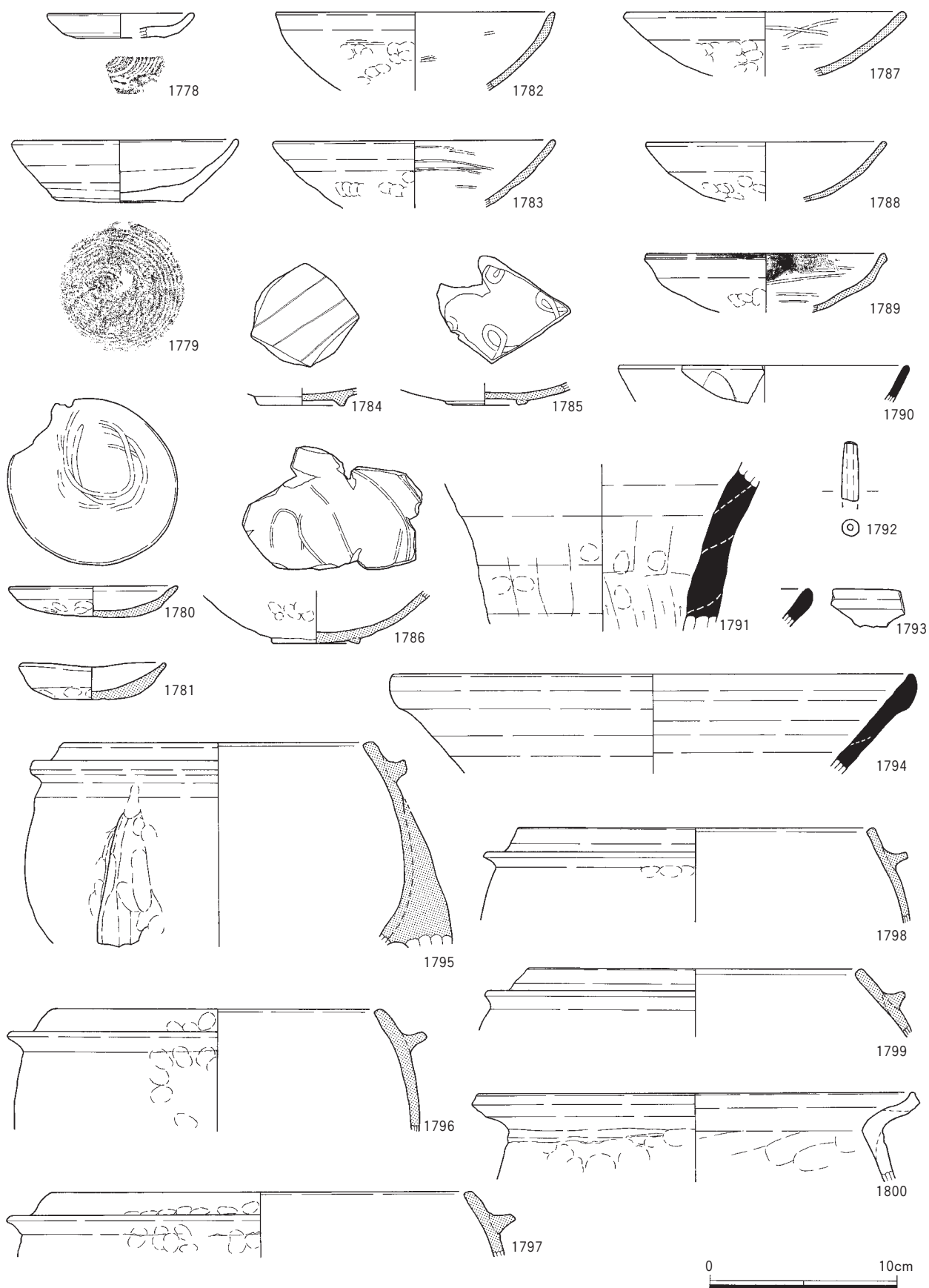
炊具・鍋・椀、瓦器片・椀、瓦質平瓦、常滑甕、壁土、鉄釘・不明鉄製品・鉄滓、が出土。

1878～1882は回転台成形の土師質土器皿、1883は杯で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1878は器形が大きく歪み、短径約7.5cm長径8.3cmを測る。板目痕を伴う。焼成不良により磨耗。胎土は粗く、砂岩・泥岩を含む。1879はほぼ完形。胎土に在地花崗岩を含むとみられるが不確定。1882は小型品で、低平な器形。1883は板目痕を伴う。焼成不良により磨耗。胎土は粗く粒子が大きい。砂岩とチャートを含む。

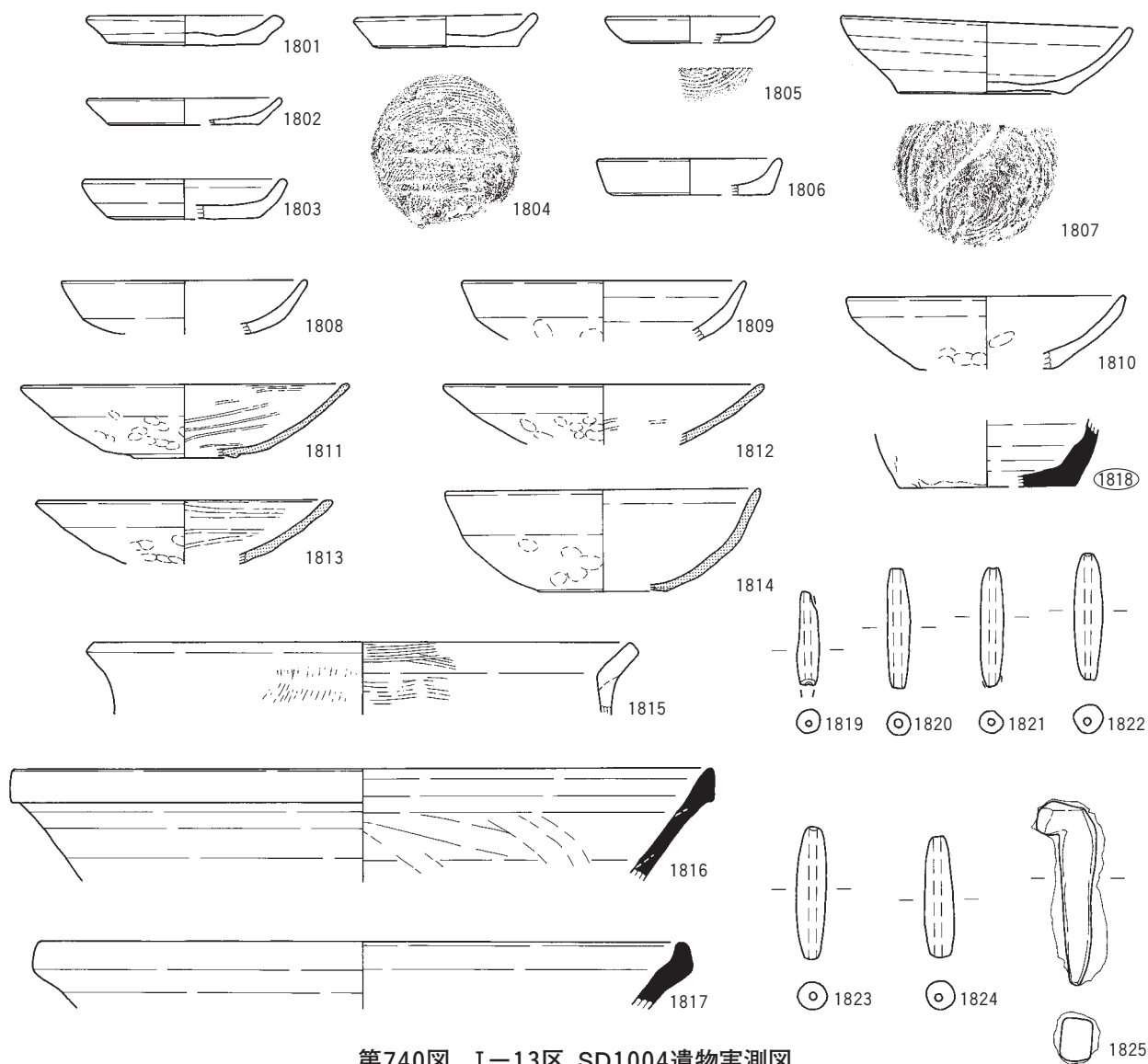
1884・1885は瓦器椀の上半部で、和泉型瓦器椀Ⅳ-1期(13世紀中葉)に相当。1884は低平な器形で、内面に粗い横位のヘラミガキを施す。焼成・炭素吸着ともに良好。1885は内面に粗く太い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着・焼成ともに良好。

1886は瓦質平瓦片である。凹面に布目圧痕、凸面に粗い格子タタキを施す。焼成良好だが炭素吸着不良。胎土に泥岩を含むとみられる。

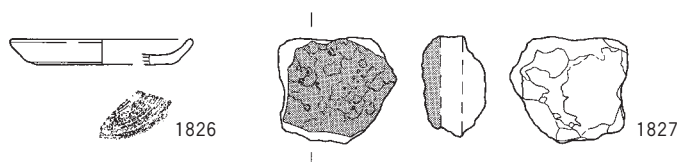
1887は鉄釘2点が癒着したものである。頭部を上方に揃える。出土状況からみて1888から分離したものと考えられる。1888は複数の棒状鉄製品が錆によって癒着し、鉄塊状となったものである。鉄製品は釘や鑿・楔などで、約12点が確認できる。長軸を揃えており、痕跡は確認できないものの紐や布によって一括りにされていたとみられる。それぞれ長さや太さは異なっており、屈曲あるいは彎曲するものも含まれることから、これらは鍛冶または鑄造の素材として集められた可能性も考えられる。



第739图 I-13区 SD1002遺物実測図



第740図 I-13区 SD1004遺物実測図



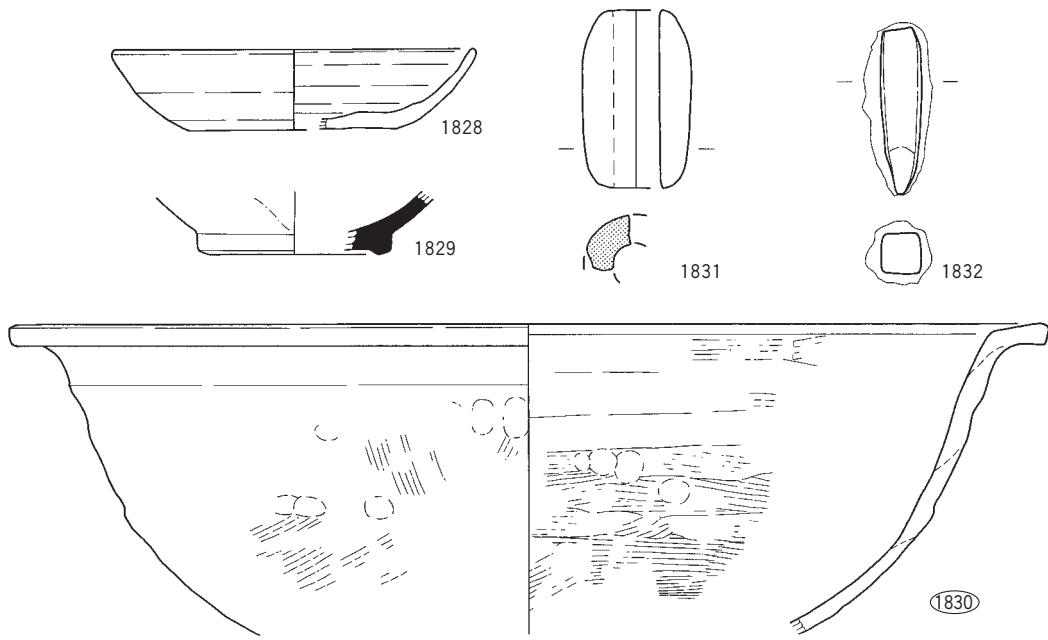
第741図 I-13区 SD1038遺物実測図



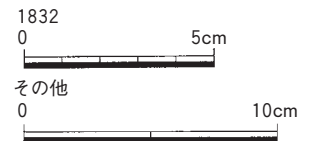
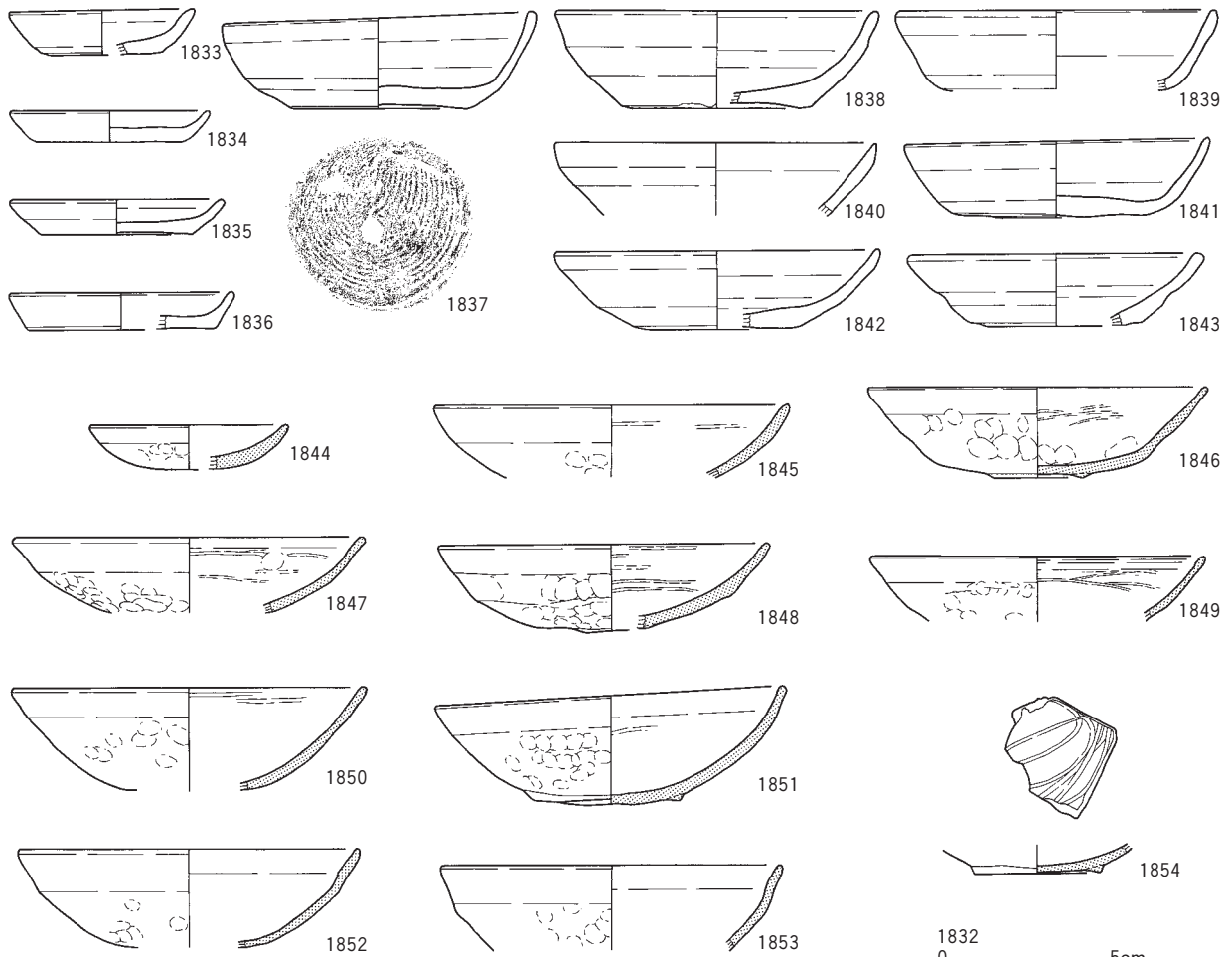
遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半とみられる。

溝81号 (I地区 SD1081) (第654・737・749図)

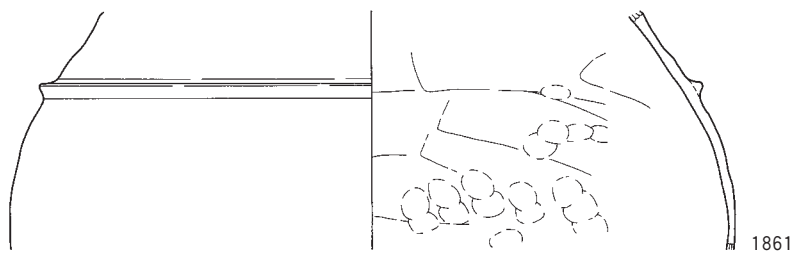
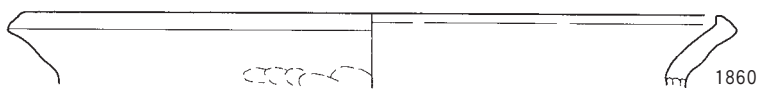
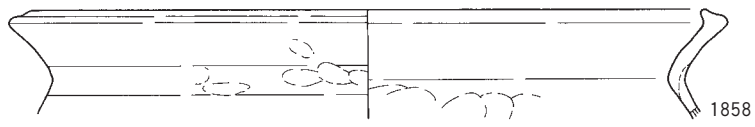
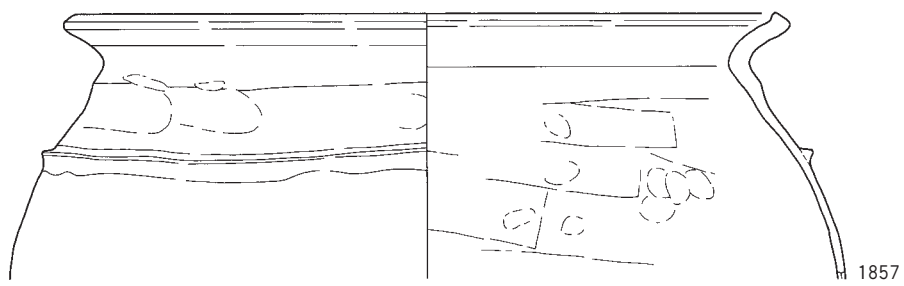
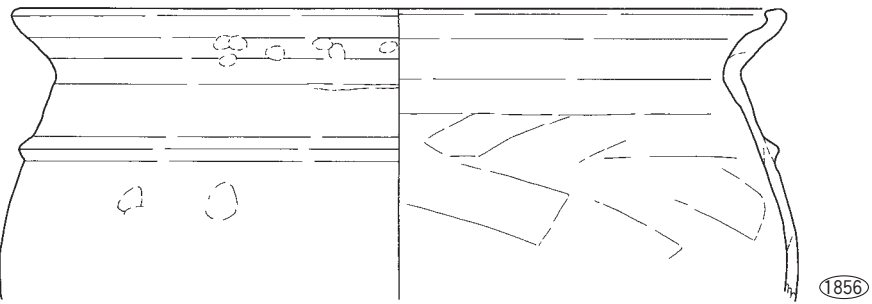
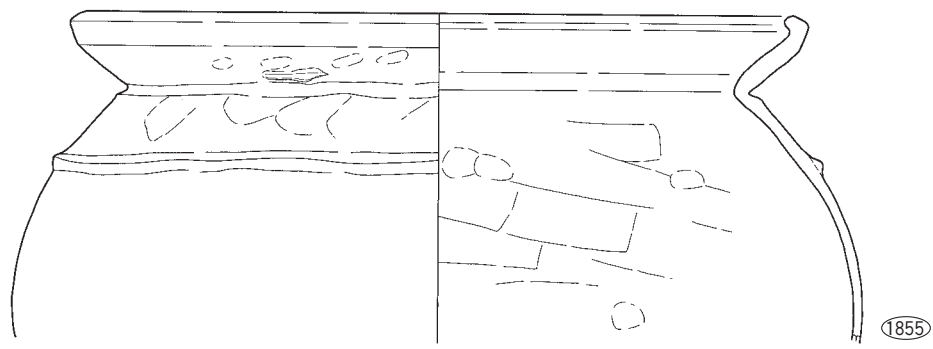
I-13区中央部、q~a 9~11グリッドに位置する。南側は調査区外に延びる。検出長21.1m幅150cm深度40cmを測り、主軸はN15°Wを向く南北方向の溝。北端は北西方向に屈曲する。断面は船底状で、埋土は2層に分層できる。遺物は、須恵器片、土師質土器片・供膳具・杯・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、瓦器片・椀、白磁碗、鉄製品片・鉄滓、が出土。1889は塹か楔である。下半を欠く。



第742図 I-13区 SD1071遺物実測図

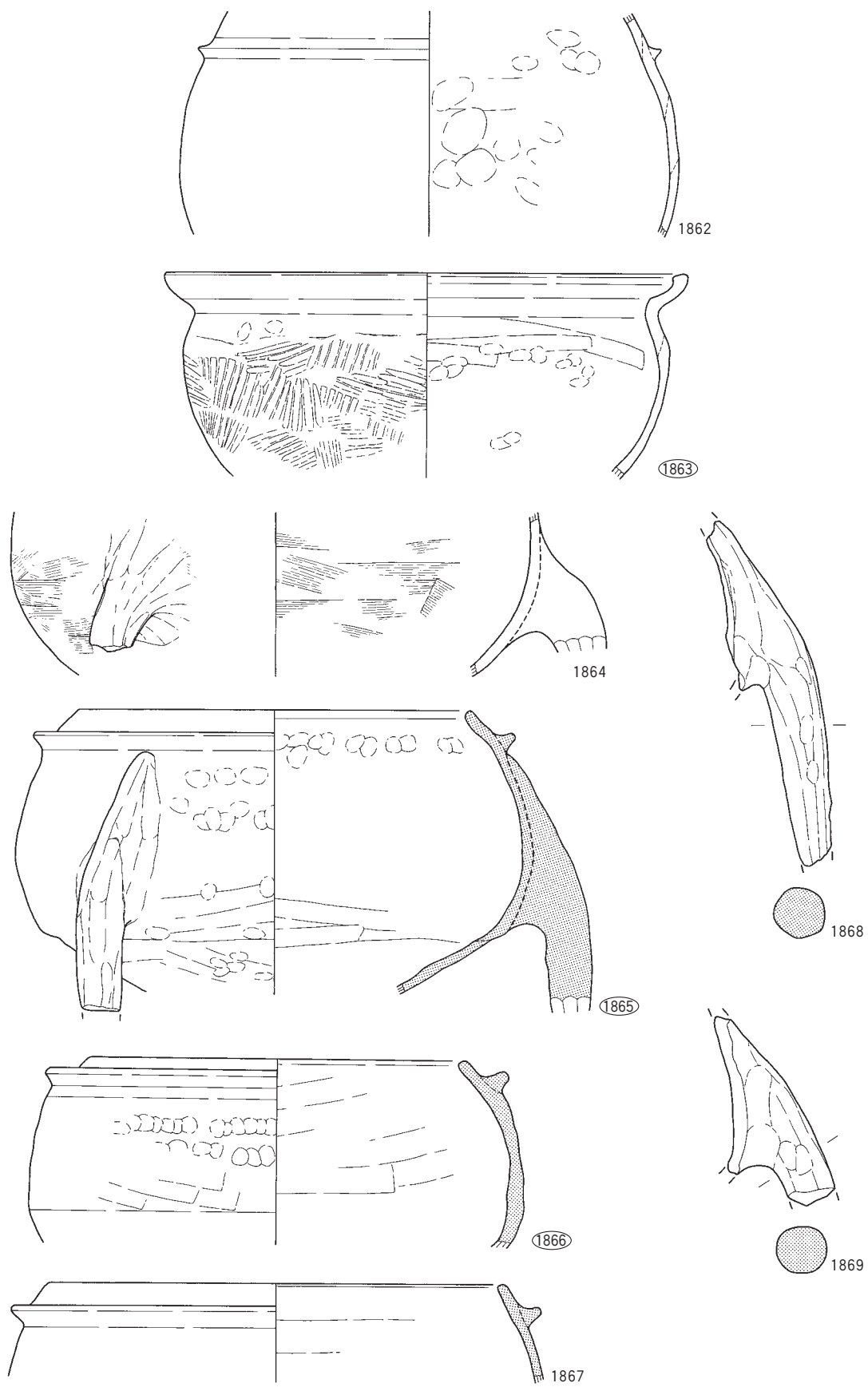


第743図 I-13区 SD1078遺物実測図(1)



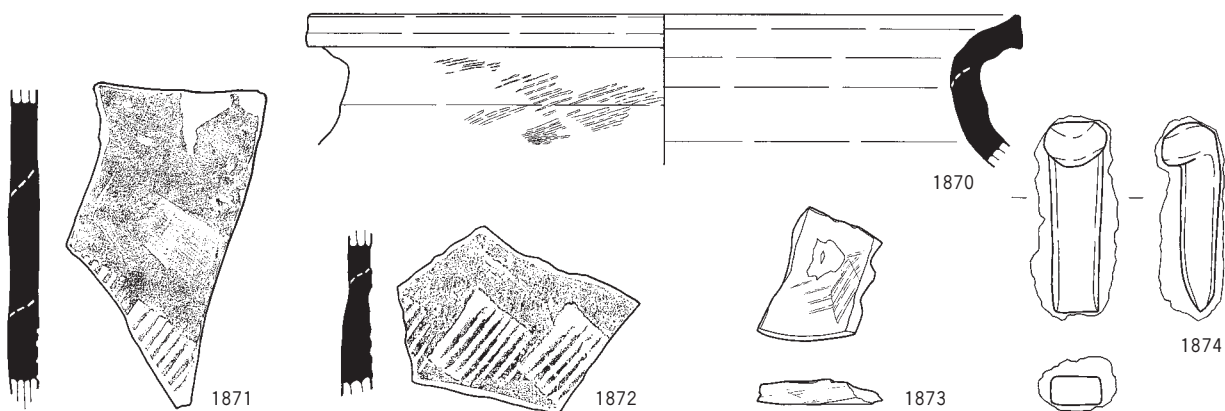
第744图 I-13区 SD1078遺物実測図(2)



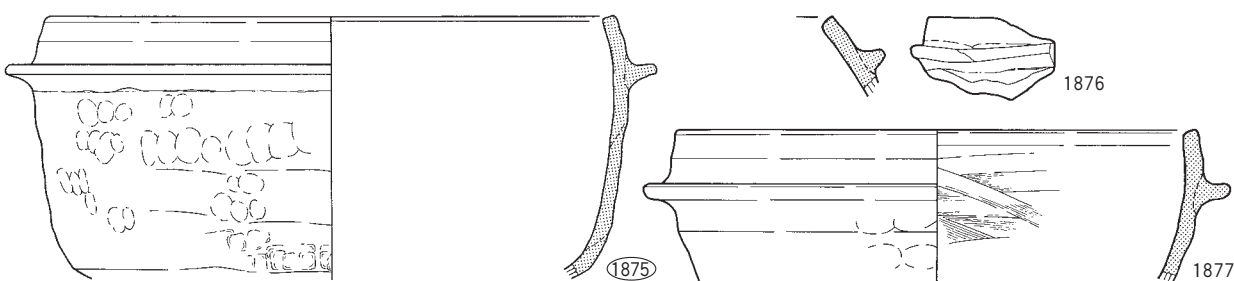


第745图 I-13区 SD1078遺物実測図(3)

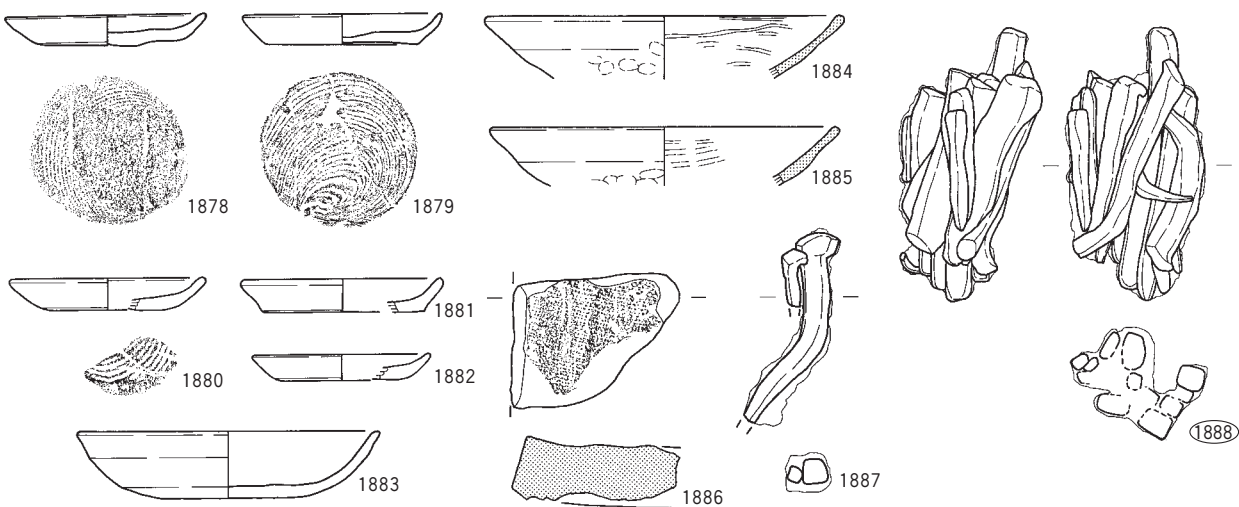
0 10cm



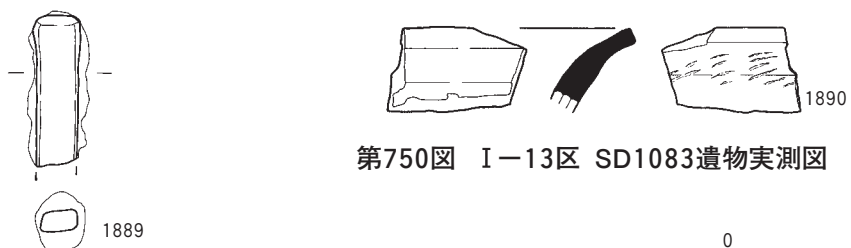
第746図 I-13区 SD1078遺物実測図(4)



第747図 I-13区 SD1079遺物実測図

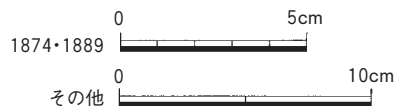


第748図 I-13区 SD1080遺物実測図



第750図 I-13区 SD1083遺物実測図

第749図 I-13区
SD1081遺物実測図



遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

溝 83 号 (I 地区 SD1083) (第 654・738・750 図)

I - 13 区西部中央南寄り、a 8・9 グリッドに位置する。北側を SK11221・11222 に西側を攪乱に切られる。検出長 5.5 m 幅 54cm 深度 12cm を測り、主軸は N78° E を向く東西方向の溝。断面は逆台形状で、埋土は 1 層である。

遺物は、土師質土器供膳具・皿（ともに回転糸切り）・煮炊具、瓦器片・椀、瓦質土器煮炊具、中世陶器甕、スラグ、が出土。1890 は須恵質土器甕の口縁部。大きく外反し、端部を摘んで細らせる。外面に平行タタキの痕跡が確認できる。内面は自然釉および窯壁の崩落土が付着。やや違和感があるが、タタキおよび口縁の強いヨコナデから東播系と考えておく。

遺構の年代は、出土遺物から概ね 13 世紀代に位置付けられる。

小穴 4743 号 (I 地区 SP14743) (第 751・755 図)

I - 13 区南東隅、t 15 グリッドに位置する、径 28cm 深度 17cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・杯（回転糸切り・ユビオサエか）、須恵質土器貯蔵具、瓦器片、鉄滓、が出土。

1891・1892 は回転台成形の土師質土器杯で、ともに第 1 層下位から出土。1891 は底部外面に回転糸切り痕のち弱い板目痕を残す。焼成不良により摩耗。胎土にチャートを含む。1892 は上半部である。口縁内面に煤付着。焼成不良により摩耗。

小穴 4751 号 (I 地区 SP14751) (第 752・756 図)

I - 13 区北東隅、e 13・14 グリッドに位置する、径 34cm 深度 14cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器杯（回転糸切り）、が出土。

1893 は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により摩耗。胎土に泥岩とチャートを含む。

小穴 4770 号 (I 地区 SP14770) (第 757 図)

I - 13 区東部南側、t 12・13 グリッドに位置する、径 45cm 深度 11cm を測る不整円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・皿（回転糸切りほか）・杯（回転糸切り）、瓦器片、が出土。

1894 ~ 1899 は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残し、1895・1897 を除いて板目痕を伴う。1897・1899 は焼成不良により摩耗し、他の個体は焼成良好。胎土は、1894 に砂岩・泥岩、1898 に泥岩、1899 に 1cm 大のチャートを含む。1900 は土師質土器杯の下半部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に泥岩を含む。

小穴 4814 号 (I 地区 SP14814) (第 758 図)

I - 13 区東部南側、t 12 グリッドに位置する、径 31cm 深度 35cm を測る円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯（回転糸切り）、瓦器椀、鉄釘・スラグ、が出土。1901 は鉄釘である。両端を欠く。

小穴 4846 号 (I 地区 SP14846) (第 759 図)

I - 13 区東部南側、s 11 グリッドに位置する、径 39cm 深度 53cm を測る隅丸方形の小穴。遺物は、土師質土器杯 (回転糸切り)・煮炊具・鍋、須恵質土器捏鉢、が出土。

1902・1903 は回転台成形の土師質土器杯。1902 は上半部である。焼成良好。胎土にチャートを含む。1903 は底部のほとんどを欠く。底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成良好。胎土に泥岩を含む。

小穴 4866 号 (I 地区 SP14866) (第 753・760 図)

I - 13 区中央部北側、a 10 グリッドに位置する、径 46cm 深度 10cm を測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・杯 (回転糸切り)・鍋、瓦器片、が出土。

1904 は遺構底部からの出土遺物で土師質土器杯の下半部。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により摩耗著しい。胎土は粗く、チャートを含む。

小穴 4923 号 (I 地区 SP14923) (第 761 図)

I - 13 区中央部北寄り、s 8 グリッドに位置する、径 25cm 深度 14cm を測る不整円形の小穴。出土遺物は 1 点のみで、1905 は瓦器碗の下半部。高台の断面は低平な蒲鉾形を呈する。焼成不良により摩耗し、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面良好、外面やや不良。和泉型瓦器碗Ⅲ - 3 ~Ⅳ - 1 期 (13 世紀前葉~中葉) とみられる。

小穴 4941 号 (I 地区 SP14941) (第 762 図)

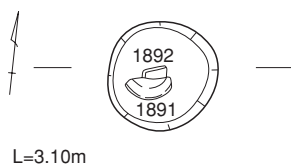
I - 13 区中央部北寄り、s 7 グリッドに位置する、径 27cm 深度 22cm を測る不整円形の小穴。出土遺物は 1 点のみで、1906 は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。焼成不良により摩耗。胎土は粗く、砂岩・チャート・在地花崗岩を含む。

小穴 4960 号 (I 地区 SP14960) (第 763 図)

I - 13 区西部南端、o 7 グリッドに位置する、径 36cm 深度 46cm を測る不整楕円形の小穴。遺物は、土師質土器供膳具・鍋、瓦器碗、が出土。

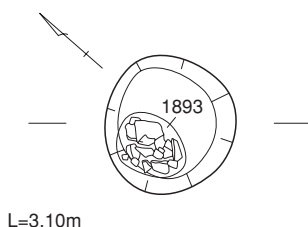
1907 は瓦器碗で、底部を欠く。外面は体部中位まで粗い横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキを施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着は口縁内面~外面にかけて良好で、体部内面は重焼により吸着不良。胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅱ - 3 期 (12 世紀後葉) 頃に相当。

1908 は土師質土器鍋で、底部を欠く。厚い器壁をもち、頸部では 1.6cm に達する。外面は頸部~体部上半までユビオサエ、体部下半は縦位の板ナデ、内面は横位の板ナデ・ユビナデを施す。胎土は粗く、金雲母と搬入花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられる。概ね 12 世紀代に位置付けられる。



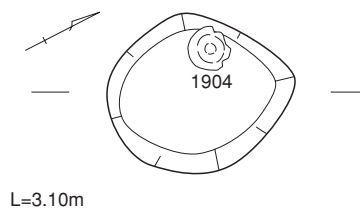
1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土(しまり強)
炭化物片含む
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土(しまり強)

第751図 I-13区
SP14743 遺構実測図



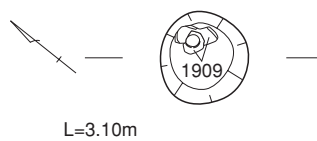
1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土(しまり・粘性強)
2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土(しまり強)

第752図 I-13区
SP14751 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土(しまり強)
炭化物片・焼土粒含む

第753図 I-13区
SP14866 遺構実測図



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土(しまり強)
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土(しまり強)

第754図 I-13区 SP14997 遺構実測図



小穴 4997号 (I地区 SP14997) (第754・764図)

I-13区西部南側、p 6グリッドに位置する、径23cm深度30cmを測る円形の小穴。遺物は1点のみで、1909は遺構底部出土の瓦器碗。高台は断面逆台形状を呈する。体部外面上半部に横位のヘラミガキ、口縁～体部内面に密な横位のヘラミガキ、見込みに平行ヘラミガキ暗文を施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅱ-3期(12世紀後葉)に相当。

小穴 5008号 (I地区 SP15008) (第765図)

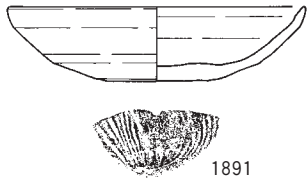
I-13区西部北側、s・t 5グリッドに位置する、径30cm深度20cmを測る不整円形の小穴。出土遺物は1点のみで、1910は白磁碗の上半部。口縁端部の釉を掻き取り、いわゆる口禿に仕上げる。大宰府分類白磁碗Ⅸ類(13世紀中頃～14世紀初頭)に相当。

小穴 5041号 (I地区 SP15041) (第766図)

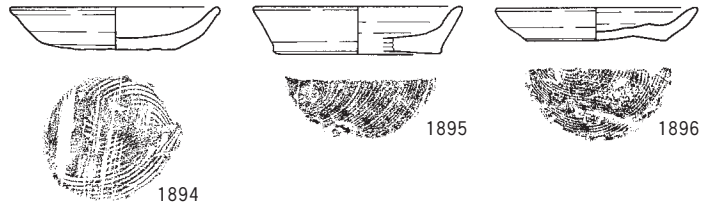
I-13区西部南側、p 5グリッドに位置する、径26cm深度24cmを測る不整円形の小穴。遺物は、須恵器片、土師質土器供膳具・皿(回転糸切り)・煮炊具、瓦器碗・皿、が出土。

1911・1912は回転台成形の土師質土器皿。1911は底部外面に回転糸切り痕を残す。1912の切り離し痕は静止糸切りに見える。焼成不良により摩耗。1913は瓦器碗の上半部。体部内面に横位のヘラミガキを施す。焼成不良により摩耗。炭素吸着やや不良で、胎土は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期(13世紀前葉)に相当。

小穴 5052号 (I地区 SP15052) (第767図)



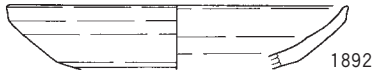
1891



1894

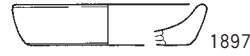
1895

1896



1892

第755図 I-13区
SP14743遺物実測図



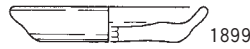
1897



1898



1900



1899

第757図 I-13区 SP14770遺物実測図



1893

第756図 I-13区
SP14751遺物実測図

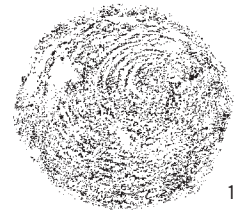


1902



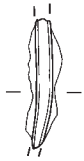
1903

第759図 I-13区
SP14846遺物実測図



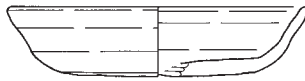
1904

第760図 I-13区
SP14866遺物実測図



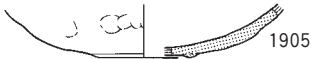
1901

第758図 I-13区
SP14814遺物実測図



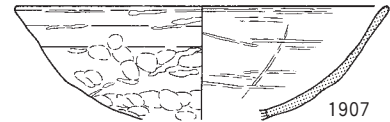
1906

第762図 I-13区
SP14941遺物実測図

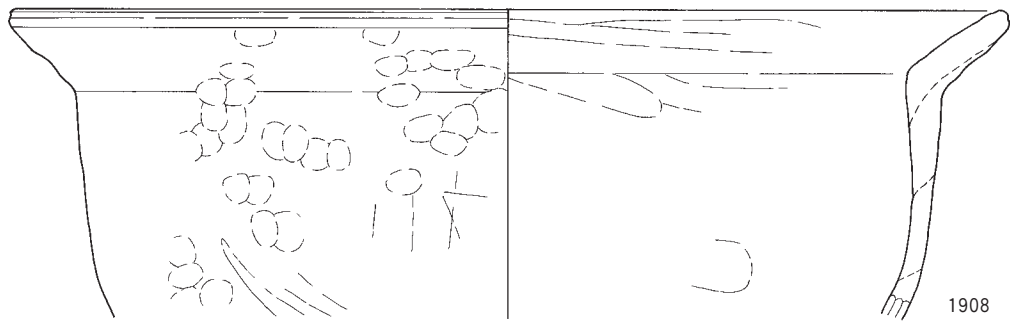


1905

第761図 I-13区
SP14923遺物実測図



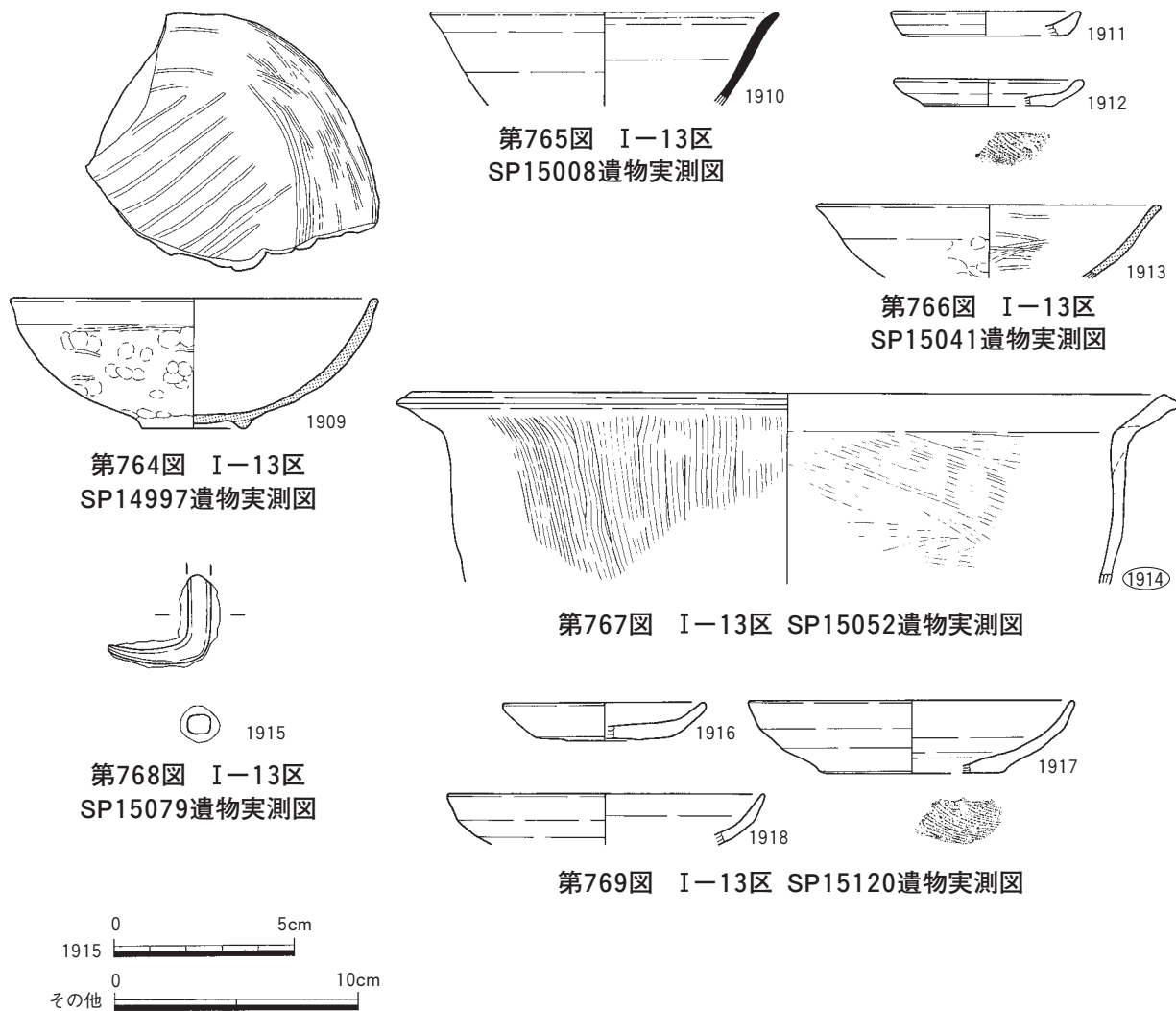
1907



1908

第763図 I-13区 SP14960遺物実測図





I-13区西部南側、o5グリッドに位置する、径40cm深度40cmを測る円形の小穴。遺物は、土師質土器片・供膳具・鍋、瓦器碗、が出土。

1914は土師質土器鍋の上半部である。外面にタテハケ、体部内面に斜位のハケを施す。外面煤付着。胎土に金雲母・角閃石・搬入花崗岩を含む。瀬戸内沿岸域からの搬入品で、吉備系の可能性が考えられる。

小穴5079号 (I地区 SP15079) (第768図)

I-13区西部中央北寄り、q4グリッドに位置する、径60cm深度48cmを測る不整な隅丸長方形の小穴。遺物は、土師器甕か、土師質土器片・皿(回転糸切り)・鍋、瓦器碗、鉄釘、が出土。

1915は鉄釘とみられる。上半部を欠き、残存部はL字に屈曲変形する。

小穴5120号 (I地区 SP15120) (第769図)

I-13区中央部北端、a8グリッドに位置する、径30cm深度16cmを測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は、土師質土器皿・杯(ともに回転糸切り)・瓦器碗、が出土。

1916は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。底部外面に炭素

付着。焼成不良により磨耗。胎土に泥岩を含む。1917は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に砂岩・チャートを含む。1918は回転台成形の土師質土器杯上半部。焼成良好。胎土にチャートを含む。

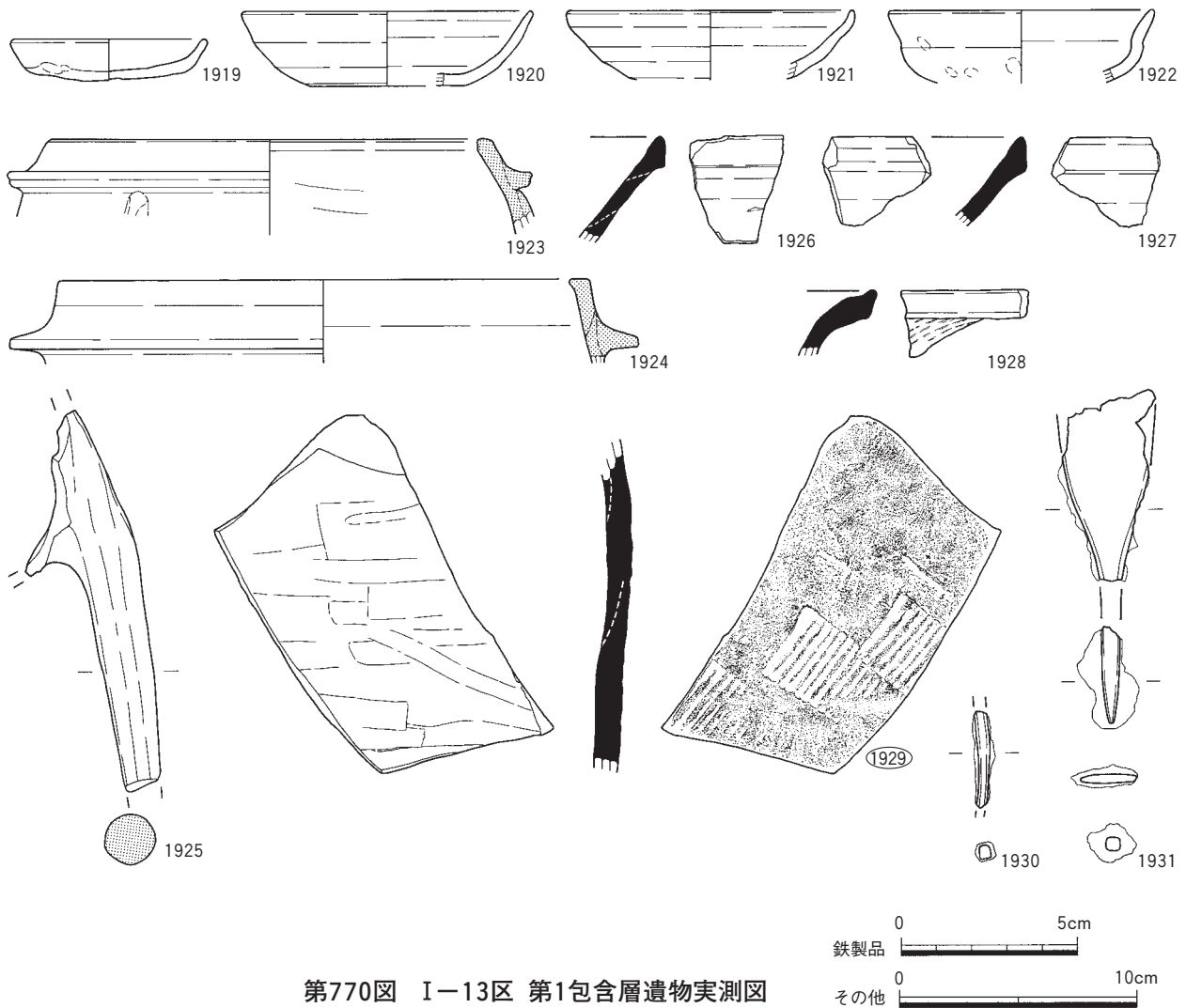
〈I-13区 第1包含層出土遺物〉(第770図)

1919は土師質土器皿。回転台成形で、底部回転糸切りのちユビオサエを施し、のち板目痕を残す。見込みに指頭圧痕を残す。

1920・1921は回転台成形の土師質土器杯。1920は回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。焼成不良により磨耗。1921は底部を欠く。還元炎焼成されるが軟質。備前焼碗の可能性も考えられる。

1922は非回転台成形の土師質土器杯で、底部の大部分を欠く。口・体部境でくの字に屈曲し、口縁が外反。体部～底部外面に指頭圧痕を残す。焼成良好。胎土精良で、泥岩を含む。京都系土師皿Dタイプの模倣品か。概ね13世紀代であろう。

1923・1924は瓦質土器羽釜の上部である。ともに鋳部を貼り付けて作る。1923は口縁・鋳両端部と



第770図 I-13区 第1包含層遺物実測図

も方形を意識する。脚部は上端が鋸下端とわずかに接する。焼成不良により摩耗するが、炭素吸着良好。1924 は鋸部断面が台形状を呈する。口縁は頂部が水平で、内方にやや拡張する。焼成不良により磨耗・剥離し、調整不明瞭。炭素吸着良好だが、酸化炎焼成気味。いずれも山城型瓦質土器羽釜の搬入品とみられ、概ね 13 世紀代に位置づけられる。

1925 は瓦質土器羽釜の脚部。明瞭な屈曲部をもたず、外下方に直線的に伸びる。焼成良好で堅緻。炭素吸着良好。

1926・1927 は東播系須恵質土器捏鉢の上部片である。は口縁端部を上下に拡張させ、外面にかけ重焼により炭素および自然釉付着。森田編年第Ⅱ期第 2 段階（12 世紀末～13 世紀初頭）に相当。1928 は東播系須恵質土器甕の上部片である。口縁端部をわずかに上方に引き上げる。頸部外面に平行タタキを施すが、のちヨコナデにより不明瞭。概ね 12 世紀代とみられる。1929 は常滑焼甕の体部片。外面に長格子の押印文タタキを施す。内面は無文当て具痕のち横位の板ナデを施す。

1930 は細身の鉄釘である。両端部を欠く。1931 は鉄鏃とみられる。上端を欠くが柳葉形であろうか。または刀子の可能性も考えられる。

3. まとめ

今回の調査結果を合わせた宮ノ本遺跡全体について、各時代ごとに様相を詳述する。記述にあたっては、今回の調査によって得られた新知見を反映させ、同時に「宮ノ本遺跡Ⅰ」の遺構・遺物について再検討を行った。その結果、とくに古墳時代後期～中世にかけての「宮ノ本遺跡Ⅰ」での年代観や解釈、区画の設定、土器の産地などについて変更が生じたことをご了解いただきたい。

遺構の年代については出土遺物や切り合い関係および主軸方位を勘案して想定した。また年代判定の困難な遺構は想定年代を長くとったため、複数の時期に跨るものはそれぞれ重複して図示している。なお古文書等の文献資料については『日本歴史地名大系 37 巻 徳島県の地名』（三好他 2000）を参考・引用した。

〈縄文・弥生時代の様相〉

宮ノ本遺跡ではこれまでに 4 面の遺構面を検出した。第 3・4 遺構面が縄文時代晩期、第 2 遺構面が弥生時代前期に属し、「宮ノ本遺跡Ⅰ」の調査では、それぞれの遺構面で竪穴住居または竪穴住居状遺構が検出された。今回の調査による縄文・弥生時代の遺物の出土は、包含層や流れ込みによるものであり、遺構としては確認できなかった。よって当該期の集落域は「宮ノ本遺跡Ⅰ」で行った調査地北東部（Ⅰ地区北辺部）でのみ確認され南や西には拡大しないことから、調査地北側の小丘（泉八幡神社社地）から東に延びる微高地上を中心に営まれたものと考えられる。縄文・弥生時代の様相については、「宮ノ本遺跡Ⅰ」を参照いただきたい。

〈古墳時代～近世の様相〉（第 771～773 図）

「宮ノ本遺跡Ⅰ」では、第 1 遺構面で古墳時代～近世の遺構を検出したことから、様相をまとめるにあたり時期を 6 期に分けて記述した。本書では基本的に前回の時期区分を踏襲するが、第 4 期については新・古の 2 段階に分割した。

第1期（古墳時代後期）（第771図）

本期の遺構は、Ⅰ－7区中央部南側とⅡ－1区東部南端で各1棟、Ⅱ－13区で6棟、計8棟の竪穴住居が確認された。Ⅱ地区では東西45m南北30mの範囲に7棟、西に約70m離れたⅠ－7区に1棟単独で位置している。住居に重複関係はなく、県内での同時期の集落である大柿遺跡や敷地遺跡・寺山遺跡などと比較して密集度は低いものといえる。存続時期は長く見ても6世紀後半～7世紀前半で、継続性に乏しい。平面プランはすべて方形である。竈はⅡ地区SB1002を除く7棟で検出し、すべて遺構北壁に設けている。

Ⅰ地区に単独で存在するSB1001は、床面直上から羽口や鍛造剥片や粒状滓・棒状切片が出土していることから鍛冶工房と推測され、火災による類焼を避けることを意図して配置された可能性がある。

この時期に属する他の遺構としては、長胴の土師器甕が出土したⅠ－7区SP11635、須恵器杯身が出土したⅡ－7区SK1211、須恵器高杯脚部が出土したⅡ－13区SK11285、土師器甑が出土した同区SK11467などが挙げられる。

第2期（奈良～平安時代前期）（第771図）

本期は概ね8～9世紀代にあたる。「宮ノ本遺跡Ⅰ」のⅠ－8・9区で土壙墓とみられる長方形土坑を確認している。今回の調査による本期の遺構は、須恵器風字硯が出土したⅡ－13区SP14849が挙げられるのみで、掘立柱建物や区画溝などは検出されていない。

遺物としては、須恵器風字硯のほか土師器・須恵器、緑釉陶器、石製丸軀が出土している。本期は遺構数・遺物数はともに僅少であることから、活動の低調な時期であったといえる。

本遺跡周辺の当該期の遺跡としては、東約1.6kmの桑野川北岸に立善寺跡遺跡や川原遺跡、その対岸には庄境遺跡が位置する。川原遺跡では丸軀2点が出土したことなどから郡衙関連遺跡と推測されている。庄境遺跡では円面硯が、宮ノ本遺跡では丸軀や風字硯が出土しており、これらの遺物からは公的な性格が垣間見える。また桑野川を遡った南西約6kmに位置する桑野谷遺跡では、遺跡の性格は不明であるものの緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。

以上のように当該期の遺跡が確認されたことは、本地域における古代の郡衙や郷衙などの公的施設、寺院および集落などの様相を解明するための資料が蓄積されつつある状況であるといえる。

第3期（平安時代後～末期）（第771図）

本期は実年代では11～12世紀前半にあたる。遺構・遺物が増加し始める時期で、開発の開始期に位置付けられる。

遺物は、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す土師器杯や皿、高脚高台付皿・杯、黒色土器碗（A・B類）・台付碗（托碗）、Ⅰ～Ⅱ－2期の和泉型瓦器碗、灰釉陶器、撰津C型土師器羽釜、第Ⅰ期の東播系須恵質碗・捏鉢、十瓶山系須恵質貯蔵具、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ－2・3類、白磁皿Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類などがみられる。

本期の遺構は出土遺物から検索すると多く挙げることができるが、中世遺物を伴う事例が多いことから確実視されるものは少ない。建物ではⅡ地区のSA1009・1029が第3期と認められるほか、Ⅰ地区の3棟、Ⅱ地区の24棟、Ⅱ地区の柵列4基が本期に属する可能性をもつ。Ⅱ地区SA1009は東西5間、南北4間、床面積92.0㎡（庇部を含め106.9㎡）を測る大型の総柱建物で、本遺跡最大の建物である。

溝はⅠ地区 SD1005、Ⅱ地区 SD1002（Ⅰ地区 SD1056）・1034・1041・1094・1117・1120・1121 が本期に属する。これらの溝で、東西方向の SD1002 と南北方向の SD1034 が途中で途切れることなく伸びる。SD1002 と SD1034 はほぼ直角に交差し、第4期まで継続することから区画の基本ラインとして設けられたものと考えられる。溝の交差点から東側に建物が高い密度で分布し、第4期の区画7・8・9にそれぞれ建物群を作る。このことから本遺跡における古代以降の本格的な開発はⅡ地区を中心に始まり、SA1009はその規模から開発に関わる中心的な施設であったと考えられる。

当該期の本地域一帯は竹原牧にあたる。関白太政大臣藤原忠実（1078 - 1162）の日記である『殿暦』には、竹原牧は忠実が藤原師実（1042 - 1101）から受け継いだ所領で、1118（元永元）年阿波国司藤原尹経により押領されたとあることから、立荘時期は不明ながら12世紀初頭には荘園として成立していたことが窺え、本期の遺構は竹原牧と時期的に重なるものとして重要である。

第4期古段階（鎌倉時代前半）（第772図）

第4期は遺構・遺物数が爆発的に増加し、遺跡の範囲が拡大する時期である。「宮ノ本遺跡Ⅰ」では本期を12世紀後葉～13世紀代としていた。本書では年代観の見直しを行った結果、実年代を12世紀後半～14世紀前半とし、本期を古・新の2段階に分けた。

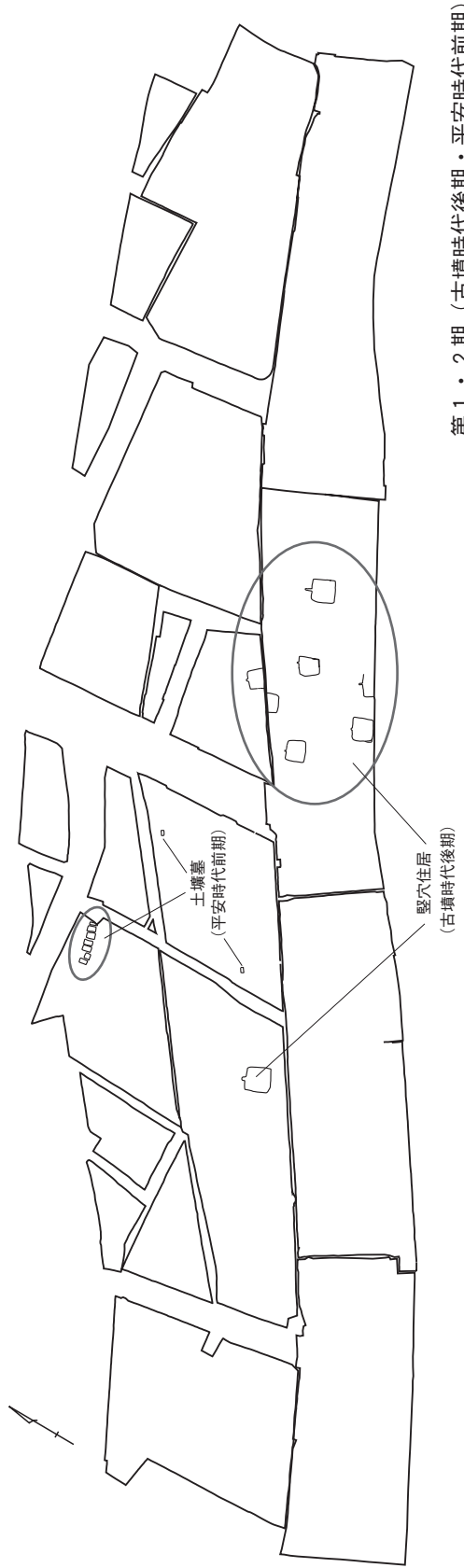
第4期古段階は、概ね平安時代末期～鎌倉時代前半で、12世紀後半～13世紀前半に想定する。和泉型瓦器Ⅱ-3～Ⅲ期、東播系須恵質捏鉢Ⅱ期が指標となる。遺構としては、第3期に開削されたⅡ地区 SD1002（Ⅰ地区 SD1056）・1034 を中心として、碁盤目状の方形区画が形成される。

大区画は9区画認められ、規模が判明するものは区画1（東西72m南北91m）、区画3（東西推定91m）、区画4（東西91m南北74m）、区画6（東西15～22m）、区画7（東西73m）、区画8（東西50m）となっており、区画の一辺の長さは73m前後および91mという数値が目立つ。古代の条里区画に多くみられる一町（約108m）には満たないものの、区画規模の基準値である可能性が推測される。一町を単位とせず長方形区画をもつ事例は、県下では町口遺跡（阿波市）（東西約110m南北約90m）や黒谷川宮ノ前遺跡（板野町）（一辺40～70m）などが挙げられる。

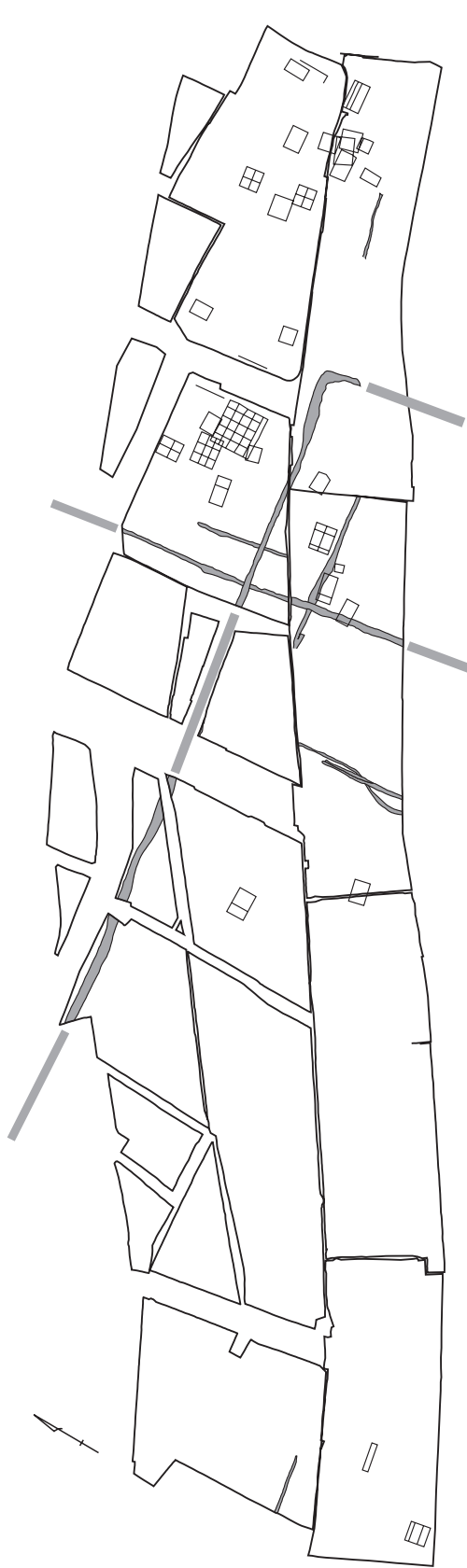
大区画の中で、泉八幡神社の正面にあたる区画6は、東西幅が極端に狭く南北に細長い長方形区画である。東西両側は4～6条の溝によって区画され、これらの溝に顕著な時期差は見いだせない。本区画はⅠ地区 SD1002 によって南北に分割されている可能性があることから、北側を区画6a、南側を区画6bとした。北に位置する区画6a内部では本期の遺構は疎らで、建物は17世紀まで設置されないことから、4世紀におよぶ強い規制の存在が窺われ、単なる屋敷地区画とは言い難い。泉八幡神社の起源は棟札によって1533年の再興までしか辿れず明らかでないが、本区画が神社の参道・道路あるいは祭礼等を行う広場であった可能性も考えられる。

区画1・4と区画2・5の境界であるⅠ地区 SD1025・1068などの区画溝は大きく蛇行し、第4期新段階に継承される。当初はこの蛇行が桑野川河道の形状に合わせたものではないかと考えた。しかし遺構面は南に向けて下らず、遺構は南に拡大する様相を見せることから、当時の桑野川本流は別ルートを流れていたものと推測される。このことから区画溝の蛇行は、南に位置する山裾の地形に制約されたものではないかと考えておく。

また、区画1の内部に区画溝と異なる方位をもつ溝Ⅰ地区 SD1025・1029は、「宮ノ本遺跡Ⅰ」では大区画に先行する区画溝の可能性を指摘したが、今回、出土遺物の年代観を再検討した結果第4期に属



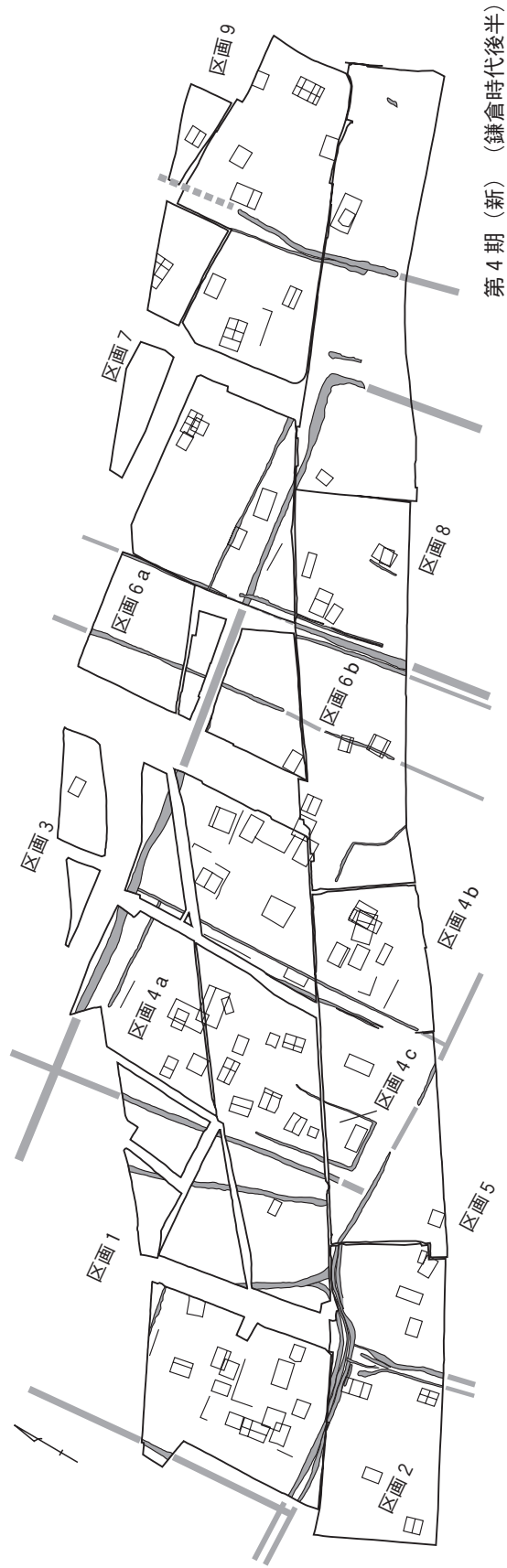
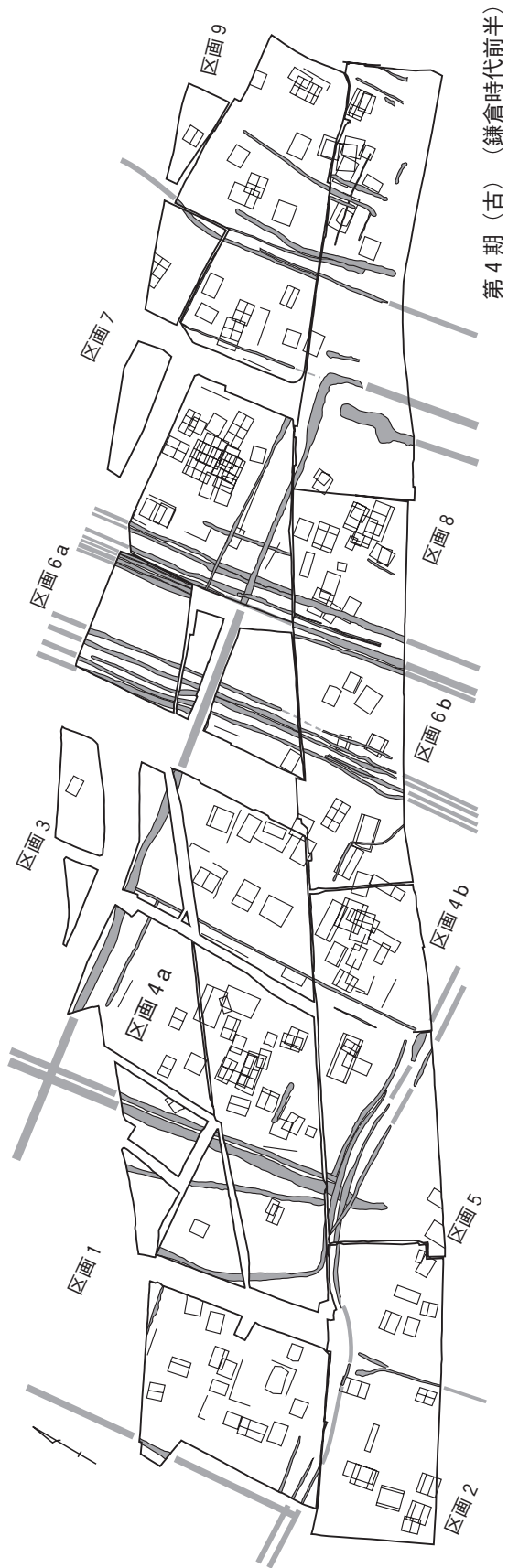
第1・2期 (古墳時代後期・平安時代前期)



第3期 (平安時代後～末期)



第771図 宮ノ本遺跡 遺構変遷図(1)



0 50m

第772図 宮ノ本遺跡 遺構変遷図(2)

するものと考えた。

区画4では、中央に南北溝I地区SD1059があり、区画を東西に二分する。東側区画（区画4b）の北側では、幅10mの空閑地を挟んだ両側に建物が整然と並ぶ状況が見て取れる。

掘立柱建物151棟と柵列24基が本段階に属すると想定される。区画6を境に西側は建物82棟、柵列16基、東側は建物64棟、柵列8基で、単純に数だけを比較すれば西側優位となる。しかし第3期で大型建物SA1009が位置していた区画7には大型の総柱建物が集中することから、本期でもなお遺跡の中心的な部分であったことが窺える。

文献資料および出土遺物については第4期古段階・新段階をまとめて後に一項をたてて詳述する。

第4期新段階（鎌倉時代後半）（第772図）

本期の実年代は概ね13世紀後半～14世紀前半で、和泉型瓦器碗Ⅳ-1～2期、吉備系土師質椀Ⅲ-2～3期、東播系須恵質捏鉢Ⅲ期が指標となる。

遺構は、第4期古段階の区画を概ね踏襲するが、区画6や区画1・4の境界を画する溝は数を減らすことから、区画の規模が若干変わる。区画1は東西76m、区画4は東西100m南北83m、区画6は東西16m、区画8は東西58mとなる。

区画1と区画2・5の境を蛇行する区画は、古段階から継承される。区画4aの南西隅に東西12m南北25mの区画4cが出現する。本区画をコの字形に囲む溝SD1048では、南西隅と南東側に土師質杯・皿を集中的に投棄しており、区画の非日常性が窺われる。また南西隅部では瓦質火鉢が出土していることから、高位の人物の存在が推測される。区画6では建物がみられず、近世まで空閑地となる。

本段階に属する掘立柱建物は79棟、柵列13基で、前段階の半数となる。区画6を境に東側は建物23棟、柵列2基となり、第3期～第4期古段階まで大型建物が集中していた区画7を含め建物の小型化と数量の減少が著しい。一方、西側は建物56棟、柵列11基で、東側の倍以上となることから、遺跡の中心は西側に遷るとみられる。

第4期における考古学的成果と文献資料との関係

竹原荘は1157（保元二）年の太政官符には、保元乱後に藤原頼長領から後白河天皇の後院領と記す。1163（長寛元）年に二品家が竹原荘鎮守である八柞神社に貢納船の安全などを祈願している。遺跡が拡大し、土器の搬入量が増加する本期初頭の記事として注目される。1209（承元三）年には、当荘は後白河院から院第二皇子である前御室門跡守覚法親王ののち院第八皇子尊性法親王に伝領されたとみられる。

1302（乾元元）年昭訓門院院序年預に補任された葉室長隆が、料所として当荘を与えられる。1306（嘉元四）年には、室町院領内の安楽光院領から宗尊親王・亀山院のち西園寺実氏孫の遊義門院領となり、預所は葉室長隆、領家は西園寺実氏妻の今林准后とある。1351年には細川頼春が本荘の本郷地頭職を紀伊の安宅須佐一族に安堵していることから、本家である皇室は14世紀半ばになっておよそ2世紀にわたる当荘の支配権を喪失したとみられる。考古学的データでは本期新段階は衰退期であり、皇室領としての実態喪失により竹原荘の中心が移動したことが推察される。

第4期の出土遺物について

〈供膳具〉

土師質供膳具は非回転台成形と回転台成形の二者があり、回転台成形のものが圧倒的多数を占める。

非回転台成形の土師質供膳具は京都系土師器皿と考えている。口縁が外反するものはDタイプ、やや深身のものにはEタイプの模倣の可能性がある。時期的には概ね13世紀代としたが、一部は共伴遺物の年代から第4期新段階に属する可能性がある。I - 13区SK11204では土師質供膳具のほぼ全てが京都系土師質皿で占められており、特異な状況を示す。本遺構では和泉型瓦器碗IV - 2期と共伴する。

回転台成形の杯・皿の底部切離し技法は、第3期には回転ヘラ切りであったが当期には回転糸切りに変化する。杯は底径が大きく箱形に近いものと、口径に比して底径が小さい椀形のものが見られる。椀形の杯は口縁から体部にかけてが内彎するものが多く、比較的器高が高いものは同時期の瓦器碗と同程度の法量をもつ。現在のところ、県下では同形の杯は知られていない。

瓦器碗はほぼ和泉型で占められる。「宮ノ本遺跡I・II」を通しての掲載総点数は約700点で、搬入はI期から開始し(0.6%)、II期に本格化し(15.2%)、III - 1期(10.8%)、III - 2期から急増(21%)、III - 3期にピークを迎え(34.3%)、IV - 1期に激減(8.5%)、IV - 2期(2.8%)にはほぼ途絶えるものとみられる。瓦器碗の完形品は、柱抜き取り後の柱穴や区画溝からの出土がほとんどで、祭祀的な用途が想定される。

本遺跡出土の瓦器碗は、焼成良好あるいは炭素吸着良好な個体は少なく過半数は不良品であるが、これらが模倣品であるか和泉型の搬入品であるかの判断はきわめて難しい。

また「宮ノ本遺跡I」では、瓦器碗でジグザグ状・螺旋状・連結輪状の暗文をもつものについて、紀伊型の可能性ありとして記述した。しかしながら北野隆亮氏(財団法人和歌山市都市整備公社)に実現いただいた結果、これらは紀伊型ではなく和泉型であるのご教示いただいた。胎土分析でも和泉型の領域に含まれるという結果を得ている。

ただし、本遺跡では明らかに模倣品と判断される一群が確認されている。口径に比して器高があり深身、腰が張った器形、高台は幅広・低平で粗雑な貼り付け、口縁ヨコナデ弱い、口縁を挟んでヨコナデするため内面の口・体部境に弱い稜線を作る、器壁厚い、ヘラミガキは細く規則性に乏しい、焼成・炭素吸着ともに不良でムラがある、といった特徴をもつ。胎土は目視や実体顕微鏡観察で砂岩・泥岩・チャートを含むものがあり、本遺跡が属する秩父帯の表層地質と一致するものとして、在地生産の指標の一つとなりうる。これらは概ね和泉型III期後半～IV期前半の瓦器碗と共伴するが、I - 13区SD1078では和泉型瓦器碗IV - 1～2と共伴することから、和泉型瓦器碗が搬入量が減る時期に不足分を模倣品で補完した可能性が高いものと考えられる。

貿易陶磁器の供膳具は、古段階では龍泉窯系青磁碗I - 1～4・5 a b・6類、皿I類、同安窯系青磁碗I - 1 b類、皿I - 1・2類、白磁碗V - 4・VII・VIII類、白磁皿III・VII・VIII類など、新段階では青磁碗I - 5 c類、白磁皿IX類が出土している。その他、時期は特定できないが青白磁供膳具もわずかにみられる。II - 13区SK1419では白磁碗V - 2 a類とIII - 2期の和泉型瓦器碗が重ねた状態で出土しており、白磁碗は少なくとも半世紀の伝世が認められる。

出土点数はきわめて少ないが、新段階になると吉備系土師質碗と備前焼碗が搬入される。本県では現時点でこれらの遺物が出土する地域は、中島田遺跡や名東遺跡など眉山北西麓の名東荘域、眉山南側の寺山遺跡や川西遺跡などに限定され、宮ノ本遺跡は眉山周辺域以外での初の確認事例である。

〈煮炊具〉

煮炊具は山城型瓦質羽釜・鍋、広島東部～岡山西部産土師質羽釜、河内型土師質羽釜、紀伊型土師質鏝付鍋、吉備系土師質鍋、瀬戸内沿岸産土師質鍋などがある。

山城型瓦質羽釜は、いずれも成形・調整技法は共通するものの、胎土の精粗によって二分される。胎土精良なものは概ね丁寧な調整を施されていることから山城産とみられるが、胎土・調整ともに粗雑なものは胎土分析でも泥質片岩の含有が認められることから模倣品と考えられる。

受口状の口縁をもつ山城型瓦質鍋のうち、体部外面に平行タタキを施すものがあり、地方での模倣品と考えられる。平行タタキは播磨地方の煮炊具に多くみられる技法であるが、本品が同地産かは明らかでない。

口縁・鏝部ともに短く、口縁端部は外方に拡張、体部はやや外方に開く、鏝部は貼り付け、といった形態的特徴をもつ土師質羽釜がⅡ－13区で数点出土している。鈴木康之氏（広島県立歴史博物館）に確認いただいたところ、広島県東部～岡山県西部にかけて分布する羽釜で、生産地では瓦質土器と認識されている。山城型瓦質羽釜の無脚タイプを模倣したものとされる。胎土は概ね精良で、金雲母と角閃石を含む。本県では中島田遺跡などで出土が確認されており、吉備系碗とともに持ちこまれた可能性が考えられる。

紀伊型土師質鏝付き鍋は、甕形で体部上位に低い凸帯状の退化した鏝部をもつ煮炊具で、生産地では羽釜に分類している。口縁端部は内方に折り返す。体部はきわめて薄作りである。胎土は粗く、結晶片岩あるいは砂岩・チャート等を含む。北野氏に実見いただき、和歌山からの搬入品であるというご指摘をいただいた。口縁の形状と鏝部の退化の度合いから概ね13世紀代に位置付け、共伴遺物とも概ね齟齬を来さないが、細かな編年は生産地においても課題となっている。本遺跡出土の紀伊型鍋について、形状・調整・胎土に微妙な差異があり、地域差もしくは年代差によるものかは不明である。県下では沿岸域に分布するが、まとまって出土したのは本遺跡が最初である。もっとも内陸での出土事例は黒谷川宮ノ前遺跡である。

吉備系土師質鍋は、外面タテハケ、内面ヨコハケを施し、ハケ調整を多用する。器壁は薄く、胎土に金雲母と角閃石を含む。吉備系土師質碗や備前碗のように出土遺跡が限定されておらず、県下の中世遺跡では数量的に少ないものの目にすることがある。本遺跡でも同様に出土数は少ない。

瀬戸内沿岸産土師質鍋は1cm超のきわめて厚い器壁をもち、外面に粗いタテハケを施す。胎土は粗く金雲母や花崗岩を含むことから瀬戸内沿岸の産と考える。県下での出土事例は多く、本遺跡のほか古城遺跡や敷地遺跡ではⅡ～Ⅲ－1期の和泉型瓦器碗と共伴することから、概ね12世紀後半頃に位置付けられる。

〈調理具・貯蔵具〉

本期には備前焼播鉢は搬入を開始しておらず、ほぼ東播系捏鉢で占められる。「宮ノ本遺跡Ⅱ」のNo.188は口径18.9cmの小型品である。口縁端部が拡張せず丸く収めるが、片口を設けるため東播系捏鉢の小型品とした。No.1793も同型品とみられる。

また希な遺物であるが、瓦質土器の片口鉢が出土している。「宮ノ本遺跡Ⅰ」No.1790がほぼ全形が復元できる個体で、No.1868は口縁の一部とみられる。森島康雄氏（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）から、和泉型瓦器で同種の鉢がわずかに生産されていることをご教示いただいた。1790は共伴する和泉型瓦器碗からⅢ－2期に位置付けられる。

貯蔵具は東播系須恵質甕や常滑焼甕がみられる。常滑焼は体部外面の押印文スタンプにバリエーションがある。中には渥美焼の疑いがあるものもみられるが、円通寺遺跡で確認された渥美焼とは色調や胎土が異なる。亀山焼瓦質甕と断定できる個体はない。この時期に属する備前焼は確認されていない。

〈その他〉

瓦質火鉢（「宮ノ本遺跡Ⅱ」No.1516）がⅠ－12区SD1048南西隅部から多量の土師質皿とともに出土している。形状は畿内産瓦質土器火鉢であるが、成形・調整の技法の点で異なる。とくに底部外面は稲藁状植物の圧痕が不規則に残されており、他に例を見ないものである。

Ⅰ－12区SA1085EP 8から瓦質香炉（「宮ノ本遺跡Ⅱ」No.1223）が出土している。奈良県仏塚古墳出土のものが近似しているが、宮ノ本遺跡の出土品は低平な器形で直方体に成形した三足をもつ点が異なる。

「宮ノ本遺跡Ⅰ」No.2152の瓦質蓋は、奈良県春日大社遺跡出土の経筒蓋と近似した器形であることから、同類ではないかと考えた。その後、佐藤亜聖氏に実見いただいたところ、蓋であることは誤りないが経筒蓋とする根拠に乏しいと指摘されたため、器種については白紙に戻しておく。

第5期（室町時代）（第773図）

本期は概ね14世紀後半～16世紀代に位置付けられる。

第3期以降第4期にかけて碁盤目状の屋敷地区画を形成していた溝は全て埋没し、代わって調査地北東側のⅡ－8～10区でL字に屈曲する溝SD1067によって区画された方形屋敷地の南東部分を確認した。遺構の開始期は14世紀後半で、15世紀後半～16世紀代にかけて徐々に埋没し、16世紀末までに埋没したものと考えられる。屋敷地規模は、泉八幡神社が鎮座する丘陵を西限と考えると一辺70m規模の方形区画が復元できる。屋敷地は神社がある丘陵を除いて本遺跡では最高所を占める。

本屋敷地の性格であるが、溝の規模や立地から当該期における集落における有力者の屋敷地であると考えられる。室町期は荘官もしくは地頭が在地領主化する時期であるが、これらの館は平地城館として認識されるものであり、概ね幅10m前後、深さ2m超の大規模な堀や土塁で囲繞する。本屋敷地の区画溝は幅3m程度で、黒谷川宮ノ前遺跡や町口遺跡、大松遺跡と同規模であることから、名主クラスの屋敷地と考えられる。

本期の建物は方形区画屋敷地内から検出していない。本期に属する可能性が高い建物は、Ⅱ地区SA1023・1025・1026・1033・1037・1055の6棟が挙げられる。いずれも方形区画屋敷地周囲のⅡ地区北東部に位置する。Ⅰ地区では1棟のみ確認できるだけで、本期以降の遺構はほぼ皆無に近く、徐々に水田化したものと考えられる。

遺物は上田分類B－Ⅱ～Ⅳ・C・D類の青磁碗、森田分類C群の白磁碗、同分類C・D・E群の白磁皿、長谷川編年Ⅳ～Ⅶ期の播磨型羽釜・播丹型鍋、鏝部が退化した土師質土器羽釜（格子タタキ）、重根編年Ⅳ・Ⅴ期の備前焼甕・播鉢が出土しているが、いずれも数量的には僅少である。

底部外面に格子タタキを伴う土師質羽釜は、県東部を中心にした県下全域で普遍的に出土するものである。およそ14世紀代までは胎土に結晶片岩や砂岩を含むものもみられることから、在地産と指摘できる個体もある。鏝部の退化が顕著になってくる15世紀以降は、ほぼ全ての胎土に金雲母や花崗岩粒が確認できることから瀬戸内沿岸域からの搬入品と考えられ、同種の遺物が分布する香川が産地ではないかと推定している。

文献資料では、1351（観応二）年に細川頼春が本郷地頭職を紀伊の安宅須佐美氏に安堵しており、この時期が方形区画屋敷地の開始期と合致する。15～16世紀には清原氏が本遺跡の北東500mにある本庄城に入る。築城年代は不明であるが少なくとも室町時代後期には政経の中心が本庄城に移っており、かつて栄えた本遺跡は領内に点在する一集落といった地位に下落したとみられる。

1354（文和三）年、罪科のため又五郎という人物の闕所となった「竹原庄本郷恒貞名内畠」二段について、橘（安宅）頼貞と清原（須佐美）氏実が泉福寺に寄進している。泉福寺は泉八幡神社の神宮寺として創建されたとされるが、調査地内で寺院関連の遺構・遺物は確認されていない。のち安宅氏は南朝方につき、1362（正平十七）年、阿波国南方の闕所と竹原荘本郷などを宛行われる。1476（文明八）年、守護細川氏が竹原五箇庄と二字谷郷を二字対馬守に安堵している。1506（永正三）年、清原安芸守高国（乗真）が地頭職に補任され、1533（天文二）年には隆禅寺伽藍の鎮守として泉八幡宮を再興している。1582（天正十）年には長宗我部氏の侵略を受ける。

第6期（江戸時代）（第773図）

中世末になると第5期の屋敷地区画溝は埋没し、近世にはⅡ地区を中心に掘立柱建物18棟と少数の溝・土坑が営まれる。

溝はⅡ-2・4区を東西に貫くSD1001がある。第4期の区画溝SD1002の約3m北に並行することから、第4期の地割を踏襲している可能性がある。本地割は現在Ⅱ-1・2区間およびⅠ-8・11区間に生活道路として継承されている。またⅡ-4・5区SD1035、Ⅱ-7区SD1063も本期の溝で、正方位を指向する。SD1001の開始期は染付碗や備前焼から15世紀代に遡る可能性があり、埋没時期は出土銭や肥前系陶磁器の年代から17世紀中葉と考えられる。

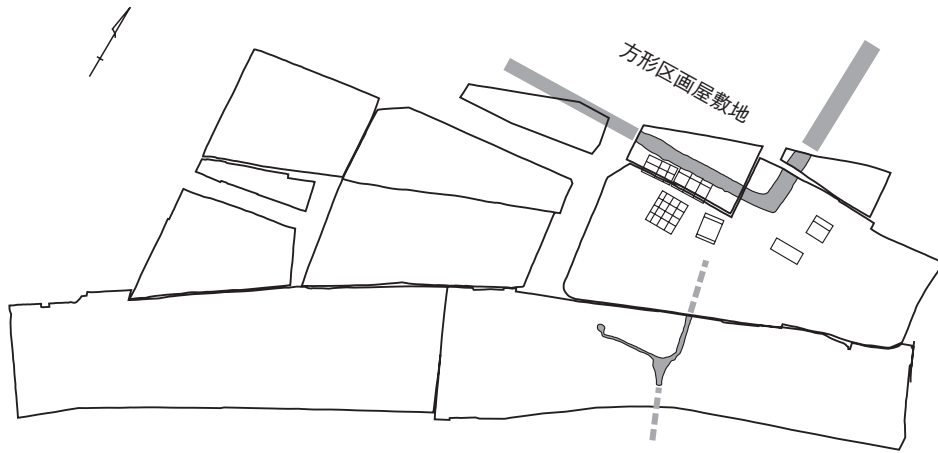
建物は、これまで遺構分布が疎であった泉八幡神社前のⅡ-3区で、SA1002～1006の5棟が集中して配置されるほか、Ⅱ地区東端部のSA1039・1041・1042・1044・1059の5棟が集中している。第6期の可能性をもつ建物は正方位の主軸をもつものが多い。

本期の遺構は中世末に遡り得るものもみられるが、概ね17世紀代が主体であり、18世紀には衰微するとみられる。近世後半期には調査地のほぼ全域が水田化するが、Ⅱ地区東側の一部は近世遺物を含む掘り込み（SX1013など一部の遺構を除き攪乱として取り扱い）が多くみられることから、現代に至るまで居住域として利用されたものと考えられる。

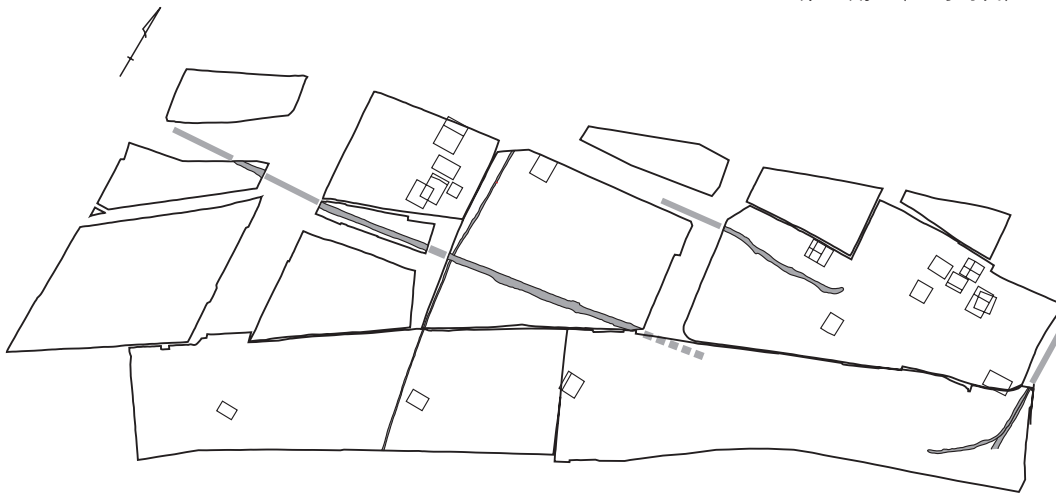
本期には旧竹原荘域は周辺部も含めて「竹原十八箇村」と称され、うち本庄村に属する里の一つとして「泉」があり、本遺跡一帯を指すものと思われる。なお桑野川を挟んだ対岸に桂国寺があり、近世には牛岐城番である賀島家の菩提所となっている。

参考文献

- 阿南市史編さん室編 1987『阿南市史』第一巻
三好昭一郎他 2000『日本歴史地名大系 37巻 徳島県の地名』平凡社
向井公紀 2009『川原遺跡現地説明会資料』阿南市文化振興課



第5期 (室町時代)



第6期 (江戸時代)

0 50m

第773図 宮ノ本遺跡 遺構変遷図(3)

第2表 宮ノ本遺跡 I・II地区 SA・SG年代一覧

地区・遺構	時 期	地区・遺構	時 期
I地区 SA1001	13世紀代	I地区 SA1053	13世紀代か
I地区 SA1002	13世紀代か	I地区 SA1054	不明
I地区 SA1003	13世紀代か	I地区 SA1055	13世紀前半
I地区 SA1004	12世紀末～13世紀前半	I地区 SA1056	13世紀代か
I地区 SA1005	13世紀代か	I地区 SA1057	13世紀代か
I地区 SA1006	13世紀代か	I地区 SA1058	13世紀代
I地区 SA1007	不明	I地区 SA1059	13世紀後半
I地区 SA1008	12世紀後半	I地区 SA1060	13世紀後半
I地区 SA1009	不明	I地区 SA1061	13世紀代か
I地区 SA1010	13世紀代か	I地区 SA1062	不明
I地区 SA1011	13世紀代か	I地区 SA1063	12世紀末～13世紀初頭
I地区 SA1012	13世紀代か	I地区 SA1064	不明
I地区 SA1013	13世紀前半	I地区 SA1065	13世紀前半頃
I地区 SA1014	不明	I地区 SA1066	13世紀代か
I地区 SA1015	13世紀代か	I地区 SA1067	不明
I地区 SA1016	12世紀末～13世紀初	I地区 SA1068	不明
I地区 SA1017	13世紀代か	I地区 SA1069	不明
I地区 SA1018	不明	I地区 SA1070	不明
I地区 SA1019	不明	I地区 SA1071	不明
I地区 SA1020	12世紀後半～13世紀代	I地区 SA1072	不明
I地区 SA1021	不明	I地区 SA1073	不明
I地区 SA1022	不明	I地区 SA1074	12世紀末～13世紀前半
I地区 SA1023	不明	I地区 SA1075	12世紀末～13世紀前半
I地区 SA1024	不明	I地区 SA1076	13世紀前半
I地区 SA1025	15世紀代	I地区 SA1077	13世紀後半
I地区 SA1026	13世紀代か	I地区 SA1078	13世紀代か
I地区 SA1027	13世紀代か	I地区 SA1079	13世紀代か
I地区 SA1028	13世紀代か	I地区 SA1080	13世紀前半か
I地区 SA1029	13世紀代か	I地区 SA1081	13世紀代か
I地区 SA1030	13世紀前半	I地区 SA1082	不明
I地区 SA1031	13世紀代か	I地区 SA1083	13世紀代か
I地区 SA1032	12世紀末～13世紀前半	I地区 SA1084	13世紀代か
I地区 SA1033	13世紀代か	I地区 SA1085	13世紀前半か
I地区 SA1034	13世紀中頃	I地区 SA1086	13世紀前半
I地区 SA1035	13世紀前～中頃	I地区 SA1087	13世紀前半
I地区 SA1036	13世紀代か	I地区 SA1088	13世紀代か
I地区 SA1037	13世紀前半	I地区 SA1089	13世紀代後半
I地区 SA1038	13世紀代か	I地区 SA1090	13世紀前半
I地区 SA1039	13世紀代か	I地区 SA1091	13世紀後半
I地区 SA1040	13世紀前半頃	I地区 SA1092	13世紀前半か
I地区 SA1041	不明	I地区 SA1093	13世紀代か
I地区 SA1042	13世紀代か	I地区 SA1094	13世紀代か
I地区 SA1043	13世紀代か	I地区 SA1095	13世紀代
I地区 SA1044	不明	I地区 SA1096	13世紀前半
I地区 SA1045	不明	I地区 SA1097	13世紀前半
I地区 SA1046	不明	I地区 SA1098	13世紀代
I地区 SA1047	13世紀代か	I地区 SA1099	13世紀代か
I地区 SA1048	13世紀後半	I地区 SA1100	13世紀代か
I地区 SA1049	13世紀代	I地区 SA1101	12世紀代か
I地区 SA1050	不明	I地区 SA1102	13世紀前半
I地区 SA1051	13世紀代か	I地区 SA1103	13世紀後半
I地区 SA1052	12世紀代か	I地区 SA1104	13世紀前半

地区・遺構	時期	地区・遺構	時期
I 地区 SA1105	不明	II 地区 SA1026	15 世紀前後
I 地区 SA1106	12 世紀後半～13 世紀前半	II 地区 SA1027	13 世紀代か
I 地区 SA1107	12 世紀後半	II 地区 SA1028	中世末～近世初
I 地区 SA1108	12 世紀代か	II 地区 SA1029	12 世紀前後か
I 地区 SA1109	13 世紀代か	II 地区 SA1030	12 世紀代か
I 地区 SG1001	13～14 世紀代か	II 地区 SA1031	13 世紀代か
I 地区 SG1002	12 世紀末～13 世紀前半	II 地区 SA1032	12 世紀代か
I 地区 SG1003	13 世紀代か	II 地区 SA1033	中世末～近世初か
I 地区 SG1004	13 世紀代か	II 地区 SA1034	13 世紀代か
I 地区 SG1005	13 世紀代か	II 地区 SA1035	13 世紀代か
I 地区 SG1006	不明	II 地区 SA1036	13 世紀代か
I 地区 SG1007	不明	II 地区 SA1037	中世末～近世初
I 地区 SG1008	13 世紀前半か	II 地区 SA1038	12 世紀代か
I 地区 SG1009	13 世紀前半か	II 地区 SA1039	近世
I 地区 SG1010	不明	II 地区 SA1040	不明
I 地区 SG1011	不明	II 地区 SA1041	近世初頭
I 地区 SG1012	不明	II 地区 SA1042	近世初頭
I 地区 SG1013	13 世紀代か	II 地区 SA1043	13 世紀代か
I 地区 SG1014	13 世紀代か	II 地区 SA1044	12 世紀代か
I 地区 SG1015	—	II 地区 SA1045	12 世紀末～13 世紀前半
I 地区 SG1016	13 世紀代か	II 地区 SA1046	17 世紀後半以降
I 地区 SG1017	13 世紀代か	II 地区 SA1047	12 世紀代か
I 地区 SG1018	—	II 地区 SA1048	12 世紀後半
I 地区 SG1019	13 世紀代か	II 地区 SA1049	12 世紀末～13 世紀前半
I 地区 SG1020	13 世紀代か	II 地区 SA1050	12 世紀代か
I 地区 SG1021	12 世紀末～13 世紀前半	II 地区 SA1051	12 世紀代か
I 地区 SG1022	13 世紀前半	II 地区 SA1052	13 世紀後半
I 地区 SG1023	13 世紀代か	II 地区 SA1053	12 世紀後葉
I 地区 SG1024	13 世紀代か	II 地区 SA1054	13 世紀代か
II 地区 SA1001	13 世紀代か	II 地区 SA1055	15 世紀後葉～16 世紀代
II 地区 SA1002	17 世紀（1656 年）以降	II 地区 SA1056	中世後半期か
II 地区 SA1003	17 世紀以降	II 地区 SA1057	15～16 世紀代か
II 地区 SA1004	17 世紀以降	II 地区 SA1058	近世
II 地区 SA1005	17 世紀以降	II 地区 SA1059	近世
II 地区 SA1006	17 世紀以降	II 地区 SA1060	13 世紀代か
II 地区 SA1007	13 世紀代か	II 地区 SA1061	12 世紀代
II 地区 SA1008	13 世紀後半	II 地区 SA1062	12 世紀後半～13 世紀前半
II 地区 SA1009	12 世紀前後	II 地区 SA1063	12 世紀代
II 地区 SA1010	13 世紀前半か	II 地区 SA1064	12 世紀後半
II 地区 SA1011	12 世紀後葉～末	II 地区 SA1065	12 世紀代
II 地区 SA1012	12 世紀後半か	II 地区 SA1066	12 世紀代か
II 地区 SA1013	12 世紀代か	II 地区 SA1067	12 世紀代
II 地区 SA1014	13 世紀前半か	II 地区 SA1068	12 世紀代か
II 地区 SA1015	13 世紀代か	II 地区 SA1069	12 世紀代
II 地区 SA1016	13 世紀代か	II 地区 SA1070	13 世紀代
II 地区 SA1017	12 世紀代か	II 地区 SA1071	13 世紀代
II 地区 SA1018	12 世紀末～13 世紀前半	II 地区 SA1072	12 世紀末～13 世紀前半
II 地区 SA1019	12 世紀代か	II 地区 SA1073	12 世紀末～13 世紀前半
II 地区 SA1020	13 世紀代か	II 地区 SA1074	13 世紀代か
II 地区 SA1021	13 世紀代か	II 地区 SA1075	12 世紀代か
II 地区 SA1022	12 世紀代か	II 地区 SA1076	中世末～近世初頭か
II 地区 SA1023	15 世紀代	II 地区 SA1077	12 世紀後半
II 地区 SA1024	17 世紀代	II 地区 SA1078	12 世紀代
II 地区 SA1025	15 世紀後半～16 世紀代	II 地区 SA1079	13 世紀代か

地区・遺構	時期	地区・遺構	時期
II地区 SA1080	12世紀末～13世紀前半	II地区 SA1099	中世末～近世初頭か
II地区 SA1081	13世紀前半	II地区 SA1100	13世紀後半～14世紀前半
II地区 SA1082	13世紀前半	II地区 SA1101	13世紀代か
II地区 SA1083	12世紀末～13世紀前半	II地区 SA1102	13世紀前半か
II地区 SA1084	13世紀前半	II地区 SA1103	13世紀代か
II地区 SA1085	12世紀後半～13世紀前半	II地区 SA1104	13世紀前半か
II地区 SA1086	13世紀代	II地区 SA1105	12世紀末～13世紀前半
II地区 SA1087	13世紀代か	II地区 SA1106	12世紀後半
II地区 SA1088	12世紀代か	II地区 SA1107	12世紀代か
II地区 SA1089	13世紀代か	II地区 SG1001	12世紀後半～13世紀前半
II地区 SA1090	12世紀代か	II地区 SG1002	13世紀代
II地区 SA1091	13世紀代か	II地区 SG1003	12世紀前後～13世紀後半
II地区 SA1092	12世紀代か	II地区 SG1004	13世紀前半
II地区 SA1093	中世末～近世初頭か	II地区 SG1005	12世紀末～13世紀前半
II地区 SA1094	12世紀末～13世紀前半	II地区 SG1006	12世紀末～13世紀前半
II地区 SA1095	12世紀末～13世紀前半	II地区 SG1007	12世紀代か
II地区 SA1096	12世紀末～13世紀前半	II地区 SG1008	12世紀代か
II地区 SA1097	13世紀代か	II地区 SG1009	13世紀代か
II地区 SA1098	13世紀代	II地区 SG1010	12世紀代か

第Ⅳ章 自然科学分析

1. 宮ノ本遺跡Ⅰ・Ⅱ出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

この胎土分析では、自然科学的分析手法を用いて、11世紀～16世紀の土器を分析し、次に述べる事柄について胎土分析の面から検証した。

宮ノ本遺跡出土の吉備系土師質土器碗、備前焼碗、瓦器碗、瓦質土器鍋・羽釜、土師質土器鍋・羽釜・杯が考古学的分析（調整・技法・肉眼による胎土観察）で在地品および搬入品に分類されている。この分類が蛍光X線分析と実体顕微鏡観察による胎土分析で、在地品か搬入品に分類できるか、また搬入品ならばどこで生産されたのかについて検討した。

2. 分析方法と試料

分析方法は、蛍光X線分析と実体顕微鏡による胎土観察の2つの方法で胎土を検討した。

蛍光X線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（元素）は、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・Pの10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約15トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による胎土観察では、土器の胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。なお砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、多量・中量・少量・まれにの4段階で表した。

分析に供した試料は、第3表に示した土師質供膳具・煮炊具、瓦器碗、瓦質煮炊具、陶器碗、土壌の40点である。

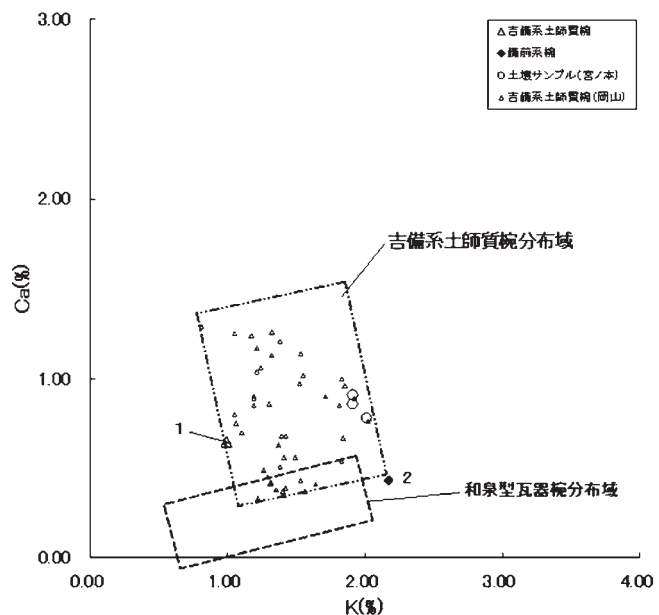
3. 分析結果

【蛍光X線分析結果について】

分析の結果、CaとKの成分に顕著な差があることから、K-Ca散布図により比較した。

(1) 吉備系土師質土器碗および備前焼碗

第774図K-Ca散布図から、吉備系碗は岡山県内出土の吉備系碗の分布域に分布



第774図 宮ノ本遺跡出土吉備系土師器碗および備前焼碗の産地推定

第3表 宮ノ本遺跡胎土分析資料一覧 (%)

分析No.	遺跡	器種	掲載番号 (宮ノ本I)	掲載番号 (宮ノ本II)	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	備考
1	I	吉備系土師質土器碗	1219		62.40	0.69	26.02	4.66	0.04	1.46	0.65	2.14	0.99	0.78	
2	I	備前碗	1475		67.68	0.98	20.71	3.19	0.04	1.47	0.43	2.33	2.17	0.72	
3	I	瓦器碗 (在地?)	1512		66.06	1.09	21.16	4.71	0.05	1.99	0.17	2.85	1.49	0.21	再分析、チャート含む?
4	II	瓦器碗 (在地?)		176	65.99	0.93	19.81	6.87	0.08	1.72	0.44	2.72	1.09	0.16	
5	II	瓦器碗 (在地?)		678	62.73	1.12	21.58	8.61	0.15	1.68	0.55	1.88	1.21	0.26	
6	II	瓦器碗 (在地?)		895	67.47	0.87	19.63	4.11	0.06	3.05	0.23	2.80	1.36	0.19	
7	II	瓦器碗 (在地?)		1060	67.40	1.09	19.08	5.01	0.09	1.74	0.28	3.31	1.65	0.18	
8	II	瓦器碗 (在地?)		1049	65.60	1.13	19.38	6.24	0.11	1.91	0.26	3.33	1.67	0.17	
9	II	瓦器碗 (在地?)		1487	69.20	0.93	18.32	5.89	0.06	1.56	0.17	2.01	1.33	0.28	
10	II	瓦器碗 (在地?)		1238	61.85	0.88	22.84	8.71	0.12	1.50	0.19	2.68	0.93	0.12	
11	I	瓦器碗 (紀伊型?、連結輪状暗文)	798		60.21	0.90	23.53	9.06	0.13	1.83	0.15	2.55	1.01	0.41	非紀伊型か(※)
12	I	瓦器碗 (紀伊型?、連結輪状暗文)	1301		66.87	0.87	20.18	5.88	0.07	1.90	0.10	2.94	0.94	0.09	非紀伊型か
13	I	瓦器碗 (紀伊型?、螺旋状暗文)	1302		67.61	0.89	18.86	7.01	0.09	1.61	0.33	2.45	0.90	0.06	非紀伊型か
14	II	瓦器碗 (紀伊型?、螺旋状暗文)		985	64.46	0.84	20.51	7.33	0.09	1.95	0.14	3.06	1.18	0.21	非紀伊型か
15	II	瓦器皿 (紀伊型か、ジグザグ状暗文)		1639	63.79	0.78	21.18	8.83	0.09	1.38	0.36	2.51	0.76	0.14	非紀伊型か
16	I	瓦質土器鍋 (産地不明)	624		64.32	1.18	21.62	6.13	0.10	1.87	0.26	2.49	1.62	0.18	
17	II	瓦質土器鍋 (山城型、模倣品?)		1610	66.24	1.10	18.89	6.37	0.12	1.84	0.33	2.97	1.69	0.15	
18	I	瓦質羽釜 (山城型)	942		65.01	1.05	19.81	6.77	0.09	2.17	0.25	2.76	1.61	0.18	
19	I	瓦質羽釜 (山城型)	1093		66.58	1.21	19.99	6.59	0.11	1.89	0.26	1.23	1.83	0.11	
20	II	瓦質羽釜 (山城型、模倣品?)		803	69.69	0.54	17.64	6.23	0.09	1.59	0.56	1.52	1.70	0.17	
21	II	瓦質羽釜 (山城型、模倣品?)		1613	65.55	0.74	19.02	7.29	0.12	2.03	0.62	2.79	1.44	0.18	広島東部～岡山西部産か
22	II	土師質土器羽釜 (瀬戸内沿岸産?)		1167	61.21	0.86	23.12	7.11	0.12	2.83	0.74	2.42	1.37	0.17	広島東部～岡山西部産か
23	II	土師質土器羽釜 (瀬戸内沿岸産?)		766	63.29	0.74	21.61	6.34	0.10	2.94	0.80	2.42	1.37	0.17	北野氏により紀伊産との指摘
24	II	土師質土器鍋 (紀伊型)		186	63.59	1.05	18.69	8.62	0.25	1.56	1.35	3.34	1.05	0.20	北野氏により紀伊産との指摘
25	II	土師質土器鍋 (紀伊型)		324	59.09	1.09	18.36	12.37	0.23	2.12	2.40	2.73	1.12	0.16	北野氏により紀伊産との指摘
26	II	土師質土器鍋 (紀伊型)		903	65.63	0.85	18.96	7.70	0.09	1.59	1.04	2.51	1.21	0.25	北野氏により紀伊産との指摘
27	II	土師質土器鍋 (河内型か大和型?)		1163	65.77	0.75	20.32	7.41	0.06	1.47	0.46	2.09	1.23	0.28	
28	I	土師質土器鍋 (瀬戸内沿岸産?)	938		63.88	0.96	20.10	9.12	0.12	1.88	0.87	1.26	1.38	0.17	金雲母・花崗岩含む
29	I	土師質土器鍋 (瀬戸内沿岸産?)	1214		60.19	0.87	20.63	10.08	0.16	1.75	2.23	2.38	1.30	0.12	金雲母・花崗岩含む
30	II	土師質土器鍋 (瀬戸内沿岸産?)		1165	61.72	0.95	21.55	8.25	0.11	1.83	0.77	2.75	1.43	0.43	金雲母・花崗岩含む
31	I	土師質土器羽釜 (中世末・瀬戸内産?)	874		66.08	0.92	20.45	6.93	0.07	1.32	0.33	2.06	1.41	0.20	金雲母・花崗岩含む
32	I	土師質土器羽釜 (中世末・瀬戸内産?)	944		68.08	0.61	19.23	3.46	0.03	2.96	0.31	2.82	1.45	0.29	金雲母・花崗岩含む
33	I	土師質土器羽釜 (中世末・播磨型)	943		67.82	0.56	19.22	4.83	0.08	3.06	0.38	2.81	0.91	0.20	
34	II	土師質土器皿 (非回転台、京都系模倣?)		213	69.03	0.75	18.24	4.72	0.06	1.55	0.48	3.00	1.68	0.30	
35	II	土師質土器杯 (回転ヘラ切り)		164	64.79	1.00	19.35	7.81	0.09	1.63	0.56	3.08	1.28	0.19	
36	II	土師質土器杯 (回転糸切り)		1273	69.37	0.61	18.89	2.94	0.04	2.77	0.14	3.48	1.52	0.09	
37	II	土師質土器杯 (回転糸切り)		1458	61.54	0.69	19.75	10.71	0.14	1.71	0.43	3.11	1.61	0.02	
38	II	土壌サンプル (宮ノ本)			63.43	0.87	17.61	8.82	0.19	2.15	0.86	3.82	1.91	0.13	遺構面ベース土第6層
39	II	土壌サンプル (宮ノ本)			65.57	0.96	18.23	8.78	0.25	1.79	0.91	1.29	1.91	0.13	遺構面ベース土第7層
40	II	土壌サンプル (宮ノ本)			64.36	0.87	17.62	8.59	0.24	1.97	0.78	3.04	2.01	0.19	遺構面ベース土第8層

※瓦器碗・鍋で紀伊型の可能性があるものについて、北野隆亮氏 (財団法人和歌山和歌山都市整備公社) に実見いただいた

している。また、備前焼碗は吉備系碗および瓦器碗とは胎土が異なっていた。

(2) 瓦器碗

第775図 K - Ca 散布図から、宮ノ本遺跡出土の在来地および紀伊型の疑いがある瓦器碗は、ほとんどが和泉型の分布域に入った。ただ、在来地と考えられる4・5と紀伊型の15の皿は和泉型の分布域に入らなかった。そして詳細に散布図をみると、Ca量の違いで在来地・紀伊型ともに2つの胎土に分類できる。それは、3・6・7・8・9・10・11・12・14と4・5・13・15の試料である。

(3) 瓦質鍋・羽釜

第776図 K - Ca 散布図から、宮ノ本遺跡出土の山城型模倣の瓦質鍋・羽釜は、2つの胎土に分類ができた。それは、16(鍋)・17(鍋：山城型模倣品?)・18・19(羽釜：山城型)と20・21(羽釜：山城型模倣品?)であった。

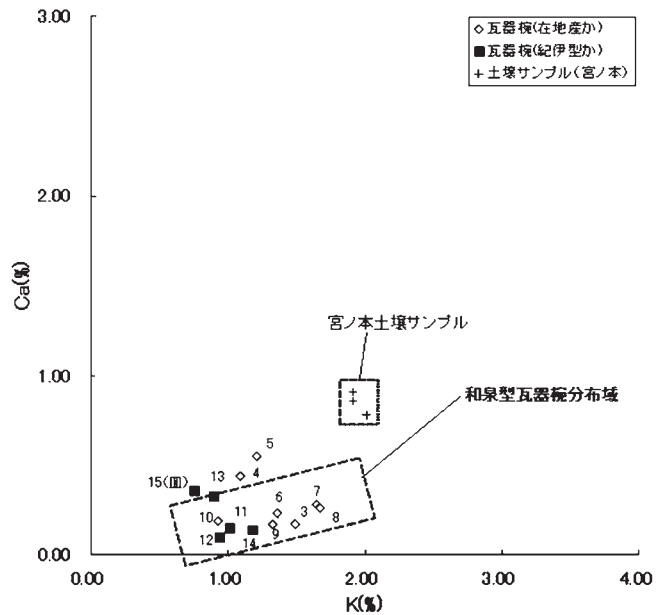
(4) 土師質鍋・羽釜

第777図 K - Ca 散布図から、宮ノ本遺跡出土の瀬戸内沿岸・紀伊・河内・播磨の各産地に分類されている土師質鍋・羽釜は、Ca量の違いで、大きく4つに分類できる。それは、Ca量の多い順に25(紀伊型)・29(瀬戸内?)と24・26(紀伊型)と22・23・28・30(いずれも瀬戸内沿岸)と27(河内か大和)・31(瀬戸内?)・32(瀬戸内?)・33(播磨)である。この結果より、紀伊および瀬戸内沿岸の産地と考えられる試料は大阪や播磨産と考えられる試料よりCa量が多いことがわかる。

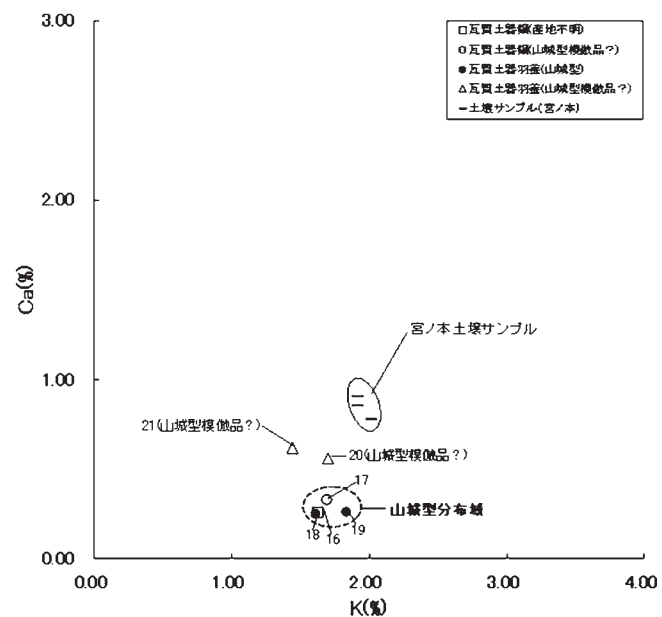
(5) 土師質土器皿・杯、遺跡採集土壌サンプル

第778図 K - Ca 散布図から、宮ノ本遺跡出土の土師質皿・杯の調整技法の違いで胎土に差があるかどうか検討したところ、34(非回転台)・37(回転糸切り)が胎土的に類似し、35(回転ヘラ切り)と36(回転糸切り)はそれぞれ単独で分布している。

また、土壌サンプル試料(38・39・40)は、どの土器試料とも胎土が一致しなかった。



第775図 宮ノ本遺跡出土瓦器碗の産地推定



第776図 宮ノ本遺跡出土瓦質鍋・羽釜の産地推定 (K - Ca 散布図)

【実体顕微鏡観察結果について】

実体顕微鏡による砂粒観察では、吉備系椀・備前焼碗、瓦器椀、瓦質土器鍋・羽釜、土師質土器鍋・羽釜・杯・土壌サンプルに以下のような特徴のある胎土であった。

吉備系椀

・石英（1mm以下）を中量と、長石（1mm以下）を少量含み、火山ガラス（0.5mm以下）を多量に含んでいる。全体的に砂粒が角礫状を呈している。（写真9） 試料番号1

備前焼碗

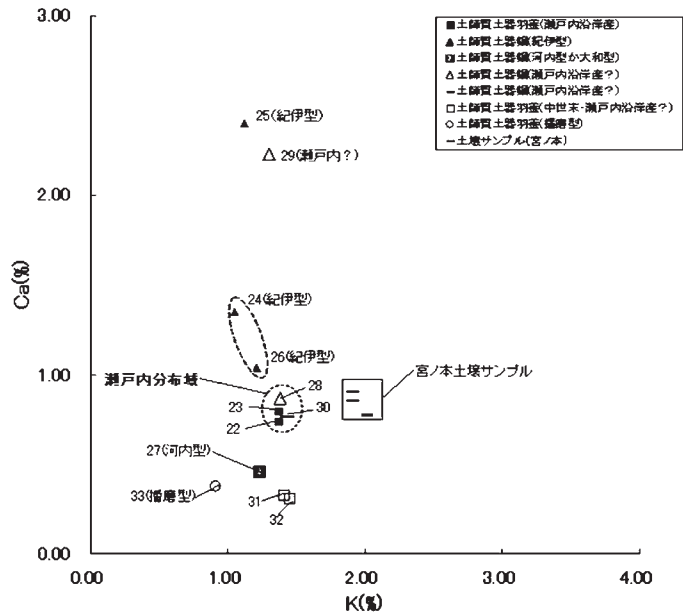
・石英（1mm以下）を中量と、長石（1mm以下）、雲母（微細な金雲母）を少量含み、まれに片岩（1mm以下）を含んでいる。全体的に砂粒が角礫状を呈している。（写真9） 試料番号2

瓦器椀

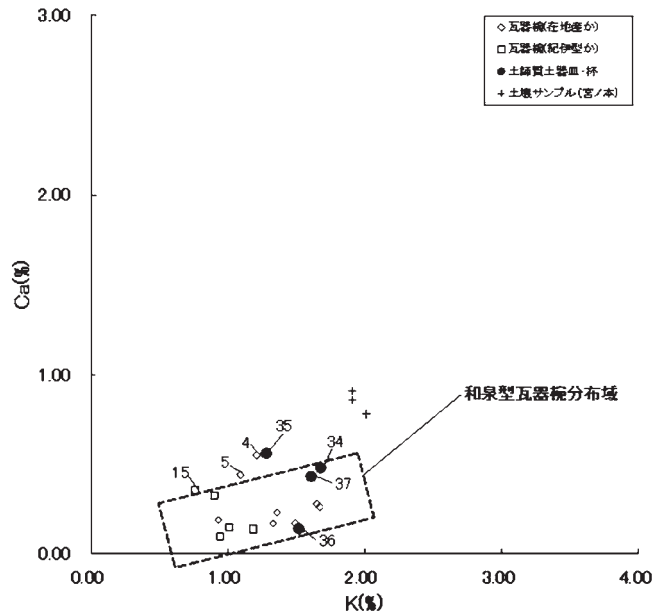
- ・石英（1mm以下）を中量と、黒雲母（0.5mm以下）を少量含んでいる。（写真9） 試料番号3・12
- ・石英（1mm以下）を中量と、黒雲母（0.5mm以下）、火山ガラス（0.5mm以下）を少量含んでいる。（写真9） 試料番号4
- ・石英（1mm以下）を中量と、雲母（微細な鱗片状の白雲母：絹雲母）を少量含んでいる。（写真9） 試料番号5・6・7・8・9・11
- ・石英（2mm以下）を中量と、金雲母（0.5mm以下）を少量含んでいる。（写真9） 試料番号10
- ・石英（1mm以下）を中量と、黒雲母（0.5mm以下）を少量とまれにチャート（2mm以下）を含んでいる。（写真10） 試料番号13・14・15

瓦質土器鍋・羽釜

・石英（1mm以下）を中量と、長石（0.5mm以下）を少量と、まれに片岩（1mm以下）を含んでいる。（写



第777図 宮ノ本遺跡出土土師質鍋・羽釜の産地推定 (K - Ca 散布図)



第778図 宮ノ本遺跡出土土師質皿・杯の産地推定 (K - Ca 散布図)

真 10) 試料番号 16・17・18・19・20

・石英 (1mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下) を少量と、まれにチャートと砂岩 (1mm以下) を含んでいる。

(写真 10) 試料番号 21

土師質土器鍋・羽釜

・石英 (2mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下)、黒雲母 (0.5mm以下) を少量含んでいる。(写真 10) 試料番号 22・23

・石英 (2mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下)、黒雲母 (0.5mm以下) を少量と、まれにチャートと砂岩 (2mm以下) を含んでいる。(写真 10) 試料番号 24・25・26・27・28

・石英 (2mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下)、金雲母 (0.5mm以下) を少量含んでいる。(写真 11) 試料番号 29・30・31・32

・石英 (1mm以下) を中量と、長石 (1mm以下) を少量、まれにチャート (2mm以下) を含んでいる。(写真 11) 試料番号 33

土師質土器皿・杯

・石英 (0.5mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下)、金雲母 (0.5mm以下)、火山ガラス (0.5mm以下) を少量含んでいる。(写真 11) 試料番号 34

・石英 (0.5mm以下) を中量と、長石 (0.5mm以下)、金雲母 (0.5mm以下) を少量含んでいる。(写真 11) 試料番号 35

・石英 (0.5mm以下) を多量と、長石 (0.5mm以下)、金雲母 (0.5mm以下) を少量含んでいる。(写真 11) 試料番号 36

・石英 (0.5mm以下) を少量と、長石 (0.5mm以下)、黒雲母 (0.5mm以下) を少量と、まれにチャート (0.5mm以下) を含んでいる。(写真 11) 試料番号 37

以上の観察結果から以下の特徴がみられた。

- ・吉備系土師質碗には火山ガラスが多く含まれている特徴がみられた。
- ・瓦器碗は、5つの胎土に分類でき、雲母には、黒雲母 (金雲母) や白雲母 (絹雲母)、岩片としてチャートや片岩がみられた。明らかに複数の胎土に分類できる。
- ・瓦質土器鍋、羽釜は2つの胎土に分類でき1つのグループには、片岩が特徴的に含まれ、もう1つのグループにはチャートや砂岩などの岩片が含まれていた。
- ・土師質土器鍋、羽釜では、4つの胎土に分類できた。
- ・土師質土器皿・杯は4点とも胎土が異なり、それぞれ特徴がみられた。

4. まとめ

宮ノ本 I・II 遺跡出土の吉備系碗、瓦器碗、瓦質鍋・羽釜、土師質鍋・羽釜、土師質皿・杯を蛍光 X 線分析、実体顕微鏡の胎土分析を実施したところ、次のようなことが推定された。

(1) 宮ノ本出土の吉備系土師器碗は蛍光 X 線分析で、岡山県内出土の吉備系碗と胎土がほぼ一致した。

また実体顕微鏡観察でも岡山産吉備系碗と類似する特徴が見られた。それは、多量の火山ガラスを含み、砂粒の形状が角礫状を呈していた。備前碗に関してもほぼ同じ結果であった。

- (2) 瓦器碗は、蛍光X線分析で一部の試料をのぞき、ほとんどが和泉型の領域に入ったが、実体顕微鏡観察では複数の胎土に分類が可能であった。それは、雲母類で微細な鱗片状の白雲母（絹雲母）や黒雲母（金雲母）を少量含んでいるものと、岩石片としてチャートを含んでいるものであった。
- (3) 瓦質土器鍋・羽釜では、蛍光X線分析および実体顕微鏡観察とも2つの胎土に分類できた。なお、20と21は砂粒の大きさが類似しているが、20には片岩が、21にはチャート・砂岩がふくまれており胎土は異なっている。
- (4) 土師質土器鍋・羽釜では、蛍光X線分析および実体顕微鏡観察とも4つの胎土に分類できた。
- (5) 土師質土器皿・杯では実体顕微鏡観察で4点の試料とも胎土が異なっていた。

以上、各出土遺物の事実関係から、各試料に関して次のようなことが想定されよう。吉備系土師器碗と備前碗の分析では、いずれも搬入品と推定される結果となった。

瓦器碗の生産地に関しては蛍光X線分析で、ほとんどが和泉型瓦器碗と胎土が類似していたが、実体顕微鏡観察では、砂粒構成の違いから複数の産地に推定された。したがって、複数の生産地から搬入されていることまでは推定できたが、産地の特定まで至らなかった。今後、在地産および畿内産瓦器碗の砂粒観察を実施し、データの蓄積を行い再検討する必要がある。

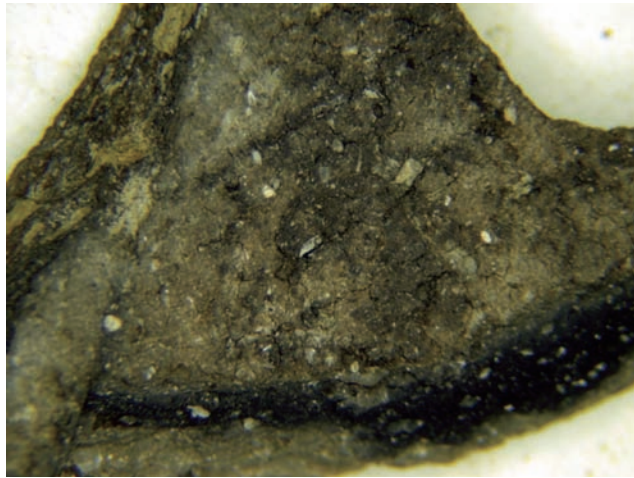
瓦質鍋・羽釜では、2種類の胎土に分類されたが、在地産か搬入品か推定できなかった。つまり、搬入先の山城産の胎土分析データがなく比較できなかったことにある。今後この地域の試料も蓄積する必要がある。

土師質鍋・羽釜では、4つの胎土に分類できた。これは、考古学的な形態・技法・砂粒観察などから、瀬戸内沿岸産、紀伊産・河内か大和産などに分類されていることと、ほぼ一致する結果となった。

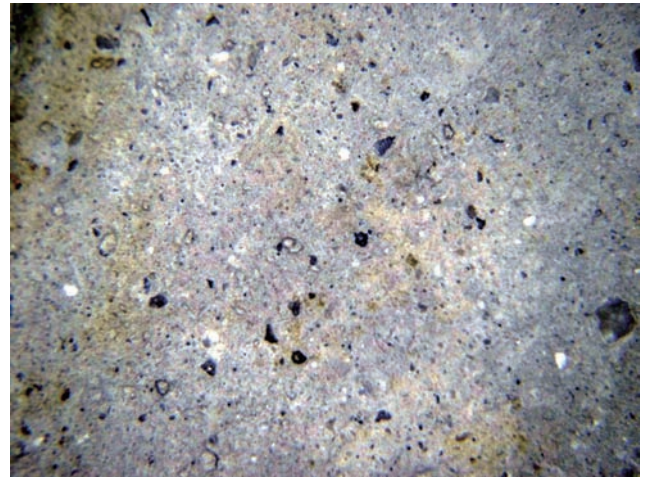
土師質土器皿・杯は調整・技法などから在地産と考えられているが、胎土分析ではまともな複数の胎土に分類できた。また砂粒観察でも搬入品の可能性が考えられる。

このように、蛍光X線分析・実体顕微鏡観察結果と考古学的な検討が一致するものとそうでないものがあった。搬入先と想定される試料を分析し再検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、島田豊彰氏および徳島県埋蔵文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。



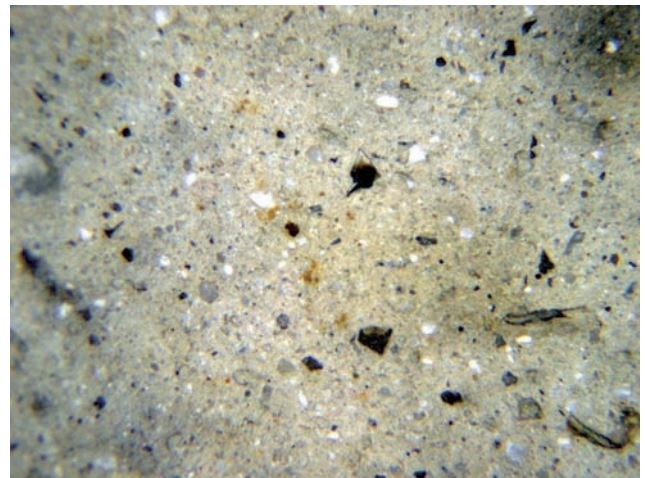
吉備系土師質椀 (試料番号 1)



備前焼碗 (試料番号 2)



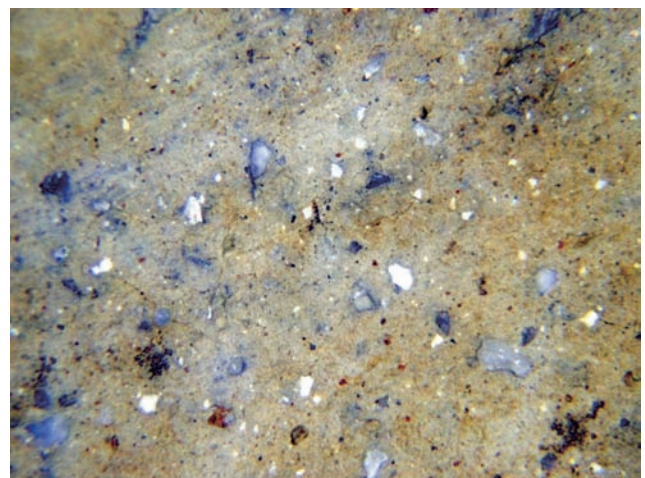
瓦器椀 (試料番号 3)



瓦器椀 (試料番号 4)



瓦器椀 (試料番号 9)



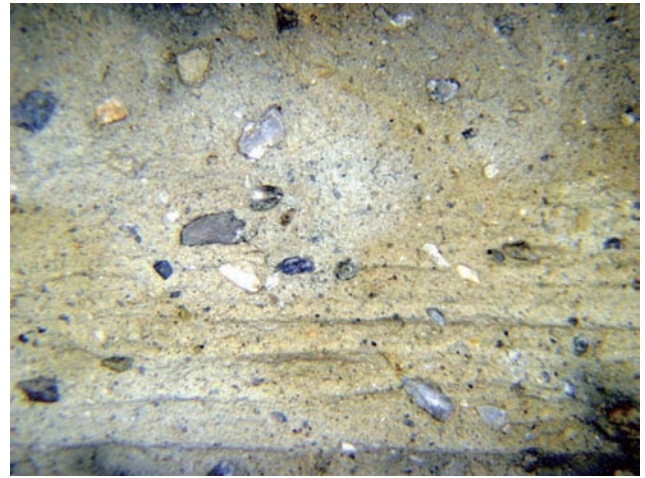
瓦器椀 (試料番号 10)

0 _____ 3mm

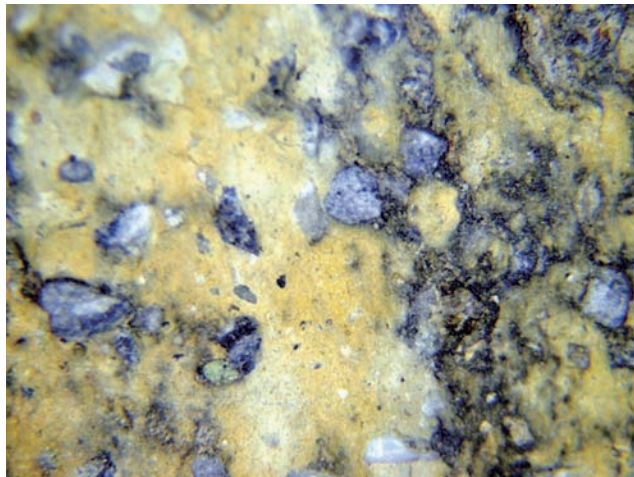
写真 9 実体顕微鏡写真 (試料番号 1 ~ 10)



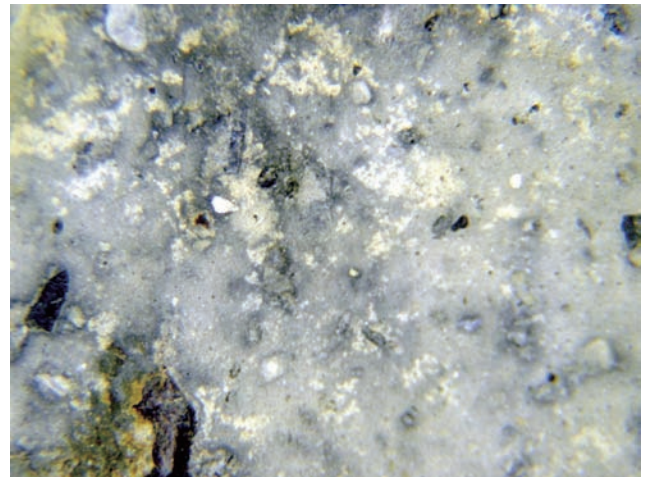
瓦器椀 (試料番号13)



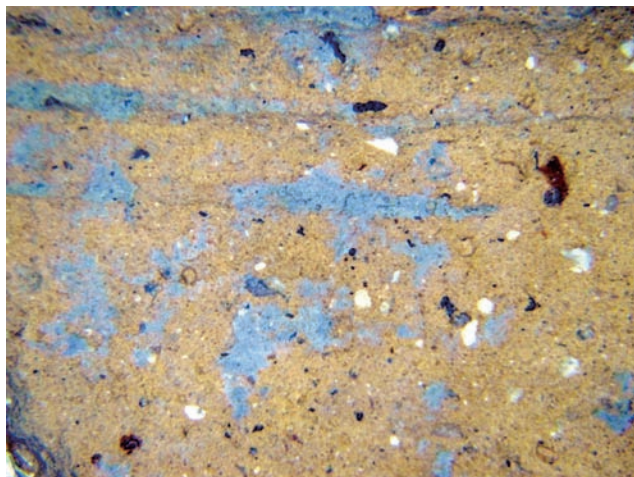
瓦質土器羽釜 (試料番号18)



瓦質土器羽釜 (試料番号20)



瓦質土器羽釜 (試料番号21)



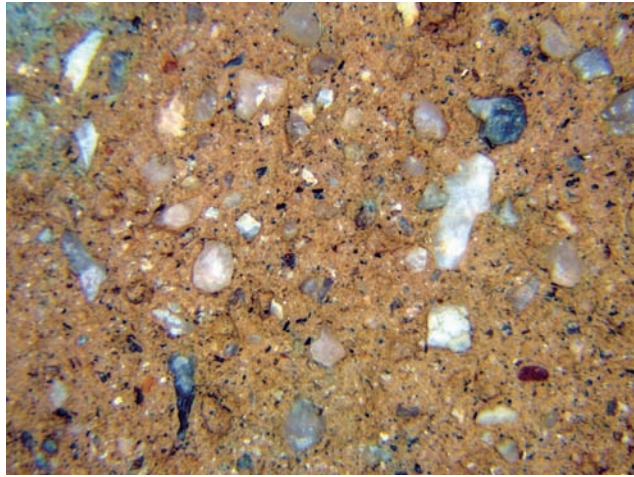
土師質土器羽釜 (試料番号23)



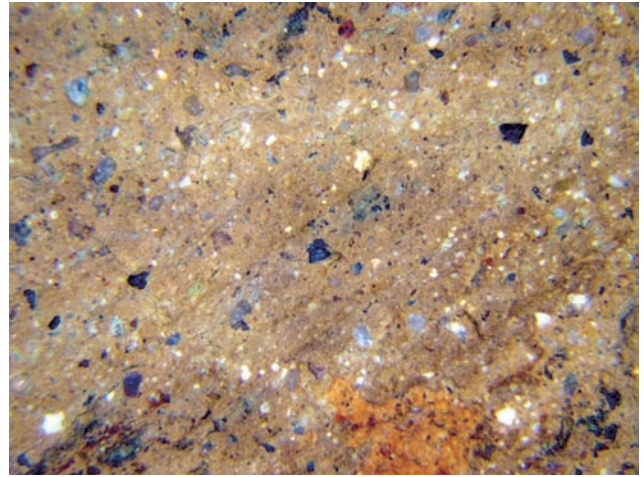
土師質土器鍋 (試料番号24)

0  3mm

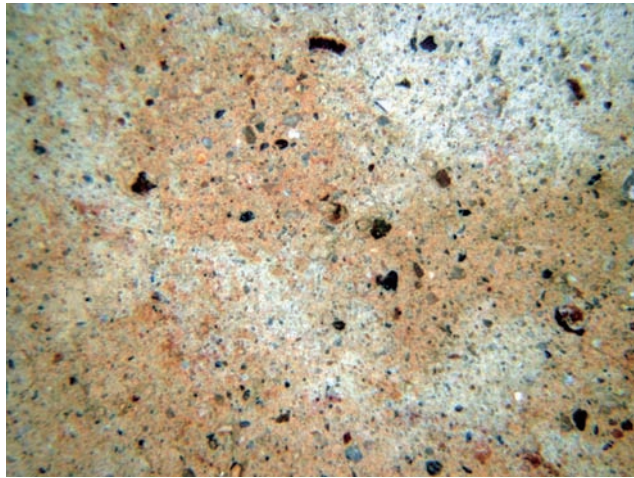
写真 10 実体顕微鏡写真 (試料番号 13 ~ 24)



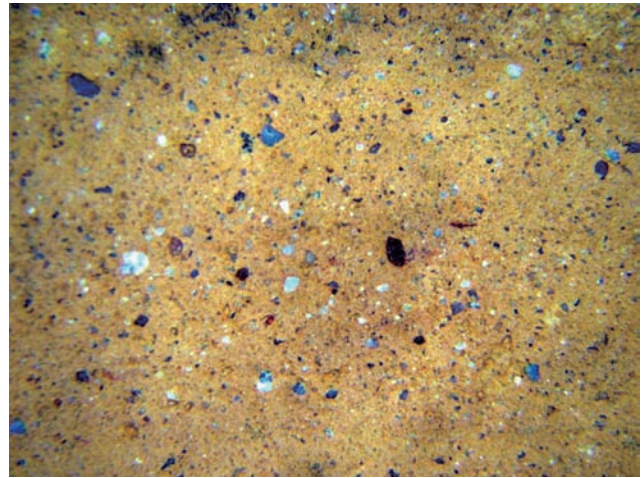
土師質土器鍋 (試料番号29)



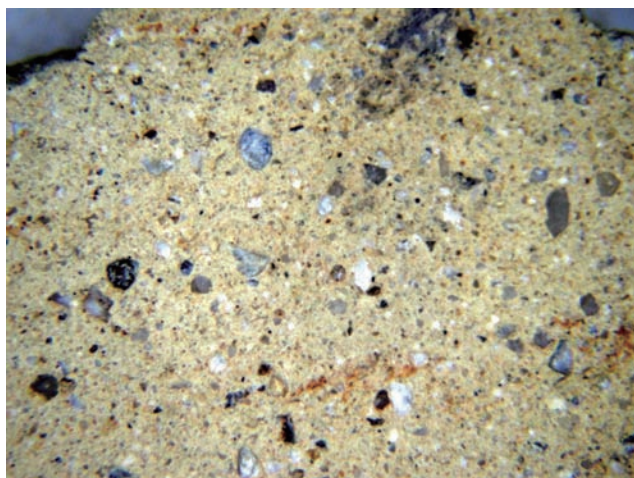
土師質土器鍋 (試料番号33)



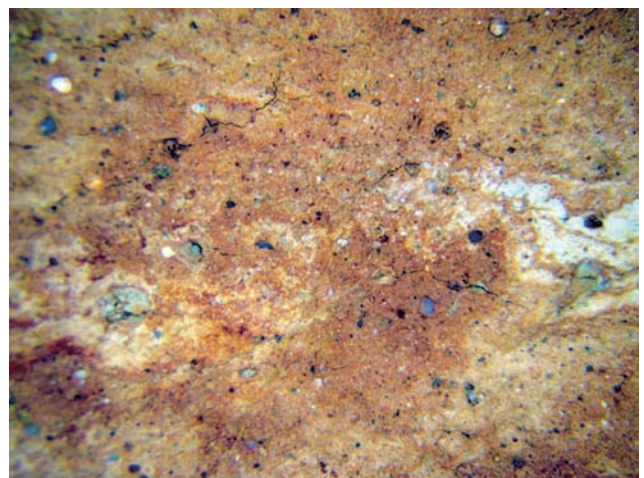
土師質土器皿 (試料番号34)



土師質土器杯 (試料番号35)



土師質土器皿 (試料番号36)



土師質土器皿 (試料番号37)

0  3mm

写真 11 実体顕微鏡写真 (試料番号 29 ~ 37)

2. 宮ノ本遺跡Ⅱ出土溶解炉壁の成分分析

(財) 徳島県埋蔵文化財センター 植地岳彦

1. 目的

宮ノ本遺跡で出土した炉壁内面に付着する物質の材質調査を行い、用途等を推定するデータとする。

2. 分析方法と試料

試料は宮ノ本遺跡Ⅰ－13区 SD1038 出土の土製溶解炉壁（1827）である。蛍光 X 線分析法による含有元素の同定で、付着物のある部分とない部分を測定し、その差から内面の付着物の材質を特定する。調査計測機器：徳島県立埋蔵文化財総合センター設置の蛍光 X 線分析計 SEA-2010L（セイコーインスツルメンツ社製）を使用した。

測定条件は第 4 表の通りである。

測定位置

- (1) 付着物のある内面
- (2) 付着物のない外面

照射径	10mm
電流	有効測定時間が測定時間の約 70%になるよう自動設定
電圧	50kV と 15kV
資料室	真空
マイラー容器	無し
測定時間	200 秒（電圧 15kV で 100 秒、5015kV で 100 秒）
有効時間	測定時間の 70%
定量分析方法	ファンダメンタルパラメーター法

第 4 表 測定条件

3. 結果

(1) 付着物のある内面で検出した元素

Fe（鉄）、Si（ケイ素）、Al（アルミニウム）、Ca（カルシウム）、K（カリウム）、Sr（ストロンチウム）、Mn（マンガン）、Zr（ジルコニウム）、Ti（チタン）、Rb（ルビジウム）、V（バナジウム）

(2) 付着物のない外面で検出した元素

Fe、Si、Al、Ti、Zr、K、Ca、Mn、Sr、Rb、V、Zn（亜鉛）

4. 考察

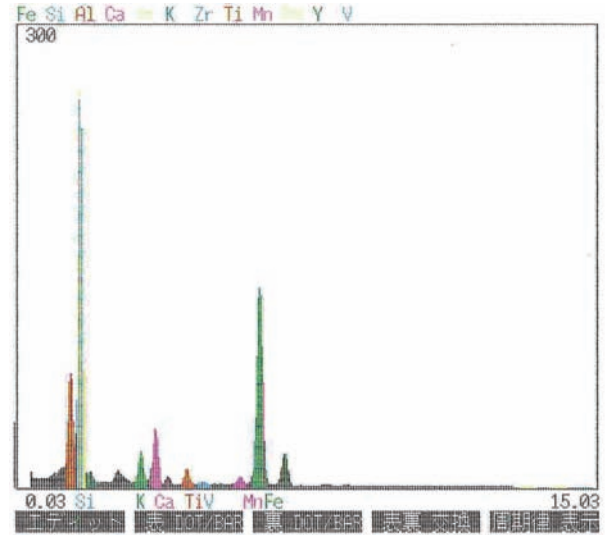
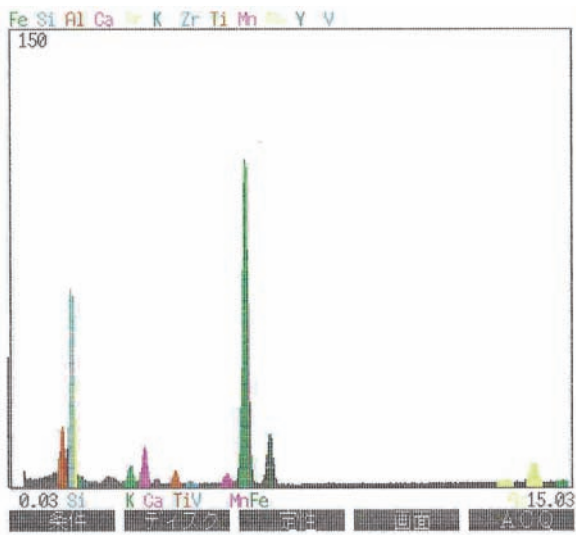
Ca のピークを比較すると、(1) > (2) となっている。更に Ca と K のピークを比較すると、15kV、50kV いずれの測定においても、(1) では $Ca > K$ 、(2) では $Ca < K$ となり、Ca のピークが特徴的なものであることがわかる。

調査資料は、金属の溶融炉の一部と想定され、Cu（銅）や鉄（Fe）が特徴的に検出されるか期待された。測定の結果、Cu（銅）は検出されず、Fe は検出されたが、Fe は土壌や粘土に多量に含まれる元素であり、Si、Sr、Rb、Zr といった土器・土製品に含まれる元素が検出されていることから、資料自体に含まれる鉄分の可能性を否定できない。

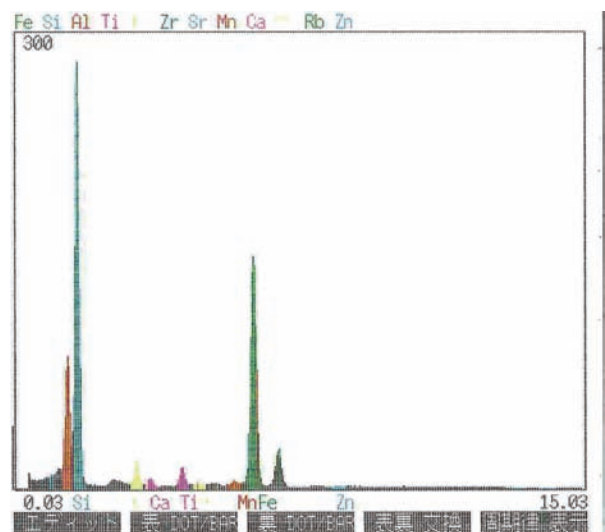
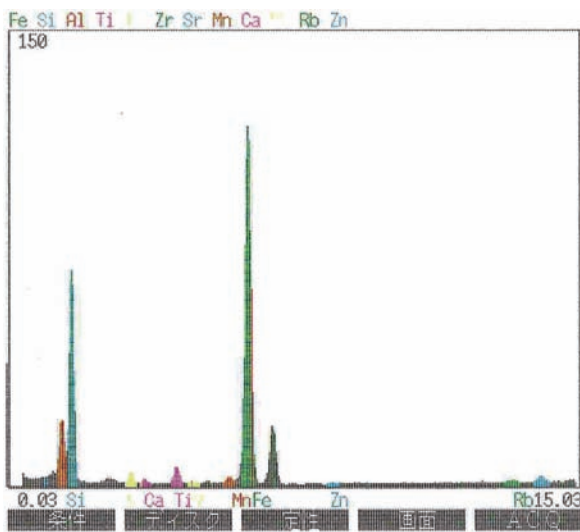
カルシウムは金属やガラスを融解しやすくする融剤として使用される。付着物のある資料内面で Ca が強く検出されたことは、金属等を精製する融剤が付着している可能性を示す。



写真 12 調査資料 (左：付着物のある内面 右：付着物のない外面)



第 779 図 内面のスペクトル (左：50kV 右：15kV)



第 780 図 外面のスペクトル (左：50kV 右：15kV)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやのもといせき						
書名	宮ノ本遺跡Ⅱ						
副書名	桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次							
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第81集						
編著者名	島田豊彰・藤川智之・木村哲也・白石 純						
編集機関	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター						
所在地	〒779 - 0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2 TEL 088 - 672 - 4545						
発行年月日	平成22年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みやのもといせき 宮ノ本遺跡	とくしまけんあなんし 徳島県阿南市 ながいけちうみやのもとい 長生町宮ノ本 ばんち 13番地1先	36204 204 - 73	33° 54' 48"	134° 38' 02"	平成20年度 平成21年度	2,400㎡ 7,750㎡	桑野川床上浸水 対策特別緊急事 業に伴う埋蔵文 化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項
宮ノ本遺跡	集 落	縄文・弥生時代			縄文土器・弥生土器・石 鏃		
		古墳時代後期	竪穴住居・土坑		土師器・須恵器		住居8棟検出、古 墳時代集落は県南 域初の確認
		奈良～平安時代 前期	土壙墓・小穴		土師器・須恵器・須恵器 風字硯・緑釉陶器・石製 丸軔		
		平安時代後期 鎌倉時代 室町時代	掘立柱建物・柵 列・土坑・土壙 墓・区画溝・小 穴		京都系土師皿・吉備系土師 質椀・備前焼碗・和泉型瓦 器椀・紀伊型土師質鍋・山 城型瓦質煮炊具・瓦質火鉢・ 瓦質香炉・灰釉陶器・輸入 陶磁器・和鏡・銭貨		方形区画屋敷地9 区画・掘立柱建物 216棟を検出、竹 原荘の中心的集落、 方形区画屋敷地は 本県最古級

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

宮ノ本遺跡Ⅱ

桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第1分冊

発行日 2010年3月26日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 徳島県教育印刷株式会社